市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第50集

市原市山新遺跡第2地点

２０２０

市 原 市 教 育 委 員 会

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第50集

市原市山新（さんしん）遺跡第2地点

2020

市 原 市 教 育 委 員 会

序　文

市原市は、千葉県のほぼ中央に位置し、養老川が形成した肥沃な平野から標高300m近い丘陵部まで変化に富んだ地勢を有します。この豊かな地に古くから暮らした人々の痕跡は、「王賜」銘鉄剣や上総国分僧尼寺跡に代表される埋蔵文化財となって当時の状況を私たちに伝えてくれます。こうした先人が残した歴史的遺産は後世に伝えるべきものですが、市原市を発展させるためには都市計画の推進とのバランスが必要となります。

今回の発掘調査は、都市計画道路建設工事にともない実施されました。遺跡範囲の道路建設計画の策定にあたっては、関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査からは、縄文時代晩期を中心とする土器を大量に含んだ土層や、川の流路を検出しました。また、そこから出土した土器群は、市原の縄文土器を検討するうえで、良好な一括資料となりました。さらに室町時代から戦国時代にかけての遺構と遺物も検出し、隣接する稟塚遺跡で確認された、中世の都市的空間の広がりを確認できました。

発掘調査は本書の刊行をもって終了しますが、発掘調査によって得られた成果は、記録として将来に伝えられると同時に、高まる市民の生涯学習意欲に応えるため、特に（仮称）市原歴史博物館の計画が具体化する中、より文化財の活用が図れるよう、一層心を砕いてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御尽力をいただきました、千葉県教育庁教育振興部、千葉県県土整備部、市原市土木部、地元関係者、並びに旧財団法人市原市文化財センター関係者方々のこれまでの御努力に対し、厚くお礼申し上げます。

令和２年３月

市原市教育委員会
教育長　林　充

例言・凡例

1　本報告書は、市原市姉崎1722−2地先ほかに所在する山新（さんしん）遺跡第2地点の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、都市計画道路八幡椎津線（姉崎工区）建設工事に伴って実施した。

3　発掘調査は、市原市（土木部道路建設課）の委託を受けた財団法人市原市文化財センターが、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと実施した。ただし、財団法人市原市文化財センターは平成18年3月31日付けで廃止となったため、平成18年度以降は市原市教育委員会がその業務を継承している。

4　発掘調査にかかる費用の一部は国土交通省まちづくり交付金及び社会資本整備総合交付金があてられている。

5　発掘調査対象面積（本調査）は3,400㎡、実際の掘削面積は2,552㎡である。

6　発掘調査・整理作業は以下のとおりに行った。

発掘調査

（1）山新遺跡第2地点　確認調査（セ312）

市原市姉崎1722−2地先ほか　財団法人市原市文化財センター

平成11年11月15日〜平成11年12月27日

7,040㎡のうち704㎡　　担当　小橋健司

（2）山新遺跡第2地点　本調査（セ312）

市原市姉崎1722−2地先ほか　財団法人市原市文化財センター

平成12年1月17日〜平成12年3月24日

3,400㎡　　担当　北見一弘・田中清美・小橋健司

整理作業

（1）平成30年5月1日〜平成31年3月29日　担当　北見一弘

（2）令和元年5月7日〜令和2年3月31日　担当　齊木　誠・櫻井敦史

7　本書の編集は齊木が行った。執筆は齊木のほか、第3章第4節を櫻井、第3章第5節を浅野健太、第4章第1節を山形秀樹・森　将志（株式会社パレオ・ラボ）、第4章第2節をパリノ・サーヴェイ株式会社（管理者：赤堀岳人　担当者・分析者：田中義文）、第4章第3節を上奈穂美、第5章をパリノ・サーヴェイ株式会社（管理者・担当者・分析者：金井慎司）が担当した。

8　整理作業は齊木のほか、櫻井、小橋、浅野が従事した。D区縄文時代遺物包含層の土器分類及び本文執筆に関しては蜂屋孝之氏（千葉県教育庁教育振興部文化財課）に御指導をいただいた。石製品の材質鑑定については、坂元秀平氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）にお願いした。また、遺跡出土種子類の同定作業には天野　誠氏（千葉県立中央博物館）の御協力を賜った。さらに、年報より転載したD区包含層標準柱状図については上杉　陽氏に御作成いただくとともに、建石　徹氏に御助言を賜った。記して謝意を表したい。

9　陶磁器類の分類は櫻井が行った。その際、龍泉窯系青磁は森田1981、備前産陶器は伊藤・上西1977、在地系土器カワラケは櫻井2019、同擂鉢は長原2002、肥前系磁器は大橋2000に準拠した。

なお、瀬戸・美濃系陶器については、大窯製品までを中世陶器、連房式登窯製品を近世陶器として分類した。鉄滓類の分類は浅野が行った。

10　土器観察表等一部表類は、添付のDVD-ROMのみの収録とした。詳しくは表目次を参照いただきたい。

11　図中の方位は指定がない限り座標北を、高さは海抜を示している。

12　本書内の遺構番号は調査段階の遺構番号をそのまま使用している。そのため、整理作業において遺構の認識から除外したものについては遺構番号が欠番となっている。

13　本書内において、（　）を付した数値は残存値、？を付した数値は推定値を示す。

14　本書内の土器実測図のスケールは、完形・反転復元実測図は4分の1、断面実測図は3分の1である。

15　写真図版PL.27からPL.114の遺物写真のスケールは、指定がない限り3分の1である。

16　第4章及び第5章に係る写真図版PL.121 ～ 124はモノクロとして掲載し、DVD-ROMにカラーのPDFを収録した。

17　第5章第1節は『市原市棗塚遺跡』市原市教育委員会2019に収録できなかった棗塚遺跡出土動物遺体の補遺である。

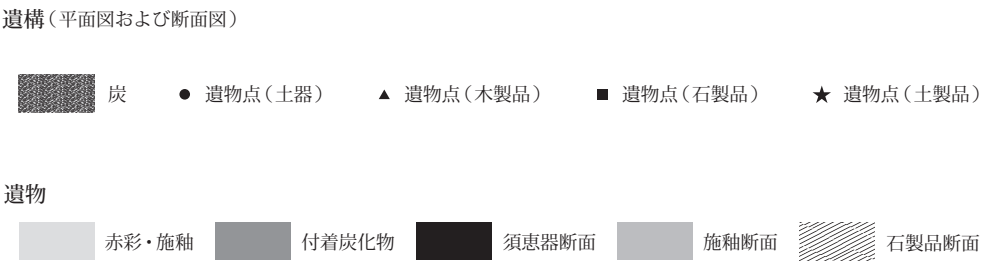
18　本書に掲載した出土遺物及び図面・写真等の記録類は、市原市埋蔵文化財調査センター（千葉県市原市能満1489番地）で収蔵・保管している。

19　本書の執筆にあたり、以下の方々から御指導、御協力を賜った。記して謝意を表したい。

（敬称略・五十音順）

江原　英　江原美奈子　太田敬宏　小川勝和　小川慶一郎　亀井　翼　小林清隆　近藤　敏　菅谷通保　高橋龍三郎　田中大介　千葉南菜子　西野雅人　一木絵里　広田哲徳　松田光太郎　峰村　篤　安井健一　渡辺　新

20　挿図におけるスクリーントーン・遺物表示の用例は下記による。



本 文 目 次

序文
例言

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　歴史的環境……1
第３節　発掘調査の概要……2

第２章　遺構と遺物

第１節　遺物包含層……12
第２節　竪穴建物跡……112
第３節　掘立柱建物跡……115
第４節　溝……126
第５節　土坑・ピット群……145
第６節　道路状遺構……160
第７節　遺構外出土遺物及び確認調査出土遺物……163

第３章　総　括

第１節　山新遺跡第２地点の変遷……168
第２節　D区縄文時代遺物包含層の形成……168
第３節　山新遺跡第２地点における弥生時代中期の集落……173
第４節　中世における山新遺跡第２地点……174
第５節　山新遺跡・棗塚遺跡における鍛冶生産……176

第４章　自然科学的分析（１）

第１節　山新遺跡第２地点出土土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比分析……180
第２節　山新遺跡第２地点出土木製品等樹種同定……183
第３節　山新遺跡第２地点出土の動物遺体……185

第５章　自然科学的分析（２）

第１節　棗塚遺跡出土の動物遺体……190

挿図目次

Fig.1　山新遺跡第２地点 位置図 …… 3
Fig.2　山新遺跡第２地点 周辺地形図 …… 4
Fig.3　トレンチ配置図 …… 5
Fig.4　全体図 …… 6
Fig.5　A区全体図 …… 7
Fig.6　B区全体図 …… 8
Fig.7　C区全体図 …… 9
Fig.8　D区全体図 …… 10
Fig.9　D区包含層 土層断面図 …… 11
Fig.10　D区包含層 遺物実測図（1）…… 14
Fig.11　D区包含層 遺物実測図（2）…… 17
Fig.12　D区包含層 遺物実測図（3）…… 18
Fig.13　D区包含層 遺物実測図（4）…… 19
Fig.14　D区包含層 遺物実測図（5）…… 20
Fig.15　D区包含層 遺物実測図（6）…… 21
Fig.16　D区包含層 遺物実測図（7）…… 22
Fig.17　D区包含層 遺物実測図（8）…… 23
Fig.18　D区包含層 遺物実測図（9）…… 24
Fig.19　D区包含層 遺物実測図（10）…… 25
Fig.20　D区包含層 遺物実測図（11）…… 26
Fig.21　D区包含層 遺物実測図（12）…… 27
Fig.22　D区包含層 遺物実測図（13）…… 29
Fig.23　D区包含層 遺物実測図（14）…… 30
Fig.24　D区包含層 遺物実測図（15）…… 31
Fig.25　D区包含層 遺物実測図（16）…… 32
Fig.26　D区包含層 遺物実測図（17）…… 33
Fig.27　D区包含層 遺物実測図（18）…… 34
Fig.28　D区包含層 遺物実測図（19）…… 35
Fig.29　D区包含層 遺物実測図（20）…… 38
Fig.30　D区包含層 遺物実測図（21）…… 39
Fig.31　D区包含層 遺物実測図（22）…… 40
Fig.32　D区包含層 遺物実測図（23）…… 42
Fig.33　D区包含層 遺物実測図（24）…… 43
Fig.34　D区包含層 遺物実測図（25）…… 46
Fig.35　D区包含層 遺物実測図（26）…… 47
Fig.36　D区包含層 遺物実測図（27）…… 48
Fig.37　D区包含層 遺物実測図（28）…… 49
Fig.38　D区包含層 遺物実測図（29）…… 50
Fig.39　D区包含層 遺物実測図（30）…… 51
Fig.40　D区包含層 遺物実測図（31）…… 52
Fig.41　D区包含層 遺物実測図（32）…… 53
Fig.42　D区包含層 遺物実測図（33）…… 54
Fig.43　D区包含層 遺物実測図（34）…… 55
Fig.44　D区包含層 遺物実測図（35）…… 58
Fig.45　D区包含層 遺物実測図（36）…… 59
Fig.46　D区包含層 遺物実測図（37）…… 60
Fig.47　D区包含層 遺物実測図（38）…… 61
Fig.48　D区包含層 遺物実測図（39）…… 62
Fig.49　D区包含層 遺物実測図（40）…… 63
Fig.50　D区包含層 遺物実測図（41）…… 64
Fig.51　D区包含層 遺物実測図（42）…… 66
Fig.52　D区包含層 遺物実測図（43）…… 67
Fig.53　D区包含層 遺物実測図（44）…… 68
Fig.54　D区包含層 遺物実測図（45）…… 69
Fig.55　D区包含層 遺物実測図（46）…… 70
Fig.56　D区包含層 遺物実測図（47）…… 71
Fig.57　D区包含層 遺物実測図（48）…… 72
Fig.58　D区包含層 遺物実測図（49）…… 73
Fig.59　D区包含層 遺物実測図（50）…… 74
Fig.60　D区包含層 遺物実測図（51）…… 75
Fig.61　D区包含層 遺物実測図（52）…… 76
Fig.62　D区包含層 遺物実測図（53）…… 77
Fig.63　D区包含層 遺物実測図（54）…… 78
Fig.64　D区包含層 遺物実測図（55）…… 79
Fig.65　D区包含層 遺物実測図（56）…… 80
Fig.66　D区包含層 遺物実測図（57）…… 82
Fig.67　D区包含層 遺物実測図（58）…… 83
Fig.68　D区包含層 遺物実測図（59）…… 84
Fig.69　D区包含層 遺物実測図（60）…… 85
Fig.70　D区包含層 遺物実測図（61）…… 86
Fig.71　D区包含層 遺物実測図（62）…… 90
Fig.72　D区包含層 遺物実測図（63）…… 91
Fig.73　D区包含層 遺物実測図（64）…… 92
Fig.74　D区包含層 遺物実測図（65）…… 93
Fig.75　D区包含層 遺物実測図（66）…… 94
Fig.76　D区包含層 遺物実測図（67）…… 95
Fig.77　D区包含層 遺物実測図（68）…… 96
Fig.78　D区包含層 遺物実測図（69）…… 97
Fig.79　D区包含層 遺物実測図（70）…… 99
Fig.80　D区包含層 遺物実測図（71）…… 100
Fig.81　D区包含層 遺物実測図（72）…… 101
Fig.82　D区包含層 遺物実測図（73）…… 102
Fig.83　D区包含層 遺物実測図（74）…… 104
Fig.84　D区包含層 遺物実測図（75）…… 105
Fig.85　D区包含層 遺物実測図（76）…… 106
Fig.86　D区包含層 遺物実測図（77）…… 107
Fig.87　D区包含層 遺物実測図（78）…… 108
Fig.88　D区包含層 遺物実測図（79）…… 110
Fig.89　D区包含層 遺物実測図（80）…… 111
Fig.90　D区包含層 遺物実測図（81）・
　　B区包含層 遺物実測図 …… 113
Fig.91　竪穴建物跡 A区004号、B区008号

遺構実測図…… 116
Fig.92 竪穴建物跡 B区021号、022号
遺構実測図…… 117
Fig.93 竪穴建物跡 A区004号、B区008号
遺物実測図…… 118
Fig.94 竪穴建物跡 B区008号、022号
遺物実測図…… 119
Fig.95 掘立柱建物跡 A区003号、B区023号
遺構実測図…… 121
Fig.96 掘立柱建物跡 B区014a号
遺構実測図…… 123
Fig.97 掘立柱建物跡 B区014b号
遺構実測図…… 124
Fig.98 掘立柱建物跡 B区014号、
溝 B区001号 遺物実測図 …… 125
Fig.99 掘立柱建物跡 C区061a号
遺構実測図…… 127
Fig.100 掘立柱建物跡 C区061b号
遺構実測図…… 128
Fig.101 掘立柱建物跡 C区062号
遺構実測図…… 129
Fig.102 溝 A区001・006号、002a・b号、
010号 遺構実測図 …… 131
Fig.103 溝 B区001a・b号 遺構実測図 …… 133
Fig.104 溝 B区005a・b・c号、011号
遺構実測図…… 135
Fig.105 溝 B区005号、019号、020号、
C区010号、038号、D区001号、
土坑・ピット群 B区002号、003号
遺物実測図…… 136
Fig.106 溝 B区019a・b号、020・024号
遺構実測図…… 138
Fig.107 溝 C区003b・060号、004号、006号
遺構実測図…… 140
Fig.108 溝 C区010号 遺構実測図 …… 141
Fig.109 溝 C区030号、038号、057号
遺構実測図…… 143
Fig.110 溝 D区001号 遺構実測図 …… 144
Fig.111 土坑・ピット群 A区005号、007号、
008号、009号 遺構実測図…… 146
Fig.112 土坑・ピット群 B区002・003号、
004a・b号、013・015号、018号
遺構実測図…… 149
Fig.113 土坑・ピット群 B区004号、D区003号、
004号、005号、009号
遺物実測図…… 150
Fig.114 土坑・ピット群 C区001・002・026・
059号、003a・027号、005号
遺構実測図…… 152
Fig.115 土坑・ピット群 C区007・008・009号、
011・025・035・036号
遺構実測図…… 155
Fig.116 土坑・ピット群 C区016・017号、
037・049・050号、040号
遺構実測図…… 157
Fig.117 土坑・ピット群 C区039・052号、
055号、058号、063号
遺構実測図…… 158
Fig.118 土坑・ピット群 D区003・004号、
005・006号、008・009・010号
遺構実測図 …… 161
Fig.119 道路状遺構 A区011号
遺構実測図…… 162
Fig.120 道路状遺構 A区011号、
遺構外 A・B・C区 遺物実測図 …… 164
Fig.121 遺構外 D区 遺物実測図 …… 165
Fig.122 確認調査 遺物実測図 …… 167
Fig.123 D区包含層 土器出土分布図…… 169
Fig.124 縄文土器 類別出土量 …… 172
Fig.125 山新遺跡、棗塚遺跡における
瀬戸・美濃系・常滑産陶器の
型式別出土量 …… 175
Fig.126 山新遺跡、棗塚遺跡における
陶磁器の産地組成 …… 175
Fig.127 山新遺跡、棗塚遺跡における
陶磁器の器種・用途組成…… 175
Fig.128 鉄滓出土分布図 …… 177
Fig.129 鉄滓出土密度 …… 177
Fig.130 炭素・窒素安定同位体比…… 182
Fig.131 炭素安定同位体比とC/N比の関係 182

写 真 図 版 目 次

		扉／姉崎周辺空中写真
PL.1	遺構	A区／B区
PL.2	遺構	B区／C区
PL.3	遺構	D区
PL.4	遺構	D区
PL.5	遺構	D区
PL.6	遺構	D区
PL.7	遺構	D区
PL.8	遺構	D区
PL.9	遺構	A区 001号・002号・003号・004号
PL.10	遺構	A区 004号・005号・006号
PL.11	遺構	A区 004号・007号・008号・009号・010号・011号
PL.12	遺構	B区 001号・002号
PL.13	遺構	B区 003号・004号・005号・008号・014号
PL.14	遺構	B区 008号・011号・021号
PL.15	遺構	B区 014号・022号
PL.16	遺構	B区 022号／C区 001号・002号・003b号
PL.17	遺構	C区 003b号・004号・005号・007号・008号・009号・010号
PL.18	遺構	C区 010号・016号・017号
PL.19	遺構	C区 025号・026号・027号・030号
PL.20	遺構	C区 035号・036号・037号・038号・050号
PL.21	遺構	C区 001号・002号・003号・005号・006号・007号・008号・016号・017号・026号・027号・062号
PL.22	遺構	D区
PL.23	遺構	D区 001号・003号・004号
PL.24	遺構	D区 003号・004号・005号・006号・009号・010号
PL.25	遺物	D区包含層 1類・13類・17a類・17c類・17e類・21類
PL.26	遺物	D区包含層 21類／竪穴建物跡B区008号
PL.27	遺物	D区包含層 早期・後期中葉
PL.28 ～ 31	遺物	D区包含層 1類
PL.32	遺物	D区包含層 1類・2類
PL.33	遺物	D区包含層 2類・3類
PL.34 ～ 38	遺物	D区包含層 3類
PL.39 ～ 44	遺物	D区包含層 4類
PL.45	遺物	D区包含層 4類・5類
PL.46・47	遺物	D区包含層 6類
PL.48	遺物	D区包含層 6類・7類
PL.49	遺物	D区包含層 7類・8類・9類
PL.50	遺物	D区包含層 9類・10類・11類
PL.51 ～ 58	遺物	D区包含層 11類
PL.59	遺物	D区包含層 11類・12類
PL.60	遺物	D区包含層 12類
PL.61 ～ 63	遺物	D区包含層 13類
PL.64	遺物	D区包含層 13類・14類
PL.65・66	遺物	D区包含層 14類
PL.67 ～ 78	遺物	D区包含層 15a類

PL.79 ～ 81　遺物　D区包含層 15b類
PL.82 ～ 84　遺物　D区包含層 15c類
PL.85　遺物　D区包含層 15d類
PL.86　遺物　D区包含層 15e類
PL.87　遺物　D区包含層 15e類・15f類
PL.88　遺物　D区包含層 16類・17a類
PL.89　遺物　D区包含層 17b類・17c類
PL.90　遺物　D区包含層 17d類
PL.91　遺物　D区包含層 17e類
PL.92　遺物　D区包含層 17e類・18類
PL.93・94　遺物　D区包含層 18類
PL.95　遺物　D区包含層 18類・19類・20類
PL.96 ～ 99　遺物　D区包含層 21類
PL.100 ～ 103　遺物　D区包含層 22類
PL.104　遺物　D区包含層 22類・23類
PL.105　遺物　D区包含層 23類・24類・25類
PL.106・107　遺物　D区包含層 土器片円盤
PL.108　遺物　D区包含層 石製品・木製品／ B区包含層
PL.109　遺物　竪穴建物跡A区 004号／竪穴建物跡B区 008号・022号
PL.110　遺物　竪穴建物跡B区 022号／掘立柱建物跡B区 014号／溝B区 001号
PL.111　遺物　溝B区 005号・019号・020号／溝C区 010号・038号／溝D区 001号／
土坑・ピット群B区 002号・003号・004号／
土坑・ピット群D区 003号・004号・005号・009号
PL.112　遺物　道路状遺構A区 011号／遺構外 A区・B区・C区・ D区
PL.113　遺物　遺構外 D区
PL.114　遺物　確認調査
PL.115　遺物　動物遺体 哺乳類1
PL.116　遺物　動物遺体 哺乳類2 ／木質遺物 土坑・ピット群B区 004号
PL.117　遺物　木質遺物
PL.118　遺物　木質遺物／種子
PL.119・120　遺物　種子
PL.121・122　遺物　樹種同定
PL.123・124　遺物　棗塚遺跡 動物遺体

表 目 次

Tab.1　竪穴建物跡一覧 …… ix
Tab.2　掘立柱建物跡一覧 …… ix
Tab.3　溝一覧 …… ix
Tab.4　土坑・ピット群一覧 …… x
Tab.5　道路状遺構一覧 …… x
Tab.6　土器類観察表（縄文時代遺物包含層）……DVD-ROM収録
Tab.7　土器類観察表（古墳時代遺物包含層）……DVD-ROM収録
Tab.8　土器類観察表（竪穴建物跡）……DVD-ROM収録
Tab.9　土器類観察表（掘立柱建物跡）……DVD-ROM収録
Tab.10　土器類観察表（溝）……DVD-ROM収録
Tab.11　土器類観察表（土坑・ピット）……DVD-ROM収録
Tab.12　土器類観察表（道路跡）……DVD-ROM収録
Tab.13　土器類観察表（その他）……DVD-ROM収録

Tab.14　土器類観察表（確認調査）……DVD−ROM収録
Tab.15　土製品観察表（縄文時代遺物包含層）……DVD−ROM収録
Tab.16　土製品観察表（古墳時代遺物包含層）……DVD−ROM収録
Tab.17　土製品観察表（掘立柱建物跡）……DVD−ROM収録
Tab.18　土製品観察表（溝）……DVD−ROM収録
Tab.19　土製品観察表（道路跡）……DVD−ROM収録
Tab.20　土製品観察表（土坑・ピット）……DVD−ROM収録
Tab.21　土製品観察表（その他）……DVD−ROM収録
Tab.22　土製品観察表（確認調査）……DVD−ROM収録
Tab.23　石製品観察表（包含層）……DVD−ROM収録
Tab.24　石製品観察表（竪穴建物跡）……DVD−ROM収録
Tab.25　石製品観察表（掘立柱建物跡）……DVD−ROM収録
Tab.26　石製品観察表（溝）……DVD−ROM収録
Tab.27　石製品観察表（土坑・ピット）……DVD−ROM収録
Tab.28　石製品観察表（道路跡）……DVD−ROM収録
Tab.29　石製品観察表（その他）……DVD−ROM収録
Tab.30　石製品観察表（確認調査）……DVD−ROM収録
Tab.31　金属器観察表（溝）……DVD−ROM収録
Tab.32　金属器観察表（その他）……DVD−ROM収録
Tab.33　金属器観察表（確認調査）……DVD−ROM収録
Tab.34　木製品観察表……DVD−ROM収録
Tab.35　D区出土遺物総量表……DVD−ROM収録
Tab.36　D区縄文時代遺物包含層出土遺物集計表……DVD−ROM収録
Tab.37　鉄器集計表……DVD−ROM収録
Tab.38　滓類集計表……DVD−ROM収録
Tab.39　銭貨集計表……DVD−ROM収録
Tab.40　石器集計表……DVD−ROM収録
Tab.41　石器剥片・未成品集計表……DVD−ROM収録
Tab.42　礫集計表……DVD−ROM収録
Tab.43　軽石集計表……DVD−ROM収録
Tab.44　骨集計表……DVD−ROM収録
Tab.45　貝集計表……DVD−ROM収録
Tab.46　炭化材・木片集計表……DVD−ROM収録
Tab.47　中世陶磁器類集計表……DVD−ROM収録
Tab.48　近世陶磁器類集計表……DVD−ROM収録
Tab.49　鉄滓出土遺跡集計表……177
Tab.50　樹木集計表……DVD−ROM収録
Tab.51　種子類集計表……DVD−ROM収録
Tab.52　土器付着炭化物分析試料一覧……180
Tab.53　土器付着炭化物分析結果一覧表……180
Tab.54　樹種同定結果……184
Tab.55　動物遺体 種名一覧……186
Tab.56　動物遺体 遺構・グリッドごとの集計……186
Tab.57　動物遺体 動物骨一覧……DVD−ROM収録
Tab.58　棗塚遺跡動物遺体 検出分類群一覧……191
Tab.59　棗塚遺跡 骨同定結果……193
Tab.60　棗塚遺跡動物遺体 地点別種類別検出破片数……DVD−ROM収録
Tab.61　棗塚遺跡動物遺体 最小個体数……202

Tab.1　竪穴建物跡一覧

遺構 No.	遺構種	図 No.	縮尺	地区	主軸（m）	×	副軸（m）	上場面積（㎡）	下場面積（㎡）	深度（cm）	主軸方向	柱穴	時期	古い	新しい	備考
A 区 004 号	竪穴建物跡	91	1:80	A 区	−	×	−	−	−	12	N－0°	1	弥生中期後半			
B 区 008 号	竪穴建物跡	91	1:80	B 区	（5.8）	×	（5.2）	（30.2）	（25.0）	21	N－0°	1	弥生中期後半		B 区包含層 B 区 014a 号、 B 区 014b 号、 B 区 019a 号	
B 区 021 号	竪穴建物跡	92	1:80	B 区	−	×	−	−	−	18	N－0°	1	弥生中期後半		B 区 005a 号、 B 区 005b 号、 B 区 014a 号、 B 区 014b 号、 B 区 020 号、 B 区 024 号	
B 区 022 号	竪穴建物跡	92	1:80	B 区	（3.5）	×	（5.3）	−	−	14	N－1°－E	3	弥生中期後半		B 区 005c 号	

Tab.2　掘立柱建物跡一覧

遺構 No.	種別	図 No.	地区	棟方向	廂	規模 cm（尺）		柱間寸法 cm（尺）　1 尺＝ 30cm で算出		建坪㎡	備考
						企画（身舎）	桁行×梁行（身舎）	桁行	梁行		
A 区 003 号	掘立柱建物跡	95	A 区	南北	−	2 × 2	320 × 254 （10.7 × 8.5）	170 ＋ 150 （5.7 ＋ 5.0）	134 ＋ 120 （4.5 ＋ 4.0）	8.1	
B 区 014a 号	掘立柱建物跡	96	B 区	東西	−	3 × 2	778 × 434 （25.9 × 14.5）	265 ＋ 265 ＋ 257 （8.8 ＋ 8.8 ＋ 8.6）	210 ＋ 224 （7.0 ＋ 7.5）	33.8	
B 区 014b 号	掘立柱建物跡	97	B 区	東西	−	3 × 2	748 × 412 （24.9 × 13.7）	250 ＋ 250 ＋ 248 （8.3 ＋ 8.3 ＋ 8.3）	235 ＋ 177 （7.8 ＋ 5.9）	30.8	
B 区 023 号	掘立柱建物跡	95	B 区	−	−	−	（324）×（384） （10.8 × 12.8）	270 （9.0）	270 （9.0）	−	
C 区 061a 号	掘立柱建物跡	99	C 区	東西	−	3? × 2	（791）× 660 （26.4 × 22.0）	290 ＋ 346 （9.7 ＋ 11.5）	325 ＋ 335 （10.8 ＋ 11.2）	（52.2）	
C 区 061b 号	掘立柱建物跡	100	C 区	東西	−	3? × 2	（727）× 750 （24.2 × 25.0）	335 ＋ 392 （11.2 ＋ 13.1）	402 ＋ 348 （13.4 ＋ 11.6）	（54.5）	
C 区 062 号	掘立柱建物跡	101	C 区	南北	−	3 × 1（2?）	1030 × 762 （34.3 × 25.4）	410 ＋ 340 ＋ 280 （13.7 ＋ 11.3 ＋ 9.3）	−	78.5	

Tab.3　溝一覧

遺構 No.	遺構種	図 No.	縮尺	地区	主軸（m）	×	副軸（m）	深度（cm）	主軸方向	時期	古い	新しい	備考
A 区 001 号	溝	102	1:80	A 区	7.5/6.8	×	0.8 ～ 0.9	19	N－17°－W N－78°－E	中世			
A 区 002a 号	溝	102	1:80	A 区	（3.8）	×	−	18	N－65°－E	中世		A 区 002b 号	
A 区 002b 号	溝	102	1:80	A 区	（6.2）	×	−	39	N－60°－E	中世	A 区 002a 号		
A 区 006 号	溝？	102	1:80	A 区	（1.4）	×	0.7	17	N－88°－W	不明			
A 区 010 号	溝	102	1:80	A 区	（2.8）	×	1.1	39	N－18°－W	中近世以降	A 区 007 号、 A 区 011 号		
B 区 001a 号	溝	103	1:160	B 区	（26.4）	×	1.2	31	N－33°－E	近世	B 区 011 号、 B 区 019a 号	B 区 001b 号	
B 区 001b 号	溝	103	1:160	B 区	（33.8）	×	2.2	33	N－27°－E	近世	B 区 001a 号、 B 区 011 号、 B 区 019a 号		
B 区 005a 号	溝	104	1:80	B 区	（11.7）	×	（0.9）	22	N－72°－E	中世	B 区 005b 号、 B 区 021 号		
B 区 005b 号	溝	104	1:80	B 区	（10.0）	×	（0.2）	9	N－73°－E	中世	B 区 021 号	B 区 005a 号	
B 区 005c 号	溝	104	1:80	B 区	（6.8）	×	1.2	13	N－78°－E	不明 （弥生中期後半以降）	B 区 022 号		
B 区 011 号	溝	104	1:80	B 区	（9.3）	×	1.0	38	N－48°－W	不明（近世以前）		B 区 001a 号、 B 区 001b 号	
B 区 019a 号	溝	106	1:120	B 区	（17.0）	×	1.6	33	N－71°－E	中世	B 区 008 号、 B 区 019b 号、 B 区 024 号	B 区 001a 号、 B 区 001b 号	
B 区 019b 号	溝	106	1:120	B 区	（8.9）	×	1.8	25	N－22°－E	中世		B 区 019a 号	
B 区 020 号	溝	106	1:80	B 区	（8.0）	×	1.4	59	N－1°－W	不明 （弥生中期後半以降 中世以前）	B 区 008 号、 B 区 021 号	B 区 005a 号、 B 区 005b 号、 B 区 014a 号、 B 区 014b 号	
B 区 024 号	溝	106	1:80	B 区	（5.2）	×	1.0	16	N－16°－W	中世	B 区 008 号、 B 区 021 号	B 区 019a 号	
C 区 003b 号	溝	107	1:80	C 区	（7.4）	×	0.7	7	N－84°－W	不明	C 区 060 号	C 区 003a 号	
C 区 004 号	溝	107	1:80	C 区	（4.2）	×	1.3	13	N－23°－W	不明			
C 区 006 号	溝	107	1:80	C 区	（3.5）	×	0.8	8	N－27°－W	中世			
C 区 010 号	溝	108	1:120	C 区	（26.4）	×	0.8	19	N－87°－E	中世	C 区 027 号		
C 区 030 号	溝	109	1:80	C 区	−	×	−	8 ～ 22	N－31°－W	不明			
C 区 038 号	溝	109	1:80	C 区	−	×	−	25	−	不明（弥生？）			
C 区 057 号	溝	109	1:80	C 区	（6.3）	×	1.2	8	N－87°－E	不明（中世？）			
C 区 060 号	溝	107	1:80	C 区	（3.5）	×	0.7	8	N－45°－E	不明		C 区 003b 号	
D 区 001 号	溝	110	1:80	D 区	（8.7）	×	1.2	10	N－11°－W	不明（縄文以降）	D 区縄文包含層		

Tab.4　土坑・ピット群一覧

遺構 No.	遺構種	図 No.	縮尺	地区	主軸（m）	×	副軸（m）	深度（cm）	主軸方向	時期	古い	新しい	備考
A 区 005 号	土坑	111	1:60	A 区	1.0	×	0.8	32	N－59°－W	不明（中世以前）			
A 区 007 号	土坑	111	1:60	A 区	1.1	×	1.0	24	N－6°－E	中近世？	A 区 011 号	A 区 010 号	
A 区 008 号	土坑	111	1:60	A 区	1.6	×	0.9	14	N－52°－E	不明			
A 区 009 号	土坑	111	1:60	A 区	－	×	－	16	－	不明（中近世以前）		A 区 011 号	
B 区 002 号	土坑	112	1:60	B 区	－	×	－	49	－	中世			
B 区 003 号	土坑	112	1:60	B 区	－	×	－	50	－	中世？			
B 区 004a 号	土坑	112	1:60	B 区	（1.5）	×	0.6	25	N－75°－E	不明（弥生中期後半？）			
B 区 004b 号	土坑	112	1:60	B 区	0.9	×	0.6	30	N－10°－W	不明			
B 区 013 号 P1	ピット	112	1:60	B 区	0.4	×	0.2	18	N－69°－W	不明			
B 区 013 号 P2	ピット	112	1:60	B 区	0.3	×	0.3	14	N－12°－W	不明			
B 区 013 号 P3	ピット	112	1:60	B 区	0.3	×	0.3	28	N－67°－W	不明			
B 区 013 号 P4	ピット	112	1:60	B 区	0.4	×	0.3	25	N－58°－W	不明			
B 区 013 号 P5	ピット	112	1:60	B 区	0.2	×	0.2	13	N－79°－W	不明			
B 区 015 号	土坑	112	1:60	B 区	0.5	×	0.4	25	N－87°－E	不明			
B 区 018 号	土坑	112	1:60	B 区	1.1	×	0.6	39	N－82°－W	不明（弥生中期後半？）			
C 区 001 号	土坑	114	1:60	C 区	2.0	×	1.3	49	N－10°－W	不明			
C 区 002 号	土坑	114	1:60	C 区	0.9	×	1.0	28	N－52°－E	不明			
C 区 003a 号	土坑	114	1:60	C 区	（1.7）	×	1.2	11	N－80°－W	不明	C 区 003b 号		
C 区 005 号	土坑	114	1:60	C 区	－	×	－	8	－	不明（中世？）			
C 区 007 号	土坑？	115	1:60	C 区	（0.8）	×	－	18	N－16°－W	中世			溝の可能性あり
C 区 008 号	土坑？	115	1:60	C 区	（1.1）	×	－	16	N－35°－W	不明（中世？）			溝の可能性あり
C 区 009 号	土坑？	115	1:60	C 区	－	×	－	9	－	不明			
C 区 011 号 P1	ピット	115	1:60	C 区	0.5	×	0.5	14	N－57°－W	不明			
C 区 011 号 P2	ピット	115	1:60	C 区	0.4	×	0.3	7	N－62°－W	不明			
C 区 011 号 P3	ピット	115	1:60	C 区	0.2	×	0.2	10	N－38°－W	不明			
C 区 011 号 P4	ピット	115	1:60	C 区	0.3	×	0.3	5	N－44°－W	不明			
C 区 011 号 P5	ピット	115	1:60	C 区	0.4	×	0.4	12	N－40°－W	不明			
C 区 011 号 P6	ピット	115	1:60	C 区	0.3	×	0.3	6	N－42°－E	不明			
C 区 016 号	土坑	116	1:60	C 区	（1.1）	×	0.9	25	N－40°－E	不明			
C 区 017 号	土坑	116	1:60	C 区	0.8	×	0.6	14	N－72°－E	不明			
C 区 025 号	土坑	115	1:60	C 区	1.4	×	0.8	18	N－42°－E	不明			
C 区 026 号	土坑	114	1:60	C 区	1.8	×	1.3	15	N－12°－W	不明			
C 区 027 号	土坑	114	1:60	C 区	（1.1）	×	1.0	16	N－15°－W	不明（中世以前？）		C 区 010 号	
C 区 035 号	土坑	115	1:60	C 区	1.0	×	0.6	10	N－28°－E	不明			
C 区 036 号	土坑	115	1:60	C 区	1.3	×	0.7	11	N－2°－W	不明			
C 区 037 号	土坑	116	1:60	C 区	2.4	×	0.8	27	N－76°－W	不明			
C 区 039 号	土坑	117	1:60	C 区	2.3	×	1.3	15	N－54°－E	不明（縄文？）			
C 区 040 号	土坑？	116	1:60	C 区	（1.6）	×	0.6	27	N－86°－W	不明			溝の可能性あり
C 区 049 号	土坑	116	1:60	C 区	（1.0）	×	0.6	14	N－56°－W	不明			
C 区 050 号	土坑	116	1:60	C 区	1.0	×	0.8	10	N－5°－W	不明			
C 区 052 号	土坑	117	1:60	C 区	2.2	×	1.6	19	N－32°－E	不明			
C 区 055 号	土坑	117	1:60	C 区	2.6	×	0.5	35	N－38°－E	不明			
C 区 058 号	土坑	117	1:60	C 区	2.2	×	1.3	8	N－63°－E	不明			
C 区 059 号	土坑	114	1:60	C 区	1.1	×	0.9	38	N－17°－W	不明			
C 区 063 号	土坑	117	1:60	C 区	1.5	×	（0.8）	15	N－33°－E	不明			
D 区 003 号	土坑	118	1:60	D 区	0.7	×	0.5	19	N－27°－E	不明（縄文？）	D 区 004 号		
D 区 004 号	土坑	118	1:60	D 区	2.0	×	1.2	31	N－9°－W	不明（縄文？）		D 区 003 号	
D 区 005 号	土坑	118	1:60	D 区	1.1	×	1.1	45	N－42°－W	不明（奈良・平安時代以降？）			
D 区 006 号	土坑	118	1:60	D 区	2.5	×	1.1	16	N－11°－E	不明			
D 区 008 号	土坑	118	1:60	D 区	（1.1）	×	1.2	33	N－43°－W	不明（中世？）			
D 区 009 号	土坑	118	1:60	D 区	0.8	×	0.6	10	N－30°－W	不明（縄文？）			
D 区 010 号	土坑？	118	1:60	D 区	（0.7）	×	0.7	17	N－49°－W	不明			溝の可能性あり

Tab.5　道路状遺構一覧

遺構 No.	遺構種	図 No.	縮尺	地区	主軸（m）	×	副軸（m）	深度（cm）	主軸方向	時期	古い	新しい	備考
A 区 011 号	道路状遺構	119	1:80	A 区	（12.1）	×	（4.0）	53	N－80°－E	中近世	A 区 009 号	A 区 007 号、A 区 010 号	

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

本報告書は、市原市が計画する都市計画道路八幡椎津線（姉崎工区）の建設に先立って発掘調査を実施した、山新（さんしん）遺跡第２地点の調査成果について掲載するものである。

都市計画道路八幡椎津線（姉崎工区）における当該遺跡については、平成６年１月６日付けで市原市長小出善三郎より、棗塚遺跡[(1)]と山新遺跡第２地点のＤ区に相当する箇所の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出された。これを受けて、千葉県教育庁文化財課、市原市教育委員会ふるさと文化課が現地踏査を行い、平成６年３月31日付け教文第５号の996 で、千葉県教育委員会教育長より照会地12,500㎡ のうち11,000㎡ に遺跡が所在する旨の回答がなされた。また、平成９年11月26日付けで市原市長小出善三郎より、山新遺跡第１地点・第３地点（確認調査）・第３地点（本調査）・第４地点・第８地点・第９地点・第10地点[(2)]と山新遺跡第２地点のＡ・Ｂ・Ｃ区に該当する箇所の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出され、平成10年１月28日付け教文第９号の815で、千葉県教育委員会教育長より照会地20,680 ㎡ の全域に遺跡が所在する旨の回答がなされている。

この結果にもとづき、市原市土木部、千葉県教育庁生涯学習部文化財課、市原市教育委員会ふるさと文化課で埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行われ、地区内に所在する埋蔵文化財については、発掘調査による記録保存とする措置がとられることになり、委託事業として財団法人市原市文化財センターが発掘調査を実施した。

山新遺跡第２地点の発掘調査は、対象面積7,040㎡の確認調査を平成11年11月15日から12月27日まで、対象面積3,400㎡の本調査を平成12年１月17日から３月24日まで行った。整理作業については、平成18年３月をもって財団法人市原市文化財センターが解散したため、本市の組織である埋蔵文化財調査センターが実施した。

第２節　歴史的環境

山新遺跡は養老川と椎津川に挟まれた、沖積地の縄文海進期に形成された砂堆列上に位置する（Fig.1・2）。周辺の遺跡についても砂堆列上を中心に展開している。この砂堆の土地利用について、妙経寺遺跡で見つかった縄文時代中期前半の五領ヶ台式期の集落が最も早い痕跡となる。この遺跡の周辺では椎津川河口の砂堆と海浜の砂丘が重なり、早くから離水したため生活環境が整ったと考えられており（近藤2008）、この時期以降に砂堆上での土地利用が始まったと思われる。また、妙経寺貝塚や袖ケ浦台地上の鬼子母神貝塚など、縄文時代中期から後期の貝塚がみられる。縄文時代の周辺遺跡について、詳しくは第３章第２節で記載する。

弥生時代になると、山新遺跡第２地点において、中期後半の宮ノ台式期の竪穴建物跡が検出されており、弥生時代における砂堆上での集落開始時期として認識されている。詳しい周辺遺跡の様相については第３章第３節で記載する。

古墳時代前期になると沖積地南側に広がる袖ケ浦台地上に、後の上海上国造につらなる姉崎古墳

群が展開する。なかでも今富塚山古墳（前方後円墳 110m）→姉崎天神山古墳（前方後円墳 130m）→釈迦山古墳（前方後円墳 93m）といった大型前方後円墳の変遷が知られている。一方、古墳時代中期になると、砂堆上に姉崎二子塚古墳（前方後円墳 110m）が築造され、他にも姉崎上野合遺跡や山新遺跡等に低地での土地利用が認められる。古墳時代後期から終末期になると、再び袖ケ浦台地上での造墓が活発になり、姉崎山王山古墳（前方後円墳 69m 消滅）→原1号墳（前方後円墳 75m 消滅）→鶴窪古墳（前方後円墳 60m）→堰頭古墳（前方後円墳 60m）→六孫王原古墳（前方後方墳 45m）と変遷する。いずれも前段の前方後円墳と比べて墳丘規模が小さくなるが、政治中枢における古墳規模の縮小と方墳の採用という動向をいち早く反映したものと評価される（白井2003）。

奈良・平安時代の砂堆上の土地利用は、極めて希薄である。13世紀末頃から14世紀中頃にかけて姉埼神社が鶴岡八幡宮との密接な関わりの中で中世的な発展を遂げるなか、隣接する棗塚遺跡では、製革関連業等の手工業生産が伴う、水陸交通と結びついた流通を背景とする都市的空間として発展した様相が明らかとなっている（櫻井2019）。

第3節　発掘調査の概要（Fig.3 ～ 8、PL.1 ～ 3）

都市計画道路八幡椎津線（姉崎工区）における埋蔵文化財の発掘調査は平成8年度から平成28年度まで断続的に行っており、山新遺跡第2地点は平成11年度に調査を実施した。

山新遺跡第2地点では、対象面積7,040㎡の確認調査の結果をもとに（Fig.3）、3,400㎡の本調査を行った（Fig.4）。なお、掘削時の安全確保等の理由から、実際に掘削した面積は2,552㎡である。調査区のグリッドについては、平成8・9年度に発掘調査を実施した棗塚遺跡で設定したものを継続して使用し、20m×20mの大グリッドを西から東へ1から昇順に、北から南へAから降順に設定している。さらに、大グリッドの中を2m×2mの小グリッドに区切り、北西隅を起点に00から99まで設定する。状況によっては、小グリッド内を1m×1mに分割し、北西部をa、北東部をb、南西部をc、南東部をdとして区分している。

本調査においては、北東からA区・B区・C区・D区と4つの調査区を設定した（Fig.4）。検出した遺構は、A区で竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、溝5条、土坑・ピット群4箇所、道路状遺構1条（Fig.5、PL.1）、B区で竪穴建物跡3棟、掘立柱建物跡3棟、溝10条、土坑・ピット群7箇所（Fig.6、PL.1・2）、C区で掘立柱建物跡3棟、溝8条、土坑・ピット群25箇所（Fig.7、PL.2）、D区で溝1条、土坑・ピット群7箇所である（Fig.8、PL.3）。合計すると、竪穴建物跡4棟、掘立柱建物跡7棟、溝24条、土坑・ピット群43箇所、道路状遺構1条を検出し、時代は弥生時代、中世、近世までに亘っている（Tab.1 ～ 5）。また、B区で古墳時代を中心とした遺物包含層、D区で縄文時代の遺物包含層を検出した。各区の遺構検出面はすべて砂層で、上層堆積土の除去後は基本的に締まりのない「砂浜」状になるが、B区のみは地中環境の違いによるものか鉄分等で固結し、例外的に堅緻で遺構掘方も明確にとらえることができた。

遺構番号は、発掘調査時に付与した番号をそのまま使用している。そのため、整理作業の進展によって欠番が生じている。また、新たに遺構として認定したものについては、その調査区における末尾の遺構番号を付与している。遺物番号についても整理作業時に付与したものをそのまま使用しているため、欠番等が生じている。

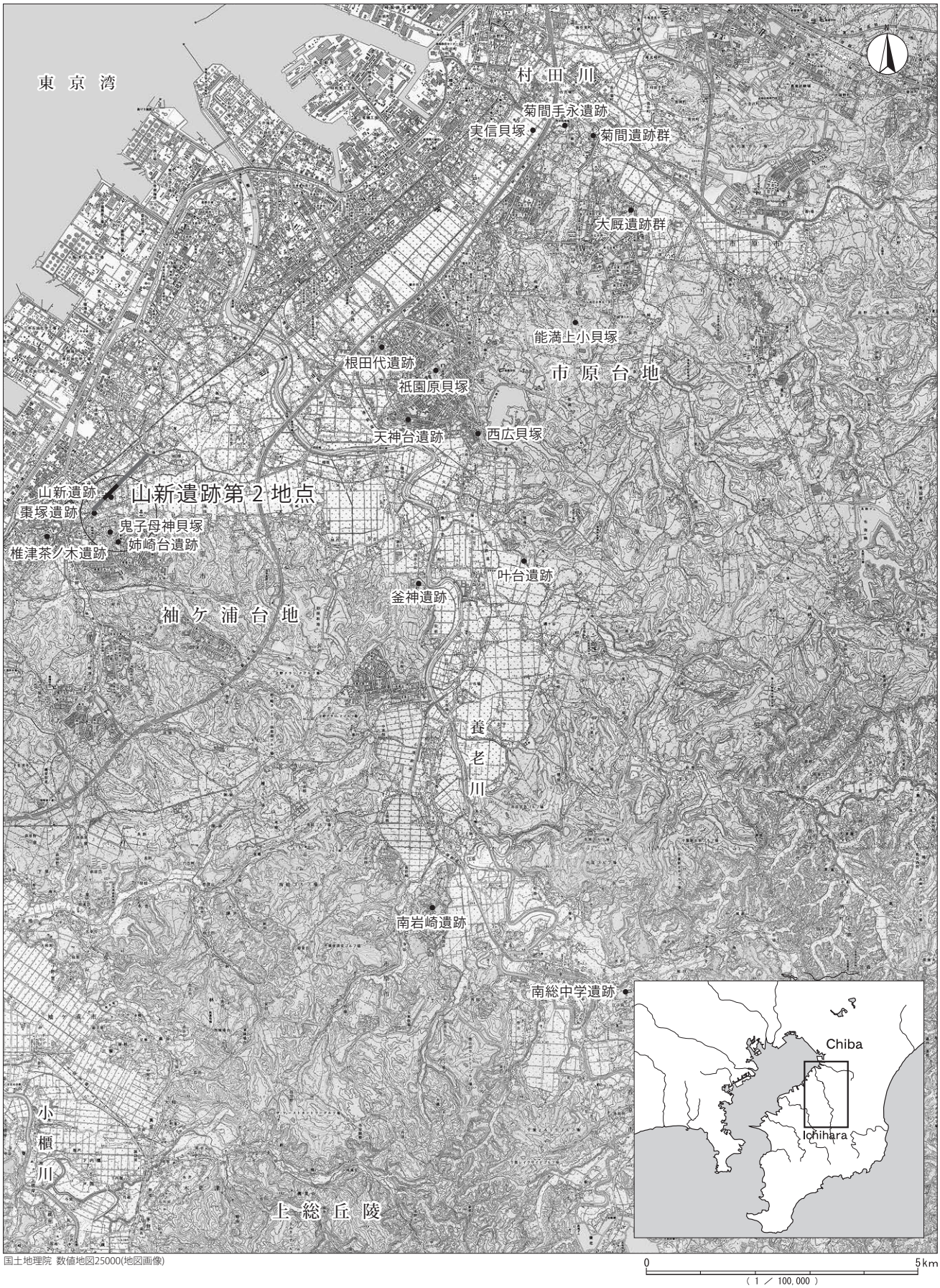


Fig.1　山新遺跡第2地点 位置図

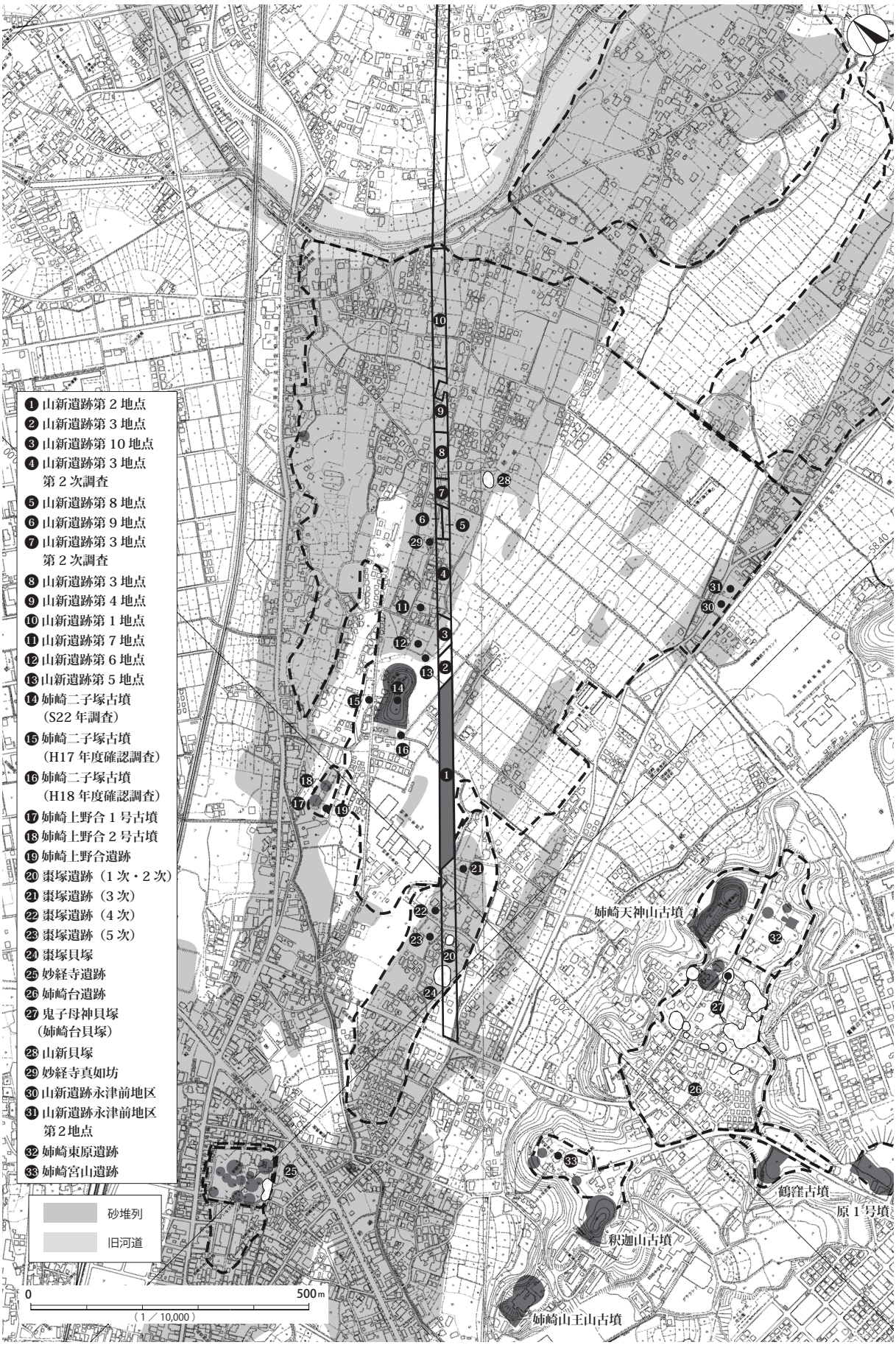


Fig.2　山新遺跡第2地点 周辺地形図

市原市地形図昭和 46 年測量、昭和 55 年修正
平面直角座標第Ⅸ系・日本測地系

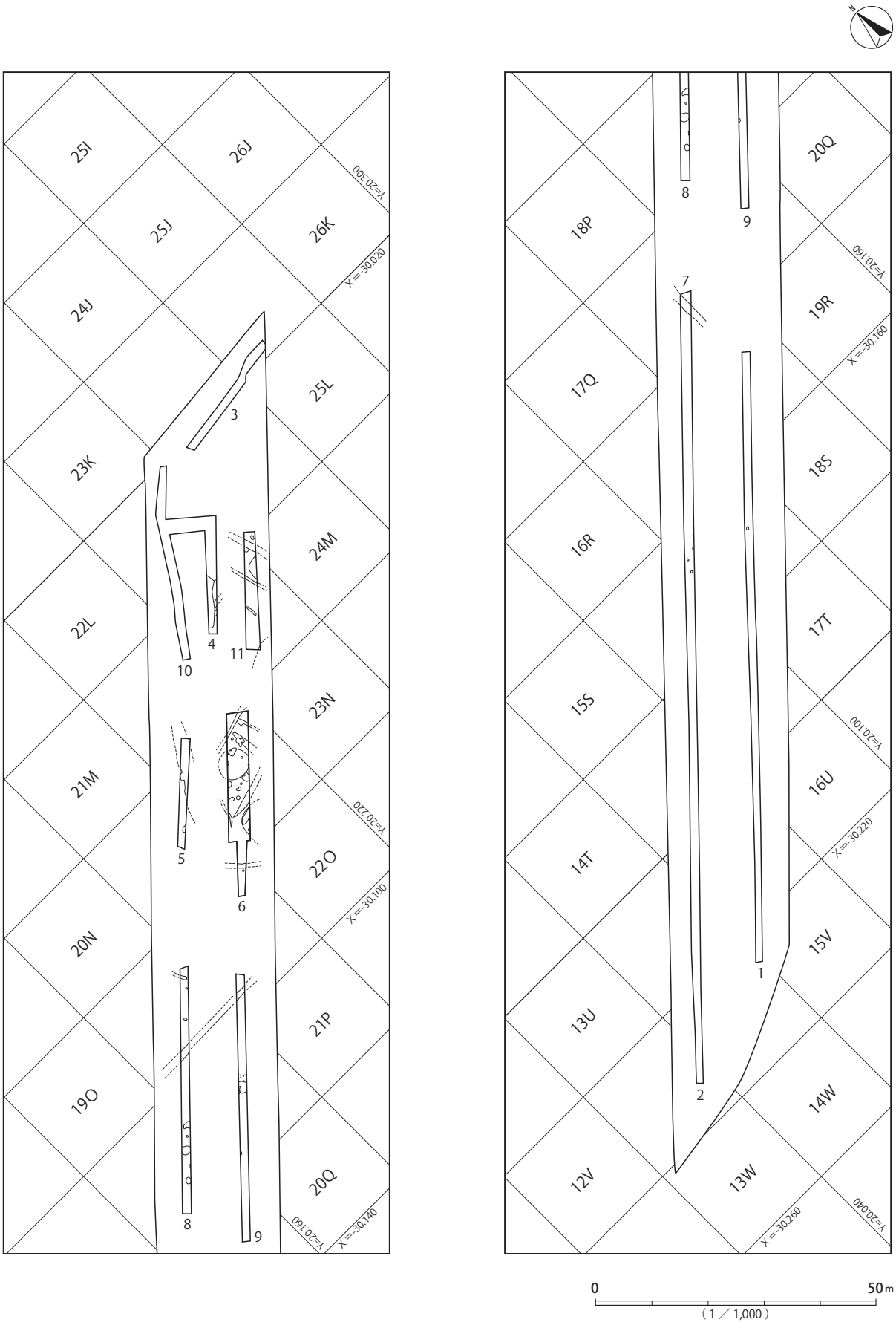


Fig.3　トレンチ配置図

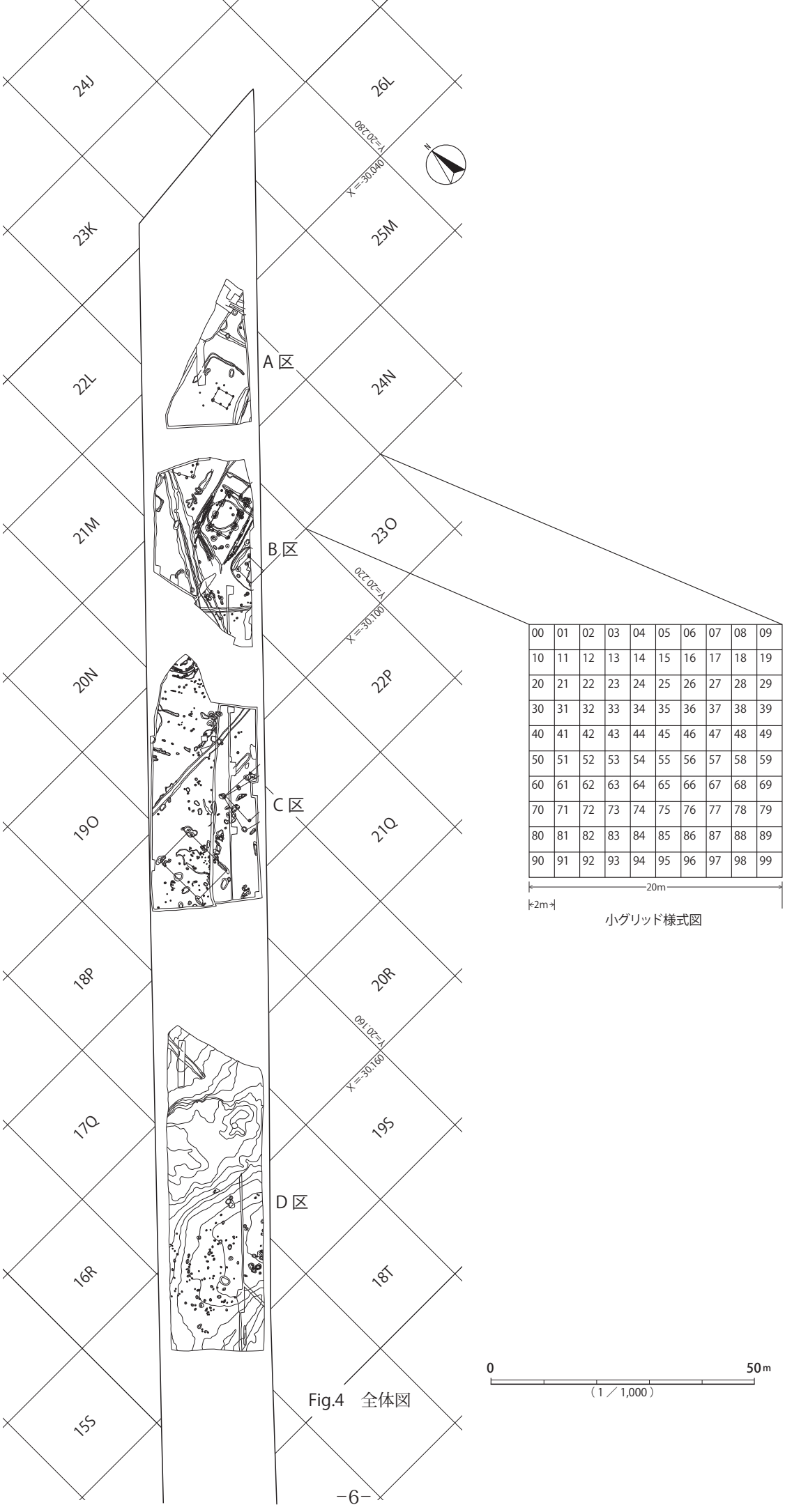

24J
26L
Y=-20,280
X=-30,040
N
23K
25M
A 区
22L
24N
21M
23O
B 区
Y=-20,220
X=-30,100
20N
22P
C 区
19O
21Q
18P
20R
Y=-20,160
X=-30,160
17Q
19S
D 区
16R
18T
15S
00 01 02 03 04 05 06 07 08 09
10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
20 21 22 23 24 25 26 27 28 29
30 31 32 33 34 35 36 37 38 39
40 41 42 43 44 45 46 47 48 49
50 51 52 53 54 55 56 57 58 59
60 61 62 63 64 65 66 67 68 69
70 71 72 73 74 75 76 77 78 79
80 81 82 83 84 85 86 87 88 89
90 91 92 93 94 95 96 97 98 99
20m
2m
小グリッド様式図
0
50m
（1／1,000）

Fig.4　全体図

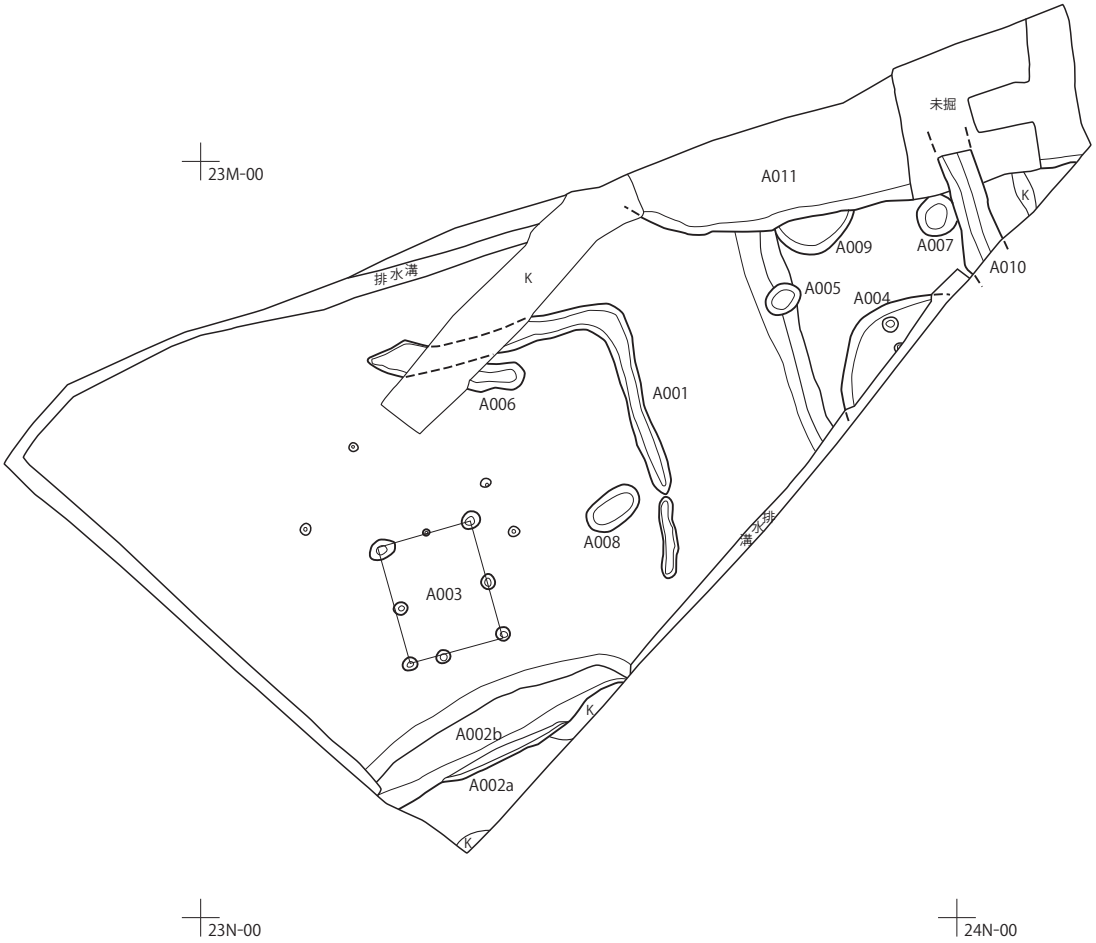

N
23M-00
未掘
A011
A009
A007
A010
A005
A004
排水溝
K
A006
A001
A008
A003
A002b
A002a
23N-00
24N-00
0
5m
（1／200）

Fig.5　A区全体図

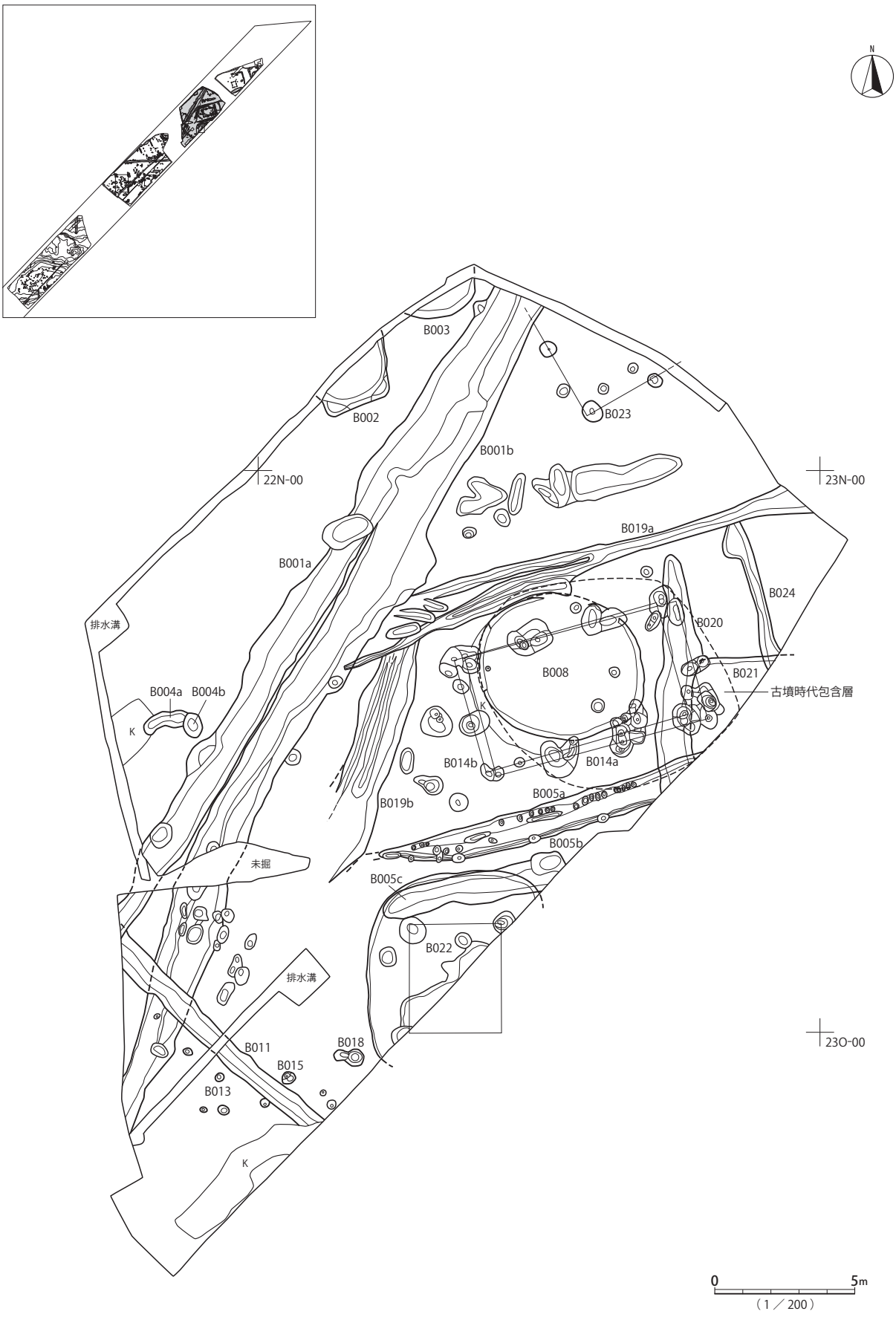

N
B003
B002
B023
B001b
22N-00
23N-00
B019a
B001a
B024
排水溝
B020
B008
B021
古墳時代包含層
B004a
B004b
K
B014b
B014a
B019b
B005a
B005b
未掘
B005c
B022
排水溝
B011
B018
B015
B013
K
23O-00
0
5m
（1／200）

Fig.6　B区全体図

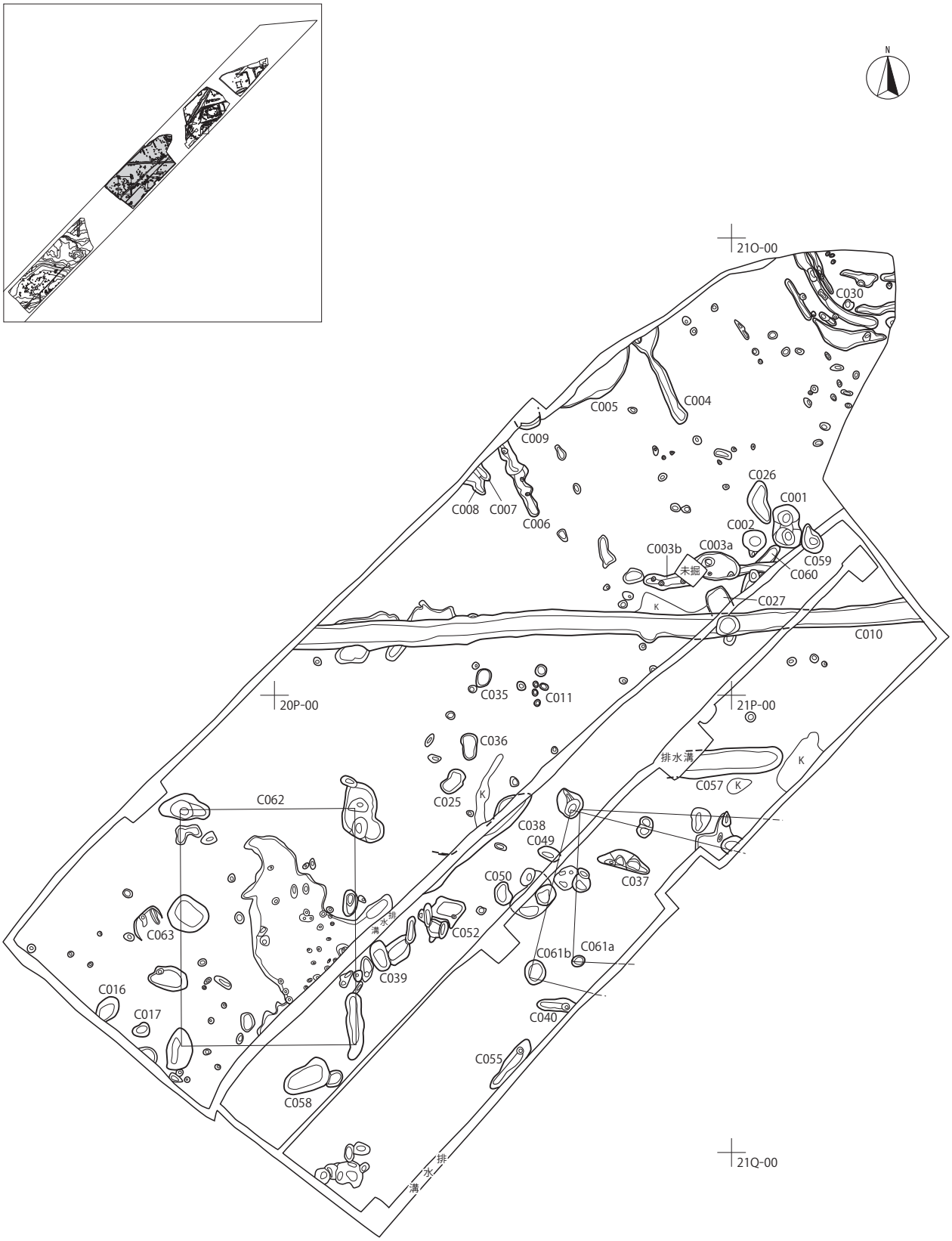

N
21O-00
C030
C005
C004
C009
C026
C001
C008
C007
C006
C002
C003b
C003a
C059
C060
未掘
K
C027
C010
C035
C011
20P-00
21P-00
C036
排水溝
K
C057
K
C025
K
C062
C038
C049
C050
C037
C063
排水溝
C052
C061b
C061a
C039
C016
C017
C040
C055
C058
21Q-00
排水溝
0
5m
（1／250）

Fig.7　C区全体図

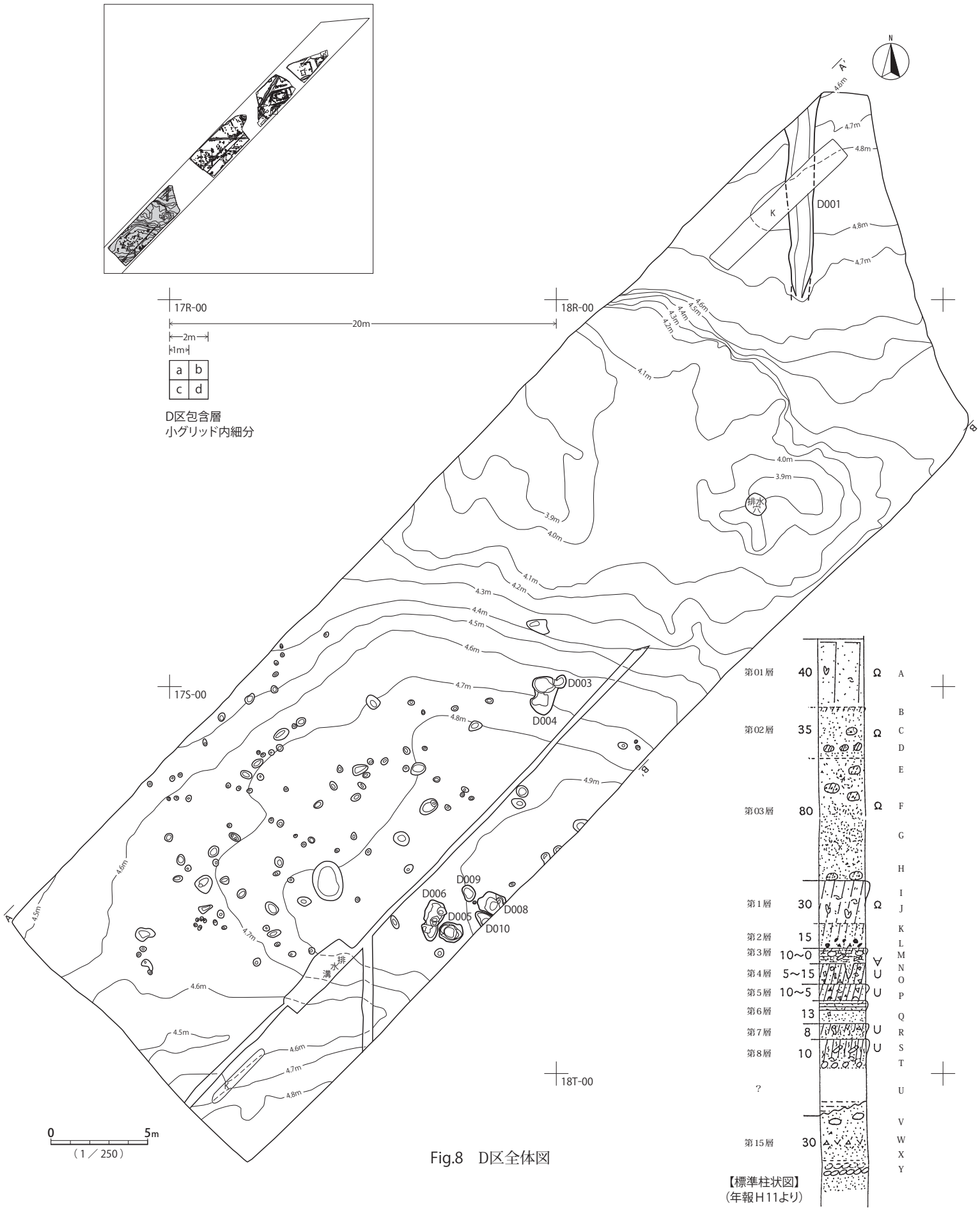
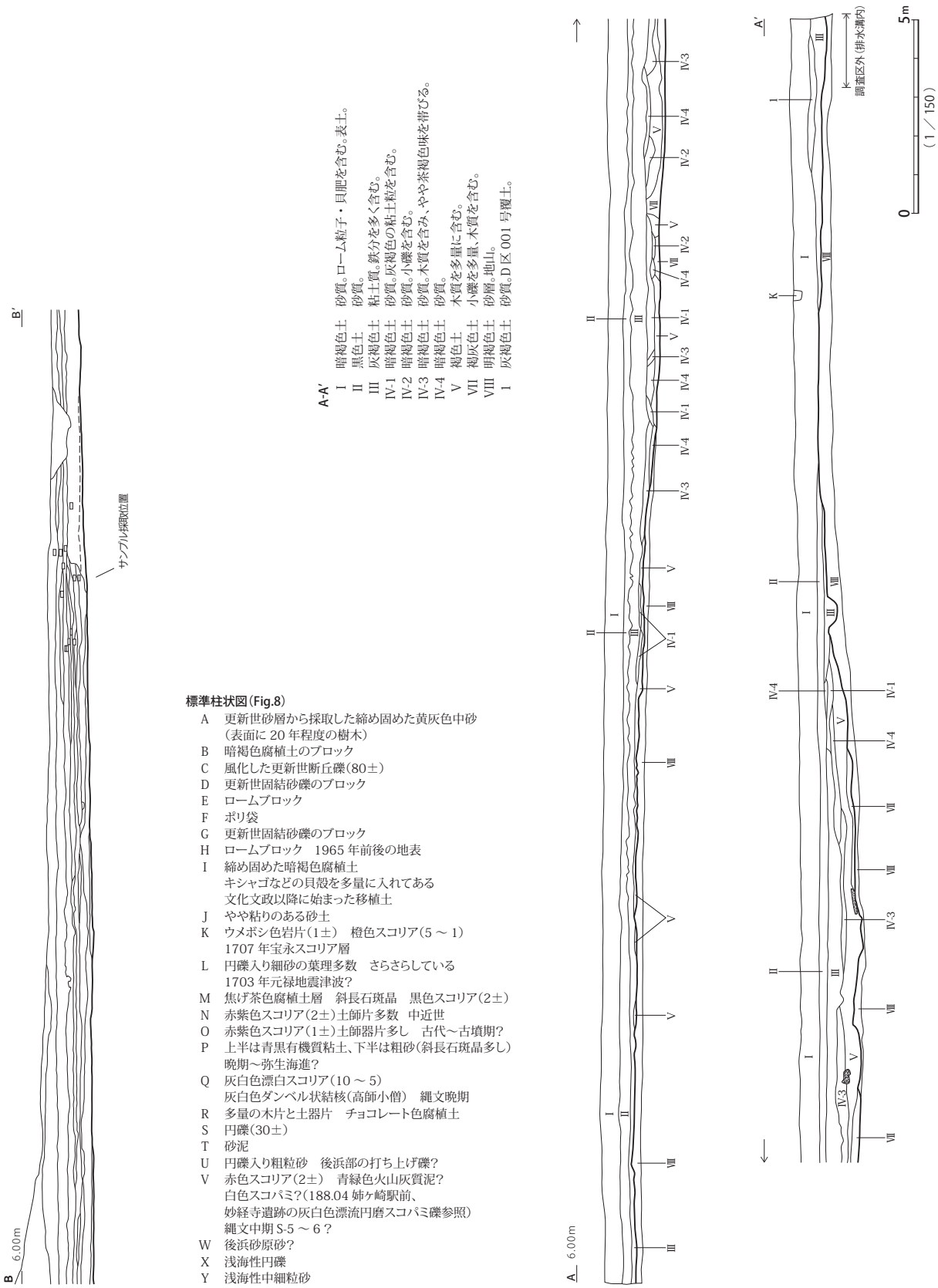

N
A
A'
B
B'
K
D001
D003
D004
D005
D006
D008
D009
D010
排水穴
排水溝
17R-00
18R-00
17S-00
18T-00
20m
2m
1m
a
b
c
d
D区包含層
小グリッド内細分
0
5m
（1／250）
第01層
第02層
第03層
第1層
第2層
第3層
第4層
第5層
第6層
第7層
第8層
第15層
【標準柱状図】
（年報H11より）

Fig.8　D区全体図



標準柱状図（Fig.8）

- A　更新世砂層から採取した締め固めた黄灰色中砂
  （表面に 20 年程度の樹木）
- B　暗褐色腐植土のブロック
- C　風化した更新世断丘礫（80±）
- D　更新世固結砂礫のブロック
- E　ロームブロック
- F　ポリ袋
- G　更新世固結砂礫のブロック
- H　ロームブロック　1965 年前後の地表
- I　締め固めた暗褐色腐植土
  キシャゴなどの貝殻を多量に入れてある
  文化文政以降に始まった移植土
- J　やや粘りのある砂土
- K　ウメボシ色岩片（1±）　橙色スコリア（5 ～ 1）
  1707 年宝永スコリア層
- L　円礫入り細砂の葉理多数　さらさらしている
  1703 年元禄地震津波?
- M　焦げ茶色腐植土層　斜長石斑晶　黒色スコリア（2±）
- N　赤紫色スコリア（2±）土師片多数　中近世
- O　赤紫色スコリア（1±）土師器片多し　古代～古墳期?
- P　上半は青黒有機質粘土、下半は粗砂（斜長石斑晶多し）
  晩期～弥生海進?
- Q　灰白色漂白スコリア（10 ～ 5）
  灰白色ダンベル状結核（高師小僧）　縄文晩期
- R　多量の木片と土器片　チョコレート色腐植土
- S　円礫（30±）
- T　砂泥
- U　円礫入り粗粒砂　後浜部の打ち上げ礫?
- V　赤色スコリア（2±）　青緑色火山灰質泥?
  白色スコパミ?（188.04 姉ヶ崎駅前、
  妙経寺遺跡の灰白色漂流円磨スコパミ礫参照）
  縄文中期 S-5 ～ 6？
- W　後浜砂原砂?
- X　浅海性円礫
- Y　浅海性中細粒砂

Fig.9　D区包含層 土層断面図

第２章　遺構と遺物

第１節　遺物包含層

D区縄文時代遺物包含層（Fig.8・9、PL.3 ～ 8・22 ～ 24）

D区全域において検出された縄文時代の土器を主体とする遺物包含層である。D区のほぼ中央部にみられる標高差約0.9mの谷状地形を呈する砂堆列の断絶部分を中心に形成している。

包含層は地山であるVIII層の砂層上に堆積する。I層は近世以降の表土であり、II層は縄文時代以降の遺物も多くみられることから、縄文時代遺物包含層の主体はIII層以下と考えられる。なお、断面図中には記載されていないが、I層の上には小学校造成の際に1.5mほど盛土がなされている。層位は大きく４層に大別でき、下層からおよそVII層、V層、IV層、III層の順で堆積する。最下層のVII層は木質を含んだ小円礫層である。V層は多量の木質と土器片を含む。IV層は砂粒を主体とし、混入物からIV－１からIV－４層まで区分できるが、番号順に堆積しているわけではない。なお、IV－５層に関しては調査時の記録が確認できなかったため詳細は不明であり、IV層～V層を意味する可能性がある。包含層の最上層は粘土質のIII層が堆積する。なお、滞水地でみられるような泥炭層は存在していない。Fig.8・９は地質学の見地に基づいて作成した標準柱状図である(3)。これは年報（小橋2002）にて掲載したものを転載している。これによると、柱状図I層は断面図A－A’のI層、J ～ O層はII層、P層はIII・IV層、Q層はIV層、R層はV層、S層はVII層、T層はVIII層に該当する。柱状図Q層は縄文晩期、柱状図P層は縄文晩期から弥生海進期に堆積したものとみられる。地山であるT層の下層では妙経寺遺跡で確認された縄文中期後葉の土層と類似する層が確認されており、遺跡周辺の砂堆形成時期の解明につながるものと思われる。また、包含層とは直接関係しないが、柱状図K層において1707年の富士山の宝永大噴火の際に飛来したスコリアが、柱状図L層において1703年の元禄地震の津波の痕跡と思われる葉層が堆積している。なお、縄文時代遺物包含層の形成についての考察は第３章第２節において記載している。

出土遺物は、基本的に層位・グリッドに準拠して取り上げを行っている。遺物は、縄文時代早期・後期・晩期の土器片が大部分を占める。そのほかに土器片円盤を主体とする土製品、石鏃、自然木、種子類、動物骨、貝片が出土している。なお、自然木の中には木製品らしきものも存在するが、断言できるものはなかった。また、II層からは、縄文土器片とともに弥生土器、土師器、中近世陶磁器片などが出土している。

なお、確認調査の１・７トレンチから出土した縄文時代の遺物も本調査時の遺物とともに分類を行い、同挿図内で掲載するとともに、縄文時代遺物包含層の観察表にて記載をしている（Tab.6）。

以下、遺物ごとに詳細を記載する。

縄文土器

縄文土器については、埋文用コンテナ約600箱・2.7tほどの量が出土した。これらは縄文時代早期と後期から晩期のものがみられるが、主体は晩期である。完形の個体はほとんど存在せず、大半が小片である。今回、整理作業の段階で層位・グリッド間で接合する個体が存在したことや、層位ごとに土器の時期差がみられなかったことから、グリッド・層位ごとに遺物の記載はしていない。そ

の代わり、土器の形態的特徴から分類を行い、設定した類型ごとに出土土器を掲載している。その際、公益財団法人千葉県教育振興財団によって刊行されている市川市道免き谷津遺跡第1地点（3）報告書の縄文土器分類を参考とした（蜂屋ほか2014）。グリッド・層位ごとの出土遺物の数量については付属DVD-ROMのTab.35・36に掲載しているため、そちらを参照いただきたい。

また、出土土器の中には、内外面にオコゲ・フキコボレ・スス状の炭化物が良好な状態で残存する個体が多数認められた。その中の一部については炭素・窒素同位体分析を行っている。結果については第4章第1節に記載している。

縄文時代早期（Fig.10、PL.27）

縄文時代早期の土器群である。出土量は少ない。早期1・8・12・20は器面に貝殻条痕を伴う。また、ほとんどの土器で胎土に繊維が混入する。早期19は斜め方向の平行する2条の刺突文がみられる。早期20は底部の破片である。全体的に摩滅が激しく器面調整が確認できない個体も多いが、そのほとんどが早期後半の茅山式に属するものと思われる。

縄文時代後期中葉（Fig.10、PL.27）

加曽利B2式・B3式及び曽谷式に併行する時期の土器群である。出土量は少量である。加曽利B1式の土器はみられない。後期3は紐線文系土器である。後期4は波状口縁の深鉢形土器とみられる。刺突文の下の沈線区画の内部に条痕文が施される。後期5は精製浅鉢である。上下2箇所の沈線区画内に縄文を施している。後期3～6は加曽利B2式期のものとみられる。後期7・8は類似した文様構成であり、同一個体の可能性がある。どちらも口縁部の破片であり、5単位の波状口縁の深鉢形土器とみられる。加曽利B2式～B3式期のものであろう。後期11は2本の平行沈線区画内に刺突文を充填し、胴部に斜め横方向の条線を施す。後期12は波状口縁の深鉢形土器の可能性がある。後期13は注口土器の口縁部かもしれない。これらは加曽利B3式期のものとみられる。後期20は紐線文系土器であり、口縁部があまり肥厚せず、内面が有段構造をとる。後期22・23は類似した文様構成の平口縁深鉢形土器である。口唇部が肥厚し、3段の帯縄文を有する。無文帯を区画する沈線は平行沈線や枠状文にならず、雑な印象を受ける。後期24は口唇部に押圧痕、頸部に細い沈線で三角文を施す。これらは曽谷式期のものであろうか。

縄文時代後期後葉～晩期

縄文時代後期後葉から晩期に比定される土器は、本遺物包含層において最も出土量が多い。具体的には、縄文時代後期後葉の安行1式・2式、縄文時代晩期の安行3a式・3b式・3c式・3d式、姥山系土器、前浦式土器、大洞系土器、浮線文系土器の精製土器及び粗製土器が出土している。

以下、土器を形態的特徴から25種類に分類し、類別ごとに記載する。

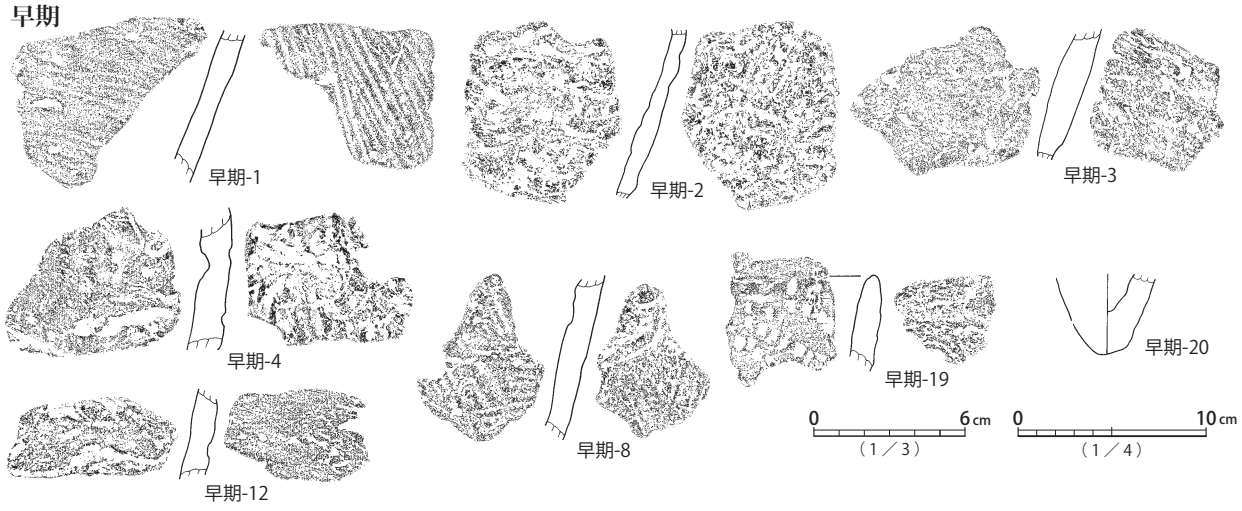
1類　陰刻の三叉文や入組文・弧線文を伴い、縄文を施文する平口縁深鉢形土器

（Fig.11～15、PL.25・28～32）

「入組文系土器」を主体とする土器群である。時期は安行3a式・3b式期のものが主体であるが、一

D 区包含層

早期



後期中葉

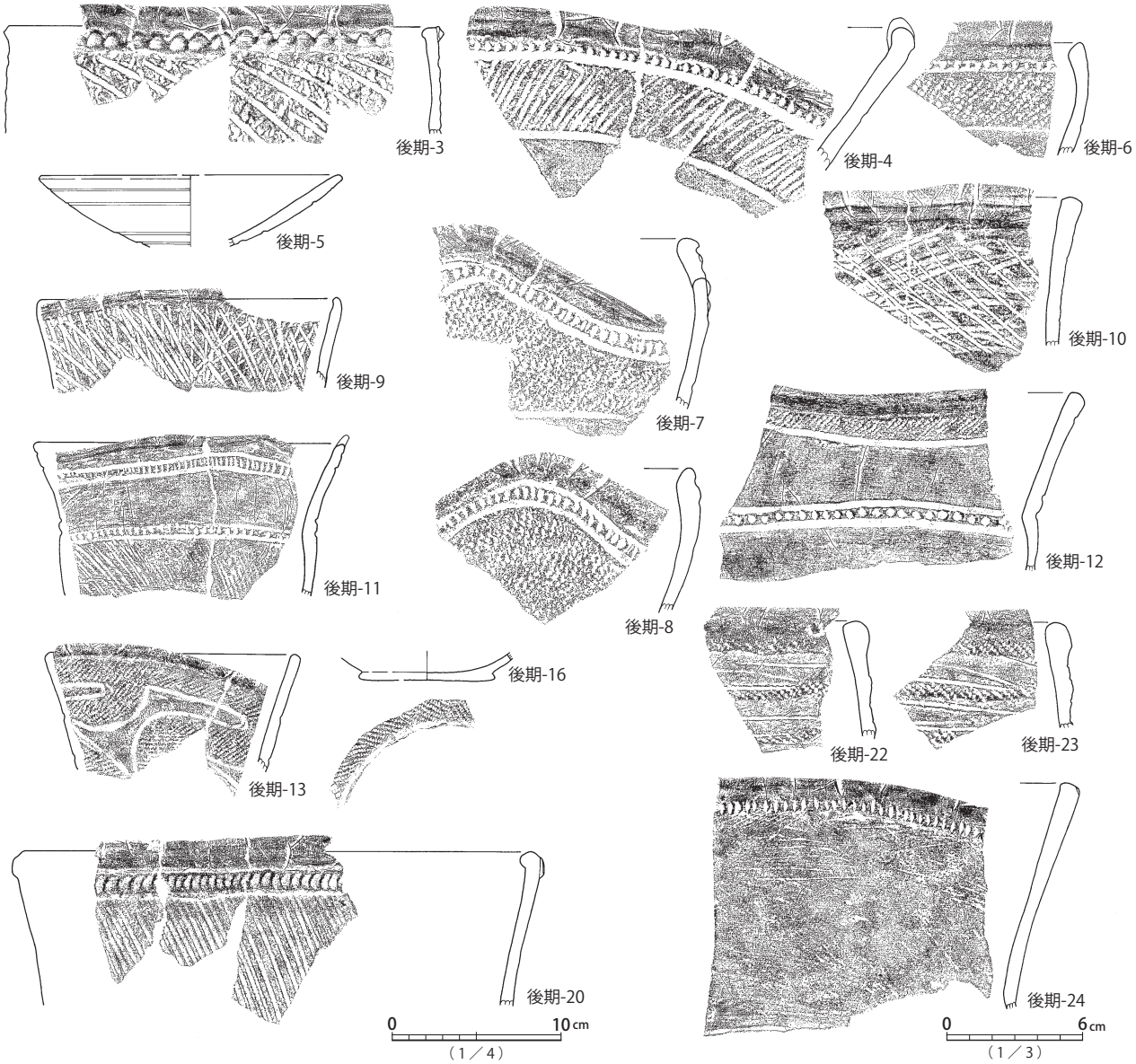


Fig.10　D区包含層 遺物実測図（1）

部安行1式・2式期の土器がみられる。平口縁深鉢形土器が主体であり、口縁部に小突起を伴うものが多い。また、口縁部が屈曲して開くものが大半であるが、緩く内弯するものも見受けられる。縄文はLRの単節縄文が大半を占めるが、ほかにRLの単節縄文、Lの無節縄文が施文される個体も存在する。無文帯は丁寧なヘラミガキが施される個体が多く、内外面が黒色を呈する個体も散見される。また、外面に炭化物が付着する個体もみられる。

1−1は、口縁部は無文帯で、頸部に沈線による区画文内に無節縄文を施す。文様帯は上下対称の入組文と弧線文の文様構成を基調とし、内部に無節縄文を充填する。入組文の一部はヘラミガキによって磨り消されている。時期は安行3b式併行と思われる。1−3は口唇部に粘土紐による波状の貼付文がみられ、口縁は無文である。頸部から胴部は直線文や弧線文を主体とした文様が施され、内部に無節縄文が充填される。また、三連のボタン状貼付文がみられる。1−5は口縁部に単節縄文を施し、沈線によって頸部と区画する。胴部は弧線文による入組文と胴部最大径に円形の貼付文がみられる。これらは安行3a式〜3b式併行と思われる。1−4・7・8・19・81は口縁部に単節縄文を施して下部を沈線によって区画し、胴部は入組文と弧線文を施し、内部に縄文が充填されている。1−8は胴部最大径付近の沈線区画文の間に貼付文を施す。1−81は入組文と弧線文の下部にキザミを伴う貼付文とブタ鼻状貼付文がみられる。これらは安行3b式併行と思われる。1−82・83は口縁部に縄文のかわりに列点文が施文される。

1−18・36は小片であるが入組三叉文がみられることから、安行3a式に併行するものであると思われる。1−39は縦方向のレンズ状弧線文と入組三叉文にブタ鼻状貼付文が伴う。1−73の入組文は三叉文が退化し弧線文と組み合わさったような形状をとっている。1−75も1−73と類似した文様構成の可能性が考えられる。1−77は対向弧線文内に直線文が充填されている。いずれも安行3a式併行のものであろうか。

1−24〜28・41・47・51・52・58・61・62・78・85は安行2式併行と思われる。1−27と1−28、1−51と1−52、1−24と1−58、1−61と1−62は類似した文様構成である。口縁部から頸部にかけて菱形文状の沈線を施すものが多くみられる。

1−42・84は安行1式〜2式併行とみられる。1−42は蛇行沈線を伴うレンズ状の沈線文を施し、1−84は互連弧線文がみられる。

なお、1−71は、入組文と弧線文による文様構成をとっているが、縄文ではなく細密沈線を充填している。整理作業上の都合で1類に掲載しているが、本来は後述する14類に属する土器であると思われる。時期は安行3b式〜3c式に併行するものと考えられる。

2類　陰刻の三叉文や入組文・弧線文を伴い、縄文を施文する台付浅鉢形土器及び浅鉢形土器

（Fig.15・16、PL.32・33）

基本的に1類の文様構成をとる台付浅鉢形土器及び浅鉢形土器の一群である。無文帯は丁寧なヘラミガキが施される個体が多く、内外面が黒色を呈する個体も散見される。

2−1は波状口縁で口唇部にキザミを伴った貼付文がみられる。胴部には連続する背向弧線文が施文される。2−3は口唇部に沈線を伴う小突起がみられ、胴部には上下の沈線区画文の間に枠状文を施文する。いずれも安行2式併行と思われる。

2-5・6・9は緩やかな波状口縁をとり、陰刻の入組三叉文が施文される。これらは安行3a式併行と考えられる。

2-7は安行1式～2式併行の台付鉢形土器の破片である。体部下部に連続する弧線文がみられ、縄文が充填される。

2-10・11は安行3b式に併行する浅鉢形土器である。2-10は口唇部に粘土紐を貼り付け、キザミを施した貼付文がみられる。頸部の沈線区画内を無文とし、外側には縄文を施文する。2-11は口縁部から頸部にかけて入組文と弧線文を施し、縄文を充填する。

2-12は浅鉢形土器の胴部から底部にかけての破片である。

なお、2-4は、胴部に沈線による「の」の字状文がみられることから、前浦2式（松丸2012）の浅鉢形土器とみられる。本来、後述する12類で掲載するべき土器であるが、整理作業上の都合で本類に図示した。

3類　波状口縁深鉢形土器（Fig.16 ～ 21、PL.33 ～ 38）

安行1式から安行3a式に併行する波状口縁深鉢形土器の一群である。口縁部は5単位もしくは4単位の波状部を有するとみられるが、口縁部を完全に復元できる個体がないため、詳細は不明である。口縁部から胴部にかけては沈線を伴う隆帯文が施され、貼付文を伴う。また、単節縄文が施文され、無文帯は丁寧なヘラミガキが施される個体が多い。なお、これらの個体は口縁部のみの小片のものが多数のため、同一個体となる破片が一定数存在するものと考えられる。

3-1 ～ 10は安行1式に併行するものと考えられる。口縁の波状部の張り出しはあまり強くない。3-1 ～ 5は扁平もしくは緩やかな扇状の波頂部を有し、波頂部から縦方向に無文の貼付文が並んでいる。また、波頂部から1番目と2番目の貼付文の間に穿孔を伴う。口縁部から頸部は沈線を伴った隆帯文が施され、隆帯上には縄文が施文される。3-6 ～ 8は山形の波頂部を有し、波頂部から縦方向に無文の貼付文が並んでいる。3-9・10は波底部の破片である。3-10は波底部から縦方向に無文の貼付文が並び、口縁部から頸部は沈線を伴った3条の隆帯文が施され、隆帯上には縄文が施文されている。

3-11 ～ 30・69・70は安行2式に併行するものと考えられる。3-11 ～ 20は類似した文様構成である。波頂部は粘土を貼り付けて成形しており、口唇部に沈線を施す。波頂部の側面は粘土紐を巻き付けて瘤状に突出させ、沈線を施文する。中には巻き付けた粘土紐の上部に横方向の沈線を施文するものもみられる。粘土紐の下部には表面に横方向の平行沈線を施した大きめの貼付文がみられる。口縁部から頸部は沈線を伴った隆帯によって三角形文が形作られる。口縁部は縄文が施文され、隆帯上には爪形文が施されるとともにやや小ぶりなブタ鼻状貼付文が伴う。三角形文の下部は隆帯文によって横方向に区画され、内部に対向・背向する弧線文が施文されるとともに、縄文が充填されている。3-21 ～ 24は、頸部の文様構成は基本的に上記のものと同様だが、口縁波状部の横方向の粘土紐巻き付けがみられない。3-25・26は口縁波状部が二股に分かれている。3-27 ～ 30は口縁波底部の破片であり、波底部に横方向のキザミを伴った貼付文が施文されている。

3-31 ～ 68・71は安行3a式に併行するものとみられる。口縁波状部は粘土貼り付けによって撥状に成形されており、口唇部から内面に向かって平行沈線を施す。安行2式期のものと違い、側面に

1 類

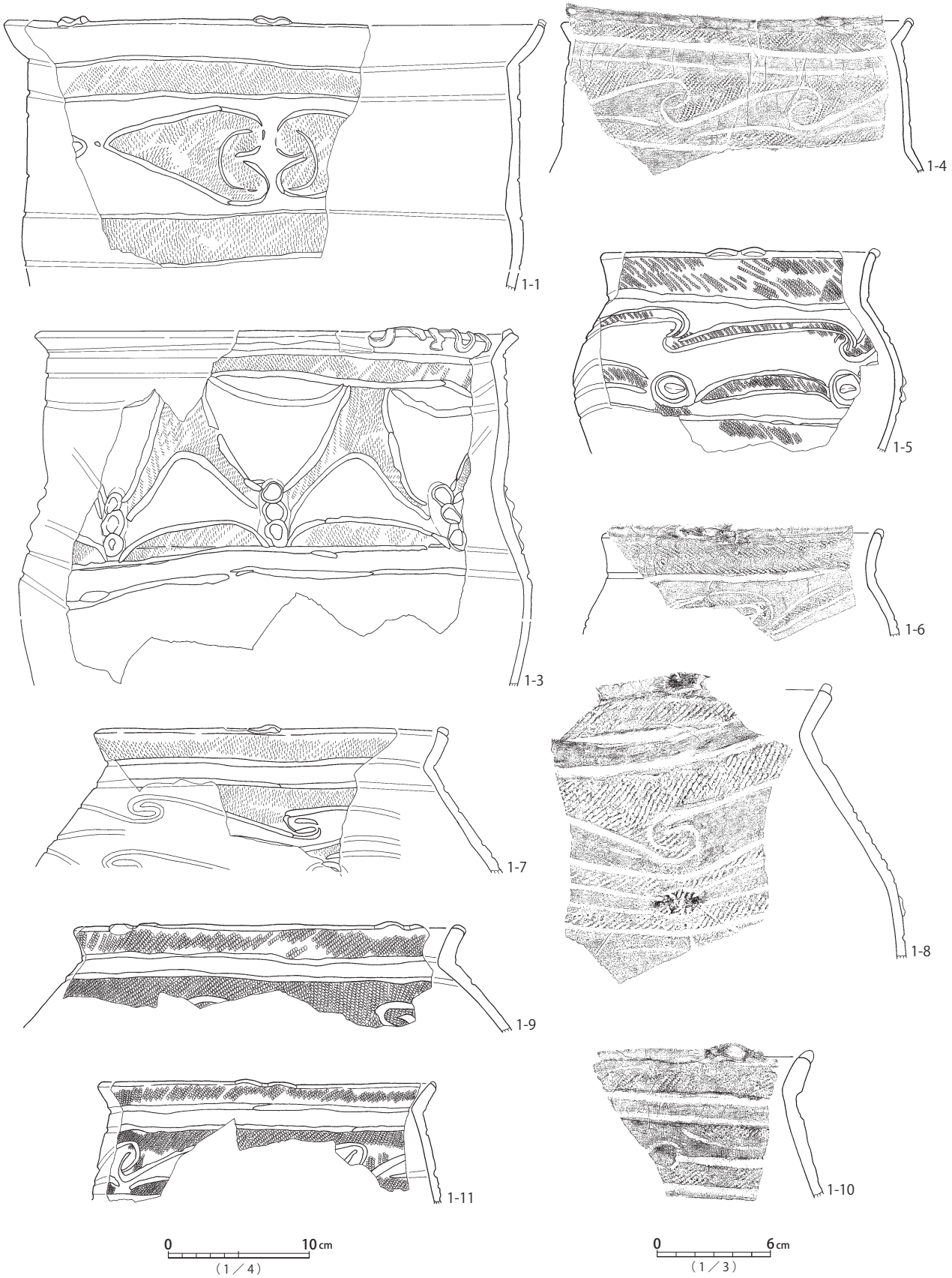


Fig.11　D区包含層 遺物実測図(2)

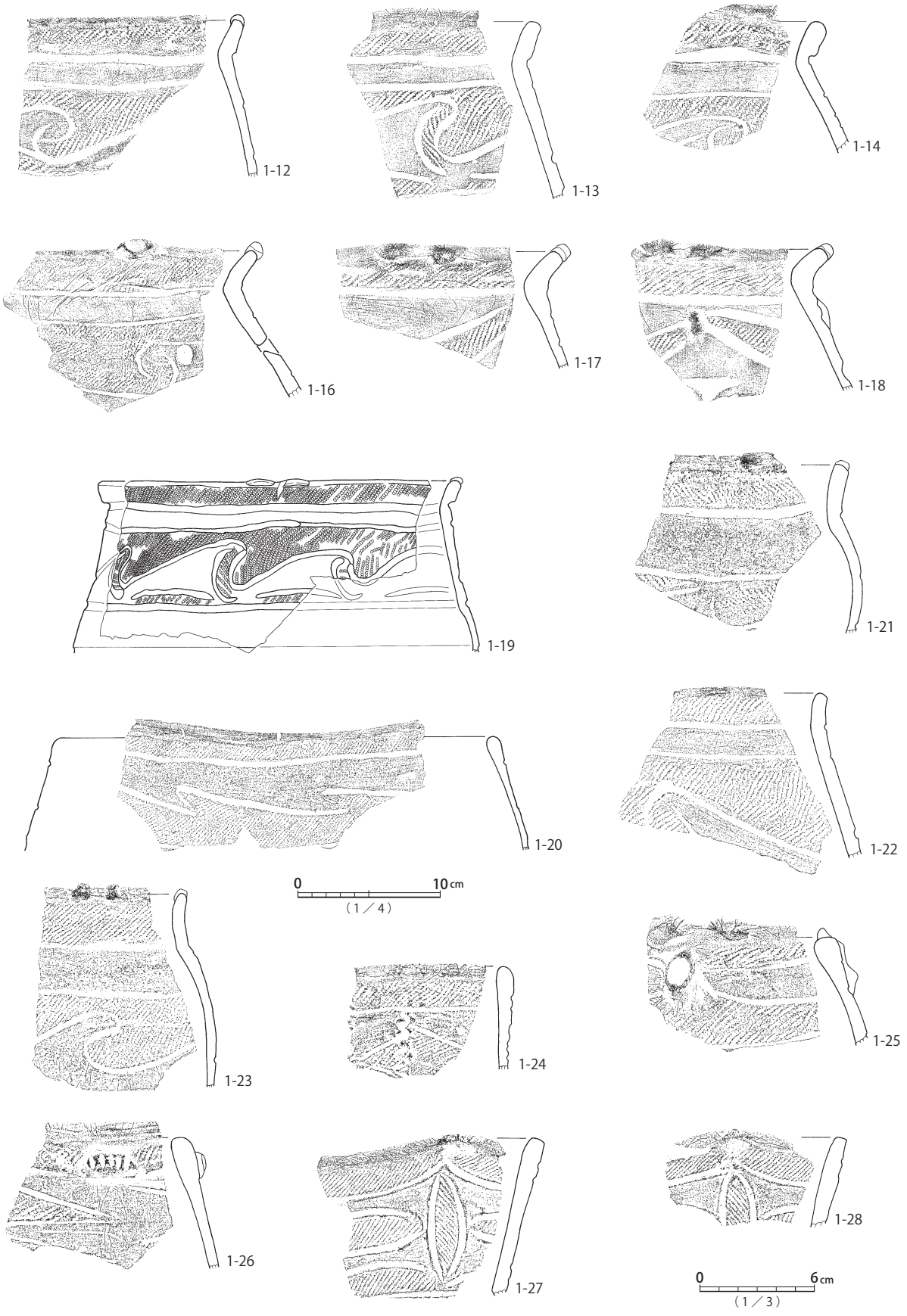


Fig.12　D区包含層 遺物実測図(3)

Fig.13　D区包含層 遺物実測図(4)

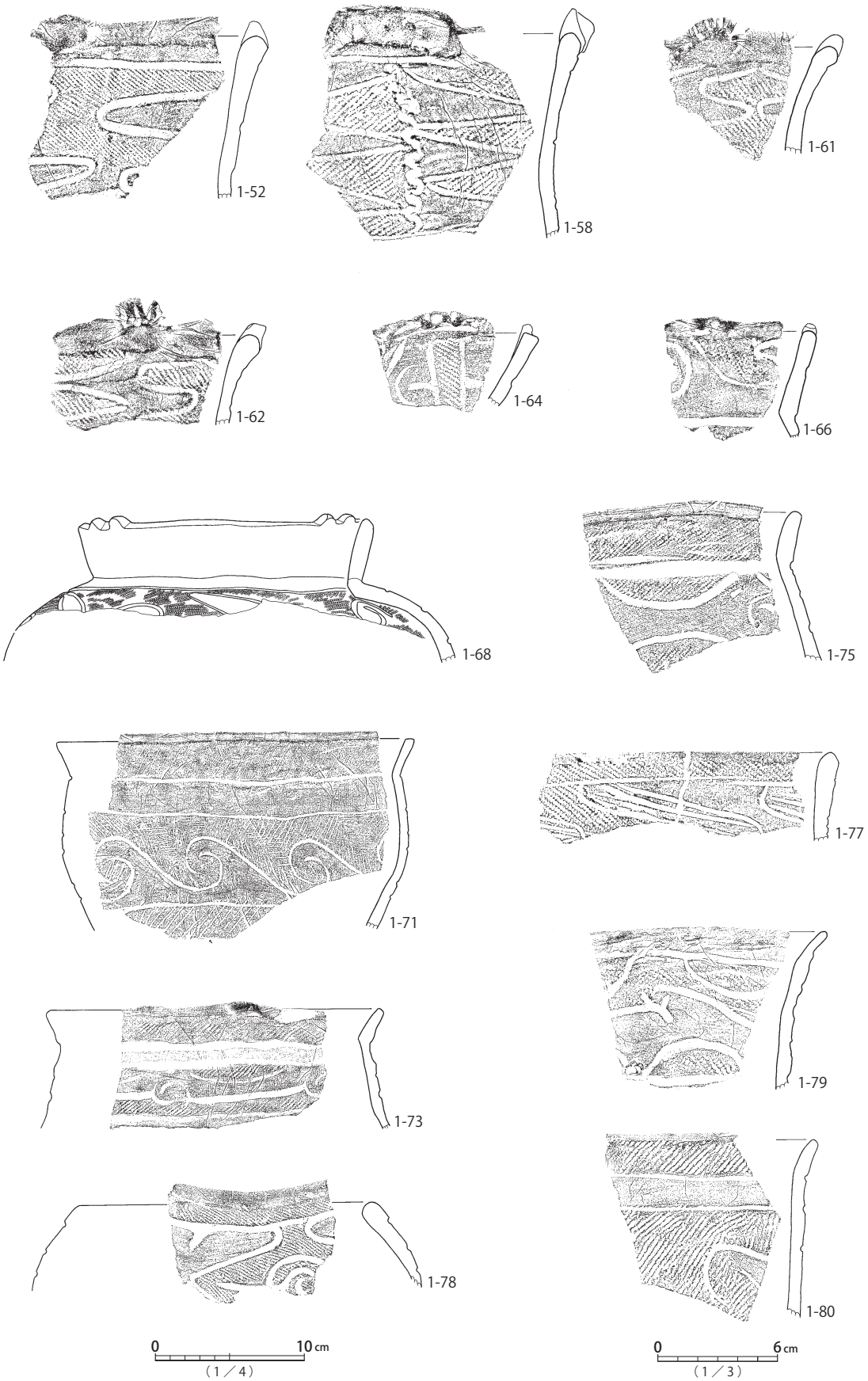
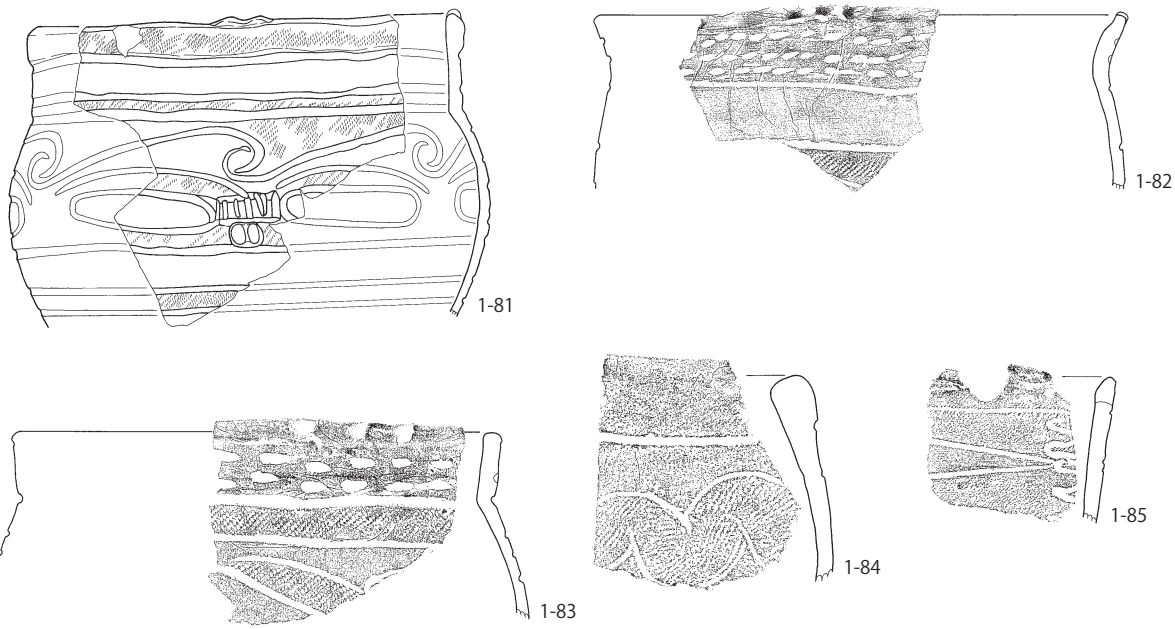


Fig.14　D区包含層 遺物実測図(5)



2 類

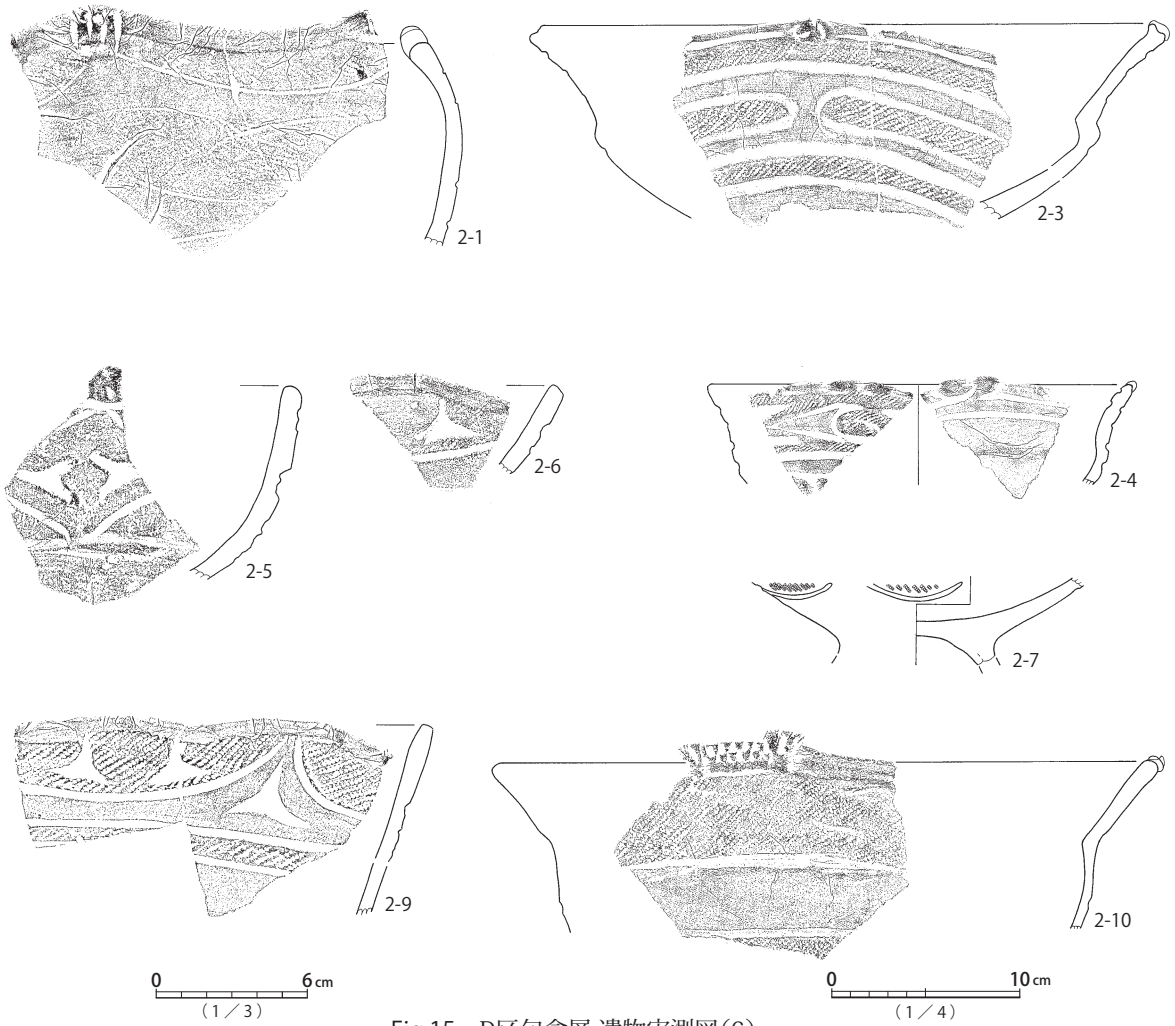
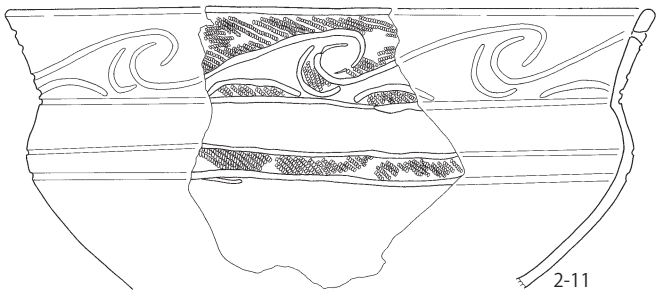
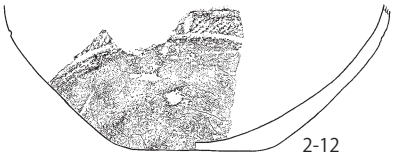
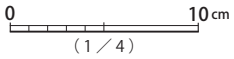


Fig.15　D区包含層 遺物実測図(6)







3類

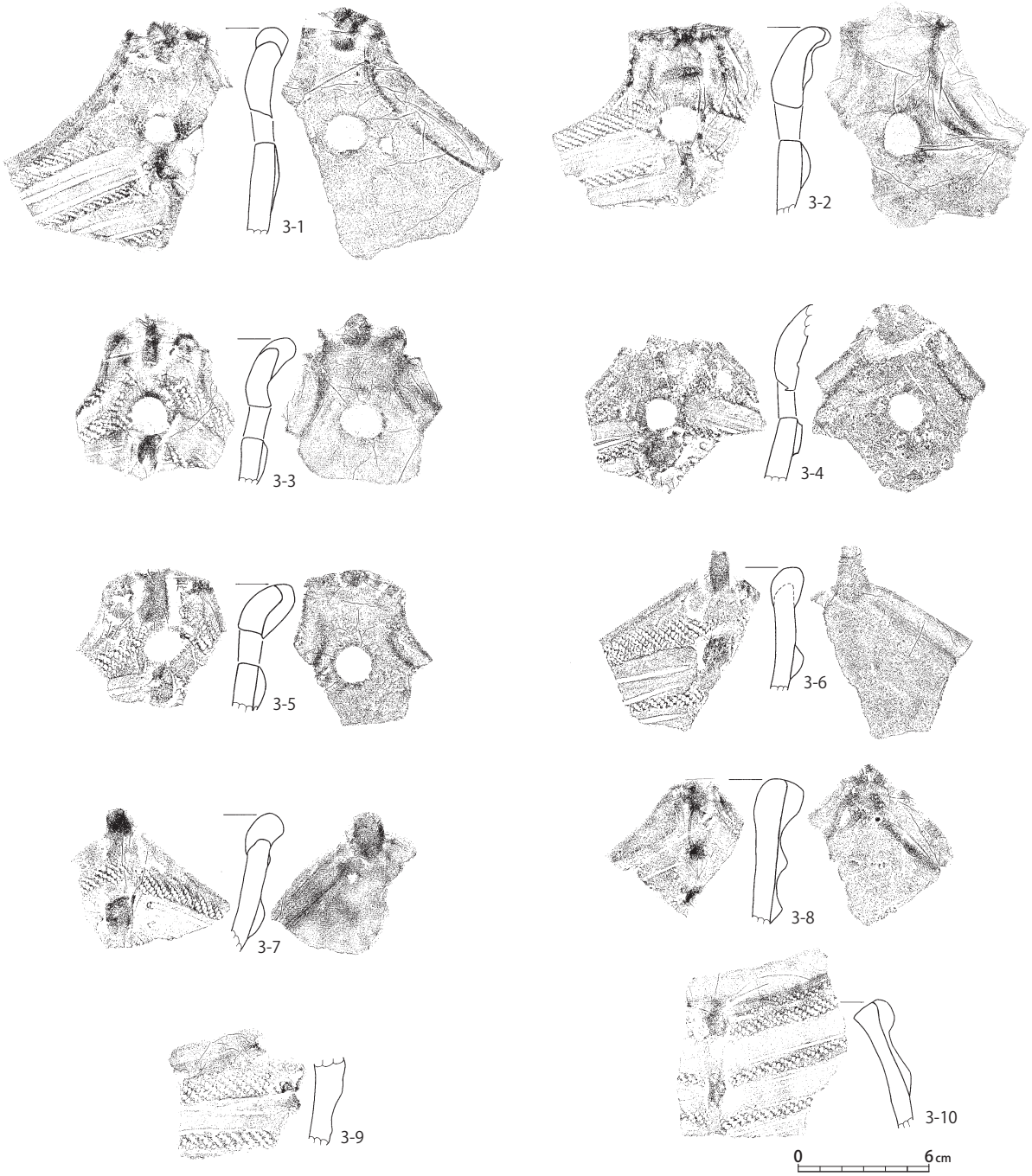


Fig.16　D区包含層 遺物実測図(7)

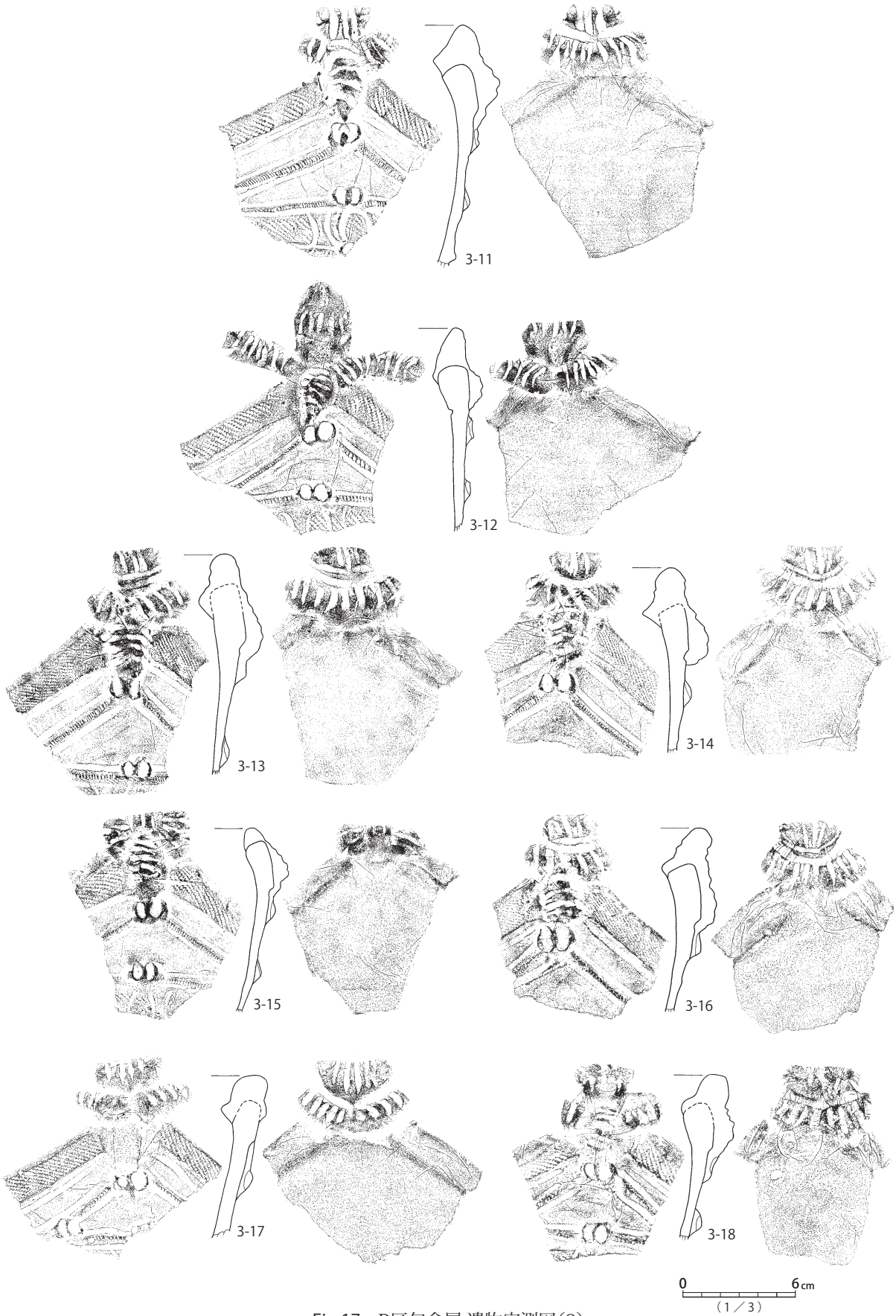


Fig.17　D区包含層 遺物実測図(8)

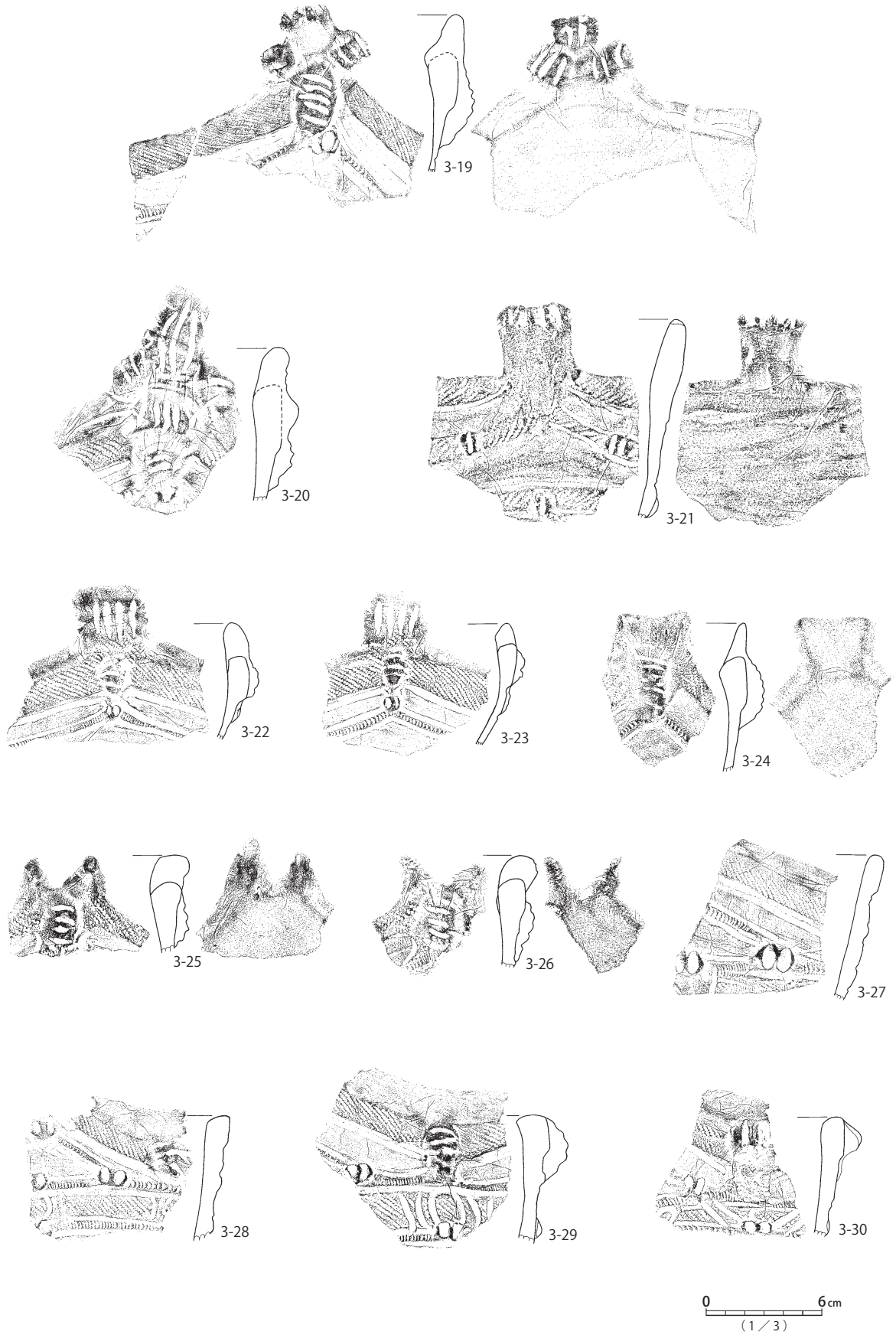


Fig.18　D区包含層 遺物実測図(9)

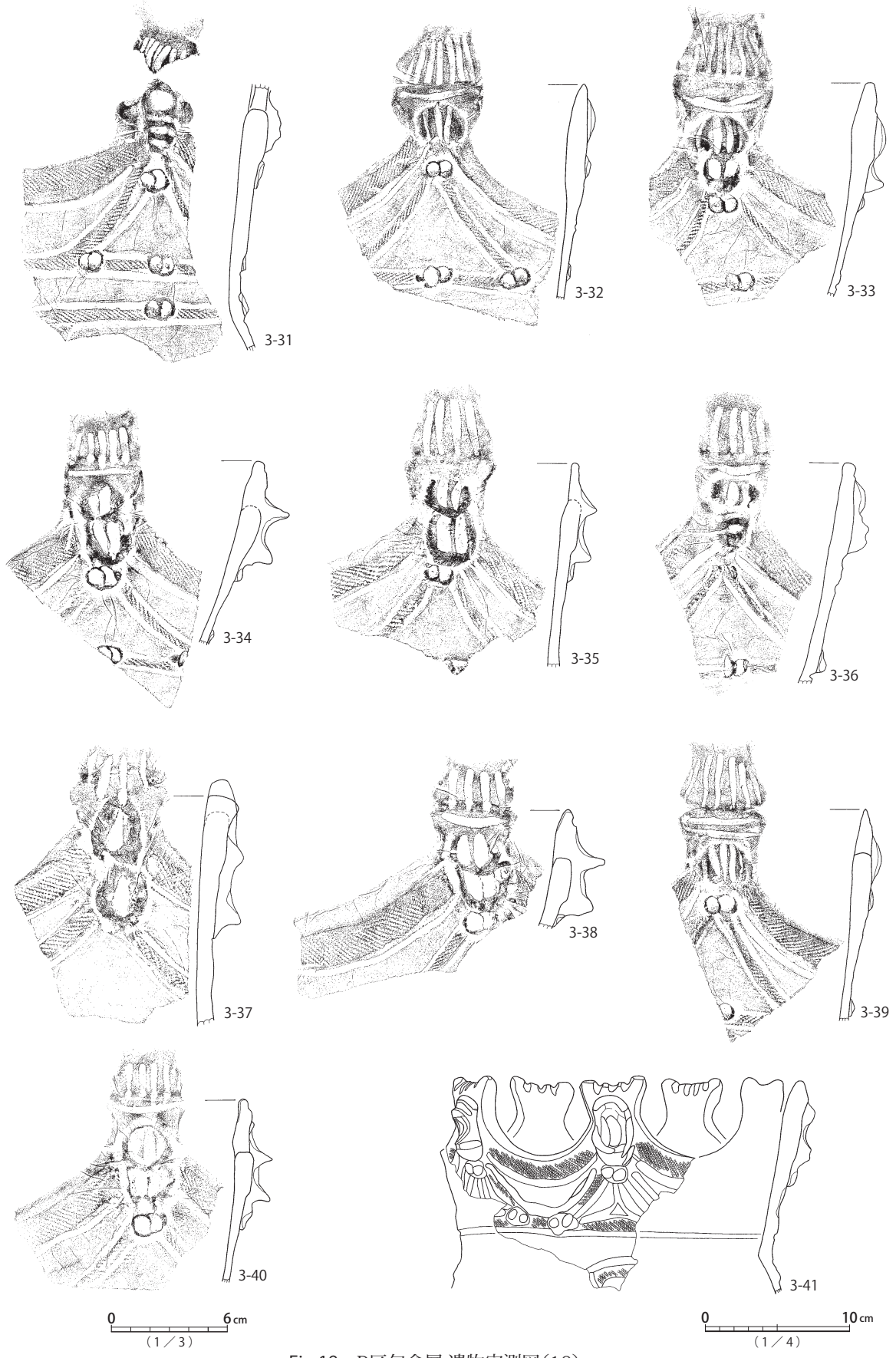


Fig.19　D区包含層 遺物実測図（10）

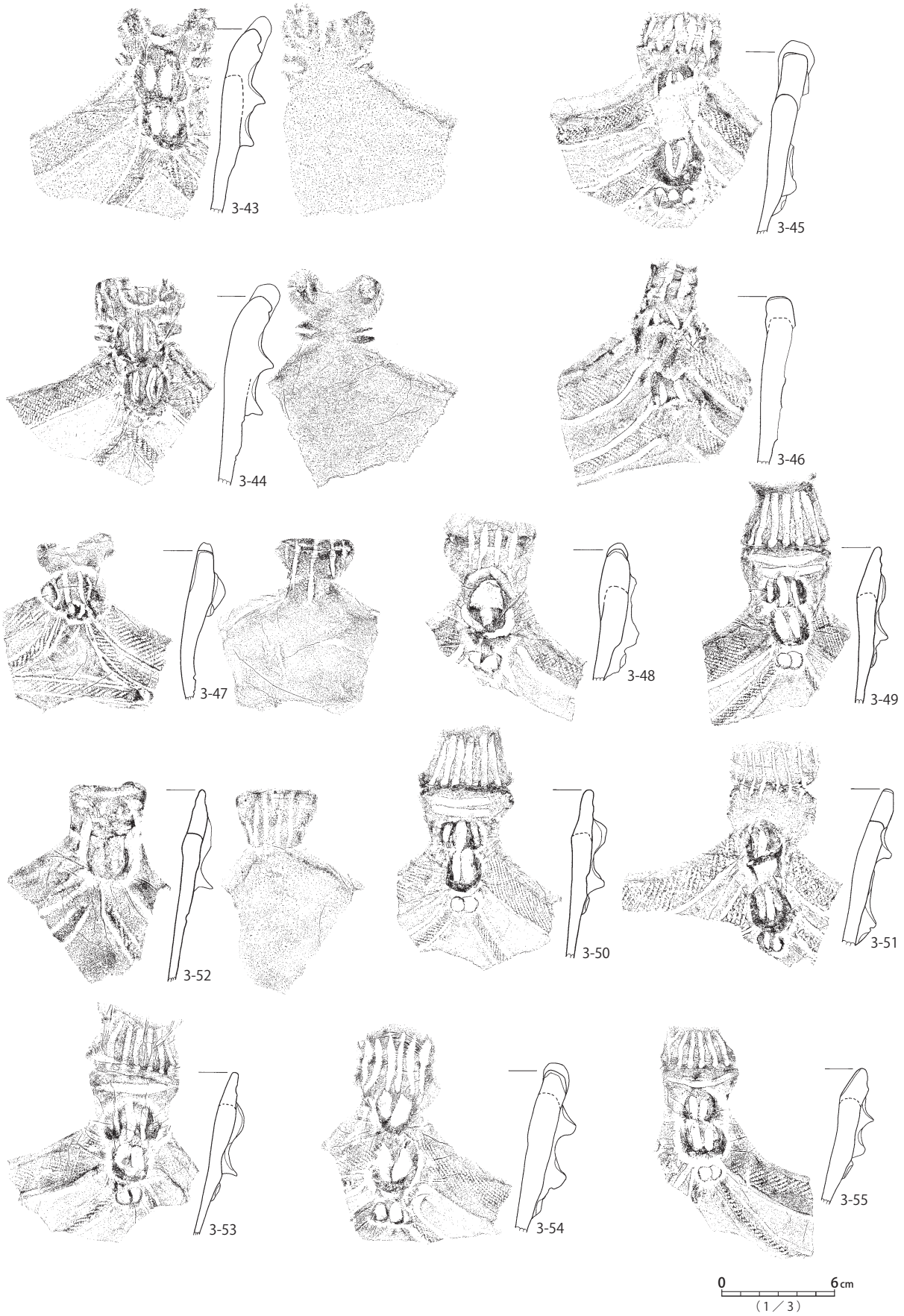


Fig.20　D区包含層 遺物実測図（11）

Fig.21　D区包含層 遺物実測図（12）

粘土紐の巻き付けはみられず、やや扁平な作りになっている。口縁部には周囲に沈線文を伴った二連の大きめな貼付文が施文される。貼付文は基本的にはブタ鼻状を呈するが、中には平行沈線を施すものや1箇所のみ押圧するものもみられる。また、貼付文の上部に横方向の沈線を施すものも存在する。なお、3-31・39・41は貼付文が1つのみ施文されている。口縁部から頸部は沈線を伴った隆帯によって三角形文が形作られる。3-41は三角形文の内部に陰刻の三叉文がみられる。三角形文の下部は隆帯文によって横方向に区画され、内部を無文とするもの、対向・背向する弧線文を施文し縄文を充填するものがみられる。口縁部と隆帯上には縄文が施され、やや小ぶりなブタ鼻状貼付文が伴う。3-62・63は胴部の横方向の沈線によって上部の文様帯を区画し、胴部下部には単節縄文が施文されている。

3-72は明確な波状口縁にはなっておらず、波頂部は2方向の突起を貼付している。頸部の文様帯は沈線による菱形文の内部に単節縄文を充填しており、上記各例とは異なる。3類に含めることには疑念が残るが、本類型内に掲載した。安行2式に併行するものと思われる。

4類　帯縄文による区画文を伴う平口縁深鉢形土器（Fig.22 ～ 28、PL.39 ～ 45）

沈線を伴う帯縄文により区画された文様帯をもつ平口縁深鉢形土器の一群である。時期は安行1式から安行3a式に併行するものと考えられる。施文される縄文は単節縄文であり、無文帯は丁寧なヘラミガキが施される個体が多い。

4-1 ～ 27は安行1式に併行するものとみられる。口縁部から胴部には隆帯に単節縄文が施文されることで、帯縄文を形成している。帯縄文によって区画された内部には沈線による枠状文や横位の平行沈線文などが施文される。また、無文の立体的な貼付文が施されており、縦方向に2つほど並んでいるものとみられる。4-1は3段の帯縄文と枠状文による文様帯の下部に縄文を施文する。また、4-24は口縁部と隆帯に工具による押圧を施している。

4-28 ～ 84は安行2式に併行するものと考えられる。4-28 ～ 66は帯縄文と枠状文・平行沈線文を施文しており、安行1式期のものと類似するが、貼付文が長大化して沈線を伴うようになり、帯縄文にブタ鼻状貼付文が付属する。4-28は口唇部にキザミを伴った突起が貼り付けられる。胴部下部には条線が施される。4-29・35・36は同様の文様構成であり、同一個体の可能性がある。口縁部と隆帯には爪形文が施され、ブタ鼻状貼付文が伴う。隆帯文による区画内には単節縄文が充填され、平行沈線による垂線・斜線文が施されている。4-30・31・33は区画内に沈線文を伴わず、縄文を磨り消して帯縄文を形成している。4-33は帯縄文による文様帯の下部に条線と貼付文を施文する。4-54・57は口縁部と隆帯に爪形文を施文しており、同一個体の可能性がある。4-56・58は帯縄文の下部に爪形文を施文する。4-59・60は口縁部が無文帯になっており、隆帯に爪形文を施文する。貼付文は2個並列してつけられている。4-66は三日月状の貼付文がみられる。4-67 ～ 79・81・82は帯縄文や隆帯によって三角形文等の文様が形成されており、3類と類似した文様構成が窺える。4-67は三日月状の貼付文が施文されている。口縁が狭く、内面がそり立つ形状を呈していることから、注口土器の可能性が考えられる。4-68 ～ 79は円形の隆線文が施文されており、2個縦列するものもみられる。円形文や隆帯文に縄文や爪形文が施文される。4-68・70・73・79は、円形文に爪形文を施文するのに対し、他の隆帯文には縄文を施文している。4-83には貼付文が3個1組として施文

4 類

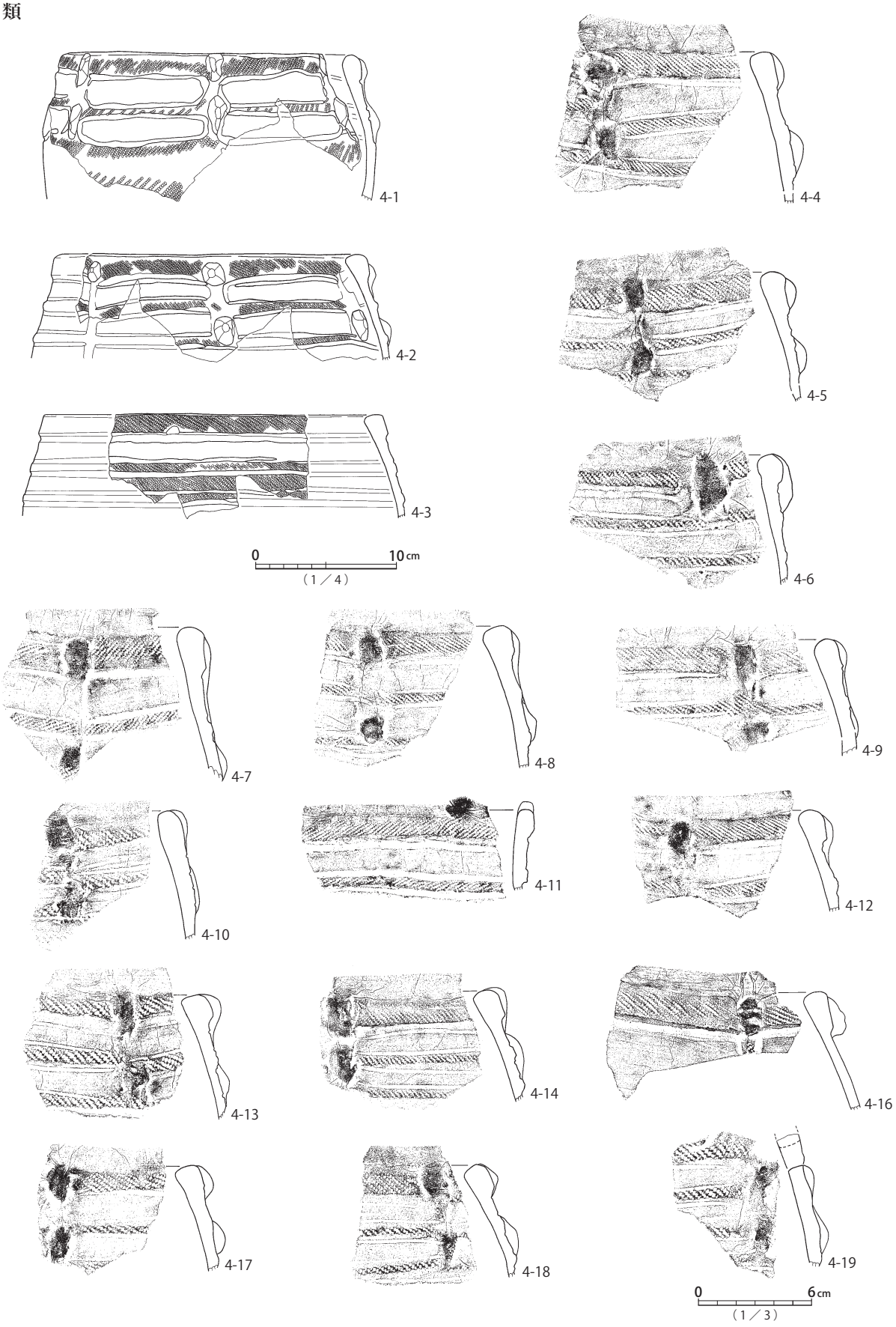


Fig.22　D区包含層 遺物実測図（13）

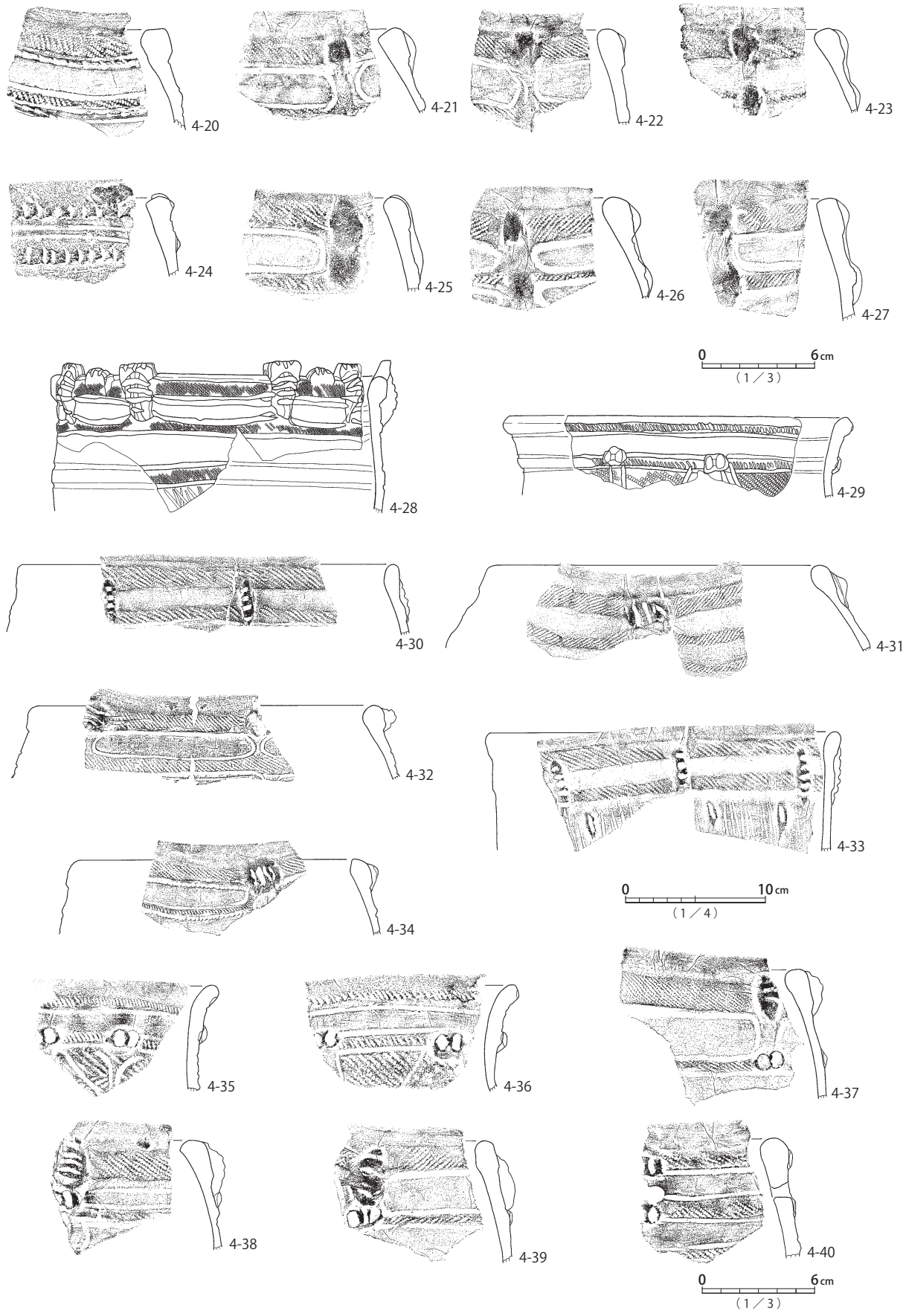


Fig.23　D区包含層 遺物実測図（14）

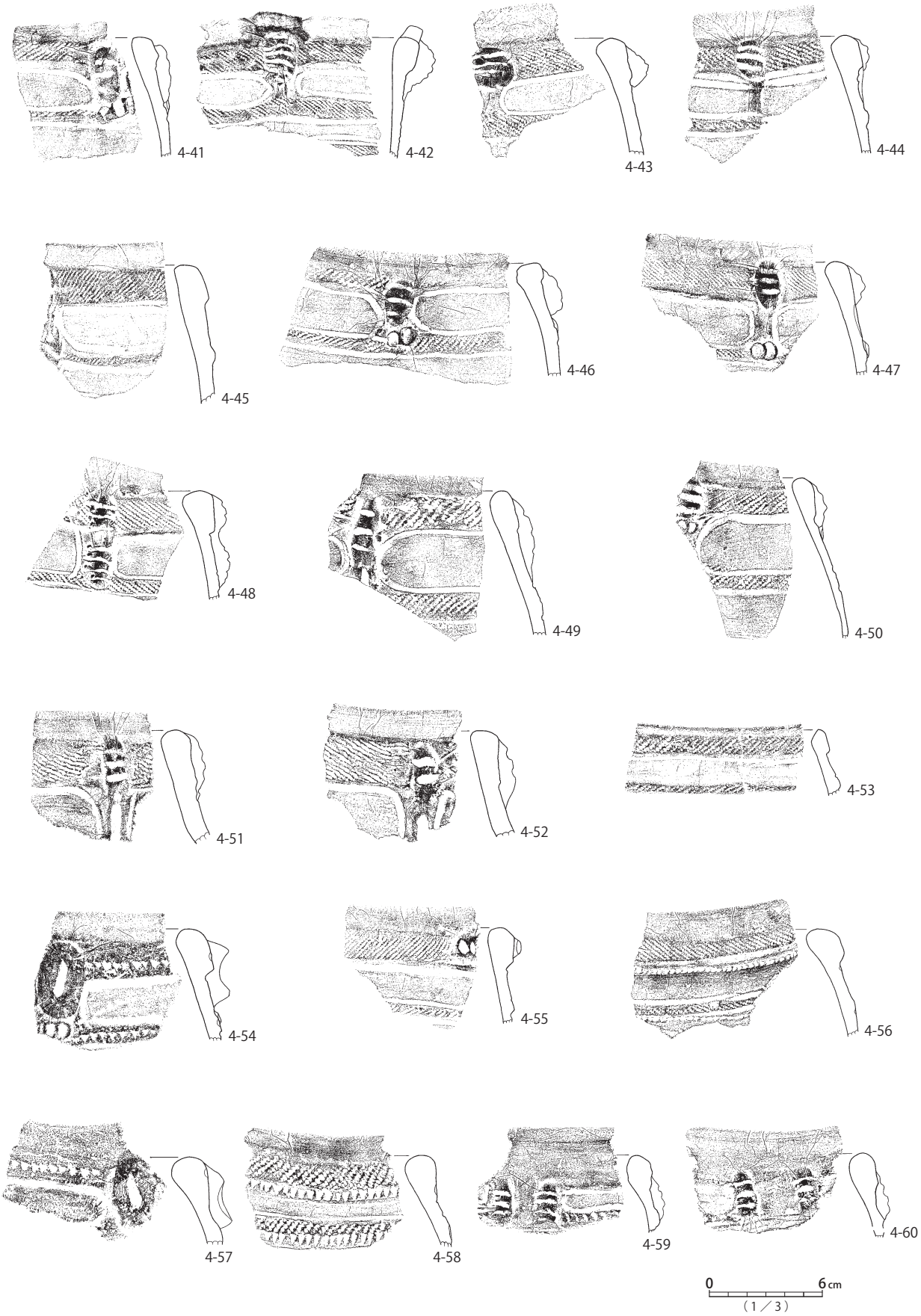


Fig.24　D区包含層 遺物実測図（15）

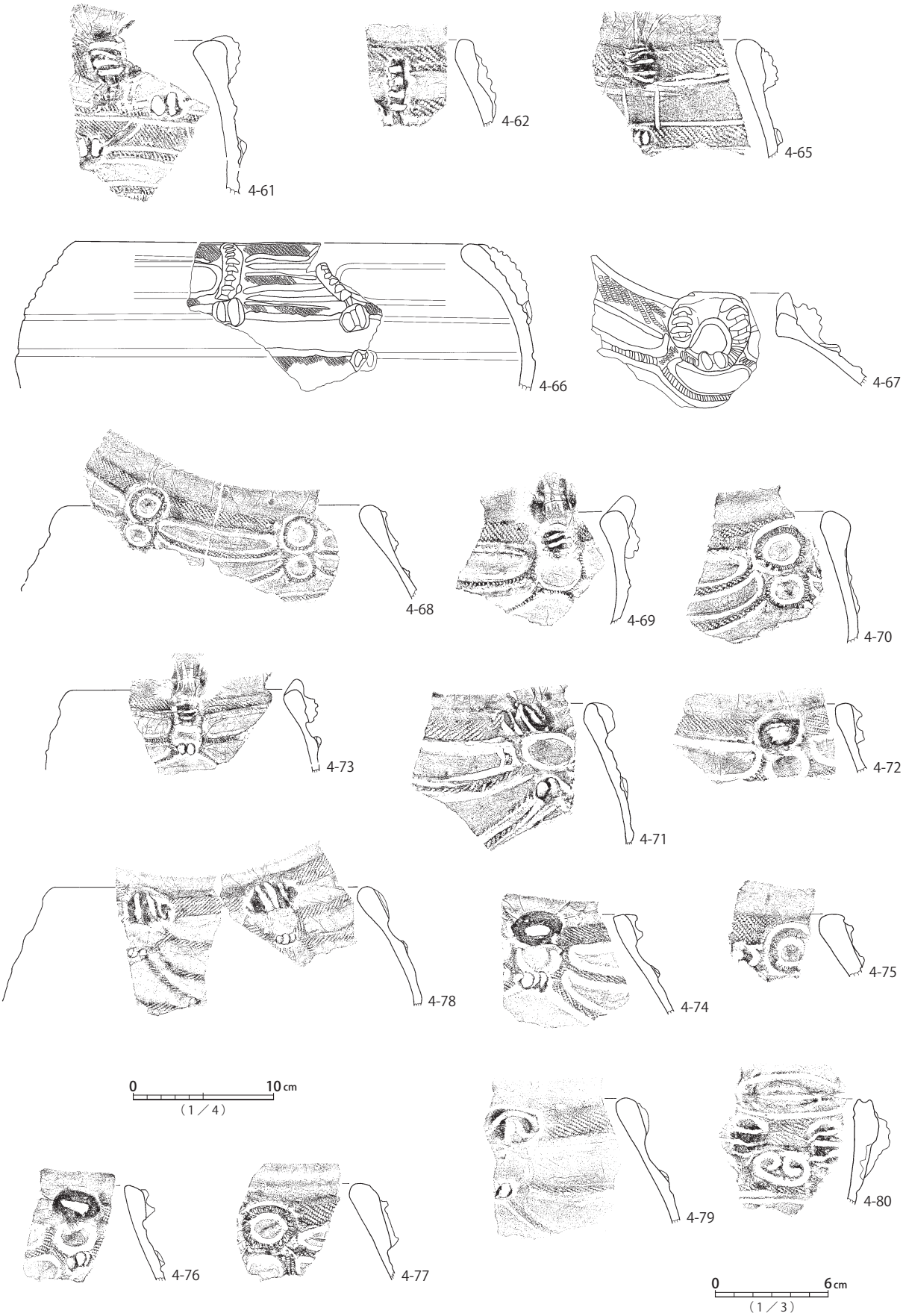


Fig.25　D区包含層 遺物実測図（16）

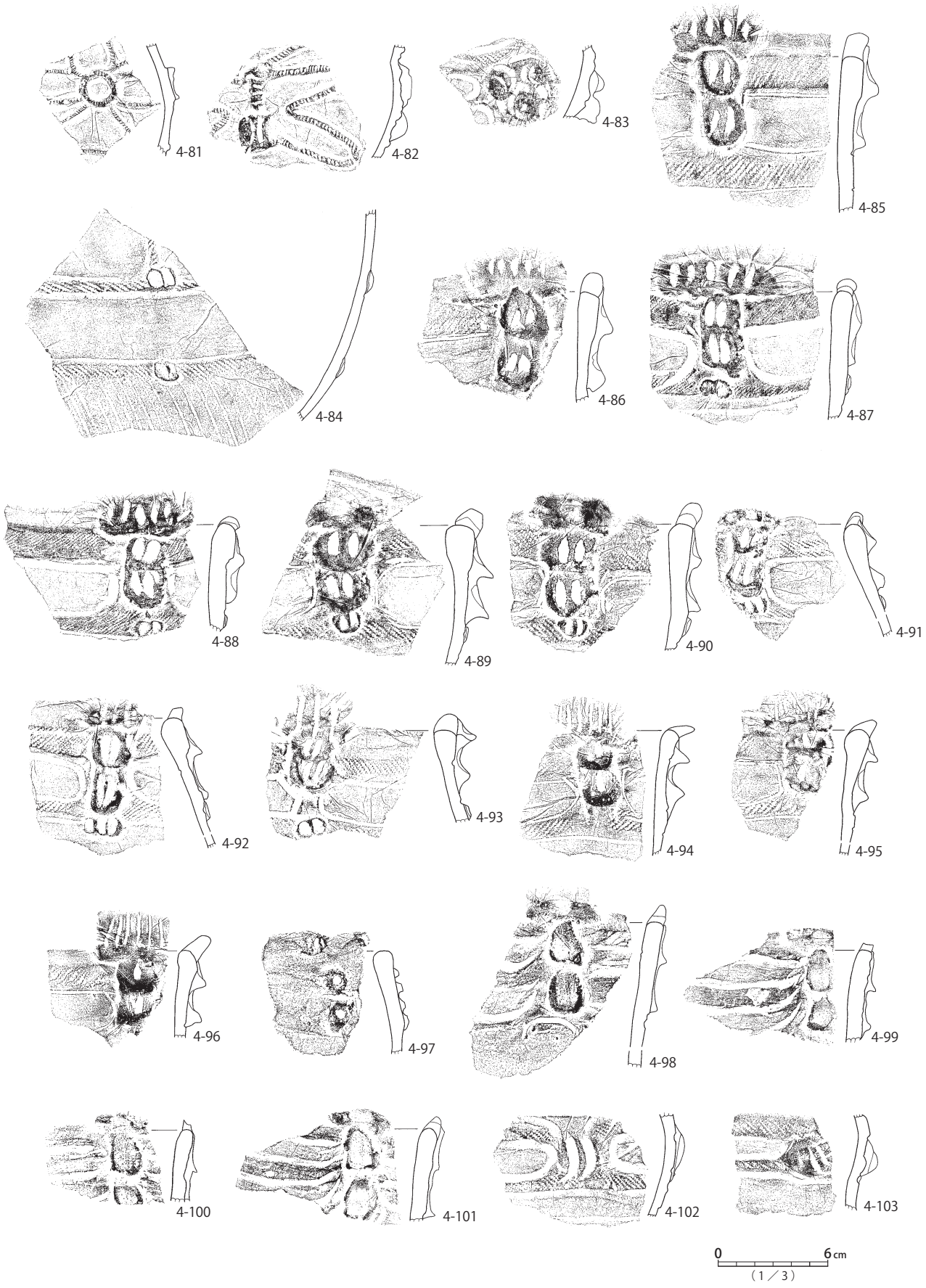


Fig.26　D区包含層 遺物実測図（17）

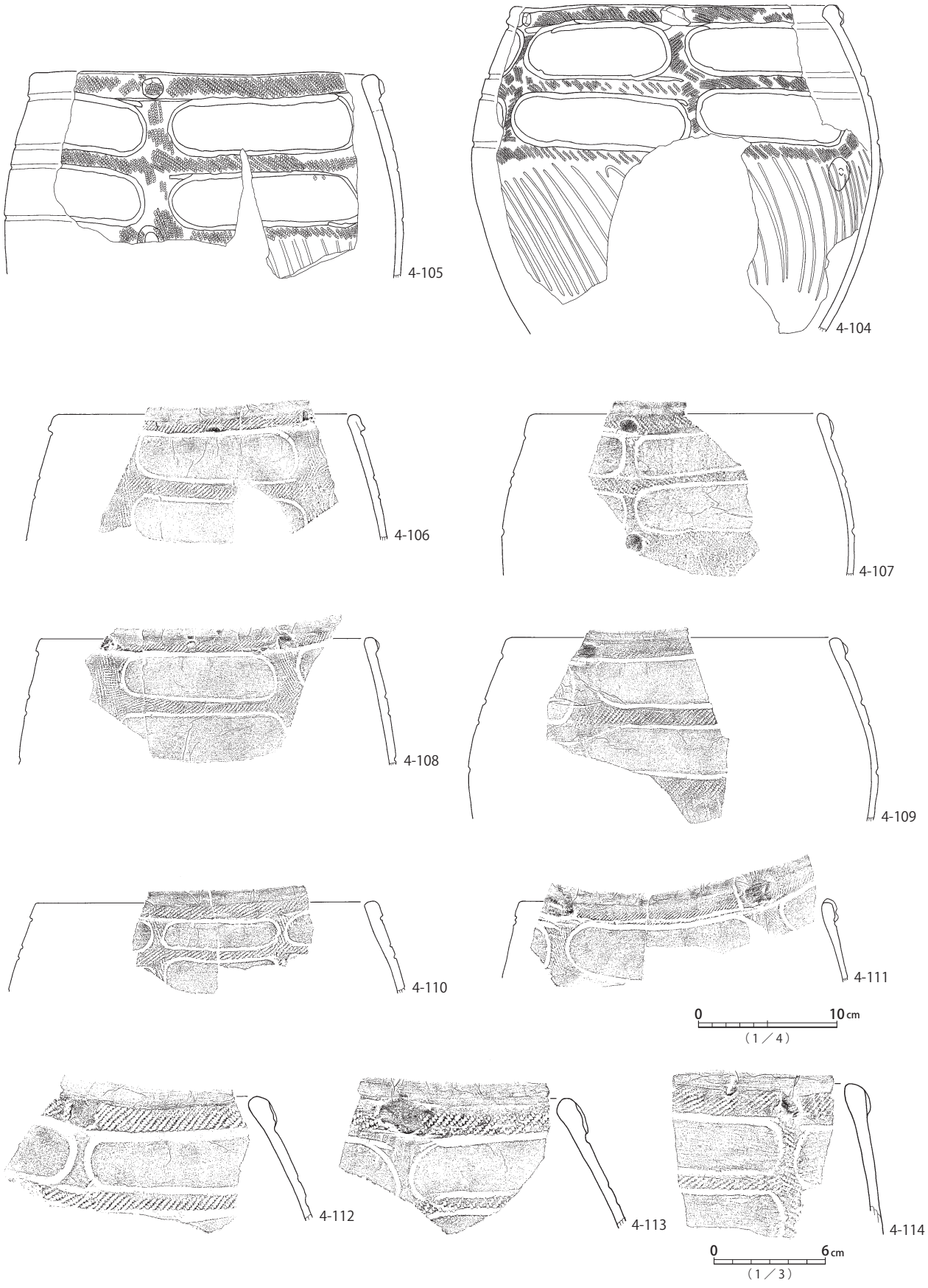


Fig.27　D区包含層 遺物実測図（18）

Fig.28　D区包含層 遺物実測図（19）

されている。4-84は胴部片であり、文様帯の下部には条線が施文される。

4-85 ～ 103は安行3a式に併行するものと考えられる。4-85 ～ 96・103は帯縄文と枠状文・平行沈線文の文様の組み合わせとともに、3類の安行3a式期のものにみられる周囲に沈線文を伴った二連の貼付文が施文されている。貼付文はブタ鼻状のものと1箇所のみ押圧するものがみられる。また、口唇部にもキザミを伴った貼付文が施文される。4-97 ～ 101は縄文が施されなくなるとともに、貼付文も工具や指頭によって押圧したのみの簡素な文様構成になっている。4-102は胴部の破片である。

4-104 ～ 135は大型の枠状文を有する一群であり、安行3a式に併行するものと考えられる。砲弾状の形状で、帯縄文は口縁部のみが隆帯になり、胴部は上下2段の枠状文が施文され、枠状文の外側に縄文を施文し、内部は丁寧なヘラミガキが施されている。貼付文も縮小・扁平化するなどの簡素化が進行する。一部、縄文や条線が伴う貼付文もみられており、口縁や胴部下部の施文時についたものと考えられる。4-104・105のように、文様帯の下部には条線が施文されるものと思われる。内面・外面とも黒色を呈するものが多く見受けられ、外面に炭化物が付着する個体も散見される。

5類　口縁部文様帯に列点文を伴う平口縁深鉢形土器（Fig.29、PL.45）

口縁部に列点文を施文した文様帯を有する土器群である。平口縁の深鉢形土器であり、口縁部は若干肥厚し、頸部の括れが比較的高い位置にくる傾向がある。口縁部は緩く外傾するものが主体で、直立するものも存在する。口縁の文様は口唇部から始まっており、弧線文やレンズ状沈線文・斜線文が施され、その内外に単列または複列の列点文が充填されている。頸部には横方向の2本の平行沈線文が施され、口縁部文様帯を区画する。平行沈線内は列点文を充填するものと無文のものがある。5-1は口唇部にキザミが施されている。また、文様帯はレンズ状沈線文を施文し、外部に列点文を充填する。5-7と文様構成が類似しており、同一個体である可能性が考えられる。5-2は平行する弧線文・斜線文内に列点文を充填しており、5-3も同様の文様構成と思われる。本類は安行3c式に併行するものとみられる。

6類　口縁部が幅の狭い無文帯となり、文様帯に列点文を伴う平口縁深鉢形土器

口縁部が幅の狭い無文帯となり、胴部上半に列点文を伴う文様帯を施文する土器群である。平口縁の深鉢形土器であり、口縁部は若干外傾するか直立する形状をとる。胴部を上下2組の平行沈線で区画し、文様帯の内部に比較的単純な沈線文を施すとともに列点文を充填する。以下、本土器群を胴部の区画内に施される文様により4種類に細別する。

6a類　区画内に斜線や弧線などの沈線文が施され、内部に列点文を充填する文様帯を伴う土器（Fig.29・30、PL.46）

6-1 ～ 11が該当する。上下の平行沈線文によって区画された文様帯の内部に、列点文を充填した弧線文・垂線文・斜線文を施文する土器群である。平行沈線文の中にも列点文が充填される。6-1は平行沈線内を無文とし、口縁部に2列の列点文を施文する。また、口唇部に小突起が貼り付けられる。文様帯は弧線文と垂線文を基調とし、内部に複列の列点文を充填する。6-2・5・6は弧線文

と鋸歯状の斜線文の内部に単列の列点文と充填するという構成の文様帯を有しており、同一個体の可能性がある。6-7 ～ 11は胴部の破片である。6-9は1・2とも同一個体の破片であるが、工具による刺突のような列点文が施されること、環状の貼付文と沈線による三角形文が施文されていることから、当類型に分類することにやや疑問が残る。本類は安行3c式に併行するものとみられる。

6b類　上下の平行沈線のみ有し、区画内部の文様帯が無文となる土器（Fig.30、PL.46・47）

6-12 ～ 18・20が該当する。上下の平行沈線文によって頸部や胴部上半に区画帯が形成されるが、区画内は無文となる土器群である。平行沈線文の内部には単列もしくは複列の列点文が充填される。6-12は単列の列点文を伴う平行沈線によって頸部が区画される。また、口唇部には突起が貼り付けられる。6-14・16は平行沈線内が無文となり、口縁部に列点文が施文されている。6-17は平行沈線内が凹状になり、上下が隆帯文状に隆起することから、4類に分類されるべきものかもしれない。6-18は胴部の破片である。6-14 ～ 16・18・20については、文様帯の全容がつかめない。もしかしたら沈線文等が施文されている可能性がある。本類は安行3c式に併行するものとみられる。

なお、6-13は1類に属するものであるが、整理作業上の都合で、本類において記載している。

6c類　区画内に入組文を施し、列点文を充填する文様帯を伴う土器（Fig.30・31、PL.47）

6-19・21 ～ 26が該当する。平行沈線によって区画された文様帯の内部に入組文を施し、列点文を充填する土器群である。6-19は頸部に横方向の単線の沈線を施文して文様帯を区画する。文様帯には入組文が施され、列点文がまばらに施文される。口縁部にも列点文が充填されている。6-22は平行沈線によって文様帯を区画し、沈線内には複列の列点文が充填される。文様帯の内部は平行沈線によって入組文が施され、列点文が充填される。6-26も複線の入組文の内部に列点文を充填する文様構成であると思われる。6-21・23 ～ 25については整理作業上本類に含めたが、胴部の小片のため詳しい文様構成は不明であり、6a類の文様構成をとる可能性も十分に考えられる。本類は安行3c式に併行するものとみられる。

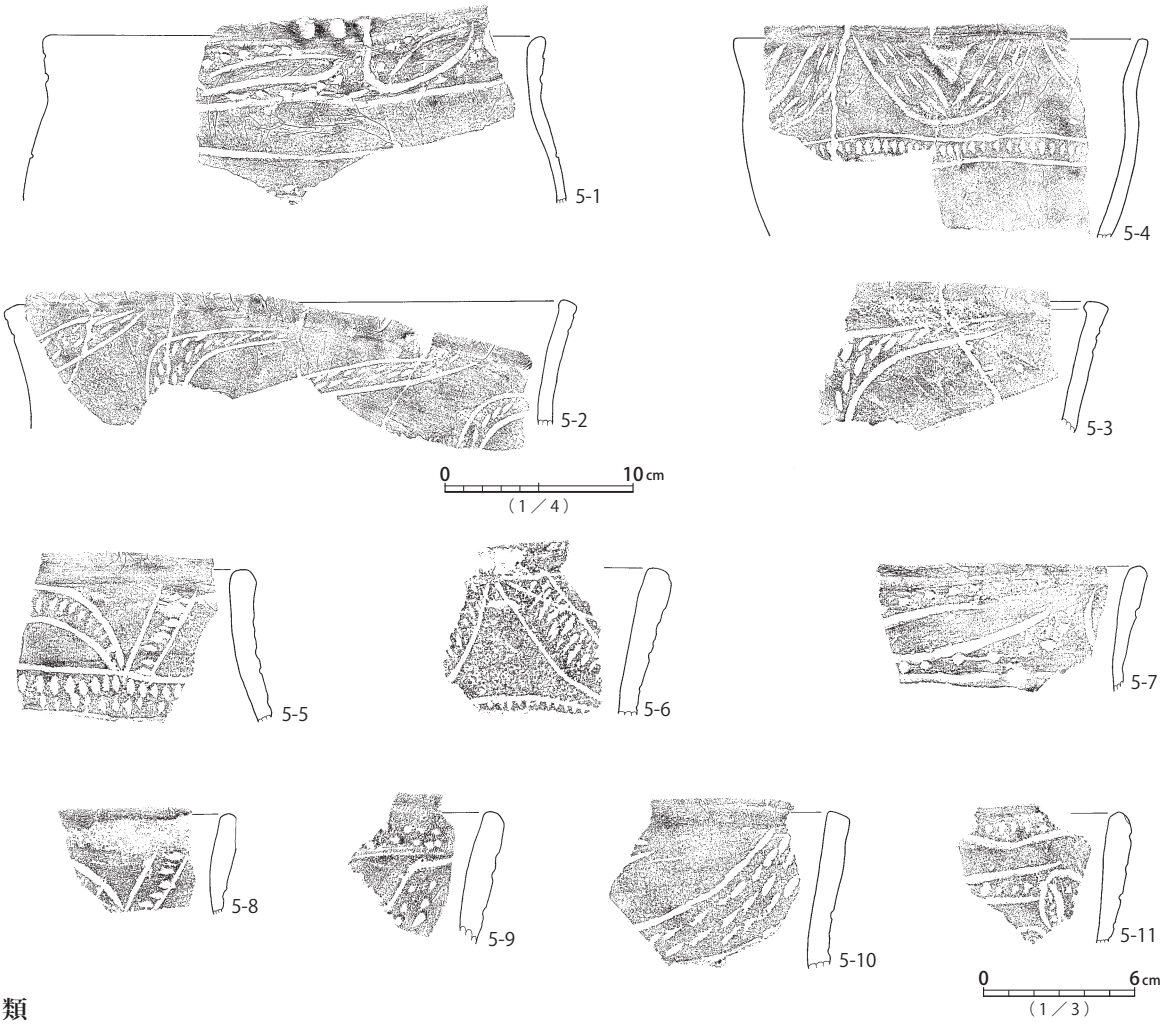
6d類　6類の文様が簡略化され、列点文が施されない土器（Fig.31、PL.47・48）

6-27 ～ 37が該当する。上記の6a・6b・6c類の沈線文様に列点文が施されない土器群である。6-27・36は上下の平行沈線による区画内に入組文を施している。6-28も同様の文様構成をとる可能性がある。また、6-27は口唇部に突起を貼り付けする。6-30・31・33は数条の横位の沈線文のみ施文している。もしかすると、後述する7類に属する可能性がある。6-31は浅鉢形土器と思われる。6-34・35も本類に含めるにはやや疑問が残る個体である。6-37は胴部の破片であり、弧線文とレンズ状沈線文が施文される。本類は安行3d式に併行するものとみられる。

7類　口縁部に沈線による文様帯を伴う平口縁深鉢形土器（Fig.32、PL.48・49）

5類の平口縁深鉢形土器の文様構成で、列点文が施文されない土器群である。平口縁の深鉢形土器であり、口縁の文様は口唇部から始まっている。文様は弧線文によって描き出されている。頸部には横位の1条ないし2条の沈線文が施され、口縁部文様帯を区画する。7-1のみ文様・形態的に他

5類



6類

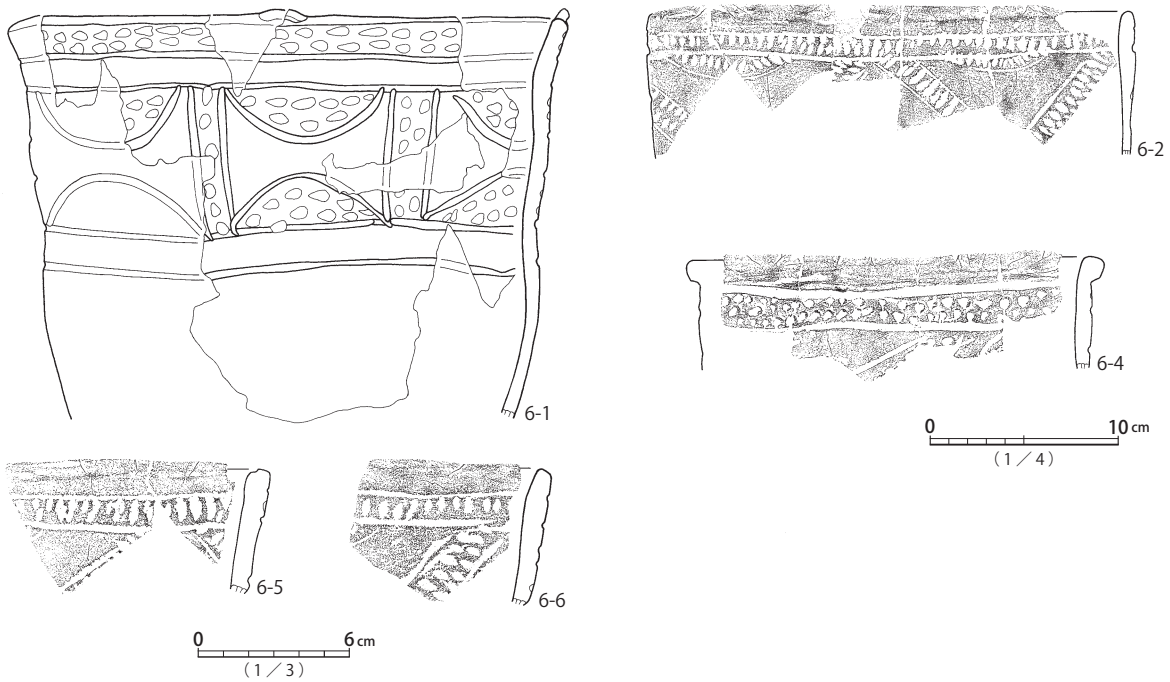


Fig.29　D区包含層 遺物実測図（20）

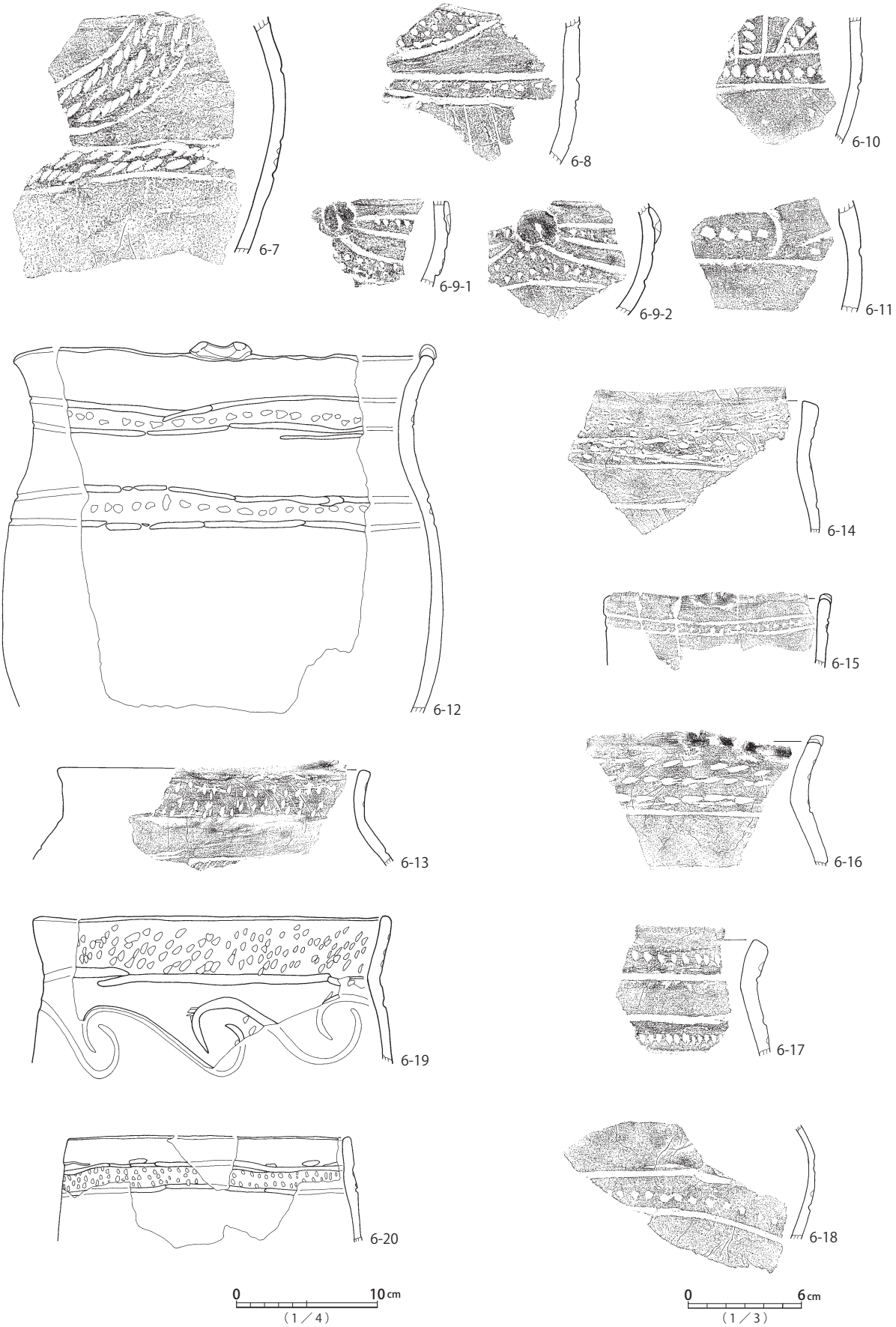


Fig.30　D区包含層 遺物実測図（21）

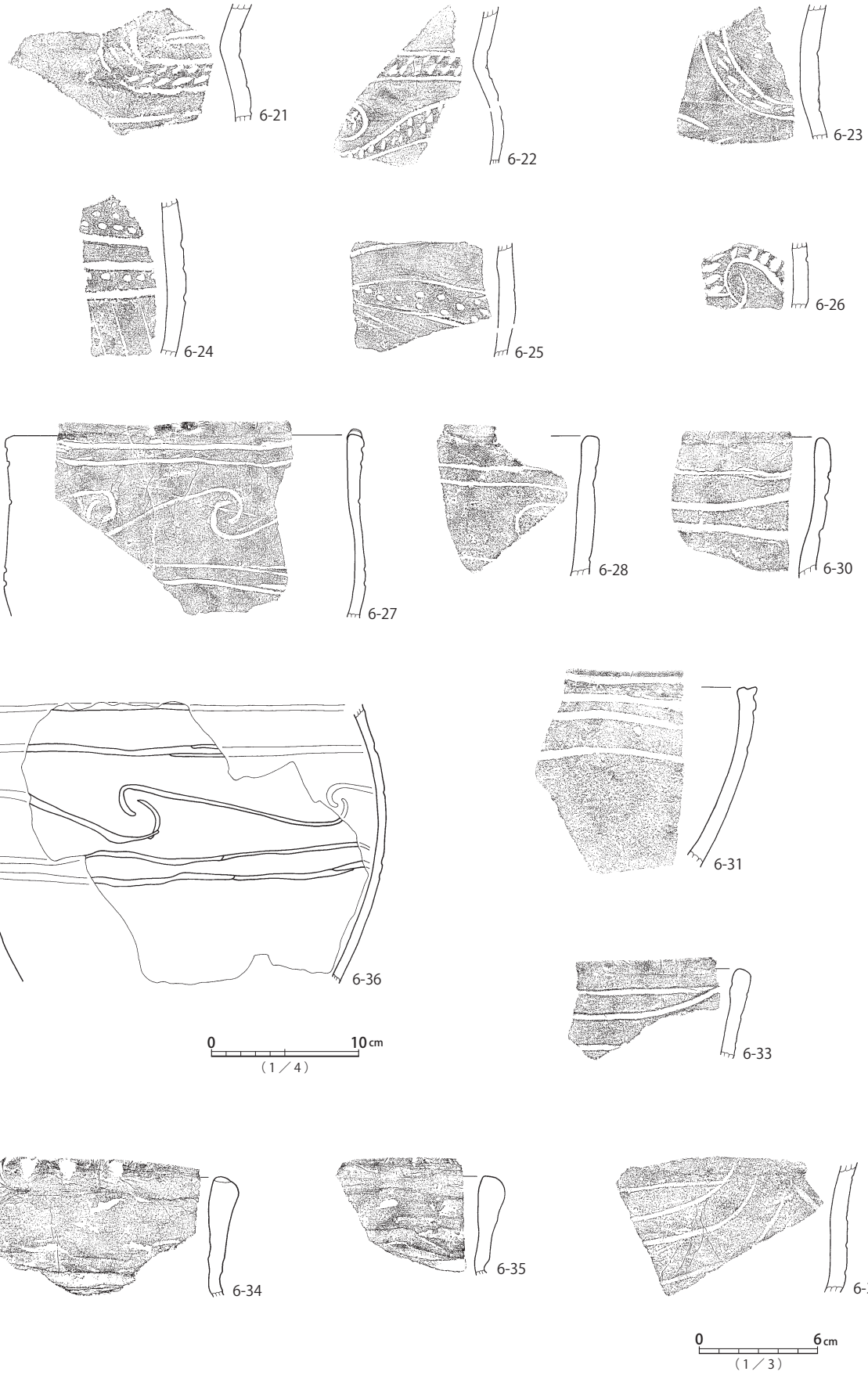


Fig.31　D区包含層 遺物実測図(22)

のものとやや異なる。口縁部文様帯には数条の平行沈線による垂線文・斜線文が施文され、胴部も簡素な貼付文が伴う横位の4条の平行沈線によって区画される。沈線文はヘラミガキによって一部沈線が磨り消されている。また、外面に炭化物が付着する。本類は安行3d式に併行するものとみられる。

8類　口縁部が幅の狭い無文帯となり、沈線による文様帯を伴う平口縁深鉢形土器
（Fig.33、PL.49）

口縁部が幅の狭い無文帯となり、胴部上半に沈線による文様帯を施文する土器群である。平口縁の深鉢形土器であり、口縁部の無文帯は肥厚するものが多い。1条ないし2条の横位の平行沈線によって口縁部と文様帯を区画する。文様帯は、基本的に弧線文や斜線文によって構成される単純なものと思われる。8−1は垂線文や斜線文・弧線文によって文様帯が構成されており、後述する14類に似た文様構成をとっている。本類は安行3d式に併行するものとみられる。

9類　口縁部に入組三叉文と列点文による文様帯を伴う波状口縁深鉢形土器（Fig.33、PL.49・50）

口縁部から頸部の文様帯に入組三叉文と列点文を施文する土器群である。本類は安行3c式〜3d式に併行するとみられる。波状口縁の深鉢形土器が主体であり、口縁部から頸部の文様帯は陰刻の入組三叉文や弧線文を施文している。胴部上半に横位の沈線を施文し、区画文とする。区画文の下部には連続する弧線文が施されるものとみられる。これらは、彫刻刀で彫り込んだような、三角形の断面を呈した深い沈線によって描かれている。文様帯や区画文には列点文が充填される。また、器面は黒色を呈するものがほとんどである。

9−1は5単位の緩い波状口縁を呈しており、波底部に小突起を有している。文様帯は弧線文の間に入組三叉文を施文しているが、一部入組三叉文と弧線文が同化している。胴部の区画文内には煩雑な列点文が充填される。9−2と比べると文様構成が粗雑化していることから、安行3d式に併行するものとみられる。

9−2も5単位の緩い波状口縁を呈しており、波底部にも小波状を有している。文様帯は大型の弧線文を施し、その間に入組三叉文を施文している。胴部上半の区画文には横位の平行沈線が施文される。文様帯の弧線文と区画文の内部には複列の列点文が充填されている。9−1よりも文様構成が精緻であることから、安行3c式に併行するものとみられる。

10類　刺突文を施文する土器（Fig.33、PL.50）

刺突文が充填される土器群である。出土量が微量で小片のため、土器の全容を窺える個体がない。10−3は後述する17類に類似した文様構成であろうか。10−5・6は沈線区画文の中に刺突文を充填しているものとみられる。10−8は紐線文系土器の類いの可能性がある。時期についてはやや疑問が残るが、安行3c式に併行するものとして考えておきたい。

11類　姥山系波状口縁深鉢形土器（Fig.34 〜 43、PL.50 〜 59）

姥山II式及びIII式の系統を引く、波状口縁を有する土器群である。深鉢形土器が主体であるが、

7 類

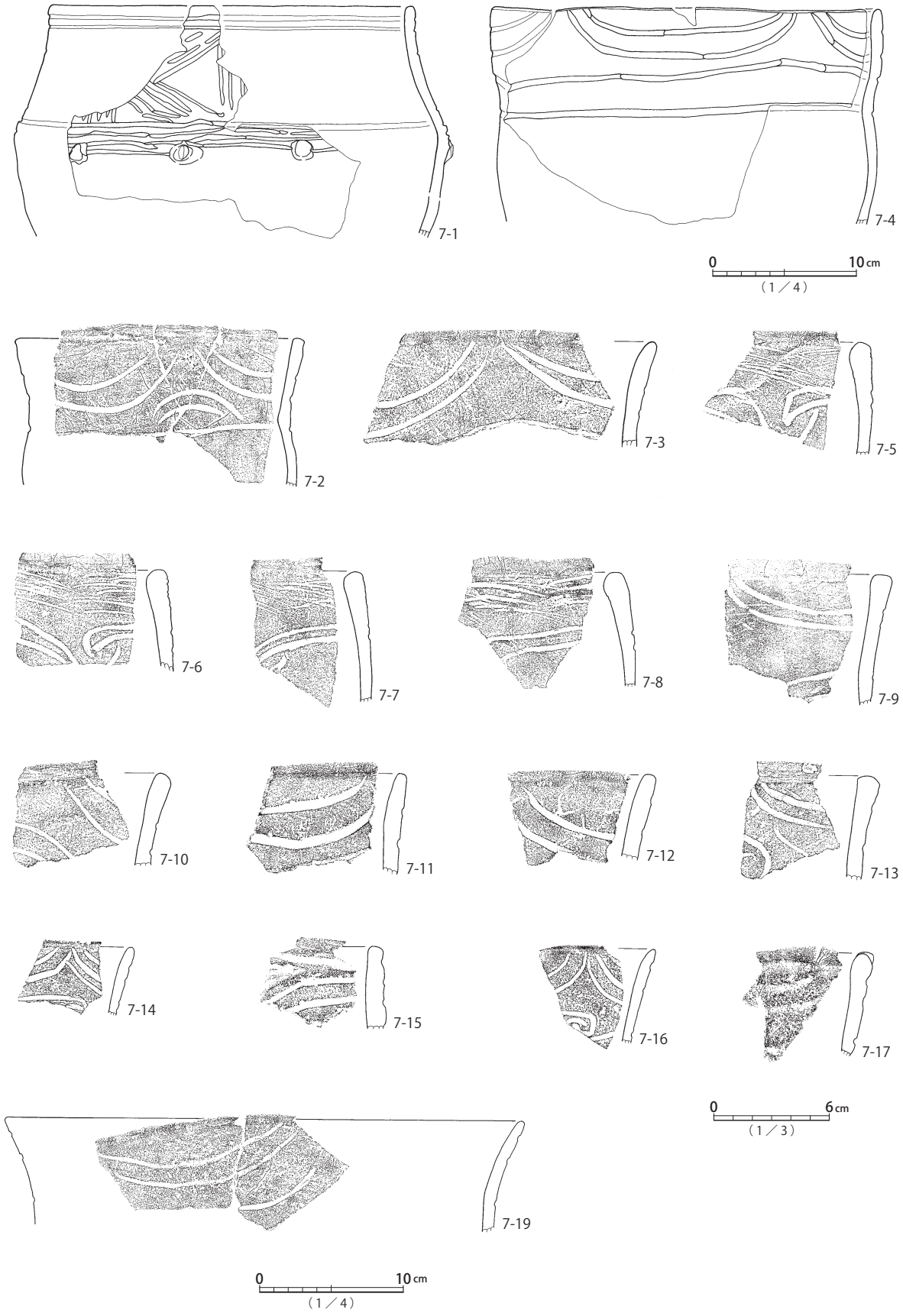
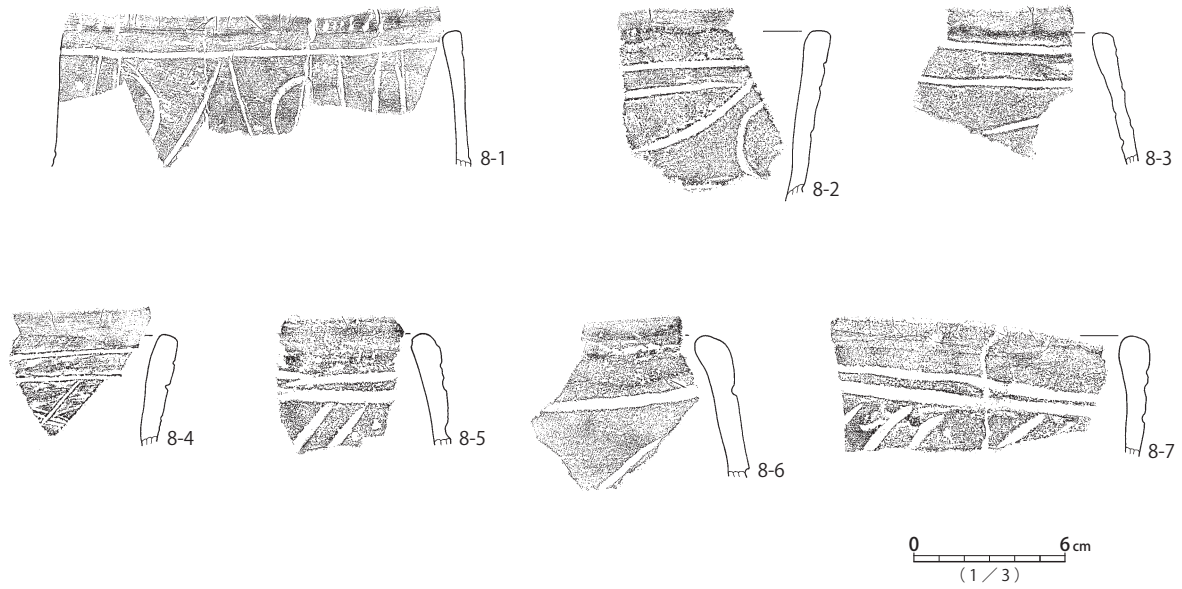
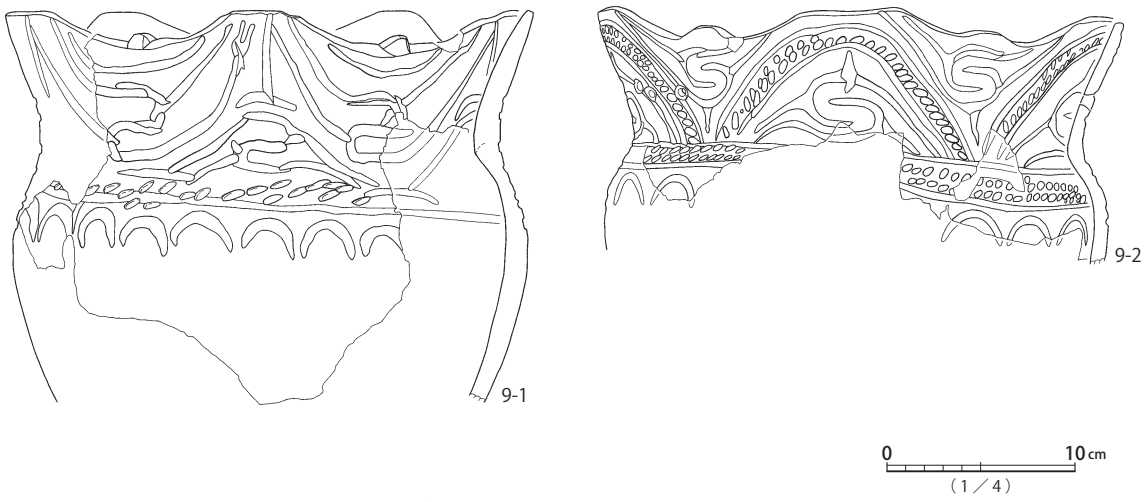


Fig.32　D区包含層 遺物実測図（23）

8 類



9 類



10 類

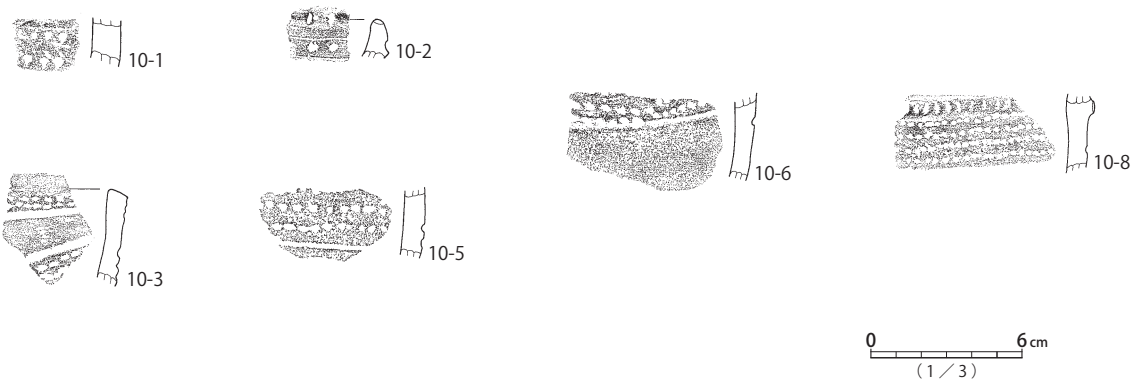


Fig.33　D区包含層 遺物実測図（24）

一部浅鉢形土器も含む。口縁部のみの破片が多く、掲載したものの中にも同一個体が一定量含まれているものと思われる。深鉢形土器は5単位の大波状口縁を呈するものが主体である。波頂部には鉢巻状貼付文が巻き付けられ、外面や内面に沈線文や押圧が施されている。さらに、鉢巻状貼付文の下部に貼付文を施文する個体も存在する。文様帯は口縁部から胴部上半にかけて施文される。口縁部には口縁形状に沿った形で沈線が施され、口縁部区画文を形成する。頸部は沈線による菱形文を主文様とし、円文や入組弧線文・垂線文内に列点文を施すものなどが縦列文様として描かれている。菱形文は縦方向に一連・一連半・二連のものが存在する。菱形文以下は横位の沈線文によって区画されるものと思われる。文様帯の無文部は丁寧なヘラミガキが施されている。器面は黒色を呈するものがほとんどであり、炭化物が付着する個体も散見される。

11-1 ～ 52・54 ～ 92・101・102・105・107 ～ 110・114 ～ 117・128 ～ 130は姥山Ⅱ式の系統を引く土器群である。口縁部区画文や菱形文、沈線区画文の内部に縄文が施される。縄文は単節縄文が主体であるが、中には無節縄文を施すものも存在する。また、縦列文様にいくつかの種類がみられる。

11-1 ～ 32・102は縦列文様に円文を施文している。円文は中心部に列点状の刺突が施されるものがほとんどであるが、11-12・25・31・102のように無文のものも散見される。11-1は菱形文内には二連の円文がみられるが、菱形文外には円文は施文されず、隣接する菱形文の沈線が接し合うような構成となっている。胴部の沈線区画文は3列施文されており、上下は単線の沈線文、中央は平行沈線文の内部に縄文を充填している。他の土器に比べて小ぶりである。11-2は菱形文外に円文を施文するが、菱形文内は入組弧線文が施されている。波頂部の鉢巻状貼付文は、内面側に2個の円文が施文される。鉢巻状貼付文の下部には扁平な貼付文が伴っている。11-9には二連の円形貼付文が施文される。11-10には鉢巻状貼付文の下部に中央を窪ませた貼付文が伴う。11-11には長大なブタ鼻状の貼付文がみられる。11-15・18・30は縦列文様に三連の円文が施文されている。11-19は菱形文内の円文が入組文状になっている。もしかすると円文ではない可能性もあるが、小片で文様の全体像がつかめないため当群に掲載した。また、平行沈線による区画文の内部には縄文とともに6条2列の対向する列点文が施文されている。11-24は口唇部が無文帯となり、下部に縄文を充填した平行沈線文が施文されている。11-28は菱形文外に円文を施文するが、菱形文内は枠状文に置き換わっている。11-30には菱形文外の円文の下部に刺突文が施されている。

11-33 ～ 52・54・55は縦列文様に入組弧線文を施文している。入組弧線文は弧線が縦方向に組むものと横方向に組むものが存在する。また、入組弧線文と菱形文の斜線が同化しているものも散見される。11-33は鉢巻状貼付文が波頂部まで覆い、2つの突出部を持った波状部を形成する。鉢巻状貼付文の下部には押圧を施したU字状の貼付文が伴っている。11-34は波頂部に沈線を施した突起状貼付文を施文する。また、頸部の菱形文を形成する斜線文が縦位の蛇行線文に置き換わっており、文様構成がやや崩れている。11-45も同様の文様構成をとるものと思われ、11-33と同一個体の可能性がある。11-35は他のものと比べてやや小ぶりな波状部を有している。文様帯の入組弧線文は、縄文施文前のヘラミガキによって一部が磨り消されている。11-36は文様帯内の縄文がやや煩雑に施文されている。11-38・39は波頂部の鉢巻状貼付文の下部に馬蹄形の貼付文が伴っている。貼付文の表面と周囲には沈線と刺突文が施されており、同一個体の可能性が考えられる。11-

40は波頂部の鉢巻状貼付文が表面まで廻らずに内側のみに貼り付けられている。また、文様帯の菱形文も三角形のような形状を呈しているものと思われる。11－41は波頂部の鉢巻状貼付文がみられない。11－55は11－35と同様のやや小ぶりな波状部を有している。

11－56 ～ 58・60 ～ 72・129は縦列文様に垂線文や長大な馬蹄状の沈線文を施文し、内部に列点文を充填している。垂線文を基調とする縦列文様は11－56・58・60 ～ 65が該当する。これらは縦列文様が菱形文を縦断して口縁区画文から胴部区画文にわたり施文されている。内部の列点文は単列と複列のものがみられる。また、11－56・58は、菱形文外の縦列文様に、菱形文の斜線文と同化した入組弧線文が施文されており、入組弧線文の部分に縄文が施されている。一方、11－60は円文を施文し、円文の部分に縄文が施される。11－57・70に代表される長大な馬蹄状の沈線による縦列文様を有するものは、上部は菱形文を貫通せず、下部のみ胴部区画文まで達する。菱形文外の縦列文様も同様に馬蹄状沈線文と列点文が使用されており、胴部区画文からのびている。列点文は単列のものが充填される。また、11－66 ～ 69・129のように縦列文様の内部を無文もしくは縄文を施文するものも存在する。11－71・72は縦列文様がU字もしくは枠状を呈している可能性がある。

11－73 ～ 75・77は浅鉢形土器である。緩やかな波状口縁を呈しており、4単位に復元されるものと思われる。波頂部に複数の鉢巻状貼付文が施文され、内面には弧線などの沈線文が施されている。11－77は波底部にも鉢巻状の小突起が貼り付けられている。

11－76・78 ～ 92・101・105・107 ～ 110・114 ～ 117・128・130は上記の土器群に含められない個体である。11－78は菱形文外の縦列文様が楕円形の刺突文になっている。11－76・80・82 ～ 84・130は入組弧線文による縦列文様が一部もしくは全て蛇行線文に変化している。11－81は縦列文様の入組弧線文が太沈線によって描かれている。11－85の縦列文様は円文の可能性があるが、小片のため詳細は不明である。11－86は菱形文がみられず、垂線文による縦列文様が少なくとも2条施文されており、浅鉢形土器の可能性もある。11－87・88は菱形文外の縦列文様に3 ～ 4点の刺突文を施している。11－89は菱形文外の縦列文様に小型のブタ鼻状貼付文を施文するとともに、上下に対向する三角文を施文し、刺突文を充填している。11－90は口縁区画文と菱形文の間に刺突文を伴った円形と思われる沈線区画文が存在する。11－91は波頂部に円筒状の貼付文を施している。縦列文様は連接した円文を施文し、内部に縄文を充填している。11－92も縦列文様が連続した円文になっている。また、口縁部区画文がなくなり、菱形文を構成する斜線文が蛇行沈線文になっているとみられる。11－107・108は縦列文様が入組三叉文になっている。11－116・117は波頂部の鉢巻状貼付文がT字状を呈し、刺突文を伴っている。11－128は波頂部が二股に分かれている。

11－59・93 ～ 100・103・104・106・111 ～ 113・118 ～ 127・131は姥山Ⅲ式の系譜を引く土器群である。文様帯に縄文は施文されず、無文となる。中には刺突文を充填するものも存在する。縦列文様は円文と入組弧線文がみられる。11－93は口縁の波状部が欠損する。胴部は横位の平行沈線を2条施文して区画文とし、区画文内外に入組弧線文が施文されている。11－94は小ぶりの深鉢形土器である。波頂部の貼付文は鉢巻状にならず、小突起状になっている。2段の菱形文と縦列文様に刺突を伴わない円文が施文されているが、菱形文は三角形状になっているものもみられ、施文が粗雑化している。なお、沈線文施文後にヘラミガキによって菱形文や円文の一部が磨り消されている。11－95は菱形文が2重の斜線文によって描き出されている。また、11－95 ～ 99には波頂部の鉢巻

11 類

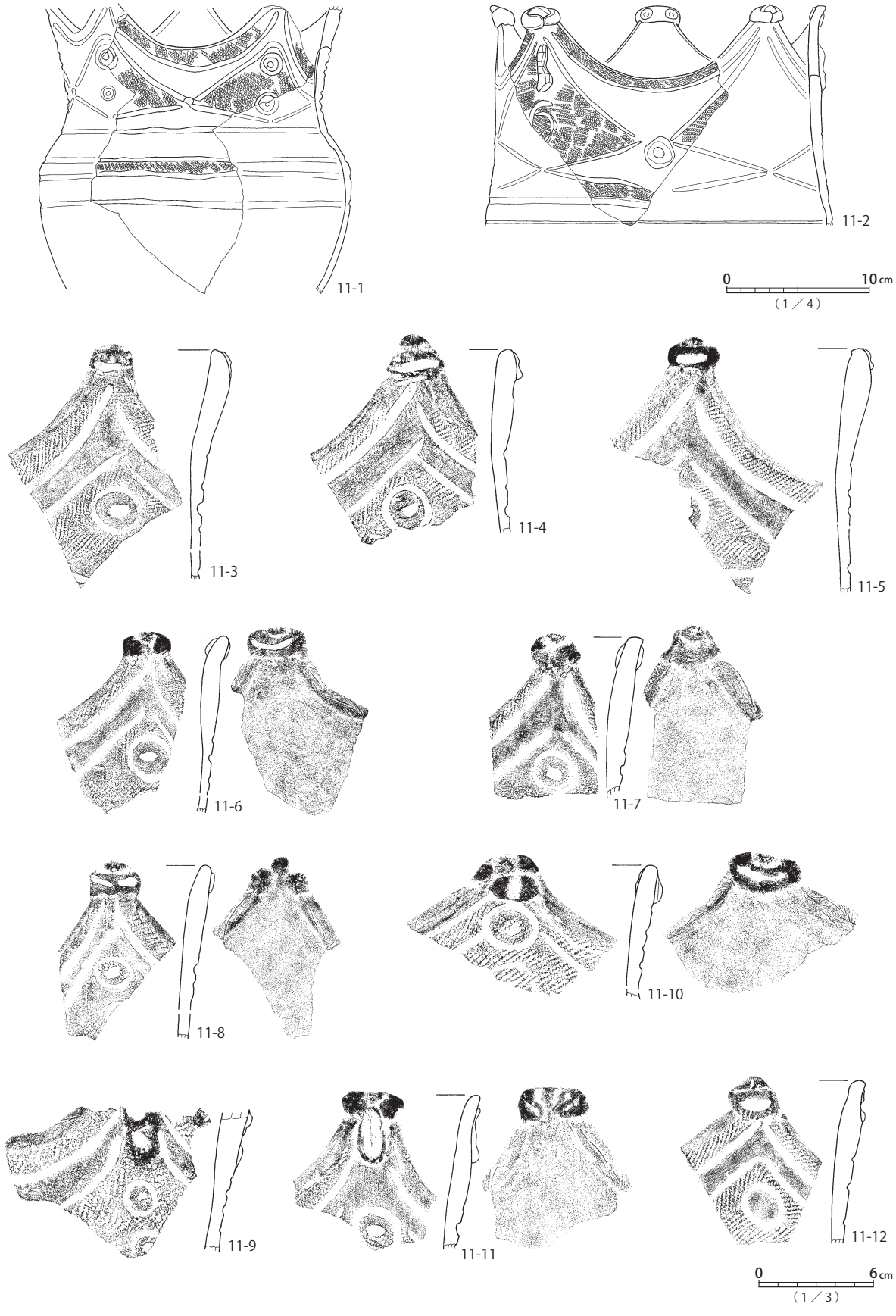


Fig.34　D区包含層 遺物実測図（25）

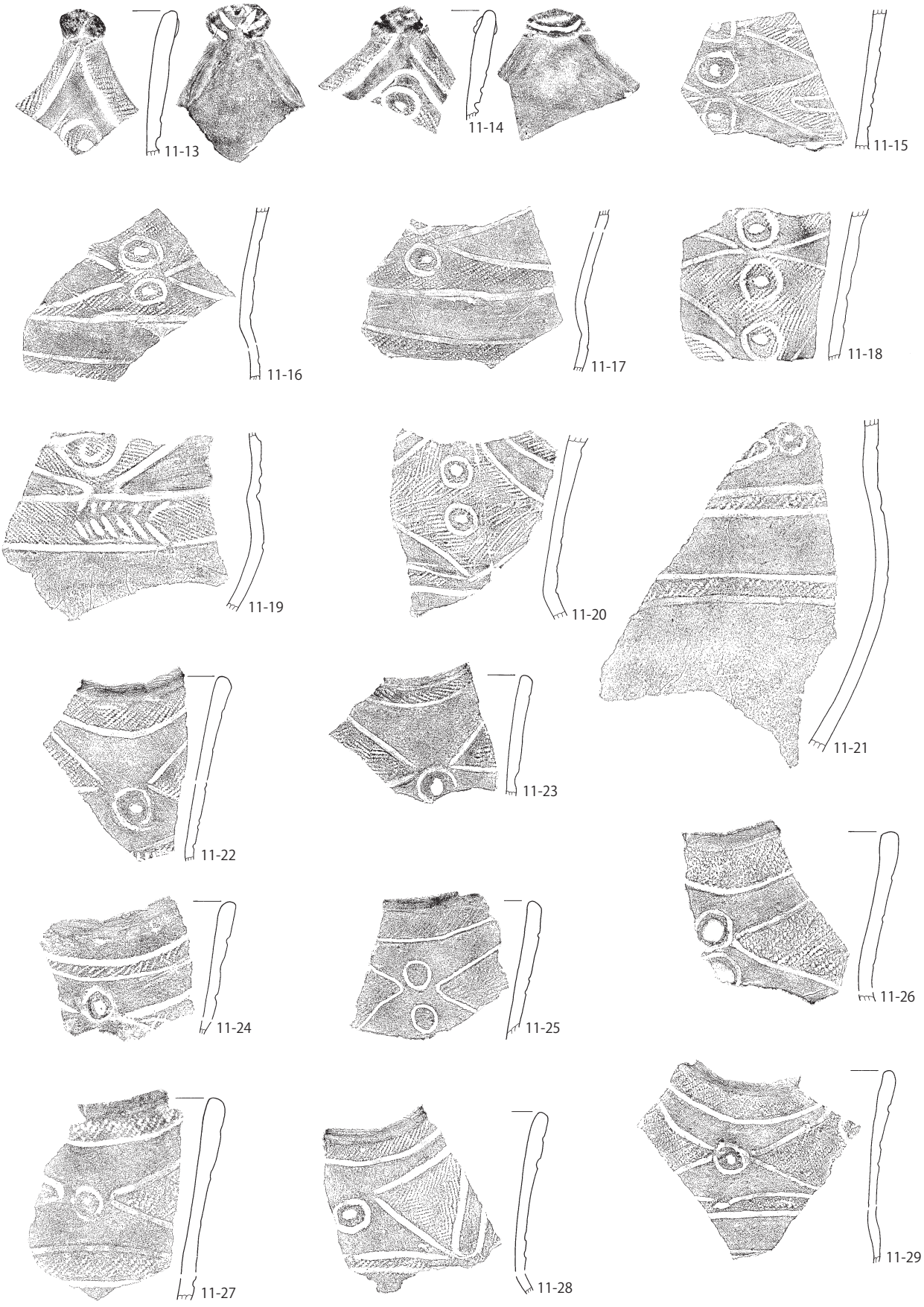


Fig.35　D区包含層 遺物実測図（26）

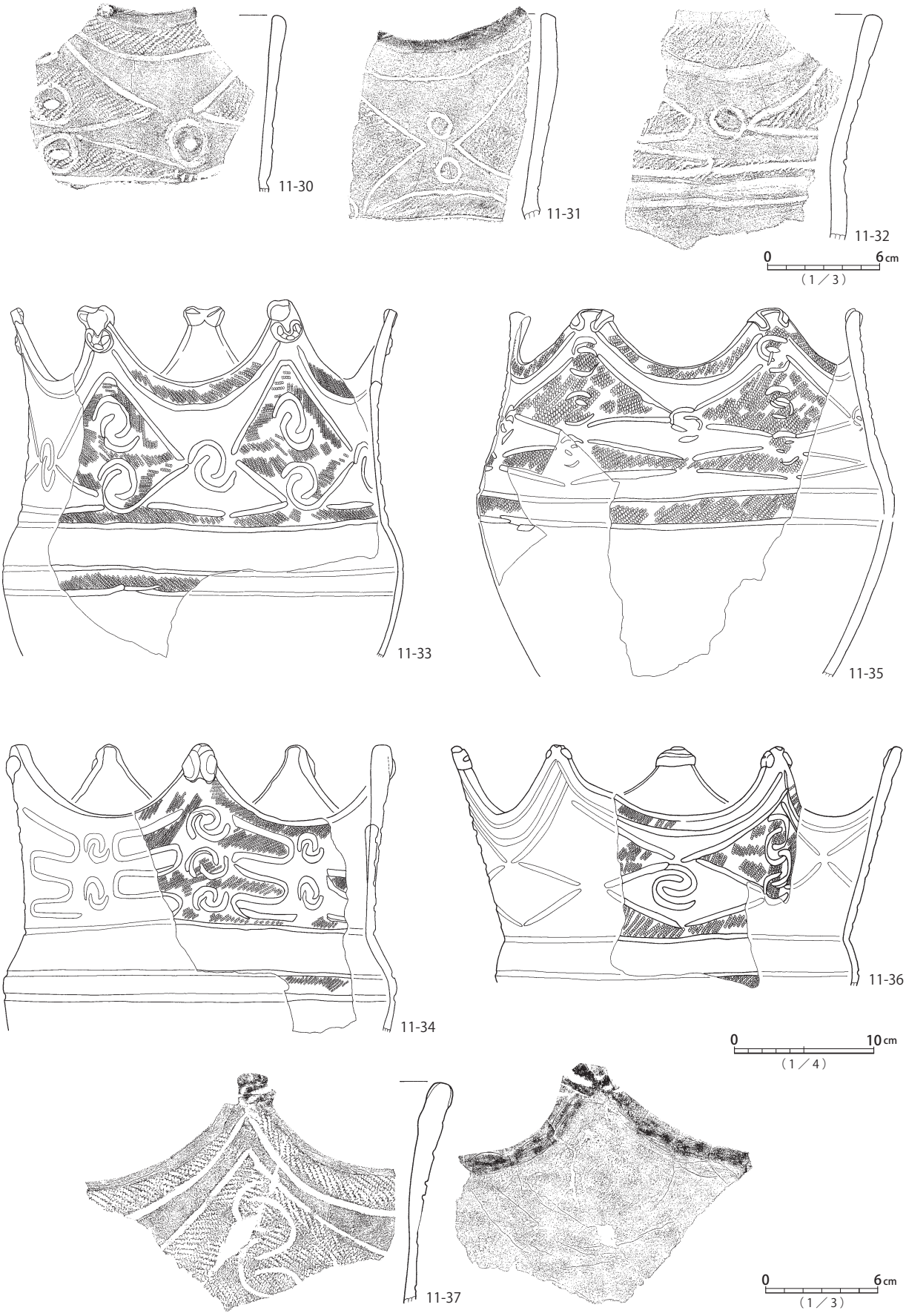


Fig.36　D区包含層 遺物実測図（27）

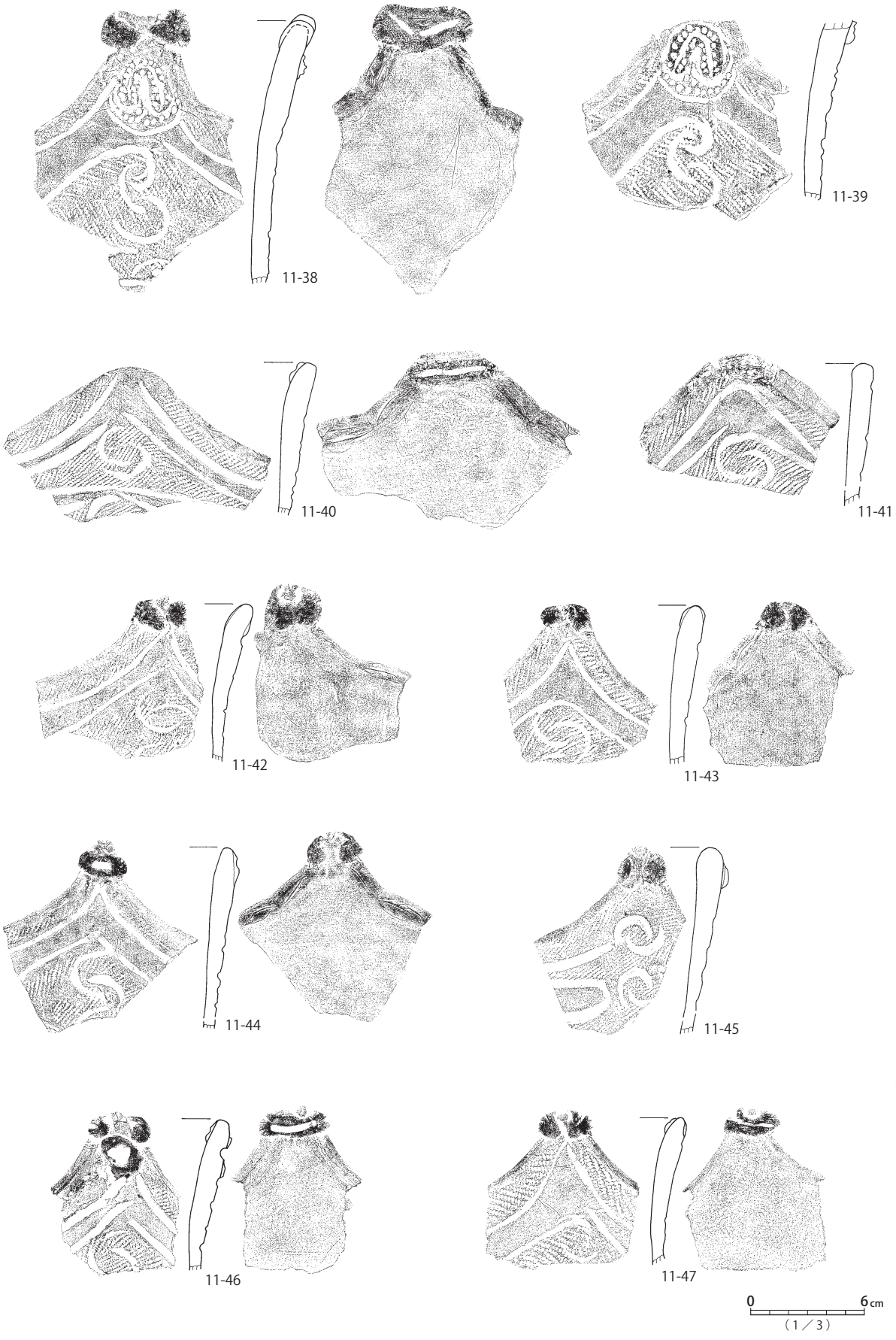


Fig.37　D区包含層 遺物実測図(28)

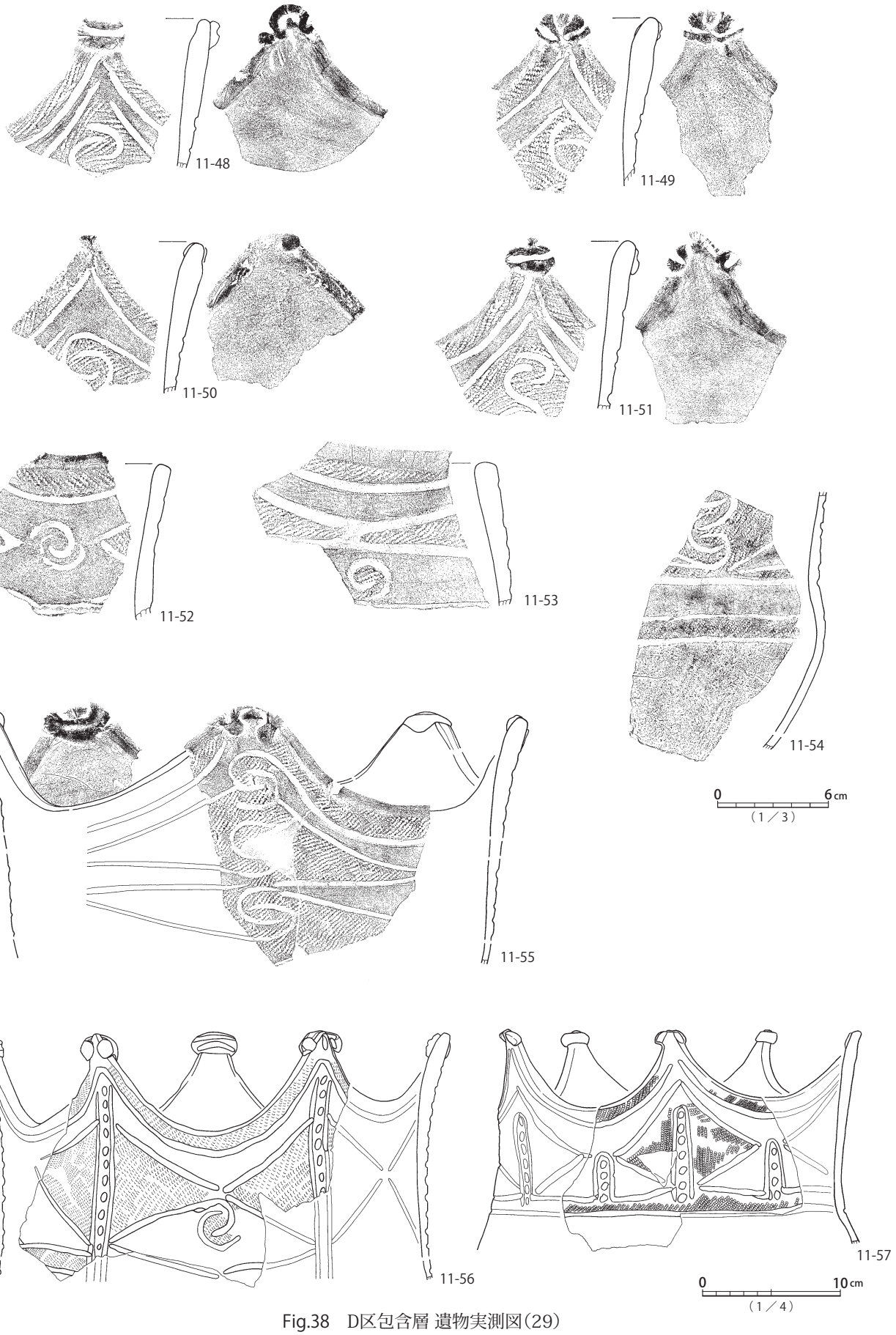


Fig.38　D区包含層 遺物実測図(29)

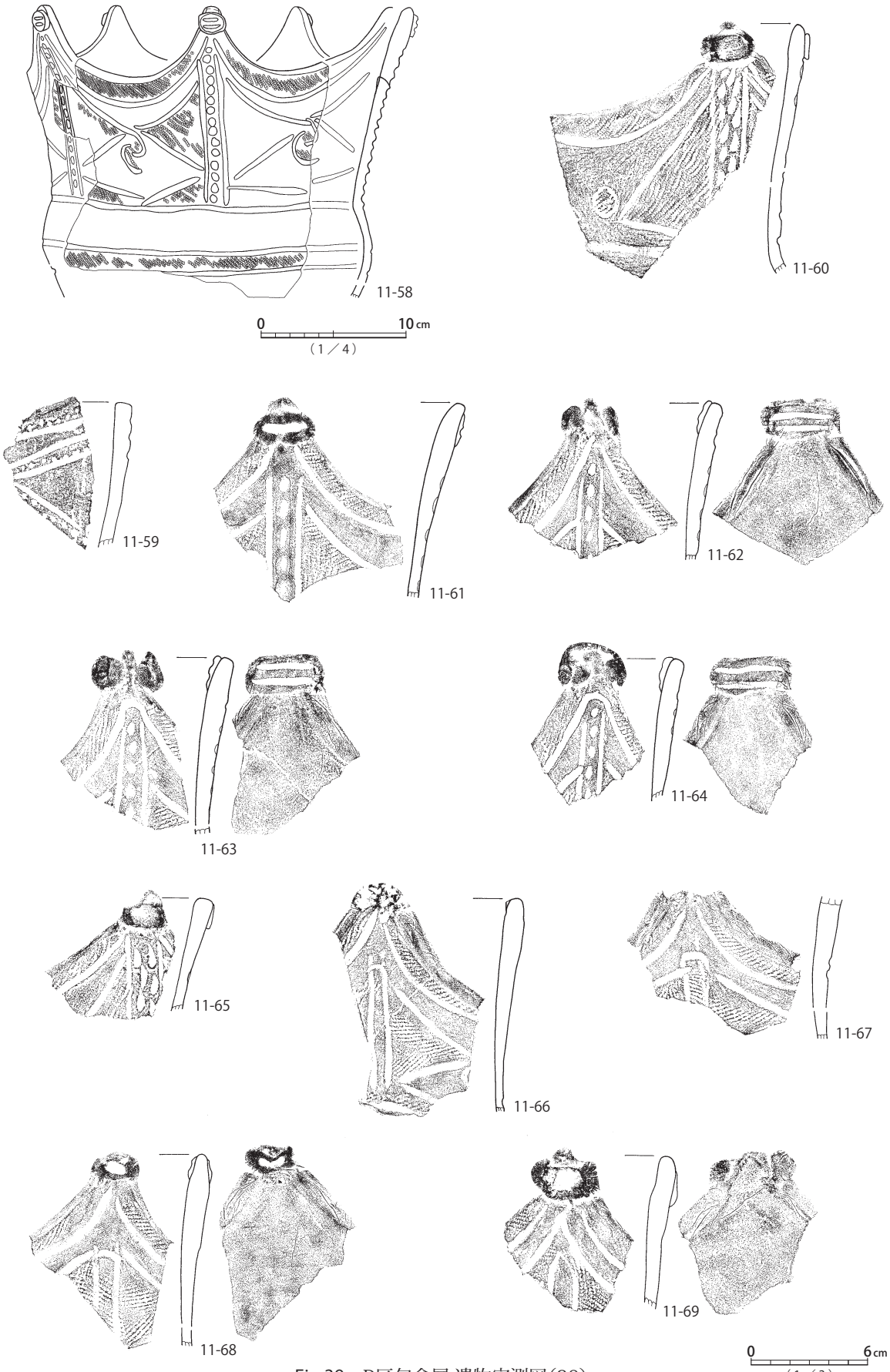


Fig.39　D区包含層 遺物実測図(30)

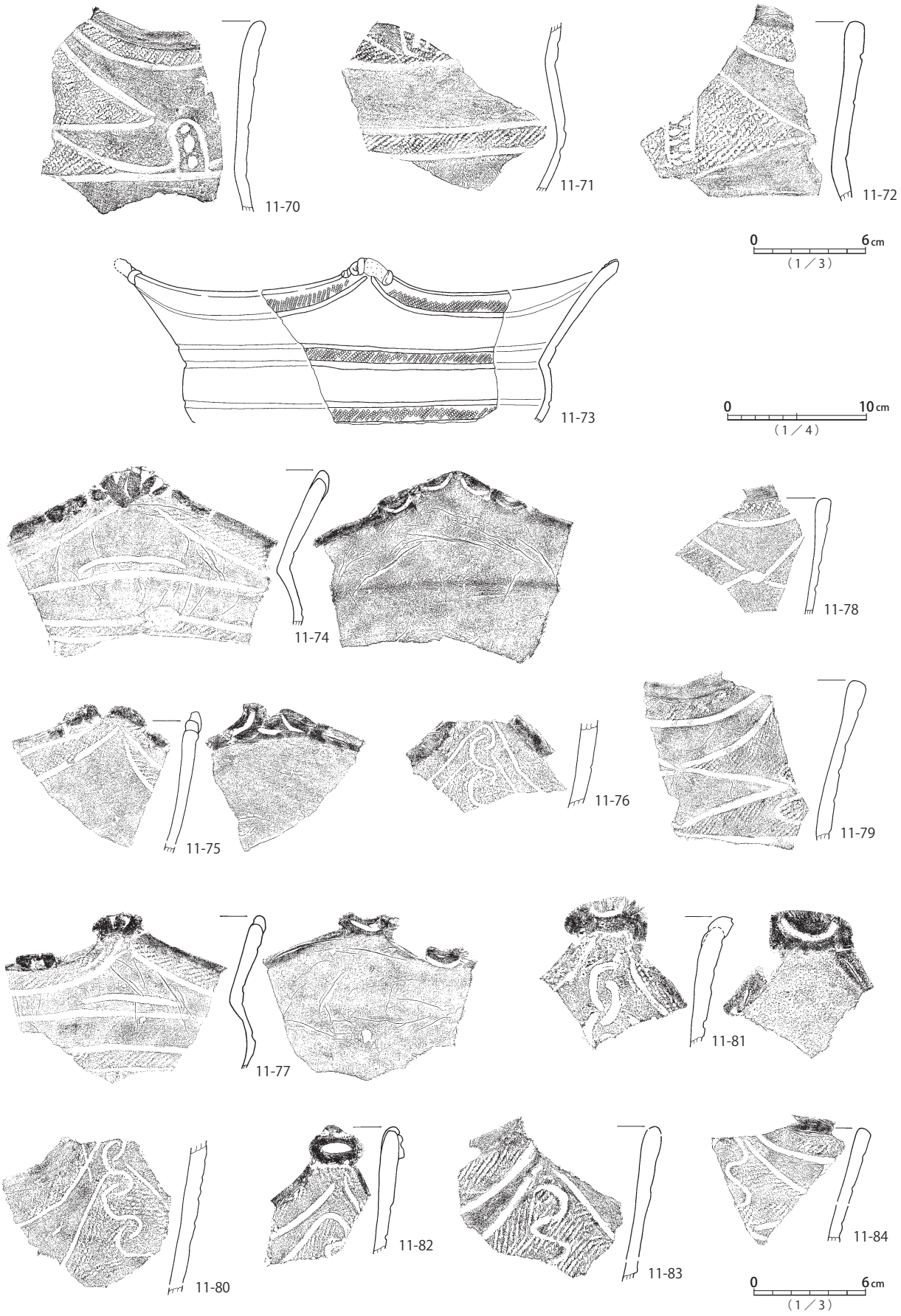


Fig.40　D区包含層 遺物実測図(31)

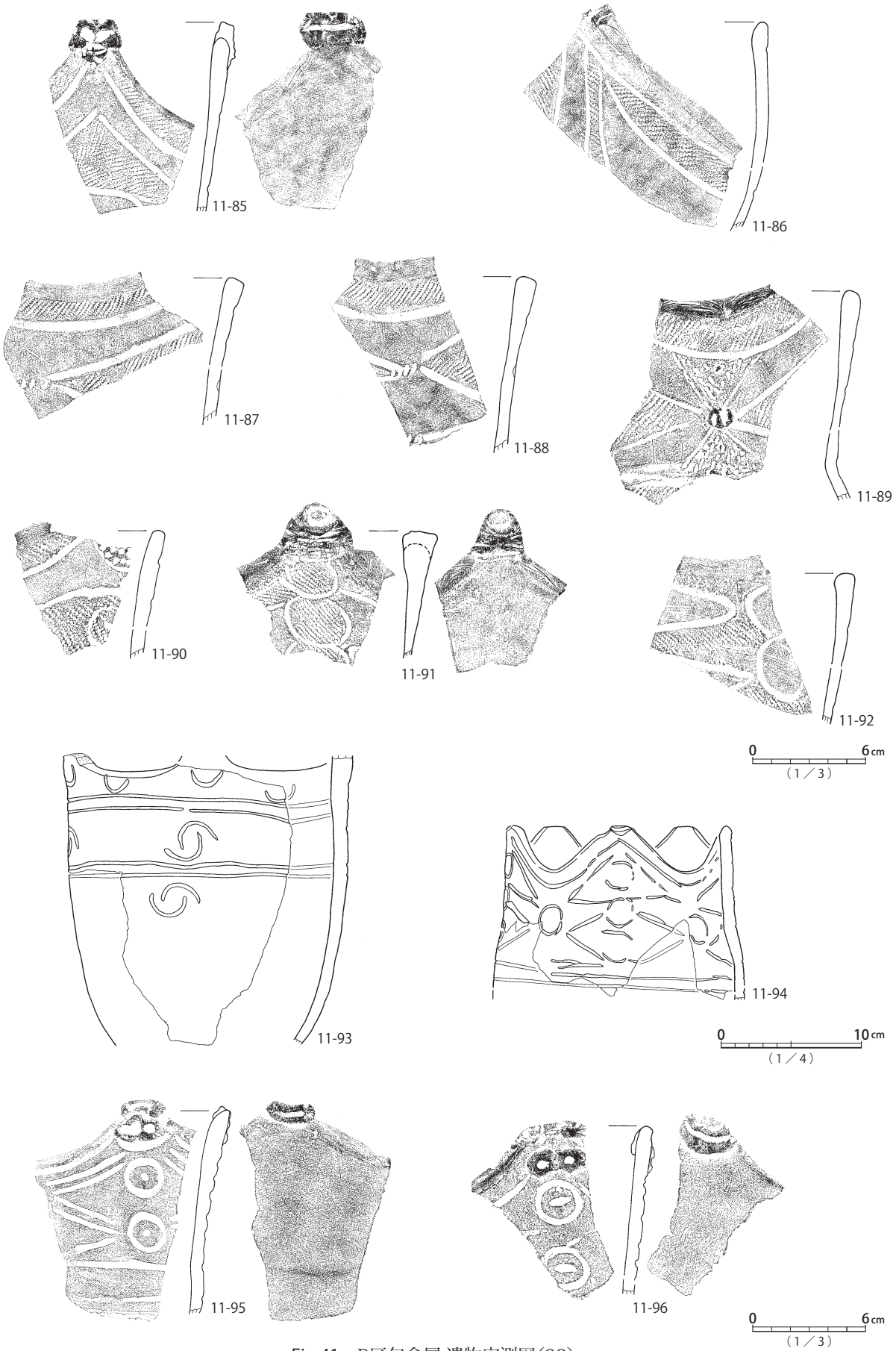


Fig.41　D区包含層 遺物実測図(32)

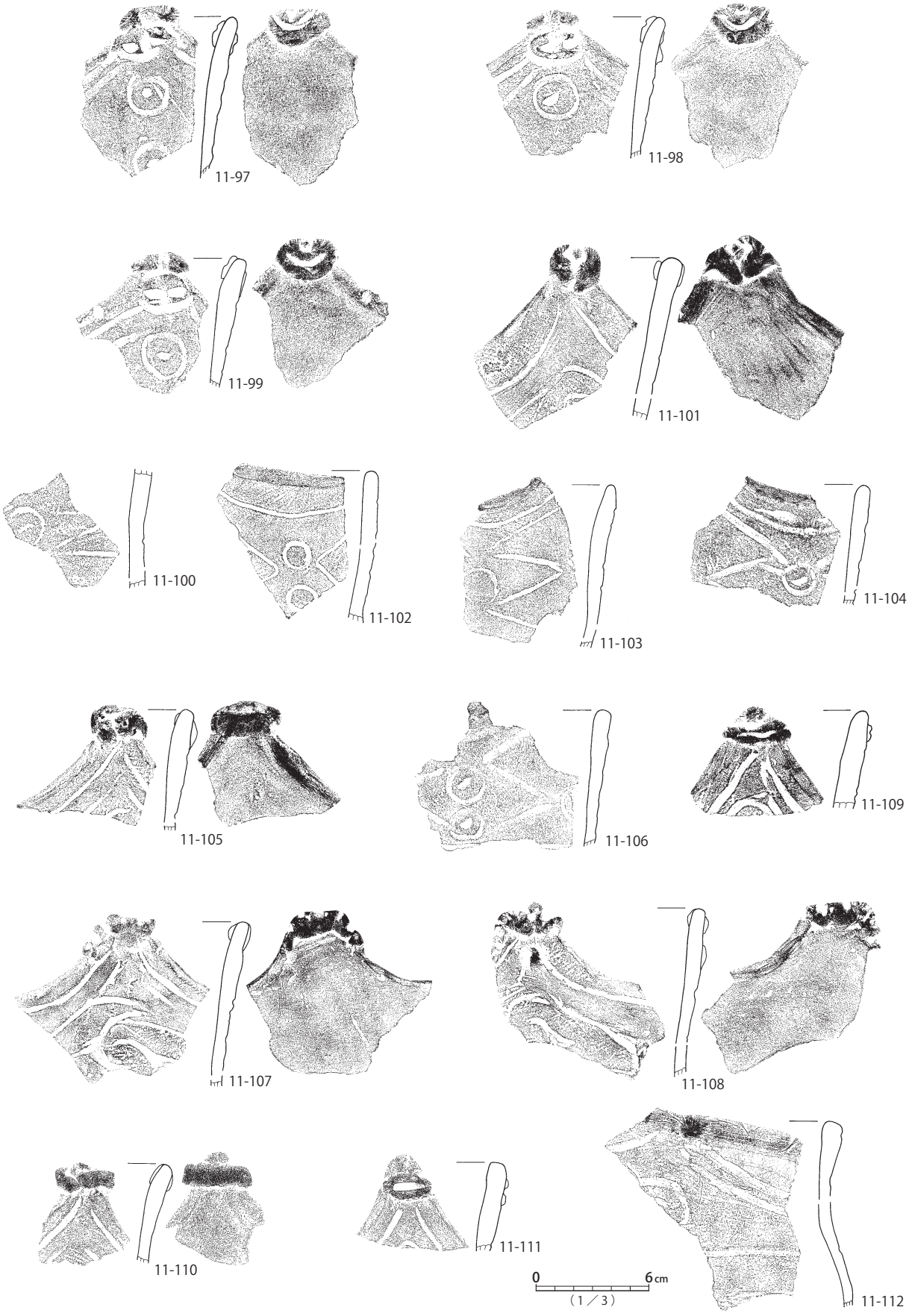


Fig.42　D区包含層 遺物実測図(33)

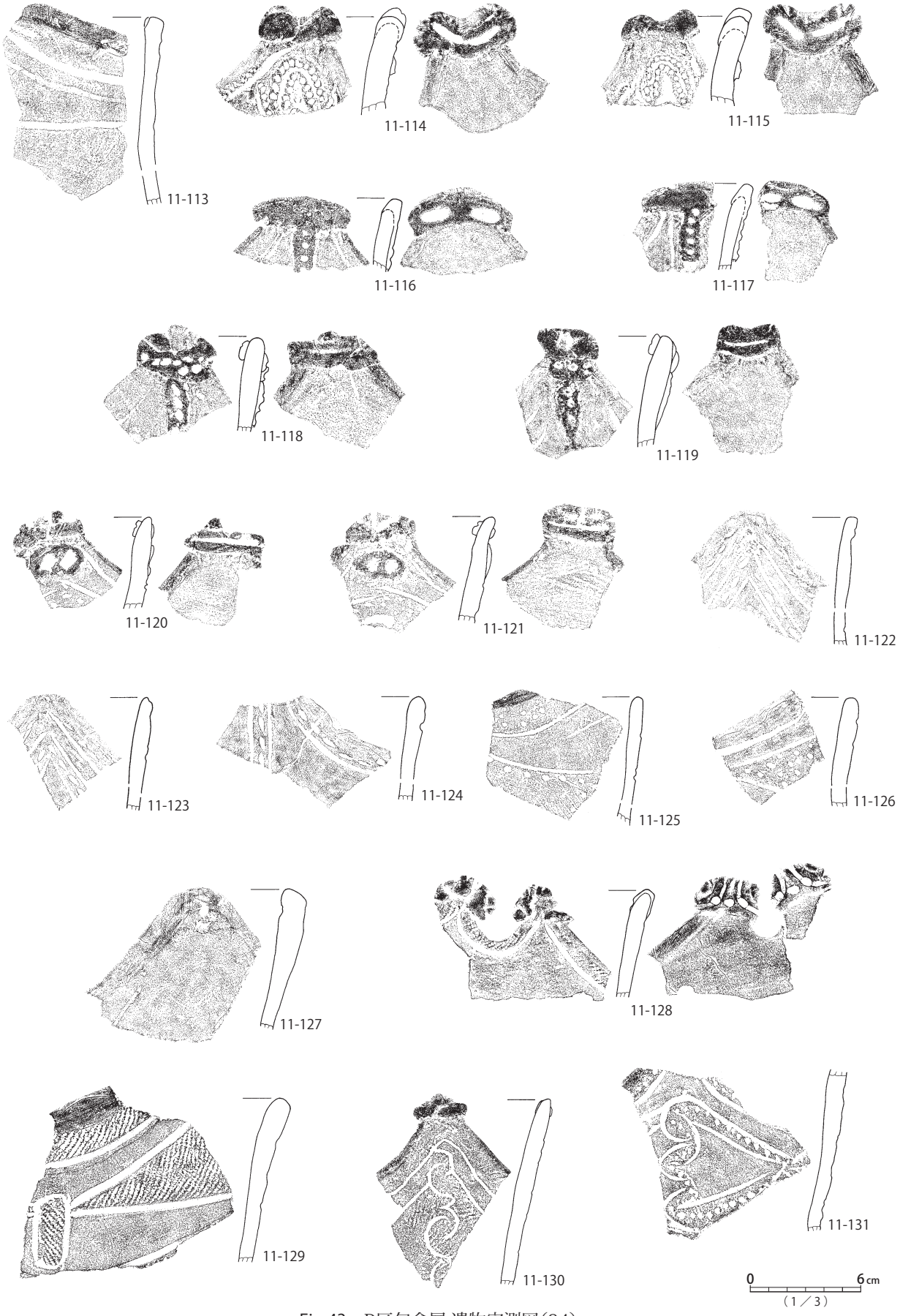


Fig.43　D区包含層 遺物実測図(34)

状貼付文の下部に、二連の刺突を施した貼付文が施文されている。11－118・119は波頂部の鉢巻状貼付文の下部に刺突を施した棒状の貼付文が施文されている。11－59・120 ～ 126は文様帯内に刺突文もしくは列点文を充填している。11－59・122・123は菱形文を2重の斜線文で描き出しており、その内部に列点文を充填している。11－125は菱形文内に列点文とともに細密沈線が施されている。11－131も菱形文を2重の斜線文で描き出しており、その内部に列点文を充填している。また、縦列文様は一部が菱形文と同化した入組弧線文を施文している。

なお、11－53は「の」の字状に変容した入組弧線文が施文されていることから、後述する12類に属する前浦2式（松丸2012）の深鉢形土器とみられる。

12類　前浦式土器（Fig.44・45、PL.59・60）

前浦式土器に比定される土器群である。本類で掲載した個体のほかに、2－4と11－53が該当する。器形は口縁部が肥厚するものがほとんどであり、口唇部に小突起状の貼付文が伴っている。12－1・2は張りの強い球状の胴部を有する。文様帯は太沈線によって描き出されており、口縁部から胴部上半に文様を施文し、内部に縄文を充填している。

12－1は口縁部と胴部上半に対向弧線文を施し、その内部に入組三叉文を施文する。胴部の最大径部には縄文を充填した横位の平行沈線を施文し、区画文としている。12－6も同様の文様構成とみられる。12－3は上記のものほど精緻ではないが、類似した文様構成と思われる。12－2は対向弧線文を施し、内部に入組三叉文を施文するとともに、入組三叉文の上部に陰刻の三叉文を描いている。胴部最大径部には縄文を充填した横位の平行沈線を施文し、区画文としている。12－13は陰刻の三叉文は伴わないが、12－3と類似した文様構成だと思われる。また、小片であり文様構成の全体像はつかめないが、12－7・8・15 ～ 19・21・26・27も入組三叉文を有する可能性がある。これらは前浦1式（松丸2012）に属するものと思われる。

12－9 ～ 11や2－4・11－53は文様帯の入組三叉文が「の」の字状に変容している。また、12－12は背向弧線文になっている。これらは前浦2式（松丸2012）に属するものと思われる。

13類　長大な枠状文を伴う平口縁深鉢形土器（Fig.45 ～ 49、PL.25・61 ～ 64）

長大な枠状文が施文される無文の平口縁深鉢形土器の一群である。器形は口縁部がゆるく内弯する砲弾状の形態を呈し、口唇部はやや肥厚するものが多い。口唇部等に貼付文はみられない。口縁部から胴部は太沈線によって描き出された上下2段の長大な枠状文が施文される。枠状文は楕円形を呈するものがほとんどであるが、13－2などのように長方形状のものも散見される。13－29は枠状文を囲うように弧線文が施文されているが、このような文様構成を持つものはほとんど存在しない。無文部はヘラミガキが施され、枠状文の沈線の一部が磨り消されてしまう個体も存在する。枠状文の下部は、13－1のように無文になるものと、13－7・9のように、1段の縦もしくは斜め横方向の条線が施文されるものがみられる。完形の個体が13－1以外存在しないことから明確には述べられないが、条線を施文する個体が多い印象を受ける。土器の表面は黒色を呈するものが多く、器面に炭化物が残存する個体もみられた。文様構成が類似する4類枠状文の一群と比べると、本類は枠状文が長大化している。また、枠状文の沈線は、工具による施文時の継ぎ目が明確に分かるものが

多い。さらに、無文部のヘラミガキが粗雑な印象を受ける。13-1は土器全体が復元できる個体であるが、底部が非常に小型で歪んでおり、自立することは不可能であったと思われる。本類は姥山Ⅱ式から姥山Ⅲ式に併行するものとみられる。

14類　文様帯に細密沈線を充填する土器（Fig.49・50、PL.64 ～ 66）

沈線による文様帯の内部に細密沈線を充填する土器群である。本類で掲載した土器の細密沈線は先端の細い棒状工具によって施文されているものと思われる。本類は安行3b式～ 3c式に併行するものとみられる。以下、文様構成と器形によって3種類に分けられる。

14-1 ～ 3・5 ～ 7・10 ～ 25・32・33は砲弾状の平口縁深鉢形土器である。小片の個体が多く土器の全容はつかみにくいが、14-1のように胴長のものが基本になるとみられる。また、14-15 ～ 17・20・21のように胴部に括れを持つものも存在する。14-2 ～ 8・13・33は口唇部にキザミを施している。口縁部は右斜め横・左斜め横・綾杉状の細密沈線が充填される。その下部の横位の平行沈線による区画内は無文とし、胴部には、垂線文と弧線文を組み合わせた沈線文様が施される。垂線文と弧線文内には細密沈線による綾杉文が充填される。14-1・2・15・16から、胴部文様帯は左右・上下対称の文様となり、縦方向に2段ないし3段の文様帯が描かれるものと思われる。また、胴部の文様帯を区画する横位の沈線には、一部の個体に刺突文が伴っている。14-11・17にはブタ鼻状貼付文が施文され、14-11には口唇部に小突起が伴っている。

14-4・9・29 ～ 31は、器形や口縁部の文様は上記のグループと同様であるが、胴部文様帯が横位の平行沈線による区画文のみになっている。14-4・9・29は細密沈線による綾杉文と無文の文様区画を交互に施文している。14-29には沈線上にブタ鼻状貼付文が伴っている。14-30は口縁部に縦3段の工具による押圧を充填し、その下の区画に細密沈線による綾杉文、さらにその下の区画に縦4段の工具による押圧を施文している。

14-26・27や1-71は平口縁で、頸部が「く」の字状に屈曲した形状をとっている。14-26・1-71は口唇部に斜め方向の細密沈線を施文する。1-27は頸部の平行沈線による区画内を無文とするが、14-26は無文帯の下部に細密沈線を充填した区画文を有する。14-27は口縁部を無文とし、頸部の区画文内に細密沈線による綾杉文を施文している。これらは胴部に入組弧線文を施文するとともに、細密沈線による綾杉文を充填している。

15類　紐線文系土器

本類は粘土紐に押引状の指頭押圧を加えた紐線文を、口縁部と胴部に施文した土器群である。器形は口唇部が肥厚する平口縁深鉢形土器であり、砲弾状を呈するものが主体であるが、頸部が緩く括れ、口縁が開く器形のものも存在する。以下、口縁部と胴部の紐線文によって区画された口縁部文様帯に施文される文様から6種類に細別する。

15a類　口縁部文様帯に地文の条線のみを施文する土器（Fig.51 ～ 63、PL.67 ～ 78）

口縁部文様帯に地文の条線のみが施文された紐線文系土器の一群である。口縁部と胴部の紐線文は、押引状の指頭押圧を左から右へ施文するものを基本としているが、逆方向のものもみられる。

12類

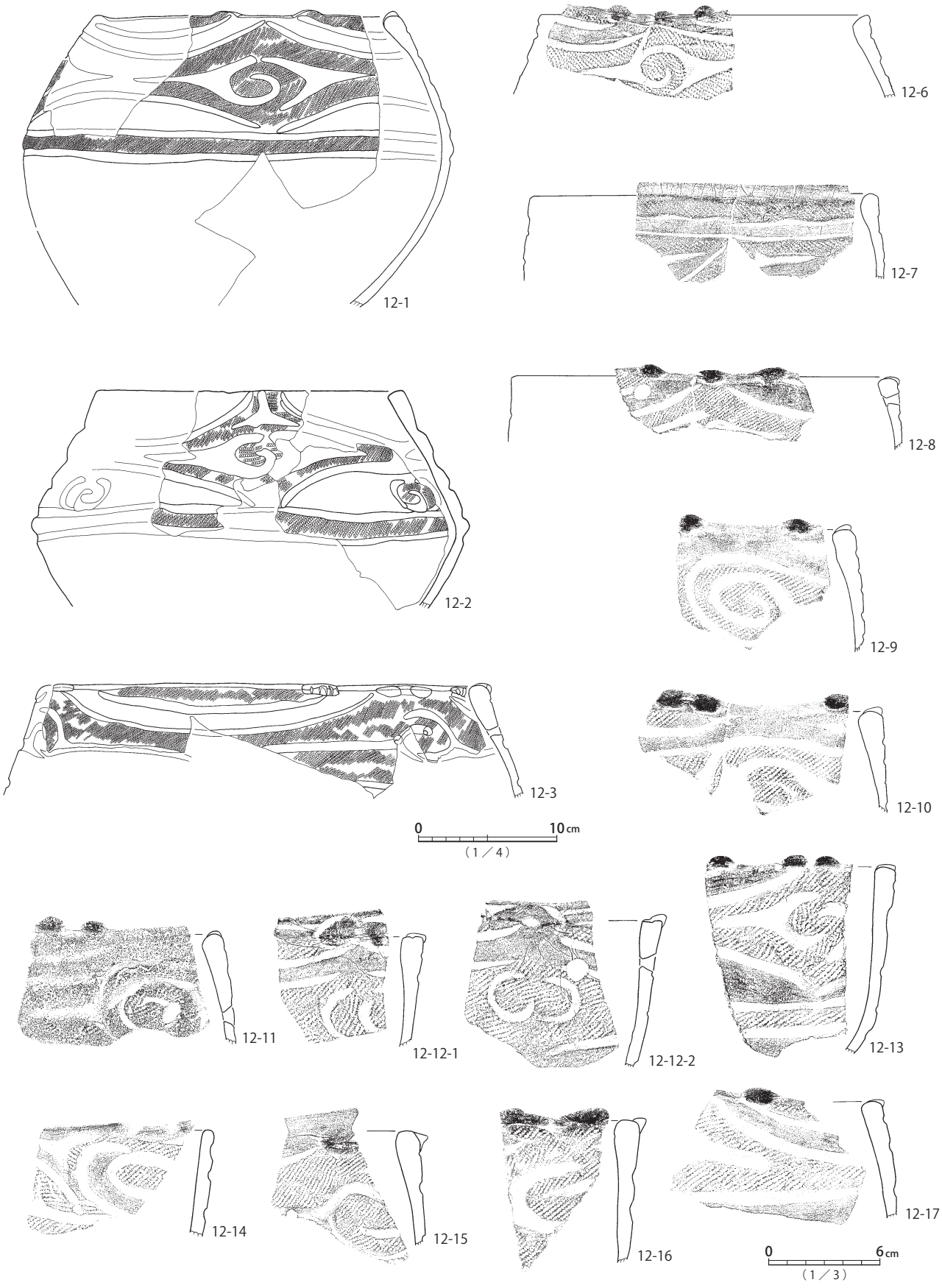


Fig.44　D区包含層 遺物実測図(35)

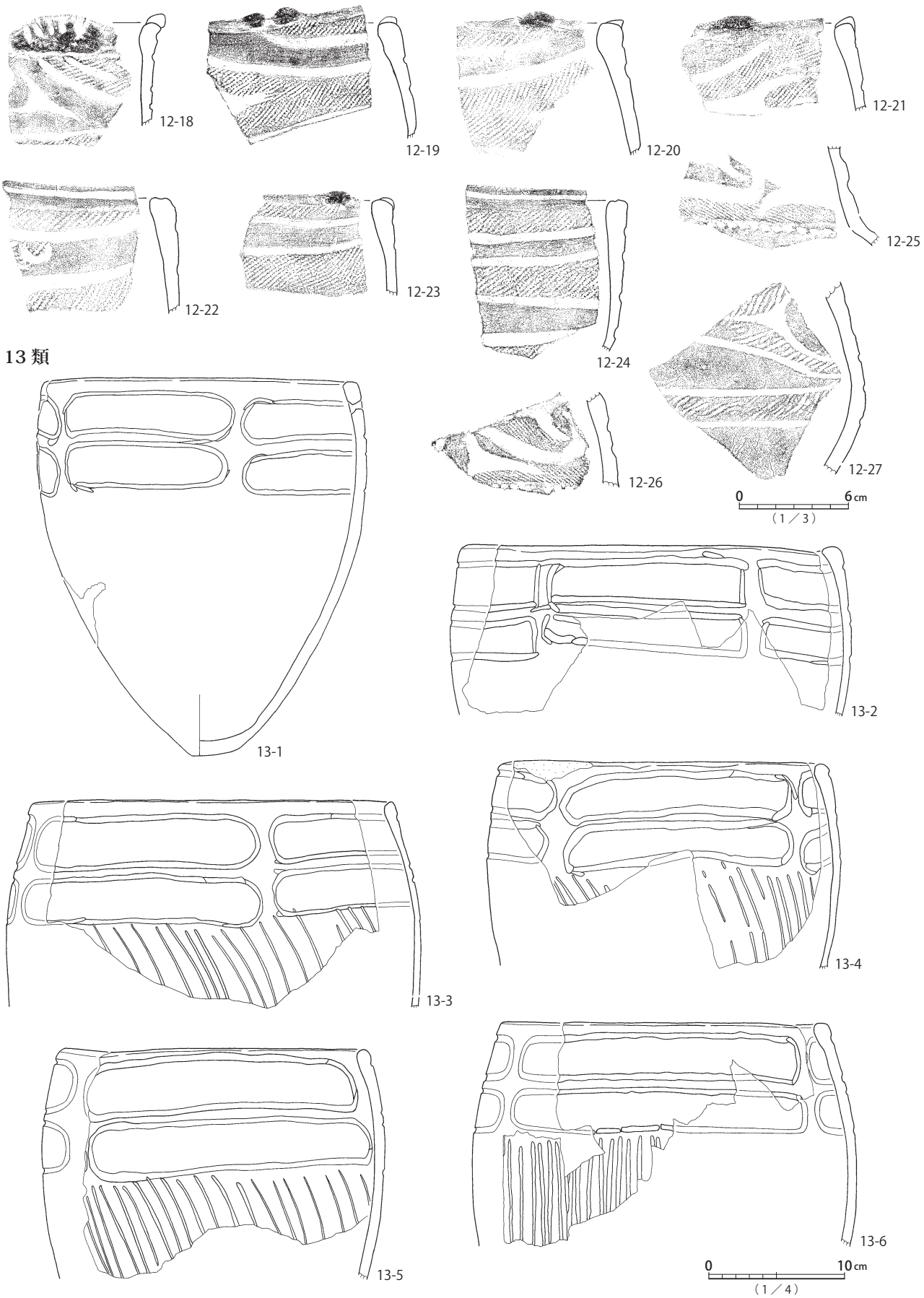


Fig.45　D区包含層 遺物実測図(36)

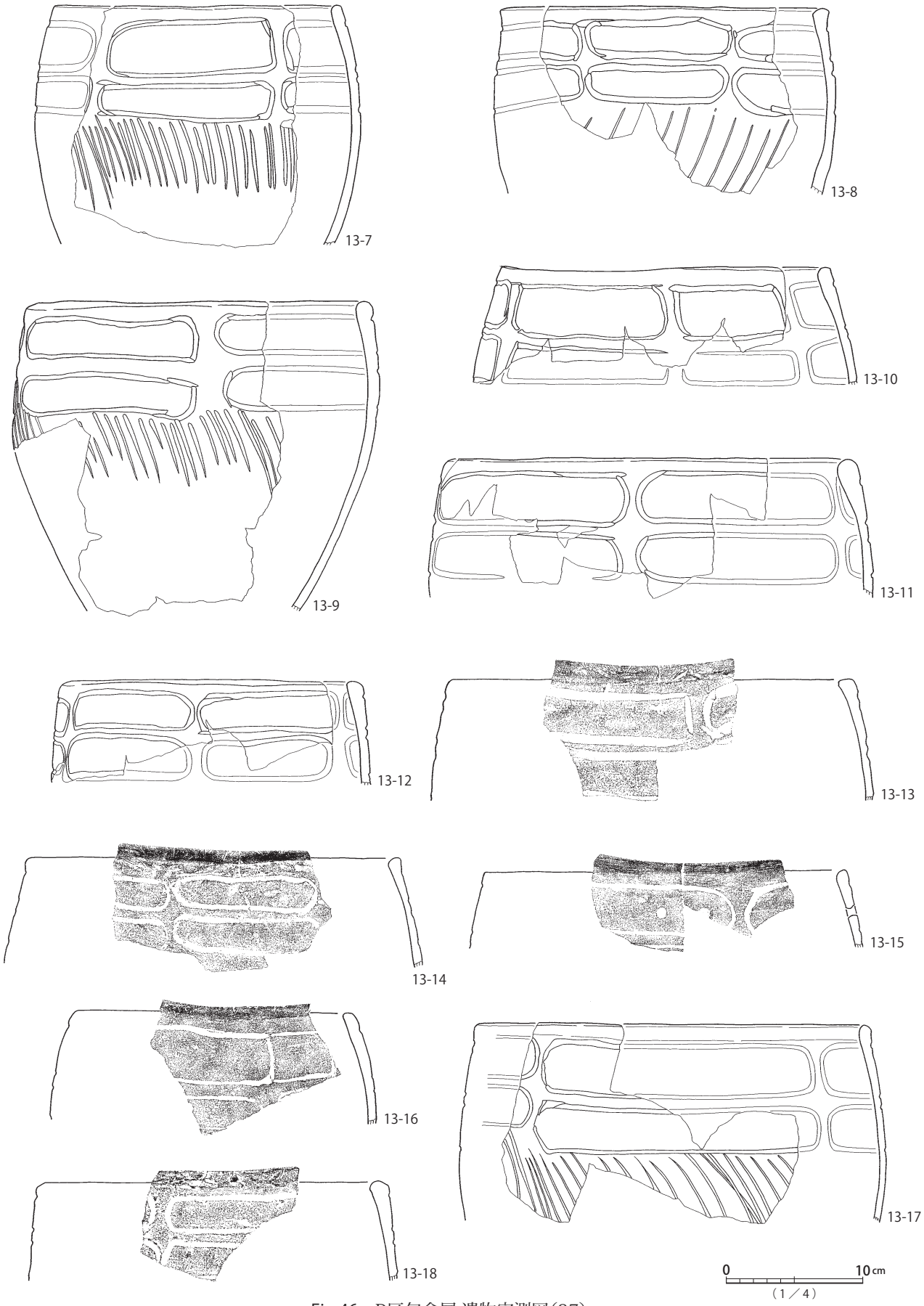


Fig.46　D区包含層 遺物実測図（37）

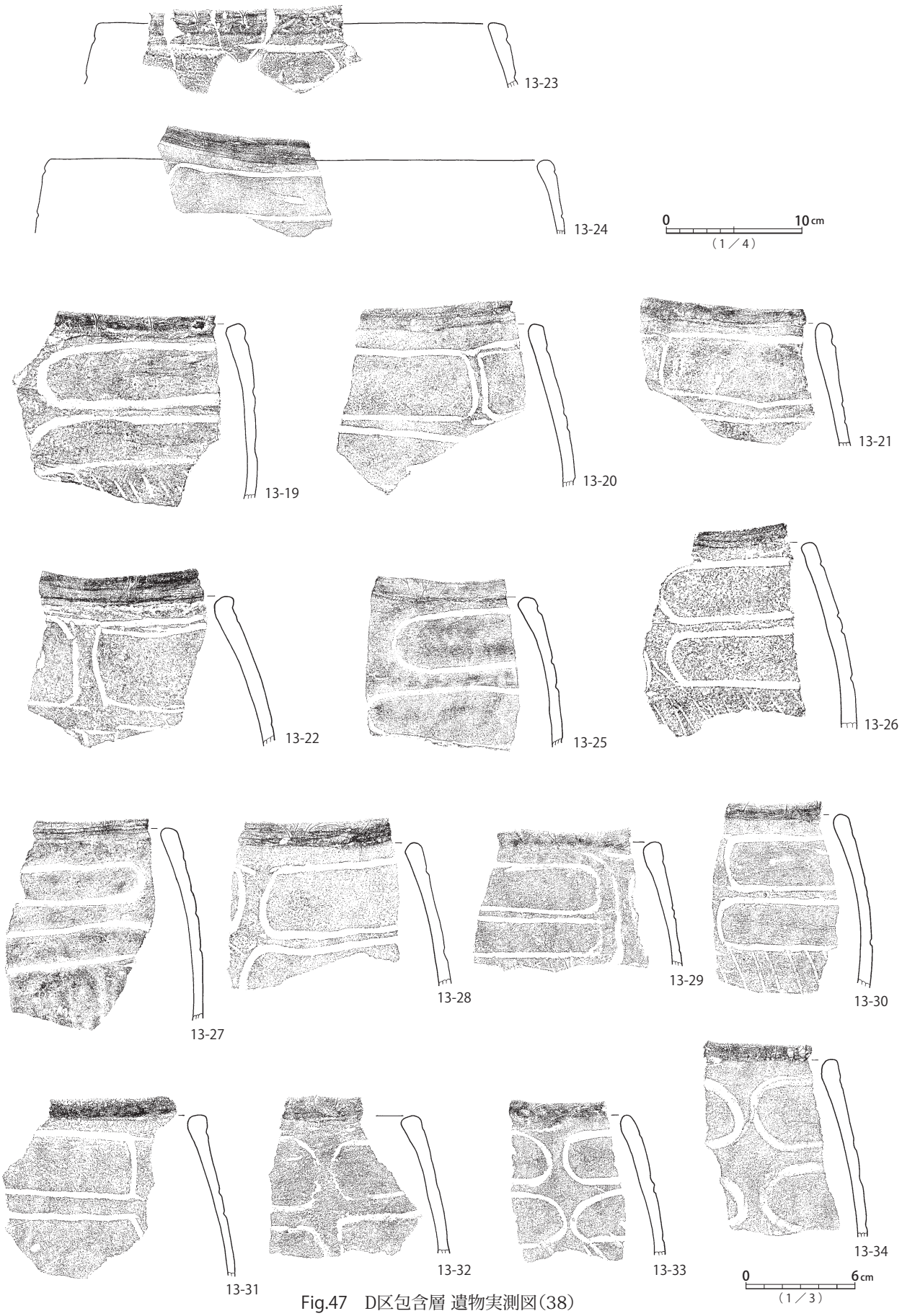


Fig.47　D区包含層 遺物実測図(38)

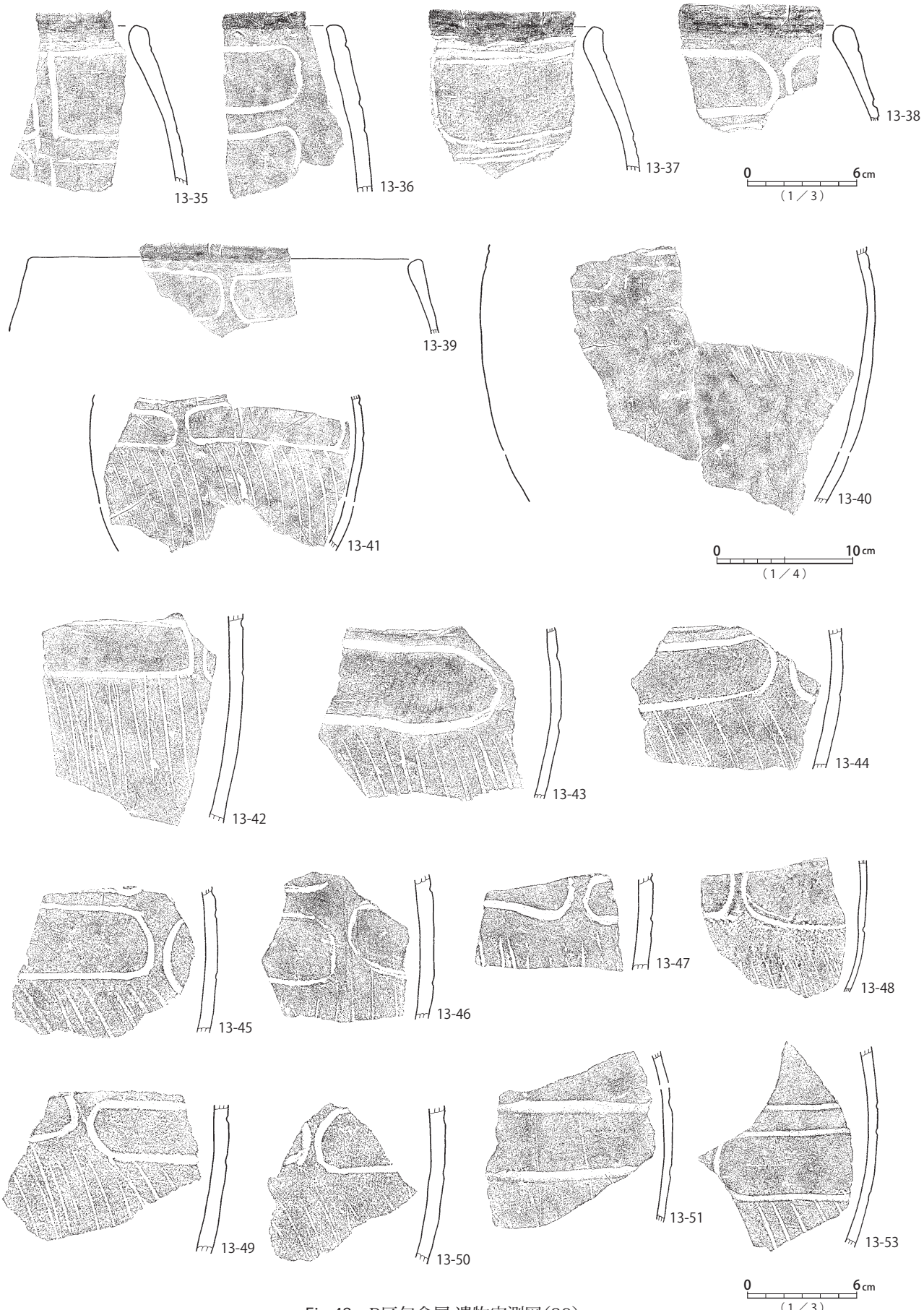


Fig.48　D区包含層 遺物実測図(39)

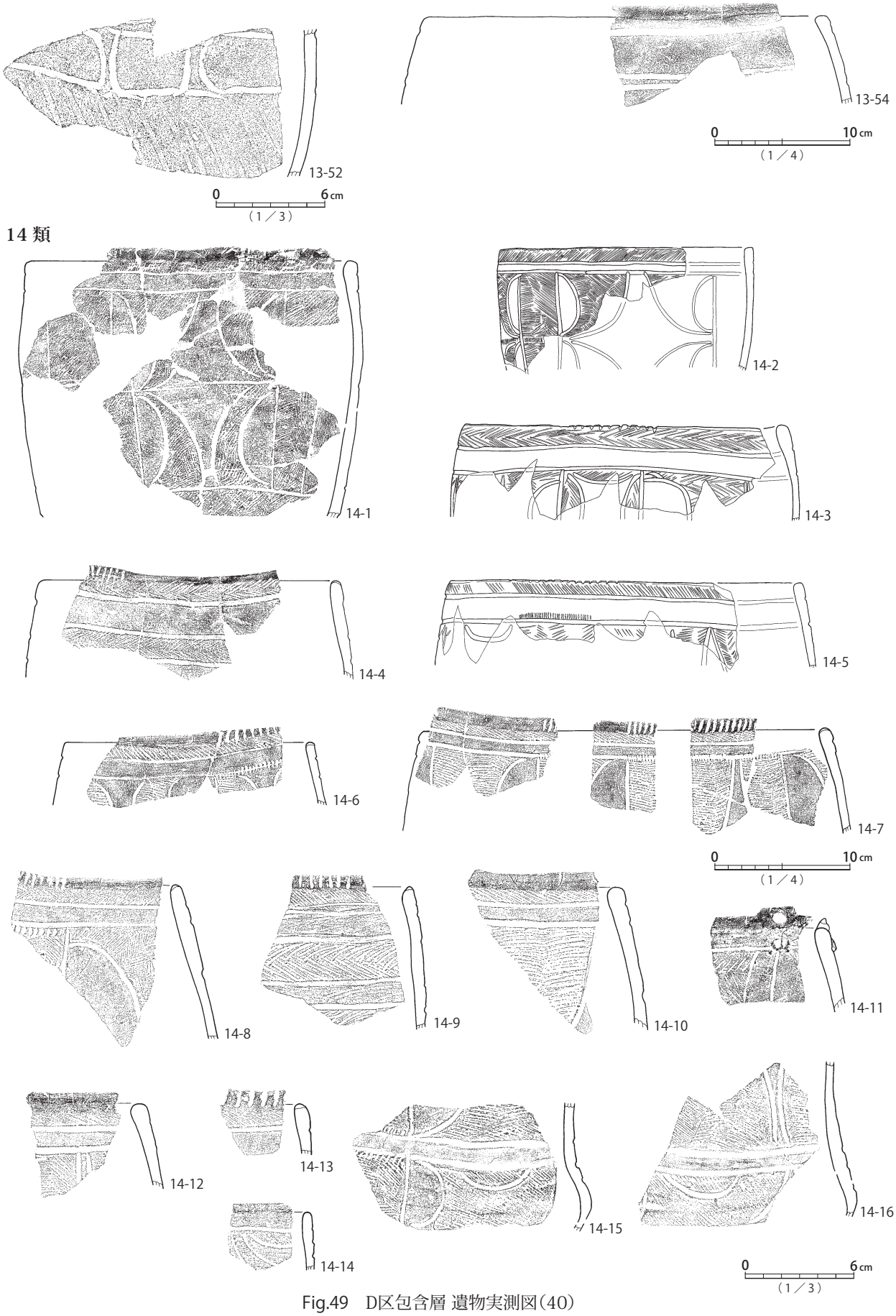


Fig.49　D区包含層 遺物実測図（40）

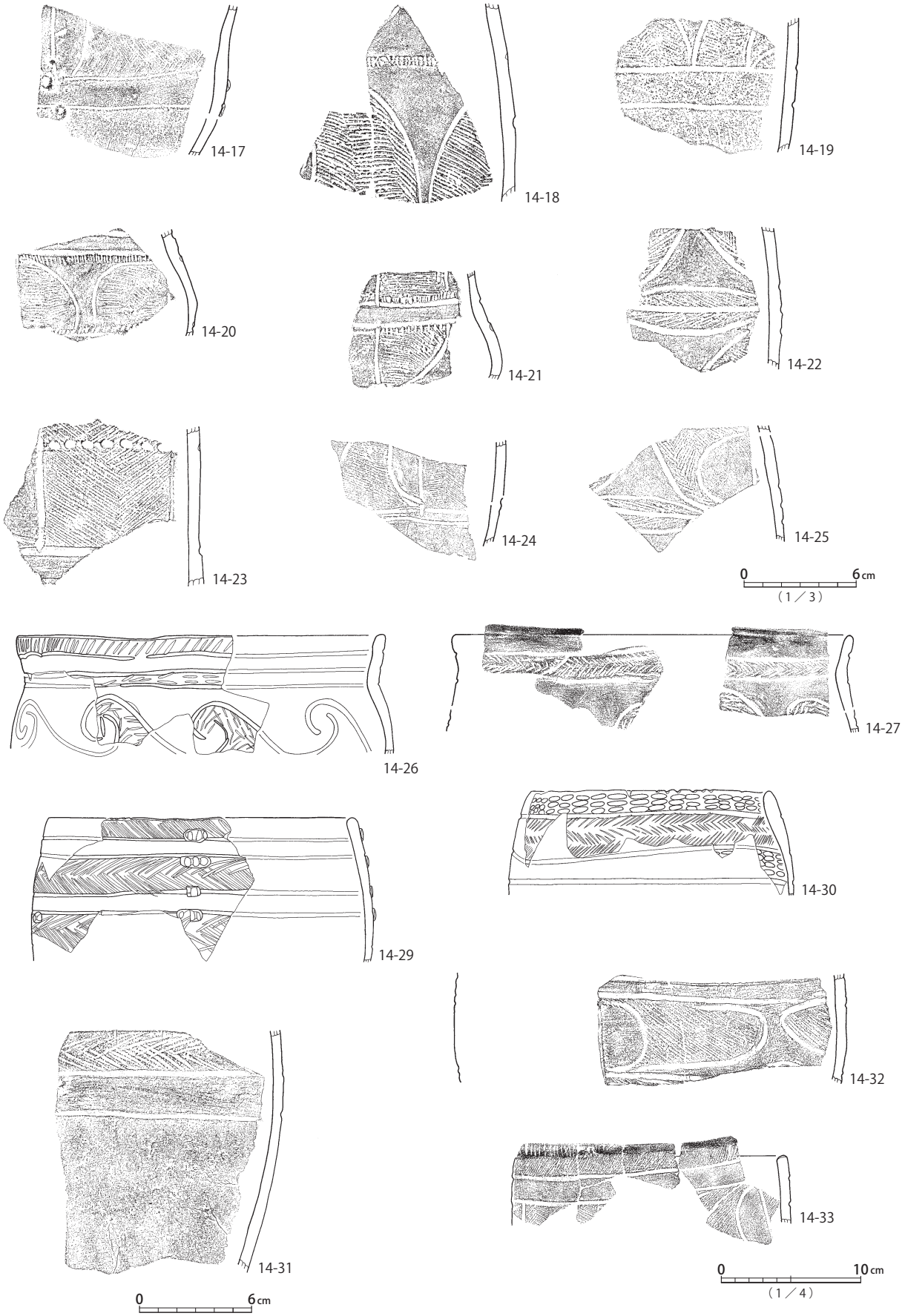


Fig.50　D区包含層 遺物実測図（41）

口縁部の紐線文は末端が下方に逃げるものがある。条線の施文後に紐線文が貼り付けられていることが、紐線文が剥離した土器片から観察できる。以下、紐線文の形状によって2つのグループに分けられる。

15a-1 ～ 142・144 ～ 153・444 ～ 446は、紐線文に幅の狭い粘土紐を使用するグループである。口縁部の紐線文は口唇部もしくは縁よりやや下に貼り付けられ、指頭押圧は粘土紐の真上に施される。口縁部文様帯の条線は横もしくは斜め横方向に施文されるものが基本だが、縦方向に施文するものも少量存在する。器形は砲弾状が多いが、15a-3・8・23・29・50・59・61・69・132は口縁部が緩く外傾している。15a-7・108・109は口縁部には横位の条線が施されているが、胴部は縦もしくは斜め横方向の条線に変わっており、胴部の紐線文が貼り付けられる部分で条線の施文方向が変えられている。15a-20・47・52は紐線文の押圧が工具状のもので行われている。15a-106・113のように紐線文に爪形文が施される個体もみられる。時期は安行1式～2式に併行するものとみられる。

15a-208 ～ 415・447 ～ 449は幅広の粘土紐を貼り付け、粘土紐の下端部に指頭押圧を施して紐線文とするグループである。粘土紐は口縁部と一体化して不明瞭になる。押引状の指頭押圧は、前述のグループよりも細かく施文される傾向がある。中には15a-388・389・400・401・411・412などのように爪形文が施文されているものも存在する。また、工具による押圧が疑われるものも見受けられる。口縁部文様帯の条線は横方向に施文される個体がほとんどであり、条線の間隔が密なものと広いものの2種類が確認できる。15a-227・388 ～ 390・447では胴部の紐線文を境に条線が斜め横方向に変わっていることから、口縁部と胴部で条線の施文方向を意図的に変えているものと思われる。時期は安行3a式に併行するものとみられる。

なお、15a-143は後述する15b類に属する土器である。

15b類　口縁部文様帯に地文の条線と沈線文を施文する土器（Fig.63 ～ 65、PL.79 ～ 81）

口縁部文様帯に地文の条線と沈線文が伴う紐線文系土器の一群である。紐線文は幅の狭い粘土紐を明瞭に施文するものと、口縁部と一体化した粘土紐を施文し、粘土紐の下端部に指頭押圧を施すものがみられる。口縁部文様帯は、先に横・斜め横方向の条線を施した後に沈線文を施文している。以下、口縁部文様帯の沈線文によって2つのグループに分けられる。

15b-1 ～ 20・15a-143は、口縁部文様帯に対向弧線文やレンズ状弧線文といった弧線文を施文するグループである。15b-1 ～ 4はレンズ状弧線文の両脇に対向弧線を施文する。15b-5・6は対向弧線文が描かれている。15b-7・8は垂線文の両脇に弧線文がみられる。15b-18 ～ 20は太沈線によって沈線文が描かれている。15b-18はレンズ状弧線文、弧線文のほかに、入組弧線文が描かれている。また、レンズ状弧線文の内部に刺突文が施文されている。

15b-21 ～ 53は、口縁部文様帯に斜線文や垂線文を施文するグループである。15b-21・23などは鋸歯状の斜線文が施文されている。15b-22・28は垂線文の両脇に「ハ」の字状の斜線文が施文されている。15b-52は沈線文が3本の平行沈線によって描き出されており、15b-21・23とは上下反転した文様となっている。15b-43 ～ 50は1条ないし2条の垂線文がみられる。また、15b-34・41・51は太沈線によって文様が描き出されている。

本類は安行2式～ 3a式に併行するものとみられる。

15a 類

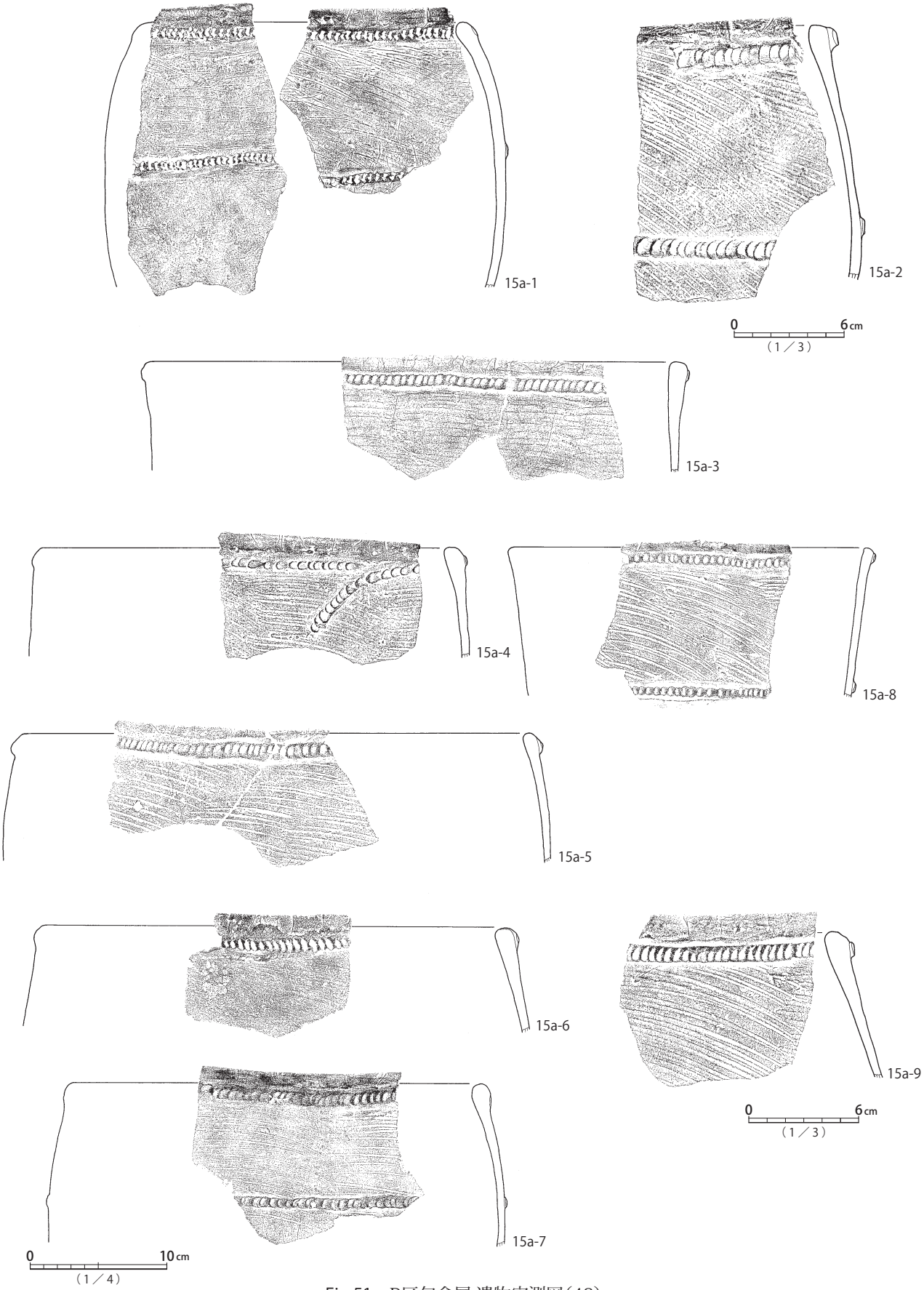


Fig.51　D区包含層 遺物実測図（42）

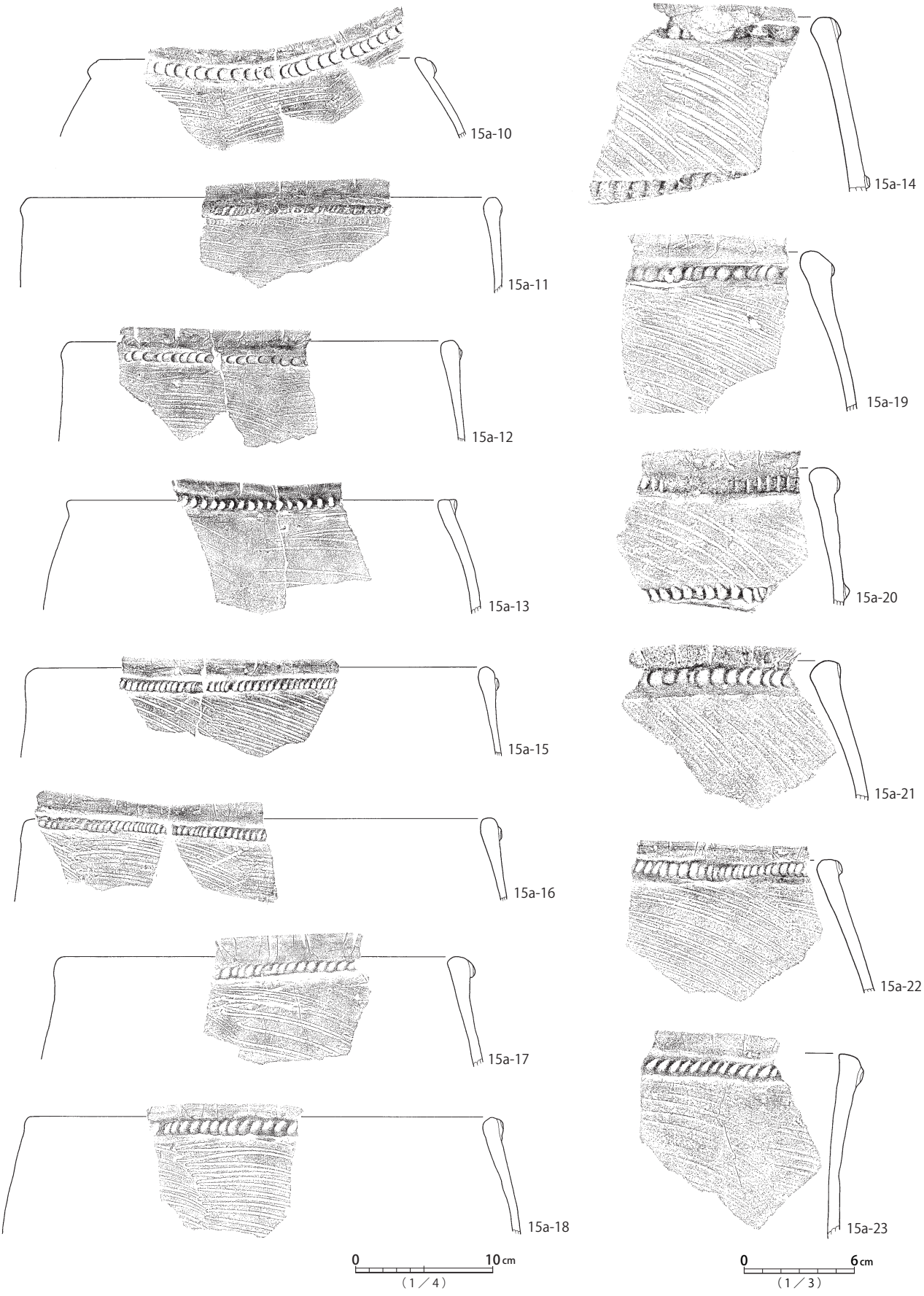


Fig.52　D区包含層 遺物実測図(43)

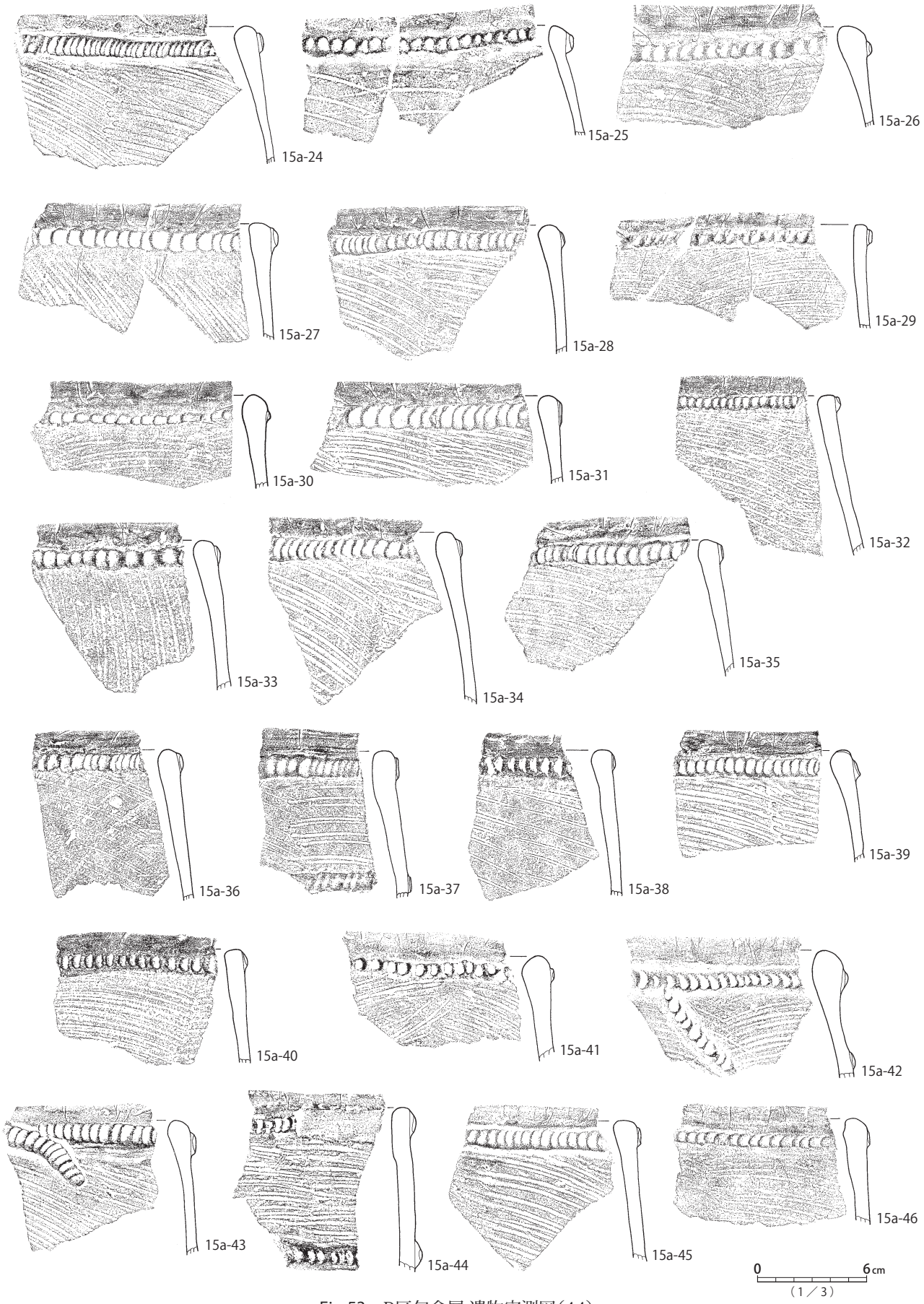


Fig.53　D区包含層 遺物実測図（44）

Fig.54　D区包含層 遺物実測図（45）

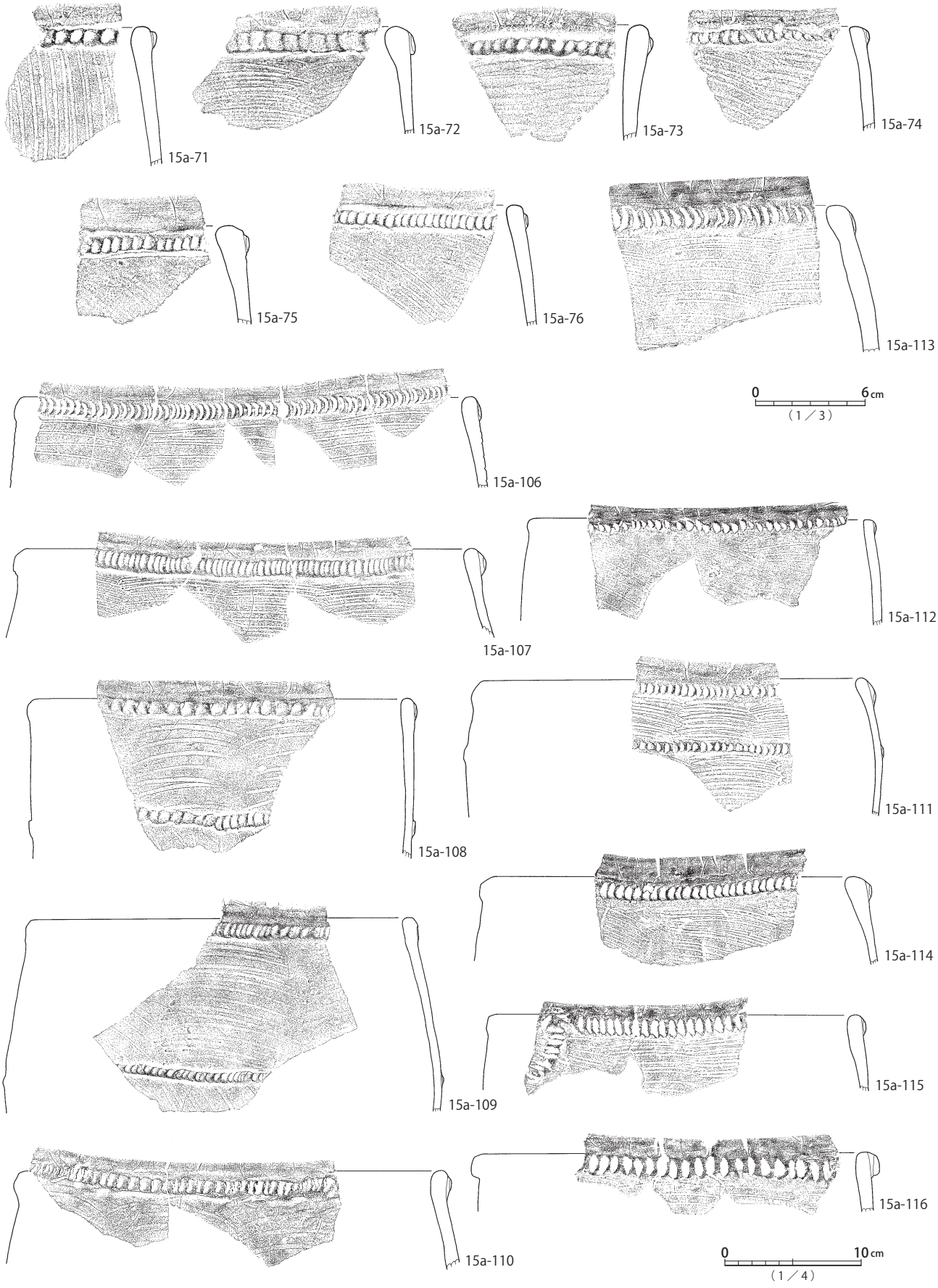


Fig.55　D区包含層 遺物実測図（46）

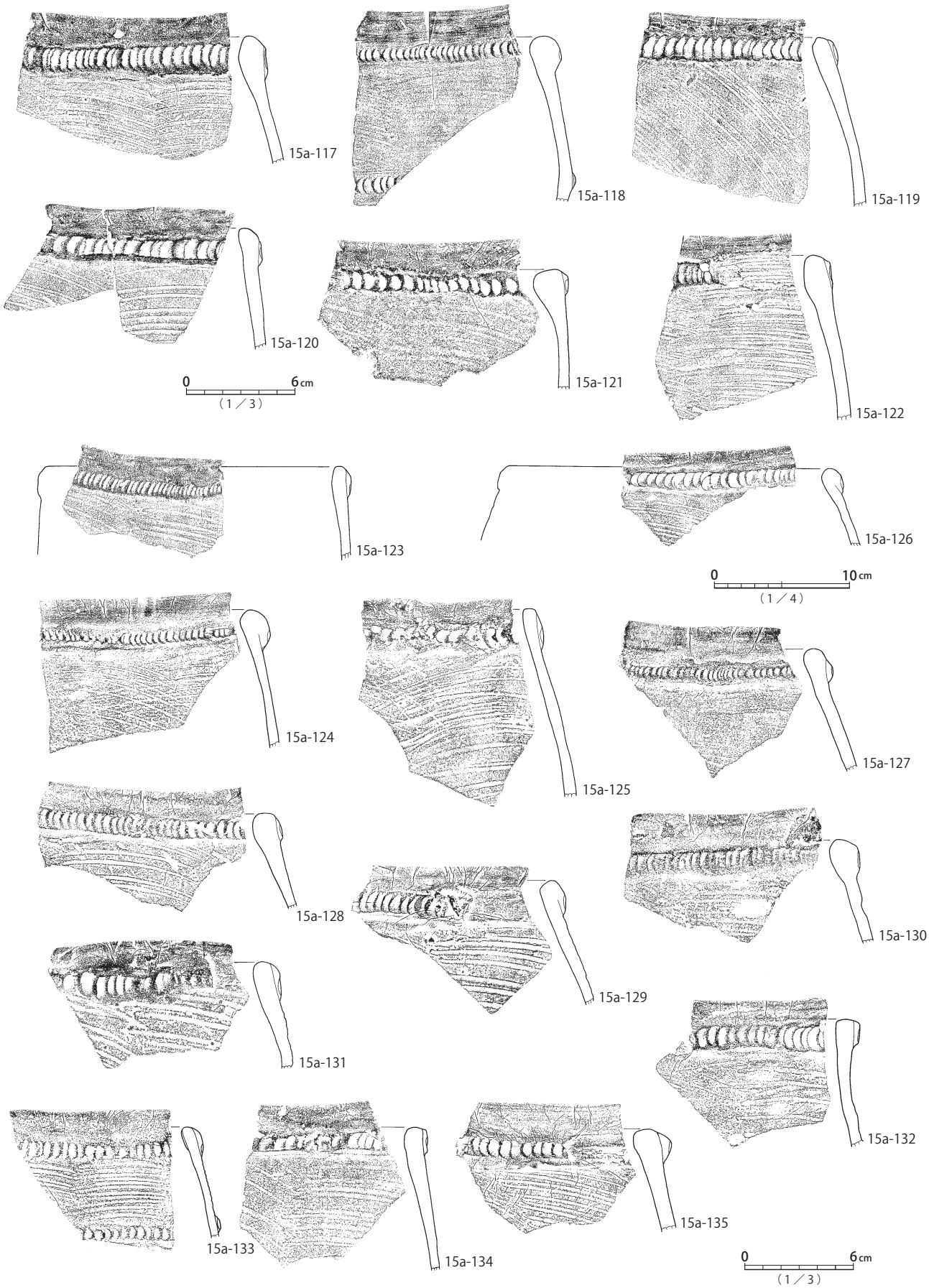


Fig.56　D区包含層 遺物実測図（47）

Fig.57　D区包含層 遺物実測図（48）

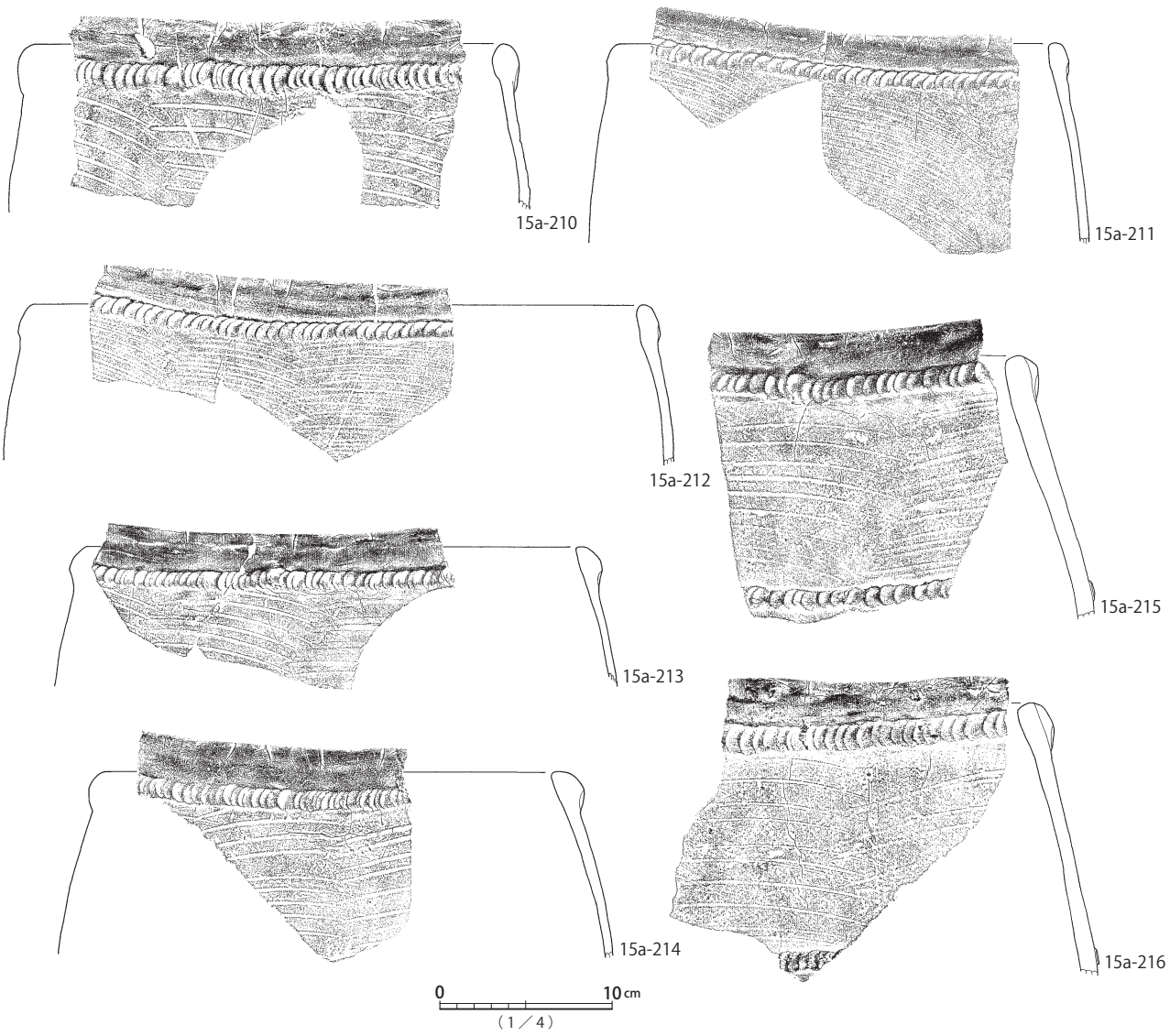


Fig.58　D区包含層 遺物実測図（49）

Fig.59　D区包含層 遺物実測図(50)

Fig.60　D区包含層 遺物実測図（51）

Fig.61　D区包含層 遺物実測図(52)

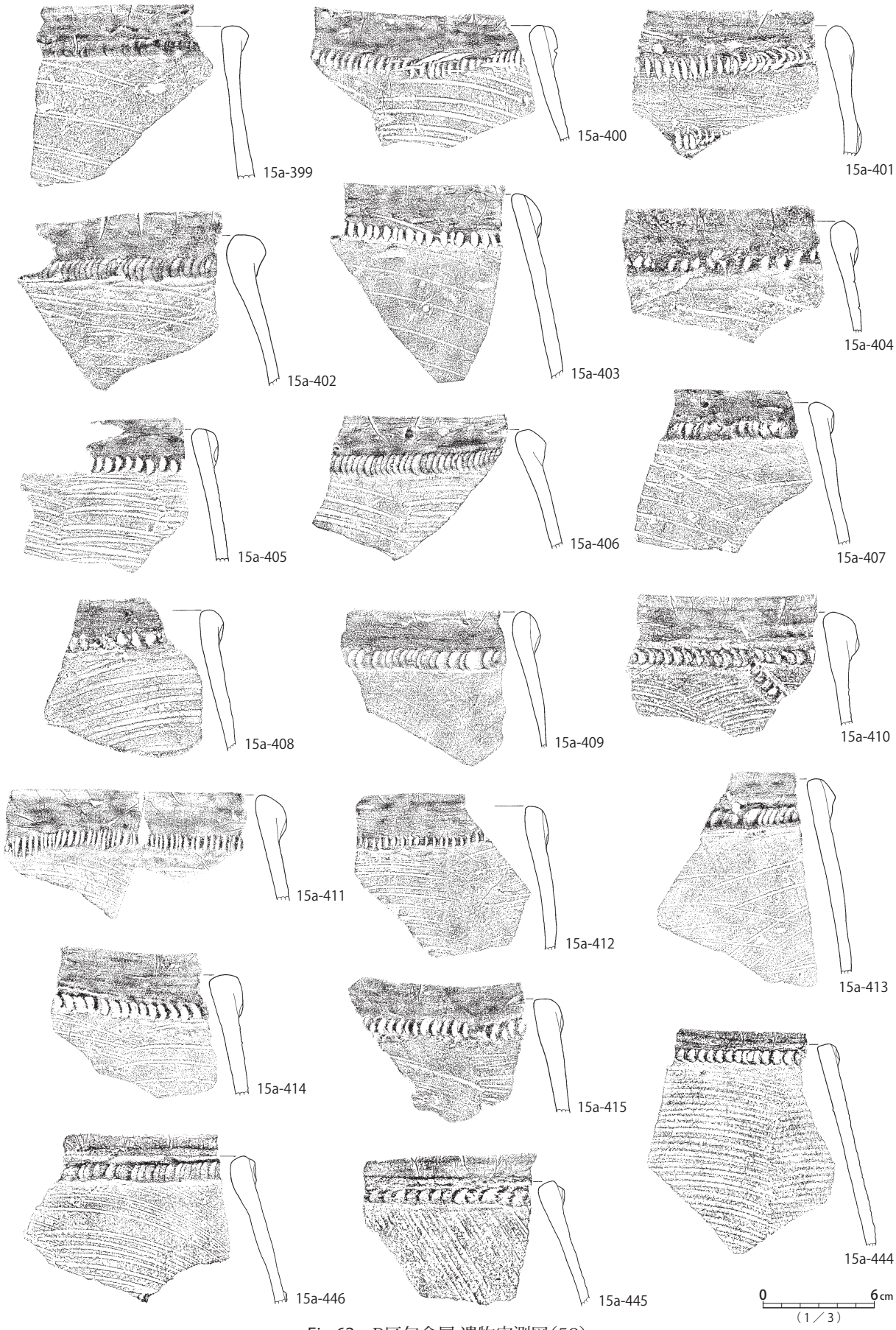


Fig.62　D区包含層 遺物実測図(53)

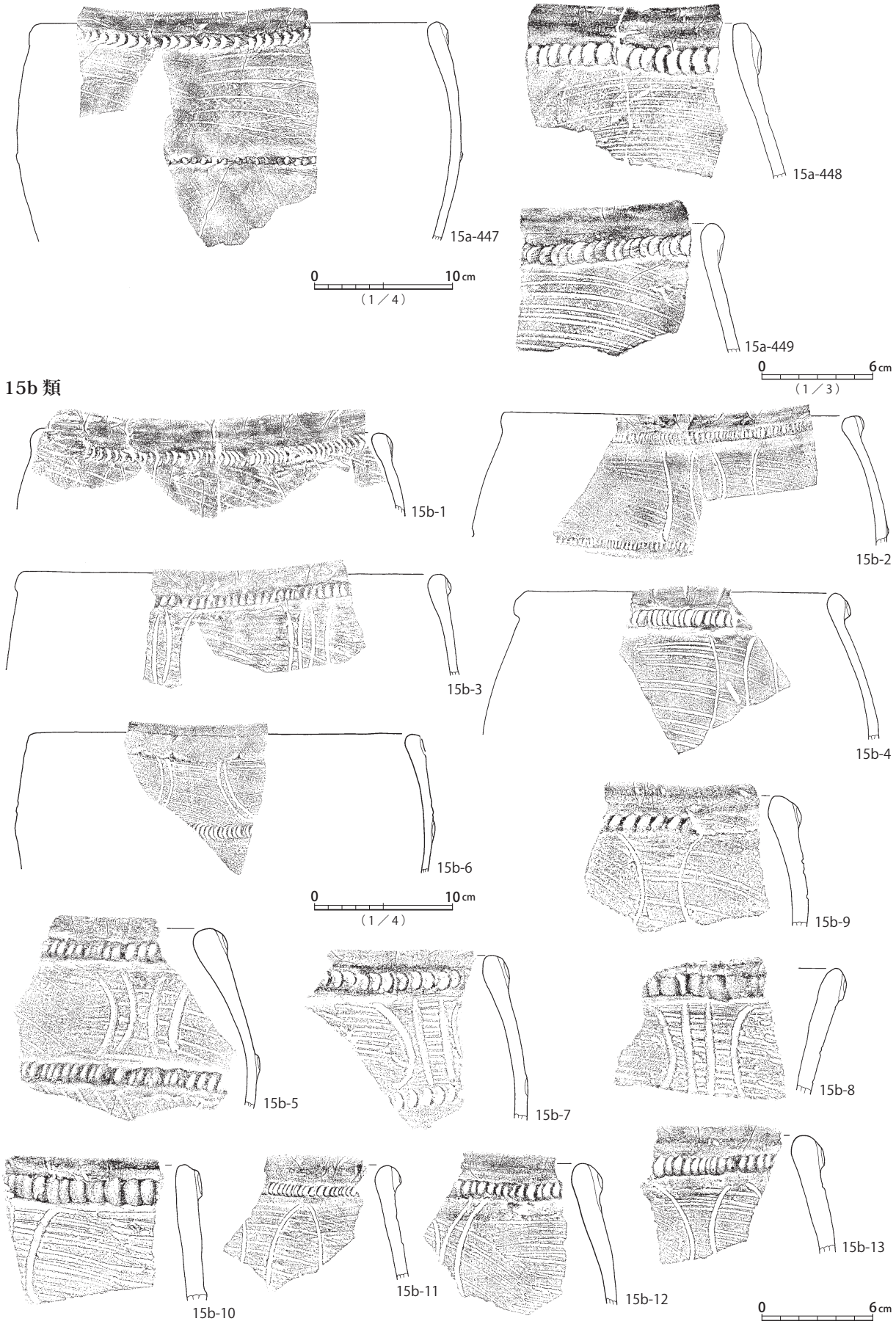


Fig.63　D区包含層 遺物実測図（54）

Fig.64　D区包含層 遺物実測図（55）

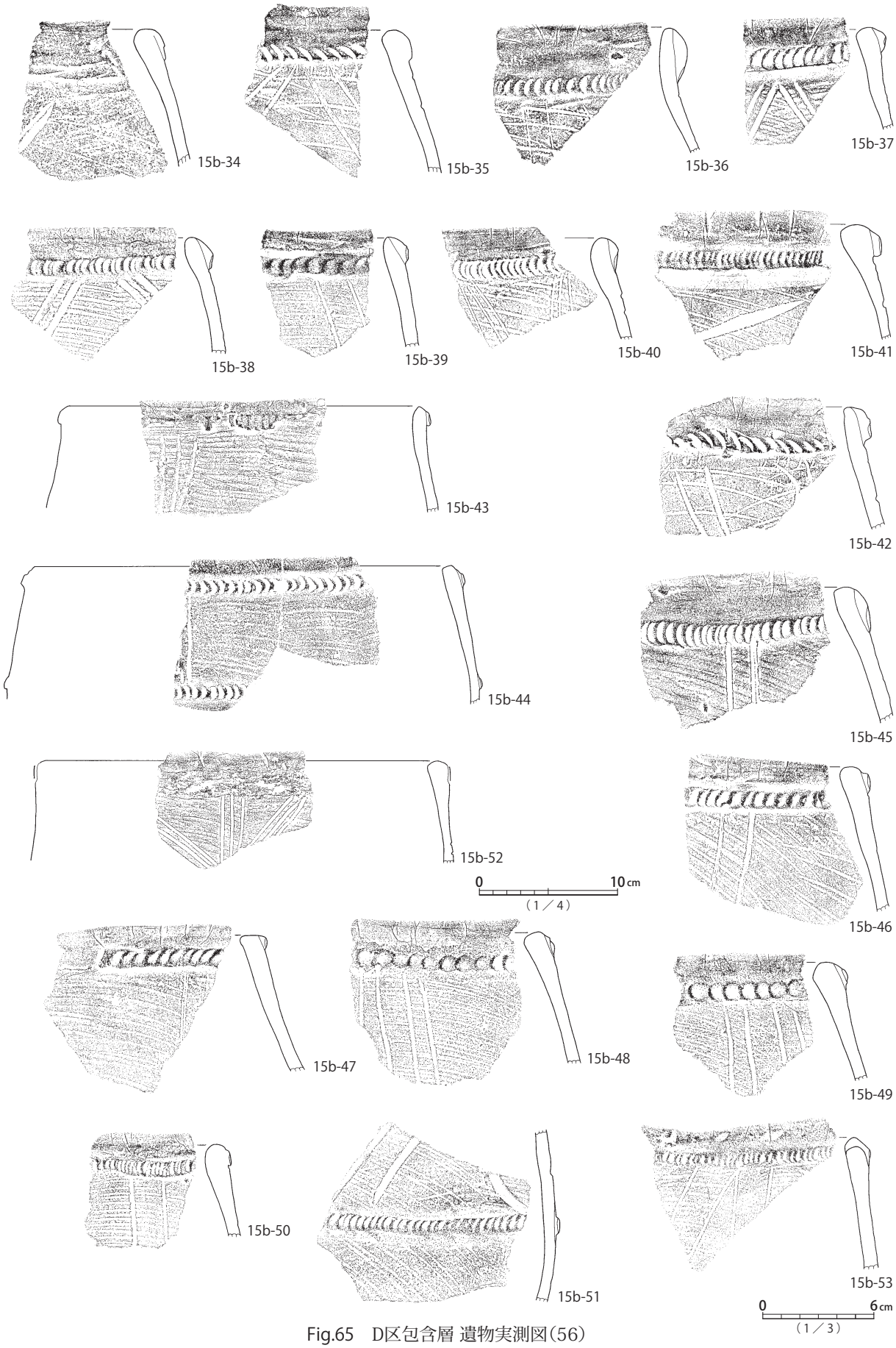


Fig.65　D区包含層 遺物実測図(56)

15c類　口縁部文様帯に地文の条線と沈線文を施文し、沈線文内部の条線を磨り消す土器
（Fig.66 ～ 68、PL.82 ～ 84）

条線を施した口縁部文様帯に沈線文を施文し、沈線文内部の条線を磨り消す紐線文系土器の一群である。条線の磨り消しは丁寧なものと粗雑なものの２種類が存在する。紐線文や地文の条線の施文方法は15b類と同様である。口縁部文様帯の沈線文も15b類と同様に2つのグループに分けられる。

15c－1 ～ 20は口縁部文様帯に対向弧線文やレンズ状弧線文といった弧線文を施文するグループである。沈線文施文後、レンズ状弧線文と対向弧線文の間の条線が磨り消されている。15c－17 ～ 19は2つのレンズ状弧線文が施文され、内部の条線が粗く磨り消されている。

15c－21 ～ 54は口縁部文様帯に斜線文や垂線文を施文するグループである。沈線文施文後、沈線文内の条線が磨り消されている。沈線文も15b類と同様、斜線文が鋸歯状に連なるもの、垂線文を中心に斜線文が「ハ」の字状に施文されるもの、垂線文のみのものがみられる。15c－45は口縁部の紐線文にブタ鼻状貼付文が伴っている。15c－51は２条の並列する垂線文とともにU字状の弧線文が描かれている。

本類は安行２式～ 3a式に併行するものとみられる。

15d類　地文となる条線が施文されない土器（Fig.68・69、PL.85）

地文の条線が施されずに、口縁部文様帯に沈線文が施文される紐線文系土器の一群である。紐線文は工具等による押圧や爪形文を施文するものが多くみられる。沈線文はこれまでと同様に弧線文や垂線文・斜線文がみられるが、小片の個体が多く、文様の全体像がつかめるものは少ない。15d－7は垂線文・弧線文のほかに、「く」の字状の沈線文が施文される。また、15d－10は内面に種子の圧痕がみられる。本類は安行3a式～ 3b式に併行するものと思われる。

なお、15d－18は沈線文はみられず、微かに条線が施文されていることから、15a類に属する土器の可能性がある。

15e類　口縁部文様帯に沈線文を施文し、文様帯内部に縄文を充填する土器
（Fig.69・70、PL.86・87）

15c類や15d類でみられる口縁部の文様帯に縄文が充填される紐線文系土器の一群である。口縁部の紐線文は粘土帯を貼り付けるものもあれば、15e－1のように横位の沈線に省略されるものも存在する。押圧は指頭のものと工具によるものがみられる。また、15e－19・20・22のように紐線文に縄文を施文する個体も存在する。地文の条線は施されるものと施されないものがある。沈線文は弧線文や垂線文・斜線文が主体となるものが多い。15e－19は6a類に類似した文様構成である。また、15e－2・9は平行する２本の蛇行沈線文が施文されている。15e－2・24には文様帯内に刺突文もみられる。15e－11は縄文を地文として施文し、沈線文を施文後、内部の縄文を磨り消している。15e－20は口縁部の紐線文に縄文が施され、口縁部文様帯は地文の条線のみが施文されている。本類は安行3a式～ 3b式に併行するものと思われる。

なお、15e－21は１類に属する土器と思われる。

15c 類

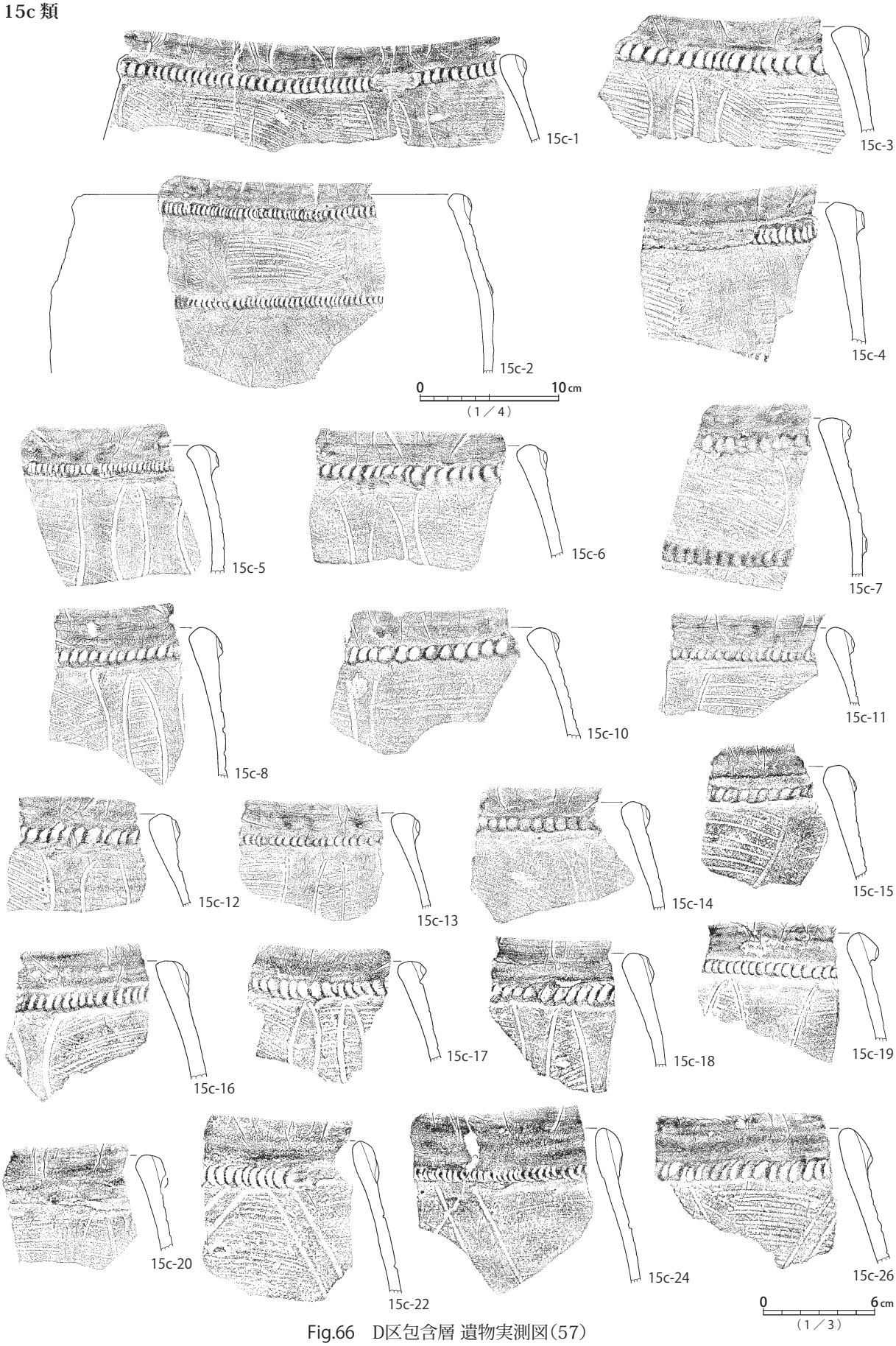


Fig.66　D区包含層 遺物実測図（57）

Fig.67　D区包含層 遺物実測図（58）

15d 類

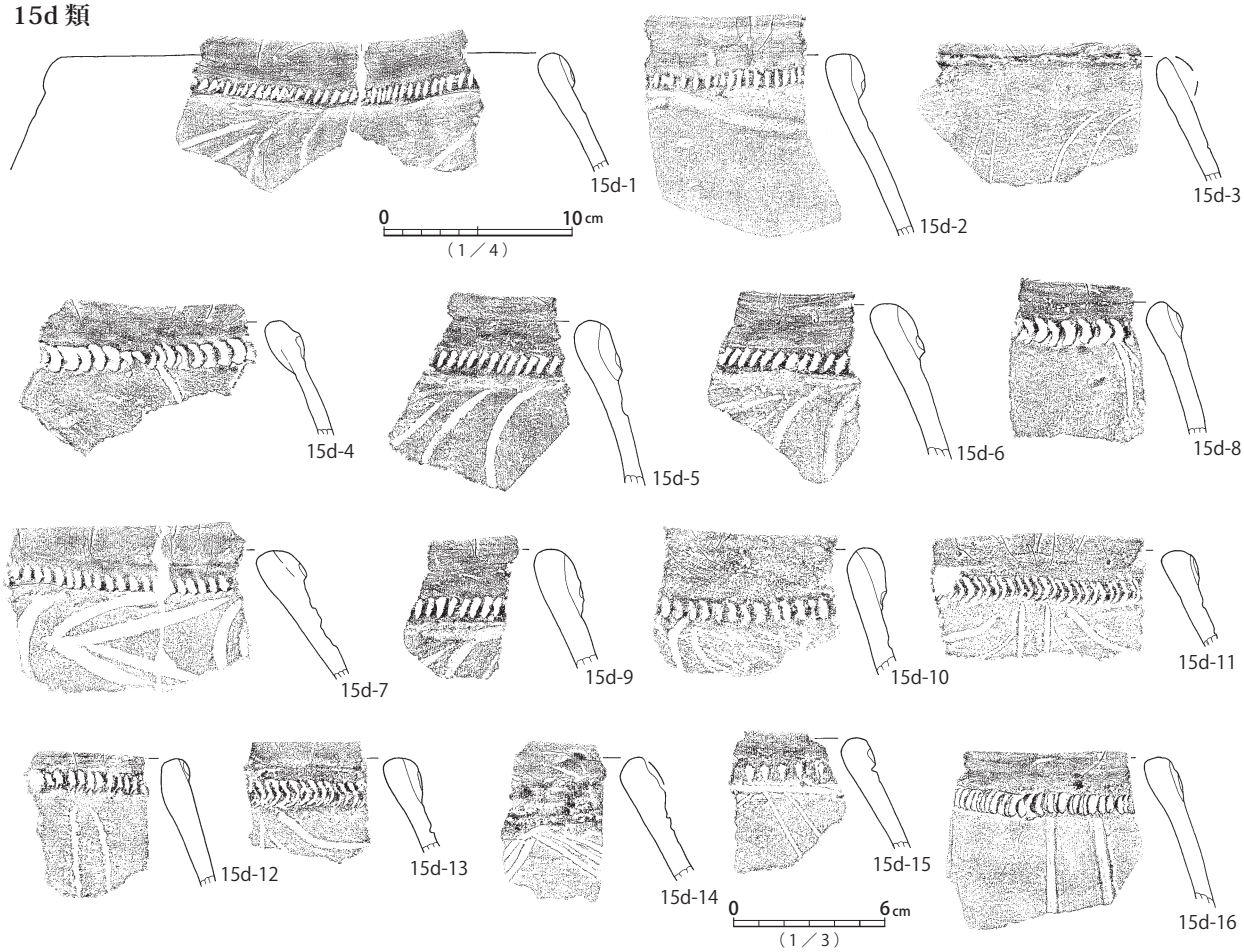


Fig.68　D区包含層 遺物実測図（59）

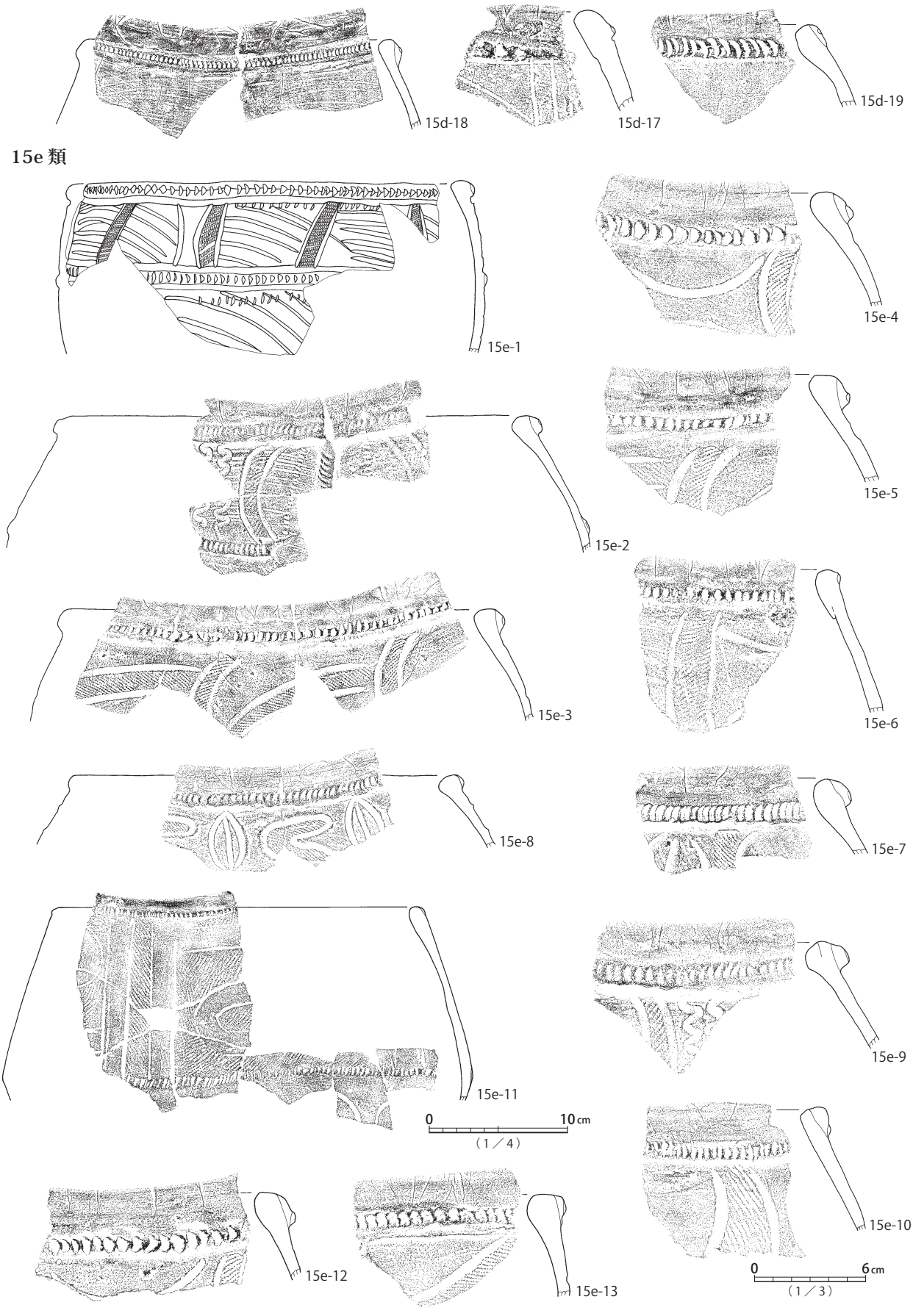
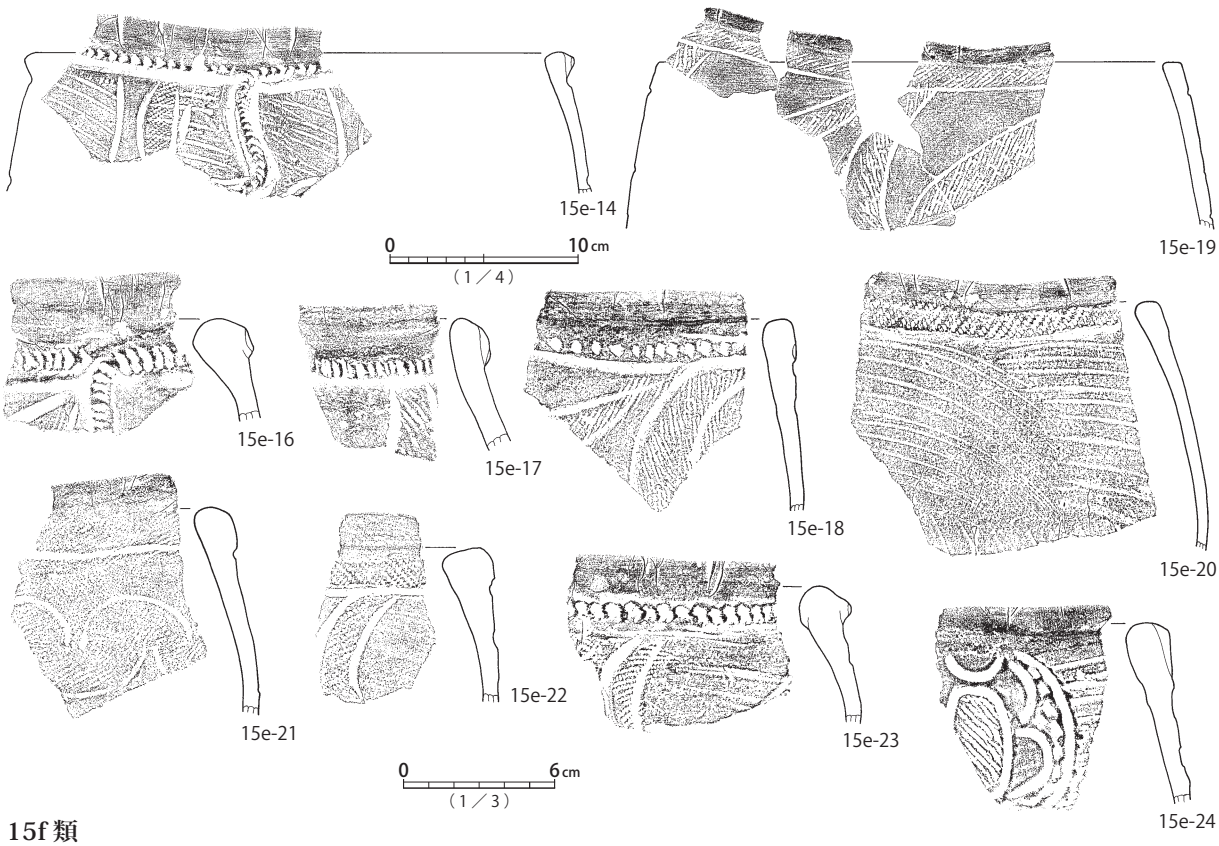


Fig.69　D区包含層 遺物実測図(60)



15f 類

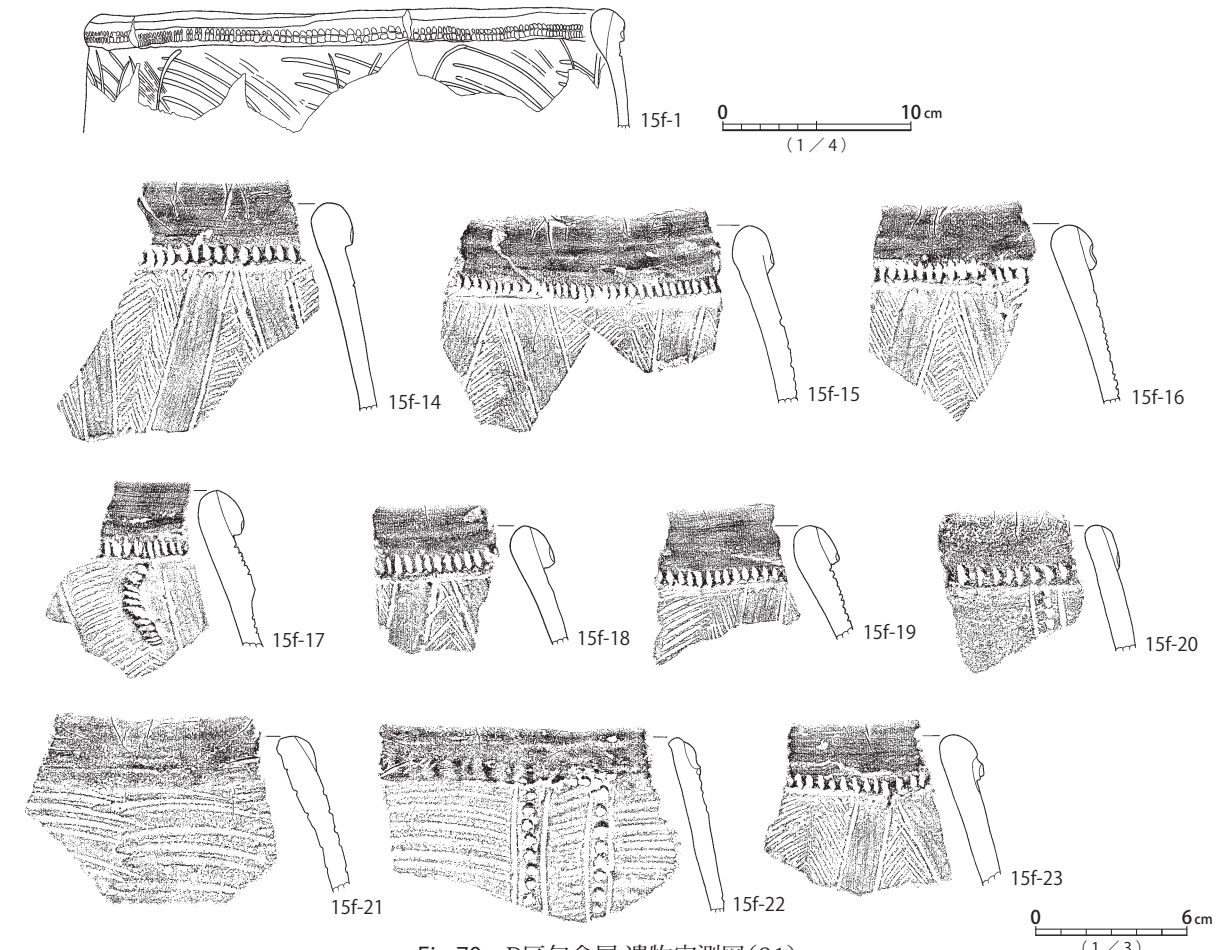


Fig.70　D区包含層 遺物実測図(61)

15f類　その他の紐線文系土器（Fig.70、PL.87）

本類は口縁部文様帯の文様構成が上記の類に含められず、かつ類型を設定するほどの出土量がない紐線文系土器の一群である。15f－1は15b類とほぼ同類であるが、口縁部の紐線文の工具による押圧が2段になっている。時期は安行2式～ 3a式に併行であろうか。15f－14 ～ 19・23は15c類と酷似するが、地文の条線が細密沈線による綾杉文に置き換わっている。また、紐線文には工具によるものと思われる押圧が施される。これらは前述した14類に含めるべきものかもしれない。時期は安行3b式～ 3c式に併行するものであろうか。15f－20は15d類の文様構成を取りつつ、沈線文内部に刺突文が施されている。15f－21は15a類の文様構成を基調としながら、紐線文の押圧が施文されなくなっている。15f－22は15c類の文様構成を取りつつ、沈線文内部に列点文が充填されている。

16類　口縁部の沈線文内部に条線を充填する平口縁深鉢形土器（Fig.71、PL.88）

口縁部に沈線文を施文し、内部に条線を充填する深鉢形土器の一群である。16－1は口縁部を横位の沈線によって区画し、文様帯を作り出している。文様帯内は弧線文が描かれ、口縁部と弧線文内に条線が充填されている。16－2は口縁部に横位の平行沈線を施文し、その上下に条線を施文している。16－3は口縁部に綾杉状の条線を充填する。16－4は、文様構成は16－1と類似するが、口唇部が無文となる。16－7 ～ 9は胴部の破片である。本類は安行3b式～ 3c式に併行するものと思われる。

なお、16－5・6は紐線文系土器であり、細密沈線による綾杉文を地文として施文した15f－14 ～ 19・23と同様の文様構成であることから、15f類に属する土器と思われる。また、16－5は口縁部の紐線文以外は14類の文様構成に酷似する。これらの個体は14類に含めるべきものかもしれない。時期は安行3b式～ 3c式に併行するものであろうか。

17類　口唇部に工具による連続刺突文もしくは押引文を施文する平口縁深鉢形土器

口唇部に工具による連続刺突文もしくは押引文が施される土器群である。土器の形状は砲弾形の深鉢形土器を基本とする。口縁部は横位の沈線によって文様帯を区画している。また、口唇部を肥厚させて紐線文状にする個体も多い。文様は多様で条線を伴うものと伴わないものがある。

以下、施文される文様や刺突の違いから5種類に細別する。

17a類　口縁部文様帯に弧線文や斜線文を施文する土器（Fig.71、PL.25・88）

口縁部文様帯に弧線文や斜線文等の沈線文が施文される土器である。地文となる条線は伴わない。17a－1は口唇部と胴部の沈線区画内に2列の刺突文を施文する。口縁部文様帯は弧線文とレンズ状弧線文を交互に施文し、内部に最大4列の刺突文を充填している。外面の無文部や内面は非常に丁寧なヘラミガキが施され、精製土器のような印象を受ける。17a－3は17a－1と同様の文様構成である。17a－2・4 ～ 6も沈線文内部に刺突文を充填するが、17a－1ほど精緻ではない。17a－8は口縁部の横位の沈線文の下部に工具による押引文を施文する。本類は安行3c式～ 3d式に併行するものと思われる。

17b類　口縁部文様帯が無文となる土器（Fig.72、PL.89）

口縁部文様帯が無文となる土器群である。口唇部の刺突文は基本的に単列であるが、17b－6は沈線の下部にも1列の刺突文を有する。また、17b－7は口唇部に粗雑な複列の刺突文が施文されている。本類は安行3c式～ 3d式に併行するものと思われる。

17c類　口縁部文様帯に地文の条線と沈線文を施文する土器（Fig.72、PL.25・89）

地文となる条線が施された口縁部文様帯に沈線文を施文する土器群である。条線は横・斜め横方向に施文され、沈線文は垂線文・斜線文・弧線文によって構成されている。17c－1は口縁部文様帯に垂線文と斜線文を施文するとともに、内部に刺突文を充填する。17c－2はレンズ状弧線文の両脇に対向弧線を施文する。17c－4は垂線文の両脇に背向弧線を描いている。17c－10・11は鋸歯状に配置された斜線文を施文しているとみられる。17c－9は口唇部の刺突文がみられない。これらの土器の胴部には17c－3・4のように刺突・押引文のみが施文されるものと、17c－1・2・10のように平行沈線によって区画された内部に刺突・押引文を施すものが存在する。本類は安行3a式～ 3b式に併行するものと思われる。

17d類　口縁部文様帯に地文の条線のみを施文する土器（Fig.73、PL.90）

口縁部文様帯に地文の条線のみが施文される土器群である。口唇部の刺突文は17d－1・2・4 ～ 12のような爪形文が多くみられるが、17d－13 ～ 18・22のように細かなキザミを施するものもみられる。また、17d－19・21は口唇部に粘土紐が貼り付けられ、棒状工具によるものとみられる列点文が施文されている。口縁部の横位の沈線はみられないものが多い。口縁部文様帯の条線は横方向のものが多く、斜め横方向のものもみられる。本類は安行3a式に併行するものと思われる。

なお、17d－3は17c類に属する土器である。

17e類　附点紐線文系土器（Fig.74・75、PL.25・91・92）

附点紐線文土器と思われる土器群である。器形は口縁部が内弯するものと直立するものが存在する。口唇部には棒状工具によるものとみられる三角形状の附点文が施されている。また、附点文は、下部に1本の沈線が施されるもの、2本の平行沈線によって区画されるもの、沈線が施文されないものの3種類がみられる。地文の条線は縦・斜め横方向のものが主体であり、横方向のものは少ない。17e－1・7は胴部にも三角形状の附点文を施文している。17e－28は口唇部が円筒状の工具の先端で刺突されている。本類は安行1式～ 2式に併行するものと思われる。17e－22は口縁部文様帯に沈線文がみられることから、17c類に属するものかもしれない。

18類　条線のみを施文する深鉢形土器（Fig.75 ～ 78、PL.92 ～ 95）

条線のみが施された深鉢形土器の一群である。器形は口縁部が内弯する砲弾状を呈する。口縁部が肥厚するとともに、口唇部を面取りするものが多くみられる。面取りは口唇部を平坦に成形するものと、口唇部を内外面から面取りし、三角形状に成形するものがみられる。口縁部から胴部にかけては弧状の条線文が施文される。口縁部は横方向の条線が施文され、胴部最大径付近から下部は

縦方向もしくは斜め横方向の条線が施されている。ほとんどの個体が条線を左から右に向かって描く。条線は密なものと疎なものの２種類が見受けられるとともに、長いものと短いものが存在する。条線が密なものほど長い印象を受ける。18−7は先端の尖った工具によって、胴部に外面から穿孔が施されている。18−9は口唇部に横位の列点文が１列施文されている。本類は安行3b式〜 3c式に併行するものと思われる。

19類　縄文のみを施文する土器（Fig. 78、PL.95）

縄文のみが施文される土器群である。出土量は至って少なく、土器の全容を推察できる大きさの個体も見受けられなかった。施文される縄文は単節縄文であり、LR・RL双方ともみられる。19−3は胴部の小片であるが、浅く細い平行沈線を施文するとともに、内部を無文としている。本類の時期は不明確ではあるが、安行3a式〜 3c式に併行するものと想定しておきたい。

20類　撚糸文を施文する土器（Fig. 78、PL.95）

撚糸文が施文される土器群である。出土個体数は極めて少ない。いずれも胎土に砂粒を多く含みザラザラしている。20−1は深鉢形土器の口縁部とみられる。細かな撚糸文を縦・斜め横方向に施文する。20−2も深鉢形土器である。単口縁で頸部が「く」の字状に強く屈曲し、括れるように口唇部へと外弯する。口縁部は撚糸文を縦方向に施文し、頸部を無文帯とする。胴部も撚糸文を施文するが、頸部直下のみ縦方向に施文し、それより下側は横方向に施文している。施文される撚糸文は非常に細かい。また、器面はやや摩滅しており、胴部下半の内面には炭化物が薄く付着している。これらは、晩期後葉〜末葉の千網式〜荒海式期の粗製土器と思われる。また、条痕文ではなく撚糸文が施文されることから、荒海式としても古い段階に位置づけられるものと考えられる。

21類　無文の土器（Fig.79 〜 82、PL.25・26・96 〜 99）

縄文や沈線文などが全く施されない無文の土器群である。器形は口縁部が内弯する砲弾形の深鉢形土器と、口縁部が「く」の字状に外傾する深鉢形土器のほかに、鉢形土器も若干確認される。また、口唇部に若干の文様が施される個体も微量ながら存在する。

21−1 〜 3・5 〜 35・37 〜 39・42 〜 49・101・105は口縁部が基本的に内弯する砲弾形の深鉢形土器である。大型のものが主体とみられるが、小型のものも存在する。また、口唇部を面取りするものも多く確認される。面取りは口唇部を平坦にするものと、口唇部の外面や内面を面取りし、縁を尖らせたものがみられる。器面は工具等によるナデ調整のものがほとんどであり、輪積み痕が確認できる個体も若干存在する。21−1は唯一全体が復元できる個体である。底部は小型でやや丸みを帯びることから、自立することは困難であったと思われる。21−10は口唇部から内面にかけて沈線文が若干認められる。21−34は口唇部に波状の押圧が施され、21−42は口唇部に爪形状のキザミを施文している。21−28は藁状の物体を束ねた工具によって調整されているものと思われる。また、21−29・32・105には弱い条線が認められる。21−11は他の土器とは違い薄く硬質な作りとなっている。外面はヘラケズリによって調整されるとともに、内面は非常に丁寧なヘラミガキが施され、口唇部がつまみ上げられ鋭く尖っている。製塩土器の可能性も考えられる。

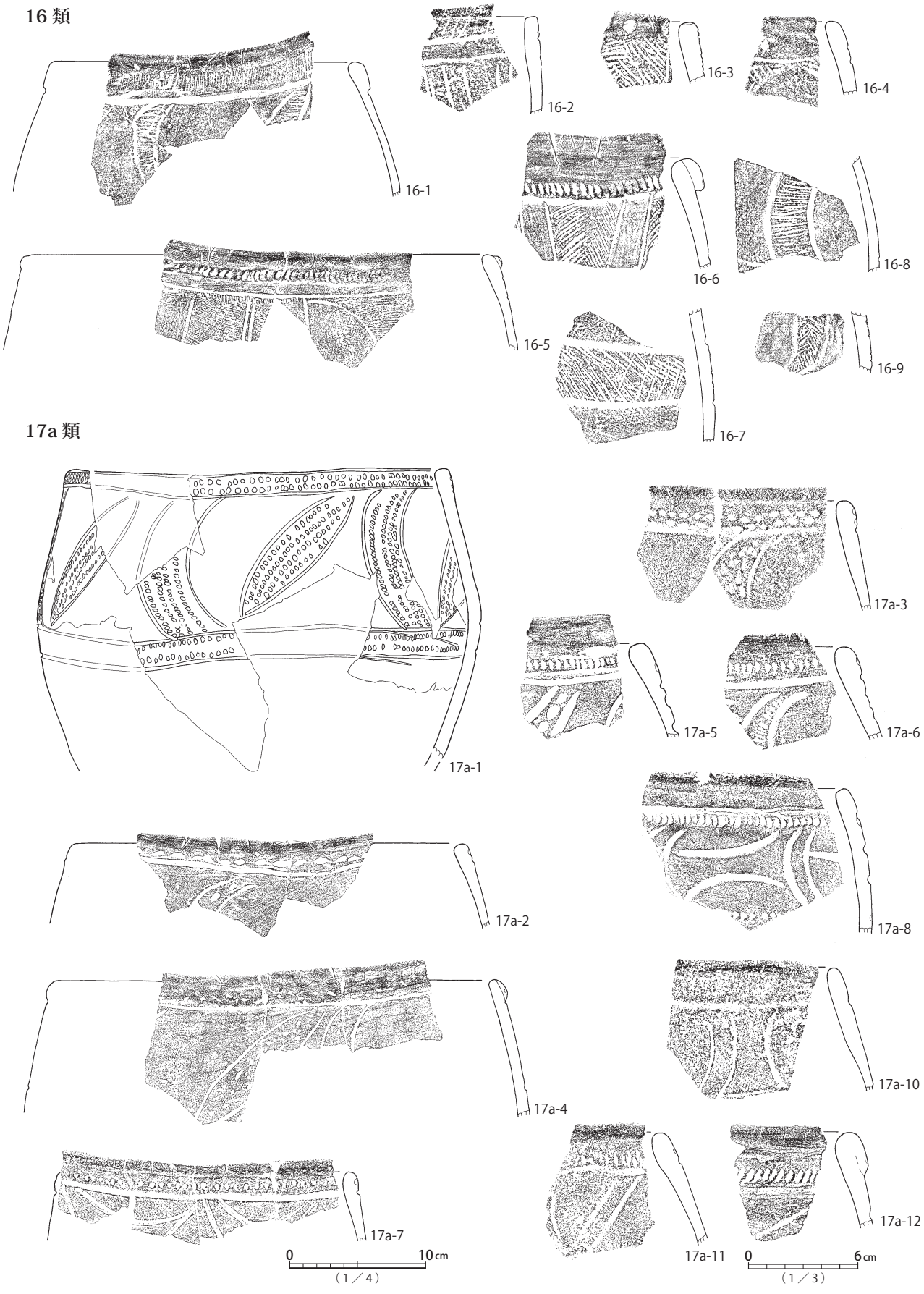
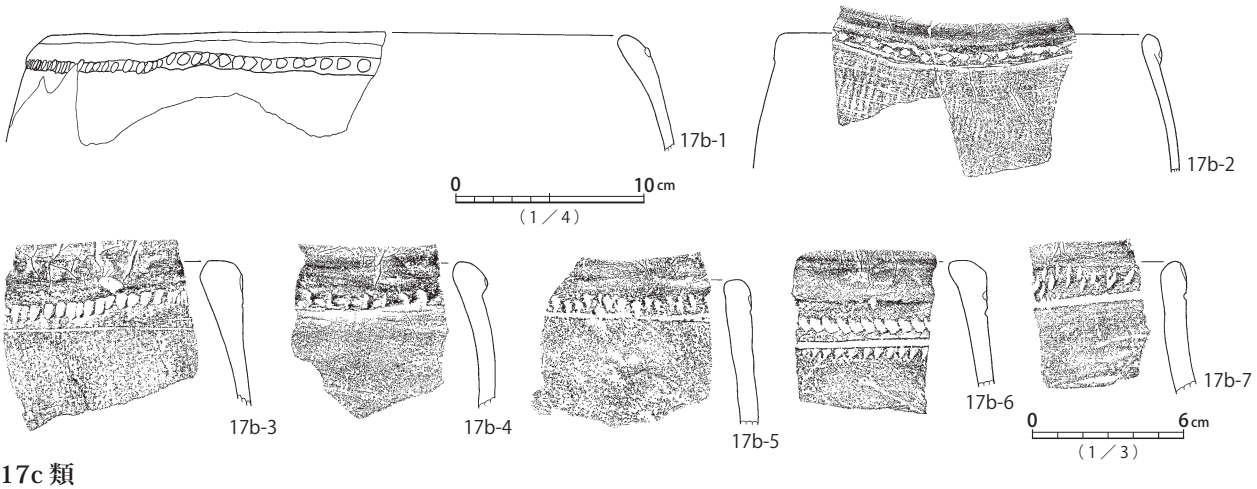


Fig.71　D区包含層 遺物実測図(62)

17b 類



17c 類

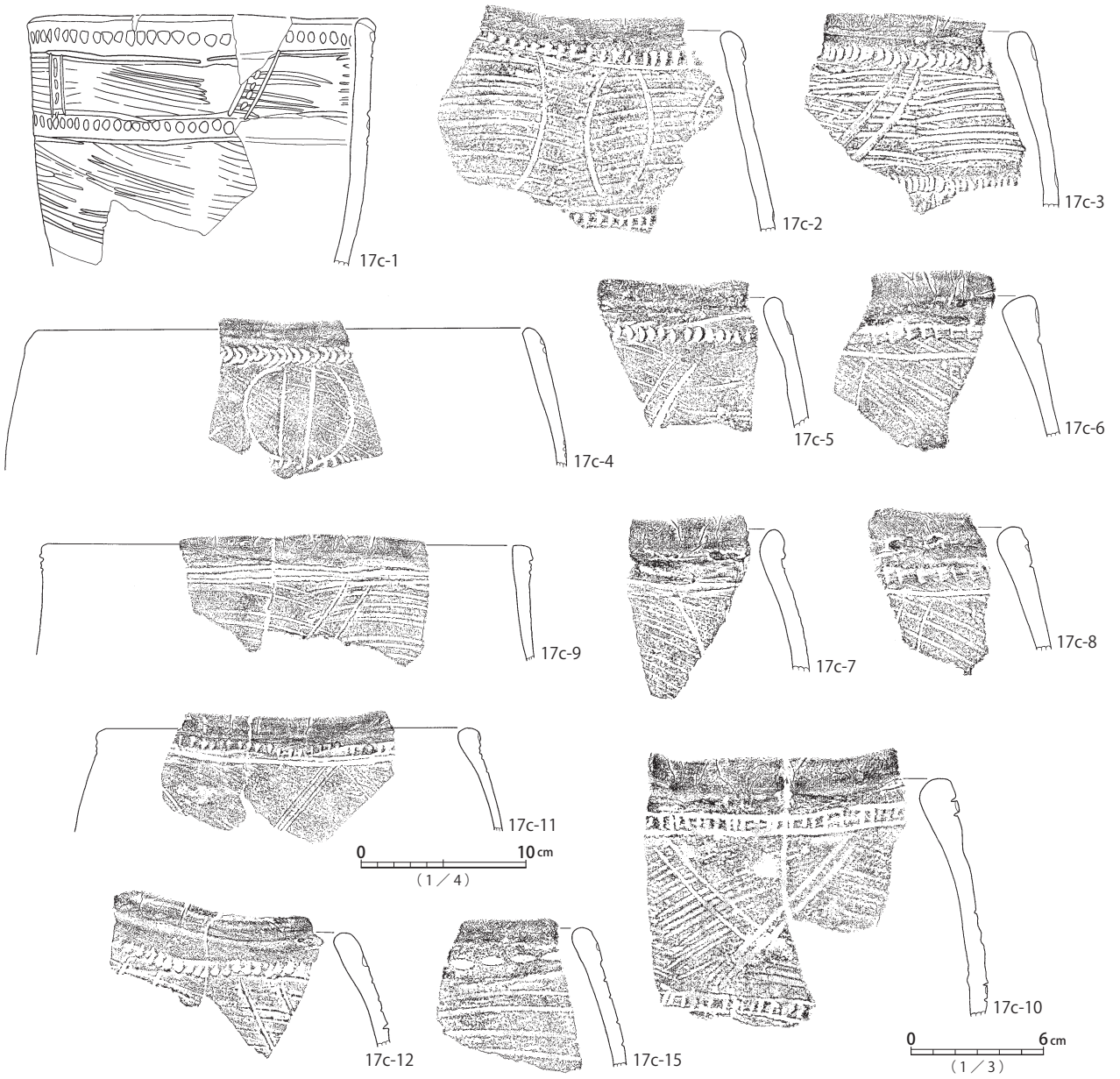


Fig.72　D区包含層 遺物実測図(63)

17d 類

Fig.73　D区包含層 遺物実測図（64）

17e 類

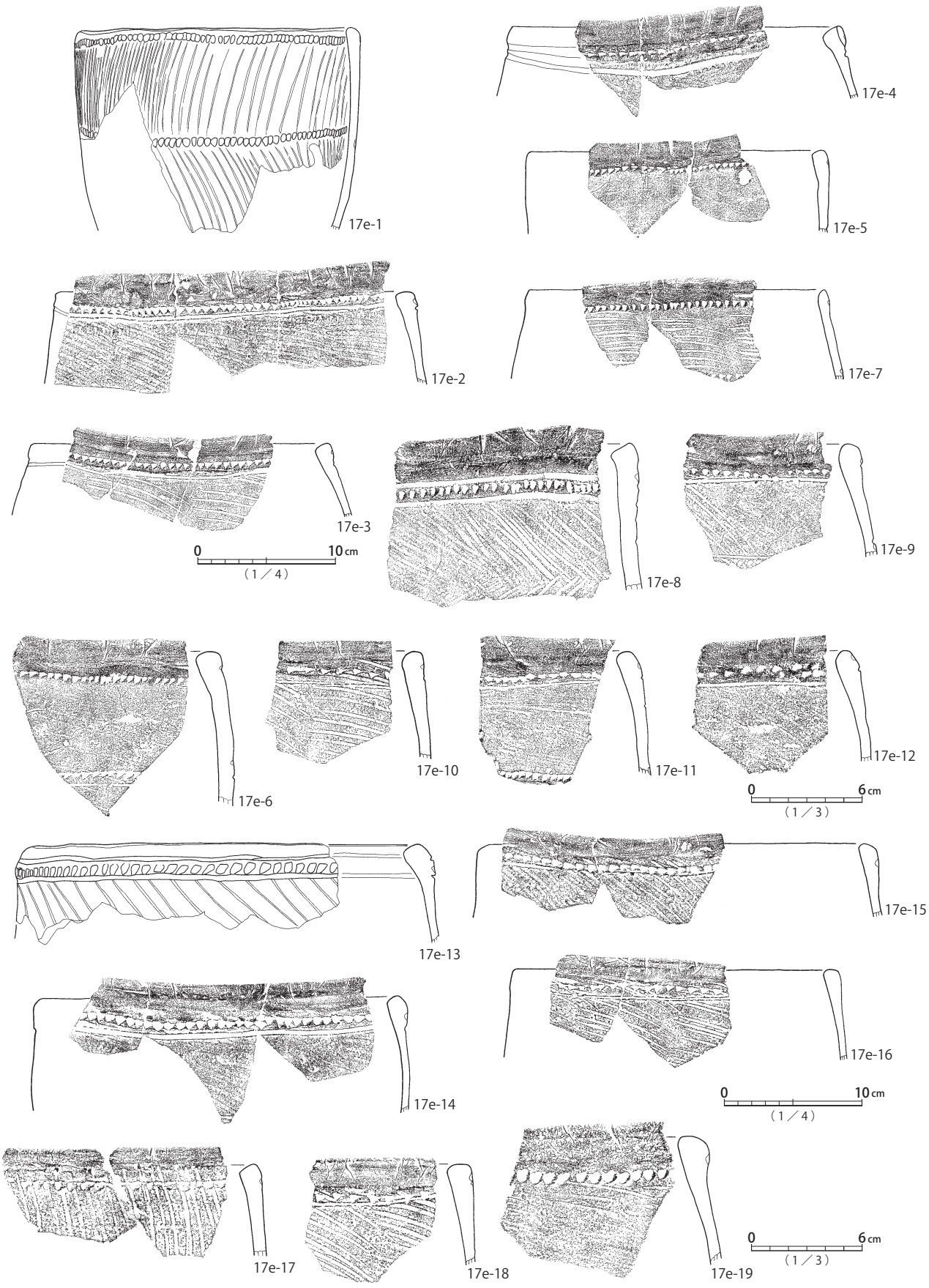
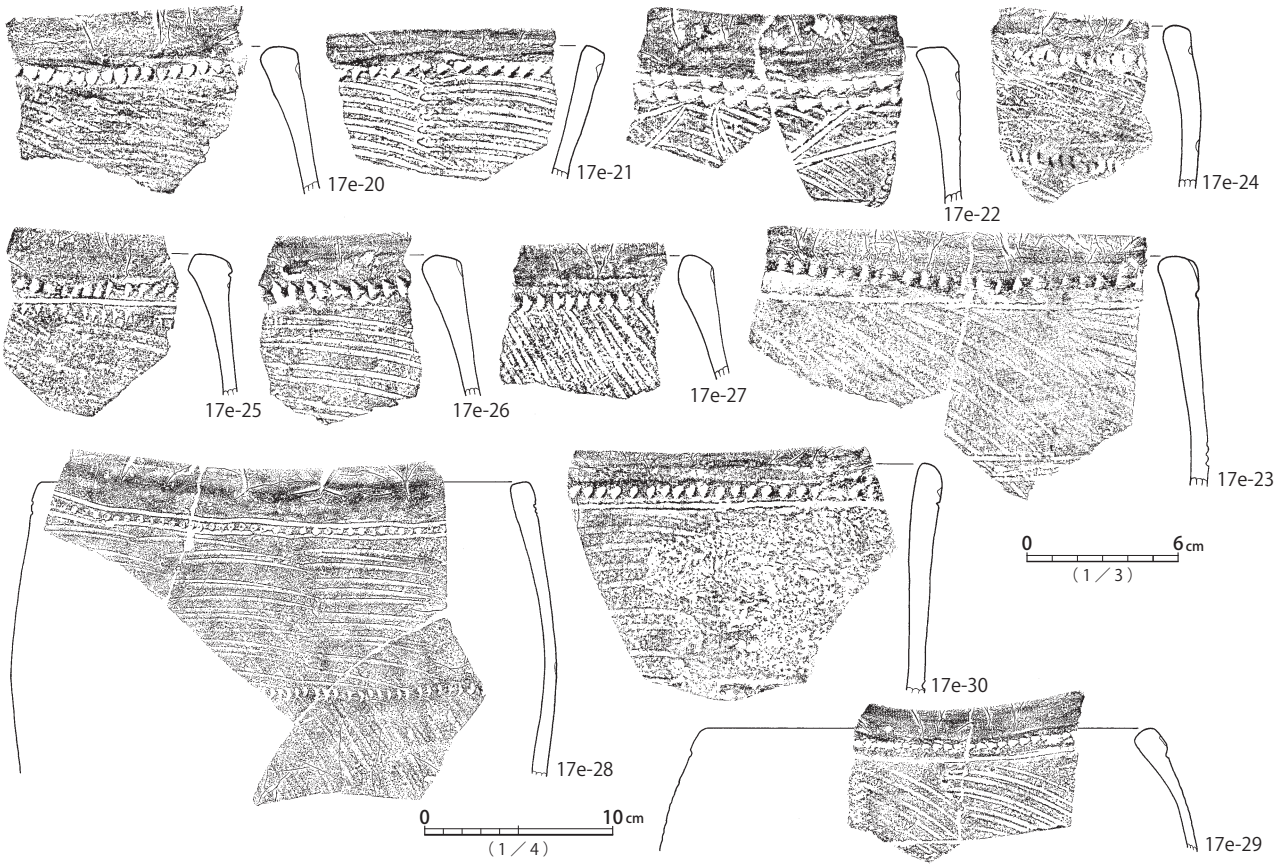


Fig.74　D区包含層 遺物実測図(65)



18類

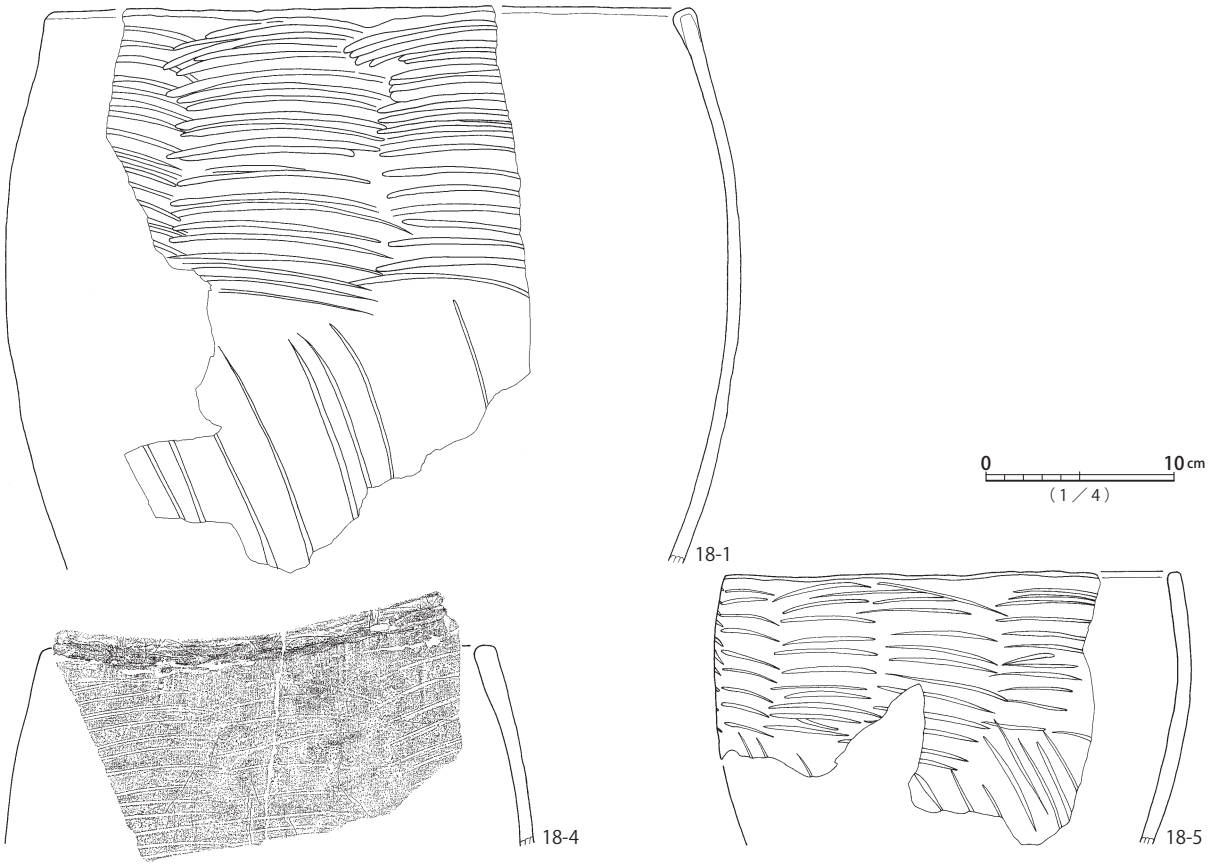


Fig.75　D区包含層 遺物実測図(66)

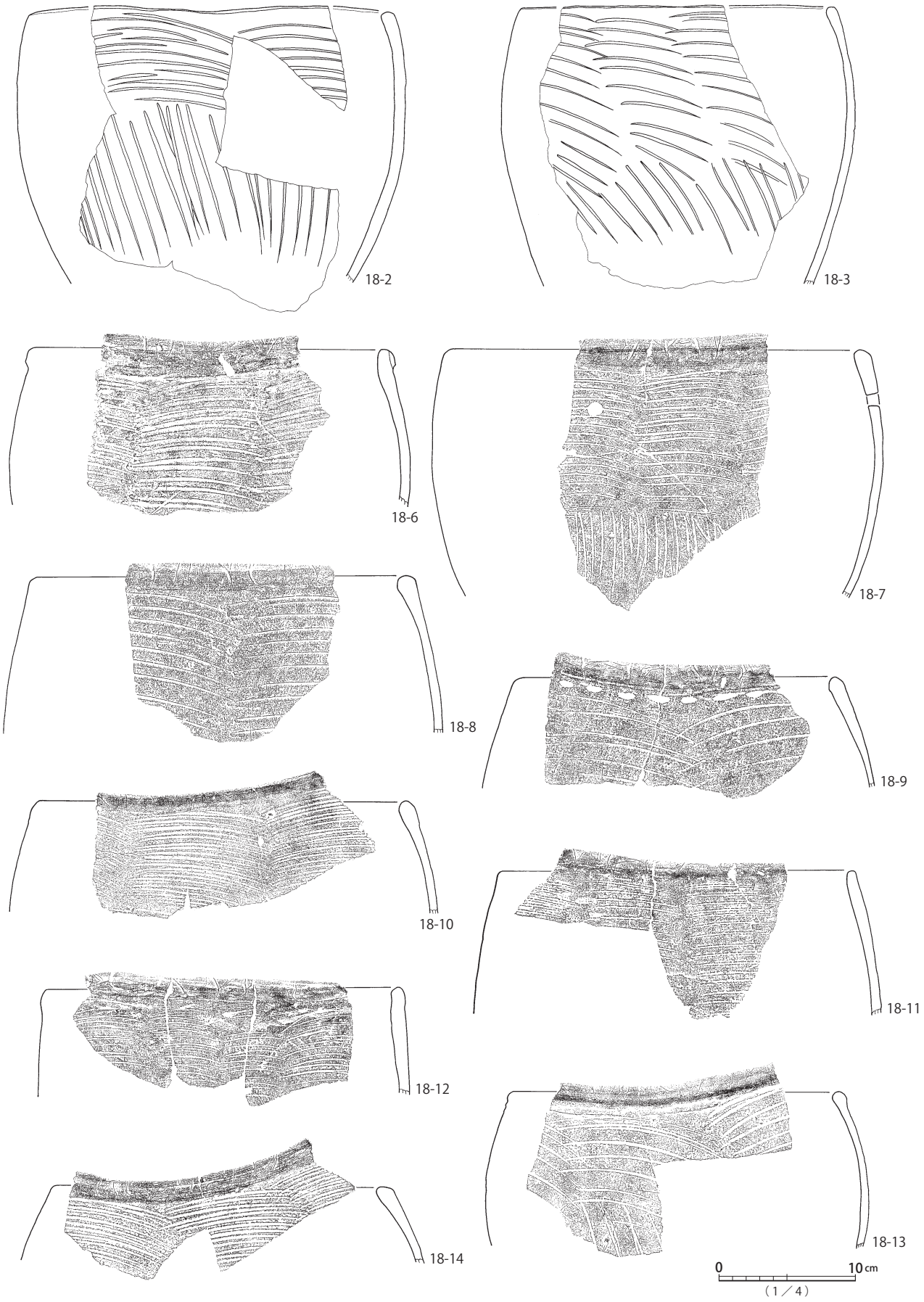


Fig.76　D区包含層 遺物実測図（67）

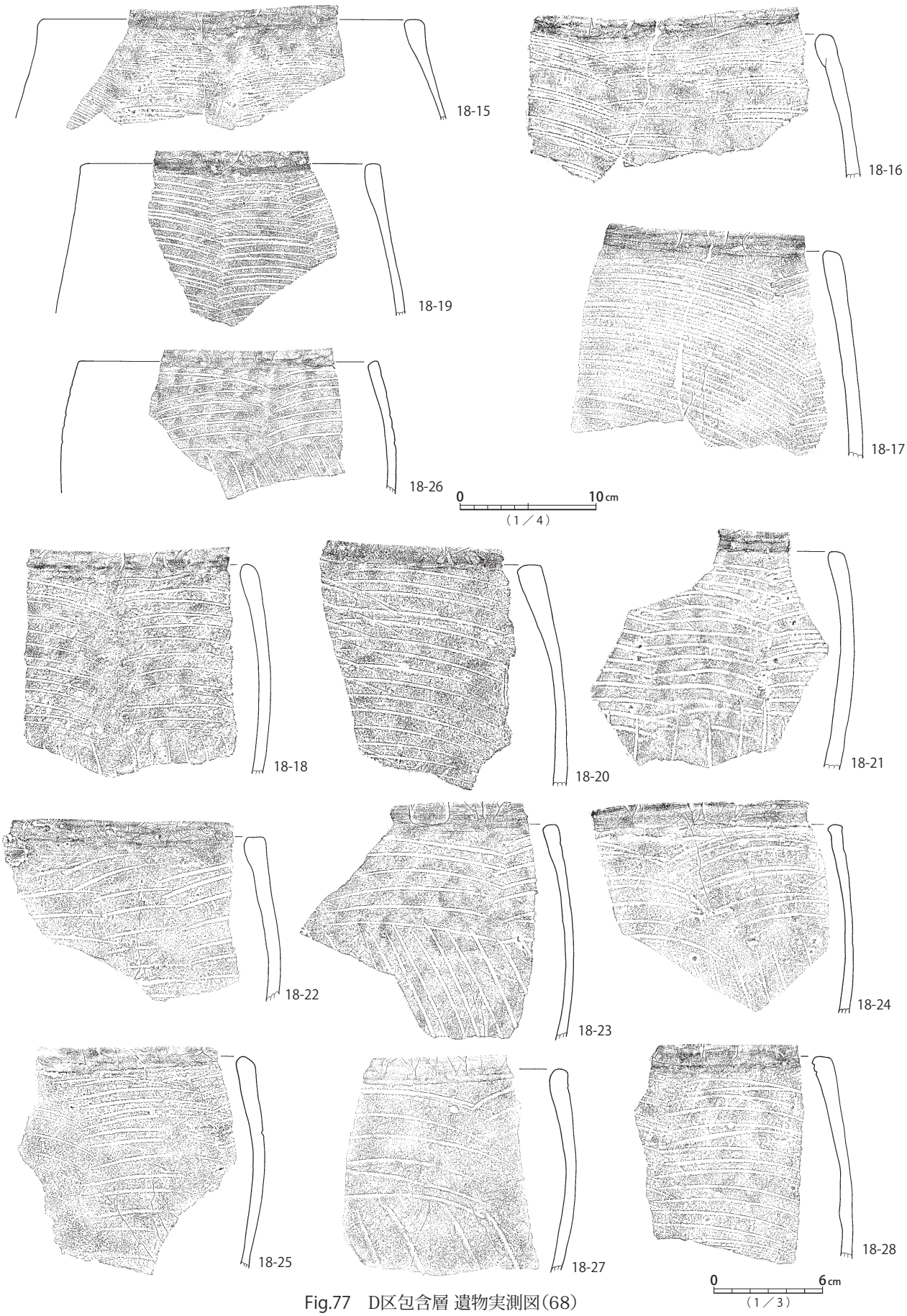
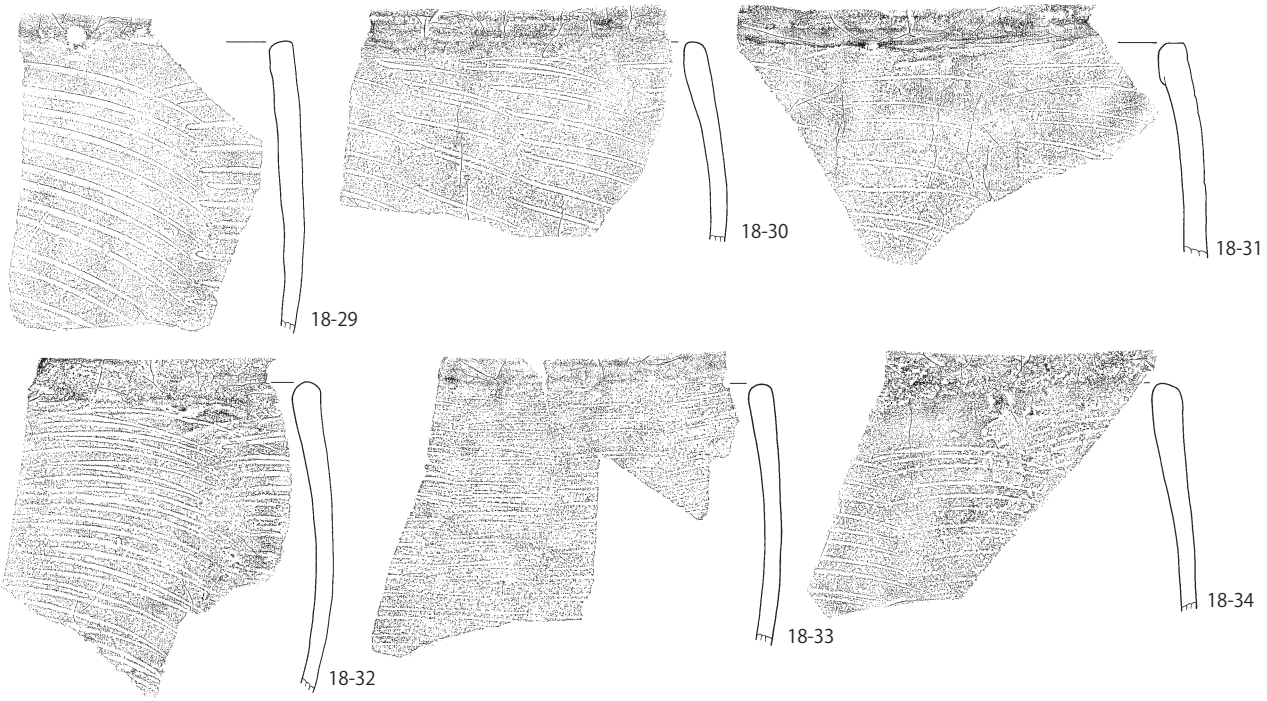
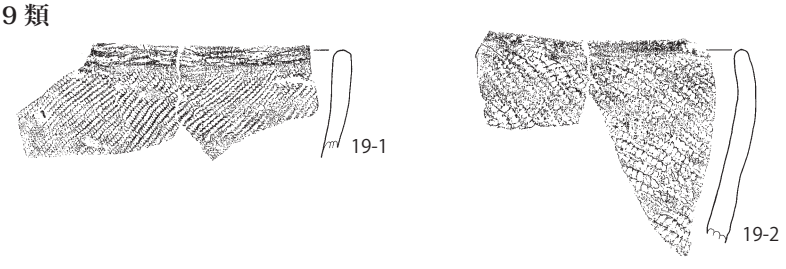


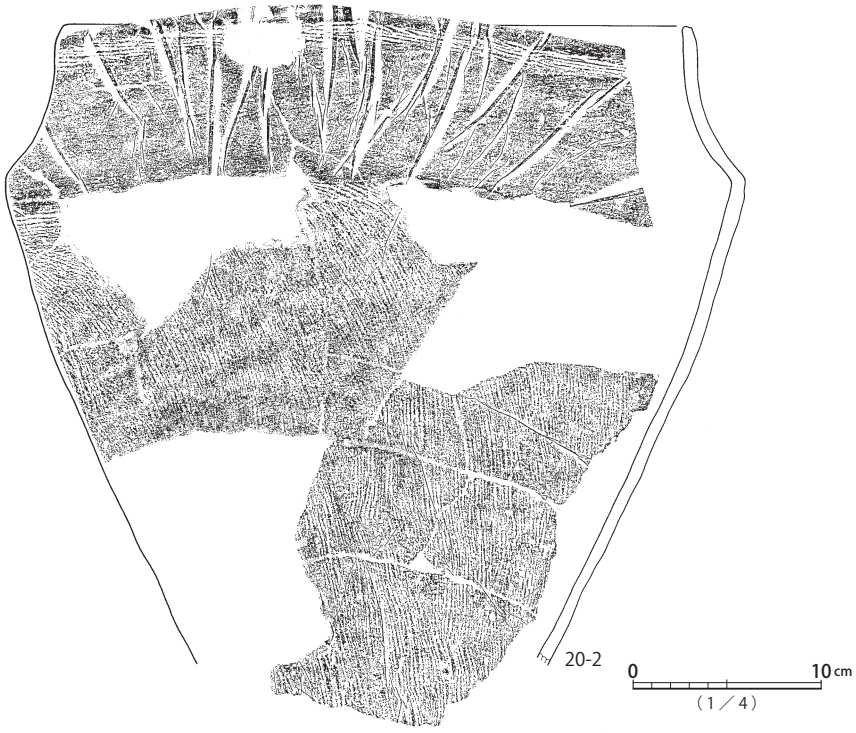
Fig.77　D区包含層 遺物実測図(68)



19 類



20 類



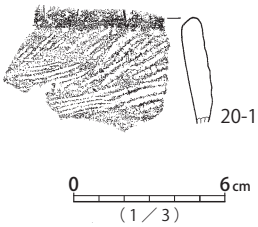


Fig.78　D区包含層 遺物実測図(69)

21－4・36・40・41・74 ～ 83・100は口縁部が「く」の字状に外傾する個体である。21－74 ～ 83・100は深鉢形土器と思われる。口唇部は平坦に面取りされるものが多くみられる。器面は工具等によるナデ調整が基本だが、内外面にヘラミガキが施されている個体も存在する。21－4は浅鉢形土器とみられる。

本類の時期については不明確であるが、散見される口唇部の面取りは18類のものと似通った印象を受けることから、本類の多くは晩期中葉、安行3c式～ 3d式に併行するものと想定しておきたい。

22類　底部（Fig.83 ～ 86、PL.100 ～ 104）

後期から晩期に及ぶと考えられる縄文土器の底部の一群である。底部はヘラケズリ等によって平坦に成形するもの、平坦で網代痕がみられるもの、丸みを帯びるものが存在する。22－12・63・64・91・94は木葉痕がみられる。底径は3 ～ 6cm程度のものが多い。胴部は条線を施文するものと無文のものが多くみられる。条線を施文するものは、器面をヘラケズリによって整えた後、弧状の条線を横もしくは斜め横方向に施文している。22－7・56・88・101・121などのように、棒状の工具によって器面を抉るように条線を施すものもみられ、これらの個体は後期に属するものと思われる。無文のものも基本的にヘラケズリによって器面の調整を行っているが、中にはヘラケズリ後にヘラミガキを施す個体も散見される。また、22－49はヘラケズリ後に単節縄文を施文している。22－81は指頭ナデが行われている。形状は底部から胴部にかけて直線的に立ち上がるものと内弯するもの、球胴状のものがみられる。器高は10cm未満のものが大半である。22－48は底部に種子の圧痕が確認できる。また、内面にはオコゲ状の炭化物が残存する個体も多く確認でき、22－47・48・109・120などのように厚く付着しているものも存在する。

23類　大洞系土器（Fig.86・87、PL.104・105）

大洞系土器の一群である。23－16～18・20・24・26以外は東北地方からの搬入品と考えられる(4)。23－1は浅鉢形土器である。胎土は粗く、器面の摩滅が激しい。口唇部に波状の小突起を有し、その下部に弧線を施文している。口縁部には平行沈線と刺突文が施されている。頸部は粘土帯を貼り付けるとともに一定間隔で沈線を施文し、浮線文状の文様を描き出している。大洞A式に併行するものと思われる。23－2は鉢形土器である。口唇部に工具による刺突が施されるとともに、4単位の小突起が伴う。口縁部には平行沈線が巡り、工具による刺突文が伴っている。胴部は横方向の単節縄文LRが施文されている。外面には炭化物が全面的に付着する。内面はヘラケズリ後にヘラミガキが施される。胎土が非常に緻密であり、器面だけでなく断面も黒色を呈していることから、東北地方からの搬入品とみられる(4)。時期は大洞C1式期とみられる。23－3・4・6・7・12も大洞C1式期の鉢形土器の小片である。23－5・26は沈線文内の刺突文はみられないが、羊歯状文が崩れたような横位の沈線が施文されるため、大洞C1式～ C2式に併行するものと思われる。23－8・9も鉢形土器の口縁部片である。口唇部は細かな波状を呈しており、口縁部には羊歯状文がみられる。23－10・11・13 ～ 15は鉢形土器の胴部片である。いずれも胴部上側に羊歯状文がみられる。23－8・15は器面の摩滅が進んでいるが、いずれも胎土が緻密で硬質であるとともに、黒色に近い色調を呈している。これらは大洞BC式に併行するものと考えられる。23－16は口唇部が小波状となり、弧線文と三叉

21 類

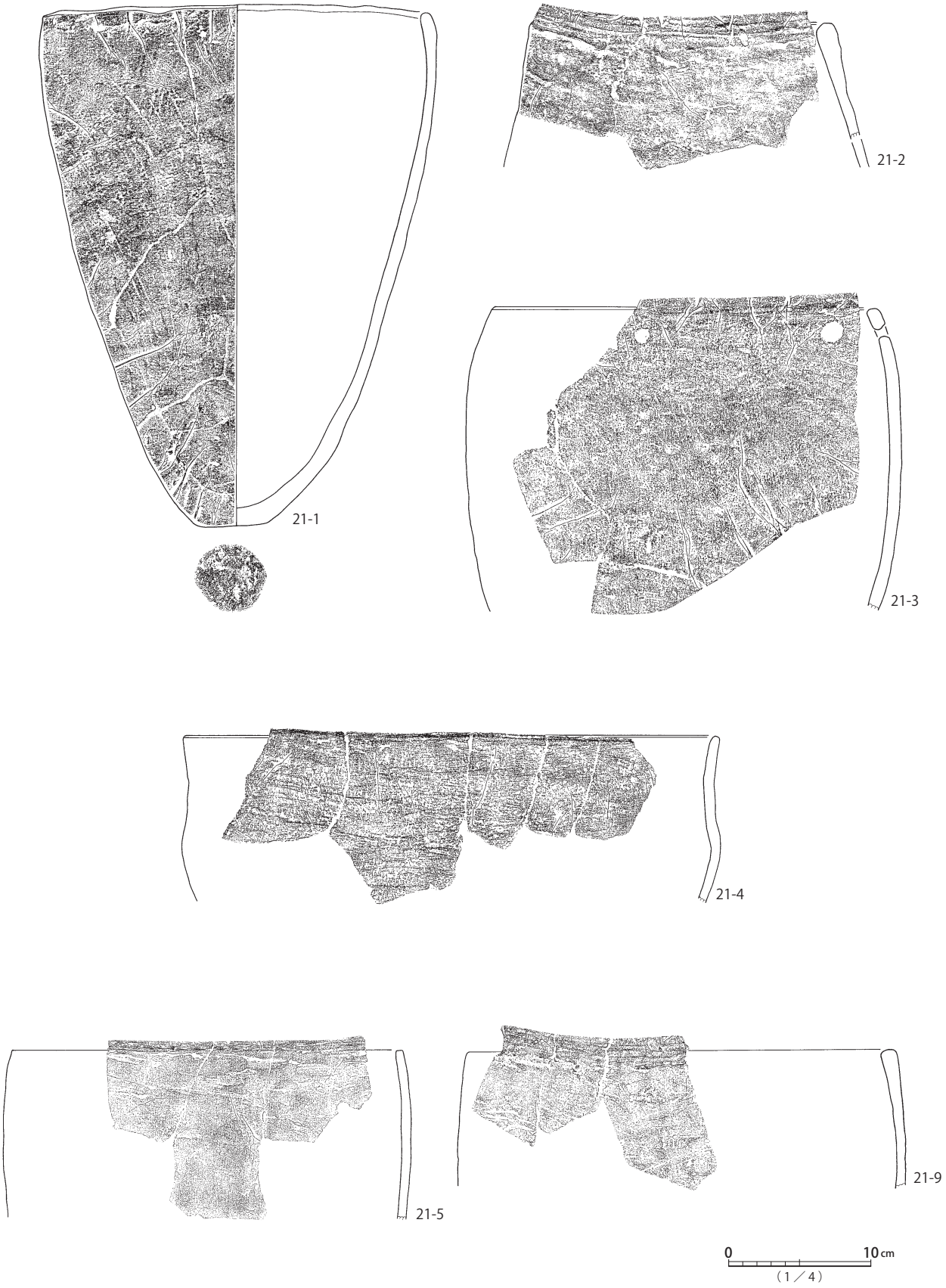


Fig.79　D区包含層 遺物実測図（70）

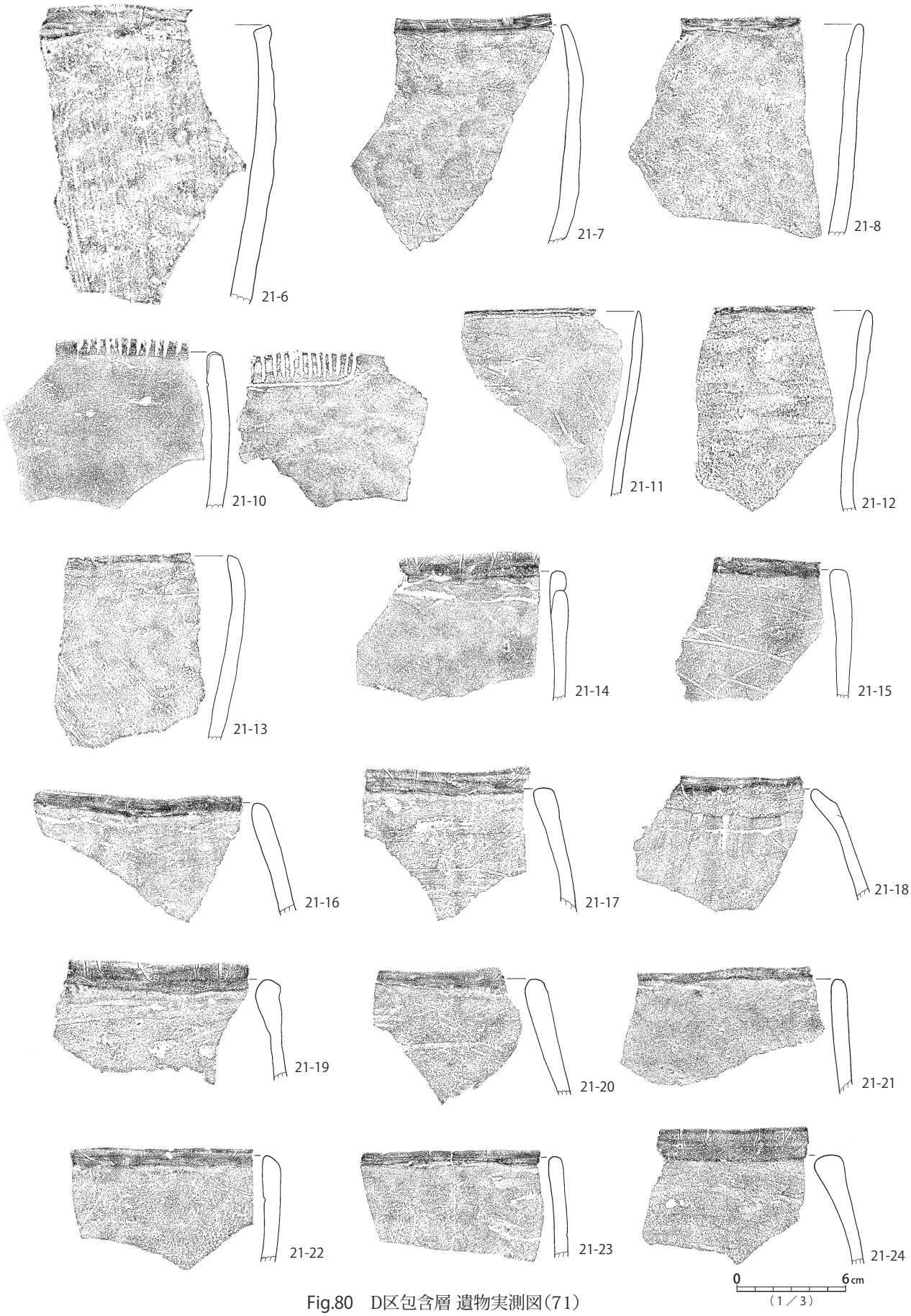


Fig.80　D区包含層 遺物実測図（71）

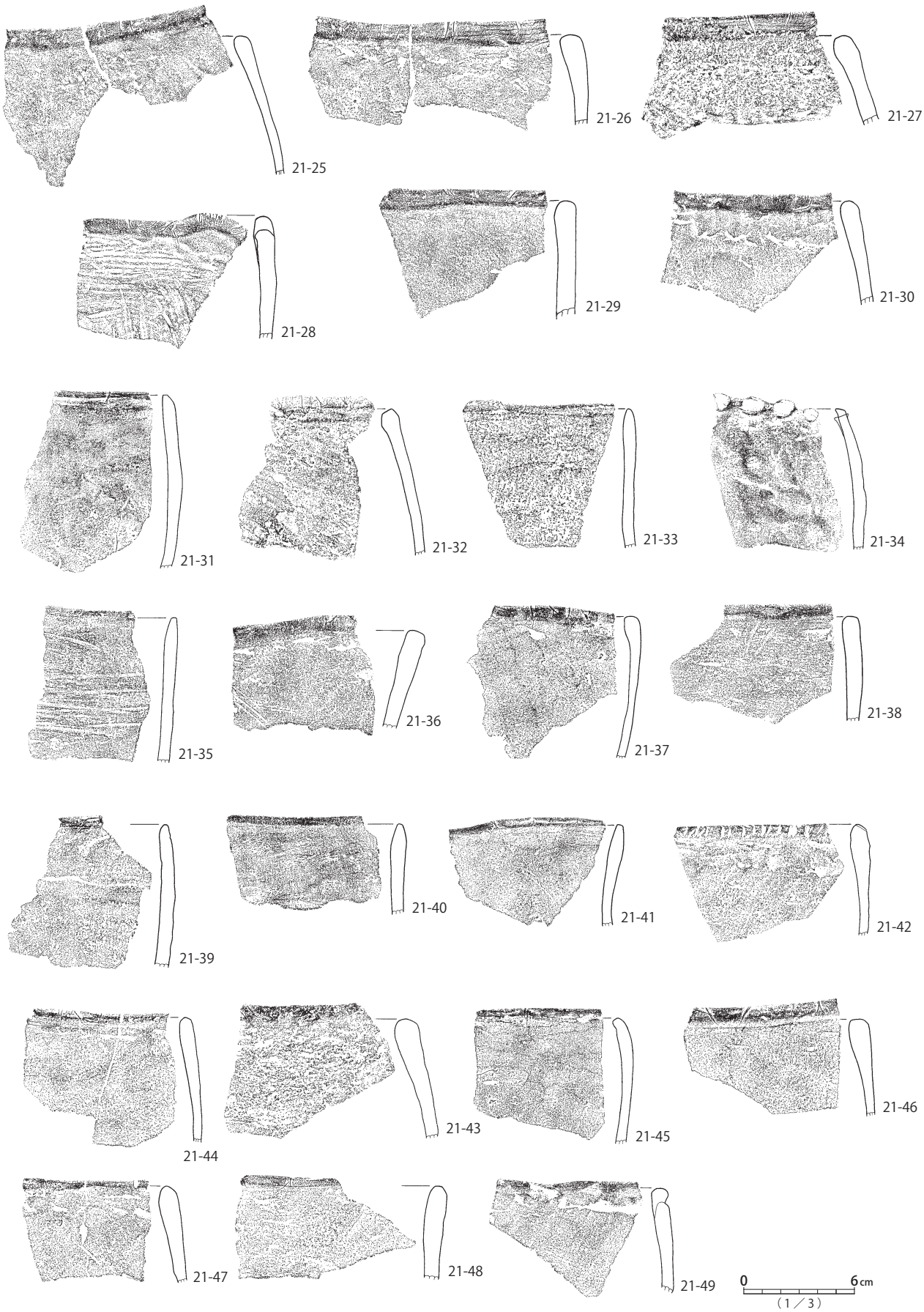


Fig.81　D区包含層 遺物実測図(72)

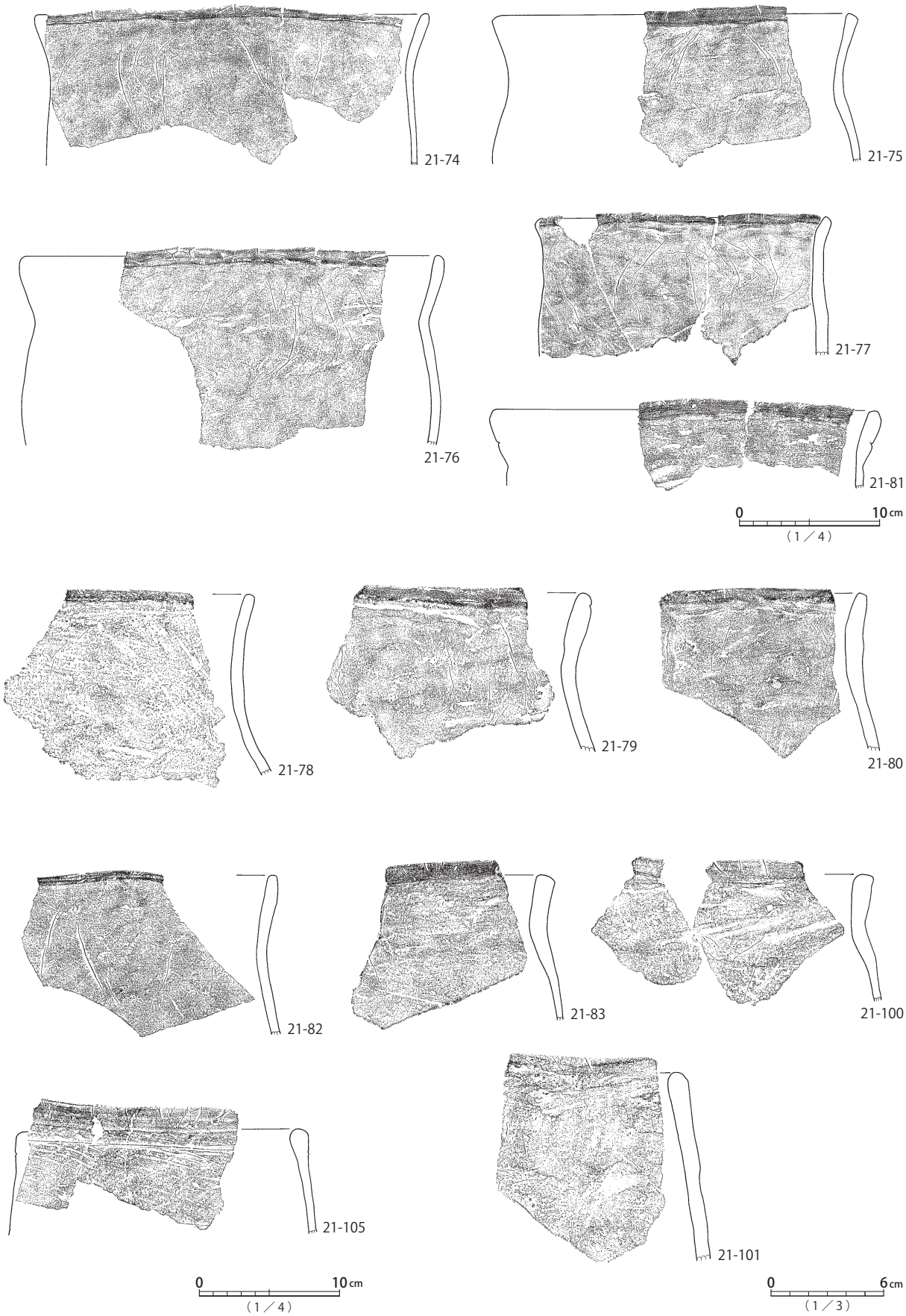


Fig.82　D区包含層 遺物実測図(73)

文が施文されており、大洞系土器に属さない可能性も存在する。23-18は壺形土器の胴部と思われる。胴部に雲形文が施文されており、時期は大洞C1式併行とみられる。23-24は壺もしくは鉢形土器と思われる。口唇部を小波状とし、頸部に入組三叉文が2段にわたり施文される。23-17も小片のため全体像はつかめないが、同様の文様が施されているものと思われる。これらは大洞B式に併行するものとみられる。23-20は浅鉢形土器で3個1単位の小突起を口唇部に有する。文様構成から大洞C1式からC2式に併行するものと思われる。

24類　注口土器（Fig.87、PL.105）

注口土器の注口部をまとめたものである。24-1・3は爪形文を施した隆帯文とブタ鼻状貼付文や沈線を伴った貼付文が施されている。これらは安行2式に併行するものと思われる。24-2は注口部直下に押圧を伴ったU字状の貼付文と沈線が施されている。安行3b式に属する可能性がある。24-4は注口部の付け根の両脇にブタ鼻状貼付文を伴い、注口部の下部に沈線を伴った貼付文が施されている。安行2式～ 3a式に併行するものとみられる。

25類　浮線文系土器（Fig.87、PL.105）

浮線文を施文する土器群である。出土した個体はわずかである。25-1は浅鉢形土器である。胎土は多量の砂粒と小礫を含んでおり、粗い印象を受ける。また、器面は内外面とも強く摩滅している。器面は赤みがかった色調を呈している。胴部上半には浮線による工字文が施文される。25-3も浅鉢形土器と思われる。器面はやや摩滅している。口縁部には横位の隆線文が描き出されている。また、内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。25-5も浅鉢形土器の胴部片である。25-1と同じく浮線による工字文が施文されるが、こちらのほうが文様がシャープである。内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。胎土は緻密であり、硬質である。器面は黒色を呈している。本類は晩期後葉の千網式に併行する時期のものと思われる。

土製品

本遺物包含層出土の土製品である。なお、土器片円盤以外の土製品は、本書の構成上の都合で第7節に記載している（Fig.121、PL.113）。

土器片円盤（Fig.88・89、PL.106・107）

本遺物包含層からは土器片円盤が大量に出土している。成形は基本的に土器片の縁辺を敲打することによって行われているが、中には研磨を行うものもみられる。大半が土器の胴部片を用いているが、口縁部や底部を利用しているものも少量ながら存在する。

以下、土器片円盤を、最大径が7cm以上のものを「大型」、7cm ～ 4cmのものを「中型」、4cm以下のものを「小型」とし、形状から「円形」「イチョウ形」「三角形」の3種に細別した。

1 ～ 128は円形の土器片円盤である。イチョウ形のものとともに、土器片円盤の主体となる形状である。そのうち1 ～ 16が大型、21 ～ 80が中型、84 ～ 128が小型に属する。数量的には中型のものが多い。形状は正円形に近いものから楕円形のものまでがみられる。大型のものは形が歪で粗

22 類

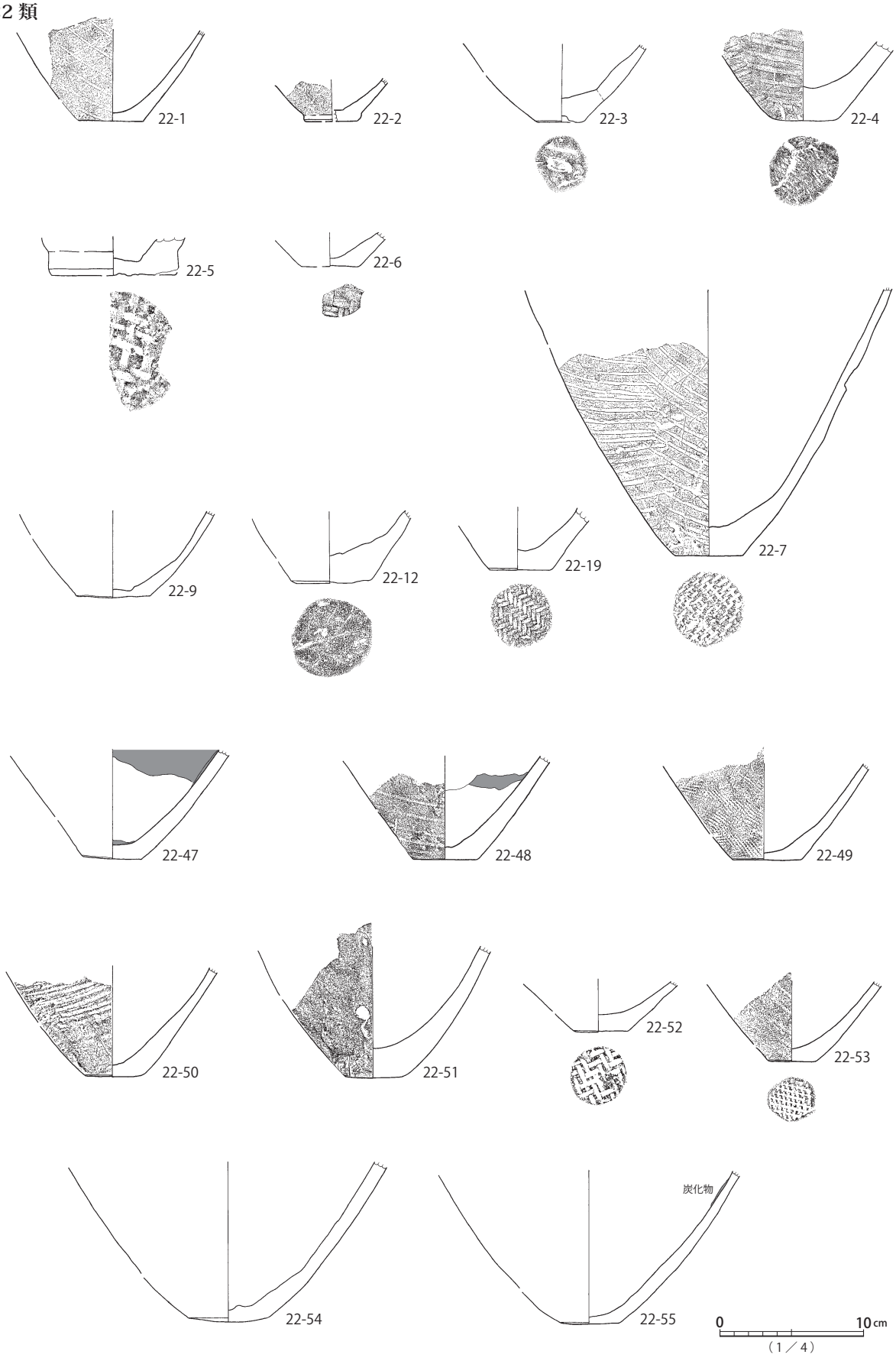


Fig.83　D区包含層 遺物実測図（74）

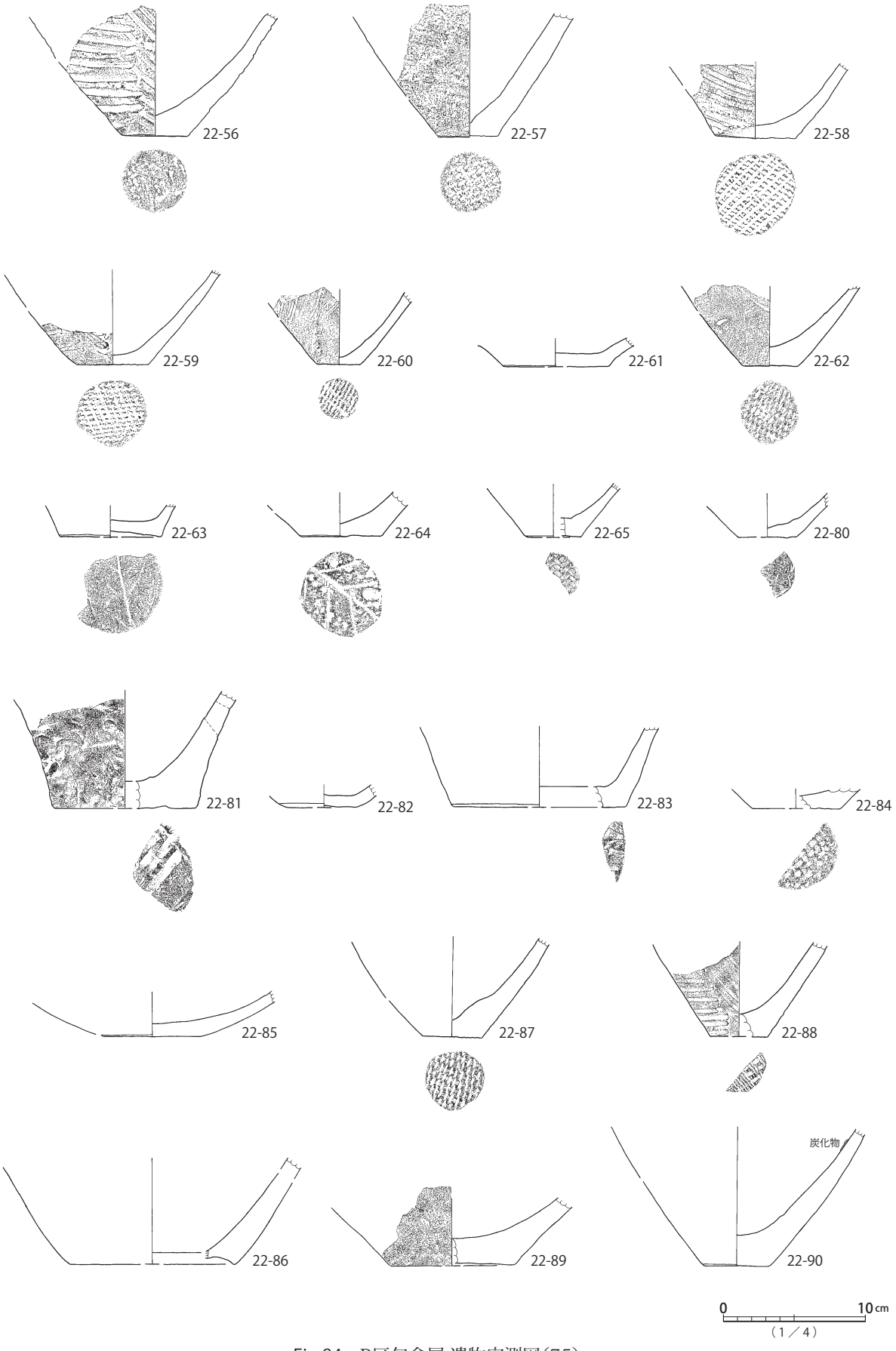


Fig.84　D区包含層 遺物実測図（75）

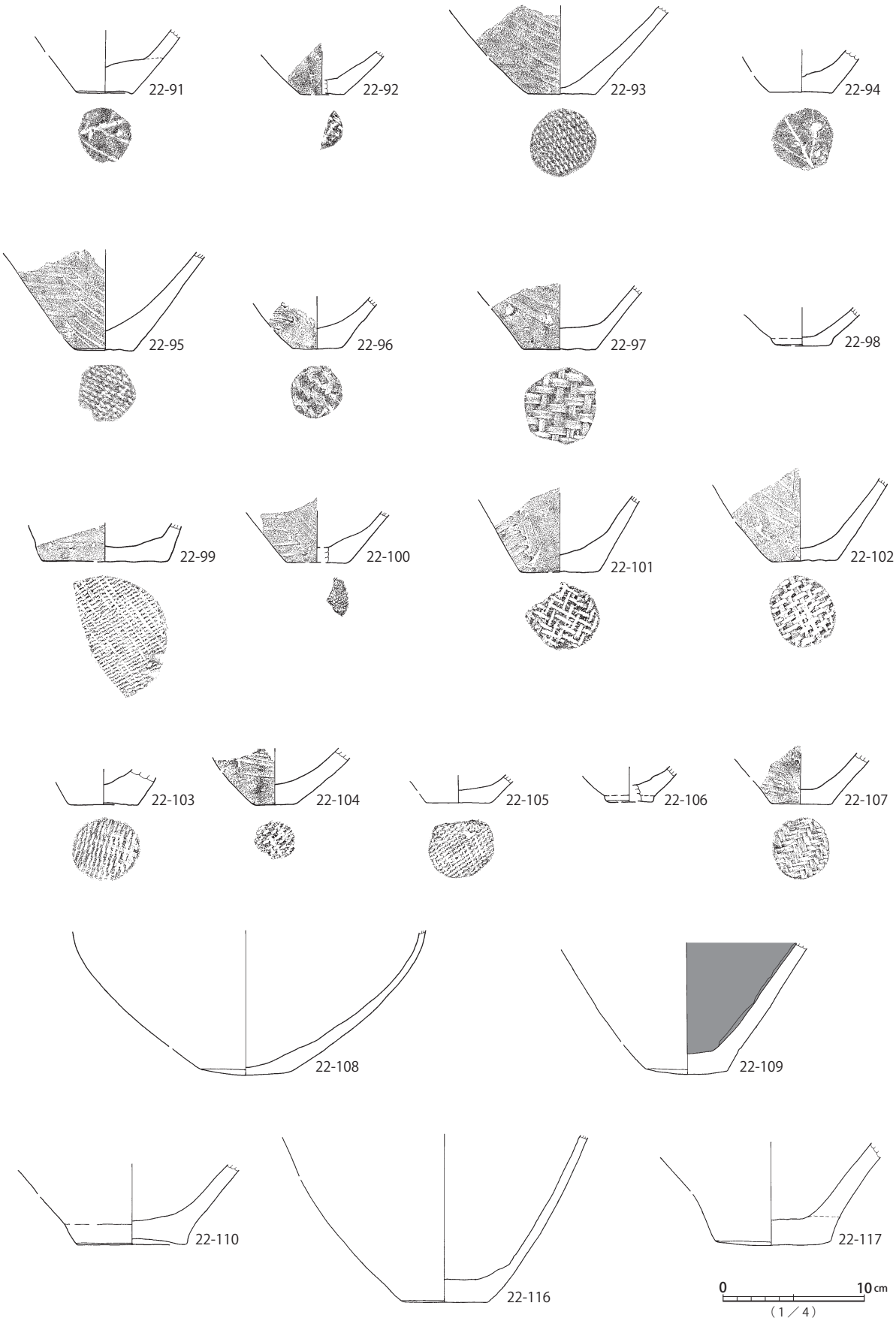
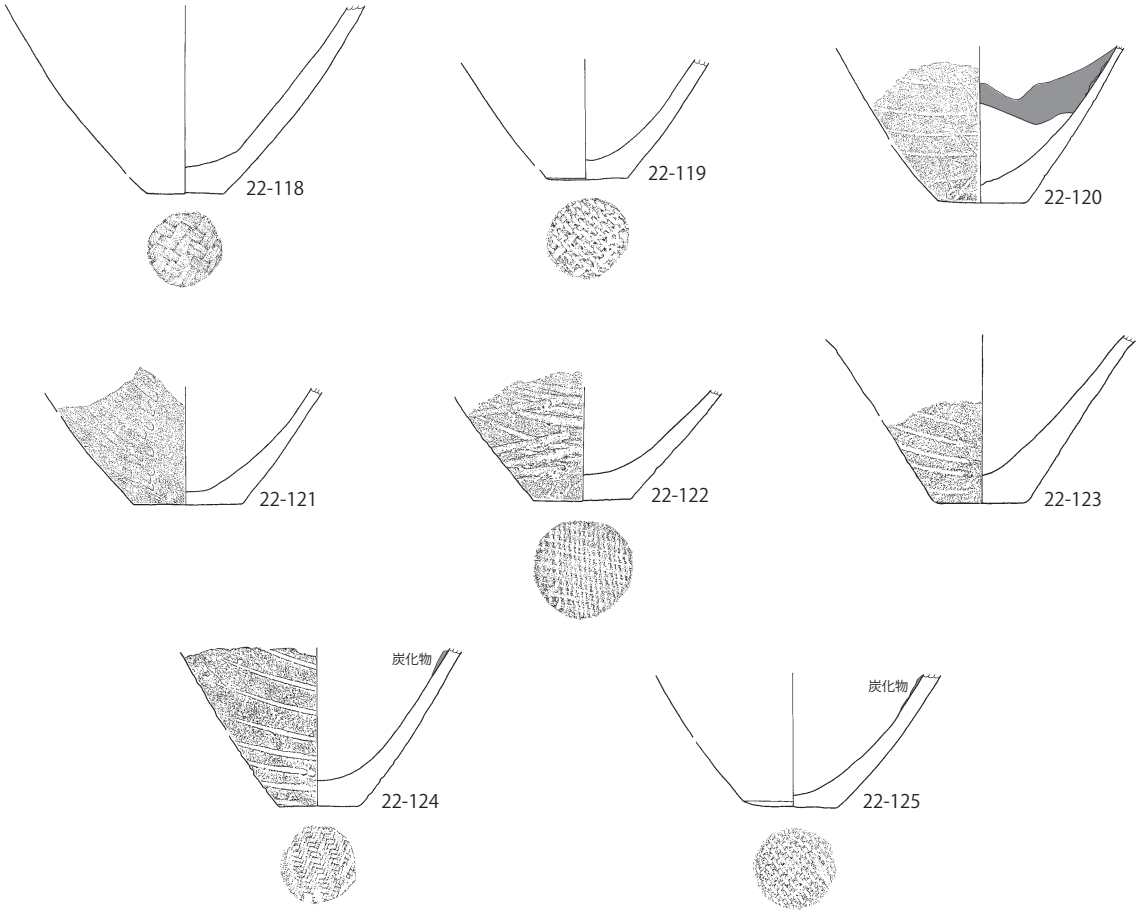


Fig.85　D区包含層 遺物実測図（76）



23 類

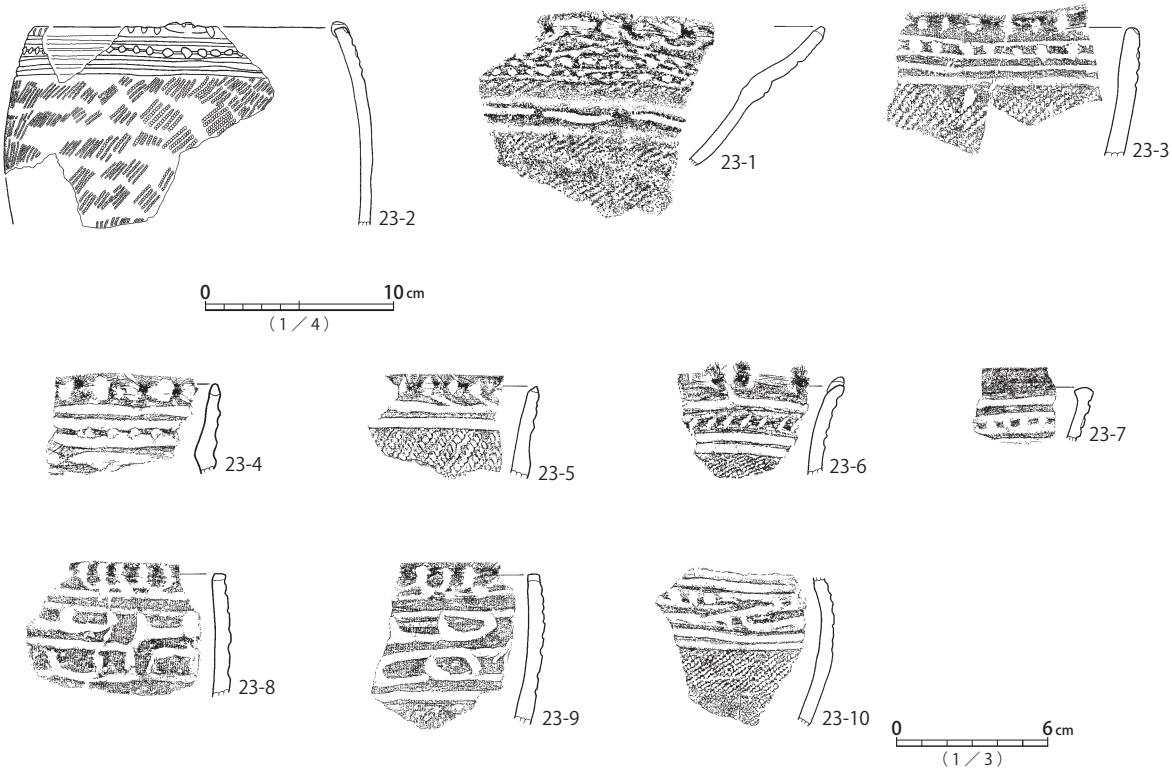
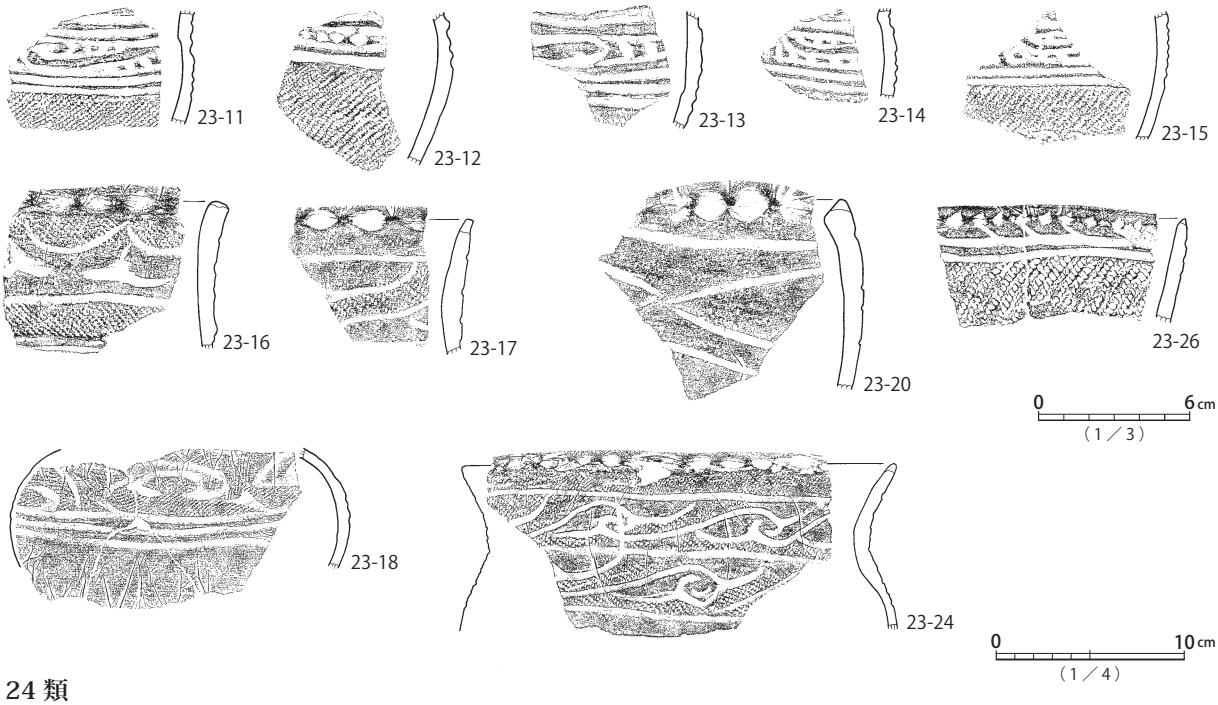
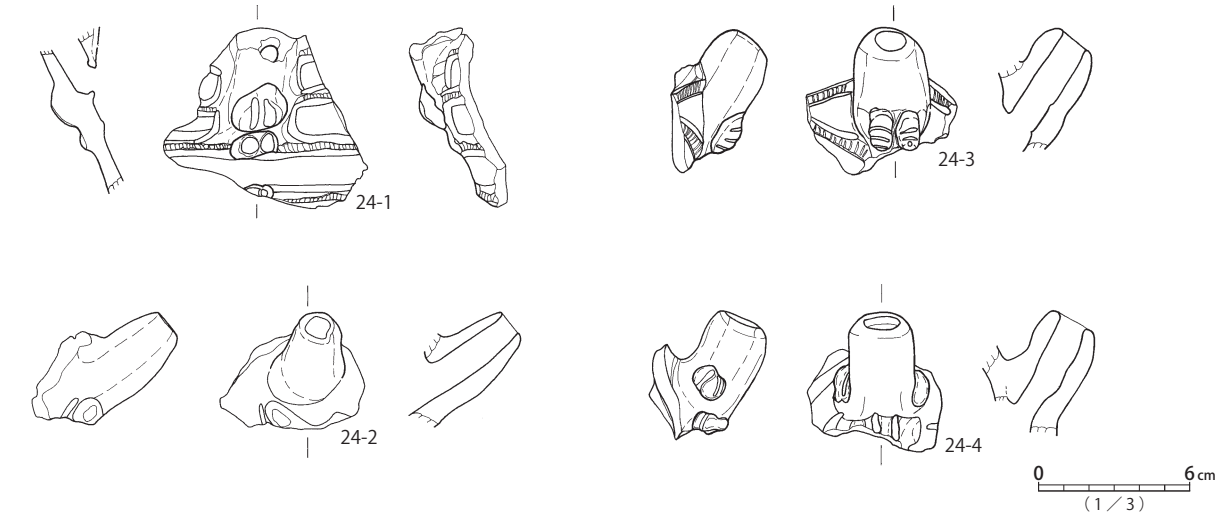


Fig.86　D区包含層 遺物実測図（77）



24 類



25 類

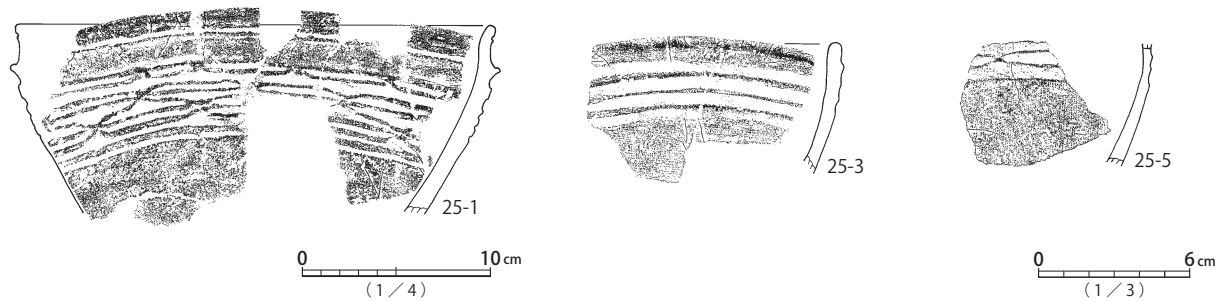


Fig.87　D区包含層 遺物実測図（78）

く成形されているものが多く、中型、小型になるにつれ形の整ったものが多くみられるようになる。4は底部を土器片円盤に利用したものである。

141 ～ 265はイチョウ形の土器片円盤である。円形の土器片円盤とともに、土器片円盤の主体となる形状である。ただし、141 ～ 235は半円や三日月形に近い形状をとっており、141 ～ 179が大型、192 ～ 215が中型、225 ～ 235が小型に区別される。242 ～ 265はイチョウ形の主体となる形状を呈するものである。この形状のもののみ長軸・短軸が7cmを超えるものを「大型」とする。そうすると、242 ～ 248が大型、252 ～ 265が中型となる。小型も一定量存在するが、掲載はしていない。242は長軸・短軸ともに10cmを超える大型のものだが、やや歪な形状をとっている。こちらも中型のものが主体で、形の整うものが多い。

339 ～ 383は三角形状の土器片円盤である。整理作業中、一辺一辺が直線的で整った三角形状の破片がみられたため、今回、三角形状の土器片円盤として取り扱った。これらは正三角形や二等辺三角形の形状を呈している。339 ～ 346が大型、349 ～ 377が中型、379・383が小型となる。円形やイチョウ形の土器片円盤とは違い、どの大きさでも非常に整った形状を呈している。また、中型のものが中心であり、大型・小型のものの数量は限定的である。三角形状の土器片円盤は、円形・イチョウ形のものに比べて圧倒的に少量であり、整った形状のものが多いことから、前者の2つとは異なる用途が存在していた可能性が想定される。

石製品（Fig.90、PL.108）

本遺物包含層からは石製品がわずかに出土している。石1は無茎の石鏃である。側面の調整剥離がまばらであり、やや雑な作りの印象を受ける。未成品の可能性もある。石3は有茎の石鏃であり、丁寧な調整剥離が施されている。石4も有茎の石鏃であるが、石3に比べると粗雑な作りに思われる。石5は無茎の石鏃である。石3と同様、丁寧な調整剥離が施されている。石6は無茎の石鏃未成品である。石核から剥片を採取し大まかに形を整えた後、調整剥離が行われずに廃棄されたものと思われる。石2は筒状の不明石製品である。中央の穿孔は貫通せず、表面には擦痕と工具によるケズリの痕跡が認められる。石7は砥石である。全面が研磨によって強く摩耗している。石8は石製紡錘車である。断面は円錐状の形状をとり、表面には加工の際の工具痕が確認できる。石2・7・8は遺物包含層形成後に混入したものと思われる。石9（PL.108）は樹木の化石である。

植物遺存体・動物遺存体（Fig.90、PL.108・117 ～ 120）

本遺物包含層からは自然木、種子類、動物骨が出土している。

自然木については、明確に木製品と断定できる個体は確認できなかった。出土総量についてはTab.50にまとめている。本書には一部のみ掲載した（PL.117・118）。また、一部について樹種同定作業を行っている（第4章第2節参照）。木1は木製品の可能性がある木片である。上部に意図的な穿孔らしき穴が開いている。

種子類は261点が出土している（Tab.51）。そのうち54点をサンプルとして同定作業を行っている。同定された54点のうち、カヤが11点、カシが29点みられた。おそらく食用として持ち込まれたものと思われる。また、モモの種子が4点出土している（PL.118 ～ 120）。

土器片円盤

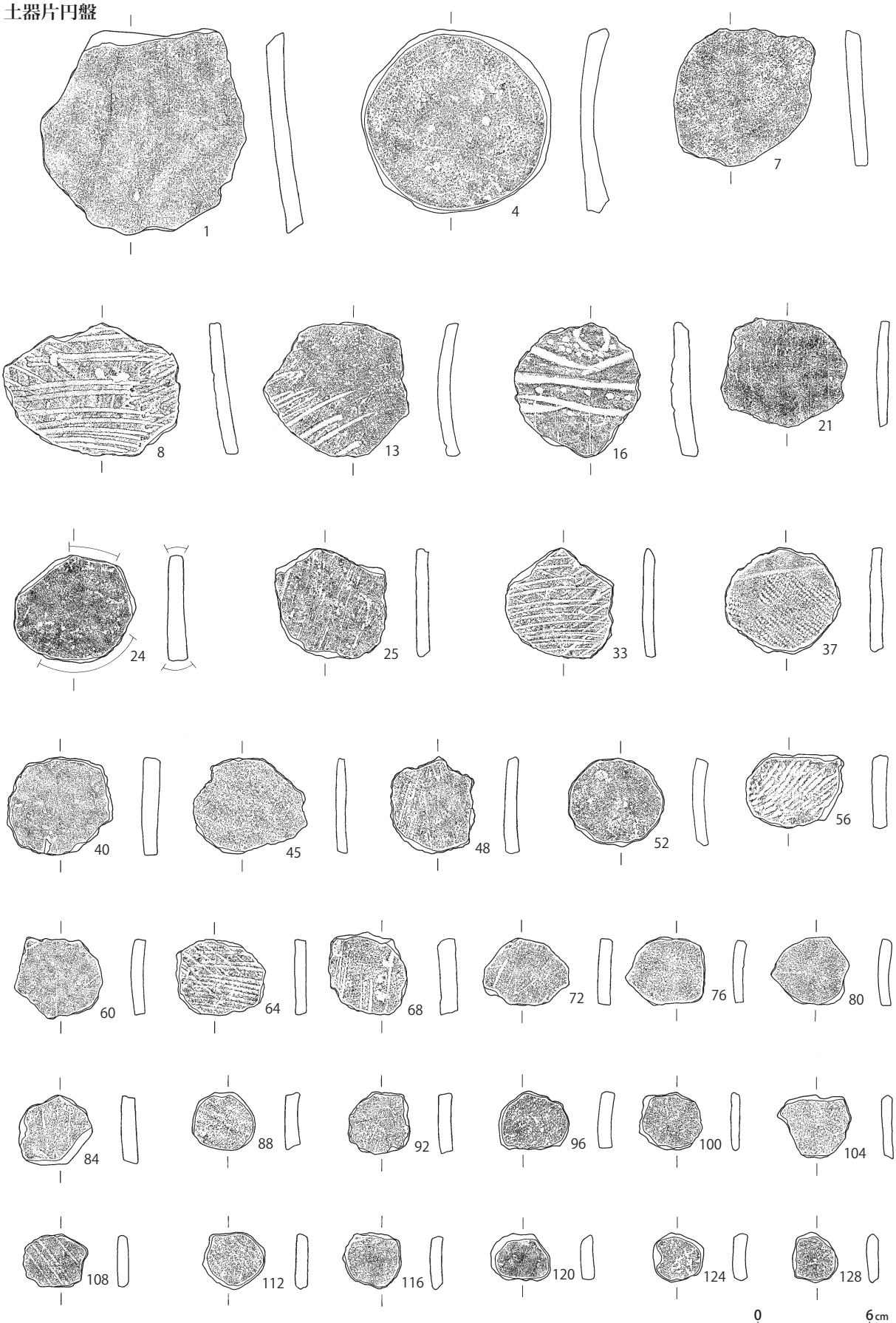


Fig.88　D区包含層 遺物実測図(79)

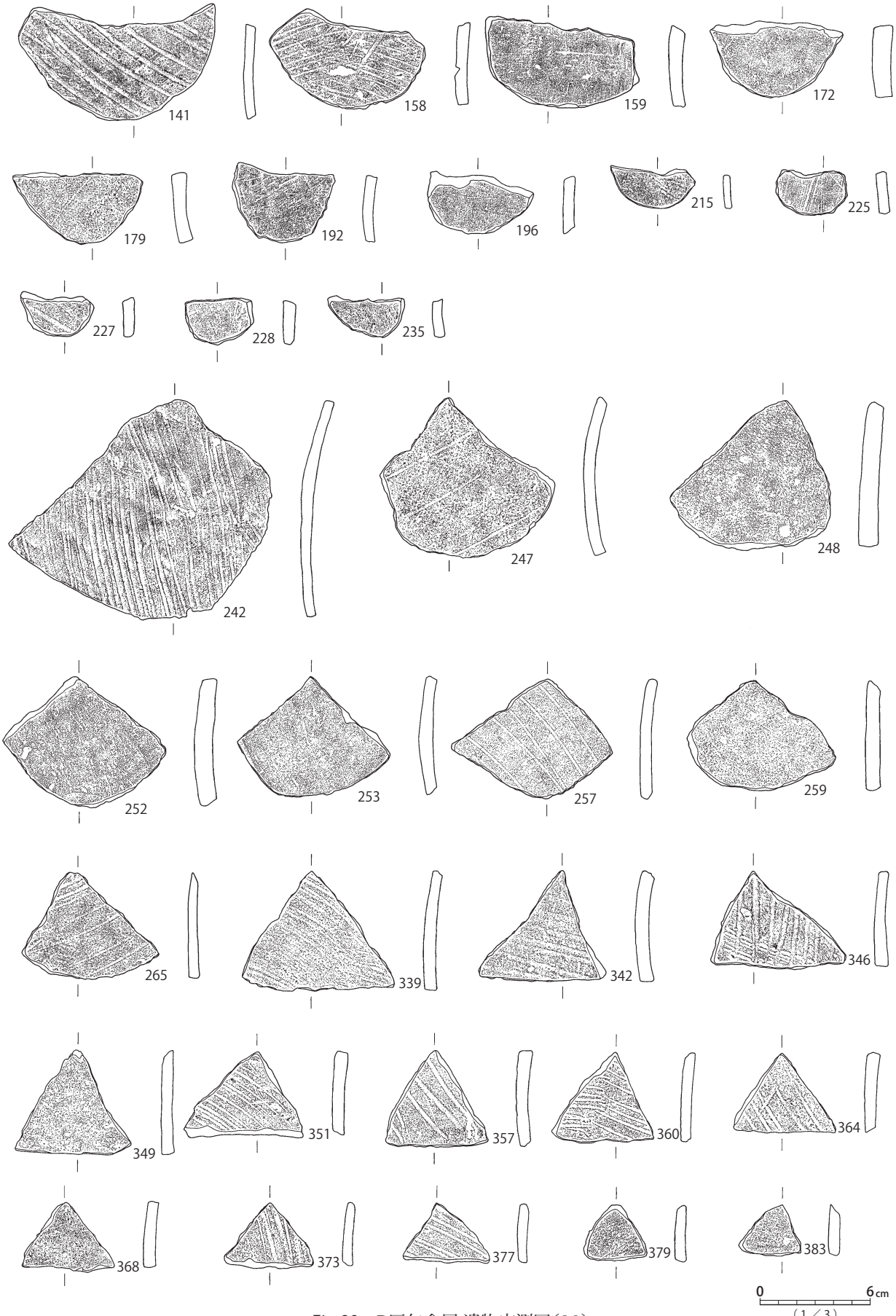


Fig.89　D区包含層 遺物実測図(80)

動物骨に関しては、出土遺体の鑑定を行っている。詳細は第４章第３節を参照いただきたい。

B 区古墳時代遺物包含層（Fig.6・90・91、PL.108）

B区の中央部のやや東よりに存在する。一部B区008号の覆土上層に形成されている。また、B区008号の土層断面図から、包含層形成時に竪穴建物の中央部から南壁・東壁にかけての覆土と壁面を削平していることが確認できる（Fig.91）。上層には掘立建物跡B区014a・b号の柱穴が存在する。

出土遺物は縄文時代から古墳時代までの土器片や円筒埴輪片等がみられるが、主体は古墳時代前期から中期の土師器片と円筒埴輪片である（Fig.90、PL.108）。２～７は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される土器片である。２は甕形土器の底部、３は広口壺形土器の口縁部、４～６が壺形土器の胴部、７が鉢形土器の底部とみられる。これらの弥生土器は下層のB区008号から混入したものと推測される。９～12は古墳時代前期の土師器片である。９は甕形土器であり草刈２式～３式（大村2009）に位置づけられるものとみられる。10～12は高杯形土器の破片であり、いずれも草刈２式に属すると思われる。さらに、B区014号で掲載した１～６の古墳時代前期から中期の高杯形土器片や10の円筒埴輪片（Fig.98、PL.110）も本来この包含層に含まれる遺物と考えられる。写真掲載のみだが、石１は縄文時代の黒曜石製の石鏃である。また、中近世の陶磁器類、軽石、鉄滓も出土しているが、上層のB区014a・b号や後世の混入と推測される。

本包含層の形成時期は、出土遺物から古墳時代前期～中期と考えられる。山新遺跡の本報告地点では当該時期の遺構は確認されなかったが、他の調査地点において古墳時代前期から中期の集落や古墳群が確認されていることや（北見・坂元2018）、調査区北西に姉崎二子塚古墳が存在することから、遺物はこれらの遺構から流入したものと推察される。

第２節　竪穴建物跡

A区004号（Fig.91・93、PL.9・10・109）

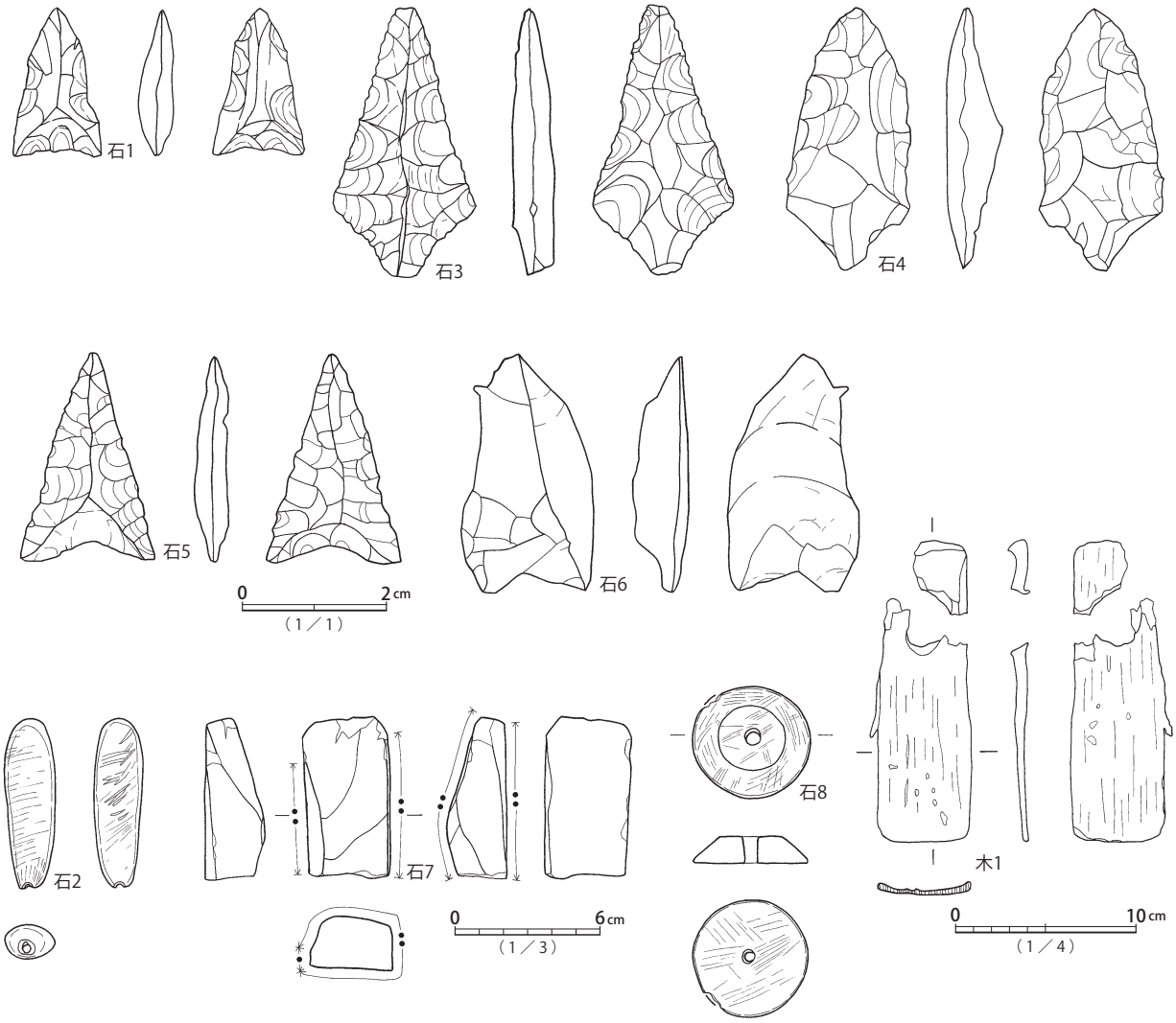
A区の南東部に存在する。遺構の南東側は調査区外へと延びており、およそ３分の１程度を検出するにとどまった。調査区壁際は調査区内の排水のために掘削した排水溝によって削平されている。

規模は不明で、深度は最大12cmである。形状は円形か楕円形とみられ、主軸はほぼ北を向いている。床面は地山砂層がわずかに締まる程度で、明確な硬化面や壁溝は確認されなかった。ピットは３基を検出した。P1は排水溝によって削平されていたが、土層断面によって確認ができた。深度は19cm以上である。P2は調査時における深度のデータを確認できなかったため、不明である。P3も排水溝によって約半分が削平されている。深度は約7cmである。P1もしくはP3が柱穴とみられ、P2は貯蔵穴と想定される。

遺物は弥生土器が47g、石製品が437g出土した（Fig.93、PL.109）。１は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される甕形土器である。接合・実測が可能で掲載できたものは一部であるが、同一個体とみられる破片が遺構の床面直上から出土した。大部分の破片がP2の周囲に集中している。土器の内外面の調整は工具ナデであり、口唇部を指頭押捺によって波状に成形する。２は磨石であり、壁際から出土した。全面に摩耗痕がみられるほかに、側面等に敲打痕も確認される。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半（宮ノ台式期）と考えられる。

石製品・木製品



B 区包含層

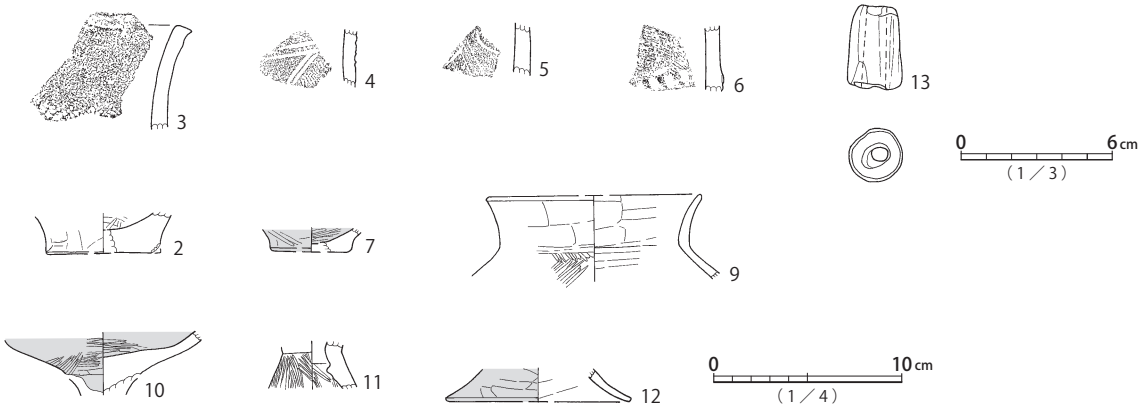


Fig.90　D区包含層 遺物実測図(81)・B区包含層 遺物実測図

B区008号（Fig.91・93・94、PL.13・14・26・109）

B区の中央部やや東よりに存在する。遺構の北端は溝B区019a号によって削平を受け、遺構内は掘立柱建物跡B区014a・b号の柱穴によって削平を受けている。遺構周辺の地山砂層は鉄分等の影響で固結しており、遺構掘方を明確に検出することができた。

規模は長軸（5.8）m、短軸（5.2）m、最大深度は21cmを測る。形状は円形で、主軸は長軸の東西方向の可能性がある。床面の硬化面や壁溝は確認されなかった。覆土上層にはB区古墳時代遺物包含層が形成されており、形成時に本遺構の中央部から南壁・東壁にかけての覆土と壁面の一部が削平されている。ピットは3基を検出した。P1の深度は約10cm、P2の深度は約20cm、P3の深度は2cmである。P2は柱穴とみられ、P1は貯蔵穴と想定される。炉は確認することができなかった。また、調査図面内で炭化物かと表記された物体が存在していたが、整理作業時に検証できなかったため、本書内ではそのまま炭化材として扱い遺構平面図内に記載した。

遺物は縄文土器31g、弥生土器5,750g・石製品402g、土師器2g、中近世陶磁器類10g、石類70g、鉄滓類9gが出土した（Fig.93・94、PL.26・109）。1は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される壺形土器である。口縁部が欠損するが、頸部に単節縄文が施文され、全面に赤彩が施されている。2は宮ノ台式の甕形土器による転用甑である。ほぼ完形であり、底面に焼成後の穿孔が施されている。土器の上半部と下半部がやや離れた位置から出土している。3・4も宮ノ台式の甕形土器である。3は破片が建物内でやや散乱した状態で出土した。4は半完形の個体で胴部が欠損するが、口縁部と底部がまとまって出土している。2・3・4はいずれも被熱による黒変や炭化物の付着がみられる。とくに2の側面には被熱による黒変部が広がり、一部が著しく劣化している。13は磨石、14は頁岩製の有孔磨製石鏃である。14は凹基式で三角形の形状を呈しており、中央部に両面からの穿孔が施されている。いずれの遺物も床面よりもやや上層で出土している。7と14に関しては本遺構外、B区古墳時代遺物包含層内からの出土であるが、包含層形成時に遺構の一部が削平されていることから、その際に移動した可能性も加味し、本遺構の出土遺物とともに掲載した。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半（宮ノ台式期）と考えられる。

B区021号（Fig.92、PL.14）

B区の東部に存在する。遺構の南東側は調査区外へと延びており、およそ4分の1程度を検出するにとどまった。遺構西側は掘立柱建物跡B区014a・b号と溝B区005a・b号、B区020号によって削平されているため、遺構の北壁の一部のみが検出可能であった。また、東側は溝B区024号が本遺構の覆土を掘り込んで構築されている。

規模は不明で、深度は最大18cmである。形状は方形か楕円形とみられ、主軸はほぼ北を向いている。床面の硬化面や壁溝は確認できなかった。ピットはP1の1基のみを検出した。深度は約42cmであり、柱穴とみられる。

遺物は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される甕形土器の破片が1点3gのみ出土したが、小片のため未掲載である。

遺構の時期は、出土遺物が少量であるために遺物によって確定することはできないが、遺構の主軸方向が他の弥生時代中期後半の竪穴建物跡とほぼ一致することから、弥生時代中期後半（宮ノ台

式期）の可能性が考えられる。

B区022号（Fig.92・94、PL.15・16・109・110）

B区の南部に存在する。遺構の南東側は調査区外へと延びており、およそ2分の1程度を検出した。遺構北側は溝B区005c号が本遺構の覆土を掘り込んで構築されている。遺構平面検出時には、ピット内の遺物によって存在を認識できた程度の遺存状態であり、全体形は不明瞭であった。

規模は長軸（5.3）m×短軸（3.5）mで、深度は最大14cmである。形状は楕円形とみられ、主軸はほぼ北を向いている。床面の硬化面や壁溝は確認できなかった。ピットは4基を検出した。P1の深度は約47cm、P2の深度は約40cm、P3の深度は42cm、P4の深度は約12cmである。P1・P2・P3は柱穴とみられ、P4は炉と想定されるが、焼土は検出されていない。遺構中央部から南側にかけて床面に落ち込みがみられる。遺構内からは中世の陶磁器類や骨片が遺構内で出土していることから、中世の溝もしくは土坑（墓壙）が本遺構を掘り込んで構築されている可能性がある。

遺物は縄文土器151g、弥生土器1,532g、土師器37g、中世陶磁器類11g、礫20g、骨片2gが出土した（Fig.94、PL.109・110）。1は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される広口壺形土器である。口唇部と頸部に単節縄文が施文され、胴部に赤彩が施される。また、口縁下部に2個1対の円孔が穿たれている。破片化後に二次焼成を受けており、柱穴P2の覆土中層から下層にかけて出土した。2は宮ノ台式の甕形土器である。器面は二次焼成によって剥落が進んでいる。炉と思われるP4上から出土した。3・4は宮ノ台式の甕形土器の底部である。5は宮ノ台式の台付甕形土器の底部に穿孔を施して甑に転用したものである。3・4・5はいずれも柱穴P2の上面から出土し、2・3・4・5の深度は床面の高さとほぼ同等である。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半（宮ノ台式期）と考えられる。

第3節　掘立柱建物跡

A区003号（Fig.95、PL.9）

A区の南西部に存在する。

規模は桁行約3.2m、梁行約2.5mで、桁行2間、梁行2間の小規模な掘立柱建物跡である。建物はおおよそ北西−南東の方向に向いている。南側の梁行を除いて柱の配列は整然としており、庇や床束柱等の構造はみられない。建物面積は8.1㎡を測る。各柱穴の深度は、P1が約11cm、P2が約3cm、P3が約10cm、P4が約5cm、P5が約6cm、P6が約9cm、P7が約5cm、P8が約6cmである。柱穴が浅く、掘方も簡素なことから、簡易な構造が想定される。出土遺物はみられない。

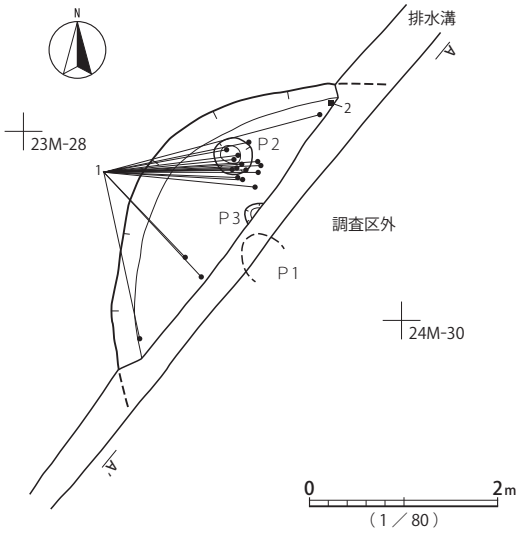
遺構の時期については、出土遺物が皆無ではあるが、A区001号とA区002a・b号がコの字状に配列して本遺構を区画していたとみられることから、中世に帰属するものと思われる。建物の構造や規模から、小規模な倉庫などとして使用されていた可能性が考えられる。

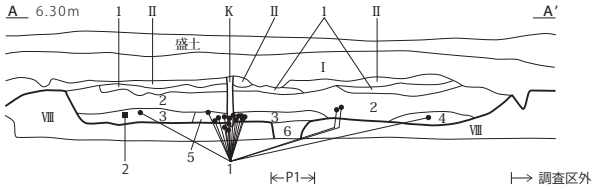
B区023号（Fig.95）

B区の北部に存在する。調査段階では掘立柱建物跡として認識せず、整理作業時に遺構として組み上げた。遺構の北東側は調査区外へと延びており、一部のみの確認にとどまっている。また、遺

竪穴建物跡

A 区 004 号

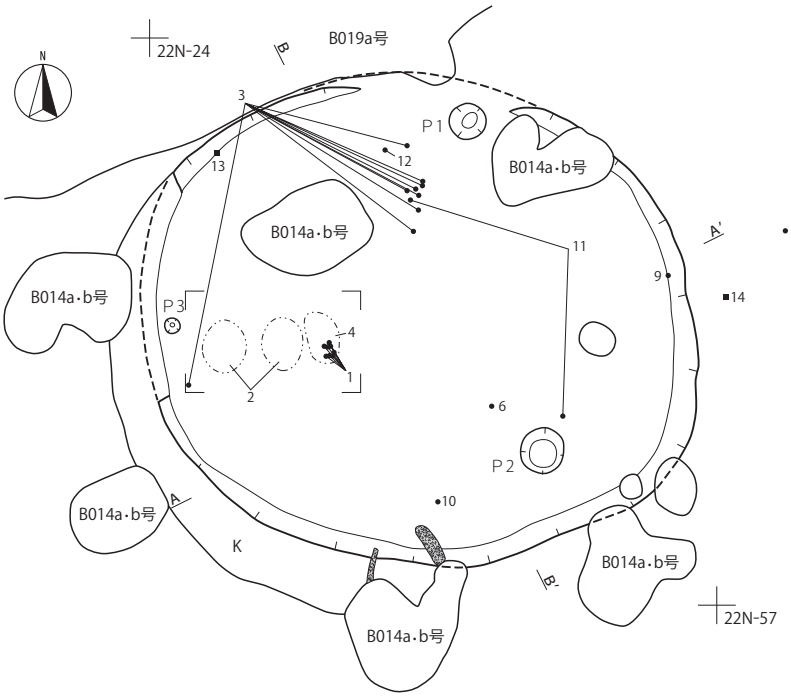


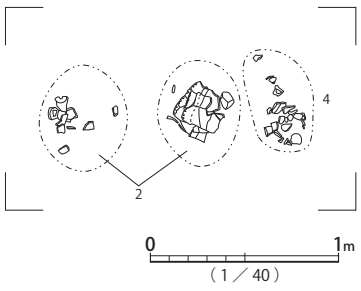


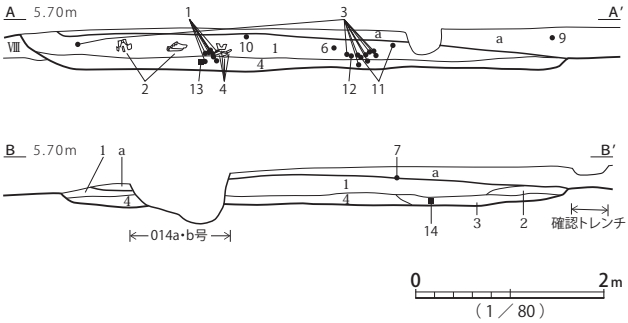
A 区 004 号

Ⅰ　黒褐色土　表土。
Ⅱ　黒褐色土　砂質。
1　黒褐色土　砂質。やや軟質。赤色砂粒(1mm)を極少量含む。竪穴建物覆土。
2　茶褐色土　砂質。やや硬質。竪穴建物覆土。
3　暗褐色土　砂質。竪穴建物覆土。
4　暗褐色土　砂質。明褐色粒を含む。竪穴建物覆土。
5　黒褐色土　砂質。やや硬質。竪穴建物覆土。
6　暗褐色土　砂質。3 層よりやや明るい。P1 覆土。
Ⅷ　明褐色土　砂層。鉄分を多く含む。地山。

B 区 008 号





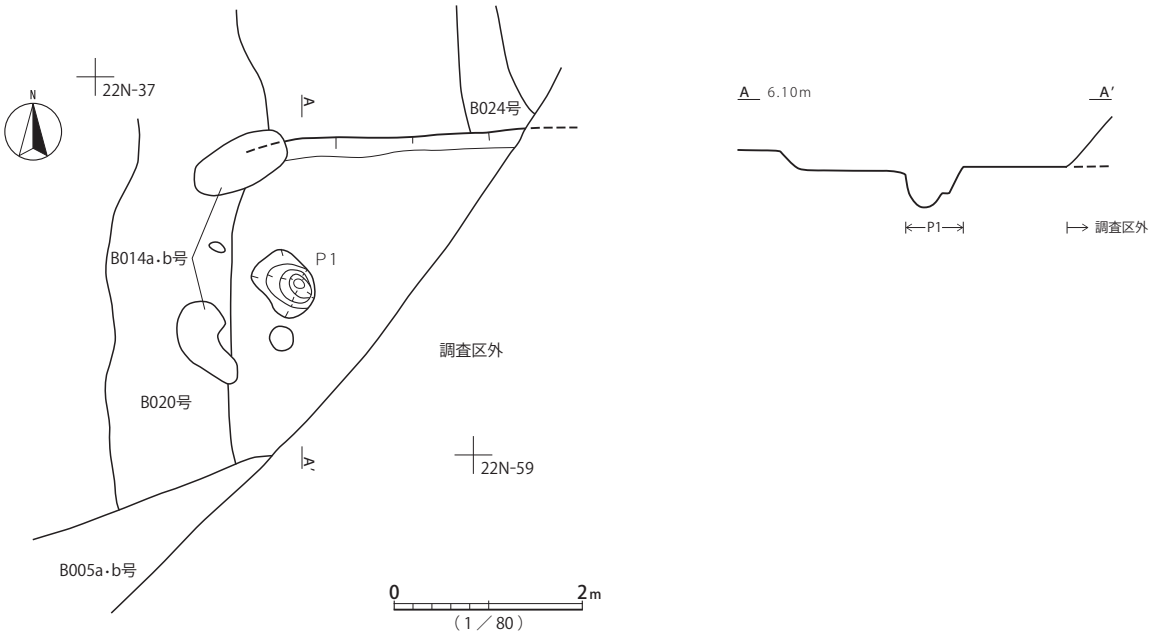


B 区 008 号 A-A'、B-B'

a　黒褐色土　砂質。しまる。B 区古墳時代遺物包含層。
1　黒褐色土　砂質。粘性あり。ややしまる。
2　赤褐色土　砂質。粘性あり。ややしまる。
3　黒褐色土　砂質。黒色粒。黄褐色砂粒を含む。
4　にぶい黄褐色土　砂質。ややゆるい。炭化粒を含む。
Ⅷ　明褐色土　砂層。鉄分を多く含む。地山。

Fig.91　竪穴建物跡 A区004号、B区008号 遺構実測図

B区021号



B区022号

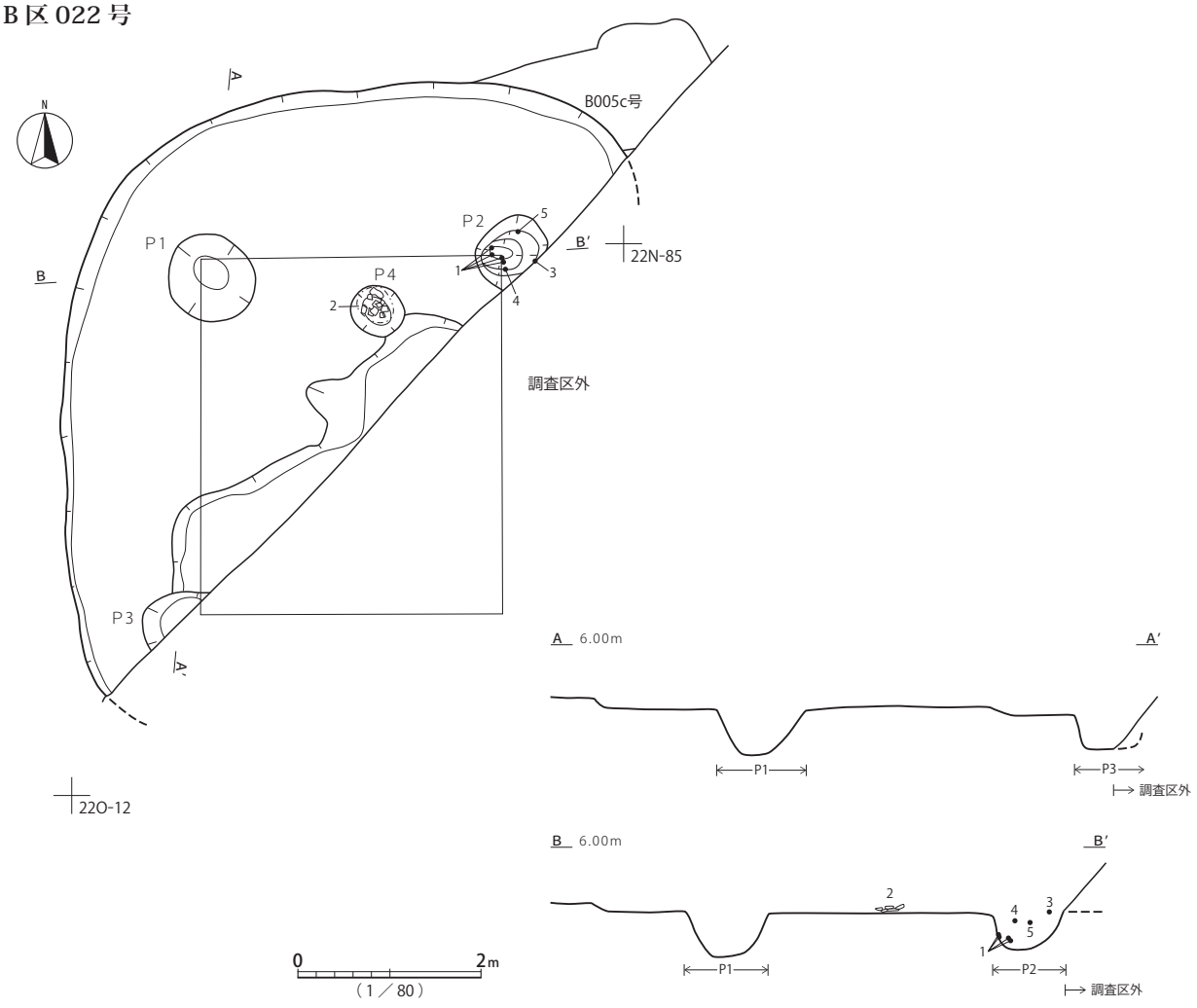
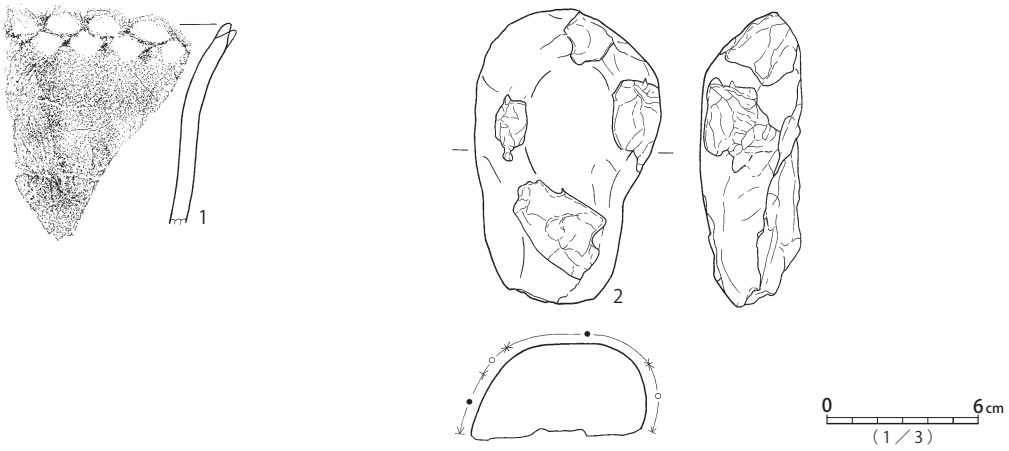


Fig.92　竪穴建物跡 B区021号、022号 遺構実測図

A区004号



B区008号

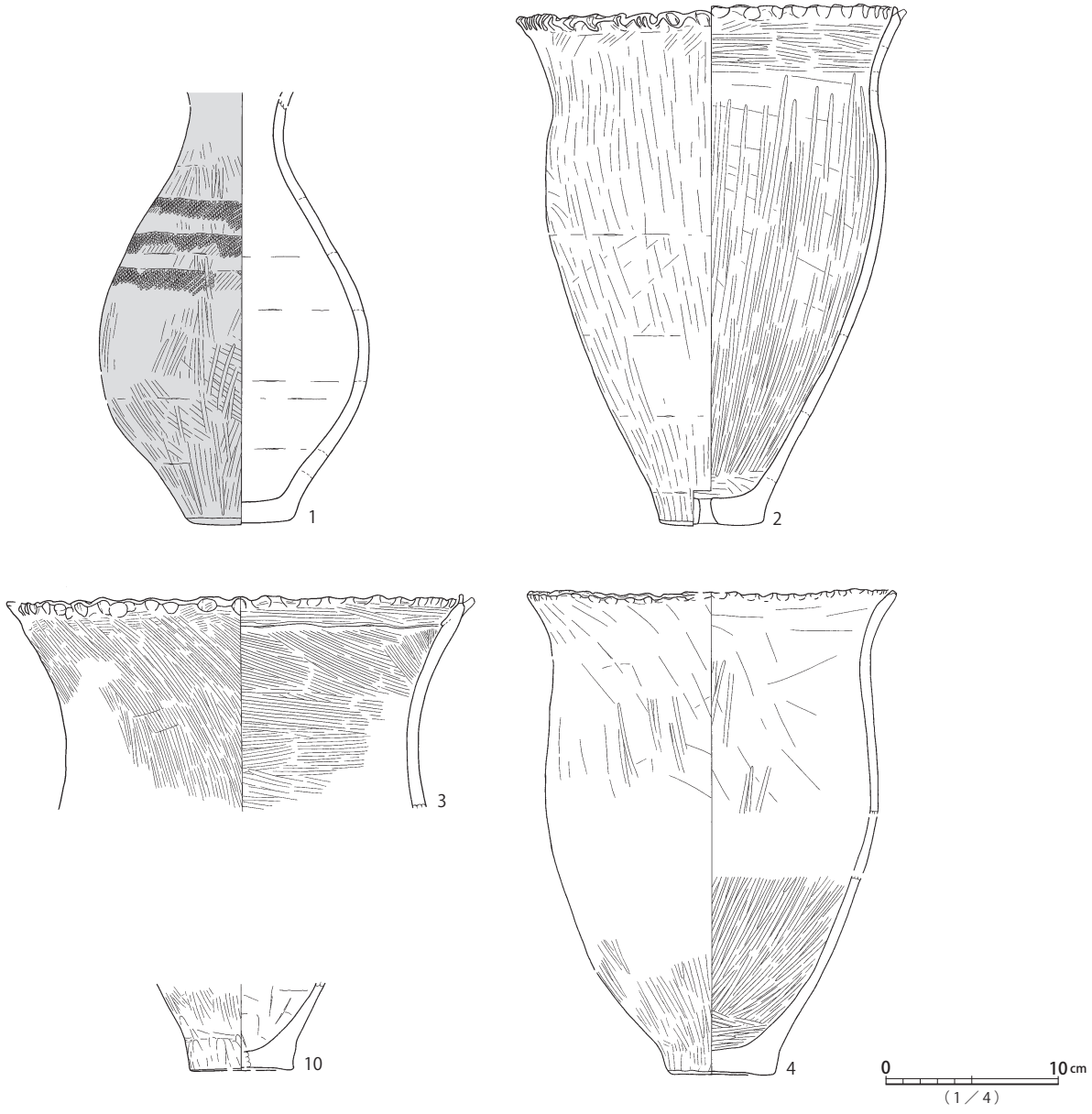
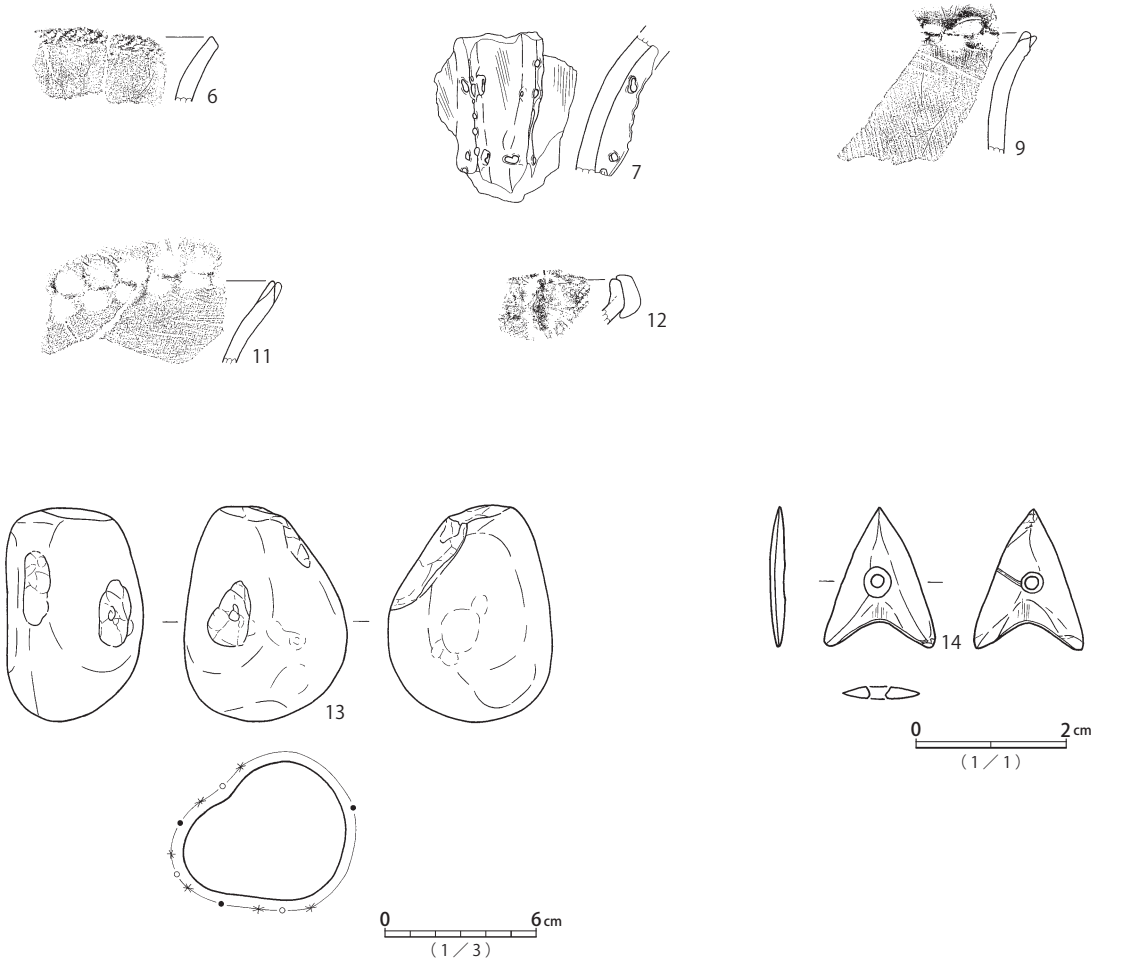


Fig.93　竪穴建物跡 A区004号、B区008号 遺物実測図



B区022号

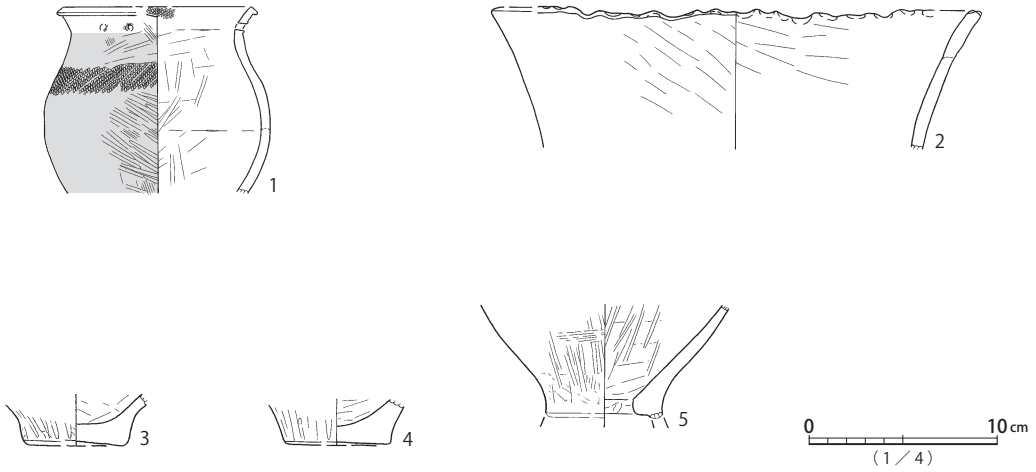


Fig.94　竪穴建物跡 B区008号、022号 遺物実測図

構西側は溝B区001a・b号によって削平を受けているものと思われる。

規模は桁行約（3.2）m、梁行約（3.8）mで、桁行２間以上、梁行２間以上の掘立柱建物跡である。建物は北西−南東もしくは北東−南西の方向に向いているものと思われる。柱の配列は整然としているように見受けられる。庇や床束柱等の構造は不明である。各柱穴については深度や堆積層位等の詳細な状況は不明であるが、平面図上では簡素な掘方の印象を受ける。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無ではあるが、掘立柱建物跡A区003号、B区014a号、B区014b号と建物の軸方向がほぼ同一なことから、中世の可能性が考えられる。また、遺構の南側に存在する個別遺構として取り扱っていない長大なピットが、溝A区002a号の残欠の可能性も考えられる（Fig.6）。溝A区002a号がB区まで続いていたとするならば、本遺構は掘立柱建物跡A区003号に伴う建物であった可能性が存在する。

B区014a号（Fig.96・98、PL.13・15・110）

B区の東部に存在する。弥生時代中期後半の竪穴建物跡であるB区008号やその覆土に形成された古墳時代遺物包含層上に構築する。本遺構は掘立柱建物跡B区014b号の建て替え前の建物である。

規模は桁行約7.8m、梁行約4.3mで、桁行３間、梁行２間の掘立柱建物跡である。建物は北西−南東の方向に向いている。柱の配列は整然としており、庇や床束柱等の構造はみられない。建物面積は33.8㎡を測る。各柱穴の深度は、P1が約38cm、P2が約31cm、P3が約43cm、P4が約38cm、P5が約35cm、P6が約38cm、P7が約22cm、P8が約68cm、P9が約43cm、P10が約34cmである。固結した地山の影響で柱穴は深く、掘方も形状を維持して検出されている。なお、P3、P7については、土層断面図において建て替えの痕跡を確認することができなかった。

遺物は縄文時代石器230g、弥生土器80g、古墳時代土師器620g・埴輪15g、中世陶磁器類33g、鉄滓類230gが出土している（Fig.98、PL.110）。中世の遺物は瀬戸・美濃系陶器が２点出土している。11は古瀬戸中期様式に比定される深皿・盤類の破片である。外面全面に灰釉を刷毛塗りし、見込み部に櫛書きの波状文が施されている。もう１点は大窯第１様式に比定される丸椀の破片であるが、小片のため未掲載である。また、8・9は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される壺形土器片、1 〜 6は古墳時代前期末葉（草刈３式）から中期鬼高式にかけての高杯形土器片、10は円筒埴輪片、12は磨石である。これらは下層のB区008号やB区古墳時代遺物包含層からの混入と思われる。なお、遺物がB区014a号、B区014b号のどちらに帰属するものかは不明である。

遺構の時期については、古墳時代中期の大型前方後円墳である姉崎二子塚古墳が近接して存在するため、古墳時代の可能性も考えられたが、出土遺物や区画溝の状況から中世と判断した。また、溝B区005a・b号とB区019a・b号、B区024号が方形に配列して本遺構を区画していたとみられる。

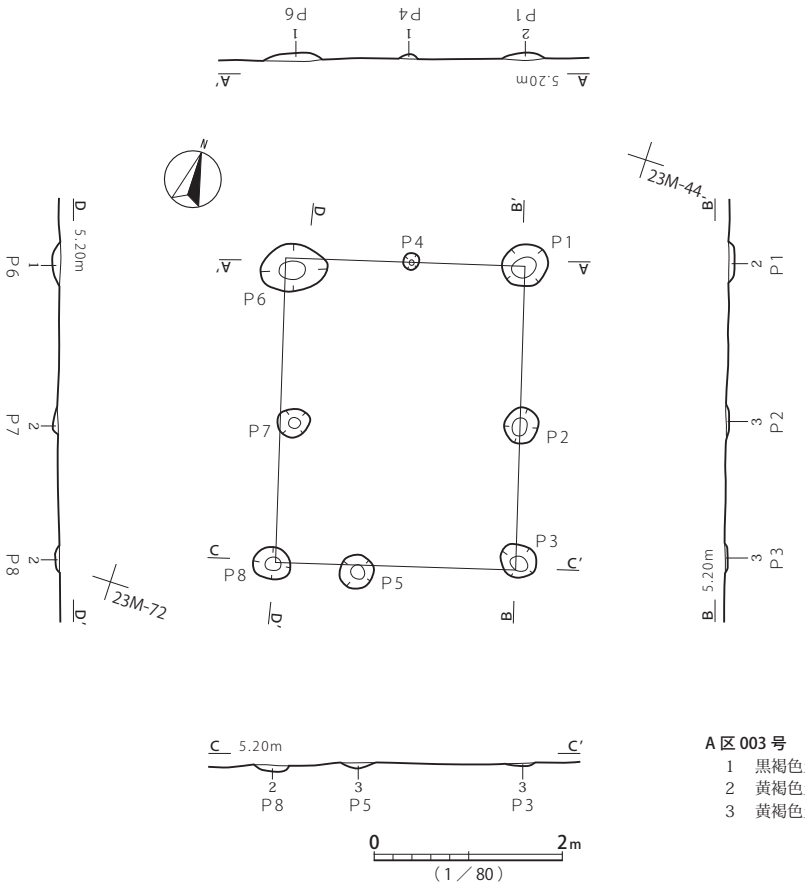
B区014b号（Fig.97・98、PL.13・15・110）

B区の東部に存在する。弥生時代中期後半の竪穴建物跡であるB区008号やその覆土に形成された古墳時代遺物包含層上に遺構を構築する。本遺構は掘立柱建物跡B区014a号の建て替え後の建物である。

規模は桁行約7.5m、梁行約4.1mで、桁行３間、梁行２間の掘立柱建物跡である。建物は北西−南

掘立柱建物跡

A区003号



A区003号

1　黒褐色土　砂質。粘性弱い。ゆるい。暗褐色砂粒を含む。
2　黄褐色土　砂質。かなりゆるい。黒褐砂粒を含む。
3　黄褐色土　砂質。かなりゆるい。暗褐色砂粒を含む。

B区023号

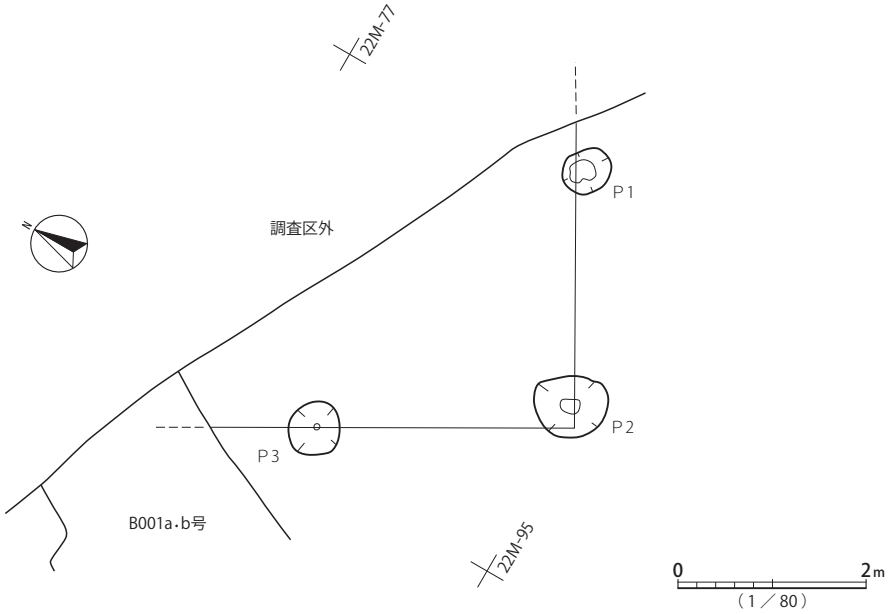


Fig.95　掘立柱建物跡 A区003号、B区023号 遺構実測図

東の方向に向いている。柱の配列は整然としており、庇や床束柱等の構造はみられない。B区014a号に比べてやや北寄りに建物の軸がずれる。建物面積は30.8㎡を測り、B区014a号に比べ規模はやや縮小する。各柱穴の深度は、P1が約46cm、P2が約45cm、P3が約43cm、P4が約66cm、P5が約35cm、P6が約41cm、P7が約24cm、P8が約69cm、P9が約67cm、P10が約65cmである。B区014a号同様に柱穴は深く、掘方も明瞭に捉えられている。また、土層断面図においても、P3、P7を除く柱穴で建て替えの状況が確認できた。P5はB区014a号、B区014b号ともに共用されている。

出土遺物の詳細についてはB区014a号で記載している（Fig.98、PL.110）。なお、遺物がB区014a号、B区014b号のどちらに帰属するものかは不明である。

遺構の時期については、B区014a号と同様に中世と考えられる。また、溝B区005a・b号とB区019a・b号、B区024号が方形に配列して本遺構を区画していたとみられ、B区005号は本遺構の建て替えに伴いaからbに掘り直された可能性が推測される。

C区061a号（Fig.99）

C区の南東部に存在する。調査段階では掘立柱建物跡として認識せず、整理作業時に遺構として組み上げた。遺構の東側は調査区外へと延びており、一部のみの確認にとどまった。C区061b号とは建て替えの関係にあるが、前後関係は不明である。

規模は桁行約（7.9）m、梁行約6.6mで、桁行3間以上、梁行2間の掘立柱建物跡である。なお、平面図では梁行を2間で復元しているが、2間以上になる可能性もある。建物は東西方向に向くものと思われる。柱の配列は整然としているように見受けられる。庇や床束柱は存在しないものと推測される。各柱穴の深度は、P1が約26cm、P2が約6cm、P3が約24cm、P4が約10cm、P5が約13cmである。P1はC区061b号と共用である。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無ではあるが、中世の溝C区010号、中世の可能性のある溝C区057号と本遺構の桁行の方向がほぼ揃っており、これらが建物群の区画溝であると推測されることから、本遺構も中世の可能性が考えられる。

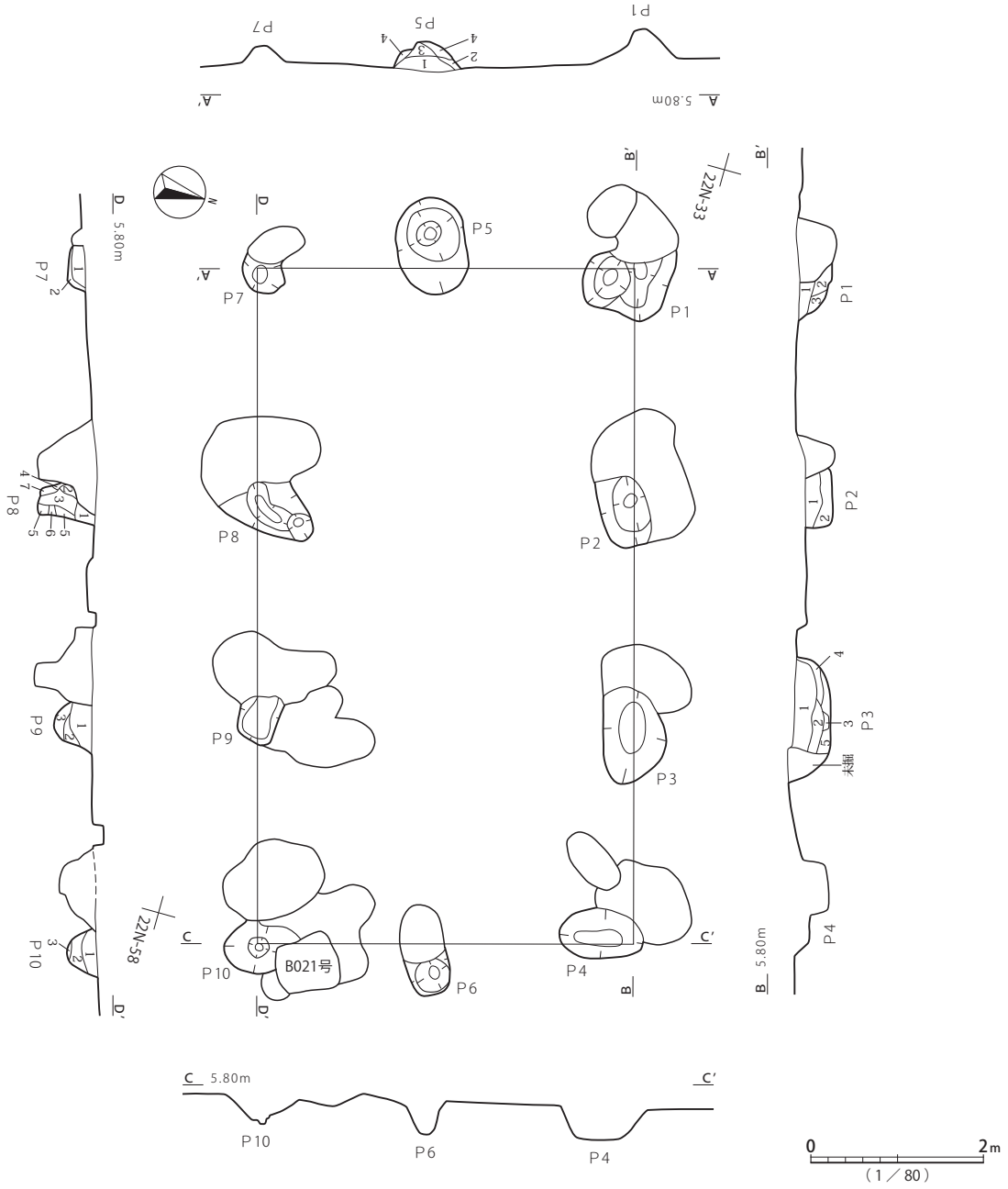
C区061b号（Fig.100）

C区の南東部に存在する。調査段階では掘立柱建物跡として認識せず、整理作業時に遺構として組み上げた。遺構の東側は調査区外へと延びており、一部のみの確認にとどまった。C区061a号とは建て替えの関係にあるが、前後関係は不明である。

規模は桁行約（7.3）m、梁行約7.5mで、桁行3間以上、梁行2間の掘立柱建物跡である。なお、平面図では梁行を2間で復元しているが、2間以上になる可能性もある。建物は北西−南東方向に向くと思われる。柱の配列は整然としているように見受けられ、C区061a号に比べてやや北寄りに建物の軸がずれる。庇や床束柱は存在しないものと推測される。各柱穴の深度は、P1が約26cm、P2が約12cm、P3が約16cm、P4が約13cm、P5が約24cmである。P1はC区061a号と共用である。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無ではあるが、中世の溝C区010号、中世の可能性のある溝C区057号と本遺構の桁行の方向がほぼ揃っており、これらが建物群の区画溝であると推測され

B区014a号



P1
1 黒褐色土　砂質。粘性あり。
2 黒褐色土　砂質。黄褐色砂粒を含む。
3 にぶい黄褐色土　砂質。黄褐色砂粒を多量に含む。

P2
1 黒褐色土　砂質。ややしまる。
2 黒褐色土　砂質。黄褐色砂粒を含む。

P3
1 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。
2 黒褐色土　砂質。ややしまる。褐色砂粒を含む。
3 黒褐色土　砂質。しまり弱い。
4 黒褐色土　砂質。しまり弱い。褐色砂粒を含む。
5 暗褐色土　砂質。しまり弱い。褐色砂粒を多量に含む。

P5
1 黒褐色土　砂質。粘性あり。強くしまる。
2 黒褐色土　砂質。粘性あり。
3 黒色土　砂質。粘性あり。しまり弱い。
4 黒褐色土　砂質。粘性あり。褐色砂粒を含む。

P7
1 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。
2 黒褐色土　砂質。粘性あり。黄褐色～赤褐色砂粒を含む。

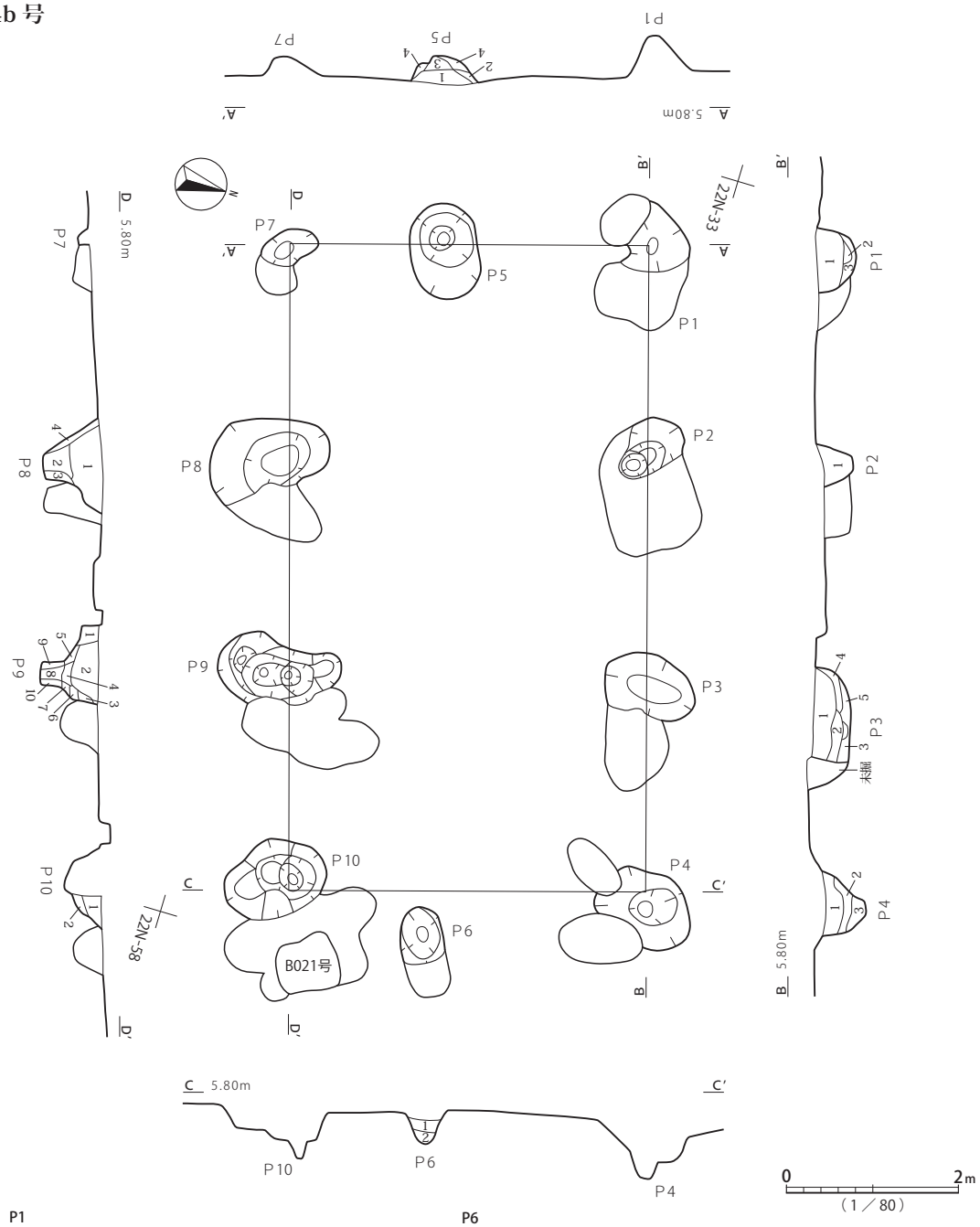
P8
1 黒褐色土　砂質。粘性あり。しまる。
2 黒褐色土　砂質。1層より黒みを帯びる。
3 黒色土　砂質。粘性あり。柱の痕跡。
4 黒褐色土　砂質。粘性あり。ややしまる。褐色砂粒を含む。
5 黒色土　砂質。粘性あり。ややしまる。1cm 大程のブロック状の黄褐色砂粒を含む。
6 黄褐色土　砂質。黄褐色砂粒のブロック。
7 黒色土　砂質。粘性あり。ややしまる。1cm を超える大きさの黄褐色砂粒のブロックを含む。

P9
1 黒褐色土　砂質。粘性あり。しまる。黒色粒を含む。
2 黒褐色土　砂質。粘性あり。しまる。黄褐色砂粒を含む。
3 黒色土　砂質。粘性あり。ややしまる。黄褐色砂粒・粘土粒を含む。

P10
1 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。
2 黒褐色土　砂質。粘性あり。しまる。
3 黒色土　砂質。粘性あり。ブロック状の黄褐色砂粒を含む。

Fig.96　掘立柱建物跡 B区014a号 遺構実測図

B区014b号



P1
1 黒色土　砂質。粘性あり。
2 黒褐色土　砂質。粘性あり。褐色砂粒を含む。
3 暗褐色土　砂質。褐色砂粒を含む。

P2
1 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。

P3
1 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。
2 黒褐色土　砂質。ややしまる。褐色砂粒を含む。
3 黒褐色土　砂質。しまり弱い。
4 黒褐色土　砂質。しまり弱い。褐色砂粒を含む。
5 暗褐色土　砂質。しまり弱い。褐色砂粒を多量に含む。

P4
1 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。
2 黒褐色土　砂質。粘性あり。しまる。
3 黒褐色土　砂質。しまる。黄褐色砂粒を含む。

P5
1 黒褐色土　砂質。粘性あり。強くしまる。
2 黒褐色土　砂質。粘性あり。
3 黒色土　砂質。粘性あり。しまり弱い。
4 黒褐色土　砂質。粘性あり。褐色砂粒を含む。

P6
1 黒色土　砂質。粘性あり。ややしまる。褐色砂粒を含む。
2 黒色土　砂質。粘性あり。ややしまる。黄褐色～褐色砂粒を含む。

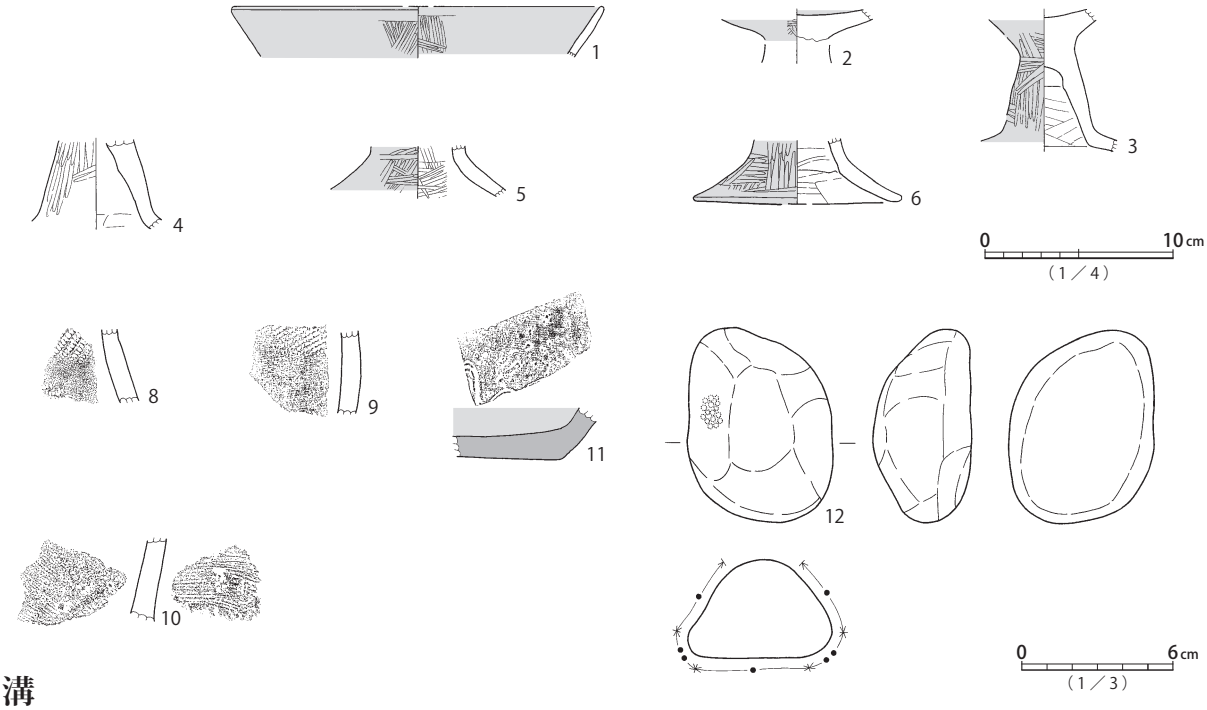
P8
1 黒褐色土　砂質。粘性あり。褐色砂粒を含む。
2 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。
3 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。黄褐色砂粒を多量に含む。
4 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。黄褐色砂粒を多量に含む。鉄分を含む。

P9
1 黒褐色土　砂質。粘性あり。しまる。黒色粒を含む。
2 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。
3 黒色土　砂質。粘性強い。しまる。
4 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。褐色砂粒を含む。
5 黒褐色土　砂質。粘性あり。しまる。やや赤褐色味を帯びる。
6 黒褐色土　砂質。粘性あり。褐色砂粒を含む。
7 黒褐色土　砂質。粘性あり。褐色砂粒を多量に含む。
8 黒色土　砂質。粘性あり。ややしまる。
9 黒褐色土　砂質。粘性あり。ブロック状の黄褐色砂粒を含む。
10 暗褐色土　砂質。粘性あり。ブロック状の黄褐色砂粒を含む。

P10
1 黒色土　砂質。粘性あり。しまる。
2 黒褐色土　砂質。粘性あり。ややしまる。黄褐色砂粒を含む。

Fig.97　掘立柱建物跡 B区014b号 遺構実測図

B区014号



溝

B区001号

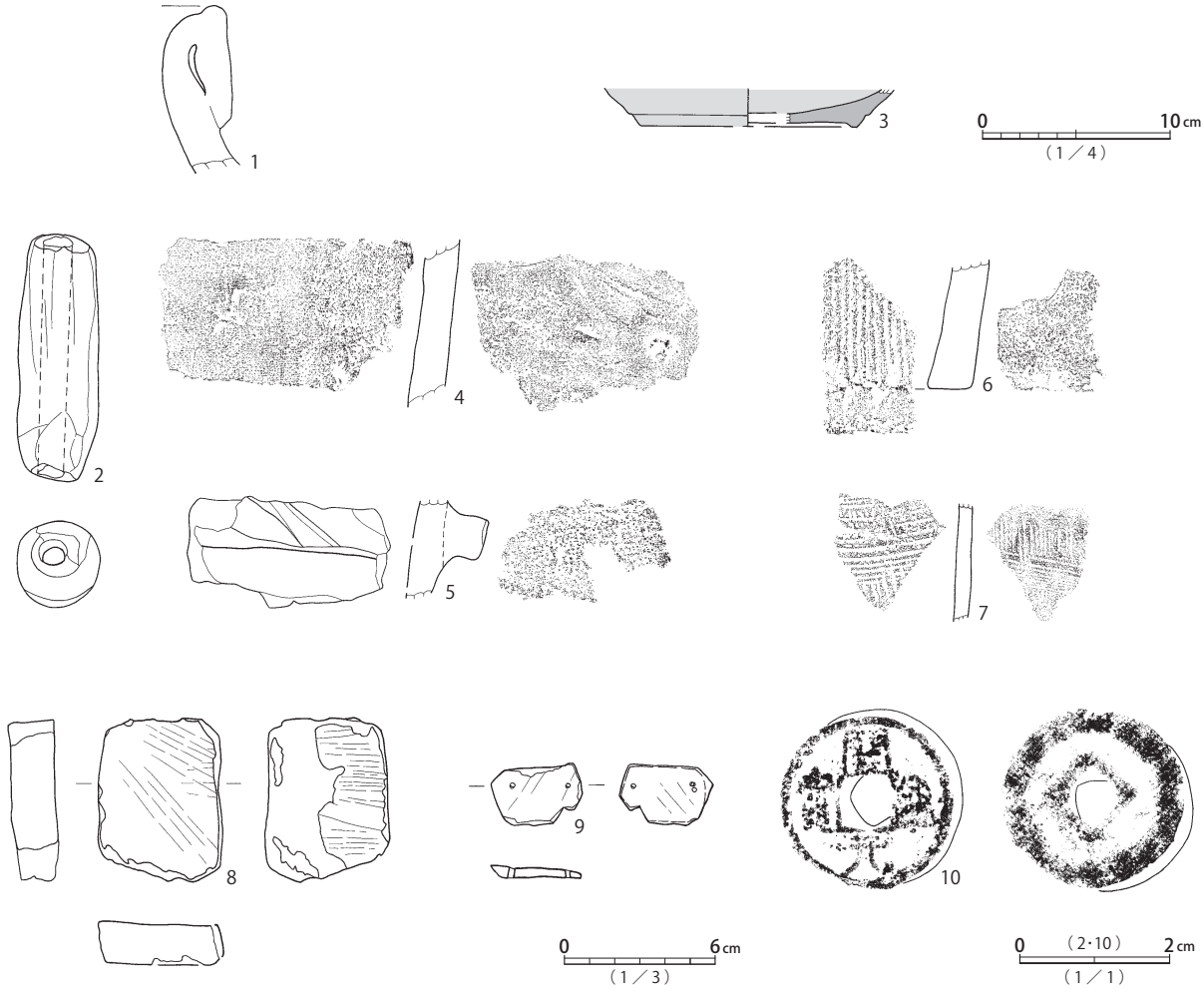


Fig.98　掘立柱建物跡 B区014号、溝 B区001号 遺物実測図

ることから、本遺構も中世の可能性が考えられる。

C区062号（Fig.101、PL.21）

C区の南西部に存在する。調査段階では掘立柱建物跡として認識せず、整理作業時に遺構として組み上げた。

規模は桁行約10.3m、梁行約7.6mで、桁行3間の掘立柱建物跡である。梁行に関しては、平面図上では1間だが、他の柱穴の間隔から推定すると、間にもう1つ柱穴が存在し、2間であった可能性が高い。地山が砂地のため調査時に検出できなかったか、深度がなかったため確認面で捉えられなかったものと思われる。建物は南北の方向を向いている。柱の配列や形状は不規則であるが、地山が砂地のため、建築当時からは変形しているものとみられる。庇はみられないが、今回個別遺構としなかったピット群が床束柱になる可能性がある（Fig.7）。建物面積は78.5㎡を測る。各柱穴の深度は、P1が約35cm、P2が約22cm、P3が約17cm、P4が約22cm、P5が約34cm、P6が約34cm、P7が約8cm、P8が約37cmである。柱穴は、掘方が巨大なものが散見されることから、建物の建て直しが行われていた可能性も考えられる。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であるが、中世の溝C区010号、中世の可能性のある溝C区057号と本遺構の桁行の方向がほぼ揃っており、これらが建物群の区画溝であると推測されること、C区061a号の桁行と本遺構の梁行の方向がほぼ同一なことから、中世の可能性が考えられる。

第4節　溝

A区001号（Fig.102、PL.9）

A区の中央部に存在する。

南北7.5m、東西6.8m、幅最大0.9mのL字状の溝である。深度は最大約19cmを測る。東西方向の溝は一部が攪乱により削平されている。南北方向の溝は一部が途切れているが、実際は一続きのものだったと考えられる。出土遺物は、本遺構に明確に伴うものは確認できなかった。

遺構の時期については、出土遺物が不明のため明確には判断できないが、中世の可能性がある。溝A区002a・b号と組み合って掘立柱建物跡A区003号を区画していたものと推測される。

A区006号（Fig.102、PL.10）

A区の中央部に存在し、溝A区001号の南側に隣接する。

規模は長さ（1.4）m、幅0.7m、最大深度は17cmである。西側は攪乱によって削平されている。また、土坑の可能性も考えられる。遺物は出土していない。

遺構の時期については不明であるが、掘立柱建物跡A区003号もしくは溝A区001号に伴う遺構である可能性も考えられる。

A区002a号（Fig.102、PL.9）

A区の南部に存在する。遺構の大部分はA区002b号によって削平されており、一部のみ検出した。また、遺構確認面において、北側の立ち上がりは検出できなかった。

掘立柱建物跡

C区061a号

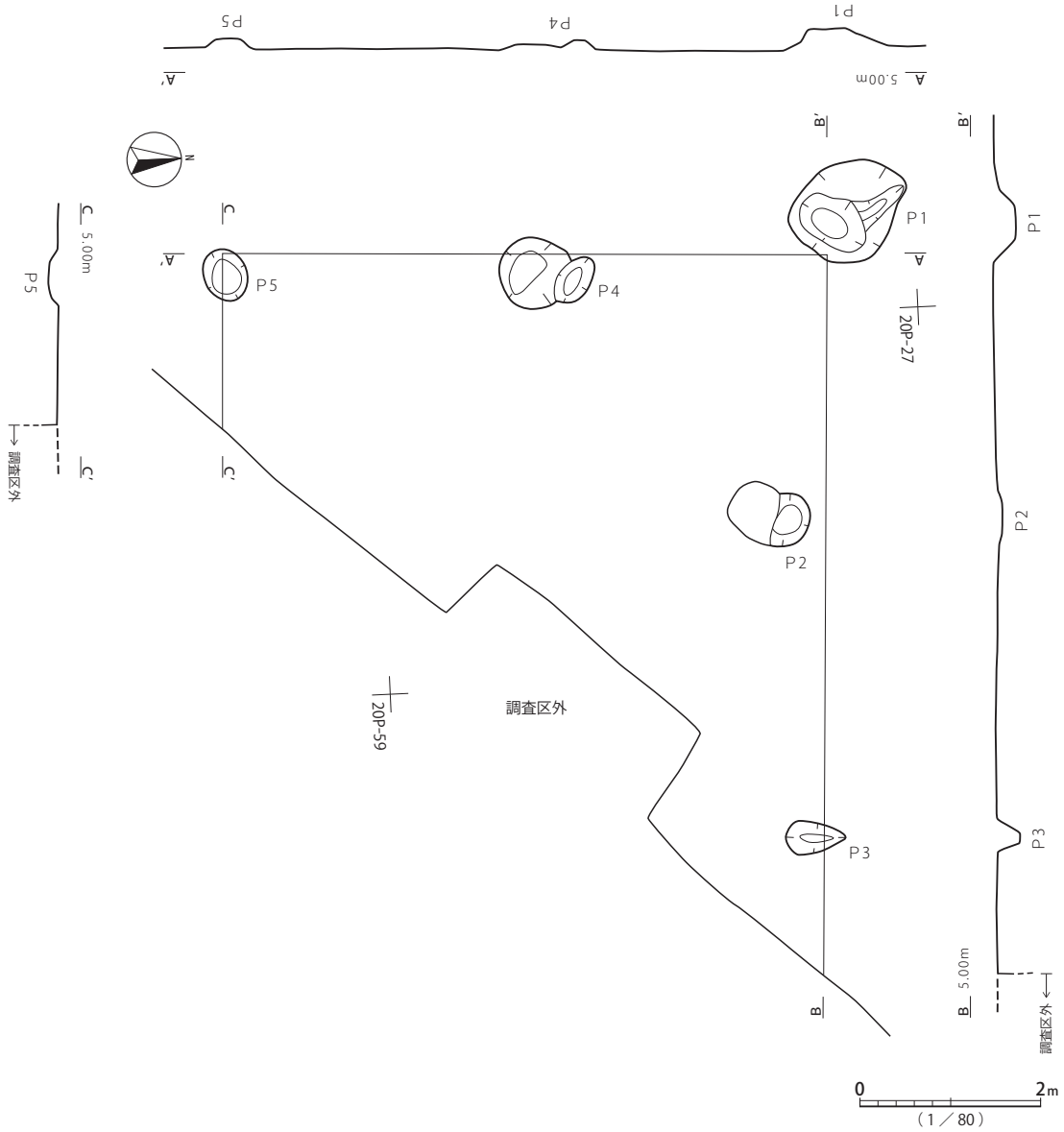


Fig.99　掘立柱建物跡 C区061a号 遺構実測図

C区061b号

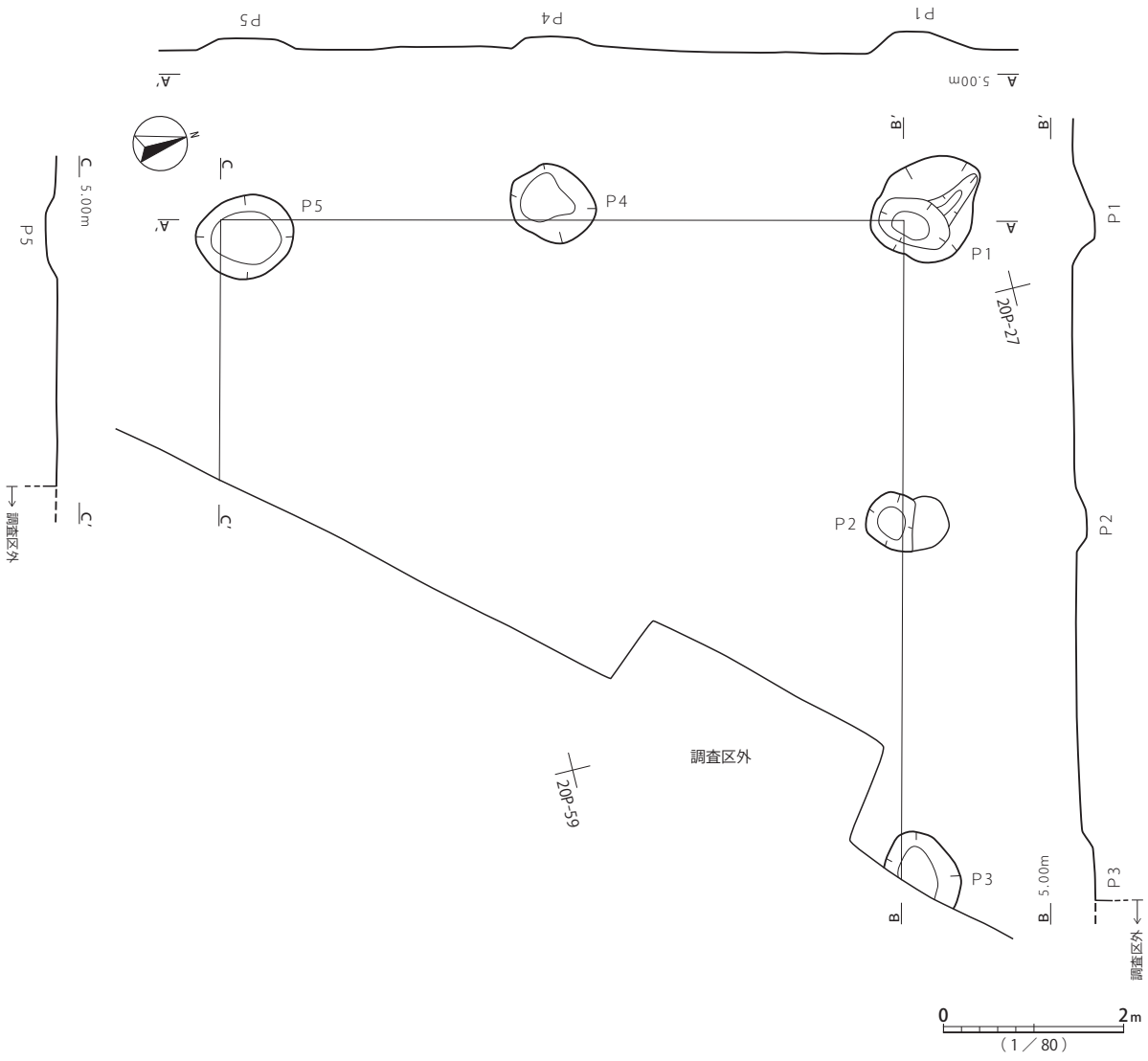


Fig.100　掘立柱建物跡 C区061b号 遺構実測図

C区062号

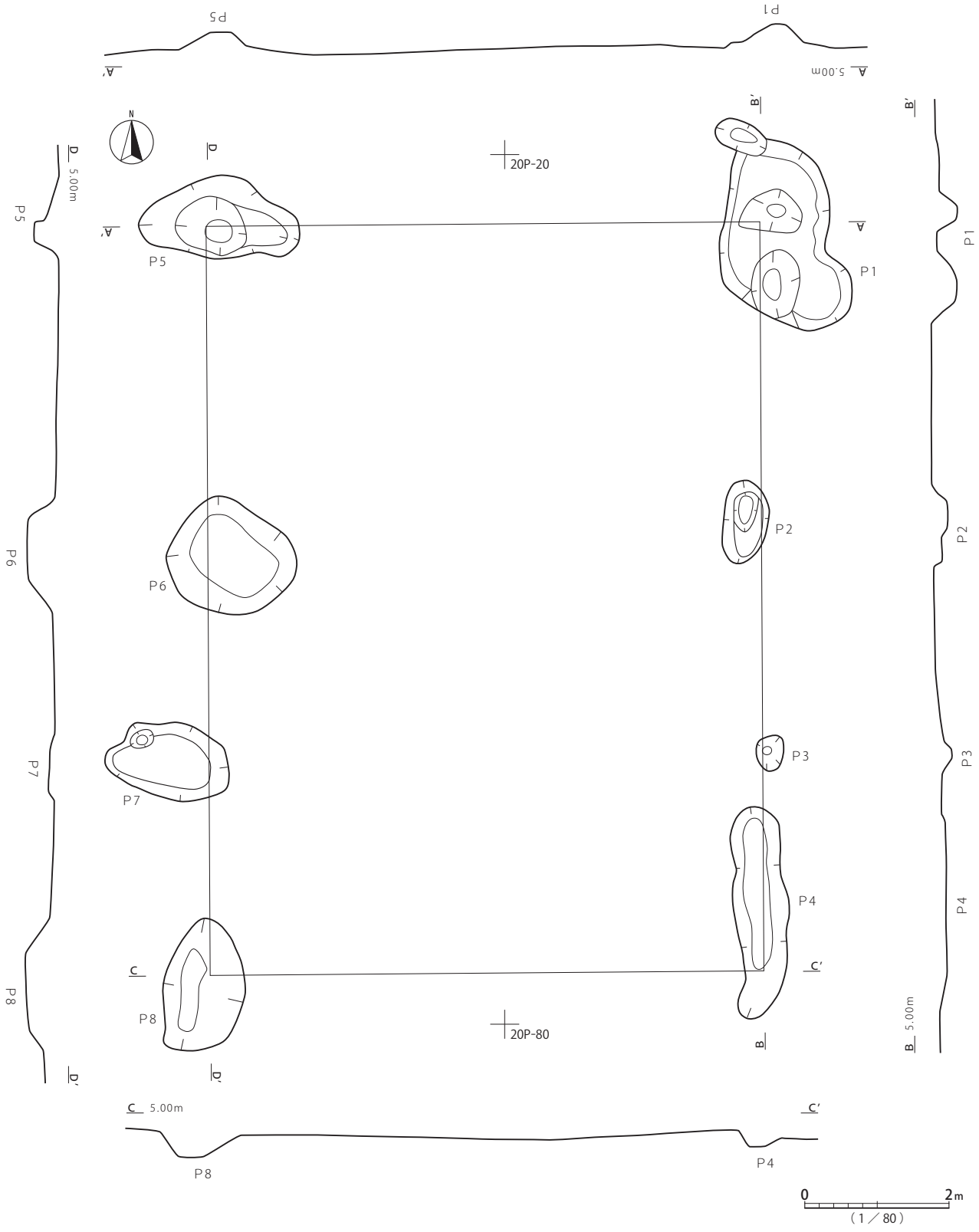


Fig.101　掘立柱建物跡 C区062号 遺構実測図

規模は長さ（3.8）m、幅不明、最大深度18cmである。遺物は土器片が出土しているが、小片のため詳細は不明である。

遺構の時期については明確に判断はできないが、溝A区001号と組み合って掘立柱建物跡A区003号を区画する溝になると思われることから、中世と推測される。

A区002b号（Fig.102、PL.9）

A区の南部に存在する。溝A区002a号を削平して構築している。遺構の北東側と南西側は調査区外へと延びており、一部のみを検出した。また、遺構確認面において、北側の立ち上がりは検出できなかった。

規模は長さ（6.2）m、幅不明、最大深度39cmである。遺物は鉄滓が出土している。

遺構の時期については明確に判断はできないが、溝A区002a号の掘り直しの溝と考えられることから、中世と思われる。そして、溝A区001号と組み合って掘立柱建物跡A区003号を区画する溝になるものと推測される。

A区010号（Fig.102、PL.11）

A区の北東部に存在する。土坑A区007号を削平し、一部道路状遺構A区011号の覆土内に遺構を構築している。遺構の南側は調査区外へと延びており、かつ北側は全掘していないため、一部のみの検出にとどまる。

規模は長さ（2.8）m、幅1.1m、最大深度39cmである。遺物は出土していない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であることから詳細は不明であるが、中近世の道路状遺構A区011号を削平して構築していることから、中近世以降であると考えられる。

B区001a号（Fig.98・103、PL.12・110）

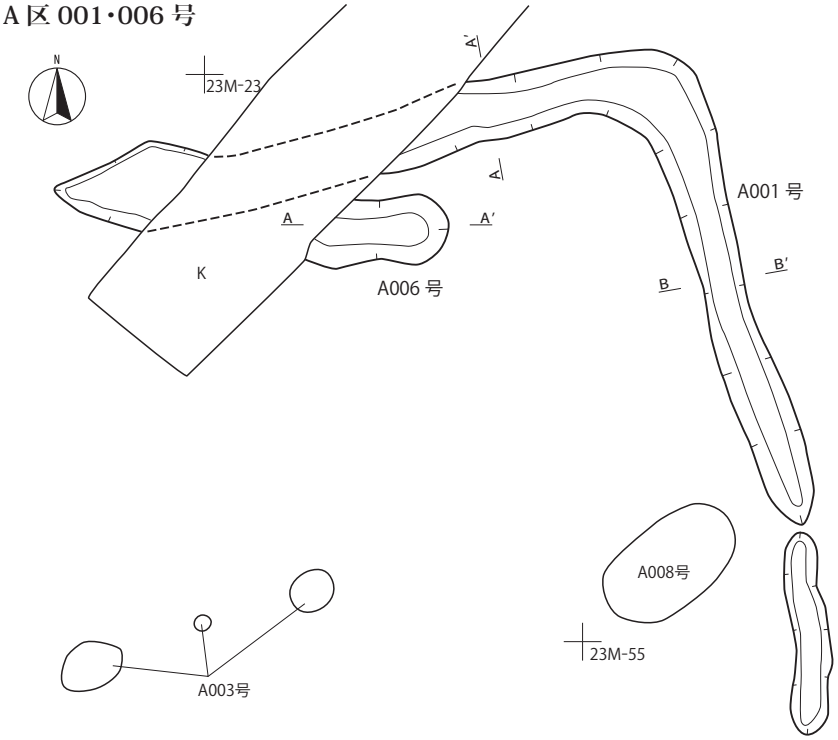
B区北側を北東−南西方向に横断する溝である。溝B区011号を削平して構築している。また、遺構北側は溝B区001b号によって上層が削平されている。

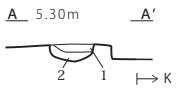
規模は長さ（26.4）m、幅1.2m、最大深度31cmである。

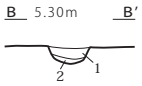
遺物は縄文土器140g、古墳時代埴輪350g・石製品84g、土師器466g、中近世陶磁器類1,142g、土製品107g、金属製品17g、石片1,715g、自然木79g、骨片4gが出土した（Fig.98、PL.110）。1は中世の常滑産陶器の甕の破片であり、棗塚A類期（櫻井2019）に属するものと考えられる。3は近世の瀬戸・美濃系陶器の鉢である。破断面が摩滅していることから、砥石に転用したものとみられる。また瀬戸・美濃系陶器の後期様式Ⅳ期に比定されるすり鉢片等が出土しているが、小片のため未掲載である。そのほかの中近世の陶磁器類としては、瀬戸・美濃系陶器の擂鉢、縁釉陶器の小皿・内禿皿、志野丸皿、常滑産陶器の甕・片口鉢（Ⅱ類）、南伊勢形土器の羽釜、在地系土器の中型皿、肥前系磁器のくらわんか碗、京・信楽系陶器の小杉茶碗、近世の瀬戸・美濃系陶器の甕・鉢・碗・志野丸皿、志戸呂産陶器の徳利、堺産炻器の擂鉢などが出土しているが、いずれも小片のため未掲載である。また、煙管も出土している。2は土錘、8は砥石、10は古銭の開元通宝である。また、4 〜 7の円筒埴輪片や9の石製模造品が出土している。これらは古墳時代中期の姉崎二子塚古墳を中心とした周

溝

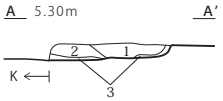
A区 001・006号



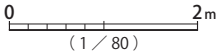




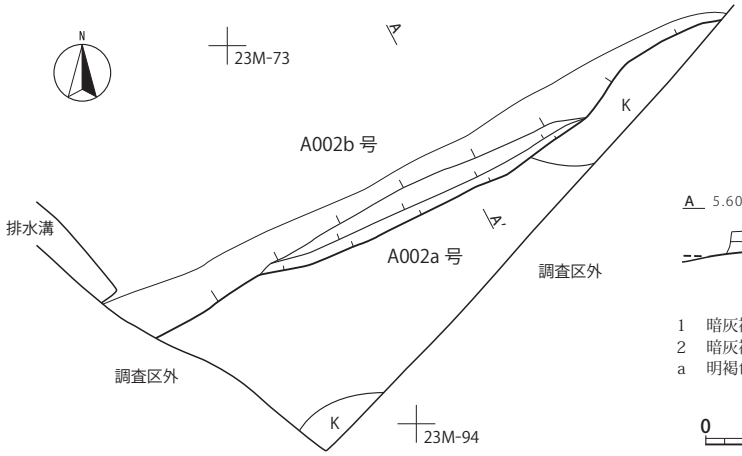
A区 001号 A-A'、B-B'
1　暗褐色土　砂質。軟質。
2　暗褐色土　砂質。1層より明るい。

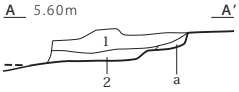


A区 006号
1　暗褐色土　砂質。
2　暗褐色土　砂粒を多く含む。
3　褐色土　地山のくずれ。

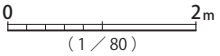


A区 002a・b号

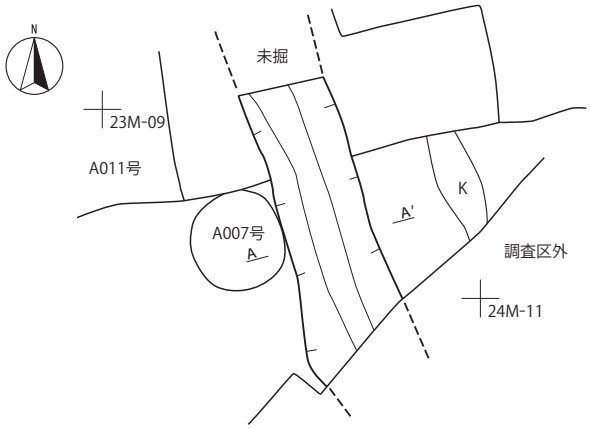


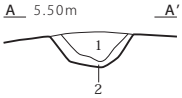


1　暗灰褐色土　砂質。ややしまる。鉄分を多く含む。002b 号覆土。
2　暗灰褐色土　砂質。1層より明るい。002b 号覆土。
a　明褐色土　砂質。002a 号覆土。



A区 010号





1　黒褐色土　砂質。
2　暗褐色土　砂質。地山由来の2～3cm大の明褐色土ブロックを含む。

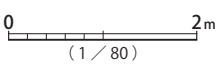


Fig.102　溝 A区001・006号、002a・b号、010号 遺構実測図

囲の古墳群から流入したものと考えられる。なお、遺物がB区001a・b号のいずれに帰属するものかは検証できなかった。

遺構の時期については、本遺構が溝B区019a号より新しく構築されていることや、出土遺物から近世と思われる。

B区001b号（Fig.98・103、PL.12・110）

B区北側を北東−南西方向に横断する溝である。北側は溝B区001a号を削平して構築している。

規模は長さ（33.8）m、幅2.2m、最大深度33cmである。

出土遺物の詳細はB区001a号に記載している（Fig.98、PL.110）。なお、遺物がB区001a・b号のいずれに帰属するものかは検証できなかった。

遺構の時期については、本遺構が溝B区019a号より新しく構築されていることや、出土遺物から近世と思われる。

B区005a号（Fig.104・105、PL.13・111）

B区南部を東西方向に走る溝である。東側は調査区外へと延びている。南側にはB区005b号が存在する。東側は溝B区020号を削平して、その覆土中に作られている。また、竪穴建物跡B区021号を一部削平している。

規模は長さ（11.7）m、幅（0.9）m、最大深度22cmである。遺構内に柴垣等の生垣を固定したとみられる小ピット群が存在する。

遺物は、B区005a・b・c号から縄文土器48g・石器65g、弥生土器297g、土師器7g、近世陶磁器類7g・軽石6g、煙管10gが出土している（Fig.105、PL.111）。近世陶磁器類では、京・信楽焼の破片、肥前系磁器の皿の破片がみられたが、小片のため未掲載である。1は縄文時代の石斧、2は近世の煙管の雁首である。いずれも混入と思われる。なお、出土遺物がB区005a・b・c号のいずれに帰属するものかは不明である。

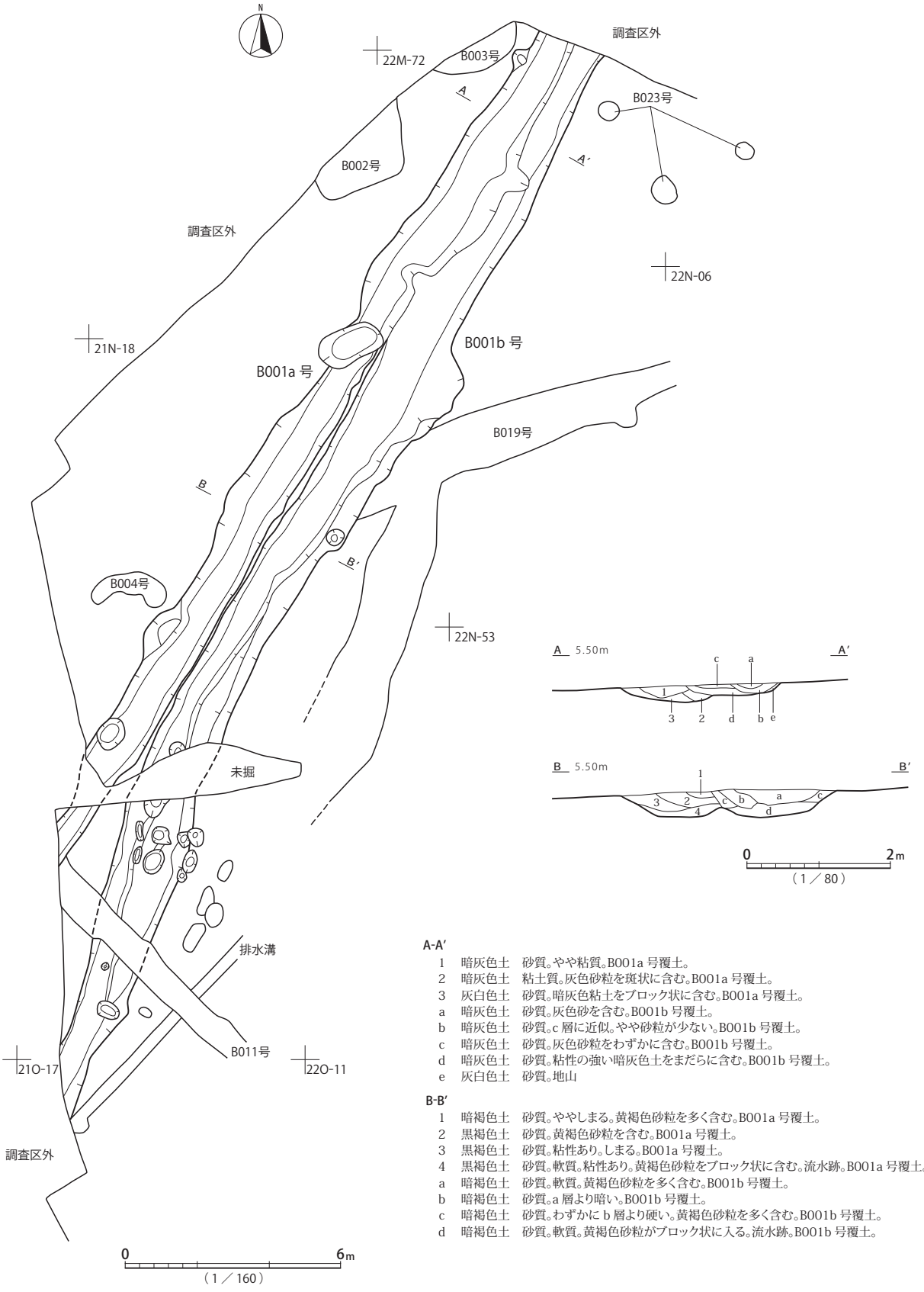
遺構の時期については、溝B区019a・b号、B区024号と組み合って、中世の掘立柱建物跡B区014a・b号を方形に区画する溝になると思われることから、中世と考えられる。B区005a号とB区005b号の新旧については不明である。しかし、掘立柱建物跡の建て直しに伴い区画溝の掘り返しも行われたと考えた場合、本遺構は掘立柱建物跡B区014b号の桁行とほぼ平行することから、B区014b号に伴う溝であった可能性が高い。そうすると、本遺構は溝B区005b号の掘り直しの溝と考えられる。

B区005b号（Fig.104・105、PL.13・111）

B区南部を東西方向に走る溝である。東側は調査区外へと延びている。北側はB区005a号が存在する。東側は溝B区020号を削平して、その覆土中に作られている。また、竪穴建物跡B区021号を一部削平している。

規模は長さ（10.0）m、幅（0.2）m、最大深度9cmである。遺構内に柴垣等を固定したとみられる小ピット群が存在する。

B 区 001a・b 号



A-A′

1　暗灰色土　砂質。やや粘質。B001a 号覆土。
2　暗灰色土　粘土質。灰色砂粒を斑状に含む。B001a 号覆土。
3　灰白色土　砂質。暗灰色粘土をブロック状に含む。B001a 号覆土。
a　暗灰色土　砂質。灰色砂を含む。B001b 号覆土。
b　暗灰色土　砂質。c 層に近似。やや砂粒が少ない。B001b 号覆土。
c　暗灰色土　砂質。灰色砂粒をわずかに含む。B001b 号覆土。
d　暗灰色土　砂質。粘性の強い暗灰色土をまだらに含む。B001b 号覆土。
e　灰白色土　砂質。地山

B-B′

1　暗褐色土　砂質。ややしまる。黄褐色砂粒を多く含む。B001a 号覆土。
2　黒褐色土　砂質。黄褐色砂粒を含む。B001a 号覆土。
3　黒褐色土　砂質。粘性あり。しまる。B001a 号覆土。
4　黒褐色土　砂質。軟質。粘性あり。黄褐色砂粒をブロック状に含む。流水跡。B001a 号覆土。
a　暗褐色土　砂質。軟質。黄褐色砂粒を多く含む。B001b 号覆土。
b　暗褐色土　砂質。a 層より暗い。B001b 号覆土。
c　暗褐色土　砂質。わずかに b 層より硬い。黄褐色砂粒を多く含む。B001b 号覆土。
d　暗褐色土　砂質。軟質。黄褐色砂粒がブロック状に入る。流水跡。B001b 号覆土。

Fig.103　溝 B区001a・b号 遺構実測図

出土遺物の詳細はB区005a号で記載している（Fig.105、PL.111）。なお、出土遺物がB区005a・b・c号のいずれに帰属するものかは不明である。

遺構の時期については、溝B区019a・b号、B区024号と組み合って、中世の掘立柱建物跡B区014a・b号を方形に区画する溝になると思われることから、中世と考えられる。B区005a号とB区005b号の新旧については不明である。しかし、掘立柱建物跡の建て直しに伴い区画溝の掘り返しも行われたと考えた場合、本遺構は掘立柱建物跡B区014a号の桁行とほぼ平行することから、B区014a号に伴う溝であった可能性が高い。そうすると、本遺構は溝B区005a号に先行する溝であったと考えられる。

B区005c号（Fig.104・105、PL.13・111）

B区南部を東西方向に走る溝である。東側は調査区外へと延びている。西側は竪穴建物跡B区022号を削平して、その覆土中に構築している。

規模は長さ（6.8）m、幅1.4m、最大深度13cmである。

出土遺物の詳細はB区005a号で記載している（Fig.105、PL.111）。なお、出土遺物がB区005a・b・c号のいずれに帰属するものかは不明である。

遺構の時期については、遺物から判断ができないため詳細は不明であるが、弥生時代中期後半の竪穴建物跡B区022号より新しいことから、弥生時代中期後半以降と考えられる。

B区011号（Fig.104、PL.14）

B区南西部を北西−南東方向に横断する溝である。北側は溝B区001a号、南側は攪乱、中央部は排水溝によって一部が削平されている。また、溝B区001b号にも削平されるが、本遺構の深度が勝るため、重複箇所の下端を検出することが可能であった。

規模は長さ（9.3）m、幅1.0m、最大深度38cmである。

出土遺物は土師器片4点と礫1点が出土しているが、小片のため未掲載である。

遺構の時期については、時期が明確な出土遺物がないことから不明であるが、近世の溝B区001a・b号に削平されていることから、近世以前に構築されたと考えられる。

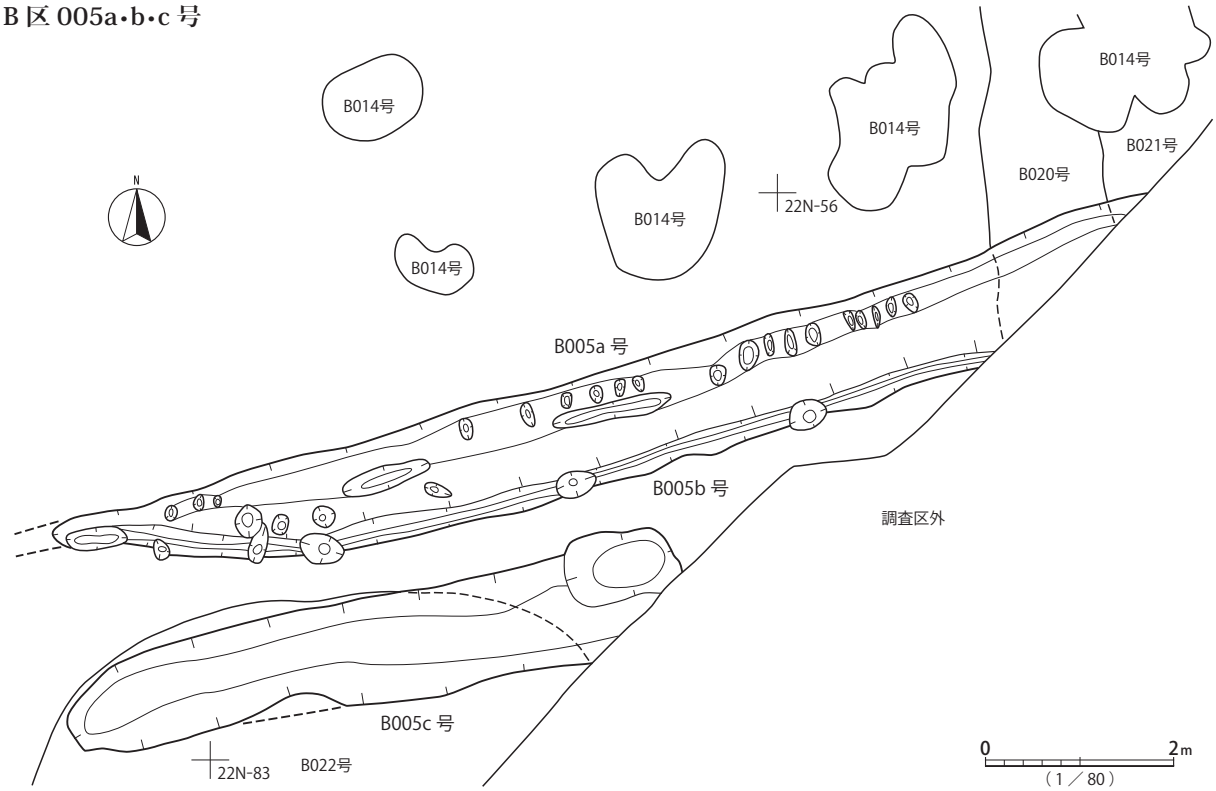
B区019a・b号（Fig.105・106、PL.111）

B区中央部をL字状に走る溝である。a号は東西方向に向かって走り、東側は調査区外へと延びている。中央部の南側は竪穴建物跡B区008号を一部削平している。西側はb号を削平し、東側はB区024号を削平する。また、西側は溝B区001号によって削平されている。b号は南北方向に向かって走り、北側はa号によって削平される。南側は遺存度が悪く検出できなかったが、本来溝が続いていたものとみられる。

規模はa号が長さ（17.0）m、幅1.6m、最大深度33cm、b号が長さ（8.9）m、幅1.8m、最大深度25cmである。a・b号それぞれ掘り直しと思われる数条の溝が重なって遺構を形成しているが新旧は不明である。

遺物はa・b号から縄文土器29g、弥生土器61g、土師器97g、須恵器16g、中世陶磁器類119g、

B区 005a・b・c 号



B区 011 号

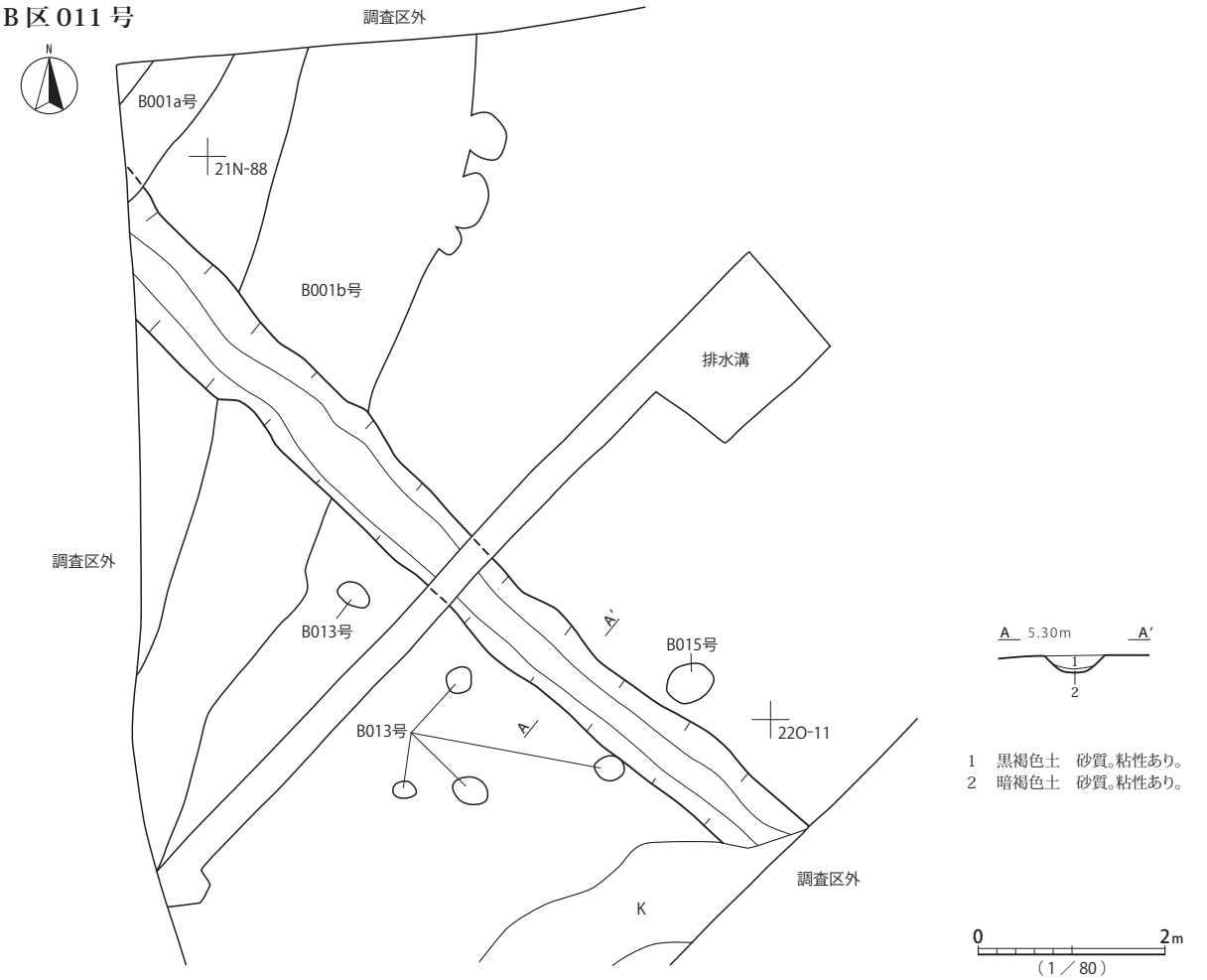
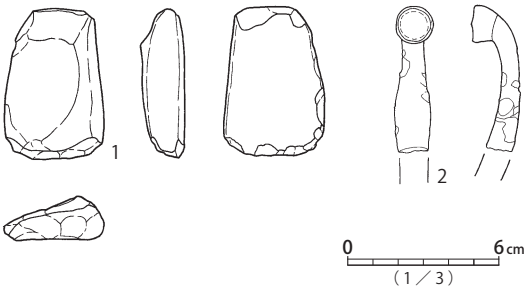
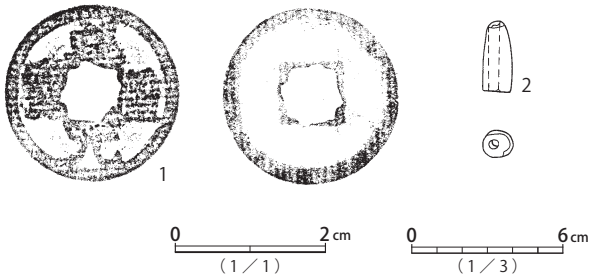


Fig.104 溝 B区005a・b・c号、011号 遺構実測図

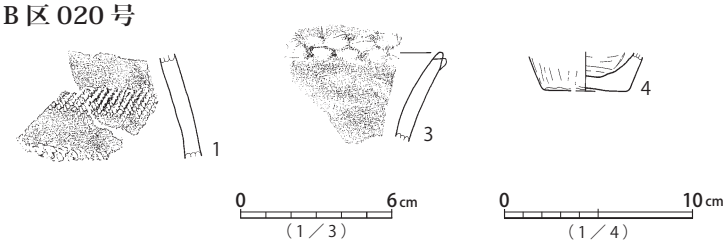
B区005号



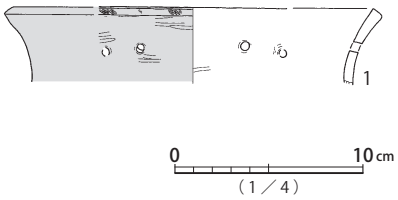
B区019号



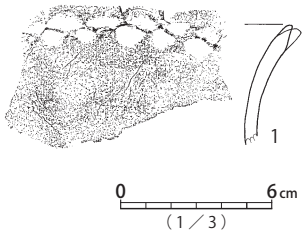
B区020号



C区010号



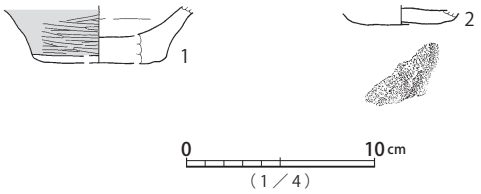
C区038号



D区001号

土坑・ピット群

B区002号



B区003号

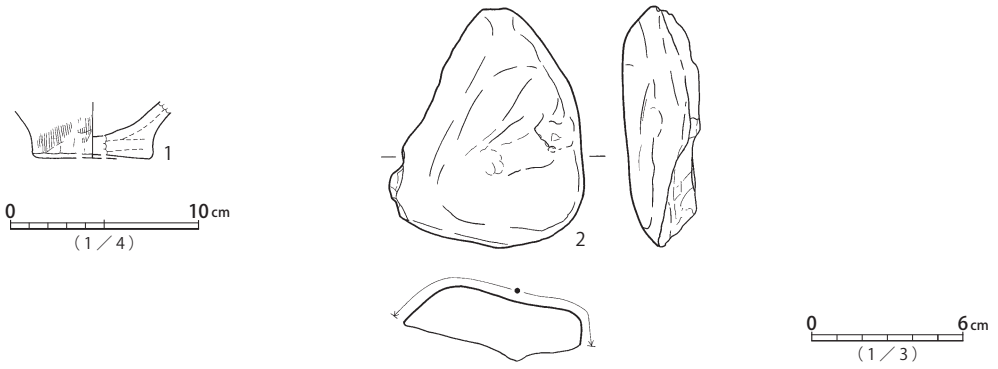


Fig.105　溝 B区005号、019号、020号、C区010号、038号、D区001号、土坑・ピット群 B区002号、003号 遺物実測図

近世陶磁器類130g、石片488g、木片1gが出土した（Fig.105、PL.111）。中世では瀬戸・美濃系陶器の後期様式Ⅳ期に比定される擂鉢・緑釉小皿の破片が、近世では肥前系磁器の徳利・碗、瀬戸・美濃系陶器の徳利・碗・輪禿皿・志野丸皿、瀬戸・美濃系磁器の碗、常滑産陶器の甕がみられた。いずれも小片のため未掲載である。1は乾元大宝、2は土錘である。なお、出土遺物がB区019a・b号のいずれに帰属するものかは不明である。

遺構の時期については、溝B区005a・b号かB区024号と組み合って、中世の掘立柱建物跡B区014a・b号を方形に区画する溝になると思われることから、中世と考えられる。また、a・b号の新旧については、区画溝という性質上、ほぼ同時期に掘削されたものと思われる。

B区020号（Fig.105・106、PL.111）

B区東部を南北方向に走る溝である。南側は調査区外へと延びている。竪穴建物跡B区021号を削平して構築される。一部、掘立柱建物跡B区014a・b号の柱穴が本遺構を削平している。また、溝B区005a・b号が本遺構の南側を削平するが、本遺構のほうが深度で勝るため、重複箇所の下端が検出されている。

規模は長さ（8.0）m、幅1.4m、最大深度59cmである。

遺物は弥生土器が251g出土した（Fig.105、PL.111）。1は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される壺形土器の破片である。3・4は弥生時代中期後半の宮ノ台式の甕形土器の破片である。

遺構の時期については、宮ノ台式に比定される弥生時代中期後半の土器が出土しているが、本遺構が弥生時代中期後半の竪穴建物跡であるB区021号を削平して構築されているため、混ざり込みである可能性も考えられる。一方で中世の溝B区005a・b号によって覆土が削平されていることから、詳しい時期は不明であるが、弥生時代中期後半以降、中世以前に作られたものと思われる。

B区024号（Fig.106）

B区東部を南北方向に走る溝である。南側は調査区外へと延びている。北側は溝B区019a号に削平される。南側の一部は竪穴建物跡B区021号の覆土を削平して遺構と構築している。

規模は長さ（5.2）m、幅1.0m、最大深度16cmである。遺物は出土していない。

遺構の時期については出土遺物が皆無であるため詳細は不明だが、溝B区005a・b号、B区019a・b号と組み合って、中世の掘立柱建物跡B区014a・b号を方形に区画する溝になると考えられることから、中世に属するものと思われる。

C区003b号（Fig.107、PL.16・17）

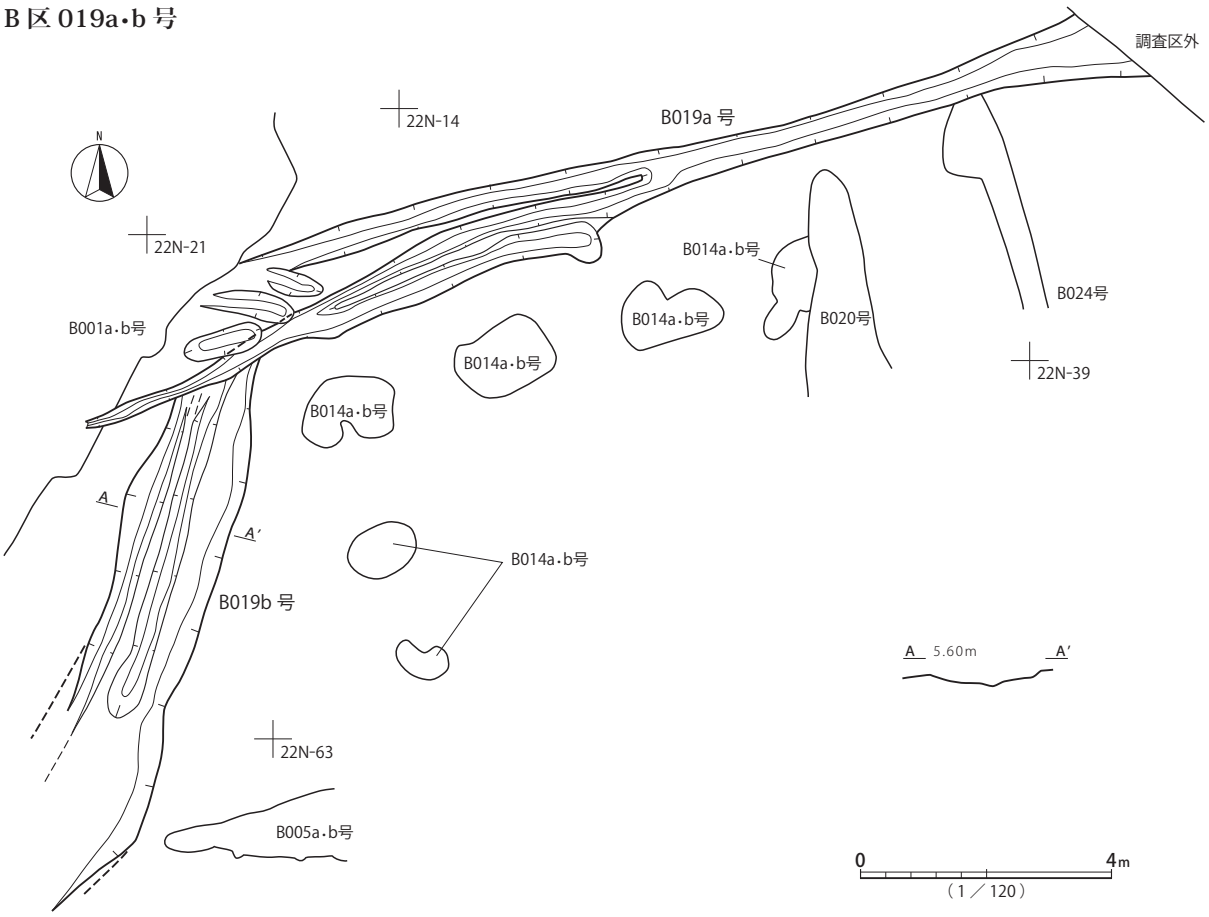
C区東部を東西方向に走る溝である。中央部は調査時の方眼杭が存在しているため未調査である。中央部は土坑C区003a号、東側は小ピットと排水溝によって削平される。また、溝C区060号を削平して構築している。

規模は長さ（7.4）m、幅0.7m、最大深度7cmである。遺構底面に小ピットがみられる。

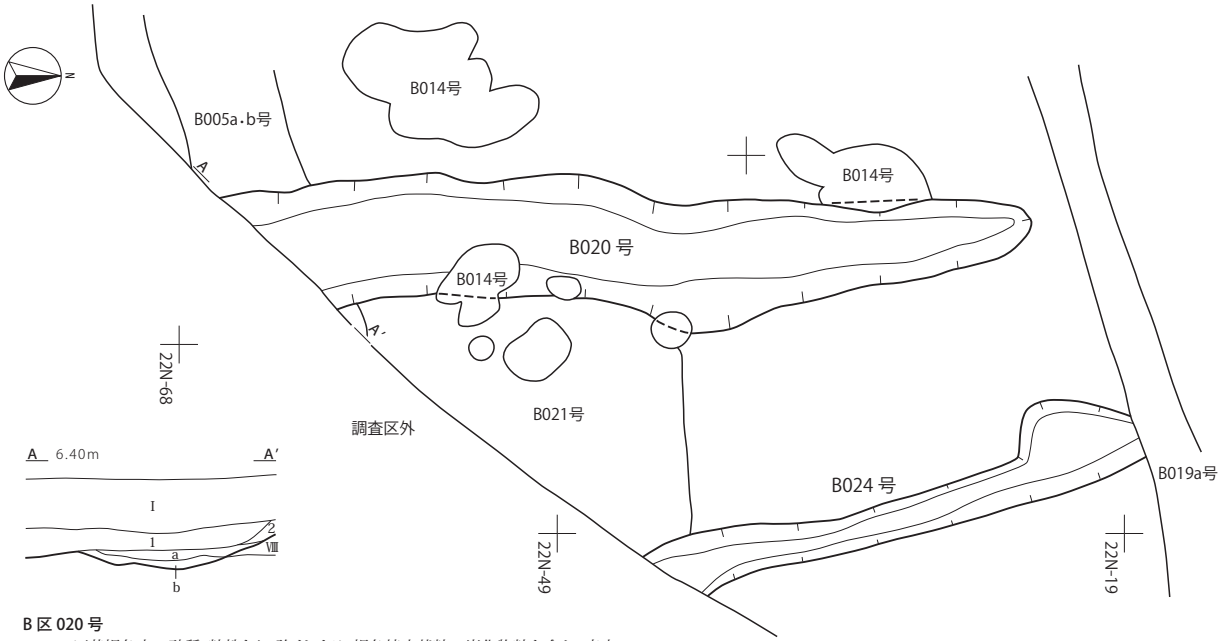
出土遺物は宮ノ台式に比定される弥生土器片が56g出土しているが、混入と思われる。

遺構の時期については不明であるが、中世の溝C区010号やC区057号とほぼ平行することから、

B区 019a･b 号



B区 020･024 号



B 区 020 号

I　灰黄褐色土　砂質。粘性あり。強くしまる。褐色焼土状粒・炭化物粒を含む。表土。
1　にぶい黄橙色土　砂質。粘性あり。強くしまる。褐色焼土状粒・黄褐土粒を含む。近世の道路跡か。
2　黒褐色土　砂質。粘質あり。強くしまる。焼土状赤褐土粒を含む。中世の包含層。
a　黒褐色土　砂質。粘質あり。強くしまる。黄褐土ブロック・炭化物ブロックを含む。B020 号覆土。
b　黄褐色土　砂質。粘性あり。強くしまる。黒褐砂粒を含む。B020 号覆土。
Ⅷ　明褐色土　地山

Fig.106　溝 B区019a・b号、020・024号 遺構実測図

本遺構も中世に帰属する可能性がある。

C区060号（Fig.107）

C区東部を北東−南西方向に走る溝である。中央部から南側にかけて溝C区003b号、小ピット、排水溝によって削平される。

規模は長さ（3.5）m、幅0.7m、最大深度8cmである。遺物は出土していない。

遺構の時期については出土遺物が皆無であるため不明であるが、C区003a・b号より先行するものと思われる。

C区004号（Fig.107、PL.17）

C区北部を北西−南東方向に走る溝である。遺構の北側は調査区外へと延びている。

規模は長さ（4.2）m、幅1.3m、最大深度13cmである。遺物は出土していない。

遺構の時期については出土遺物が皆無であるため不明であるが、中世の溝C区006号と平行することから、本遺構も中世に帰属する可能性がある。

C区006号（Fig.107、PL.21）

C区北部を北西−南東方向に走る溝である。遺構の北側は調査区外へと延びている。

規模は長さ（3.5）m、幅0.8m、最大深度8cmである。遺構底面に小ピットが存在する。また、底面の形状から遺構が掘り直されている可能性がある。

遺物は弥生土器193g、中世陶磁器類172g、石片654gが出土しているが、小片のため未掲載である。中世の陶磁器類では、瀬戸・美濃系陶器の直縁大皿（後期様式Ⅲ期）、常滑産陶器の片口鉢Ⅱ類（8型式・10型式）、カワラケ（R種）、在地系土器の小型皿が出土している。

遺構の時期については、出土遺物から中世と考えられる。また、溝C区004号と平行することから、区画溝であった可能性がある。

C区010号（Fig.105・108、PL.17・18・111）

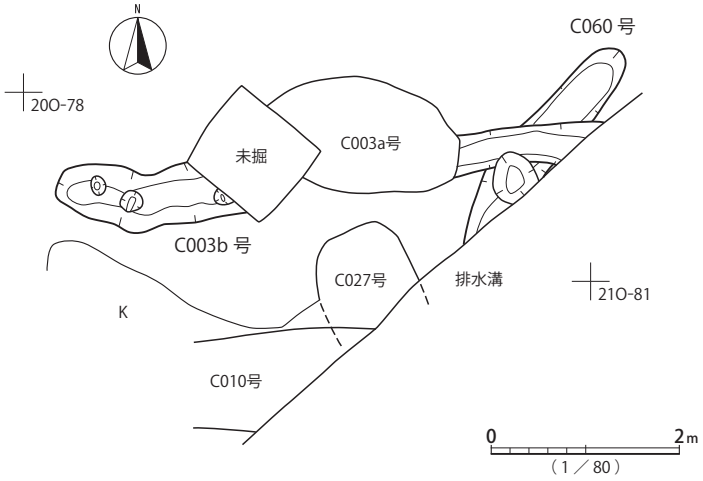
C区中央部を横断する溝である。東側は一部調査用の排水溝によって削平されている。また、土坑C区027号を削平して構築している。

規模は長さ（26.4）m、幅0.8m、最大深度19cmである。一部、遺構底面に小ピットが存在する。また、西側の遺構周辺にはアメーバ状のピットが存在する。

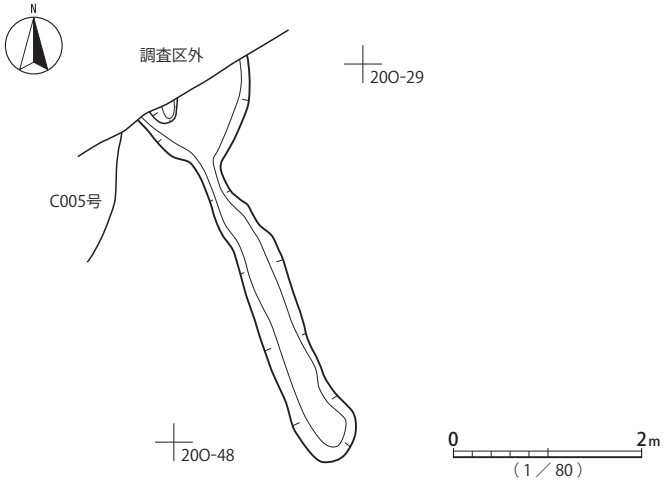
遺物は弥生土器30g、中世陶磁器類185gが出土している（Fig.105、PL.111）。中世の陶磁器類では常滑産陶器の片口鉢Ⅱ類（型式不明）がみられたが、小片のため未掲載である。また、1は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される広口壺形土器であるが、混入と思われる。

遺構の時期については、出土遺物から中世と考えられる。また、本遺構の南側に、本遺構と平行する溝C区057号が存在しており、これらは掘立建物跡C区061a号・C区062号の桁や梁の方向ともほぼ平行することから、掘立柱建物跡に伴う区画溝であった可能性がある。

C 区 003b･060 号



C 区 004 号



C 区 006 号

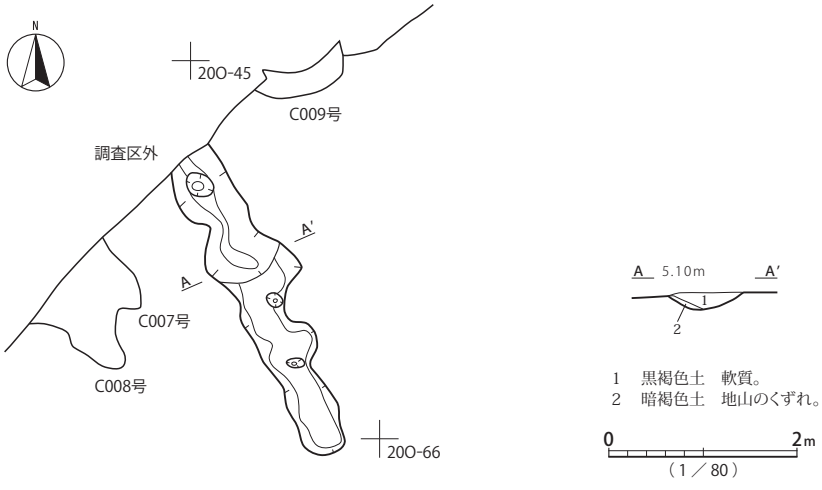


Fig.107 溝 C区003b・060号、004号、006号 遺構実測図

C区010号

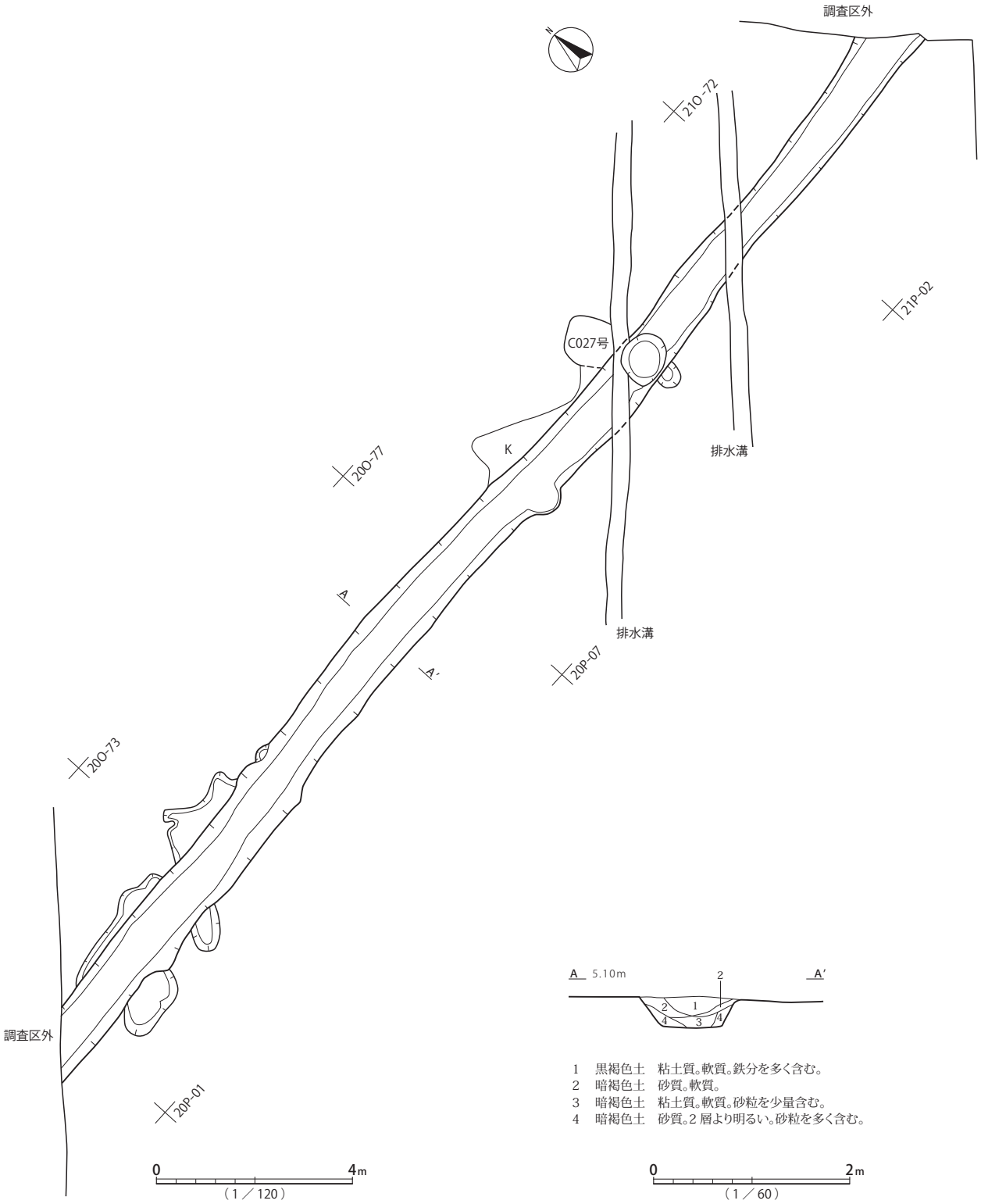


Fig.108 溝 C区010号 遺構実測図

C区030号（Fig.109、PL.19）

C区北東部を北西−東方向に走る溝である。遺構の北側と東側は調査区外へと延びている。

規模は長さ・幅ともに不明であり、最大深度８～22cmである。現状では複数の小溝や小ピットが隣接して存在する状況となっているが、実際は１本ないし数本の溝で、確認面ではその残欠を捉えた可能性がある。遺物は出土していない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、そのほかに時期を特定できる情報もないため、不明である。

C区038号（Fig.105・109、PL.20・111）

C区中央部を北東−南西方向に走る溝である。遺構の中央部は調査時の排水溝によって大幅に削平される。また、西側は遺存度が悪く検出できなかった。

規模は長さ・幅ともに不明であり、最大深度25cmである。

出土遺物は弥生土器が１点のみみられた（Fig.105、PL.111）。１は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される甕形土器である。

遺構の時期については、弥生土器が出土しているが１点のみであり、混入である可能性も否定できないため、不明である。

C区057号（Fig.109）

C区南東部を東西方向に走る溝である。遺構の西側は調査時の排水溝によって大幅に削平されており、排水溝以西は遺構を検出できなかった。

規模は長さ（6.3）m、幅1.2m、最大深度8cmである。遺物は出土していない。

遺構の時期については出土遺物が皆無のため詳細は不明であるが、本遺構の北側に存在する中世の溝C区010号と本遺構が平行しており、これらは掘立建物跡C区061a号・C区062号の桁や梁の方向ともほぼ平行することから、中世の掘立柱建物跡に伴う区画溝であった可能性がある。

D区001号（Fig.9・105・110、PL.23・111）

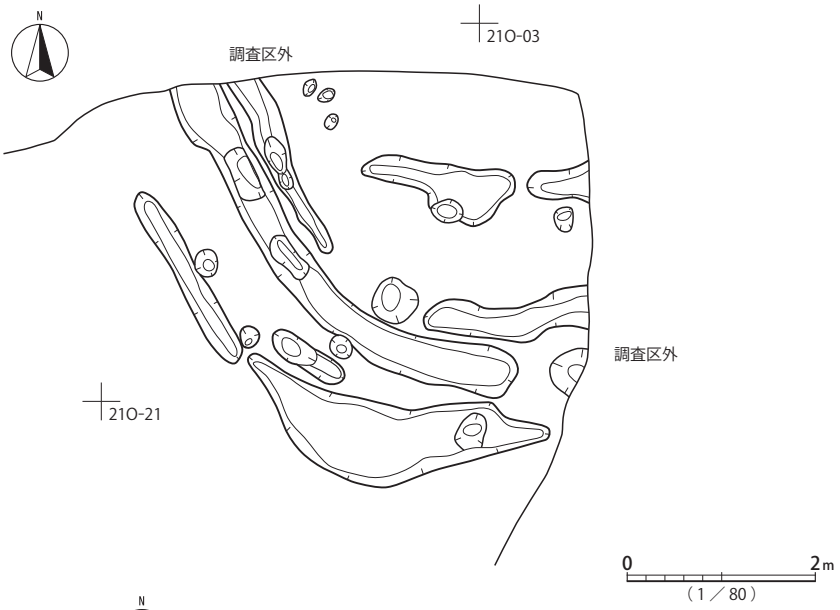
D区の北東部を南北方向に走る溝である。遺構の北側は調査区外へと延びている。中央部は攪乱によって削平され、南側は遺存度が悪く、確認面で遺構を検出できなかった。

規模は長さ（8.7）m、幅1.2m、最大深度10cmである。

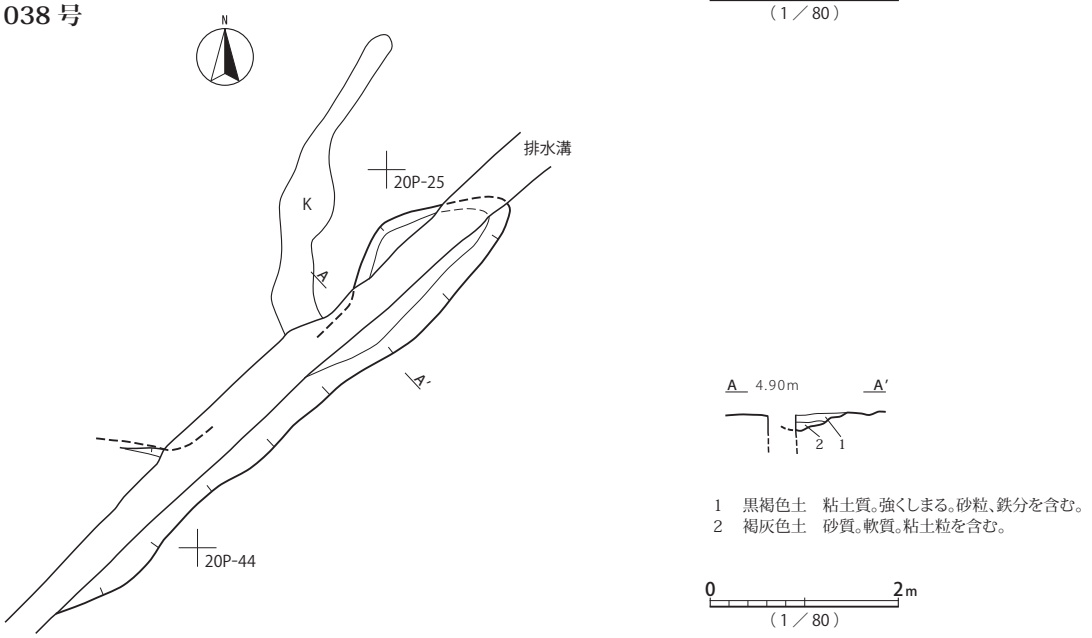
遺物は縄文土器130g、時期不明土器片10gが出土した（Fig.105、PL.111）。１はD区包含層縄文土器分類の15a類に属する紐線文系土器である。粘土紐の刺突の状況から、縄文時代晩期前葉（安行3a式期）とみられる。２はD区包含層縄文土器分類の18類に属する粗製深鉢形土器であり、縄文時代晩期前葉～中葉（安行3b式～3c式期）と考えられる。

遺構の時期については、縄文土器が出土しているが、D区縄文時代包含層の土層断面図において本遺構が縄文時代包含層を掘り込んで構築することが確認できるため（Fig.9）、縄文時代以降に作られたものと考えられる。

C 区 030 号



C 区 038 号



1　黒褐色土　粘土質。強くしまる。砂粒、鉄分を含む。
2　褐灰色土　砂質。軟質。粘土粒を含む。

C 区 057 号

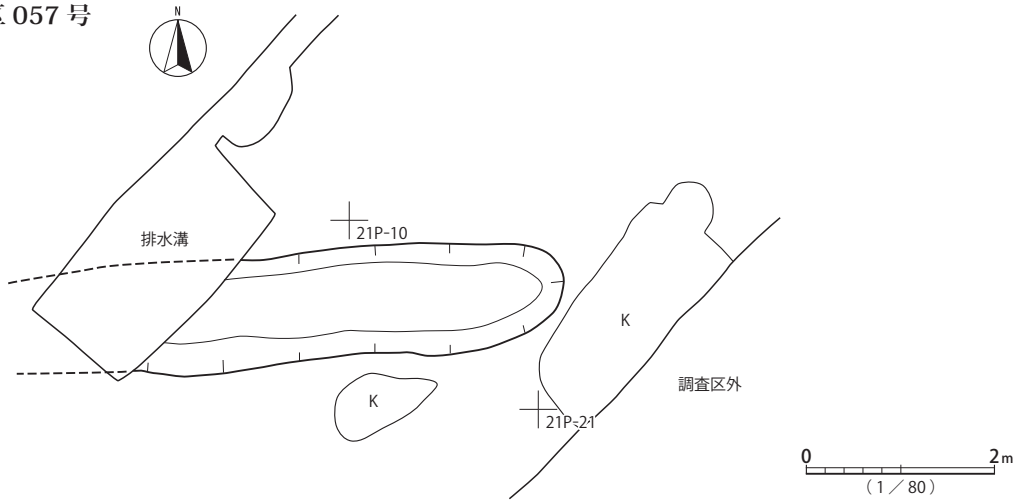


Fig.109　溝 C区030号、038号、057号 遺構実測図

D区001号

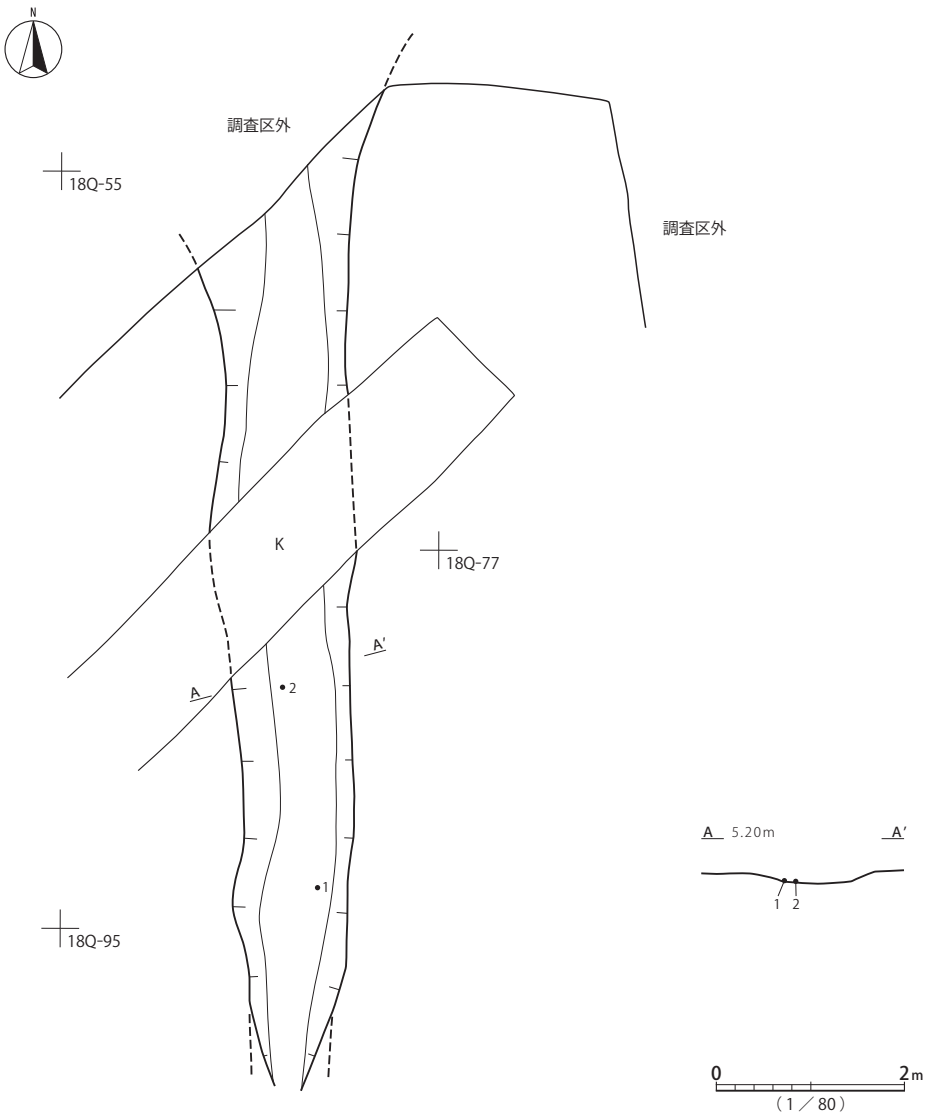


Fig.110　溝 D区001号 遺構実測図

第５節　土坑・ピット群

A区005号（Fig.111、PL.10）

A区の中央部に存在する。本遺構は調査区内において東から西に下る傾斜地(5)内に位置している。

規模は長軸1.0m、短軸0.8m、最大深度32cmであり、形状は楕円形を呈する。出土遺物は縄文土器片１点、石片２点が出土しているが、本遺構に伴うものかは不明である。

遺構の時期については、出土遺物や遺構の形状等で判断ができないため不明である。

A区007号（Fig.111、PL.11）

A区の北東部に存在する。本遺構の北側には道路状遺構A区011号が隣接して存在する。東側は溝A区010号によって一部が削平されている。

規模は長軸1.1m、短軸1.0m、最大深度24cmであり、形状は正円形を呈する。出土遺物はみられない。

遺構の時期については不明であるが、溝A区010号よりも古いものと考えられる。

A区008号（Fig.111、PL.11）

A区の中央部に存在する。

規模は長軸1.6m、短軸0.9m、最大深度14cmであり、形状は楕円形を呈する。出土遺物は少量出土しているが、詳細は不明である。

遺構の時期については不明である。しかし、掘立柱建物跡A区003号を区画する溝（A区001号・002a・b号）の内側に存在することから、掘立柱建物跡に伴う遺構である可能性も考えられる。

A区009号（Fig.111、PL.11）

A区の北東部に存在する。遺構北側は道路状遺構A区011号によって削平されている。また、西側は調査区内において東から西に下る傾斜地(5)に隣接する。

規模は不明、最大深度は16cmであり、楕円形の形状を呈するとみられる。出土遺物はみられない。

遺構の時期については不明であるが、中近世以前に作られた可能性がある。

B区002号（Fig.105・112、PL.12・111）

B区の北部に存在する。遺構北側は調査時の排水溝によって一部が削平され、その先は調査区外へと延びている。本遺構の北東側には土坑B区003号が存在する。

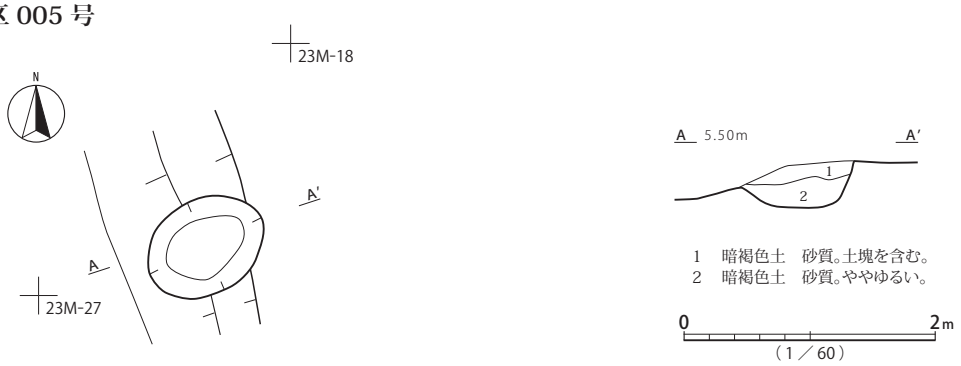
規模は不明、最大深度は49cmであり、円形の形状を呈するとみられる。遺構の南東・南西の角がやや突出した形状をとる。

遺物は縄文土器35g、弥生土器46g、中世陶磁器類17g、石片15gが出土した（Fig.105、PL.111）。1は弥生時代の宮ノ台式もしくは久ヶ原式に比定される壺形土器の底部である。本遺構に直接伴うものではなく、混入と思われる。2は在地系土器のカワラケ中型皿である。

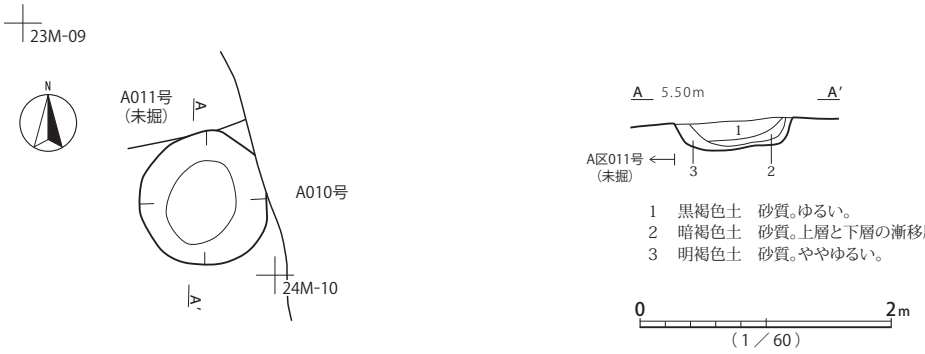
遺構の時期については、形状と出土遺物から中世と考えられる。

土坑・ピット群

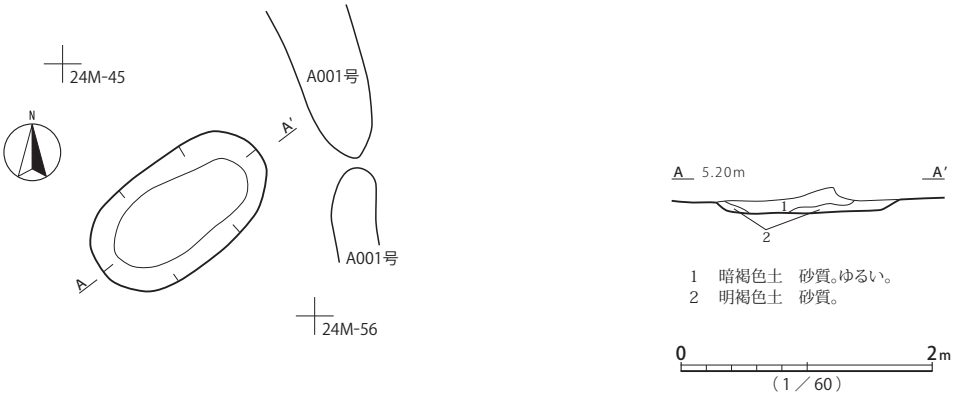
A区005号



A区007号



A区008号



A区009号

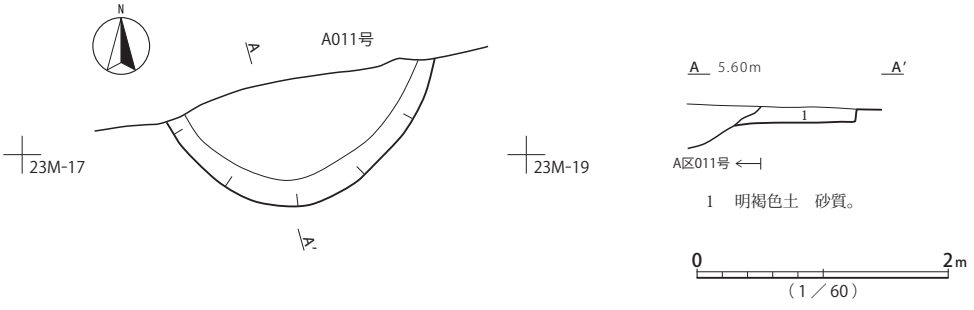


Fig.111　土坑・ピット群 A区005号、007号、008号、009号 遺構実測図

B区003号（Fig.105・112、PL.13・111）

B区の北部に存在する。遺構北側は調査時の排水溝によって一部が削平され、その先は調査区外へと延びている。本遺構の南西側には土坑B区002号が存在する。

規模は不明、最大深度は50cmであり、円形の形状を呈するとみられる。

遺物は弥生土器50g、不明土器片31g、石製品221gが出土している（Fig.105、PL.111）。1は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される甕形土器の底部、2は磨石である。

遺構の時期については、遺構内から弥生土器が出土しているが、遺構の形状が中世の土坑B区002号に似ていることや、立地においても隣接することから、中世の可能性が考えられる。

B区004a号（Fig.112・113、PL.13・111・116）

B区の西部に存在する。遺構の東側はB区004b号と一部が重複するが、新旧は不明である。

規模は長軸（1.5）m、短軸0.6m、最大深度25cmであり、形状は長楕円形を呈する。

遺物は弥生土器1点と木製品の可能性がある木片が出土した（Fig.113、PL.111・116）、1は弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される甕形土器の底部である。2・3は木製品の可能性がある木片である。2は先端が炭化している。3は表面に加工痕らしき凹凸がみられる。3がB区004a・b号のいずれに帰属するものかは不明である。

遺構の時期については不明である。しかし、出土遺物から弥生時代中期後半の可能性も考えられる。

B区004b号（Fig.112・113、PL.13・111・116）

B区の西部に存在する。遺構の西側はB区004a号と一部が重複するが、新旧は不明である。

規模は長軸0.9m、短軸0.6m、最大深度30cmであり、形状は楕円形を呈する。

出土遺物は皆無だが、B区004a号の記載の中で取り上げた3が本遺構に伴う可能性がある（Fig.113、PL.116）。

遺構の時期については、出土遺物や遺構の形状等で判断ができないため不明である。

B区013号（Fig.112）

B区の南西部に存在する。5つの小ピットからなるピット群である。

5つの小ピットの規模は、長軸が0.2 ～ 0.4m、短軸が0.2 ～ 0.3m、最大深度が13 ～ 28cmである。形状は全て楕円形である。

遺物は弥生土器1点と小礫1点が出土したが、本遺構に伴うものかは不明である。

遺構の時期については、出土遺物や遺構の形状等で判断ができないため不明である。

B区015号（Fig.112）

B区の南西部に存在する。

規模は、長軸0.5m、短軸0.4m、最大深度25cmであり、形状は楕円形を呈する。

遺物は不明土器片が28g出土しているが、いずれも小片のため掲載していない。

遺構の時期については不明である。

B区018号（Fig.112）

B区の南西部に存在する。

規模は、長軸1.1m、短軸0.6m、最大深度39cmである。正円形と楕円形が組み合わさった形状をとることから、2つの土坑が重複している可能性もある。

出土遺物は、弥生時代中期後半の宮ノ台式に比定される壺形土器の小片が1点のみみられるが、本遺構に伴うものかは不明である。なお、小片のため掲載していない。

遺構の時期については不明である。しかし、出土遺物から弥生時代中期後半の可能性も考えられる。

C区001号（Fig.114、PL.16・21）

C区の北東部に存在する。

規模は、長軸2.0m、短軸1.3m、最大深度49cmであり、形状は楕円形を呈する。2つの円形の土坑が組み合わさっており、土層断面図から南側の土坑が新しいものとみられる。

遺物は縄文土器片7g、土師器94g、石片55.7gが出土しているが、本遺構に伴うものかは不明である。なお、いずれも小片のため掲載していない。

遺構の時期については、出土遺物や遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区002号（Fig.114、PL.16・21）

C区の北東部に存在する。

規模は、長軸1.0m、短軸0.9m、最大深度28cmであり、正円形の土坑に小規模なピットが付属している。

遺物は縄文土器片12g、土師器片35g、石片419gが出土しているが、本遺構に伴うものかは不明である。なお、いずれも小片のため掲載していない。

遺構の時期については、出土遺物や遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区026号（Fig.114、PL.19）

C区の北東部に存在する。

規模は、長軸1.8m、短軸1.3m、最大深度15cmであり、ゆがんだ楕円形の形状を呈している。遺物は出土していない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

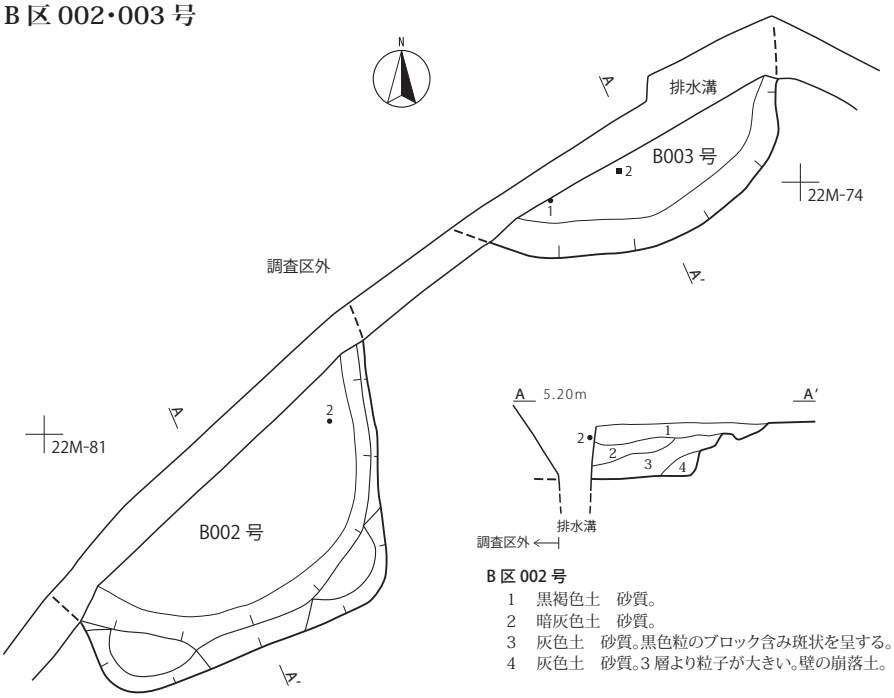
C区059号（Fig.114）

C区の北東部に存在する。調査時の排水溝が遺構を横断しており、覆土の一部が削平される。

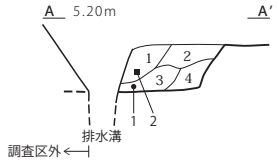
規模は、長軸1.1m、短軸0.9m、最大深度38cmであり、ややゆがんだ楕円形の形状を呈している。遺物は出土していない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

B区002・003号



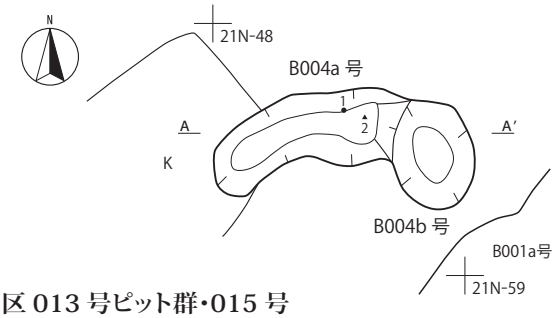
B区002号
1 黒褐色土 砂質。
2 暗灰色土 砂質。
3 灰色土 砂質。黒色粒のブロック含み斑状を呈する。
4 灰色土 砂質。3層より粒子が大きい。壁の崩落土。

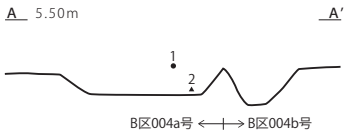


B区003号
1 暗灰色土 砂質。粒径やや大きい。
2 黒褐色土 砂質。
3 黒褐色土 粘質強い。
4 暗灰色土 砂質。粒径大きい。

0 2m
（1／60）

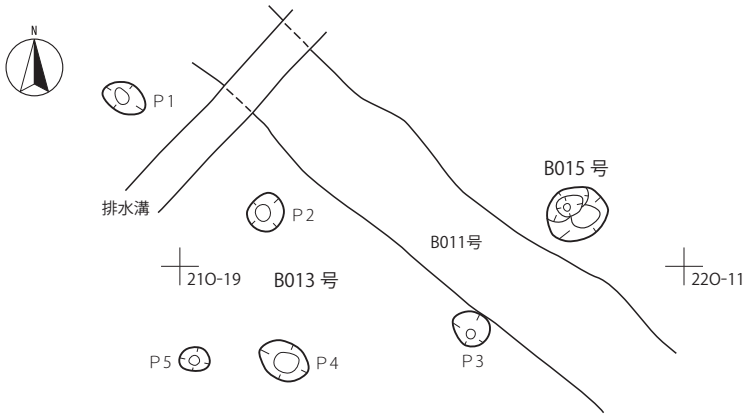
B区004a・b号



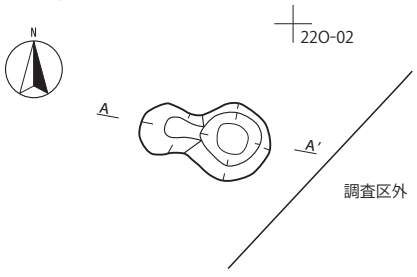


0 2m
（1／60）

B区013号ピット群・015号



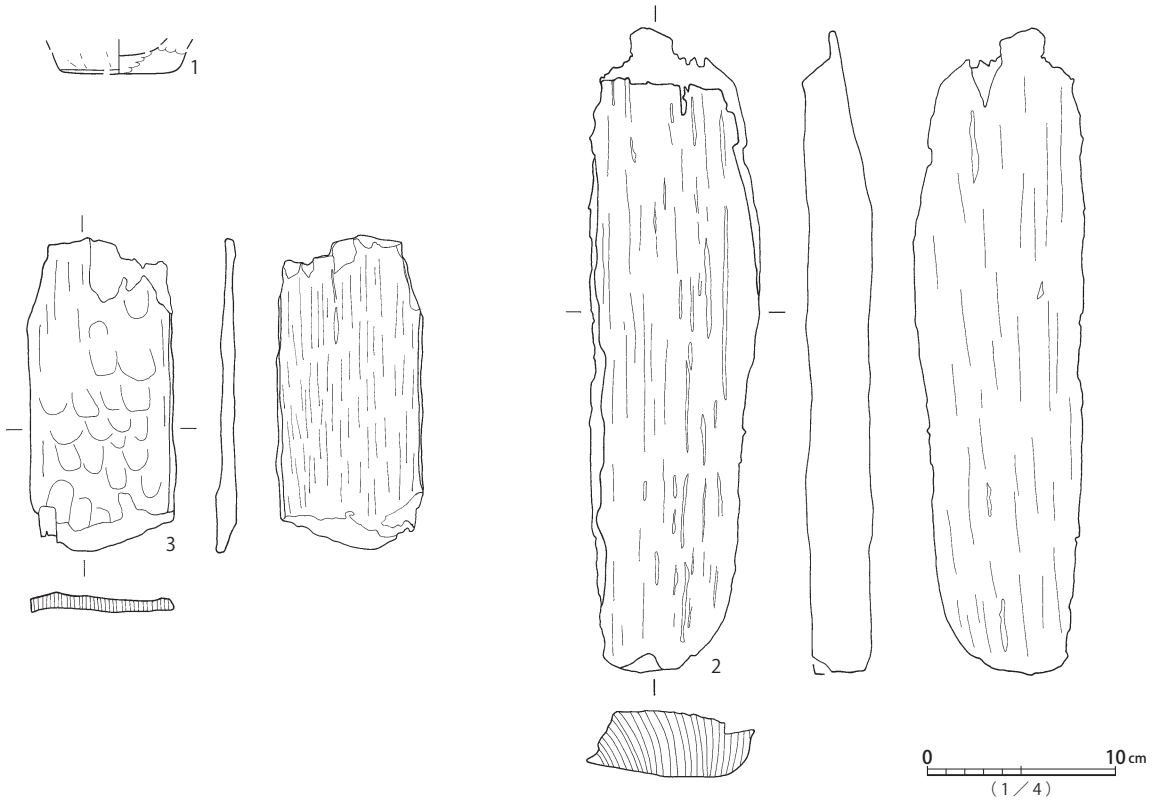
B区018号



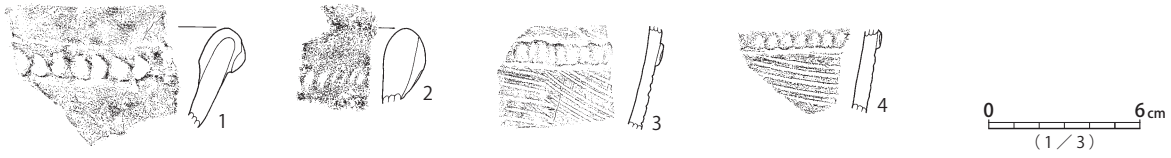
0 2m
（1／60）

Fig.112 土坑・ピット群 B区002・003号、004a・b号、013・015号、018号 遺構実測図

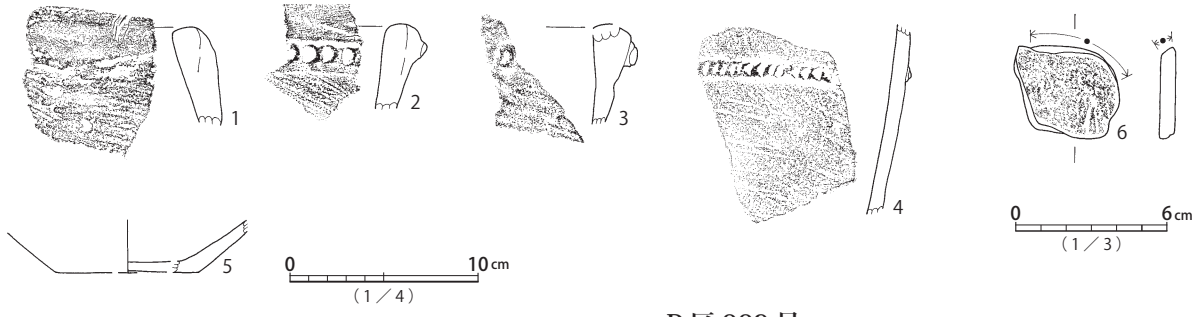
B区004号



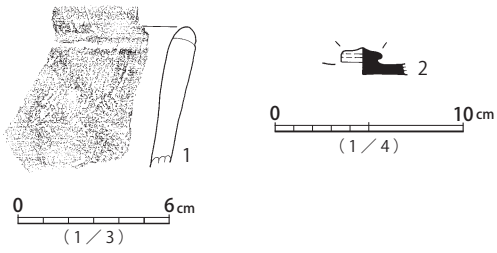
D区003号



D区004号



D区005号



D区009号

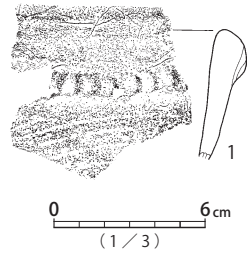


Fig.113　土坑・ピット群 B区004号、D区003号、004号、005号、009号 遺物実測図

C区003a号（Fig.114、PL.21）

C区の北東部に存在する。溝C区003b号を削平して構築している。遺構の西端は調査用の方眼杭が存在するため未発掘である。

規模は、長軸（1.7）m、短軸1.2m、最大深度11cmであり、楕円形の形状を呈するとみられる。また、遺構底面に小ピットが存在する。

遺物は弥生土器が57g出土しているが、本遺構に伴うものかは不明である。なお、小片のため掲載していない。

遺構の時期については、出土遺物等で判断ができないため不明であるが、C区003b号よりは新しいものとみられる。

C区027号（Fig.114、PL.19）

C区の北東部に存在する。遺構の西側を攪乱、南側を溝C区010号、東側を調査時の排水溝によって削平されている。

規模は、長軸（1.1）m、短軸1.0m、最大深度16cmであり、楕円形の形状を呈するとみられる。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物等で判断ができないため不明であるが、中世の溝であるC区010号に削平されるため、中世以前の可能性がある。

C区005号（Fig.114、PL.17・21）

C区の北部に存在する。遺構の北側を調査時の排水溝によって削平され、その先は調査区外へと延びている。

規模は、長軸、短軸は不明、最大深度は8cmである。楕円形の形状を呈するとみられる。

出土遺物は、弥生土器片が1点のみみられるが、本遺構に伴うものかは不明である。なお、小片のため掲載していない。

遺構の時期については不明である。しかし、遺構の形状や中世の溝C区004号・C区006号が近接することから、中世に属する可能性がある。

C区007号（Fig.115、PL.17・21）

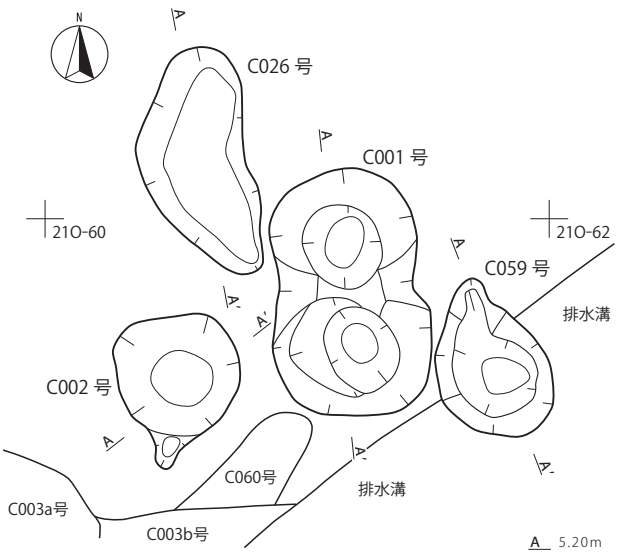
C区の北部に存在する。遺構の北側を調査時の排水溝によって削平され、その先は調査区外へと延びている。

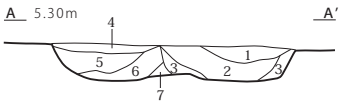
規模は、長軸（0.8）m、短軸は不明、最大深度18cmである。長大な楕円形の形状を呈するとみられるが、溝の可能性もある。C区008号と重複するが、新旧は不明である。

遺物は弥生土器14g、中世陶磁器類29g、石片46gが出土した。中世の遺物では常滑産陶器の片口鉢II類がみられるが、小片のため未掲載である。

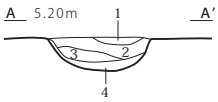
遺構の時期については、出土遺物や、中世の溝C区006号が近接して存在することから、中世と思われる。

C 区 001・002・026・059 号

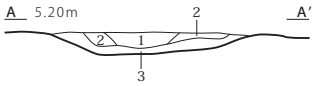




C 区 001 号
1　黒褐色土　黄褐色粒(5mm ～)を含む。
2　黒褐色土　黄褐色粒を少量含む。
3　暗褐色土　旧表土の流れ込みか。
4　黒褐色土　黄褐色砂粒を土塊状に含む。
5　黒褐色土　黒色粒を多く含む。鉄分を多く含む。
6　黒褐色土　粘性強い。
7　暗褐色土　地山の褐色粒を含む。軟質。

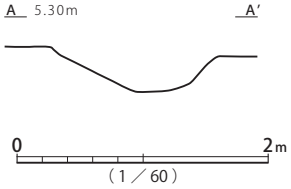


C 区 002 号
1　黒褐色土　塊状の黄褐色粒を少量含む。
2　暗黄褐色土　塊状の黄褐色粒、黒色粒のブロックを多量に含む。
3　黒褐色土　黄褐色粒を少量含む。
4　黒褐色土　砂質。黒褐色土を含む。

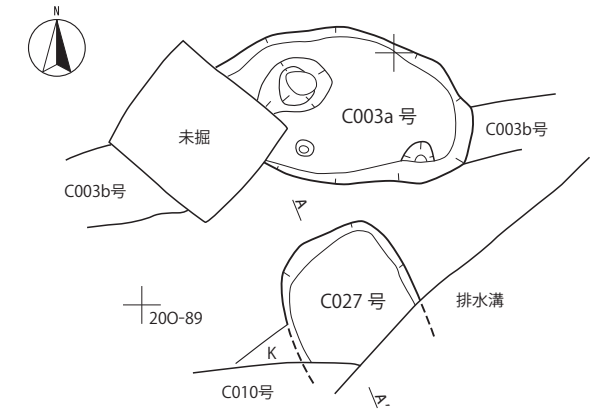


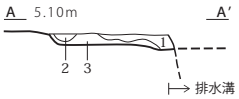
C 区 026 号
1　茶褐色土　やや砂質。
2　茶褐色土　下層との漸移層。
3　明褐色土　砂粒を全体に多く含む。

C 区 059 号

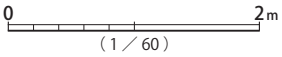


C 区 003a・027 号

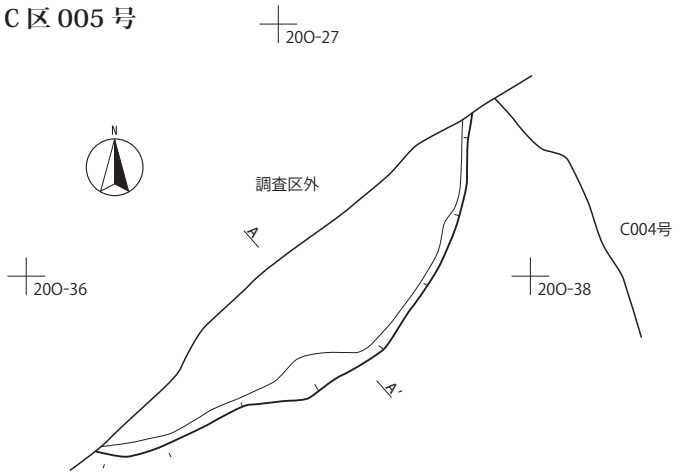


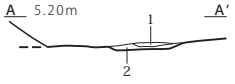


C 区 027 号
1　黒褐色土　軟質。砂粒を土塊状に含む。
2　暗褐色土　砂粒を少し含む。
3　暗褐色土　砂質。黒色土ブロックを少量含む。



C 区 005 号





1　黒褐色土　軟質。黄褐色粒を少量含む。
2　暗黄褐色土　黄褐色砂粒のブロックを多量に含む。

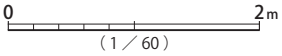


Fig.114　土坑・ピット群 C区001・002・026・059号、003a・027号、005号 遺構実測図

C区008号（Fig.115、PL.17・21）

C区の北部に存在する。遺構の北側を調査時の排水溝によって削平され、その先は調査区外へと延びている。

規模は、長軸（1.1）m、短軸は不明、最大深度16cmである。長大な楕円形の形状を呈するとみられるが、溝の可能性もある。C区007号と重複するが、新旧は不明である。なお、出土遺物はみられなかった。

遺構の時期については出土遺物が皆無であるため不明だが、重複するC区007号が本遺構の掘り直しとも考えられるため、中世に帰属する可能性がある。

C区009号（Fig.115、PL.17）

C区の北部に存在する。大部分を調査時の排水溝によって削平されており、遺構の全容はつかめない。

規模は、長軸、短軸とも不明、最大深度は9cmである。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物や遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区011号（Fig.115）

C区の中央部に存在する。6つの小ピットからなるピット群である。

6つの小ピットの規模は、長軸が0.2 ～ 0.5m、短軸が0.2 ～ 0.5m、最大深度が5 ～ 14cmである。形状は正円形に近いものと楕円形のものが存在する。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区025号（Fig.115、PL.19）

C区の中央部に存在する。

規模は、長軸1.4m、短軸0.8m、最大深度18cmであり、形状は楕円形である。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区035号（Fig.115、PL.20）

C区の中央部に存在する。

規模は、長軸1.0m、短軸0.6m、最大深度10cmであり、形状は楕円形である。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区036号（Fig.115、PL.20）

C区の中央部に存在する。

規模は、長軸1.3m、短軸0.7m、最大深度11cmであり、形状は楕円形である。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区016号（Fig.116、PL.18・21）

C区の南西部に存在する。遺構の一部が調査時の排水溝によって削平されている。

規模は、長軸（1.1）m、短軸0.9m、最大深度25cmであり、楕円形の形状を呈するとみられる。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区017号（Fig.116、PL.18）

C区の南西部に存在する。

規模は、長軸0.8m、短軸0.6m、最大深度14cmであり、楕円形の形状を呈する。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区037号（Fig.116、PL.20）

C区の中央部南側に存在する。

規模は、長軸2.4m、短軸0.8m、最大深度27cmであり、長大な楕円形の形状を呈する。複数の土坑が組み合わさっているものとみられる。

遺物は木片が少量出土しているが、遺構に伴うものかは不明である。なお、掲載はしていない。

遺構の時期については、出土遺物や遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区049号（Fig.116）

C区の中央部南側に存在する。遺構の一部が調査時の排水溝によって削平されている。

規模は、長軸（1.0）m、短軸0.6m、最大深度14cmであり、楕円形の形状を呈するとみられる。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区050号（Fig.116、PL.20）

C区の中央部南側に存在する。

規模は、長軸1.0m、短軸0.8m、最大深度10cmであり、楕円形の形状を呈する。遺物は出土していない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

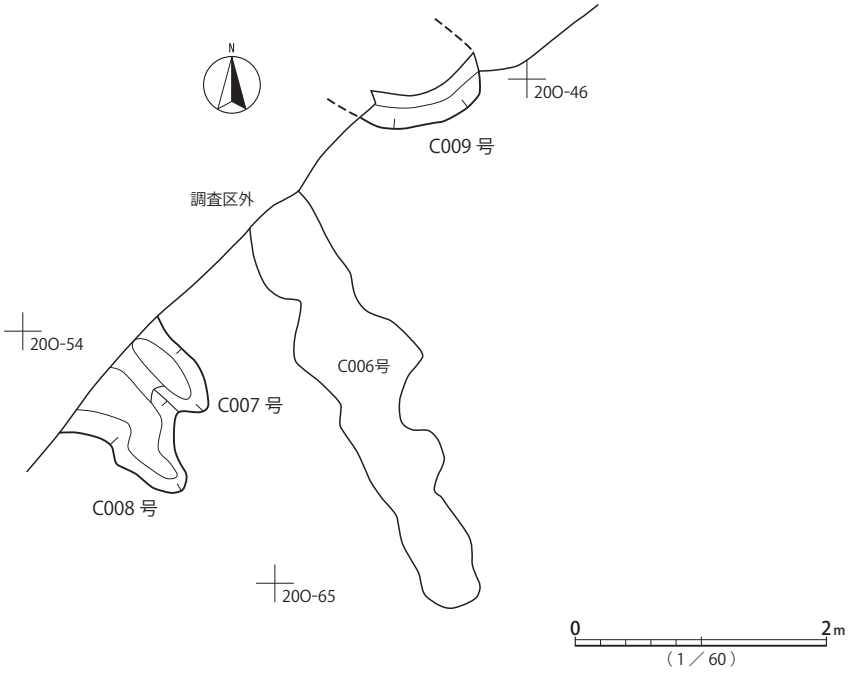
C区040号（Fig.116）

C区の南部に存在する。遺構の一部が調査時の排水溝によって削平されている。

規模は、長軸（1.6）m、短軸0.6m、最大深度27cmであり、長大な楕円形の形状を呈するとみられるが、溝の可能性もある。底面に小ピットが存在する。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C 区 007・008・009 号



C 区 011 号ピット群・025・035・036 号

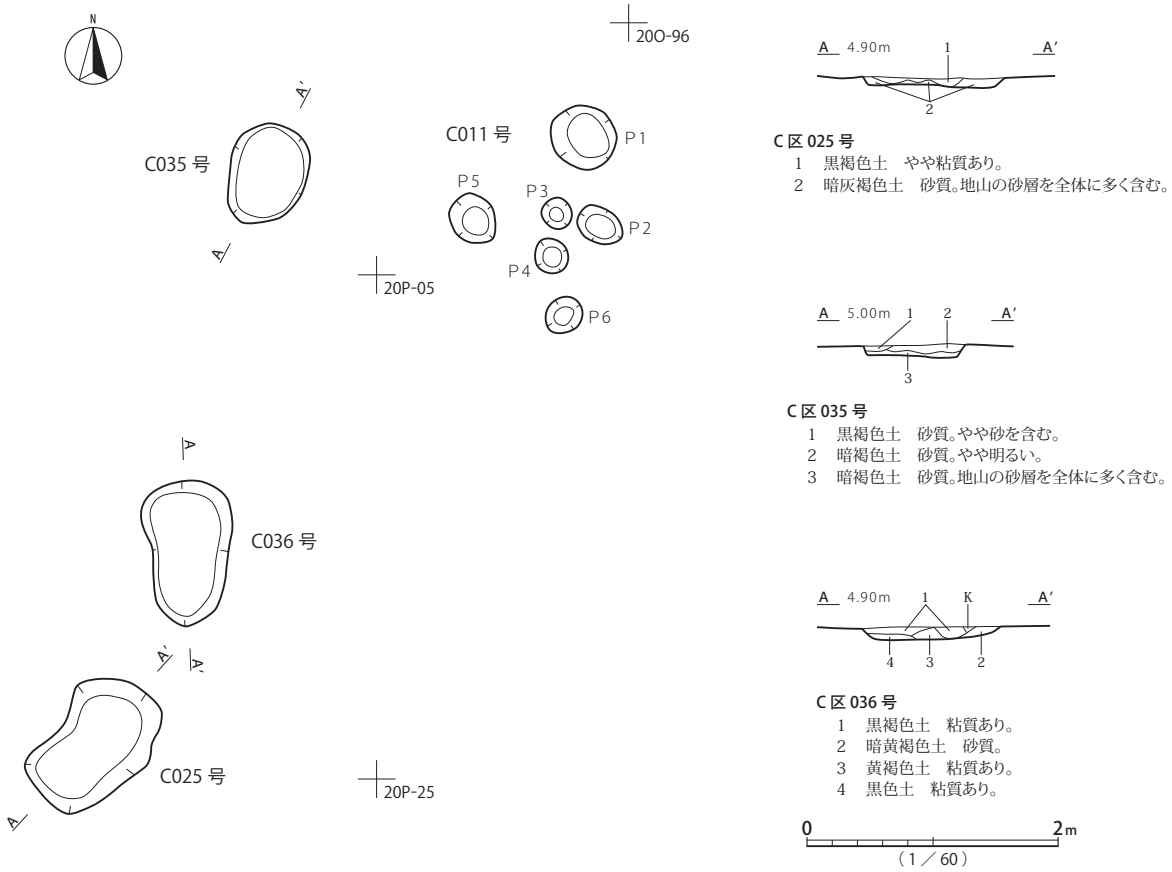


Fig.115 土坑・ピット群 C区007・008・009号、011・025・035・036号 遺構実測図

C区039号（Fig.117）

C区の中央部南側に存在する。

規模は、長軸2.3m、短軸1.3m、最大深度15cmであり、楕円形の土坑が3つ組み合って本遺構を形成する。

遺物は縄文土器が11gほど出土しているが、本遺構に伴うものかは不明である。なお、小片のため掲載していない。

遺構の時期については遺物から縄文時代の可能性があるが、詳細は不明である。

C区052号（Fig.117）

C区の中央部南側に存在する。

規模は、長軸2.2m、短軸1.6m、最大深度19cmであり、楕円形の土坑が5つ組み合って本遺構を形成する。また、底面に小ピットが存在する。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区055号（Fig.117）

C区の南部に存在する。遺構の一部は調査時の排水溝によって削平されている。

規模は、長軸2.6m、短軸0.5m、最大深度35cmであり、長大な楕円形の形状を呈する。溝の残欠の可能性も存在する。また、底面に小ピットがみられる。

遺物は木片が1点のみ出土しているが、本遺構に伴うものかは不明である。なお、掲載はしていない。

遺構の時期については、出土遺物や遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区058号（Fig.117）

C区の南部に存在する。

規模は、長軸2.2m、短軸1.3m、最大深度8cmであり、楕円形と正円形の土坑が組み合わさって本遺構を形成する。また、溝の残欠である可能性もある。底面に小ピットが存在する。遺物は出土していない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

C区063号（Fig.117）

C区の西部に存在する。遺構の南東側は遺存度が悪く、確認面において遺構が検出されなかった。

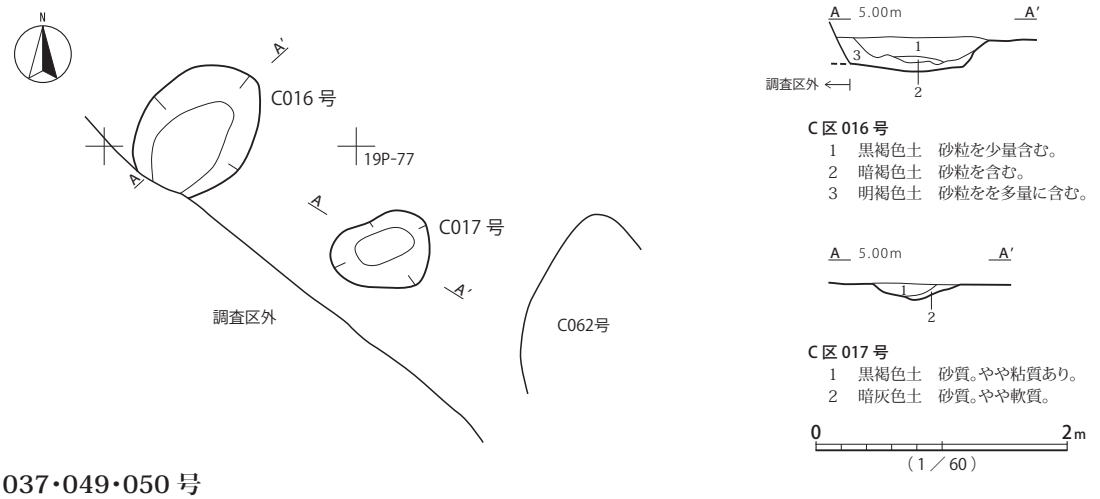
規模は、長軸1.5m、短軸（0.8）m、最大深度15cmであり、楕円形の形状を呈するとみられる。底面に小ピットが2基存在する。出土遺物はみられない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

D区003号（Fig.113・118、PL.23・24・111）

D区の中央部に存在する。D区004号を削平して作られている。また、遺構西側の一部は遺存度が悪く、残存していない。

C区016・017号

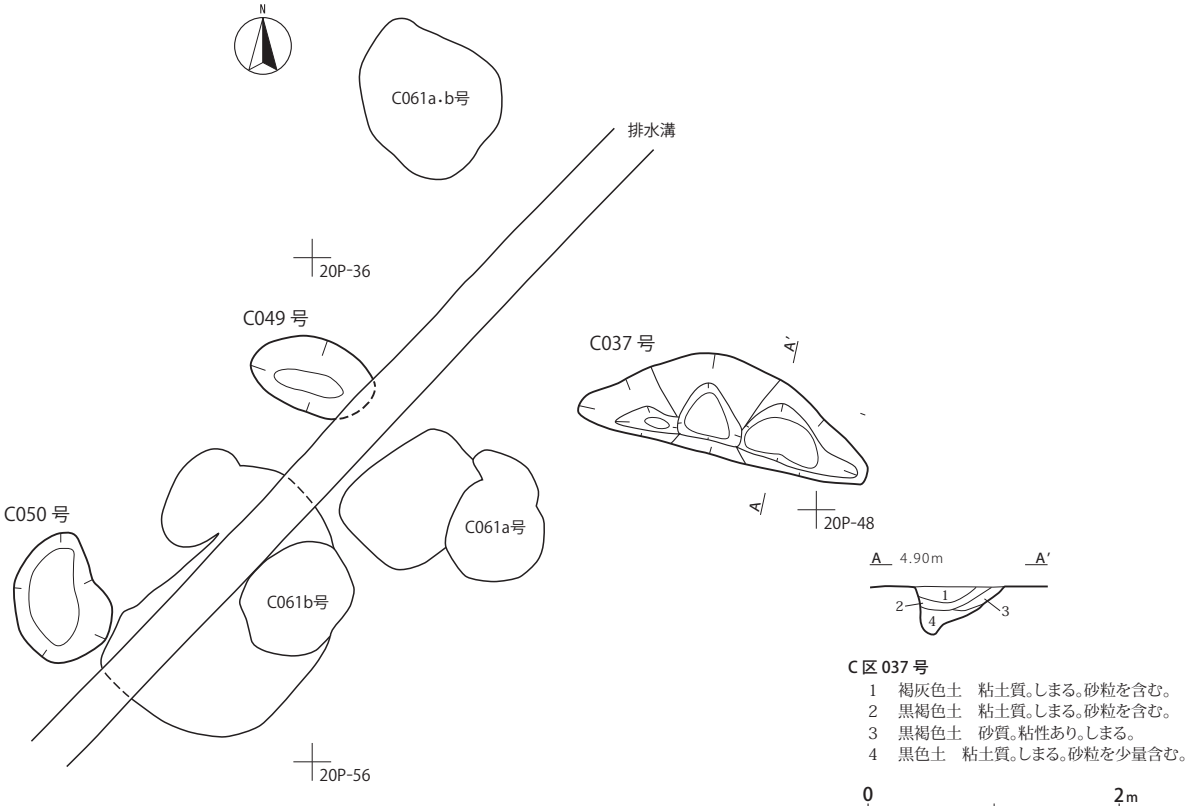


C区016号
1　黒褐色土　砂粒を少量含む。
2　暗褐色土　砂粒を含む。
3　明褐色土　砂粒をを多量に含む。

C区017号
1　黒褐色土　砂質。やや粘質あり。
2　暗灰色土　砂質。やや軟質。

0　2m
（1／60）

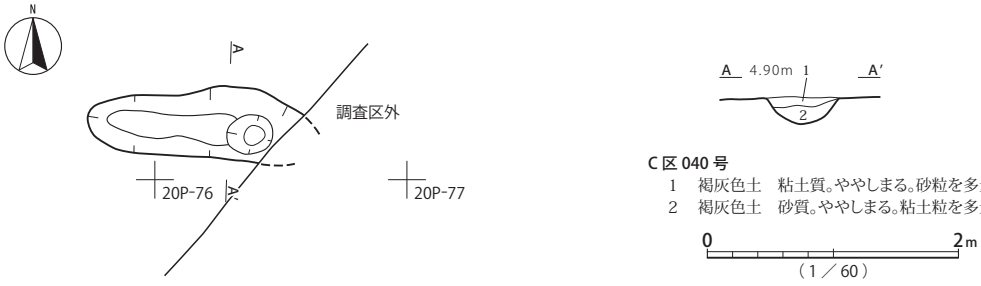
C区037・049・050号



C区037号
1　褐灰色土　粘土質。しまる。砂粒を含む。
2　黒褐色土　粘土質。しまる。砂粒を含む。
3　黒褐色土　砂質。粘性あり。しまる。
4　黒色土　粘土質。しまる。砂粒を少量含む。

0　2m
（1／60）

C区040号

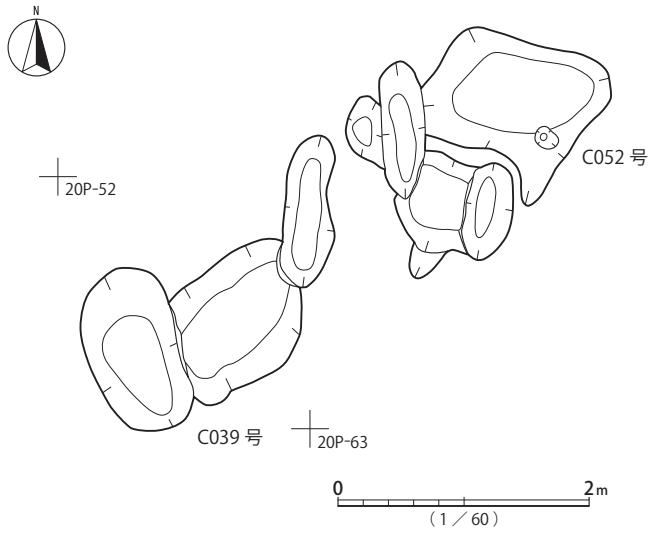


C区040号
1　褐灰色土　粘土質。ややしまる。砂粒を多量に含む。
2　褐灰色土　砂質。ややしまる。粘土粒を多量に含む。

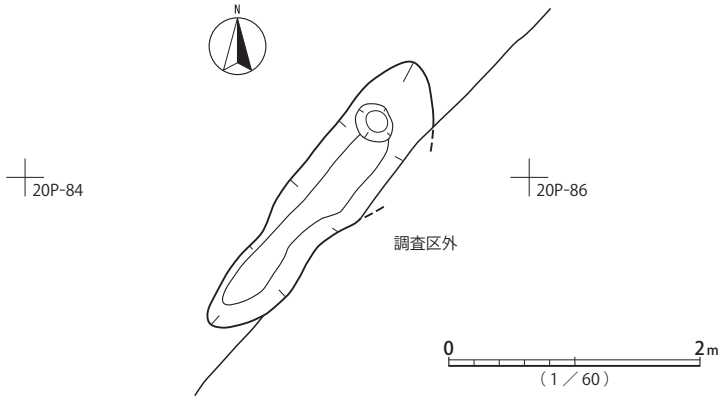
0　2m
（1／60）

Fig.116　土坑・ピット群 C区016・017号、037・049・050号、040号 遺構実測図

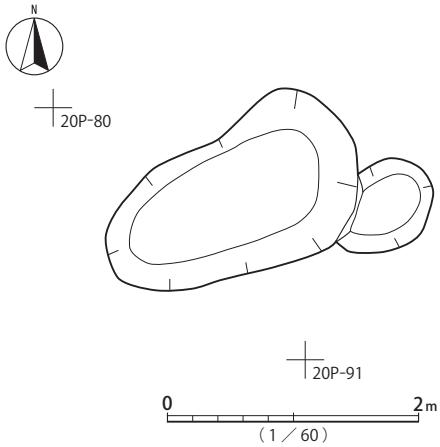
C 区 039・052 号



C 区 055 号



C 区 058 号



C 区 063 号

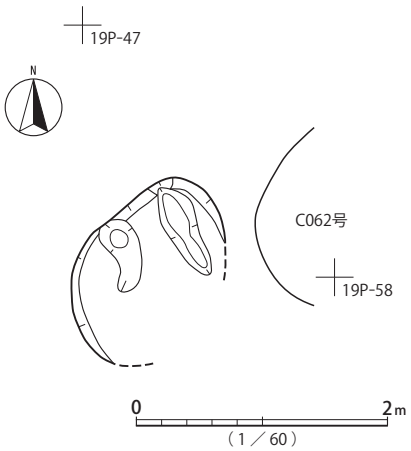


Fig.117　土坑・ピット群 C区039・052号、055号、058号、063号 遺構実測図

規模は、長軸0.7m、短軸0.5m、最大深度19cmであり、楕円形の形状を呈するとみられる。

遺物は縄文土器275g、不明土器片50gが出土している（Fig.113、PL.111）。1から4はいずれもD区包含層縄文土器分類の15a類に区分される縄文時代後期から晩期の紐線文系土器である。1は安行1式～2式、2は安行3a式に併行するものとみられる。

遺構の時期については、縄文時代に帰属する可能性があるが、本遺構は縄文時代遺物包含層内に形成されており、出土遺物が混入である可能性も否定しきれないため、不明である。

D区004号（Fig.113・118、PL.23・24・111）

D区の中央部に存在する。遺構の北東部をD区003号に削平される。また、遺構北東の一部は遺存度が悪く、残存していない。

規模は、長軸2.0m、短軸1.2m、最大深度31cmであり、2つの楕円形の土坑が組み合わさって本遺構を形成する。

遺物は縄文土器425g・土製品15g、不明土器片55g、石片20gが出土している。（Fig.113、PL.111）。1から4はいずれもD区包含層縄文土器分類の15a類に区分される縄文時代後期から晩期の紐線文系土器である。1は口縁部の粘土紐が剥離してしまっている。2・3は安行1式～2式に併行するものとみられる。5は粗製深鉢形土器の底部、6は円形の土器片円盤である。6には破断面の一部に摩擦痕がみられる。

遺構の時期については、縄文時代に帰属する可能性があるが、本遺構は縄文時代遺物包含層内に形成されており、出土遺物が混入である可能性も否定しきれないため、不明である。

D区005号（Fig.113・118、PL.24・111）

D区の南部に存在する。

規模は、長軸1.1m、短軸1.1m、最大深度45cmであり、楕円形の形状を呈する。

遺物は縄文土器60g、須恵器20g、円筒埴輪片10g、時期不明土器片20g、石片19gが出土している。（Fig.113、PL.111）。1はD区包含層縄文土器分類の21類に区分される縄文時代晩期の粗製深鉢形土器である。2は奈良・平安時代の須恵器の蓋の摘部の破片である。なお、調査担当者の記録によると、骨片が微量出土したが、脆弱であったため取り上げできなかったとされている。人骨か動物骨かは不明であるが、上記の記録から鑑みると、本遺構が土坑墓であった可能性がある。

遺構の時期については、様々な時代の遺物が出土しており、遺構の時期を特定できない。しかし、本遺構が土坑墓であるならば、出土遺物より奈良・平安時代以降と考えられる。

D区006号（Fig.118、PL.24）

D区の南部に存在する。

規模は、長軸2.5m、短軸1.1m、最大深度16cmであり、長大な楕円形の形状を呈する。また、底面に4基の小ピットが存在する。

遺物は土師器片が7点出土しているが、小片であるため器種や時期は判断できず、本遺構に伴うものかも定かではない。なお、小片のため掲載していない。

遺構の時期については、出土遺物等から判断ができないため不明である。

D区008号（Fig.118）

D区の南部に存在する。遺構の南東部は調査区外へと延びている。

規模は、長軸（1.1）m、短軸1.2m、最大深度33cmであり、楕円形の形状を呈するとみられる。

遺物は中世の陶磁器類が1点、土師器片1点、時期不明土器片が30g出土している、中世の遺物はカワラケの中型皿がみられるが、小片のため掲載していない。

遺構の時期については、中世のカワラケ中型皿が出土しているが、出土層位が不明なこと、D区全体に広がる縄文時代遺物包含層の上層より一定量の中世遺物が出土していることから、混入の可能性を否定できず不明である。

D区009号（Fig.113・118、PL.24・111）

D区の南部に存在する。

規模は、長軸0.8m、短軸0.6m、最大深度10cmであり、楕円形の形状を呈する。

遺物は縄文土器1点、土師器20g、須恵器片1点、時期不明土器片1点が出土している（Fig.113、PL.111）。1はD区包含層縄文土器分類の15a類に区分される縄文時代後期（安行1式～2式）の紐線文系土器である。

遺構の時期については、縄文時代に帰属する可能性があるが、本遺構は縄文時代遺物包含層内に形成されており、出土遺物が混入である可能性も否定しきれないため、不明である。

D区010号（Fig.118、PL.24）

D区の南部に存在する。遺構の南東部は調査区外へと延びている。

規模は、長軸（0.7）m、短軸0.7m、最大深度17cmであり、楕円形の形状を呈するとみられる。形状から溝の可能性もある。遺物は出土していない。

遺構の時期については、出土遺物が皆無であり、遺構の形状等で判断ができないため不明である。

第6節　道路状遺構

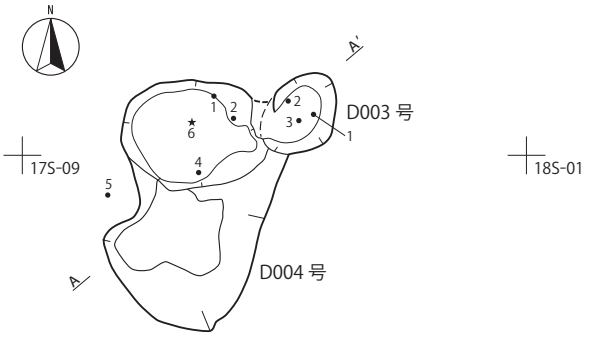
A区011号（Fig.119・120、PL.11・112）

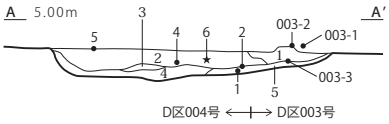
A区の北東部に存在し、調査区を横断している。遺構北側は調査区外へと延びている。南側は土坑A区009号を削平し、土坑A区007号・溝A区010号に削平される。西側は攪乱により削平されている。また、一部未掘削部分が存在する。

規模は、長さ（12.1）m、幅（4.0）m、最大深度は53cmである。

遺物は土師器137g、中世陶磁器類100g、近世陶磁器類88g、不明土器片37g、円筒埴輪片132g、鉄製品22g、石製品8g、石片118gが出土している（Fig.120、PL.112）。5は近世の肥前系磁器のくらわんか碗、2は土錘である。3は古墳時代中期の円筒埴輪の破片であり、姉崎二子塚古墳などの周辺の古墳からの混入と思われる。4は砥石の破片である。中世に属する遺物としては、常滑産陶器の片口鉢Ⅱ類、在地系土器の擂鉢、近世では肥前系磁器の徳利、瀬戸・美濃系陶器の志野丸皿等がみ

D 区 003・004 号



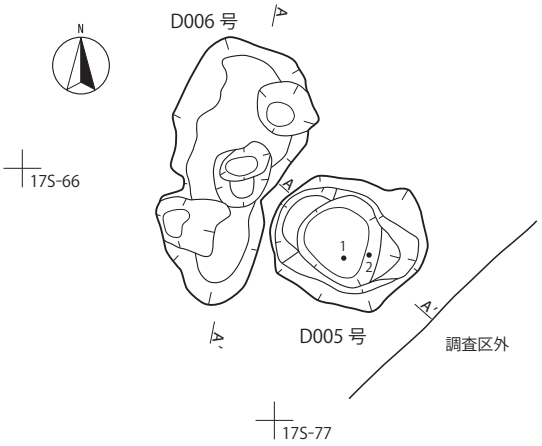


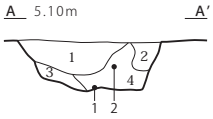
D 区 003・004 号

1　黒褐色土　砂質。粘性あり。003 号覆土。
2　黒褐色土　砂質。1 層より砂質気味。やや粘性あり。004 号覆土。
3　青灰色土　砂質。しまりなし。004 号覆土。
4　暗褐色土　木質を多く含む。ややしまる。004 号覆土。
5　青灰色土　砂を少量含む。ややしまる。004 号覆土。

0　2m
（1／60）

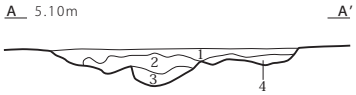
D 区 005・006 号





D 区 005 号

1　黒褐色土　砂粒を少量含む。
2　浅橙色土　砂質。黒色土粒を含む。
3　黒褐色土　青灰色砂粒を少量含む。
4　黒褐色土　砂粒を微かに含む。



D 区 006 号

1　黒褐色土　砂粒を少量含む。
2　浅橙色土　砂質。黒色土粒を含む。
3　浅橙色土　砂質。黒色土粒を微かに含む。
4　黒褐色土　砂粒を微量含む。

0　2m
（1／60）

D 区 008・009・010 号

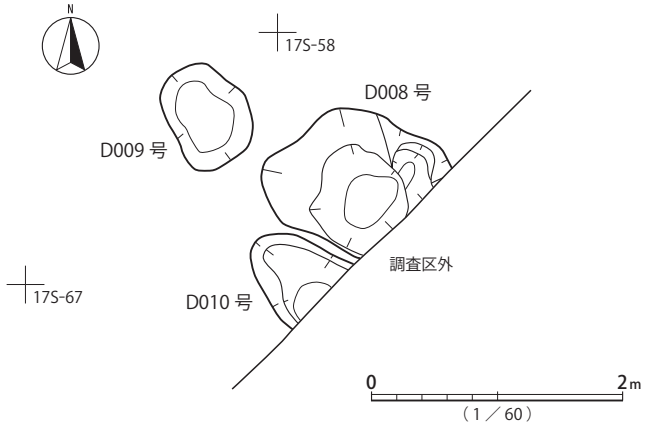
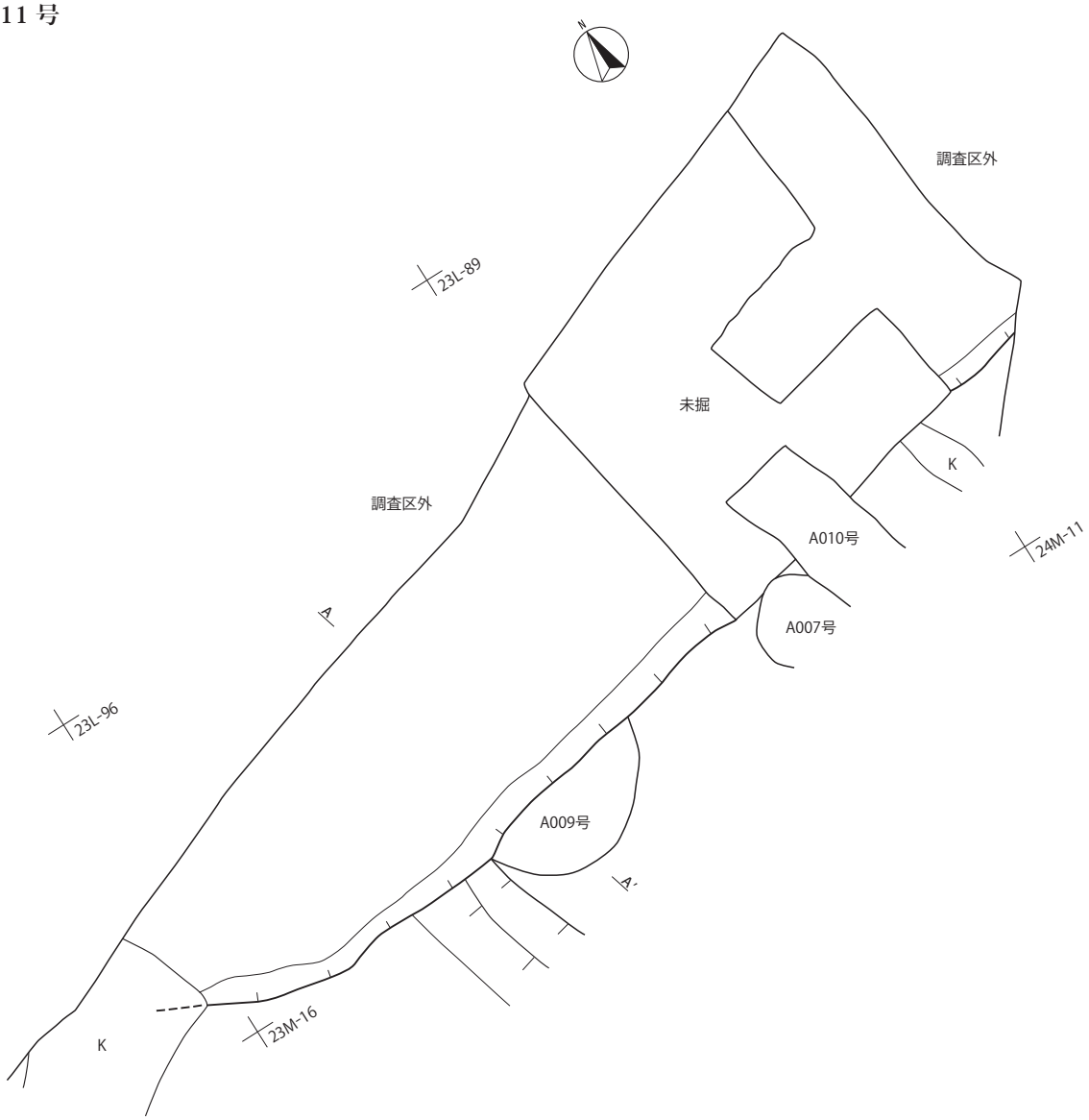
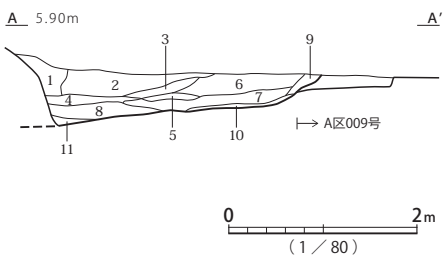


Fig.118　土坑・ピット群 D区003・004号、005・006号、008・009・010号 遺構実測図

道路状遺構

A区011号





1　黒褐色土　砂質。明黄褐色砂粒を含む。
2　黒褐色土　砂質。1層に似るがより軟質で明るい。
3　黒褐色土　砂質。1層に似るがより砂粒を多く含む。
4　暗褐色土　砂質。3層に似るがより明るく少し粘性あり。
5　黒褐色土　砂質。黒褐色土ブロックを含む。
6　黒褐色土　砂質。黒褐色土ブロックを5層より多く含む。
7　暗褐色土　砂質。やや軟質。砂粒を全体的に含む。
8　黒褐色土　砂質。硬質。砂粒を少量含む。
9　黒褐色土　砂質。軟質。砂粒を少量含む。
10　暗褐色土　砂質。明褐色砂粒と暗褐色土ブロックを含む。
11　暗褐色土　砂質。10層に似るがより暗褐色土が多い。

Fig.119　道路状遺構 A区011号 遺構実測図

られるが、小片のため掲載していない。

遺構の時期については、出土遺物から中近世に属するものと考えられる。

第７節　遺構外出土遺物及び確認調査出土遺物

遺構外出土遺物（Fig.120・121、PL.112・113）

本調査時に遺構外もしくは調査用の排水溝掘削時に出土した遺物群である。なお、D区土製品１～５・８・10～13は縄文時代遺物包含層から出土した遺物であるが、本書の構成上の都合で当節に遺物実測図を掲載した。

A区１は砥石の破片とみられ、２は近代の瓦を砥石に転用したものである。

B区土製品１は完形の土錘であり、金２は寛永通宝である。また、石１は硯の破片である。

C区１はD区包含層縄文土器分類の25類に区分される浮線文系土器の破片である。縄文時代晩期後葉の千網式に併行する時期のものと思われる。調査用の排水溝掘削時に出土した。石１は縄文時代の磨石とみられる。

D区中世１～８は中世の陶磁器片である。１は龍泉窯系青磁椀Ⅲ類、２は中国産白磁の椀E群、３は中国産白磁の皿D群、４は瀬戸・美濃系陶器大窯第３段階の丸皿、５は備前産陶器の擂鉢、６は在地のカワラケ中型皿（棗塚B類）、７も在地のカワラケ中型皿（棗塚D類）である。小片のため未掲載だが、上記以外にも中世陶磁器片がD区西側を中心に出土している。

D区土製品１～５・８・10～13は縄文時代遺物包含層内から出土した。土製品１は土器片錘である。全体的に摩耗しており、縄文が不明瞭に残る。D区Ⅱ層から出土しており、包含層形成後に混入したものとみられる。土製品２は土偶の右足、土製品３は土偶の左腕であり、ともにⅤ層から出土している。土製品４・５は台付土器の脚部とみられる。土製品４はⅤ層、土製品５はⅣ-３層下から出土している。土製品10～12は環状耳飾である。土製品10は端部にキザミが施され、内面に横方向の平行沈線が描かれている。Ⅳ層から出土している。土製品11は内面に半円形の突起を伴う。突起には外周にキザミが施される。Ⅳ層より出土した。土製品12は弧線文による入組文が施されている。出土層位は不明である。土製品13は釣手土器の破片である。貼付文とキザミを伴った隆帯文が施文されている。土製品８は土錘である。

D区金１～６は古銭である。金１は熙寧元寶、金２は篆書銘の景祐元寶、金３は楷書銘の政和通寶、金４は楷書銘の開元通寶、金５が篆書銘の熙寧元寶、金６が篆書銘の嘉祐通寶である。

確認調査出土遺物（Fig.122、PL.114）

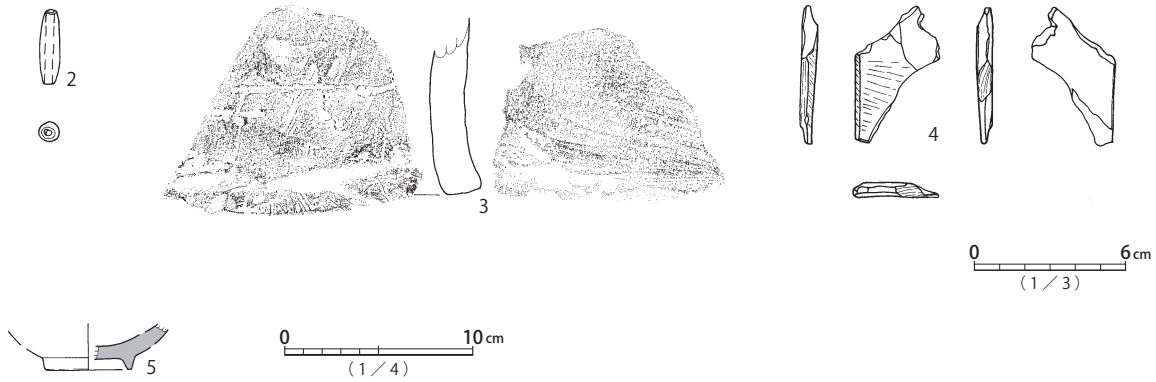
確認調査時にトレンチ内から出土した遺物である。なお、１トレンチ・７トレンチは第２章第１節のD区縄文時代遺物包含層に該当する箇所のトレンチであり、縄文時代の遺物が数多く出土していることから、本調査時の出土遺物とともに集計・分類を行い、同挿図・図版内で掲載した。また、遺物観察表についても本調査時の出土遺物とともに記載している。

２トレンチ１は磨石である。正円形の円盤状の形状をとっている。

４トレンチ１は砥石である。表面と右側面に斜方向の擦痕がみられる。

５トレンチ２は石製模造品の有孔円板である。山新遺跡の他の調査地点では古墳時代前期から中期

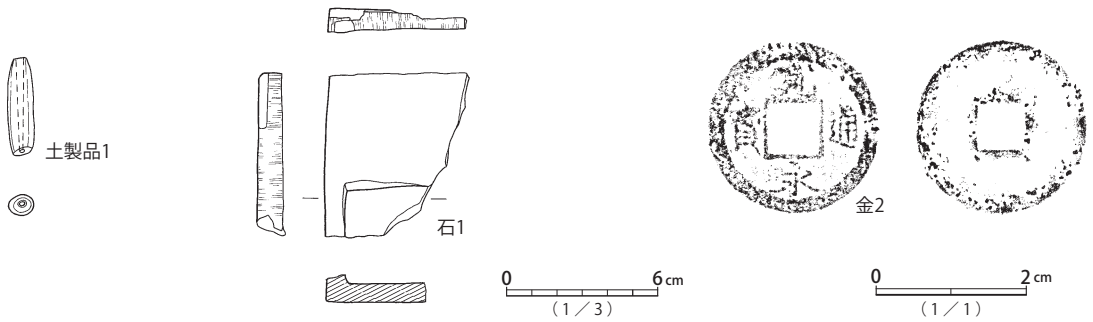
A区011号



遺構外

A区

B区



C区

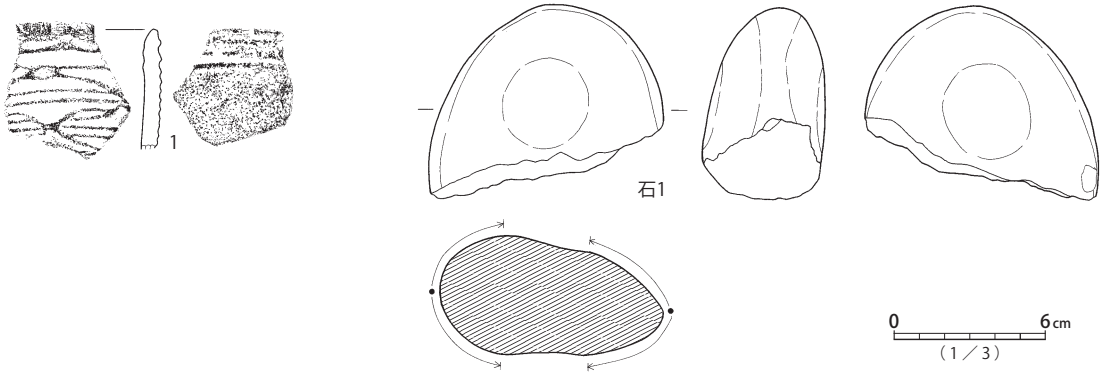


Fig.120　道路状遺構 A区011号、遺構外 A･B･C区 遺物実測図

D 区

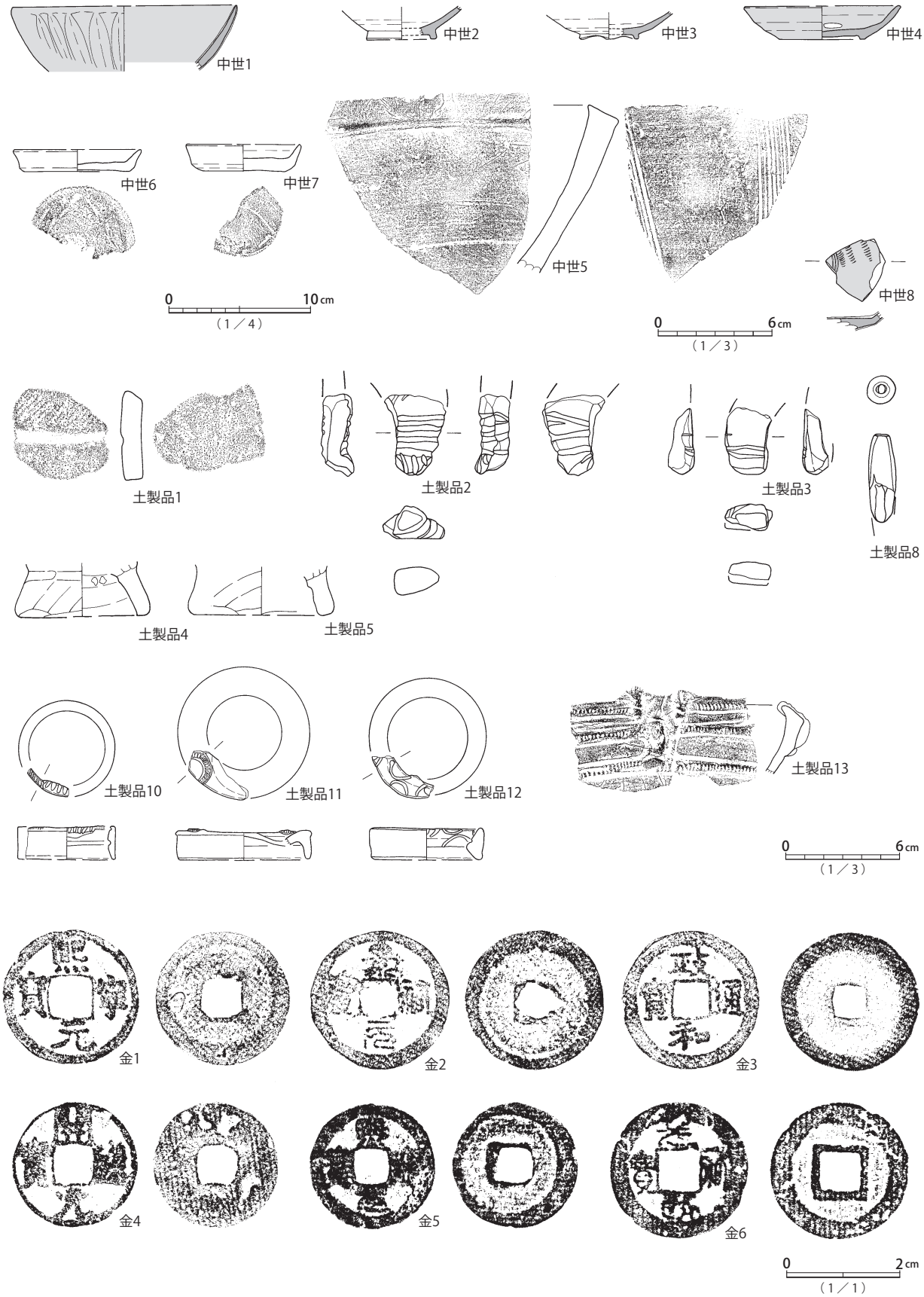


Fig.121　遺構外 D区 遺物実測図

の集落や古墳群が確認されていることから（北見・坂元2018）、これらの遺構から流れ込んだものとみられる。

6トレンチ1はD区包含層縄文土器分類の15a類に区分される紐線文系土器である。粘土帯の下端に爪形文状の押引文を有することから、縄文時代晩期前葉（安行3a式）のものとみられる。2～5は古墳時代前期から中期の高杯形土器である。2は古墳時代前期後葉～末葉の草刈3式期（大村2009）、3・4は古墳時代中期の鬼高式、5は古墳時代前期中葉の草刈2式期のものとみられる。7は円筒埴輪を転用した円盤状土製品である。扇状の形態を呈しており、弧状部が強く研磨されている。隣接する棗塚遺跡では中世陶磁器片を転用した砥石が出土しており、これらが皮なめしに使用された可能性が指摘されている（櫻井2019）。材質は異なるが、上記の陶磁器転用砥石と類似する点も見受けられるため、皮製品関係の工具として使用された可能性も想定しておきたい。

8トレンチ1はD区包含層縄文土器分類の17d類に区分される粗製深鉢形土器である。2も縄文時代の粗製深鉢形土器である。摩耗が激しく詳細は不明だが、D区包含層縄文土器分類の17a類あたりを想定しておきたい。3も17類に属する粗製深鉢形土器であろう。4は磨石、5は楷書銘の嘉祐通寶である。

9トレンチ1は弥生時代中期後半の宮ノ台式土器の甕形土器である。2はD区包含層縄文土器分類の15a類に区分される紐線文系土器である。幅の狭い粘土紐の真上に押引文が施文されていることから、縄文時代後期（安行1式～2式）のものとみられる。

10トレンチ1は永楽通寶の破片である。2は土錘、3は常滑産陶器の片口鉢Ⅱ類を転用した砥石である。3は棗塚陶磁器転用砥石Ⅱ類に属するものと思われる。これらは金属器用の砥石もしくは皮なめしに使用された可能性が指摘されている（櫻井2019）。

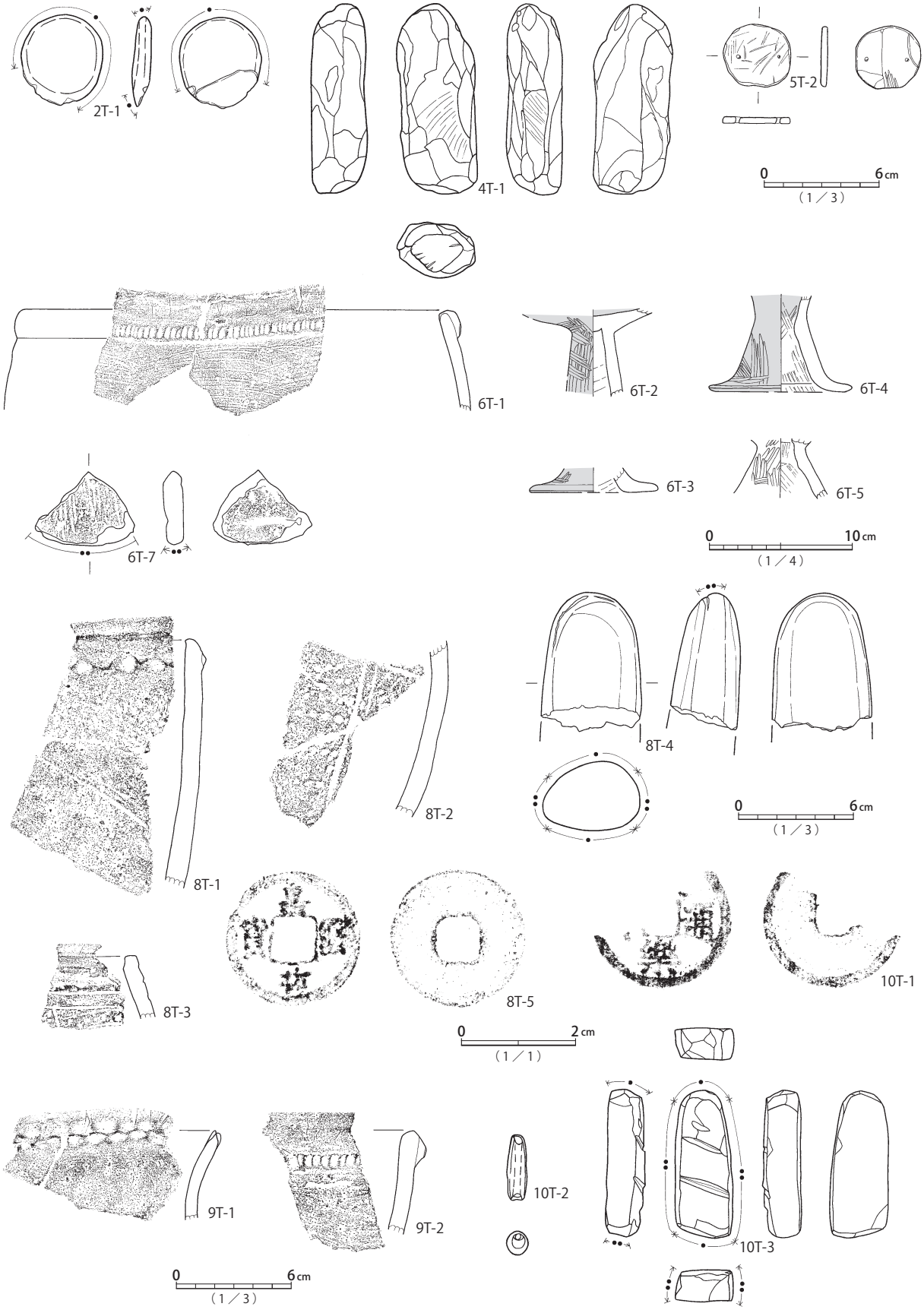


Fig.122　確認調査 遺物実測図

第３章　総　括

第１節　山新遺跡第２地点の変遷

山新遺跡第２地点では、縄文時代から近世までの遺構を確認した。縄文時代では、D区において早期・後期～晩期の土器や土製品・石製品を大量に含む包含層が形成されている。弥生時代中期後半ではA・B区において竪穴建物が４棟検出されている。

古墳時代前期～中期ではB区において遺物包含層が形成されている。なお、遺跡に近接して中期の大型前方後円墳である姉崎二子塚古墳が存在することから、同時期の遺構の濃密な分布が期待されたが、今回の調査地点では明確な遺構は検出されなかった。

その後、しばらくは遺構がみられなくなるが、中世になると、A・B・C区において区画溝を伴った掘立柱建物が７棟みられるようになる。近世では、A・B区において、本遺跡が立地する砂堆列上を横断するような道路状遺構や溝が出現する。なお、溝や土坑については、時期を明確に決定できるものは多くなかった。

また、本遺跡の遺構確認面は砂層であったため、遺構の検出には困難を極めた。しかし、B区のみ鉄分等の地質的な要因で地山の砂層が硬化していたため、良好な状態で遺構が残存していた。そのため、A・B・D区においても、今回検出した以外にも遺構が存在していた可能性がある。

以下、本遺跡において特徴的な時期である、縄文時代・弥生時代・中世の遺構について個別に概観する。

第２節　D区縄文時代遺物包含層の形成

山新遺跡第２地点では、D区全域で遺物を3tほど含んだ包含層が検出されている。主体は縄文土器であり、土製品や石製品も含まれるが、土器片円盤以外は少量である。また、自然木が大量に出土し、中には木製品と思われるような個体も存在している。

遺物の出土場所は17Rグリッドの一部と18Rグリッドに集中している（Fig.123、Tab.35）。この場所には、東京湾沿岸の低地に縦列する縄文海進時に形成された砂堆列の切れ目が存在しており、高低差1mほどの浅谷状の地形となっている。本包含層はこの浅谷状地形を中心に形成されている。堆積層位をみると、地山となる砂層（VIII層）の上に、小礫・自然木層（VII層）、自然木・土器層（V層）、砂層（IV－１～４層）、粘土層（III層）の順番でおおよそ堆積しており、泥炭層は確認されないことから、流水によって堆積したものと考えられる。さらに、小礫といった粒子の大きなものやV・VII層を中心に自然木が大量に堆積しているため、ある程度の勢いを持った水流が推測される。以上から、洪水等によってVII層とV層がほぼ同時に堆積し、時をおかずしてその上層にIV層が堆積したものと思われる。III層は粘土を主体とすることから、IV層堆積後、当地が水流の弱い沼沢地のような場所に変化し、その際に堆積したものと想定される。また、浅谷部内は標高が東から西へ緩やかに下がっていることから、東から西に向かって水が流れたものと思われる。

層位ごとの土器の出土状況をみると、IV層・V層・VII層に集中していることが分かる（Tab.36）。また、数量の多寡はあるが、各類型とも一定量の土器がIV層・V層・VII層から出土しており、層位ごとの類型・時期的特徴はほとんどみられない。さらに、複数の層位やグリッドをまたがって破片

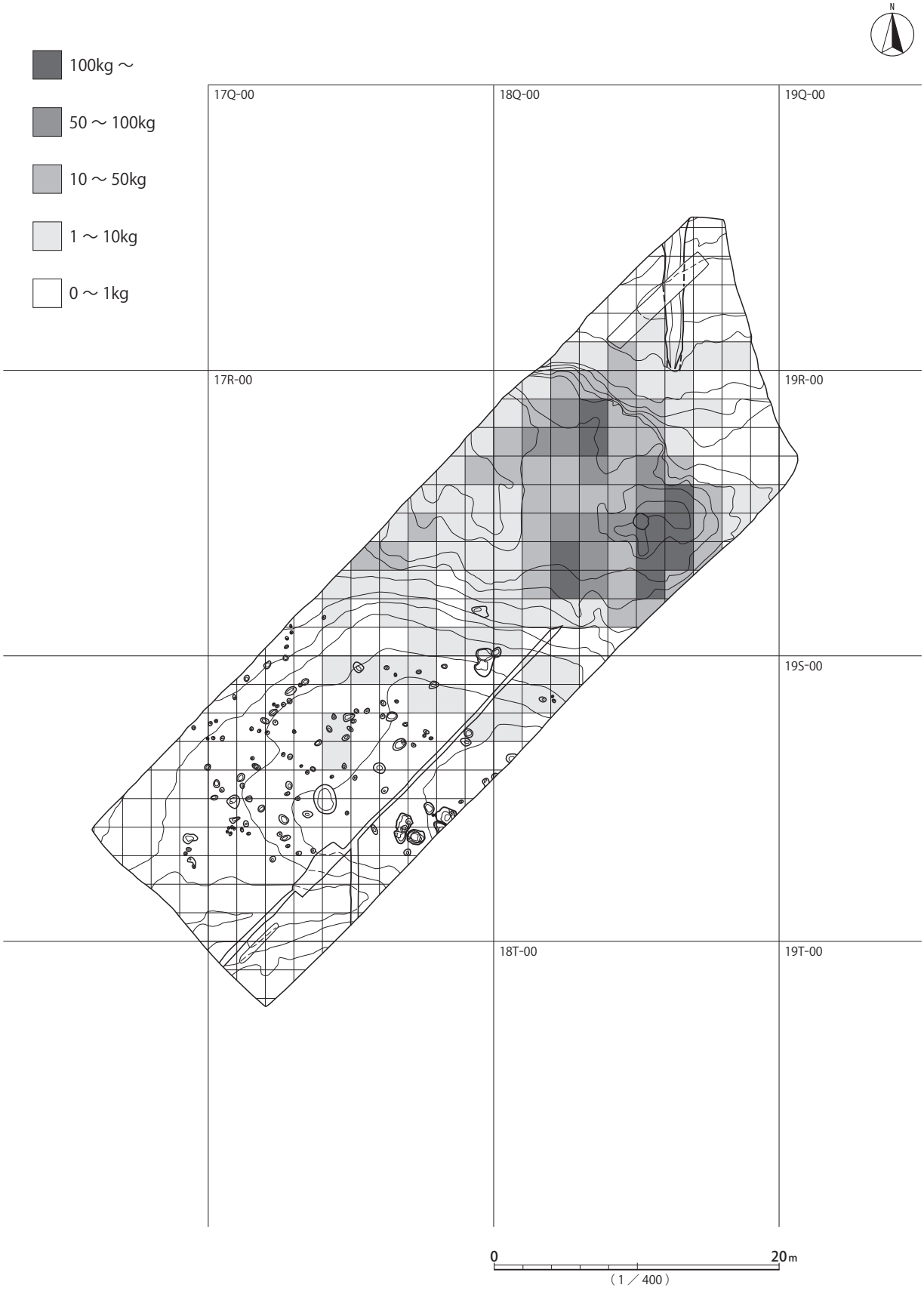


Fig.123　D区包含層 土器出土分布図

が接合する個体もみられる。V・VII層から出土した土器は比較的状態がよく、器面の摩滅等も無く、炭化物が良好に残存する個体が多い。一方で、IV層になると器面が摩滅する個体が散見されるようになり、III層になるとほとんどの土器が激しく摩滅する。また、大型の破片もIV・V・VII層を中心に出土し、III層においては小片のみが出土している。これらのことから、本包含層は、長時間にわたり人為的に形成されたものではなく、短時間で生じたものであると思われる。そして、IV ～ VII層の土器は状態が良いことから、近隣に存在した土器塚のような場所からもたらされ、一度に埋没したものと考えられる（小橋2002）。IV層の一部にみられる摩滅した土器片は、III層堆積時に河床に露出していたものと思われる。また、III層は器面が摩滅した土器が多いということからも常に水流があったことが想定され、上記堆積過程の推論とも矛盾しないものと考えられる。

本包含層の出土土器について、各類型より時期を判断すると、縄文時代早期後半・後期中葉・後期後葉・晩期前葉・晩期中葉・晩期後葉～末葉の土器が包含層内に含まれていることが分かる。以下、時期ごとに周辺遺跡の様相も踏まえて概観する（Fig.124）。

縄文時代早期後半の土器は、包含層の各層から出土しているが、総量は5kg程度と少ない（Fig.124、Tab.36）。土器はすべて小片である。激しく摩滅を受け、角が取れ丸くなる個体のみがみられる。山新遺跡周辺では、袖ケ浦台地の北端にあたる姉崎台地上の鬼子母神貝塚や六孫王原遺跡において、早期後半の茅山式期の炉穴が検出されている（齊木2019、田中2016）。また、遺構はみられないが、姉崎台遺跡・姉崎東原遺跡・六孫王原遺跡・毛尻遺跡等で早期の土器が出土している（浅利1993、近藤2012・2018、櫻井1994、高橋1990・1993、半田1997、平岡ほか1983）。このことから、山新遺跡背後の姉崎台地上では、縄文時代早期には土地利用が開始していたものと思われ、これらの遺跡から流出した土器片が包含層の形成時に混入したものと推測される。

縄文時代前期・中期の土器は包含層内からは確認されていない。山新遺跡の周辺では、本遺跡より西方の椎津川右岸に位置する姉崎妙経寺遺跡において、中期初頭の五領ヶ台式期の竪穴建物跡や集石遺構と、中期中葉の勝坂式・阿玉台式期から後葉の加曽利E式期の貝塚が検出されている（小出・忍澤1998、小出2000、小橋2004）。妙経寺遺跡の立地する砂堆列は、本遺跡の立地する砂堆列よりも標高が高く、縄文海進時にいち早く離水したものと思われる（近藤2008・2014）。また、隣接する山新遺跡第3地点では、加曽利E式に比定される土器片が出土しており（北見・坂元2018）、本遺跡よりも内陸側の砂堆列上に存在する山新遺跡永津前地区においても、中期中葉の阿玉台式土器の破片が出土している（北見2017）。このことから、縄文時代中期には、山新遺跡周辺の標高の比較的高い箇所で離水化が始まり、土地利用が始まりつつあったものと思われる。

縄文時代後期中葉の加曽利B式・曽谷式期に属する土器は、包含層内の各層から出土しているが、総量は5kg弱と少量である（Fig.124、Tab.36）。早期のものと違い激しく摩滅する個体は少ない。山新遺跡周辺では、姉崎台地上において、姉崎台遺跡・姉崎東原遺跡・姉崎宮山遺跡・六孫王原遺跡・毛尻遺跡などの遺跡から土器のみが出土している。（大村1991、近藤2018、櫻井1994、高橋1990・1993・2000、田中2016、半田1997、平岡ほか1983）。また、鬼子母神貝塚では加曽利B式期の土坑と後期前葉の堀之内式土器の破片が見つかっている（齊木2019）。竪穴建物等の直接的な生活の痕跡を示す遺構は検出されていないが、おそらく台地上に生活空間が広がっていたものと思われる。低地砂堆列上では、隣接する山新遺跡第3地点において堀之内式土器の破片と加曽利B式

期の包含層が検出されている（北見・坂元2018）。したがって、縄文時代後期前葉には台地上とともに低地砂堆列の土地利用が進んでいたものと思われる。包含層から出土した土器は摩滅が少ないことから、こうした砂堆列上の遺構からもたらされた可能性が考えられる。

縄文時代後期後葉の安行1式から2式期の土器も各層から出土するが、これまでの早期・後期中葉の土器に比べ出土量が増加している（Fig.124、Tab.36）。粗製土器については後期安行式から晩期安行式に時期がまたがる類型が多いため、明確な数量は述べられないが、精製土器だけでも安行1式から2式に属すると思われるものは40kgほど出土している。本遺跡周辺では、姉崎台地上の姉崎台遺跡や姉崎東原遺跡・六孫王原遺跡・毛尻遺跡で当時期の土器が出土しているが、遺構は確認されていない（近藤2018、櫻井1994、高橋1993、田中2016、半田1997、平岡ほか1983）。出土量も早期、後期中葉に比べると少ない印象を受ける。一方、低地では、本遺跡から北西方向に100mほどの砂堆列上に位置する姉崎上野合遺跡で、本書の3類に該当する大型の土器片を中心とした安行2式期の土器が複数出土しており、当時期の遺構の存在が指摘されている(6)（木對1990）。低地砂堆上における土地利用は、この時期から本格化し、その結果、本包含層内において後期後葉の土器が増加したものと想定しておきたい。

縄文時代晩期前葉の安行3a式から3b式に併行する土器は、他の時期と比べても圧倒的な数量を誇っており、本包含層を形成する土器の主体となっている（Fig.124、Tab.36）。土器の状態は良好で、摩耗もほとんどみられず、大型の個体も多い。安行3a式期では、精製土器は1類・2類・3類・4類枠状文、粗製土器は15類が主体となるものと思われる。安行3b式期では、精製土器は1類・2類・11類・13類・14類、粗製土器は18類が中心となり、姥山式でみられる組成となる(7)。また、安行3a式よりも安行3b式期の土器の方が数量が多い印象を受ける。山新遺跡周辺では、姉崎台地上の姉崎台遺跡や姉崎東原遺跡・姉崎宮山遺跡において、遺構は未検出であるが土器片が出土しており（大村1991、近藤2018、櫻井1994、高橋1993・2000）、台地上にも生活空間が広がっていたものと思われる。低地砂堆列においては、当時期の遺物が出土している遺跡は確認されていないが、包含層内の土器は良好な状態で大型の個体も多いことから、山新遺跡の近隣に生活拠点が存在していたものと推測される。また、後期より大幅に土器の数量が増加していることから、低地砂堆列上の土地利用が晩期前葉に定着・発展したものと思われる。

縄文時代晩期中葉の安行3c式から3d式に併行する土器は、晩期前葉に比べ土器の総量が減少する傾向がみられる（Fig.124、Tab.36）。土器の状態は良好であり、摩耗もほとんどみられない。構成としては、精製土器の5～9類に粗製土器の17a・b類、21類が伴うものとみられる。また、12類の前浦式土器や23類の大洞系土器の一部も組成に加わる。晩期前葉よりも出土量は減少するが、本包含層の一端を担う土器群であり、大型の個体も出土している。遺跡周辺では、姉崎台地上の姉崎台遺跡や姉崎東原遺跡・姉崎宮山遺跡において土器片が少量出土している（大村1991、近藤2018、櫻井1994、高橋1993）。低地砂堆列上では、晩期前葉と同様に遺物が出土している遺跡は確認されていない。しかし、包含層内の土器は良好な状態で大型の個体も多いことから、おそらく近隣の砂堆列上に生活拠点が存在し、そこからもたらされたものと推測される。しかし、晩期前葉に比べて土器の出土量が減少していることから、当地域における人々の生産活動が低下している可能性が考えられる。

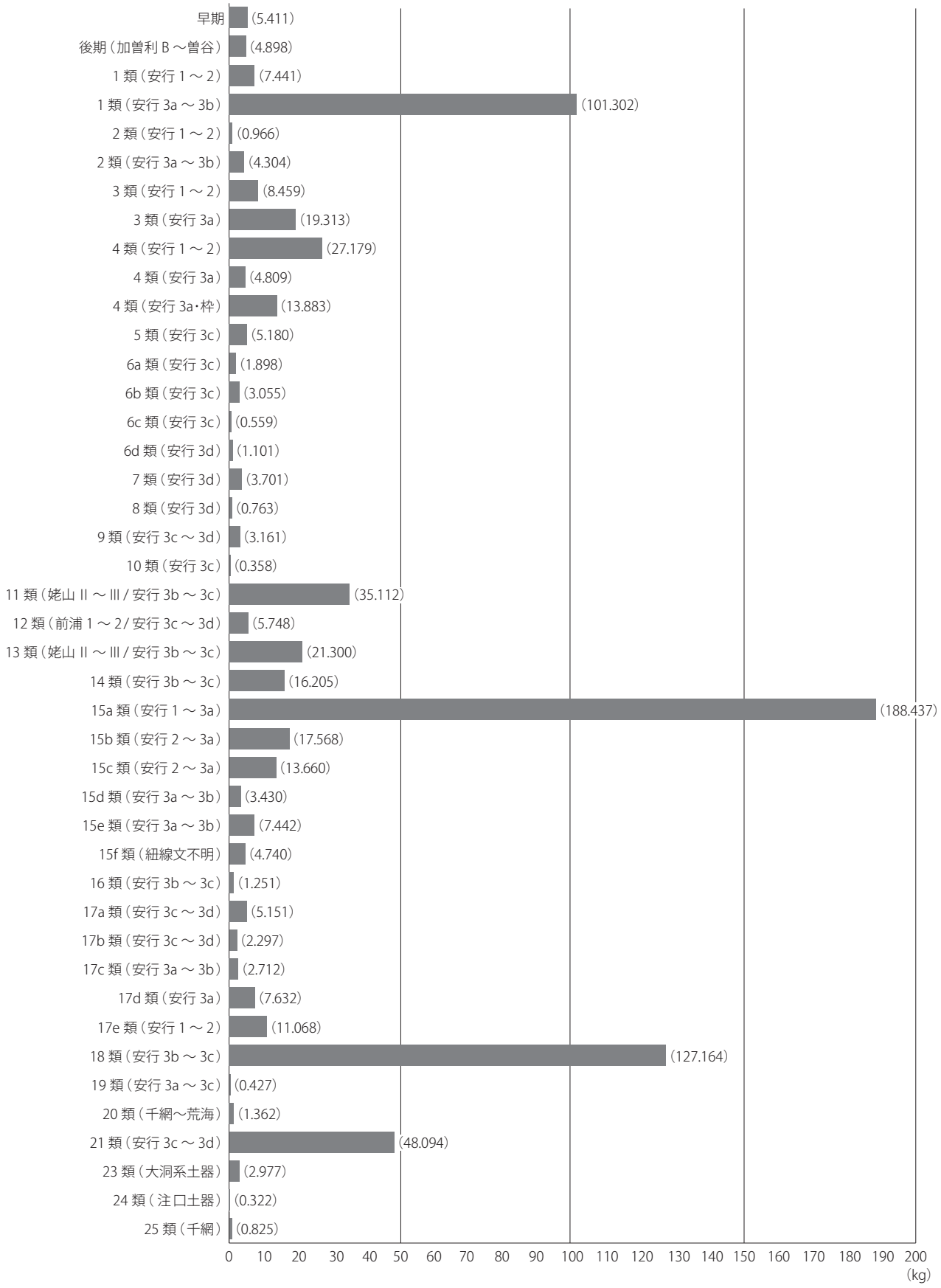


Fig.124　縄文土器 類別出土量

縄文時代晩期後葉から末葉の土器としては、千網式から荒海式に併行する20類・25類がある。どちらの類型も1個体分の大型の破片と、小片が数個体のみしかみられず、出土数はごく少量である（Fig.124、Tab.36）。また、出土層位もⅣ層のものが多く、Ⅶ層からは出土していない。20−2と25−1は、大型で遺存度も高い個体である。さらに、両個体とも器面が摩滅している。断定はできないが、これらの土器はⅣ層堆積直後に人為的に廃棄された可能性を考えておきたい。姉崎台地上では姉崎東原遺跡と毛尻遺跡において同時期の土器片が出土している（高橋1993、平岡ほか1983）。また、本遺跡のC区からも25類の小片が出土していることから、姉崎台地上から低地にかけての範囲は当時の人々の生活圏の一部であったと思われる。

以上、包含層の堆積層位や出土土器について概観した。まとめると、包含層は洪水等の流水によって形成された可能性が高いこと・出土土器に層位ごとの時期差がみられず混在すること・縄文時代晩期、特に晩期前葉の土器が大量に含まれること、という3点があげられる。以上から、本包含層は山新遺跡の近隣に存在していた土器塚より洪水等によって土器が流出し、浅谷状の砂堆列間に堆積したことで形成されたと考えられる。土器の状態や層位から複数回土器の堆積があったとは考えにくく、1回もしくは数回の洪水によって包含層が形成されたものと思われる。形成時期についてはⅤ層やⅦ層において安行3c式から3d式併行の土器が出土することから、晩期中葉頃とみられる。地質的にもⅣ層が縄文時代晩期、Ⅳ層の上面からⅢ層が縄文時代晩期から弥生海進期ごろに堆積したとされており(8)（Fig.8・9）、本説を裏付けるものになると思われる。

今回、山新遺跡第2地点でみられた縄文時代遺物包含層の形成を、周辺の遺跡の様相も踏まえて検討した。しかし、明確な生活遺構が見つかっていないため、詳細は不明である。今後、周辺遺跡の調査が行われることによって、当地域の縄文時代における低地砂堆列の土地利用の様相が解明されることを期待したい。

第3節　山新遺跡第2地点における弥生時代中期の集落

山新遺跡第2地点では、弥生時代中期後半の宮ノ台式期に該当する竪穴建物跡が4棟検出された。この時期は、山新遺跡・白塚出途遺跡の時期区分における1期に該当する（北見・坂元2018）。本遺跡では、D区から縄文時代晩期を中心とする大量の土器が出土した遺物包含層が検出されているが、明確な生活遺構が存在しないため、当時期が現状で遺跡の立地する低地砂堆列上を居住域として利用を開始した上限になると思われる。本遺跡の4棟の竪穴建物跡はA区・B区の標高5m（確認面）付近において検出されていることから、砂堆の縁辺部を避け、砂丘の高さが安定した部分に集落が営まれたものとみられる。

弥生時代後期の久ヶ原式・山田橋式期（大村2004）及び、弥生時代終末期の中台式期（大村2009）になると、山新遺跡第2地点において竪穴建物はみられなくなる。その代わり第2地点よりも1本海側の砂堆列上に位置する山新遺跡第3地点第2次・第8地点・第9地点において竪穴建物を築造するようになり、標高6m前後（確認面）の砂堆列でもより安定した場所に集落を移す傾向がみられている（北見・坂元2018）。その後、山新遺跡の立地する砂堆列においては古墳時代前期後葉まで竪穴建物は確認されない（北見・坂元2018）。

周辺の砂堆列上では、調査が限定的であるため不明確な部分が多いが、標高7m（確認面）ほどの

砂堆列上に立地する山新遺跡永津前地区において、弥生時代後期の土坑墓２基と竪穴建物跡の可能性がある土坑１基が検出されている（小川2013）。調査例が限定的なため確実なことは言えないが、弥生時代後期以降、砂堆列上の集落は、標高のやや高い場所に移動している可能性がある。

一方、山新遺跡が立地する低地の背後にそびえる姉崎台地上においては、弥生時代中期後半から古墳時代前期の居住域や墓域が広く展開している。弥生時代中期後半に属する竪穴建物跡は姉崎東原遺跡で７棟ほど確認されており、周辺遺跡からも宮ノ台式土器の破片が出土している（浅利1993、大村1991、北見2016、近藤2018、櫻井1994、高橋1990・1993・2000）。弥生時代後期になると、竪穴建物の増加とともに、東京湾沿岸の低地に面した台地の表側から、椎津川支流である片又木川の小谷に面した台地の裏側まで居住域が広がりをみせるようになる（大村1991、越川1984、近藤2018、高橋1993、田中2016、半田1997、平岡ほか1983）。おそらく、弥生時代中期後半段階に東京湾に面した台地縁辺部に集落が営まれ、台地上で生産活動が行われると同時に、眼下の低地砂堆列上にも人々が進出していたものと考えられる。

山新遺跡でみられた弥生時代中期から後期における居住域の移動については、気候変化等の視点からも掘り下げて検討する必要があるものと思われる。今後、周辺遺跡の調査が進み、低地における弥生時代の様相が明らかになることを期待したい。

第４節　中世における山新遺跡第２地点

遺跡からは溝状遺構によって区画された中世の掘立柱建物跡が検出され、居住空間と想定される。中世遺構群から300ｍほど南西側には中世後期の町場と鍛造鍛冶・製革関連業の工房（棗塚遺跡）が展開しているため、遺跡の性格もその影響を色濃く受けていたと考えられる。よって一定量出土した中世陶磁器の組成を棗塚遺跡と比較し、中世における当該地区の性質を想定したい。棗塚遺跡他のデータについては報文（櫻井2019）を参照されたい。

遺跡の調査面積は2,552㎡、陶磁器の総出土量は219点、㎡密度は0.09点であり、棗塚遺跡の遺物消費量（0.87点/㎡）とは比べるべくもない。それでも宿である栃木県小山市下古館遺跡（0.03点/㎡）や柏市中馬場遺跡（0.07/㎡）、鎌倉街道に沿った街村集落である袖ケ浦市山谷遺跡（0.06点/㎡）よりも多く、内陸の宿町よりも流通商品の消費は盛んであったといえる。

遺跡の推移については、両遺跡ともに古瀬戸後期様式期・常滑８型式から10型式期を通じ消費が増えていった点で共通するため、両遺跡を含む地域全体の傾向と考えられる。すなわち地域の都市的発展が14世紀後半から15世紀後葉にわたって進行したことを示すのであろう。棗塚遺跡については瀬戸・美濃大窯第２段階から遺物量が激減するが、山新遺跡の方がバブル期である古瀬戸後期様式Ⅳ期を除くと長期間安定した消費を示し、なおかつ近世まで継続しているように見える。都市的空間の縁辺に位置したため、都市的な消費の様相が顕著に表れないのであろう。都市的様相が未発展の段階、あるいは喪失後の遺物様相については、両遺跡とも差が認められない。

陶磁器の産地組成は一般的な中世遺跡に類し、在地系土器の比率が高い棗塚遺跡と異なる。棗塚遺跡の報文では、このような特殊な様相について、房総における都市的な町屋の一般的な消費様相と理解したが、山新遺跡はこれに該当しないことになる。ただし南伊勢系土器や備前・堺産の陶器が若干認められることから、流通上利便性の高い地域であったことは認めなければならない。

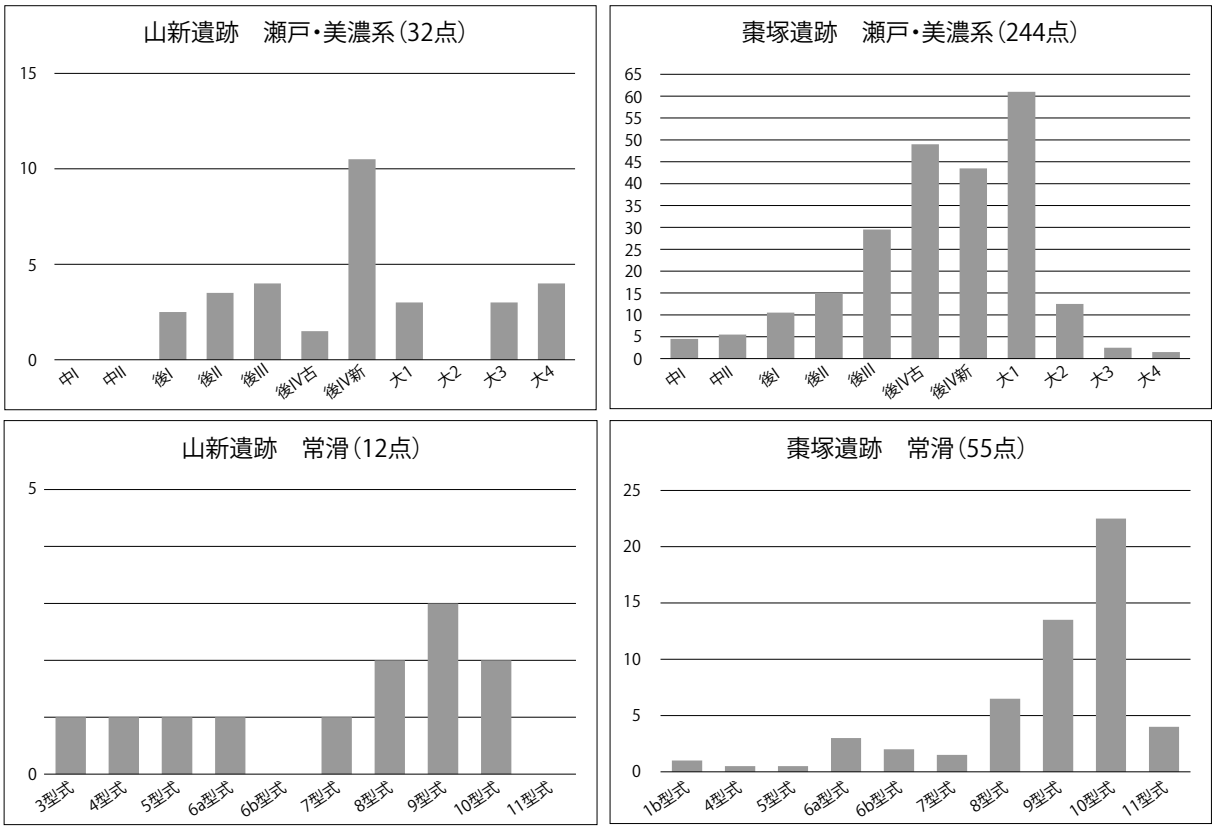


Fig.125　山新遺跡、棗塚遺跡における瀬戸・美濃系・常滑産陶器の型式別出土量

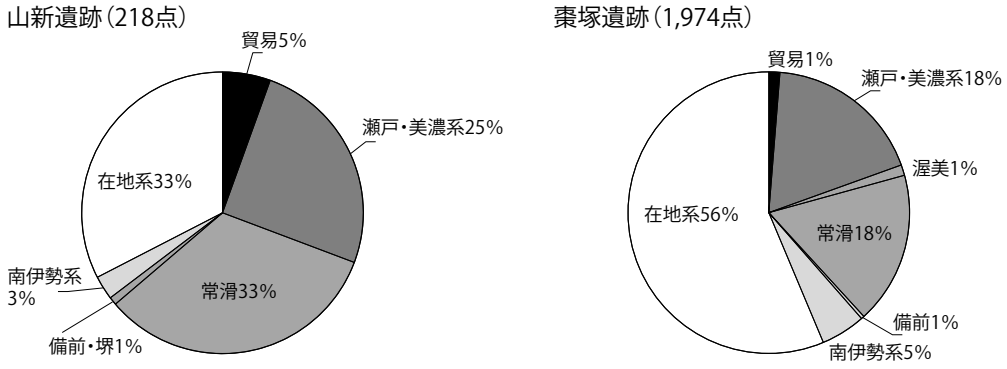


Fig.126　山新遺跡、棗塚遺跡における陶磁器の産地組成

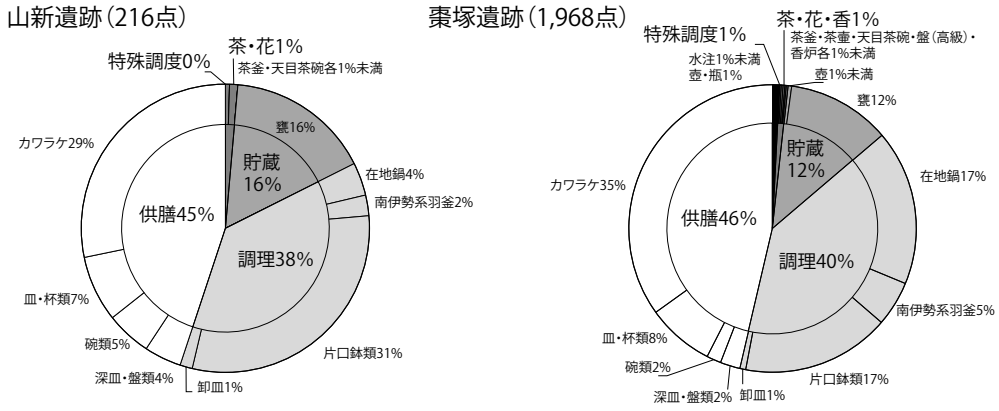


Fig.127　山新遺跡、棗塚遺跡における陶磁器の器種・用途組成

陶磁器類の器種・用途組成は棗塚遺跡に近似するが、調理具の鍋・釜類が少なく、片口鉢類が多い点で異なる。

棗塚遺跡の報文で都市的様相として注目した南伊勢系土器については、山新遺跡では6点（0.002点/㎡）出土し、山谷遺跡（0.001点/㎡）と千葉市生実城跡（0.007点/㎡）の中間値を示す。県内の中世遺跡としては多い部類に入るが、やはり棗塚遺跡（0.045点/㎡）には遠く及ばない。棗塚遺跡の報文で指摘したように、南伊勢系土器の出土量が湊津の第一次集積地との距離に比例するのであれば、棗塚遺跡がそれに近接し、山新遺跡はやや外れた場所、ということになる。

以上の比較から、山新遺跡の都市的様相は棗塚遺跡に比べ弱いものの、一般的な集落や城館よりは強いことがわかる。山新遺跡の中世遺構群は、姉崎津に連結する都市的空間の縁辺部に位置した、町屋とは異なる形態の在家跡と想定したい。

第5節　山新遺跡・棗塚遺跡における鍛冶生産

山新遺跡（第2地点）に隣接する棗塚遺跡ではセ235地区にて、鍛造鍛冶工房とみられ、炉穴2基を伴う桁行3間、梁行4間の東西棟掘立柱建物であるSB1と、作業場とみられるSK22が検出されている。SB1の西方約4m地点からは鉄滓類が集中して出土しており、排滓場としての利用がうかがえる。これらの鉄滓類は、鍛造剥片や粒状滓、椀型滓が確認されており、精錬鍛冶から鍛錬鍛冶、そして鉄滓の廃棄といった、一連の諸工程が行われていたことがわかる。

一方、山新遺跡では中世段階の掘立柱建物が確認されているが、これらは明確に鍛冶工房と呼べるものではない。しかし、鉄滓類が出土しており、棗塚遺跡同様、鍛錬鍛冶が行われていたことがうかがえる。これらは主にD区に集中する傾向にあり、特にやや窪地となるグリッド18R・17R・17Sから集中して出土しており、こうした窪地を滓捨場としていたのであろう（Fig.128）。

ところで山新遺跡や棗塚遺跡での鍛冶工房としての生産量は、どれほどのものだったのであろうか。鉄滓が出土した、主要な中世遺跡を集計したものがTab.49である。この集計表は報告書によって鉄滓の分類方針が異なるため、重量等が明記されているものは数値を記し、不明なものは「？」で表記した。

棗塚遺跡での鉄滓類の出土密度は、1㎡あたり4.24gである。鍛冶関連遺跡の中で、鉄滓の出土密度が高い場所は、鉄滓を集積・廃棄した排滓場であるため、他の遺跡の調査区が排滓場から外れていた可能性もあるが、他の遺跡と比較して突出していることがうかがえる。一方、山新遺跡は1㎡あたり0.19gであり、棗塚遺跡に比べると出土密度が低い。山新遺跡は棗塚遺跡から続く都市的空間の周縁部であったとみられる。

郡本遺跡群（15次）の出土密度は1㎡あたり0.16gで、山新遺跡の出土密度に近い。郡本遺跡群（15次）の性格は台地整形区画を伴う屋敷とみられ、屋敷内での鉄器の修繕など小規模な鍛冶生産であったのだろう。なお、同じ屋敷としての性格を有す、佐倉市神門房下遺跡（C地点）は1㎡あたり0.36g、横芝光町城山遺跡は1㎡あたり0.04gであり、同じ屋敷としての遺跡でも、その生産量は大きな差があったようである。

生産集落である小鳥向遺跡では1㎡あたり0.36gの鉄滓が出土している。生産集落としてはやや出土密度が低く見受けられるが、本遺跡の主体となっていたのは鋳造であり、鍛錬鍛冶による生産は

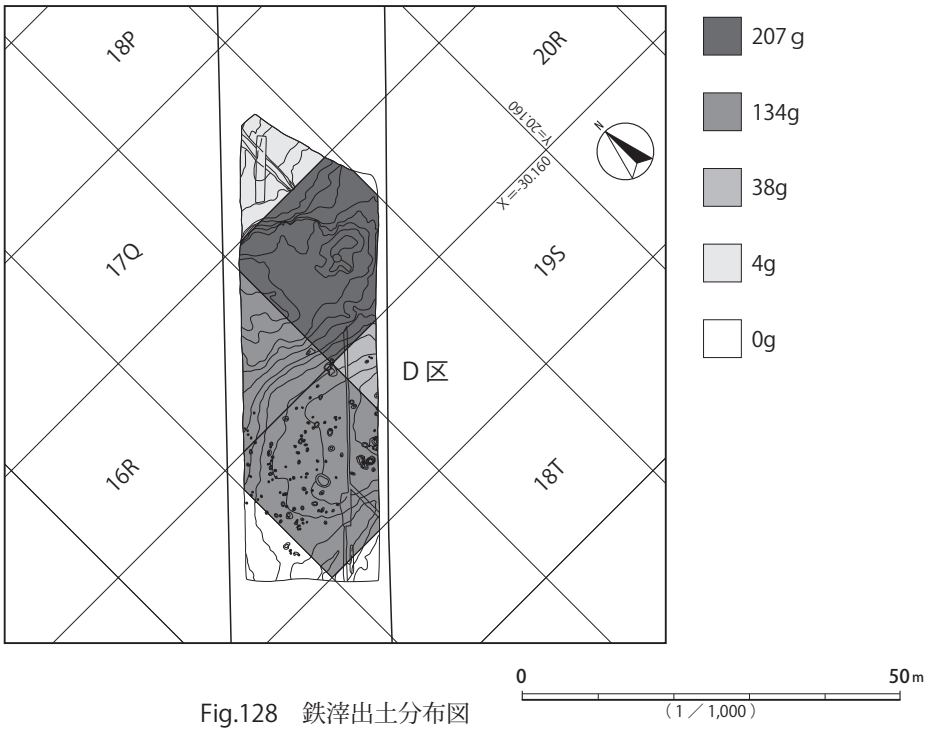


Fig.128　鉄滓出土分布図

Tab.49　鉄滓出土遺跡集計表

遺跡名	所在	遺跡の性質	中心期間	流動滓（g）	椀型滓（g）	鉄滓（g）	合計（g）	調査面積（㎡）	g/1 ㎡
荒井猫田遺跡（Ⅲ区）（第 1 次～ 6 次）	福島県郡山市	宿	12c ～ 14c	?	?	9,900.0	9,900	8,300	1.19
神門房下遺跡（C 地点）	佐倉市	中小名主層屋敷	12c ～ 15c 中	?	32.1	906.3	938.4	2,600	0.36
城山遺跡	横芝光町	小領主屋敷	13c 中～ 15c 後	?	?	1,185.5	1,186	29,300	0.04
郡本遺跡群（第 15 次）	市原市	屋敷	14c 後～ 15c 末	?	134.9	33.6	168.5	1,050	0.16
古宿遺跡	福島県石川町	宿	15c	?	1,525.0	60.0	1,585.0	1,100	1.44
小鳥向遺跡 II	市原市	生産集落	15c	?	?	269.4	269.4	740	0.36
棗塚遺跡	市原市	街村集落	15c 後～ 16c 中	?	9,605.2	0.0	9,605.0	2,266	4.24
山新遺跡（第 2 地点）	市原市	街村集落	15c 後～ 16c 中	69.0	80.0	325.0	474.0	2,552	0.19
小西城跡	大網白里市	城郭	16c	?	611.2	130.7	741.9	23,350	0.03

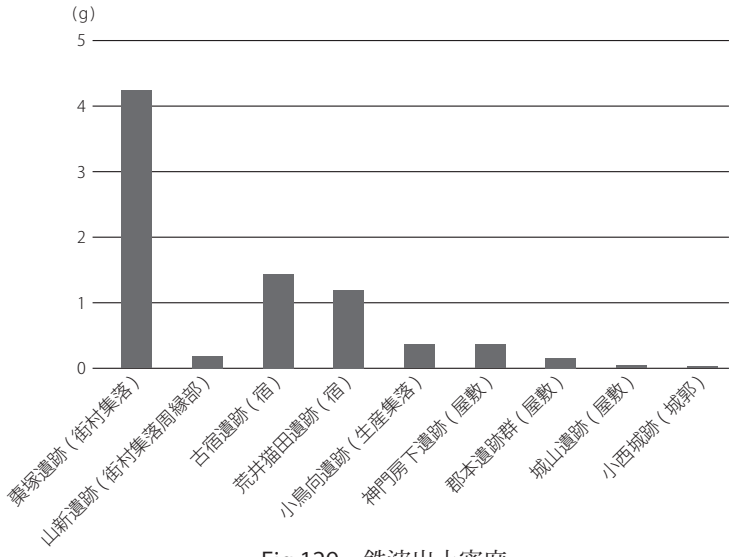


Fig.129　鉄滓出土密度

補足的なものであったとみられる。

中世宿としての性格が考えられている福島県荒井猫田遺跡では1㎡あたり1.19g、福島県古宿遺跡では1㎡あたり1.44gが出土しており、宿での鍛冶生産はいずれも同規模のものであったといえる。

城郭遺構である大網白里市小西城跡では、1㎡あたり0.03gの出土密度であり、他の遺跡と比べて著しく出土密度が低い。これは非日常的空間である城郭内での、小規模な鍛冶生産を示すものであろう。

以上のように中世遺跡の鉄滓出土量にみる鍛冶生産量は、城郭→屋敷・生産集落（鋳造）→宿→街村集落の順で多くなることが明らかとなった（Fig.129）。

ここで注目されるのは、街村集落と位置づけられる、棗塚遺跡での鍛冶生産量の突出した多さである。棗塚遺跡は、陶磁器類の遺物密度が高く、物資集積地である湊津に近接すること、南伊勢系土器の多量搬入について流通業への密接な関わりが想定されることから、第一次集積地に近接することが指摘されている（櫻井2019）。棗塚遺跡での鍛冶生産量の多さからは、流通の第一次集積地として発達した、都市的な場であることにより、宿以上の活発な手工業生産がなされたことがうかがえる。

注釈

（1）平成31年に報告書刊行済である。詳細については（北見ほか2019）を参照されたい。
（2）平成30年に報告書刊行済である。詳細については（北見・坂元2018）を参照されたい。
（3）標準柱状図は調査時の上杉陽・建石徹両氏の土層観察に基づいて、上杉氏に御作成いただいた。
（4）高橋龍三郎氏の御指摘による。
（5）今回は個別遺構としては取り扱ってはいないが、溝の残欠の可能性がある。
（6）姉崎上野合遺跡の縄文土器は古墳の周溝内及びその付近から出土しており、報告者によって古墳築造時に削平された縄文時代の遺構からもたらされた可能性が指摘されている（木對1990）。
（7）姥山Ⅱ式とⅢ式の時期については研究者間で意見が分かれており、鷹野光行氏は、姥山Ⅲ式は姥山Ⅱ式に含めるのが妥当であるとし、安行3b式に併行するものと指摘している（鷹野1988）。また、福田礼子氏は、姥山Ⅱ式とⅢ式の波状口縁深鉢形土器において、双方で同様の沈線文様の変化が窺えることから、姥山Ⅱ式とⅢ式は同一型式であると述べている（福田2006）。一方、鈴木正博・鈴木加津子両氏は姥山Ⅱ式とⅢ式を3段階に分けるとともに、安行3b式～3c式に併行するものと指摘している（鈴木正・鈴木加1983）。新屋雅明氏も姥山Ⅱ式とⅢ式の姥山系波状口縁深鉢形土器が安行3b式～3c式期に併行するものとしている（新屋2015）。本書内では、出土層位等から姥山Ⅱ式・Ⅲ式の時期差について判断ができなかったため、広義の意味で安行3b式～3c式に併行するものとして取り扱っている。

一方で、本書内で13類としている土器群は、本来姥山Ⅲ式となるべき土器であり、後者の意見を採用すると安行3c式に併行するものである。しかし、11類の姥山Ⅲ式となる土器群を含め、本遺跡包含層内で安行3c式期に属する土器群が晩期前葉に比べ大幅に数量を減らす中、13類のみまとまった数量が出土するという状況は、姥山Ⅱ式とⅢ式が同一型式にあるという前者の意見を支持する材料となるものなのかもしれない。
（8）上杉陽氏作成の標準柱状図による（小橋2002）。

参考文献

浅利幸一1993「姉崎東原遺跡D地点」『平成4年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
阿部俊夫1988「古宿遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告25　浜井場B遺跡・舌内塚・舌内板碑群・古宿遺跡』福島県教育委員会
新屋雅明2015『縄文時代後・晩期土器編年の研究－加曽利B式～安行式土器群の変遷－』六一書房
伊藤　晃・上西節雄1977『日本陶磁全集10　備前』中央公論社
大橋康二2000「九州陶器概論」『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会

大村　直1991『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』財団法人市原市文化財センター
大村　直2004「山田橋遺跡群および市原台地周辺地域の後期弥生土器」『市原市山田橋大山台遺跡』財団法人市原市文化財センター
大村　直2009「南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年」『市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点』市原市教育委員会
小川浩一2013『市原市山新遺跡永津前地区』市原市教育委員会
北見一弘2016「姉崎台城跡」『平成27年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
北見一弘2017「山新遺跡（永津前地区第2地点）」『平成28年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
北見一弘・坂元秀平2018『市原市山新遺跡・白塚出途遺跡』市原市教育委員会
北見一弘ほか2019『市原市稲塚遺跡』市原市教育委員会
木對和紀1990「姉崎上野合遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会
小出紳夫・忍澤成視1998「姉崎妙経寺遺跡」『市原市文化財センター年報』平成7年度 財団法人市原市文化財センター
小出紳夫2000「姉崎妙経寺遺跡第3次調査」『市原市文化財センター年報』平成9年度 財団法人市原市文化財センター
越川敏夫1984『原遺跡』原遺跡調査会
小橋健司2002「姉崎山新遺跡（第2地点）」『市原市文化財センター年報』平成11年度 財団法人市原市文化財センター
小橋健司2004「姉崎妙経寺遺跡（第7次）」『市原市文化財センター年報』平成13・14年度 財団法人市原市文化財センター
小橋健司・櫻井敦史・金子浩昌2013『市原市郡本遺跡群（第15次）』市原市教育委員会
近藤　敏2008「大昔の海岸線と古環境」『平成二十年度歴史散歩資料　市原の海いまむかし』市原市地方史研究連絡協議会
近藤　敏2012「姉崎東原遺跡E地点」『平成23年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
近藤　敏2014「縄文時代後期前半の市原市周辺の海域復元」『貝塚博物館紀要』第41号 千葉市加曽利貝塚博物館
近藤　敏2018「姉崎台遺跡（第2地点）」『平成29年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
齊木　誠2019「鬼子母神貝塚・姉崎台遺跡（第3地点）」『平成30年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
櫻井敦史1994『市原市姉崎東原遺跡C地点』財団法人市原市文化財センター
櫻井敦史2002『市原市小鳥向遺跡II』財団法人市原市文化財センター
櫻井敦史2019「稲塚遺跡についての考察」『市原市稲塚遺跡』市原市教育委員会
佐藤晃雅2004『神門房下遺跡C地点』財団法人印旛郡市文化財センター
白井久美子2003「姉崎古墳群」『千葉県の歴史』資料編考古2 千葉県
鈴木正博・鈴木加津子1983「安行式遺蹟解題（1）－埼玉県岩槻市裏慈恩寺遺跡の分析－」『土曜考古』第7号 土曜考古学研究会
鷹野光行1988「安行3b式をめぐって」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第41巻 お茶の水女子大学
高橋博志・小熊博治1998『荒井猫田遺跡（III・IV・V区）』財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
高橋康男1990『市原市姉崎東原遺跡』財団法人市原市文化財センター
高橋康男1993『市原市姉崎東原遺跡B地点』財団法人市原市文化財センター
高橋康男2000『市原市姉崎東原遺跡C地点（2）』財団法人市原市文化財センター
田中清美2016『市原市六孫王原遺跡G区』市原市教育委員会
長原　亘2002『千葉市生実城跡－昭和63年度・平成3～6年度調査－』千葉市教育委員会
蜂屋孝之ほか2014『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書5－市川市道免き谷津遺跡第1地点（3）－』公益財団法人千葉県教育振興財団
半田堅三1997『姉崎六孫王原遺跡』財団法人市原市文化財センター
平岡和夫ほか1983『毛尻遺跡調査報告書』市原市毛尻遺跡調査会
福田礼子2006「姥山II、III式の源流－小地域の変遷から－」『国指定史跡　上高津貝塚C地点』土浦市教育委員会
古内　茂・小高春雄・西野雅人2014『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書23－大網白里市小西城跡－』公益財団法人千葉県教育振興財団
松丸信司2012「前浦式土器の再検討－千葉県における縄文時代晩期中葉の土器編年の構築－」『古代』第128号 早稲田大学考古学会
道澤　明2000『篠本城跡・城山遺跡』財団法人東総文化財センター
森田　勉1981「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」『貿易陶磁研究』No.1 日本貿易陶磁研究会

第 4 章　自然科学的分析（1）

第 1 節　山新遺跡第 2 地点出土土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比分析

1. はじめに

千葉県市原市に所在する山新遺跡第2地点より出土した土器の付着炭化物について、起源物質を推定するために、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、炭素含有量と窒素含有量を測定して試料のC/N比を求めた。

2. 試料および方法

試料は、土器に付着した炭化物4点（試料No.13－29、22－109、22－47、25－5）である（Tab.52）。測定を実施するにあたり、試料に対して、超音波洗浄、アセトン洗浄および酸・アルカリ・酸洗浄（HCl:1.2 mol/L, NaOH:1.0 mol/L）を施して、試料以外の不純物を除去した。炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。炭素安定同位体比（$\delta^{13}C_{PDB}$）および窒素安定同位体比（$\delta^{15}N_{Air}$）の測定には、質量分析計DELTA V（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比にはIAEA Sucrose（ANU）、窒素安定同位体比にはIAEA N1を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に、還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムでCO_2とN_2を分離し、TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度1000℃、還元炉温度680℃、分離カラム温度35℃である。分離したCO_2およびN_2は、そのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

Tab.52　分析試料一覧

試料 No.	時期	形式	器種	部位
13－29	縄文晩期後葉	安行 3b 式～ 3c 式	粗製深鉢	口縁　内側
22－109	縄文晩期前葉	安行 3a 式～ 3b 式	精製深鉢	底部　内側
22－47	縄文後期後葉	安行 1 式～ 2 式	精製深鉢	底部　内側
25－5	縄文晩期末	千網式	土器	胴部上位　内側

3. 結果

Tab.53に、試料情報と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を示す。Fig.130には炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、Fig.131には炭素安定同位体比

Tab.53　結果一覧表

試料 No.	試料情報			$\delta^{13}C_{PDB}$（‰）	$\delta^{15}N_{Air}$（‰）	炭素含有量（%）	窒素含有量（%）	C/N 比
13－29	土器付着炭化物	安行 3b 式～ 3c 式	粗製深鉢	－24.4	7.88	58.7	7.40	9.25
22－109		安行 3a 式～ 3b 式	精製深鉢	－25.3	1.06	56.6	1.10	60.00
22－47		安行 1 式～ 2 式	精製深鉢	－25.9	2.00	62.0	2.60	27.80
25－5		千網式	土器	－24.4	8.61	56.1	7.05	9.28

とC/N比の関係を示した。

Fig.130において、試料No.13－29とNo.25－5の土器付着炭化物２点は、C_3植物・草食動物よりも窒素安定同位体比がやや高い位置に、試料No.22－109とNo.22－47の土器付着炭化物２点は、C_3植物の位置にプロットされた。

Fig.131において、試料No.13－29とNo.25－5の土器付着炭化物２点は、C_3植物・草食動物の位置にプロットされた。試料No.22－109の土器付着炭化物は、図中のC/N比の範囲外であるため、図中にはプロットされていない。試料No.22－47の土器付着炭化物点は、土壌（黒色土）の位置にプロットされた。

4. 考察

試料No.13－29と25－5の土器付着炭化物２点は、Fig.130でC_3植物・草食動物よりも窒素安定同位体比がやや高い位置、Fig.131でC_3植物・草食動物の位置にプロットされたため、概ねC_3植物・草食動物に由来する炭化物と推定される。試料No.22－109の土器付着炭化物は、Fig.130でC_3植物、Fig.131でC/N比の範囲外であった。おそらく、燃焼時に高い温度の熱を受け、炭素に比べて窒素の方がより多く喪失したため、C/N比が高くなったと思われる。よって、堅果類の可能性も含むC_3植物由来の炭化物と推定される。試料No.22－47の土器付着炭化物は、Fig.130でC_3植物、Fig.131で土壌（黒色土）の位置にプロットされ、やや土壌の影響を受けている可能性も考えられるが、主にC_3植物に由来する炭化物と推定される。

参考・引用文献

赤澤　威・南川雅男（1989）炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元．田中　琢・佐原　眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」：132－143，クバプロ．

坂本　稔（2007）安定同位体比に基づく土器付着物の分析．国立歴史民俗博物館研究報告，137，305－315．

米田　穣（2008）丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析．豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根城跡」：261－263，豊田市教育委員会．

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa（2002）Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44（2）, 549－557.

吉田邦夫・宮崎ゆみ子（2007）煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究．平成16－18年度科学研究補助金基礎研究B（課題番号16300290）研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」，85－95．

吉田邦夫・西田泰民（2009）考古科学が探る火炎土器．新潟県立歴史博物館編「火焔土器の国　新潟」:87－99, 新潟日報事業社．

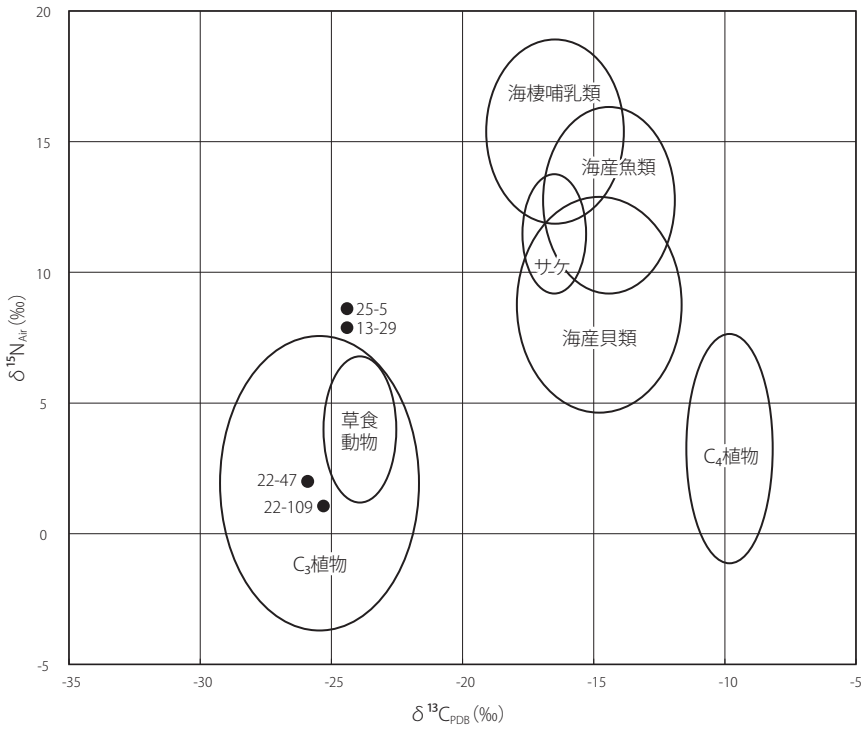


Fig.130　炭素・窒素安定同位体比（吉田・西田（2009）に基づいて作製）

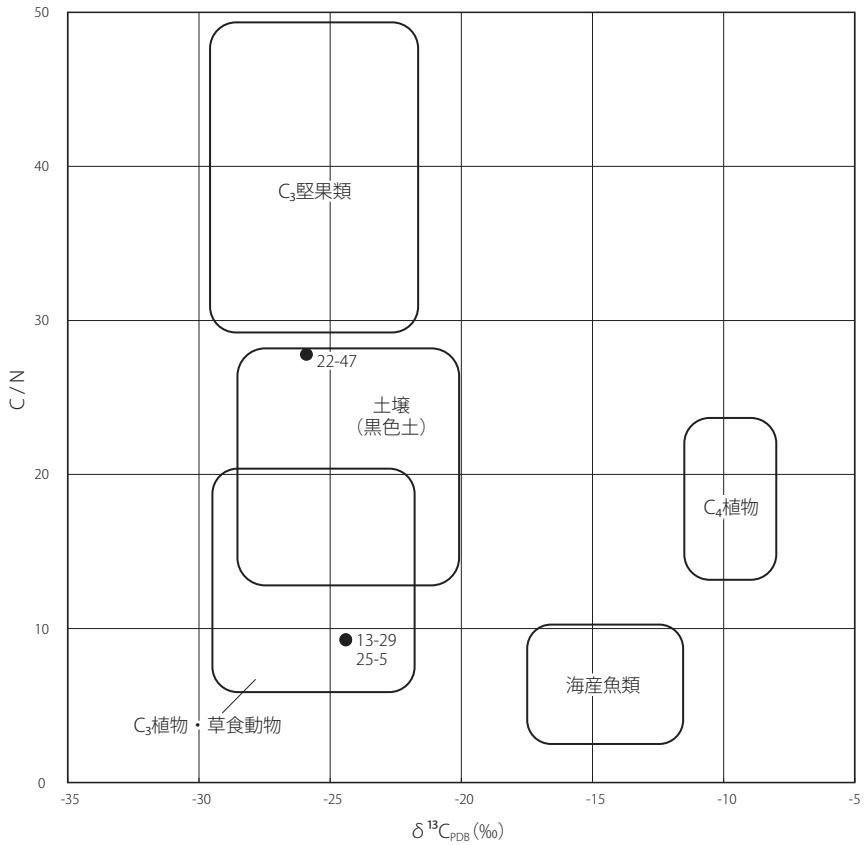


Fig.131　炭素安定同位体比と C/N 比の関係（吉田・西田（2009）に基づいて作製）

第２節　山新遺跡第２地点出土木製品等樹種同定

はじめに

山新遺跡（千葉県市原市姉崎地区に所在）は、姉崎台地の北側、東京湾に面した沖積低地の奥部にあたる。これまでの調査によって砂堆列を中心に縄文時代晩期から古墳時代の遺構、遺物が確認されている。

本分析調査では、縄文時代晩期とされる土器溜まりから出土した自然木および加工の可能性が指摘される木材について樹種同定を実施し、当時の植生や木材利用について検討する。

1. 試料

樹種同定試料は、縄文時代晩期とされる土器溜まりから出土した自然木および木製品の可能性がある木材など14点である。各試料の詳細は、結果と共にTab.54に示す。

2. 分析方法

生材は、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の切片を作成する。ガムクロラールで封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作成し、電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データーベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

結果をTab.54に示す。No.B004－３とNo.D区包含層－１の２点は一部が炭化し、保存状態も悪い。切片が作成できなかったため、平滑な面を作成して電子顕微鏡で観察した。組織が劣化しており、樹皮？と思われるが詳細は不明である。No.8は組織が劣化しているが、おそらく樹皮である。No.21も組織が劣化し、３断面が作成できなかったが、おそらくつる植物の茎と思われる。No.32は組織が萎縮・劣化し、木口と柾目の状態が悪い。このため、広葉樹であることは確かだが、細かな種類を同定することは難しい。

それ以外の試料は、針葉樹２種類（カヤ、ヒノキ）、広葉樹３種類（ハンノキ亜属、アカガシ亜属、クスノキ）に同定される。広葉樹が多く、針葉樹が少ない（各１点ずつ）傾向にある。以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）　イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁にある２本が対をなしたらせん肥厚が特徴である。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型。放射組織は単列で、細胞高が低い（４～５細胞高）ものが多い。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急である。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1 ～ 15細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属（*Alnus* subgen. *Alnus*）　カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2 ～ 4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列で1 ～ 20細胞高のものと集合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で1 ～ 15細胞高のものと、複合放射組織とがある。

・クスノキ（*Cinnamomum camphora*（L.）Presl）　クスノキ科クスノキ属

散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2 ～ 3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は 交互状に配列する。放射組織は異性、3 ～ 5細胞幅、 1 ～ 20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞には油細胞が認められる。

Tab.54　樹種同定結果

No.	コード	地区	遺構 Grid	層位	樹種	備考
B004－2	セ 312	B	004		カヤ	長さ 34cm　先端を加工？
B004－3	セ 312	B	004		樹皮？（一部炭化）	長さ 17cm　表面に工具痕？
D 区包含層－1	セ 312	D	包含層		樹皮（一部炭化）	長さ 16cm（推定）　穿孔？から破損
7	セ 312		1 トレ－385		ヒノキ	300x30　木製品か？
8	セ 312	D	17R－66a		樹皮	300x40　木製品か？
15	セ 312	D	18R－42c	V	アカガシ亜属	φ 100x240
19	セ 312	D	18R－54b－9	V	クスノキ	φ 80x200　丸太状
21	セ 312	D	18R－58a－3		つる植物？	φ 20x200　小枝状　樹皮あり
24	セ 312	D	17R－69c		アカガシ亜属	200x160
26	セ 312	D	17R－47b		クスノキ	180x110
28	セ 312		1 トレ 21		ハンノキ亜属	400x250
29	セ 312		1 トレ 1		ハンノキ亜属	559x120　他
31	セ 312	D	17R－59c		アカガシ亜属	φ 30x290
32	セ 312	D	18R－33a		広葉樹	270x30　樹皮あり

4. 考察

検出された樹種のうち、ハンノキ亜属は低地に湿地林を構成する種類であり、周辺に生育していたと考えられる。また、クスノキやアカガシ亜属は常緑広葉樹林の主要構成要素であり、現在の房総半島においても自然度の高い場所では、これらが鬱蒼とした森林を構成している。ヒノキやカヤも暖地に多く、斜面地など土地条件の悪い場所に生育する事が多い。このような古植生は、縄文時代末～古墳時代の花粉分析の結果でも推定されており（辻他,1983など）、いずれも周辺で得やすい木材の一つであったと考えられる。伊東・山田編（2012）の木材データーベースをみても、これらの木材は千葉県内にて、多くの出土例が確認されている。

引用文献

林　昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81−181.
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66−176.
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83−201.
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30−166.
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47−216.
伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学　出土木製品用材データベース.海青社,449p.
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.
島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
辻　誠一郎・南木睦彦・小池裕子,1983,縄文時代以降の植生変化と農耕ー村田川流域を例としてー,第四紀研究,22,251−266.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩(日本語版監修),海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

第３節　山新遺跡第２地点出土の動物遺体

1. はじめに

本遺跡は市原市姉崎に所在し、沿岸流が形成した砂堆列間の標高約5mの低地帯に立地する。過去の調査では、中世の土坑墓や溝などがこの砂堆に沿って多数検出され、調査区域全体で貝層の広がりも確認されている(北見他編 2019)。本調査区ではこれらの中世の遺構が一部確認されている他に、縄文時代晩期を主体とする遺物包含層が検出されており、動物遺体はこれらの両時代の埋土から出土している(本冊第２章)。

今回報告する資料は、４遺構と69小グリッドで採取された総計2,284点の動物遺体である。資料のごく一部には低湿地由来の遺存状態の良好な中世の資料が含まれるものの、殆どは被熱による収縮や破砕が進んだ縄文晩期の資料であった。これらは人工遺物などと同様に遺物番号を振られた点上げ資料、あるいは番号が与えられず小グリッド単位で取上げられた一括資料である。

種同定にあたり、市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課 埋蔵文化財調査センター所蔵の現生標本を使用させて頂いた。また、同定作業と併せて、加工痕や病変等の骨の損傷に関する観察や骨の計測を行った。集計にあたっては、遺構や小グリッドごとに最小個体数(MNI)を算出している。

2. 哺乳類遺体の内容

本遺跡の動物遺体は、ごく僅かの貝類・魚類・鳥類遺体の他に、多数の哺乳類遺体から構成されている。Tab.55に示すように、２目４科４種の哺乳類を確認した。Tab.56の内訳にあるように、哺乳類はシカやイノシシが主体を占め、これに続いてウマやウシが加わる。また、クジラ目とみられる環椎の化石が１点あり、外周部が摩り減っており、道具として使用された可能性がある。

総点数2,284点中、目科属種及び部位の同定に至ったもの(NISP)は128点、未同定資料は５点である。哺乳綱や陸獣に分類したものは2,152点あり、このうち破損が著しく部位同定ですら不可能な破片資料は1,590点に上る。本遺跡の資料の９割に被熱による収縮やひび割れ、破砕、色調変化などが多く認められた。

シカとイノシシはそれぞれ47点と29点（NISP）確認した。四肢骨と肢端部骨が中心に出土している。調査区内で地点的な偏りはなく、埋葬など同一個体の骨がまとまった例も認められなかった。同2種の資料には、縄文晩期に多く認められる動物遺体の内容と共通し、被熱による収縮と破砕が進み砕片化したものが多い。本遺跡が海浜部に位置するにもかかわらず、市内の内陸寄りの遺跡と同様の傾向を示している。ウマとウシはそれぞれ9点と2点（NISP）確認した。中世の遺構分布と一致して出土し、四肢骨と遊離歯が中心であった。本遺跡群の中世資料と同様、被熱痕は認められず遺存状況は良好であった。

末筆となりましたが、齊木 誠氏、櫻井敦史氏、小橋健司氏（市原市教育委員会）には分析と執筆の機会を頂き、本遺跡に関する詳細のご教示や、資料撮影から写真図版作成に至るまで、標本の使用など、分析全般にわたって大変お世話になりました。また、滋賀県立琵琶湖博物館の高橋啓一館長には鯨類化石についてご教示頂きました。記して深く感謝申し上げます。

Tab.55　種名一覧

哺乳綱	奇蹄目	ウマ科	ウマ	*Equus caballus*
	偶蹄目	イノシシ科	イノシシ	*Sus scrofa*
		シカ科	ニホンジカ	*Cervus nippon*
		ウシ科	ウシ	*Bos taurus*
	計	4科	4種	

Tab.56　遺構・グリッドごとの集計

遺構 / トレンチ	グリッド		層位		分類群	部位	左右	残存	成長段階	加工・咬痕・病変・咬耗	点数	NISP	MNI
001		B			イノシシ	下顎遊離歯 I1	左	ほぼ完存		咬耗：中	1	1	1
					ウシ	角	-	破片			1	1	1
005		D			哺乳綱	同定不可能	-	破片			2		
006		B			哺乳綱	同定不可能	-	破片			1		
008		B			ウマ	手 / 足根骨	-	破片			1	1	1
					哺乳綱	同定不可能	-	破片			1		
1トレ					ウマ	下顎遊離歯 I1	左	ほぼ完存	老	低湿地由来の変色（茶褐色）、咬耗：中	1	1	1
						遊離歯 P/M	-	歯冠＋歯根破片	成	咬耗：中	1	1	
					大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		低湿地由来の変色（茶褐色）	1		
					哺乳綱	同定不可能	-	破片			2		
6トレ（7トレ？）					イノシシ	踵骨	左	ほぼ完存	成	低湿地由来の変色（茶褐色）	1	1	1
8トレ					ウマ	下顎遊離歯 M3	右	ほぼ完存	若	低湿地由来の変色（茶褐色）、咬耗：微〜中	1	1	1
	16S	78	II		ウシ	下顎遊離歯 P3	右	ほぼ完存	幼若	咬耗：無	1	1	1
	17R	38 D			シカ	膝蓋骨	左			被熱による変色（灰白色）	1	1	1
		39 B			シカ	頭蓋骨	-	側頭骨関節結節		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
					大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
		48 A	IV	5	シカ	大腿骨	左	遠位部		低湿地由来の変色（茶褐色）	1	1	1
					貝類	同定不可能	-	破片			1		
		49	V		シカ	脛骨	右	近位〜遠位部	成	低湿地由来の変色（茶褐色）	1	1	1
		56 D			哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
		57			シカ	中手 / 足骨	-	骨幹部破片		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
		58 B	図面 No.1		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		剥離痕、被熱による変色（灰白色）	1		
					大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
		59 D	IV	5	哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
					シカ	中手 / 足骨	-	遠位部	成	被熱による変色（灰白色）	1	1	1
		67 B	IV		哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
		92			ウマ	下顎遊離歯 P3	左	ほぼ完存	老	低湿地由来の変色（茶褐色）、咬耗：中〜強	1	1	1
	17S	7			ウマ	下顎遊離歯 P4	右	ほぼ完存	老	低湿地由来の変色（茶褐色）、咬耗：中〜強	1	1	1
		17	II		哺乳綱	同定不可能	-	破片			1		
		22	II		ウマ	下顎遊離歯 P3/4/M1/2	左	歯冠＋歯根破片	老	低湿地由来の変色（茶褐色）、咬耗：中〜強	1	1	1
		48 D			大型陸獣	部位不明	-				1		
		55			哺乳綱	同定不可能	-	破片			1		
		56			哺乳綱	同定不可能	-	破片			1		
		58			ウマ	下顎遊離歯 P3	右	ほぼ完存	老	低湿地由来の変色（茶褐色）、咬耗：中〜強	1	1	1
		60			哺乳綱	同定不可能	-	破片			1		
		62	V		未同定		-				1	1	
		85			ウマ	上顎遊離歯 P3/4/M1/2	左	歯冠＋歯根破片	老	低湿地由来の変色（茶褐色）、咬耗：中〜強	1	1	1
	18R	2 C			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片			1		
		11 B	IV	5	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
		D			イノシシ	末節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
					大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片			1		
					哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
		12 A	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
					哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
		B			シカ	中手骨	左	ほぼ完存		咬痕、低湿地由来の変色（茶褐色）	1	1	1
		D	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
				5	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰黒色）	1		
										被熱による変色（灰白色）	2		
		13 B			哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
		14 C			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
		20			シカ	肩甲骨	左	ほぼ完存	成	カットマーク（頸部）、低湿地由来の変色（茶褐色）	1	1	1
		21 B	ベルトIV	3	哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	8		
		C	IV	5	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
					大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	6		
					哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	38		
		D	IV	4	シカ	末節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
					哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	10		

遺構 / トレンチ	グリッド			層位		分類群	部位	左右	残存	成長段階	加工・咬痕・病変・咬耗	点数	NISP	MNI
	18R	22	A	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	3		
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			B			シカ	角	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			C	IV	4	シカ	中足骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
		23	A	IV	3	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	5		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	8		
					4	シカ / イノシシ	手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						中型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						シカ	中手 / 足骨	-	遠位部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
			B			哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			C	IV	3	シカ / イノシシ	指 / 趾骨	-	遠位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	8		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	19		
					4	哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	3		
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
				サブトレ		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	4		
			D			シカ / イノシシ	橈骨	左	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
		24	A			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			B	IV	3	哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			C			シカ	角	-	破片		被熱による変色（灰茶色）	1	1	1
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			D			哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
		25	A	V		哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	8		
			C	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			D	IV	3	イノシシ	脛骨	右	遠位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
				VII		哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	3		
		31	A	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
			B	IV	2	シカ	踵骨	右	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
		32	B			哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			C	IV	2	シカ / イノシシ	手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	4		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	7		
			D			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
		33	A	IV	3 下	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
				サブトレ内		哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	4		
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰黒色）	1		
			B	IV	3 下	シカ	中節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	7		
			C			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
		34	A	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
					3 下	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	8		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	5		
		35	C	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	19		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	11		
						イノシシ	踵骨	左	遠位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						シカ / イノシシ	指 / 趾骨	-	遠位部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
							手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			D			イノシシ	中手骨 II	左	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
		36		IV	3	シカ	距骨	左	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
		42	A	IV	3 下	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
		43	A			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			B	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
				サブトレ内		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			C	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
				サブトレ内		哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	6		
			D	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	4		
		44	A	サブトレ内		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	8		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	5		
				サブトレ		シカ / イノシシ	指 / 趾骨	-	遠位部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
			B	サブトレ内		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			C			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			D			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
		45	A	サブトレ内		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
			B	サブトレ内		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
				サブトレ		哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			D			哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
		46	A			クジラ類化石	環椎？	-			低湿地由来の変色（茶褐色）	1		
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			C			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
		47	C			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
		48	C			シカ / イノシシ	手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
		49	A	IV	4	シカ / イノシシ	距骨	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
		51	B	IV	3 下	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰黒色）	1		
			D	IV	4 層	シカ	上腕骨	左	遠位部	成	低湿地由来の変色（茶褐色）	1	1	1
		52	A	IV	4	イノシシ	膝蓋骨	-			被熱による変色（灰白色）	1	1	1
					3 下	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	4		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			B			イノシシ	中手骨 III	右	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
			C	IV	4	シカ	角	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						鳥綱	四肢骨	-	骨幹部片		低湿地由来の変色（茶褐色）	1		
					3 下	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
		53	A	サブトレ		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	4		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	6		
			C	IV	3	哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		

遺構/トレンチ	グリッド			層位		分類群	部位	左右	残存	成長段階	加工・咬痕・病変・咬耗	点数	NISP	MNI
	18R	54	A	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	9		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
			B			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
			C	V		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	11		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	13		
				ベルト内		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	12		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	5		
						シカ / イノシシ	末節骨	-	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
											被熱による変色（灰白色 3、灰黒色 1）	4		
				ベルト		哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	4		
			D	ベルト内		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	11		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	29		
						イノシシ	腓骨	-	骨幹部破片		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
				ベルト		シカ / イノシシ	指 / 趾骨	-	遠位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
		55	C			イノシシ	末節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
			D			哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
				包含層		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
		56	A	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	7		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	13		
					5	哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	4		
				V		シカ	基節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
									遠位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
							末節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						シカ / イノシシ	距骨	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	10		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰茶色）	2		
											被熱による変色（灰白色）	14		
			B			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	4		
			C	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	4		
							肋骨	-	頸部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
				ベルト内		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						イノシシ	末節骨	-	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	5		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	14		
			D	V		シカ / イノシシ	手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	8		
											被熱による変色（灰白色 3、灰黒色 1）	4		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	27		
						シカ / イノシシ	頭蓋骨	左	岩様部		被熱による変色（灰黒色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	3		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	5		
		57	A			大型陸獣	頭蓋骨	-	頭頂骨片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			C	V		イノシシ	中手骨Ⅴ	左	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						シカ	尺骨	左	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	11		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	38		
		60	A	IV	5	哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	3		
		61	D			哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
		62	A	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
				図 2		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	6		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	26		
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			B	IV	2	哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			C	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
				図 2		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	5		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	11		
						イノシシ	中手 / 足骨	-	遠位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
			D			シカ / イノシシ	頭蓋骨	-	岩様部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
		63	A	IV	4	哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	10		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	3		
				サブトレ		シカ	距骨	右	ほぼ完存		低湿地由来の変色（茶褐色）	1	1	1
			C	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
						シカ	中手 / 足骨	-	遠位端片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
		64	A			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			B	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	7		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	4		
			C	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			D	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	6		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	10		
		65	A	IV	4	シカ	中手 / 足骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	4		
				V		哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	5		
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			B	IV	4	シカ	種子骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						シカ / イノシシ	手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	7		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	11		
				礫層中		シカ / イノシシ	手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	7		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	33		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	7		
			C	IV	4	イノシシ	種子骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						シカ	中手 / 足骨	-	遠位端片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
									骨幹部破片		被熱による変色（灰茶色）	1	1	
											被熱による変色（灰白色）	2	2	
							膝蓋骨	-			被熱による変色（灰白色）	1	1	
						シカ / イノシシ	指 / 趾骨	-	近位端片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰茶色）	2		
											被熱による変色（灰白色）	20		
							肋骨	-	体部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						中型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						未同定	部位不明	-	骨幹部破片			1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	133		

遺構 / トレンチ	グリッド			層位		分類群	部位	左右	残存	成長段階	加工・咬痕・病変・咬耗	点数	NISP	MNI
	18R	65	C	IV	5	イノシシ	中節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
							腓骨	-	骨幹部破片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						シカ	中手 / 足骨	-	骨幹部破片		被熱による変色（灰白色）	5	5	
							膝蓋骨	左	ほぼ完存		被熱による変色（灰茶色）	1	1	
							腓骨	左	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						大型陸獣	下顎骨	-	歯槽部片		被熱による変色（灰白色）	2		
							四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	37		
							肋骨	-	体部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						中型陸獣	肋骨	-	体部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						鳥綱	中手骨	-	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						未同定（鳥綱）		-			被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰黒色）	1		
											被熱による変色（灰白色）	149		
					4 層	イノシシ	下顎遊離歯 M2	右	ほぼ完存	成	低湿地由来の変色（一部黒色）、咬耗：中～強	1	1	1
							下顎遊離歯 M3	右	ほぼ完存	成	低湿地由来の変色（一部黒色）、咬耗：中	1	1	
						シカ	中足骨	右	ほぼ完存	亜成	病変？（骨幹部中間にただれ） 低湿地由来の変色（茶褐色）	1	1	
			D	IV	4	シカ	腓骨	右	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	8		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	31		
						イノシシ	基節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
							中節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
							末節骨	-	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						シカ	末節骨	-	近位部		被熱による変色（灰白色）	2	1	
						シカ / イノシシ	手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
							尾椎	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	55		
							肋骨	-	頚部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						未同定		-			被熱による変色（灰白色）	1	1	
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	271		
		66	A	V		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	7		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	28		
			B	IV	4	シカ / イノシシ	手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	11		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	18		
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	4		
			C	IV	4	イノシシ	末節骨	-	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						シカ	角	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
											被熱による変色（灰白色）、海面質取除く加工？	1	1	
						シカ / イノシシ	指 / 趾骨	-	近位部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	15		
						中型陸獣	下顎骨	-	歯槽部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						鳥綱	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	63		
				V		イノシシ	中節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
							中足骨 II	右	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						シカ / イノシシ	指 / 趾骨	-	遠位部片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
							手 / 足根骨	右	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	3	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	15		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	125		
				VII		イノシシ	基節骨	-	近位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
							中節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
							末節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						シカ / イノシシ	手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
							大腿骨	-	遠位端片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	13		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	62		
						シカ / イノシシ	頭蓋骨	-	頭頂骨片		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						鳥綱	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	10		
			D	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
				V		イノシシ	中手 / 足骨	-	遠位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						シカ / イノシシ	指 / 趾骨	-	遠位部片		被熱による変色（灰白色）	2	2	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	29		
						未同定		-			被熱による変色（灰白色）	1	1	
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	87		
						シカ / イノシシ	指 / 趾骨	-	遠位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	4		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	33		
		67	A	VII		イノシシ	基節骨	-	遠位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						シカ / イノシシ	手 / 足根骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	13		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	11		
			C	V		シカ	角	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
						大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
		70	B			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	8		
		71	B	図 2		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	3		
		72	D	図 2		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	5		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	3		
		73	B			大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
			C	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	3		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			D	IV	3 下	シカ	末節骨	-	ほぼ完存		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
		74	B			哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
			D	IV	4	哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
		75	A	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	4		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	4		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	2		
			B	V		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	9		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	8		
			D			哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	1		
		76	A	IV	4	大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
				V		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	2		
						哺乳綱	同定不可能	-	破片		被熱による変色（灰白色）	13		
						シカ	脛骨	左	遠位部		被熱による変色（灰白色）	1	1	1
		84	A	V		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	8		
				図 2		大型陸獣	四肢骨	-	骨幹部片		被熱による変色（灰白色）	1		
						シカ	脛骨	左	ほぼ完存	成	低湿地由来の変色（茶褐色）	1	1	
総計												2284	128	57

第５章　自然科学的分析（２）

第１節　棗塚遺跡出土の動物遺体

はじめに

棗塚遺跡（千葉県市原市姉崎に所在）は、海抜５～６mの砂堆上に位置する。これまでの発掘調査により、平成８年度に行われた１次調査で中世の貝層・土坑墓などが、平成９年度に行われた２次調査でも鎌倉街道の一部と考えられる道路跡・中世区画溝・土坑墓・火葬墓などが検出された。この内、人骨の伴う土坑墓は、１次調査区で３基、２次調査区の道路跡の北東側から17基、南西側から１基が見つかっており、幼児～老齢の個体が確認されている（松村他2006）。

本遺跡では、既に出土人骨の親族関係や石材について調査を行っている。今回、遺跡内から出土した動物遺体について検討するために骨同定を実施した。

1. 試料

試料は、C6－99a、D6－37a、D6－37a－1、D6－37a－2、D6－37a－3、D6－37a－4、D6－37a－5、D6－37a－6、D6－37a－7、D6－37a－8、D6－37a－9、D6－37a－10、D6－37a－12、D6－37a－14、D6－37a－15、D6－59a、D6－59a－8、D6－59a－９グリッドから採取された骨である。これらのグリッドからは複数点の試料が採取されており、1mm、4mmの篩で水洗選別されており、総試料数は160試料であり、それぞれ複数点の骨片がみられる。なお、試料の詳細については結果とともに表示する。

2. 分析方法

試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種・部位を特定する。

3. 結果

検出された種類は、腹足綱１種類（コハクガイ科）、軟骨魚綱１種類（アオザメ属）、硬骨魚綱10種類（ニシン科、サヨリ属、フサカサゴ科、スズキ属、アジ科、クロダイ属、サバ属、ヒラメ、カレイ科、フグ科）、両生綱１種類（カエル類）、爬虫綱１種類（ヘビ亜目）、鳥綱、哺乳綱３種類（モグラ科、ネズミ亜科、ハタネズミ亜科）である（Tab.58）。

同定結果をTab.59に、また地点別種類別検出破片数をTab.60（DVD－ROM収録）に示す。なお、試料は同一地点で複数試料認められる場合一括して取り扱うこととした。以下、種類別に記す。

＜貝類＞

コハクガイ科がC6－99aで１点のみ検出される。そのほか、貝片は、D6－37a－３・９で検出される程度である。

＜軟骨魚綱＞

アオザメ属の歯牙がC6－99aで１点検出される。また、C6－99aでは、サメ・エイ類の椎骨が１点検出される。

＜硬骨魚綱＞

・ニシン科

C6−99aで腹椎1点・尾椎3点、D6−37aで腹椎2点・尾椎1点、D6−59aで腹椎3点が検出される。この他、ニシン科の可能性がある腹椎がD6−37a・D6−59aで各1点、尾椎がC6−99aで1点みられる。

・サヨリ属

腹椎がD6−37aで1点検出される。

・フサカサゴ属

腹椎がD6−37aで1点検出される。

・スズキ属

C6−99aで第1椎骨が2点、腹椎が1点、D6−37aで第1椎骨が2点、D6−59aで左肩甲骨1点と第1椎骨が1点検出される。この他、スズキ属の可能性がある右肩甲骨がD6−59aで1点検出される。

・アジ科

C6−99aでは、右主上顎骨が1点、腹椎が1点、尾椎が4点、楯鱗が13点検出される。D6−37aでは、尾椎が1点、楯鱗が1点検出される。D6−59aでは、尾椎が1点、楯鱗が5点検出される。この他、アジ科の可能性がある左方骨がD6−37aで、尾椎がC6−99a・D6−59aで各1点検出される。

・クロダイ属

左前上顎骨がC6−99aで1点検出される。

・タイ科

前上顎骨/歯骨の破片がC6−99aで1点、歯牙がC6−99a・D6−37aで各1点検出される。この他、タイ科の可能性がある前上顎骨/歯骨の破片がC6−99aで1点、腹椎がD6−59aで1点、尾椎がC6−99aで2点、D6−37aで1点検出される。

・サバ属

腹椎がD6−59aで1点、尾椎がC6−99aで3点検出される。この他、サバ属の可能性がある尾椎がC6−99aで2点、D6−37aで1点検出される。

・ヒラメ

尾椎がC6−99aで1点検出される。

・カレイ科

第2椎骨がC6−99aで1点検出される。この他、カレイ科の可能性がある左上疑鎖骨がC6−99aで1点検出される。

Tab.58　棗塚遺跡動物遺体検出分類群一覧

軟体動物門　Phylum　Mollusca
　腹足綱　Class　Gastropoda
　　有肺亜綱　Subclass　Pulmonata
　　柄眼目　Order　Sylommatophora
　　コハクガイ科　Family　Zonitidae
脊椎動物門　Phylum　Vertebrata
　軟骨魚綱　Class　Chondrichthyes
　　板鰓亜綱　Subclass　Elasmobranchii
　　ネズミザメ目　Order　Lamniformes
　　ネズミザメ科　Family　Lamnidae
　　アオザメ属　Genus　*Isurus*
　硬骨魚綱　Class　Osteichthyse
　　条鰭亜綱　Subclass　Actinopterygii
　　ニシン目　Order　Clupeiformes
　　ニシン科　Family　Clupeidae
　　ダツ目　Order　Beloniformes
　　トビウオ亜目　Suborder　Exocoetoidei
　　サヨリ科　Family　Hemiramphidae
　　サヨリ属　Genus　*Hyporhamphus*
　　カサゴ目　Order　Scorpaeniformes
　　カサゴ亜目　Suborder　Scorpaenoidei
　　フサカサゴ科　Family　Scorpaenidae
　　スズキ目　Order　Perciformes
　　スズキ亜目　Suborder　Percoidei
　　スズキ科　Family　Moronidae
　　スズキ属　Genus　*Lateolabrax*
　　アジ科　Family　Carangidae
　　タイ科　Family　Sparidae
　　ヘダイ亜科　Subfamily　Sparinae
　　クロダイ属　Genus　*Acanthopagrus*
　　サバ亜目　Suborder　Scombroidei
　　サバ科　Family　Scombridae
　　サバ属　Genus　*Scomber*
　　カレイ目　Order　Pleuronectiformes
　　ヒラメ科　Family Paralichthyidae
　　ヒラメ　*Paralichthys olivaceus*
　　カレイ科　Family　Pleuronectidae
　　フグ目　Order　Tetraodontiformes
　　フグ科　Family　Tetraodonidae
　両生綱　Class　Amphibia
　　無尾目（カエル類）　Order　Anura
　爬虫綱　Class　Reptilia
　　有鱗目　Order　Squamata
　　ヘビ亜目　Suborder　Serpentes
　鳥綱　Class　Aves
　哺乳綱　Class　Mammalia
　　モグラ目（食虫目）　Order　Insectivora
　　モグラ科　Family　Talpidae
　　ネズミ目（齧歯目）　Order　Rodentia
　　ネズミ科　Family　Muridae
　　ネズミ亜科　Subfamily　Murinae
　　ハタネズミ亜科　Subfamily　Arvicolinae

・フグ属

右歯骨がC6−99aで１点検出される。

・硬骨魚綱

基底後頭骨、前上顎骨、前上顎骨/歯骨、左上舌骨、主鰓蓋骨の可能性がある破片、咽頭骨の可能性がある破片、擬鎖骨、後側頭骨、左上擬鎖骨、腹椎、尾椎、椎骨、終尾椎、下尾骨、鰭棘等、鱗、部位不明破片などが検出される。地点別にみると、C6−99aが最も多く、次いでD6−59a、D6−37aの順に検出される。

＜両生綱＞

無尾目（カエル類）の左前上顎骨、椎骨、仙骨、尾骨、左右肩甲骨、左右上腕骨、左右橈骨・尺骨、左右腸骨、左右大腿骨、脛骨・腓骨、左距骨・踵骨、四肢骨、指骨などが検出される。地点別にみると、D6−37aが最も多く、次いでC6−99a、D6−59aの順に検出される。

＜爬虫綱＞

ヘビ類の椎骨が、C6−99aで２点、D6−37aで10点、D6−59aで７点検出される。

＜鳥綱＞

種類不明の足根中足骨がD6−37aで１点検出される。また、鳥綱の可能性がある四肢骨片がC6−99aで１点、D6−37aで２点検出される。

＜哺乳綱＞

・モグラ科

D6−37aで上顎第２後臼歯が左右各１点検出される。

・ネズミ亜科

D6−37aで、左右上顎骨、左右上顎第1後臼歯、左右上顎第2後臼歯、左右上顎第3後臼歯、左右下顎骨、左右下顎第１後臼歯、左下顎第２後臼歯、左右下顎第３後臼歯、上顎骨/下顎骨、歯牙が検出される。また、D6−59aで左下顎骨が１点検出される。

・ハタネズミ亜科

D6−37aで、左右上顎骨、左右上顎第1後臼歯、左右上顎第2後臼歯、左右下顎骨、左右下顎第1後臼歯、左下顎第２後臼歯、左下顎第３後臼歯、歯牙が検出される。

・ネズミ科

D6−37aで、左右上顎第１門歯、下顎骨、左右下顎第１門歯、第１門歯、歯牙、左右上腕骨、左橈骨、左尺骨、右大腿骨、脛骨・腓骨、右踵骨が検出される。また、C6−99aで第１門歯が、D6−59aで上顎第１門歯と左橈骨が検出される。また、ネズミ科の可能性がある上顎骨がD6−37aで１点、下顎骨の可能性がある破片がD6−37aで３点、上腕骨の可能性がある破片がC6−99aで１点検出される。

・哺乳綱

小型哺乳綱では、頭蓋骨、椎骨、尾椎、肋骨、上腕骨、右橈骨、橈骨、右尺骨、左右大腿骨、左脛骨、脛骨・腓骨、左右距骨、中手骨/中足骨、基節骨、基節骨/中節骨、中節骨、四肢骨、肋骨/四肢骨などが検出される。それ以外の哺乳綱は、歯牙、尾椎、四肢骨、中手骨/中足骨、中節骨などがみられる。地点別にみると、D6−37aが最も多く、次いでC6−99a、D6−59aの順に検出される。

Tab.59　棗塚遺跡骨同定結果（1）

番号	試料		フルイ	重量	種類	部位	左　右	部分	数量	被熱	備考
1	D6－37a－12	12－1 ①	獣骨 1mm	0.6g	骨	不明		破片	－		0.20g
					残渣				－		0.02g
2	D6－37a－12	12－1 ②	獣骨 4mm	0.3g	ネズミ亜科	上顎骨	左	破片	1		
						下顎骨		破片	1		
					ハタネズミ亜科	下顎骨	左	破片	1		
					ネズミ科	下顎第 1 門歯	左	破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	2		
3	D6－37a－12	12－1 ③	獣骨 1mm	0.2g	ネズミ亜科	上顎第 1 後臼歯	右	破片	1		
						上顎第 3 後臼歯	右	破片	1		
						下顎第 1 後臼歯	左	破片	1		
							右	破片	1		
					ハタネズミ亜科	下顎第 1 後臼歯	左	破片	1		
					ネズミ科	下顎第 1 門歯	左	破片	2		
							右	破片	1 ＋		
								破片	1		
						橈骨		近位端	1		
					ネズミ科？	下顎骨？		破片	2		
					小型哺乳綱	尺骨	右	近位端	1		
					骨	不明		破片	22		
4	D6－37a－4	43 ①	骨 4mm	0.7g	硬骨魚綱	不明		破片	2		
					哺乳綱	不明		破片	1		
5	D6－37a－4	43 ②	骨 1mm	0.2g	アジ科	楯鱗		破片	1		
					アジ科？	方骨	左	破片	1		
					硬骨魚綱	尾椎		破片	1	○	
						鰭棘等		破片	1		
						不明		破片	6		
					鳥綱？	四肢骨		破片	1	○	
					無尾目（カエル類）	尾骨		破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	2		
					骨	不明		破片	5		
					植物遺体				1		
6	D6－37a－4	43 ③	骨 4mm	0.2g	無尾目（カエル類）	椎骨		略完	1		
					ネズミ科	大腿骨	右	近位端	1		
					骨	不明		破片	2		
7	D6－37a－4	43 ④	骨 1mm	0.1g	無尾目（カエル類）？	四肢骨		破片	1		
					小型哺乳綱	尾椎？		破片	1		
						基節骨		近位端	1		
					骨	不明		破片	2		
8	D6－37a－3	46 ①	骨 4mm	0.9g	骨	不明		破片	6		
					残渣				－		0.09g
9	D6－37a－3	46 ②	骨 1mm	0.7g	無尾目（カエル類）	肩甲骨	右	破片	1		
					ネズミ亜科	下顎第 1 後臼歯	右	略完	1		
					骨	不明		破片	－		0.27g
					炭化物			破片	26		
					残渣				－		0.33g
10	D6－37a－3	46 ③	骨 4mm	0.3g	無尾目（カエル類）	腸骨	左	破片	1		
							右	破片	1		
					ネズミ亜科	上顎第 1 後臼歯	右	破片	1		
					ハタネズミ亜科	下顎骨	右	破片	1		
						下顎第 1 後臼歯	右	破片	1		
					ネズミ科	上顎第 1 門歯	左	破片	1		
						下顎第 1 門歯	左	破片	1		
							右	破片	2		
						上腕骨	右	遠位端	1		
					哺乳綱	不明		破片	1		
					骨	不明		破片	12		
11	D6－37a－3	46 ④	骨 1mm	0.1g	ネズミ亜科	上顎第 2 後臼歯	右	破片	1		
						歯牙		破片	1		
					ハタネズミ亜科	歯牙		破片	1		
					ネズミ科	上腕骨	右	遠位端	1		
					小型哺乳綱	橈骨		近位端	2		
						中手骨 / 中足骨		略完	1		
						基節骨 / 中節骨		近位端欠	1		
					骨	不明		破片	17		
12	D6－37a－9	105 ①	骨 4mm	0.4g	骨	不明		破片	1		
					残渣				－		0.07g
13	D6－37a－9	105 ②	骨 1mm	0.7g	貝類	殻		破片	2		
					骨	不明		破片	11		
					炭化物			破片	4		
					残渣				－		0.34g

Tab.59　棗塚遺跡骨同定結果（2）

番号	試料		フルイ	重量	種類	部位	左　右	部分	数量	被熱	備考
14	D6－37a－9	105 ③	骨 4mm	0.2g	無尾目（カエル類）	大腿骨		両端欠	1		
					ネズミ亜科	下顎骨	右	破片	1		M1－2 植立
					ハタネズミ亜科	下顎骨	左	破片	1		
					ネズミ科	上腕骨	左	両端欠	1		
						大腿骨	右	遠位端欠	1		
					小型哺乳綱	大腿骨	左	破片	1		
						距骨	左	略完	1		
					哺乳綱	不明		破片	2		
					炭化物			破片	1		
15	D6－37a－9	105 ④	骨 1mm	0.2g	ネズミ科	上顎第 1 門歯	右	破片	1		
						下顎第 1 門歯	左	破片	1		
							右	破片	1		
					ネズミ科？	上顎骨		破片	1		
						下顎骨？		破片	1		
					小型哺乳綱	脛骨・腓骨		両端欠	1		
					哺乳綱	不明		破片	8		
16	D6－37a－10	108 ①	骨 4mm	0.7g	哺乳綱	不明		破片	1		
					骨	不明		破片	7		
					植物遺体				10 ＋		
					焼土				1		
17	D6－37a－10	108 ②	骨 1mm	0.7g	無尾目（カエル類）	前上顎骨	左	破片	1		
					骨	不明		破片	－		0.45g
					炭化物			破片	16		
18	D6－37a－10	108 ③	骨 4mm	0.2g	ネズミ亜科	上顎骨	右	破片	1		M1 植立
						下顎第 1 後臼歯	右	破片	1		
					ネズミ科	上顎第 1 門歯		破片	1		
						踵骨	右	略完	1		
					小型哺乳綱	脛骨	左	両端欠	1		
					哺乳綱	不明		破片	8		
19	D6－37a－10	108 ④	骨 1mm	0.1g	無尾目（カエル類）	上腕骨	右	遠位端	1		
						四肢骨		破片	1		
					ヘビ亜目	椎骨		略完	2		
					タイ科	歯牙（犬歯）		破片	1		
					ネズミ亜科	上顎第 1 後臼歯	右	破片	1		
						上顎第 2 後臼歯	右	破片	1		
					ネズミ科	下顎第 1 門歯	右	破片	1		
						歯牙		破片	1		
						橈骨		近位端	1		
					小型哺乳綱	尾椎		破片	1		
						中節骨		略完	1		
					骨	不明		破片	12		
20	D6－37a－3	216 ①	骨 4mm	0.2g	骨	不明		破片	2		
					植物遺体				1		
21	D6－37a－3	216 ②	骨 1mm	0.1g	貝類	殻		破片	1		
					硬骨魚綱	椎骨		破片	1		
					骨	不明		破片	13		
					残渣				－		0.01g
22	D6－37a－3	216 ③	骨 4mm	0.1g	ネズミ科	上顎第 1 門歯	左	破片	1		
					小型哺乳綱	四肢骨		破片	3		
23	D6－37a－15	128 ①	骨 4mm	1.0g	哺乳綱	不明		破片	2		
					骨	不明		破片	2		
					炭化物			破片	2		
					残渣				－		0.05g
24	D6－37a－15	128 ②	骨 1mm	0.7g	硬骨魚綱	椎骨		破片	2		
					ネズミ亜科	下顎第 3 後臼歯	左	破片	1		
					ネズミ科	下顎第 1 門歯	右	破片	1		
					小型哺乳綱	基節骨		略完	1		
					哺乳綱	不明		破片	16		
					骨	不明		破片	23		
					炭化物			破片	12		
					残渣				－		0.28g
25	D6－37a－15	128 ③	骨 4mm	0.6g	ネズミ亜科	上顎骨	右	破片	1		
						下顎骨	左	破片	1		I1,M1－3 植立
							左	破片	1		
					ネズミ科	上顎第 1 門歯	右	破片	1		
						下顎第 1 門歯	左	破片	2		
						脛骨・腓骨		破片	1		
						踵骨	右	破片	1		
					小型哺乳綱	尾椎		破片	2		
					哺乳綱	不明		破片	2		

Tab.59　棗塚遺跡骨同定結果（3）

番号	試料		フルイ	重量	種類	部位	左　右	部分	数量	被熱	備考
26	D6－37a－15	128 ④	骨 1mm	0.1g	無尾目（カエル類）	四肢骨		破片	1		
					ネズミ亜科	上顎第 1 後臼歯	左	破片	1		
						上顎第 2 後臼歯	左	破片	1		
						下顎第 1 後臼歯	左	破片	1		
						下顎第 3 後臼歯	右	破片	1		
					ネズミ科	下顎第 1 門歯	左	破片	1		
					小型哺乳綱	尾椎		破片	1		
						基節骨		近位端	2		
						中節骨		略完	1		
					哺乳綱	歯牙		破片	1		
						中手骨 / 中足骨		遠位端	1		
					骨	不明		破片	18 ＋		
					残渣				－		0.01g
27	D6－37a－14	129 ①	骨 4mm	0.6g	骨	不明		破片	2		
					植物遺体				10 ＋		
28	D6－37a－14	129 ②	骨 1mm	0.5g	無尾目（カエル類）	上腕骨	左	遠位端	1		
						四肢骨		破片	2		
					ネズミ亜科	上顎第 2 後臼歯	左	破片	1		
						上顎第 3 後臼歯	左	破片	1		
					ネズミ科	第 1 門歯		破片	1		
					小型哺乳綱	肋骨		破片	1		
						上腕骨		遠位端破片	1		
						基節骨 / 中節骨		遠位端欠	1		
					骨	不明		破片	－		0.34g
29	D6－37a－14	129 ③	骨 4mm	0.6g	ネズミ亜科	上顎骨	右	破片	1		M3 植立
						下顎骨	左	破片	1		M1－2 植立
					ネズミ科	橈骨	左	近位端	1		
						尺骨	右	両端欠	1		
					小型哺乳綱	橈骨	右	遠位端欠	1		
					哺乳綱	尾椎		破片	1		
						不明		破片	7 ＋		
30	D6－37a－14	129 ④	骨 1mm	0.1g	無尾目（カエル類）	四肢骨		破片	1		
					モグラ科	上顎第 2 後臼歯	左	破片	1		
					ネズミ亜科	上顎第 3 後臼歯	左	略完	1		
					ハタネズミ亜科	上顎第 1 後臼歯	右	破片	1		
					ネズミ科	上顎第 1 門歯		破片	1		
						下顎第 1 門歯	左	破片	1		
					小型哺乳綱	尾椎		略完	1		
						中手骨 / 中足骨		破片	1		
						中節骨		略完	1		
					骨	不明		破片	20 ＋		
31	D6－37a－5	335 ②	骨 1mm	0.2g	硬骨魚綱	尾椎		破片	1		
						椎骨		破片	1		
						鰭棘等		破片	1		
						鱗		破片	1		
					無尾目（カエル類）	仙骨		破片	1		
						橈骨・尺骨	右	略完	1		
						四肢骨		破片	3		
					ネズミ科	上腕骨		破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	5		
					骨	不明		破片	33 ＋		
					残渣				－		0.02g
32	D6－37a－5	335 ③	骨 4mm	0.1g	ネズミ科	上顎第 1 門歯	右	破片	1		
					小型哺乳綱	距骨	右	略完	1		
						四肢骨		破片	1		
33	D6－37a－5	335 ④	骨 1mm	0.1g	無尾目（カエル類）	尾骨		破片	1		
						上腕骨	右	遠位端	1		
						橈骨・尺骨	左	近位端	1		
						四肢骨		破片	1		
					ヘビ亜目	椎骨		破片	1		
					ネズミ科	上腕骨	左	遠位端	1		
					小型哺乳綱	中節骨		略完	1		
						四肢骨		破片	1		
34	D6－37a－7	358 ①	獣骨 4mm	0.4g	骨	不明		破片	1		
35	D6－37a－7	358 ②	獣骨 1mm	0.3g	ニシン科？	腹椎		破片	1		
					硬骨魚綱	尾椎		破片	1		
					ヘビ亜目	椎骨		破片	1		
					骨	不明		破片	41		
								破片	1	○	
					炭化物			破片	1		
					植物遺体				2		

Tab.59　棗塚遺跡骨同定結果（4）

番号	試料		フルイ	重量	種類	部位	左　右	部分	数量	被熱	備考
36	D6－37a－7	358 ③	獣骨 4mm	0.3g	ネズミ亜科	下顎骨	左	破片	2		M1 植立
					ハタネズミ亜科	下顎骨	左	破片	1		M1 植立
						下顎第 1 後臼歯	右	破片	1		
					ネズミ科	上顎第 1 門歯	右	破片	1		
						下顎第 1 門歯	左	破片	1		
						下顎第 1 門歯	右	破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	3		
37	D6－37a－7	358 ④	魚骨 1mm	0.1g	無尾目（カエル類）	四肢骨		破片	1		
					ヘビ亜目	椎骨		破片	2		
					ネズミ亜科	下顎第 1 後臼歯	左	破片	1		
					ハタネズミ亜科	下顎第 1 後臼歯	左	破片	1		
							右	破片	1		
						下顎第 2 後臼歯	左	破片	1		
					ネズミ科	下顎第 1 門歯	左	破片	3		
					小型哺乳綱	基節骨		略完	2		
					骨	不明		破片	4		
38	D6－37a－1	474－1 ①	骨 1mm	0.3g	ニシン科	腹椎		破片	1		
						尾椎		破片	1		
					サバ属？	尾椎		破片	1		
					無尾目（カエル類）	腸骨	右	破片	2		
					哺乳綱	不明		破片	2		
					骨	不明		破片	48 ＋		
								破片	1	○	
					炭化物			破片	5		
					残渣				－		0.01g
39	D6－37a－1	474－1 ②	骨 1mm	0.1g	無尾目（カエル類）	尾骨		破片	1		
						上腕骨	右	遠位端	1		
					ヘビ亜目	椎骨		破片	1		
					骨	不明		破片	4		
40	D6－37a－8	560－5 ①	骨 10mm	1.0g	哺乳綱	不明		破片	1		
41	D6－37a－8	560－5 ②	骨 4mm	2.5g	哺乳綱	不明		破片	10		
42	D6－37a－8	560－5 ③	骨 1mm	1.0g	小型哺乳綱	中手骨 / 中足骨		遠位端	1		
					哺乳綱	歯牙		破片	1		
						不明		破片	5		
					骨	不明		破片	40 ＋		
								破片	5	○	
					残渣				－		0.06g
43	D6－37a－8	560－5 ④	骨 4mm	0.2g	小型哺乳綱	大腿骨	左	遠位端欠	1		
							右	遠位端欠	1		
44	D6－37a－8	560－5 ⑤	骨 1mm	0.4g	サヨリ属	腹椎		破片	1		
					ネズミ亜科	下顎第 1 後臼歯	右	破片	1		
					ハタネズミ亜科	上顎骨	右	破片	1		
						上顎第 1 後臼歯	左	破片	1		
						上顎第 2 後臼歯	左	破片	1		
						上顎第 2 後臼歯	右	破片	1		
						下顎第 1 後臼歯	右	破片	1		
					ネズミ科	上顎第 1 門歯	左	破片	3		
						上顎第 1 門歯	右	破片	1		
						下顎骨		破片	1		
						下顎第 1 門歯	左	破片	1		
						下顎第 1 門歯	右	破片	2		
						踵骨	右	略完	1		
					小型哺乳綱	尺骨	右	近位端	1		
						中手骨 / 中足骨		近位端欠	1		
						四肢骨		破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	4		
45	D6－37a－6	582－2 ①	骨 4mm	0.1g	哺乳綱	四肢骨		破片	1		
						不明		破片	1		
46	D6－37a－6	582－2 ②	骨 1mm	0.3g	タイ科？	尾椎		破片	1		
					アジ科	尾椎		破片	1		
					硬骨魚綱	尾椎		破片	1		
						終尾椎		破片	1		
						椎骨		破片	1		
								破片	1	○	
						鰭棘等		破片	2		
						不明		破片	3		
					哺乳綱	不明		破片	2		
					骨	不明		破片	13		
					残渣				－		0.02g

Tab.59　棗塚遺跡骨同定結果（5）

番号	試料		フルイ	重量	種類	部位	左　右	部分	数量	被熱	備考
47	D6－37a－6	582－2 ③	骨 1mm	0.1g	ヘビ亜目	椎骨		破片	1		
					ネズミ科	上顎第 1 門歯	右	破片	1		
						下顎第 1 門歯	左	破片	1		
					小型哺乳綱	距骨	右	略完	1		
						四肢骨		破片	1		
					骨	不明		破片	2		
48	D6－37a	585－3 ①	骨 4mm	0.2g	残渣				－		0.09g
49	D6－37a	585－3 ②	骨 1mm	1.0g	スズキ属	第 1 椎骨		破片	2		
					硬骨魚綱	鰭棘等		破片	1		
								破片	2	○	
						不明		破片	4		
					無尾目（カエル類）	椎骨		破片	1		
						上腕骨	右	遠位端破片	1		
						四肢骨		破片	2		
					ネズミ亜科	上顎第 3 後臼歯	左	破片	1		
						下顎第 2 後臼歯	左	破片	1		
					ネズミ科	上腕骨	左	遠位端破片	1		
					小型哺乳綱	尾椎		破片	1		
						肋骨 / 四肢骨		破片	3		
								破片	4	○	
					骨	不明		破片	40		
								破片	13	○	
					炭化物			破片	9		
					残渣				－		0.22g
50	D6－37a	585－3 ③	骨 4mm	0.1g	ハタネズミ亜科	上顎骨	左	破片	1		
51	D6－37a	585－3 ④	骨 1mm	0.3g	ヘビ亜目	椎骨		破片	1		
					モグラ科	上顎第 2 後臼歯	右	破片	1		
					ネズミ亜科	上顎骨	右	破片	1		M3 植立
						上顎骨 / 下顎骨		破片	1		
						上顎第 2 後臼歯	左	破片	1		
						下顎第 3 後臼歯	左	破片	1		
					ハタネズミ亜科	上顎骨		破片	1		
						上顎第 1 後臼歯	左	破片	1		
						上顎第 2 後臼歯	左	破片	2		
						上顎第 1 後臼歯	右	破片	1		
						下顎第 3 後臼歯	左	破片	1		
					ネズミ科	上顎第 1 門歯	左	破片	1 ＋		
						上顎第 1 門歯	右	破片	1		
						下顎第 1 門歯	左	破片	1		
						第 1 門歯		破片	1		
						上腕骨	左	遠位端	1		
					小型哺乳綱	尾椎		破片	2		
						上腕骨		近位端	1		未化骨骨端
						基節骨		近位端	1		
						中節骨		略完	1		
					哺乳綱	四肢骨		破片	1		
					骨	不明		破片	3		
52	D6－37a－2	41－①	獣骨 4mm	0.4g	ニシン科	腹椎		破片	1		
					硬骨魚綱	不明		破片	1		
					鳥綱	足根中足骨		破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	2		
					骨	不明		破片	2		
					残渣				－		0.01g
53	D6－37a－2	41－②	獣骨 1mm	0.1g	硬骨魚綱	尾椎		破片	1		
						鰭棘等		破片	2		
						不明		破片	3		
					鳥綱？	四肢骨		破片	1		
					無尾目（カエル類）	上腕骨	右	破片	1		
						腸骨	右	破片	1		
						四肢骨		破片	2		
					ヘビ亜目	椎骨		破片	1		
					ネズミ科	上顎第 1 門歯	右	破片	1		
						下顎第 1 門歯	右	破片	1		
					骨	不明		破片	5		
								破片	1	○	
					残渣				－		0.07g
54	C6－99a	72 ①	骨 4mm	+g	硬骨魚綱	不明		破片	5		

Tab.59　棗塚遺跡骨同定結果（6）

番号	試料		フルイ	重量	種類	部位	左　右	部分	数量	被熱	備考
55	C6－99a	72 ②	骨 1mm	0.1g	硬骨魚綱	鰭棘等		破片	4		
						不明		破片	3		
					無尾目（カエル類）	指骨		破片	1		
					小型哺乳綱	基節骨 / 中節骨		遠位端	1	○	
					骨	不明		破片	10		
					残渣				－		0.01g
56	C6－99a	220 ①	骨 4mm	0.1g	硬骨魚綱	椎骨		破片	1		
						鱗		破片	1		
						不明		破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	1		
					残渣				－		0.02g
57	C6－99a	220 ②	骨 1mm	0.3g	タイ科	歯牙（臼歯）		破片	1		
					無尾目（カエル類）	椎骨		破片	3		
						上腕骨	左	遠位端	1		
						腸骨	左	破片	1		
						四肢骨		破片	3		
					骨	不明		破片	14		
					炭化物			破片	8		
					残渣				－		0.08g
58	C6－99a	221 ①	骨 4mm	0.2g	ヒラメ	尾椎		破片	1	○	
					硬骨魚綱	不明		破片	1		
					無尾目（カエル類）	距骨・踵骨	左	略完	1		
					骨	不明		破片	2	○	
59	C6－99a	221 ②	骨 1mm	0.1g	硬骨魚綱	不明		破片	4		
					哺乳綱	不明		破片	2		
					骨	不明		破片	2		
					残渣				－		0.00g
60	C6－99a	224 ①	獣骨 4mm	0.3g	哺乳綱	不明		破片	3		
61	C6－99a	224 ②	獣骨 1mm	0.1g	ニシン科	腹椎		破片	1	○	
					アジ科	楯鱗		破片	1		
					硬骨魚綱	鰭棘等		破片	1		
					無尾目（カエル類）	椎骨		破片	1		
						四肢骨		破片	1		
					小型哺乳綱	尾椎		破片	1		
					骨	不明		破片	17 ＋		
62	C6－99a	266 ①	骨 10mm	0.2g	骨	不明		破片	1		
63	C6－99a	266 ②	骨 4mm	0.1g	サバ属？	尾椎		破片	2		
64	C6－99a	266 ③	骨 1mm	0.2g	コハクガイ科	殻		破片	1		
					ニシン科	尾椎		破片	1		
					アジ科	楯鱗		破片	2		
					硬骨魚綱	基底後頭骨		破片	1		
						尾椎		破片	1		
						鰭棘等		破片	10		
						鱗		破片	1		
					無尾目（カエル類）	腸骨	右	破片	1		
					哺乳綱	歯牙		破片	1		
						不明		破片	1		
					骨	不明		破片	17		
					残渣			破片	－		0.04g
65	C6－99a	287 ①	骨 4mm	0.1g	無尾目（カエル類）	尾骨		破片	1		
						橈骨・尺骨	左	近位端	1		
						腸骨	右	破片	1		
						脛骨・腓骨		破片	1		
66	C6－99a	287 ②	骨 1mm	0.2g	カレイ科？	上擬鎖骨	左	破片	1		
					硬骨魚綱	椎骨		破片	1		
						鰭棘等		破片	3		
						不明		破片	1		
					無尾目（カエル類）	上腕骨	右	遠位端	1		
					骨	不明		破片	5		
								破片	1	○	
					炭化物			破片	1		
					残渣				－		0.02g
67	C6－99a	381 ①	骨 4mm	0.1g	硬骨魚綱	鰭棘等		破片	1		
68	C6－99a	381 ②	骨 1mm	0.1g	硬骨魚綱	終尾椎		破片	1		
						下尾骨		破片	1		
						鰭棘等		破片	2		
					無尾目（カエル類）	四肢骨		破片	1		
					骨	不明		破片	4		
					残渣				－		0.01g
69	C6－99a	420－1 ①	骨 10mm	0.2g	硬骨魚綱	不明		破片	1		
					骨	不明		破片	1		
70	C6－99a	420－1 ②	骨 4mm	0.2g	硬骨魚綱	主鰓蓋骨？		破片	1		
						不明		破片	1	○	

Tab.59　棗塚遺跡骨同定結果（7）

番号	試料		フルイ	重量	種類	部位	左　右	部分	数量	被熱	備考
71	C6－99a	420－1 ③	獣骨 1mm	0.7g	アジ科	尾椎		破片	1		
						楯鱗		破片	2		
					サバ属	尾椎		破片	1		
					硬骨魚綱	前上顎骨 / 歯骨		破片	1		
						尾椎		破片	1		
						椎骨		破片	2		
						鰭棘等		破片	3		
						不明		破片	10		
					ヘビ亜目	椎骨		破片	1		
					無尾目（カエル類）	上腕骨	左	遠位端	1		
						四肢骨		破片	1		
					小型哺乳綱	椎骨		破片	1		
						四肢骨		破片	3		
						基節骨		略完	1		
					骨	不明		破片	7		
					残渣				－		0.01g
72	C6－99a	420－2 ①	骨 1mm	0.1g	アジ科？	尾椎		破片	1		
					サバ属	尾椎		破片	1		
					硬骨魚綱	鰭棘等		破片	5		
								破片	1	○	
						不明		破片	1		
					無尾目（カエル類）	距骨・踵骨	左	破片	1		
					小型哺乳綱	四肢骨		破片	1		
					骨	不明		破片	3		
					残渣				－		0.01g
73	C6－99a	435－3 ①	骨 4mm	0.3g	スズキ属	腹椎		破片	1		
					アジ科	腹椎		破片	1		
						楯鱗		破片	1		
					サバ属	尾椎		破片	1		
					硬骨魚綱	前上顎骨		破片	1		
						尾椎		破片	1	○	
						椎骨		破片	1		
						上擬鎖骨	左	破片	1		
						鰭棘等		破片	3		
						不明		破片	6		
					無尾目（カエル類）	大腿骨	右	破片	1		
					骨	不明		破片	1		
74	C6－99a	435－3 ②	骨 1mm	0.7g	フサカサゴ科	腹椎		破片	2		
					アジ科	尾椎		破片	1		
						楯鱗		破片	3		
					カレイ科	第 2 椎骨		破片	1		
					硬骨魚綱	椎骨		破片	2		
						鰭棘等		破片	8		
						不明		破片	10		
					無尾目（カエル類）	腸骨	左	破片	1		
						四肢骨		破片	1		
					ヘビ亜目	椎骨		破片	1		
					小型哺乳綱	尾椎		破片	1		
					骨	不明		破片	28		
					炭化物			破片	3		
					残渣				－		0.01g
75	C6－99a	574－4 ①	骨 10mm	0.5g	骨	不明		破片	1		
76	C6－99a	574－4 ②	骨 4mm	0.1g	硬骨魚綱	鰭棘等		破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	1		
77	C6－99a	475－1 ①	骨 4mm	0.1g	硬骨魚綱	不明		破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	1		
78	C6－99a	475－1 ②	骨 1mm	0.4g	アオザメ属	歯牙		破片	1		
					ニシン科	尾椎		破片	2		
					ニシン科？	尾椎		破片	1	○	
					スズキ属	第 1 椎骨		略完	1		
					アジ科	主上顎骨	右	破片	1		
					硬骨魚綱	後側頭骨	右	破片	1		
						椎骨		破片	3		
								破片	2	○	
						鰭棘等		破片	5		
						不明		破片	6		
					無尾目（カエル類）	尾骨		破片	1		
						橈骨・尺骨	右	近位端	1		
						四肢骨		破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	3		
						不明		破片	1	○	
					骨	不明		破片	22		
					残渣				－		0.03g

Tab.59　棗塚遺跡骨同定結果（8）

番号	試料		フルイ	重量	種類	部位	左　右	部分	数量	被熱	備考
79	C6－99a	478－2 ①	骨 4mm	0.3g	タイ科？	尾椎		破片	2		
					硬骨魚綱	不明		破片	3		
					ネズミ科？	上腕骨？		破片	1		
					骨	不明		破片	1		
80	C6－99a	478－2 ②	骨 1mm	0.2g	アジ科	楯鱗		破片	2		
					硬骨魚綱	咽頭骨？		破片	1		
						椎骨		破片	2		
						鰭棘等		破片	7		
						不明		破片	18		
					骨	不明		破片	7		
								破片	3	○	
81	C6－99a	484－3 ①	骨 4mm	0.2g	クロダイ属	前上顎骨	左	破片	1		
					タイ科	前上顎骨 / 歯骨		破片	1		
					フグ科	歯骨	右	破片	1		
					硬骨魚綱	不明		破片	1		
82	C6－99a	484－3 ②	骨 1mm	0.2g	アジ科	楯鱗		破片	1		
					硬骨魚綱	尾椎		破片	1		
						椎骨		破片	1		
						不明		破片	4		
					鳥綱？	四肢骨		破片	1		
					無尾目（カエル類）	椎骨		破片	1		
						四肢骨		破片	1		
					骨	不明		破片	12 ＋		
								破片	1	○	
					炭化物			破片	1		
					残渣				－		0.03g
83	C6－99a	485－1 ①	骨 1mm	0.3g	サメ・エイ類	椎骨		略完	1		
					スズキ属	第 1 椎骨		略完	1		
					アジ科	尾椎		破片	2		
						楯鱗		破片	1		
					硬骨魚綱	尾椎		破片	1		
						椎骨		破片	1		
						鰭棘等		破片	15		
						不明		破片	8		
					小型哺乳綱	四肢骨		破片	2		
					骨	不明		破片	21 ＋		
84	C6－99a	485－1 ②	骨 4mm	0.1g	タイ科？	前上顎骨 / 歯骨		破片	1	○	
					硬骨魚綱	尾椎		破片	1	○	
						椎骨		破片	1	○	
						不明		破片	1		
					骨	不明		破片	2	○	
					残渣				－		0.01g
85	D6－59a	9－1 ①	骨 4mm	0.2g	硬骨魚綱	不明		破片	1		
86	D6－59a	9－1 ②	骨 1mm	0.2g	ニシン科？	尾椎		破片	1		
					アジ科	尾椎		破片	1		
					アジ科？	尾椎		破片	1		
					硬骨魚綱	鰭棘等		破片	2		
						不明		破片	5		
					ヘビ亜目	椎骨		破片	2		
					ネズミ科	橈骨	左	略完	1		
					小型哺乳綱	四肢骨		破片	2		
					骨	不明		破片	5		
								破片	1	○	
					残渣				－		0.00g
87	D6－59a	333 ①	骨 4mm	0.1g	スズキ属？	肩甲骨	右	破片	1		
					アジ科	楯鱗		破片	1		
					硬骨魚綱	上舌骨	左	破片	1		
						不明		破片	1		
					骨	不明		破片	3		
88	D6－59a	333 ②	骨 1mm	0.1g	アジ科	楯鱗		破片	1		
					無尾目（カエル類）	四肢骨		破片	1		
					骨	不明		破片	9		
								破片	1	○	
					残渣				－		0.01g
89	D6－59a	404 ①	骨 4mm	0.3g	硬骨魚綱	擬鎖骨		破片	1		
						不明		破片	8		
					哺乳綱	不明		破片	1		
90	D6－59a	404 ②	骨 1mm	0.1g	硬骨魚綱	鰭棘等		破片	4		
						鱗		破片	5		
					骨	不明		破片	13		
					残渣				－		0.03g
91	D6－59a－9	404 ③	骨 4mm	+g	無尾目（カエル類）	大腿骨		両端欠	1		

Tab.59　棗塚遺跡骨同定結果（9）

番号	試料		フルイ	重量	種類	部位	左　右	部分	数量	被熱	備考
92	D6－59a	407 ①	骨 4mm	0.1g	小型哺乳綱	四肢骨		破片	2		
					骨	不明		破片	6		
93	D6－59a	407 ②	骨 1mm	0.1g	スズキ属	第 1 椎骨		破片	1	○	
					アジ科	楯鱗		破片	1		
					硬骨魚綱	不明		破片	2		
					無尾目（カエル類）	橈骨・尺骨	左	近位端	1		
					骨	不明		破片	7		
					残渣			－			0.01g
94	D6－59a	435－1 ①	骨 1mm	0.3g	アジ科	楯鱗		破片	1		
					サバ属	腹椎		破片	1		
					硬骨魚綱	椎骨		破片	4		
						鰭棘等		破片	6		
						不明		破片	7		
					無尾目（カエル類）	肩甲骨	左	破片	1		
						四肢骨		破片	2		
					ヘビ亜目	椎骨		破片	3		
					骨	不明		破片	18		
					残渣			－			0.01g
95	D6－59a	435－1 ②	骨 1mm	+g	ネズミ科	第 1 門歯		破片	1		
96	D6－59a	483－3 ①	獣骨 1mm	0.2g	ニシン科	腹椎		破片	3		
					硬骨魚綱	椎骨		破片	1		
						鰭棘等		破片	4		
						不明		破片	4		
					無尾目（カエル類）	肩甲骨	左	破片	1		
						四肢骨		破片	1		
					骨	不明		破片	5		
97	D6－59a	483－3 ②	獣骨 4mm	0.2g	哺乳綱	不明		破片	1		
98	D6－59a	577－2 ①	骨 1mm	0.3g	硬骨魚綱	椎骨		破片	1		
								破片	1	○	
						鰭棘等		破片	4		
						不明		破片	2		
					無尾目（カエル類）	椎骨		破片	2		
						橈骨・尺骨	右	遠位端	1		
						四肢骨		破片	1		
					ヘビ亜目	椎骨		略完	1		
					小型哺乳綱	四肢骨		破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	2		
					骨	不明		破片	20		
								破片	1	○	
99	D6－59a	582－3 ①	骨 4mm	0.1g	硬骨魚綱	椎骨		破片	1		
100	D6－59a	582－3 ②	骨 1mm	0.2g	硬骨魚綱	椎骨		破片	6		
						不明		破片	4		
					哺乳綱	四肢骨		破片	1		
						不明		破片	1	○	
					骨	不明		破片	4		
								破片	4	○	
					炭化物			破片	2		
101	D6－59a	575－2 ①	骨 4mm	0.2g	無尾目（カエル類）	椎骨		略完	1		
					哺乳綱	不明		破片	1		
102	D6－59a	575－2 ②	骨 1mm	0.2g	硬骨魚綱	椎骨		破片	1		
						不明		破片	6		
					無尾目（カエル類）	上腕骨	左	遠位端	1		
					哺乳綱	不明		破片	1		
					骨	不明		破片	8		
103	D6－59a－8	585－2 ①	骨 4mm	0.2g	硬骨魚綱	椎骨		破片	1		
					哺乳綱	中節骨		略完	1		
104	D6－59a－8	585－2 ②	骨 1mm	0.2g	スズキ属	肩甲骨	左	破片	1		
					アジ科	楯鱗		破片	1		
					タイ科？	腹椎		破片	1		
					硬骨魚綱	腹椎		破片	1		
						下尾骨		破片	1		
						鰭棘等		破片	3		
						不明		破片	4		
					ヘビ亜目	椎骨		破片	1		
					哺乳綱	四肢骨		破片	1		
					骨	不明		破片	5		
105	D6－59a－8	585－2 ③	骨 4mm	0.2g	ネズミ亜科	下顎骨	左	破片	1		M2 植立
					小型哺乳綱	頭蓋骨		破片	1		
106	D6－59a－8	585－2 ④	骨 1mm	0.1g	硬骨魚綱	椎骨		破片	1		
					哺乳綱	不明		破片	1		
					骨	不明		破片	5		
－	C6－99a	435－3	土器		土器			破片	1		

4. 考察

今回検出された中でコハクガイ科は、陸産の微小な貝類である。おそらくは、周辺に棲息していたものに由来するのであろう。カエル類、ヘビ亜目、哺乳綱のモグラ科・ネズミ亜科・ハタネズミ亜科なども、採取されたものでなく、周辺に棲息していたものが遺構の埋積する過程において混入したと考えられる。

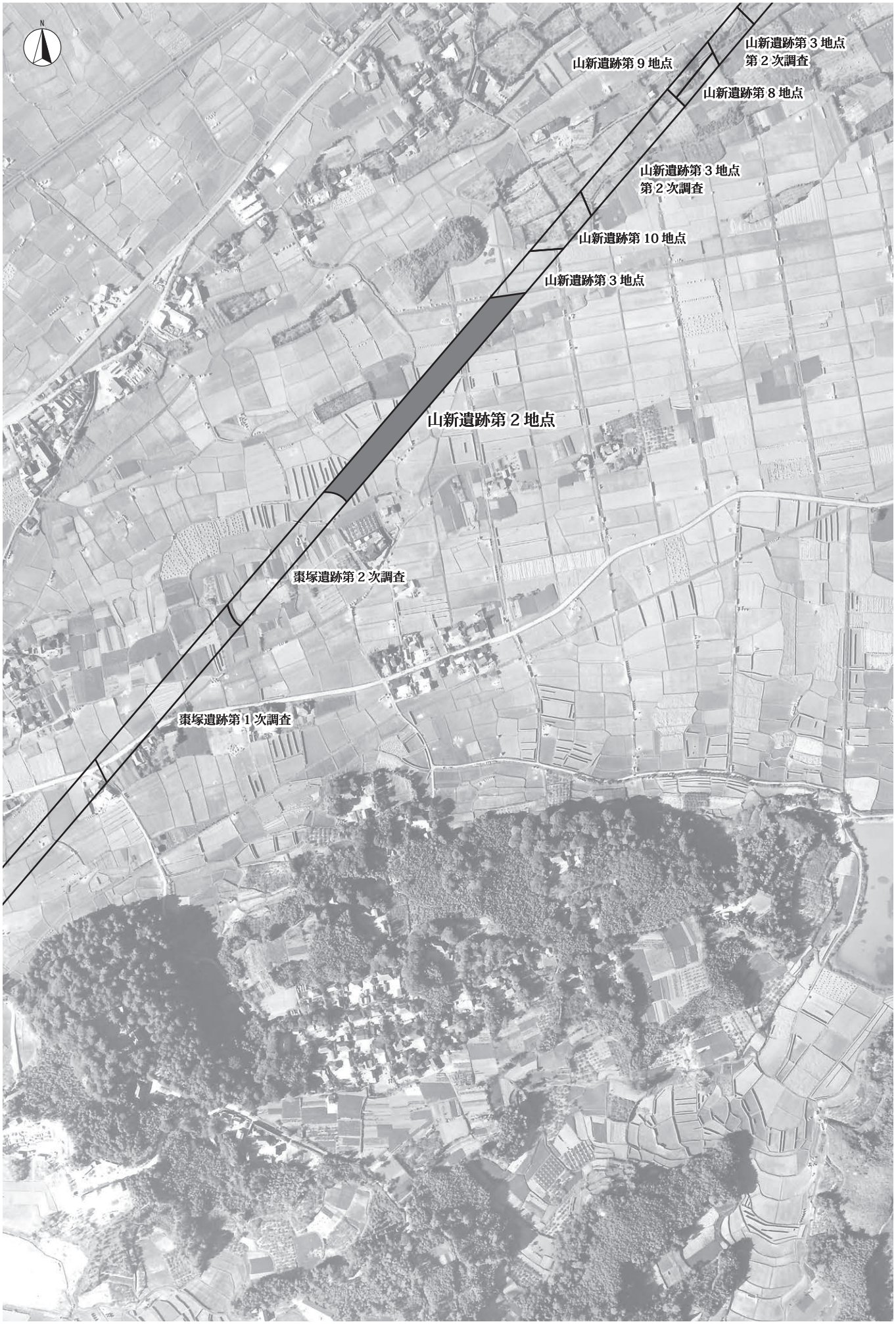
一方、魚類では、アオザメ属、ニシン科、サヨリ属、フサカサゴ科、スズキ属、アジ科、クロダイ属、サバ属、ヒラメ、カレイ科、フグ科が確認される。これらの種類は、食料資源等として周囲の海域において採取されたのであろう。これらの中には焼けた骨もみられ、食用後に焼かれ破棄されたものも含まれている。これら魚類の生態性をみると、アオザメ属が外洋性、ニシン科・サヨリ属・アジ科・クロダイ属・サバ属が沿岸域に、フサカサゴ科が岩礁域に、スズキ属が外洋水の影響を受ける水域～内湾・河川内に、ヒラメ・カレイ科が沿岸の砂泥地等の海底に棲息する。また、フグ科は海水域や汽水域、一部淡水域で生活する。このように様々な環境に生育する。また、アオザメ属やサメ・エイ類を除く種類は骨の大きさが小さいものが多い。このことから、大半は大型魚でなかったことが想像される。以上のことを考えると、銛などよりも、網あるいは釣針などを使った漁法が中心であった可能性がある。なお、種類を明らかにできなかったが少量ながら検出される鳥類も中には焼けた骨が検出されており、食料資源として利用されていたことが想像される。

ところで、検出される種類は、地点ごとに傾向が読み取れる（Tab.60）。すなわち、魚類は、C6-99aで最も多く、次いでD6-59aで検出され、D6-37aが最も少ない。カエル類は、C6-99a、D6-37aで多く、次いでD6-59aで検出される。ヘビ類は、D6-37aで多く検出される。哺乳綱は、D6-37aで最も多く、C6-99aやD6-59aではほとんど検出されない。また、各種類の最小個体数をTab.61に示す。魚類は、C6-99aで11個体、D6-37aで5個体、D6-59aで4個体である。カエル類は、C6-99aで2個体、D6-37aで5個体、D6-59aで2個体である。また、哺乳綱の最小個体数は、モグラ類がD6-37aで1個体、ネズミ亜科がD6-37aで5個体、D6-59aで1個体、ハタネズミ亜科がD6-37aで4個体である。このようにしてみると、D6-37aやD6-59aは、魚類も検出されるが、それ以外のカエル類や小型哺乳類が多い。食料資源として活用されていた魚類は、C6-99aに集中している。集落との位置関係、他の地点よりも廃棄しやすい状態にあったなどのことが考えられる。

Tab.61　棗塚遺跡動物遺体最小個体数

	C6-99a		D6-37a		D6-59a		合計
コハクガイ科	1	殻	−		−		1
アオザメ属	1	歯牙	−		−		1
ニシン科	1	尾椎	1	腹椎	1	腹椎	3
サヨリ属	−		1	腹椎	−		1
フサカサゴ科	1	腹椎	−		−		1
スズキ属	2	第1椎骨	2	第1椎骨	1	第1椎骨	5
アジ科	1	右主上顎骨	1	尾椎・楯鱗	1	尾椎・楯鱗	3
クロダイ属	1	左前上顎骨	−		−		1
サバ属	1	尾椎	−		1	腹椎	2
ヒラメ	1	尾椎	−		−		1
カレイ科	1	第2椎骨	−		−		1
フグ科	1	右歯骨	−		−		1
カエル類	2	左上腕骨・左右腸骨	5	右上腕骨	2	左肩甲骨	9
ヘビ亜目	1	椎骨	1	椎骨	1	椎骨	3
鳥類	1	四肢骨	1	足根中足骨	−		2
モグラ科	−		1	左右上顎第2後臼歯	−		1
ネズミ亜科	−		5	左下顎骨	1	左下顎骨	6
ハタネズミ亜科	−		4	右下顎第1後臼歯	−		4

写真図版



姉崎周辺空中写真（昭和 36 年撮影）

0　200m
（1／5,000）

A区全景　南西から

B区西半部全景　北東から

B区東半部全景　北東から

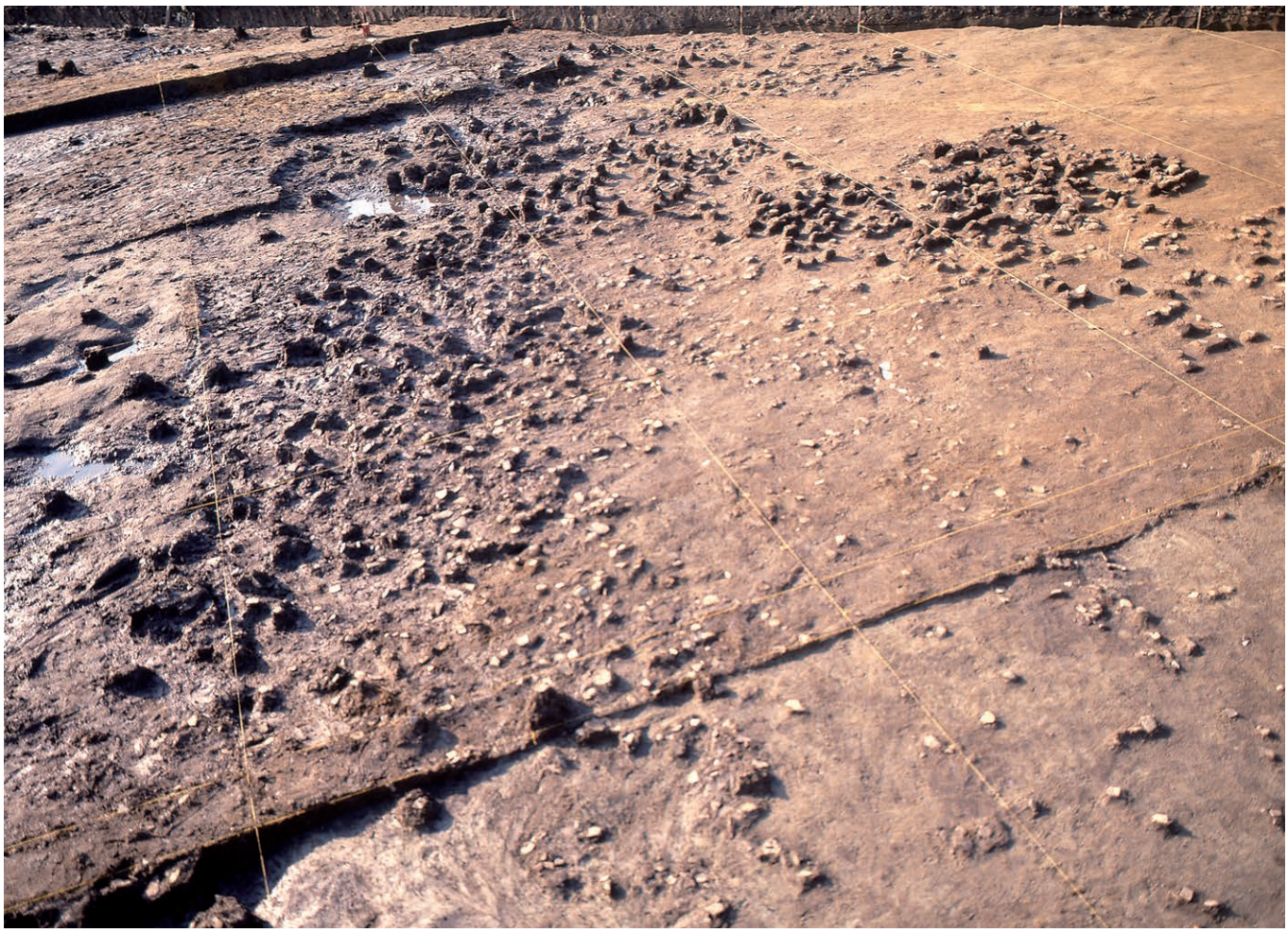
C区全景　北東から

D区全景　南西から

D区浅谷部検出状況　西から

D区浅谷部検出状況（17R-49付近） 南から

D区浅谷部南部包含層調査風景（18R-65付近）



D区浅谷部北岸遺物検出状況

D区浅谷部遺物検出状況

D区浅谷部遺物検出状況（18R-45付近）（土器12-1他）

D区浅谷部遺物検出状況（18R-56付近）

D区浅谷部堆積状況（18R-11付近）南から

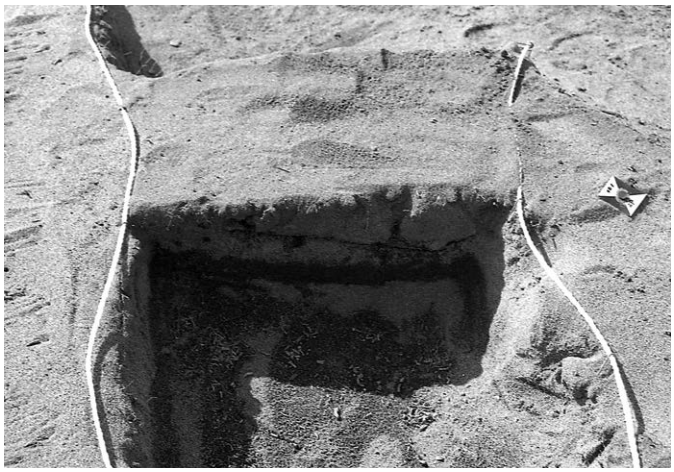
D区浅谷部堆積状況（17R-85付近）東から

D区浅谷部堆積状況（調査区南東壁面）　北西から

D区浅谷部完掘状況全景

A区001号付近　遺物出土状況

A区001号


A区001号　土層断面

A区002号　遺物出土状況

A区002号　遺物出土状況

A区002号・003号　遠景

A区004号　遺物出土状況（上層）

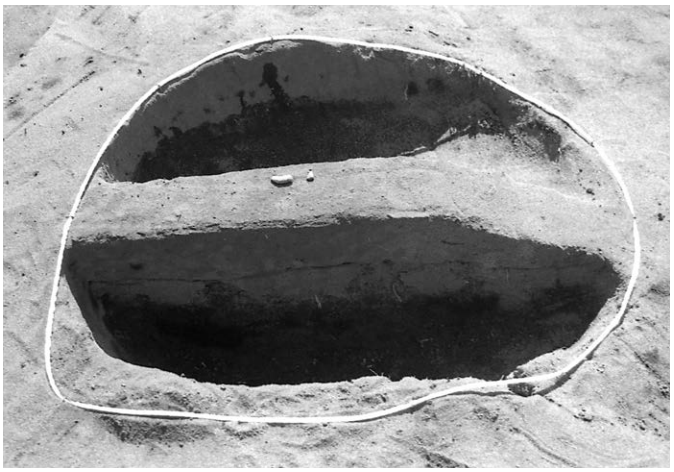
A区004号　遺物出土状況（下層）

A区004号　南壁面

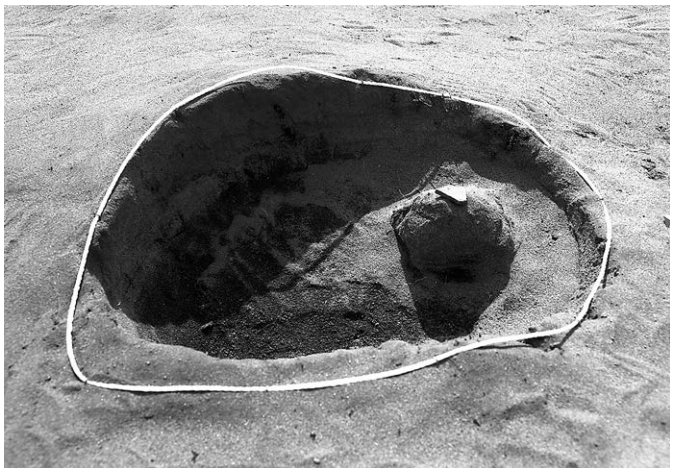
A区004号　遺物出土状況

A区004号　遺物出土状況

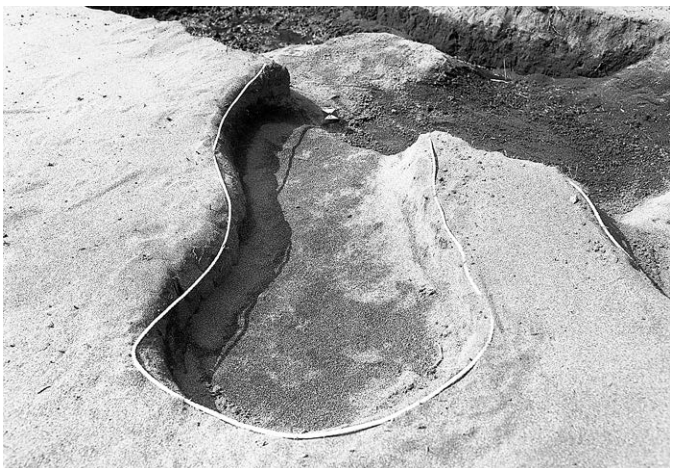
A区004号　完掘状況



A区005号　土層断面

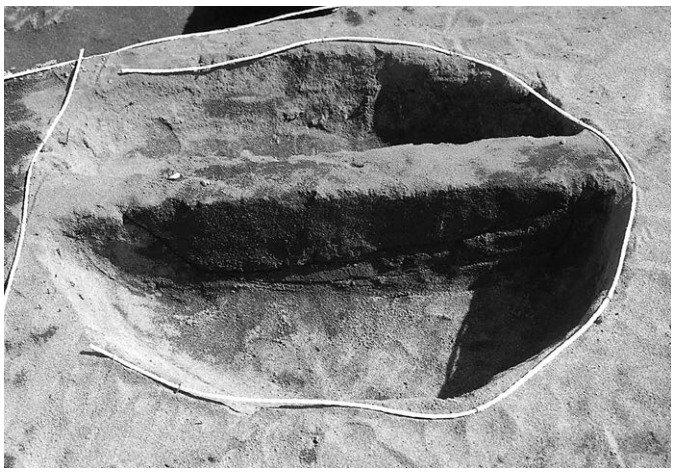


A区005号　遺物出土状況



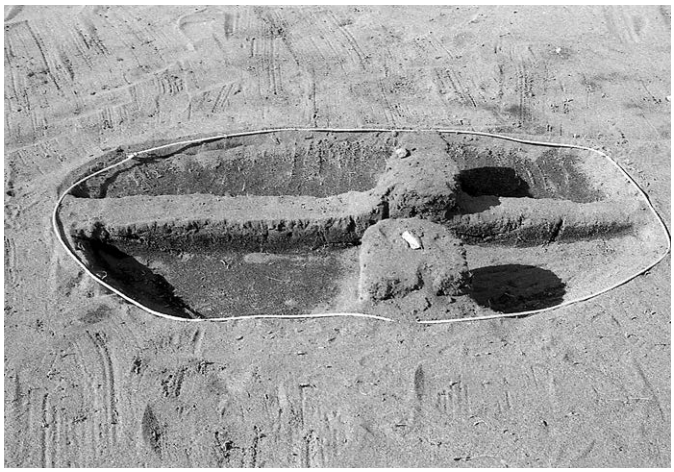
A区006号　完掘状況

A区006号　土層断面



A区007号　土層断面

A区007号　完掘状況



A区008号　土層断面及び遺物出土状況

A区008号　遺物出土状況

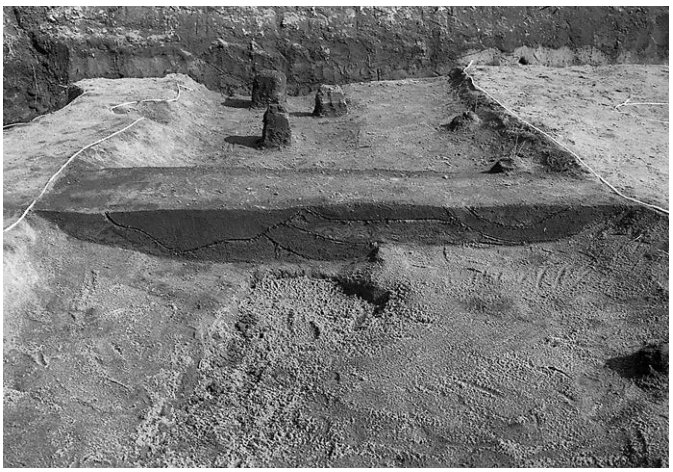
A区010号　土層断面

A区004号・009号　遺物出土状況

A区007号・010号　完掘状況

A区011号　土層断面

B区001号　遺物出土状況



B区001号　土層断面

B区001号　土層断面

B区001号　土層断面

B区001号　土層断面

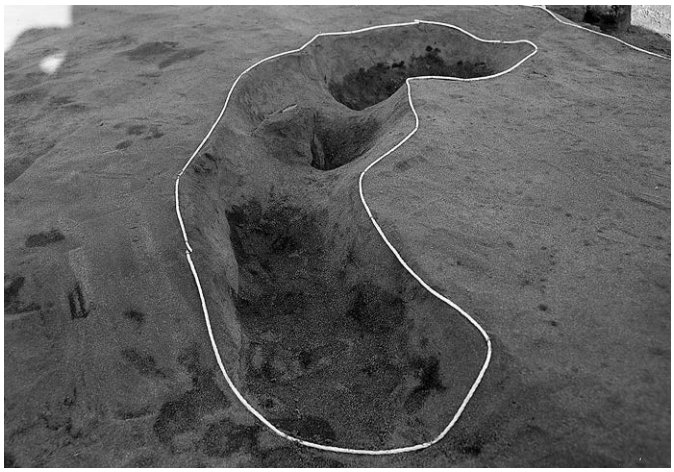
B区002号　土層断面

B区002号　遺物出土状況

B区002号　遺物出土状況

B区003号　遺物出土状況

B区003号　土層断面及び遺物出土状況

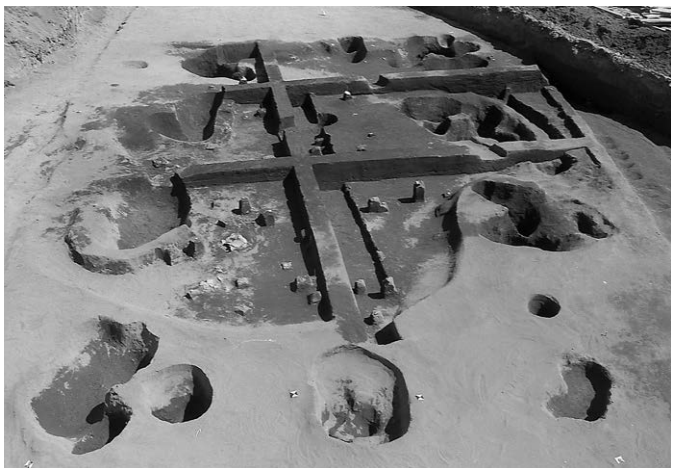


B区004号　遺物出土状況

B区004号　遺物出土状況

B区005号　完掘状況

B区東半部　遺構検出状況

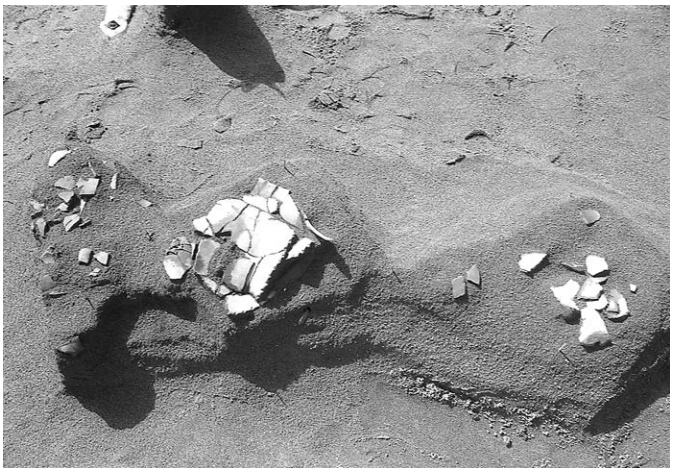


B区014号完掘状況及び008号土層断面

B区東半部　全景

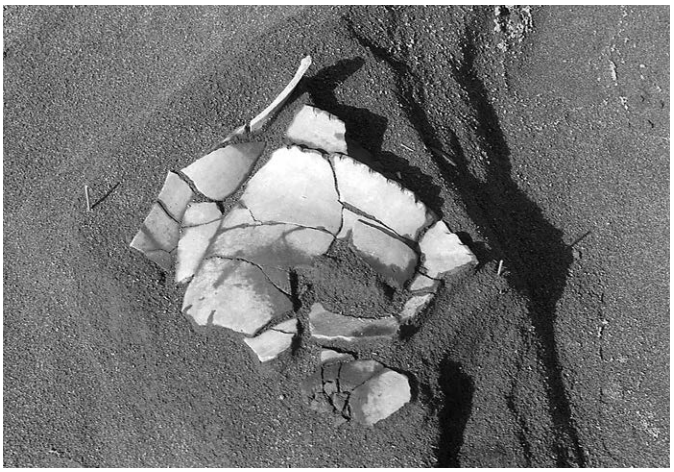
B区調査風景

B区008号・021号　土層断面



B区008号　遺物出土状況

B区008号　遺物出土状況



B区008号　遺物出土状況

B区008号　遺物検出作業風景

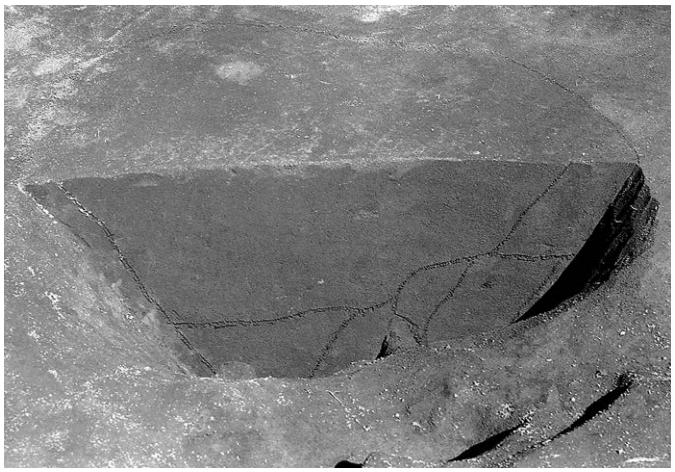
B区008号　遺物出土状況

B区011号　完掘状況

B区014号全景　北から

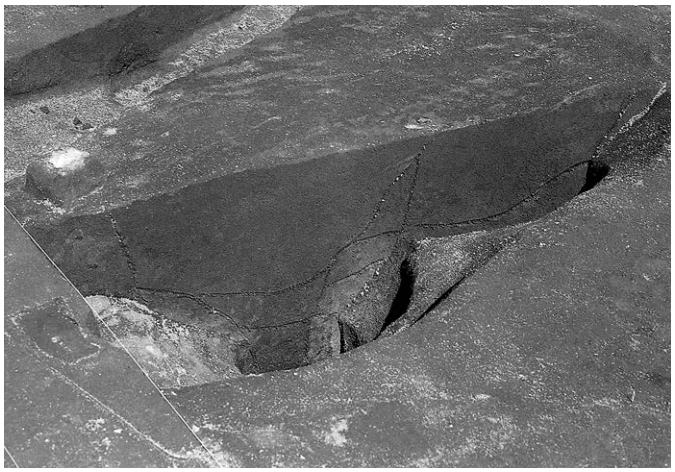
B区014号ピット2　土層断面

B区014号ピット3　土層断面



B区014号ピット8　土層断面

B区014号ピット9　土層断面



B区014号ピット9　土層断面

B区014号ピット10　土層断面

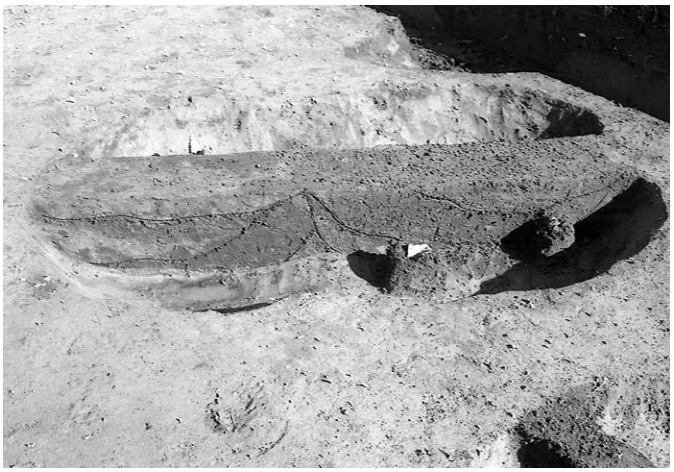
B区022号　完掘状況

B区022号　遺物出土状況

B区022号　遺物出土状況

B区022号　遺物出土状況

C区　作業風景


C区001号　土層断面

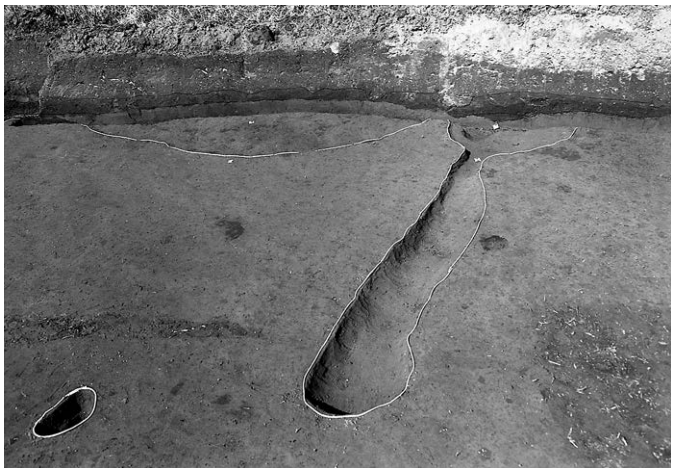
C区002号　土層断面

C区001号・002号　遺物出土状況

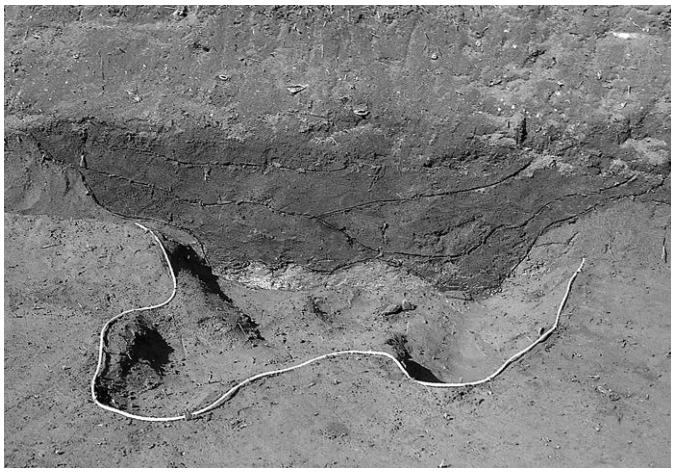
C区003b号　土層断面

C区003b号　土層断面

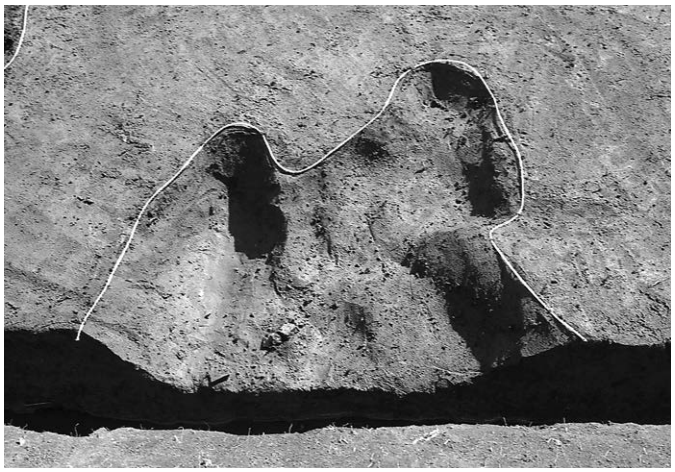
C区004号　土層断面



C区004号・005号　完掘状況



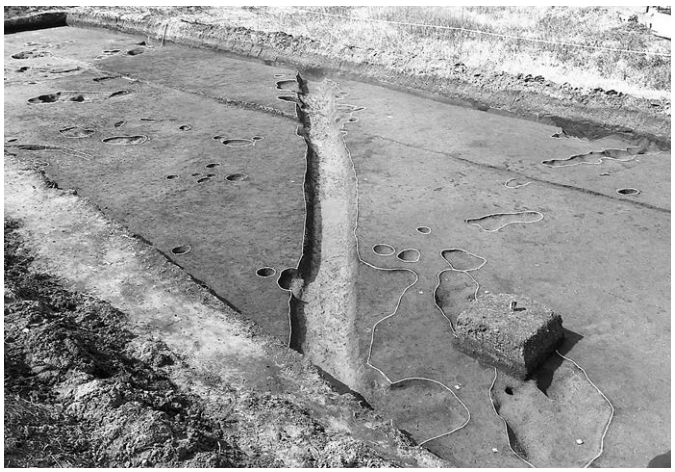
C区007号・008号　土層断面



C区007号・008号　完掘状況

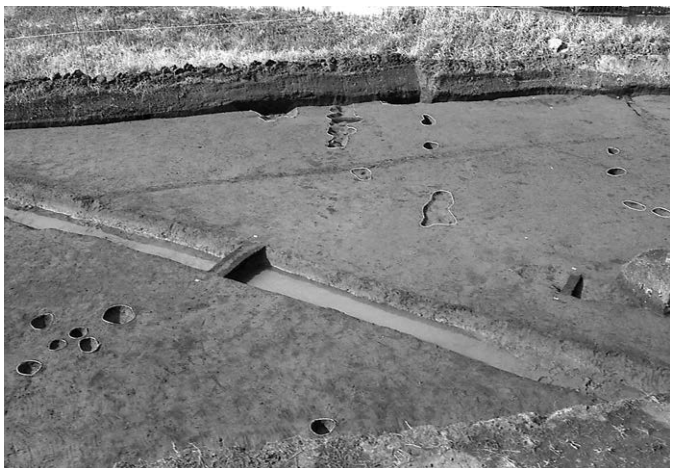
C区009号　土層断面

C区009号　完掘状況



C区010号周辺　遠景

C区010号　土層断面

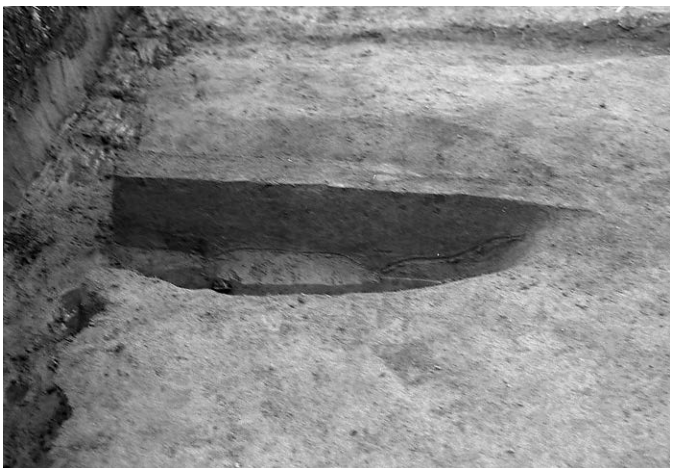

C区010号　遠景

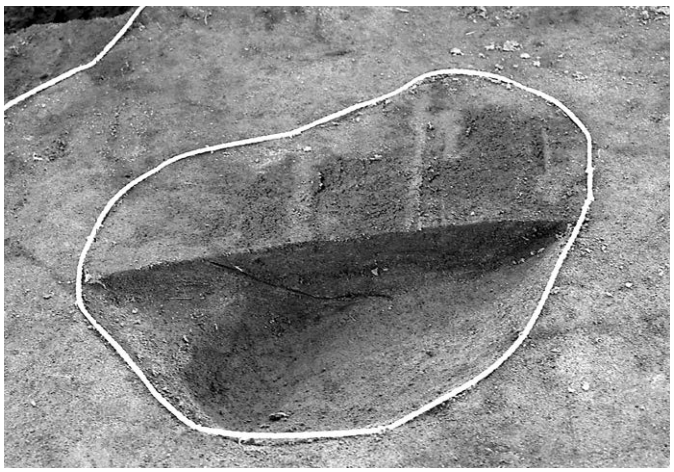
C区010号　土層断面

C区010号　土層断面

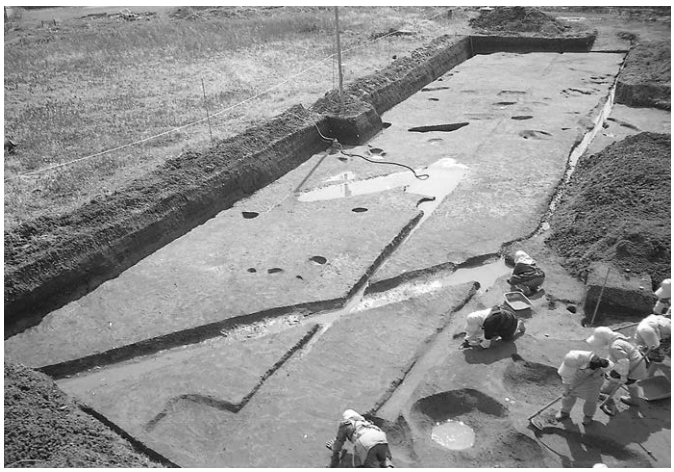
C区010号　土層断面

C区010号　完掘状況

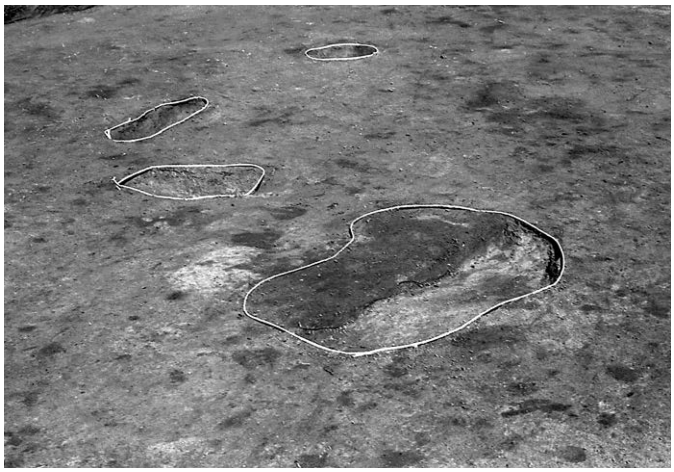

C区016号　土層断面


C区017号　土層断面

C区025号　遠景



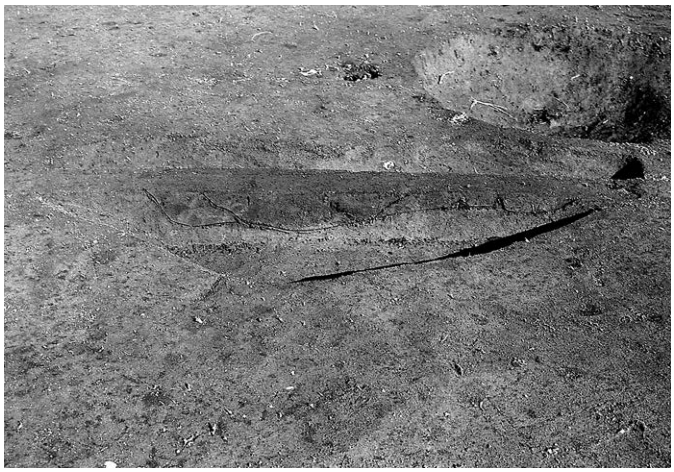
C区　作業風景



C区025号　近景

C区025号周辺　遠景

C区026号　完掘状況



C区026号　土層断面

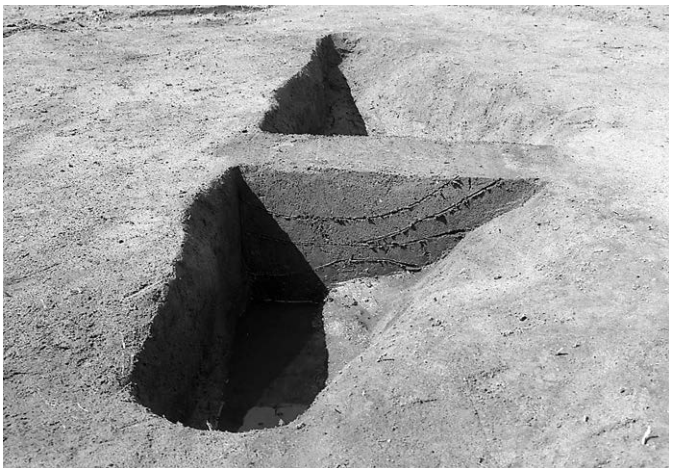
C区027号　土層断面

C区030号　完掘状況

C区グリッド21O-31付近　完掘状況

C区035号　土層断面

C区036号　土層断面


C区037号　土層断面

C区037号　土層断面

C区038号　遺物出土状況

C区038号　土層断面

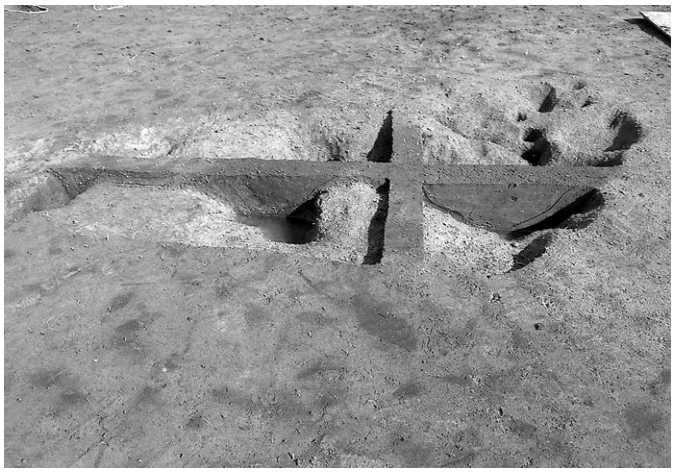
C区050号付近　遠景

C区001号～003号・026号・027号　遺物出土状況

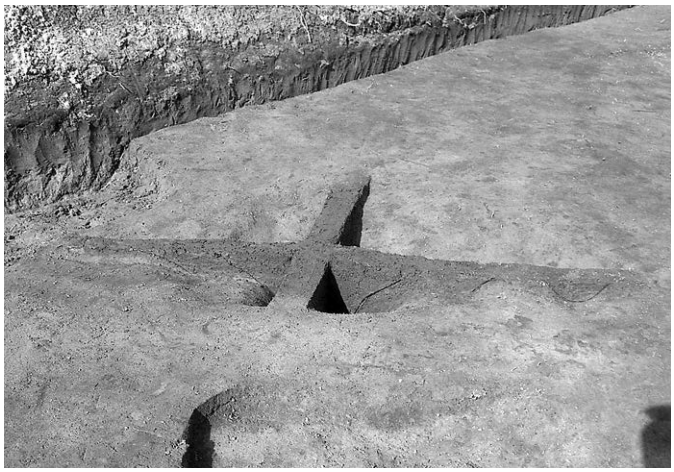
C区006号～008号　完掘状況

C区016号・017号・062号　土層断面

C区062号ピット8　土層断面



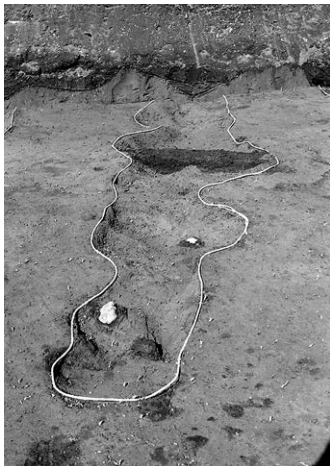
C区062号ピット1　土層断面



C区062号ピット5　土層断面

C区062号ピット7　完掘状況

C区005号　土層断面

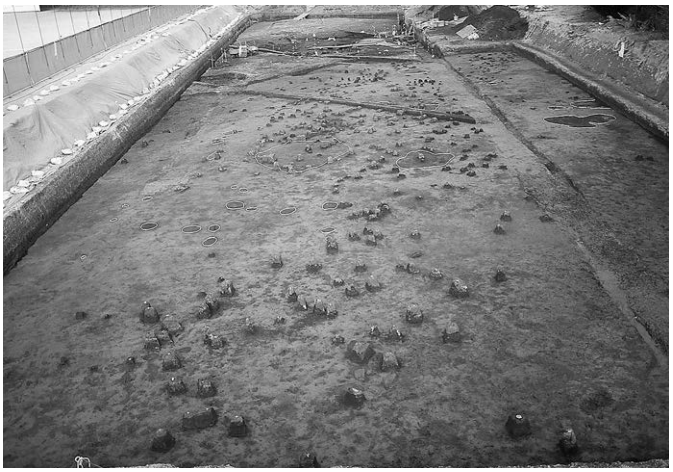


C区006号　遺物出土状況

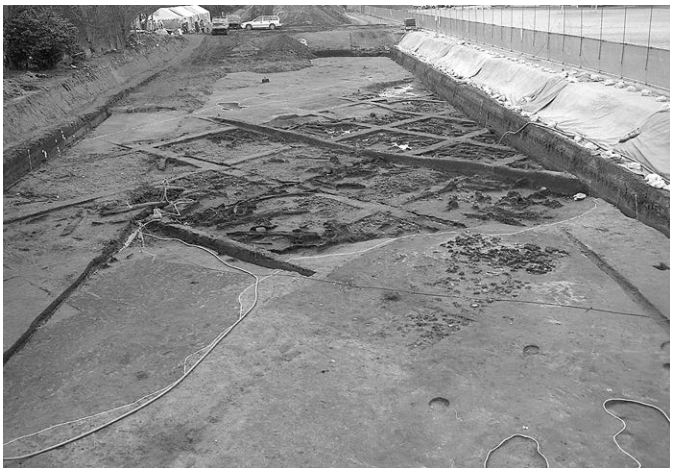
D区浅谷部　全景

D区　作業風景

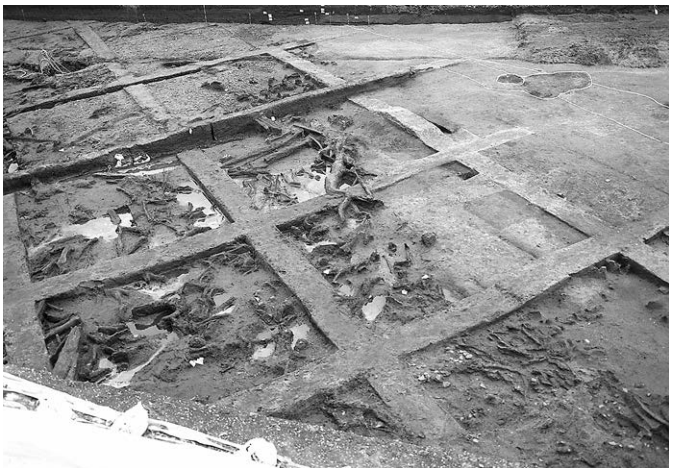
D区　遺構検出状況



D区　遺構検出状況



D区浅谷部　検出状況



D区浅谷部　検出状況

D区包含層　作業風景

D区包含層　動物骨出土状況

D区包含層　土器出土状況

D区包含層　土器出土状況

D区包含層　土器出土状況

D区包含層　土器出土状況

D区包含層　土器出土状況（18R-53）

D区001号　遠景

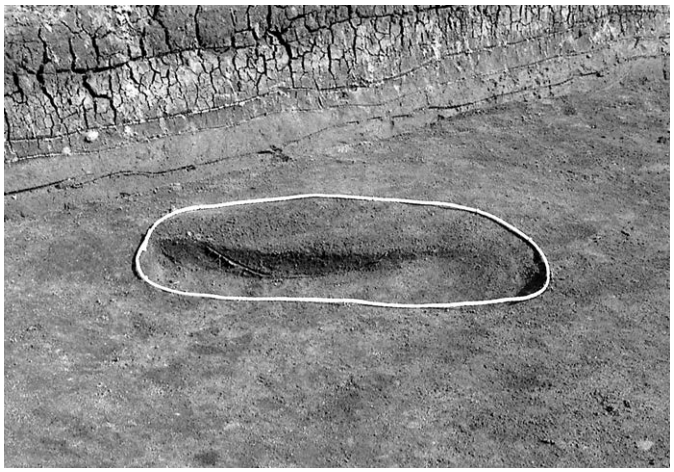
D区003号・004号　遺物出土状況

D区003号・004号　土層断面及び遺物出土状況

D区003号・004号　完掘状況

D区005号・006号　土層断面及び遺物出土状況

D区005号・006号　遺物出土状況


D区009号　土層断面

D区010号　土層断面

D区　確認調査作業風景

明神小学校遺跡見学会（2000年）

ラジコンヘリ航空写真撮影作業

D 区包含層 1－68

D 区包含層 17c－1

D 区包含層 13－1

D 区包含層 17a－1

D 区包含層 17e－1

D 区包含層 21－2

D 区包含層 21－1

竪穴建物跡 B 区 008 号－1

竪穴建物跡 B 区 008 号－2

竪穴建物跡 B 区 008 号－4

D 区包含層

早期

早期 -1

早期 -2

早期 -3

早期 -4

早期 -8

早期 -12

早期 -19

早期 -20

後期中葉

後期 -3

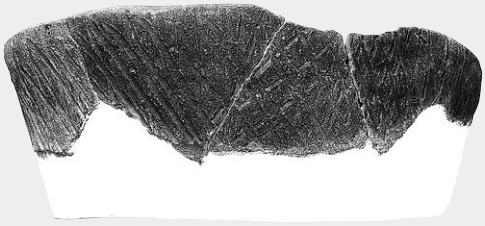
後期 -4

後期 -6

後期 -5

後期 -7

後期 -8


後期 -9

後期 -10

後期 -11

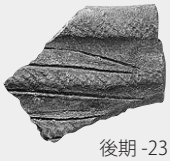
後期 -12

後期 -13

後期 -16

後期 -20

後期 -22


後期 -23

後期 -24

D 区包含層　1 類

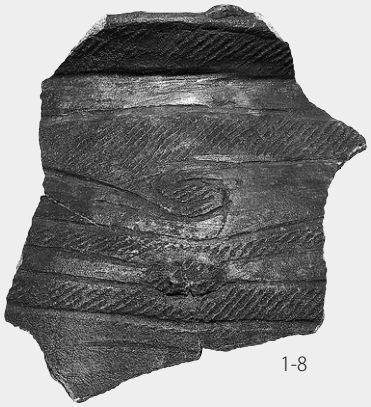
1-1

1-4

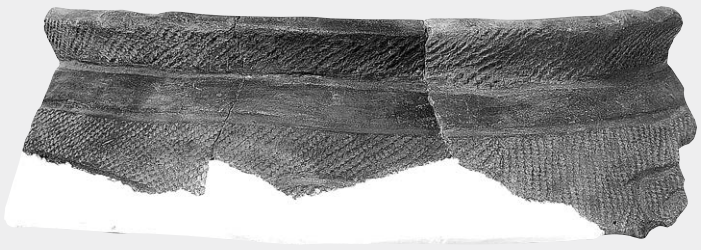
1-5

1-6

1-7



1-8

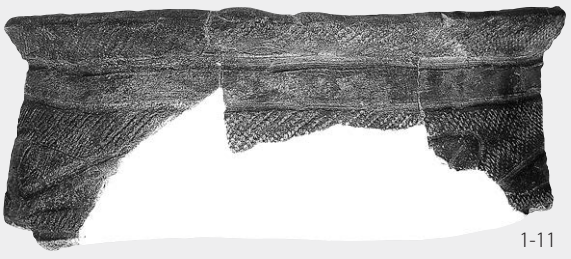


1-9

D区包含層　1類

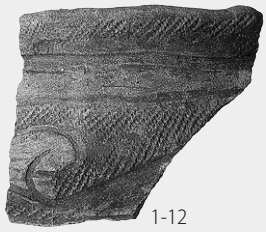
1-3

1-10



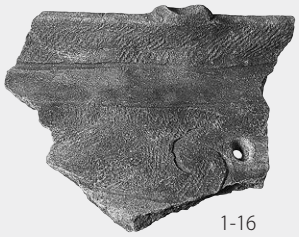
1-11

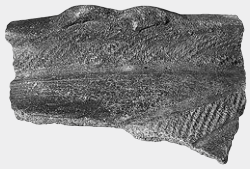
D区包含層　1類


1-12

1-13

1-14


1-16

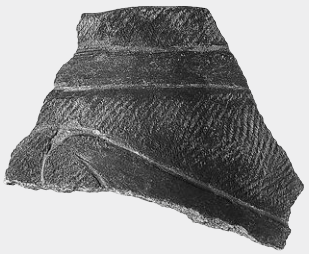

1-17

1-18

1-19

1-20

1-21

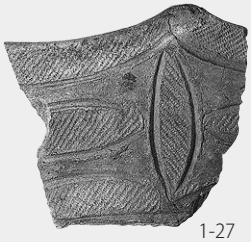

1-22

1-23

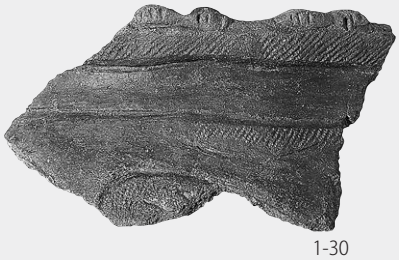
1-24

1-25

1-26


1-27

1-28

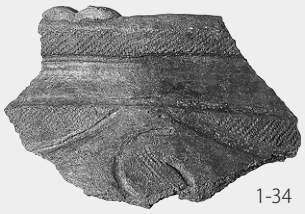

1-30

1-31

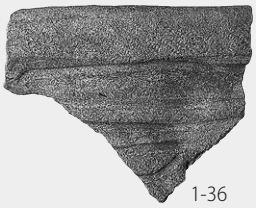
D 区包含層　1 類

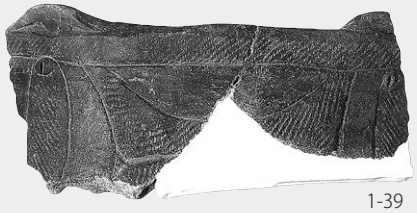
1-32

1-33

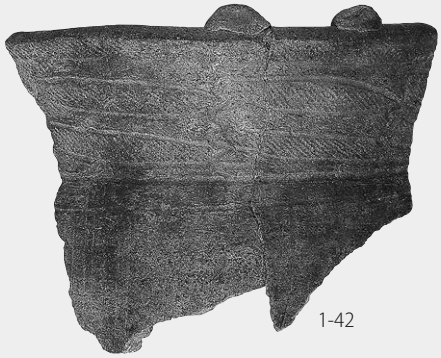

1-34

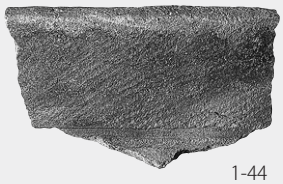
1-35


1-36


1-39

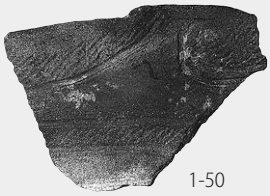
1-41


1-42


1-44

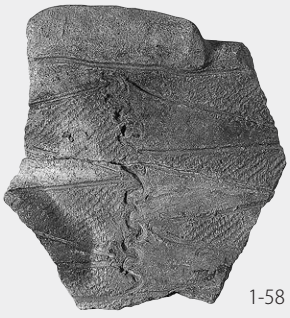
1-46

1-47


1-50

1-51

1-52


1-58

1-61

1-62

1-64

1-66

D 区包含層　1 類

1-71

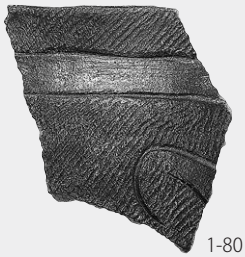
1-73

1-75

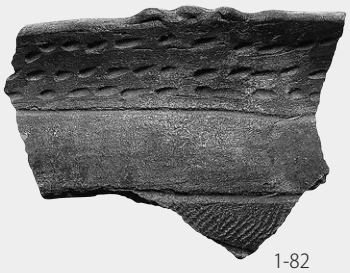
1-77

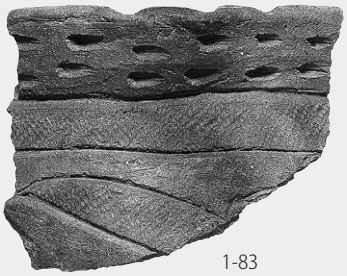
1-78

1-79


1-80

1-81

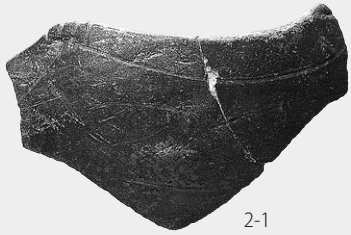

1-82


1-83

1-84

1-85

D 区包含層　2 類


2-1

2-3

D 区包含層　2 類

2-4

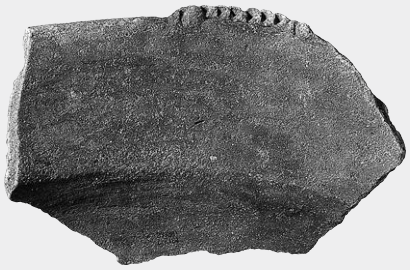
2-5

2-6

2-7

2-9

2-10



2-11

2-12

D 区包含層　3 類

3-1

3-2

3-3

3-4

3-5

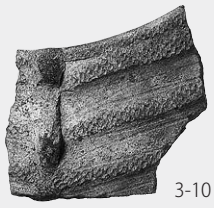
D区包含層　3類

3-6

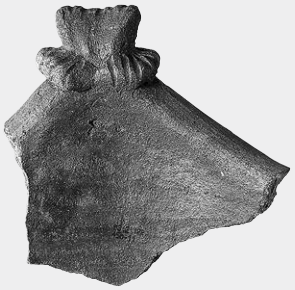
3-7

3-8

3-9


3-10

3-11


3-12

3-13

3-14

3-15

3-16

3-17

3-18

D 区包含層　3 類

3-19

3-20

3-21

3-22

3-23

3-24

3-25

3-26

3-27

3-28

3-29

3-30

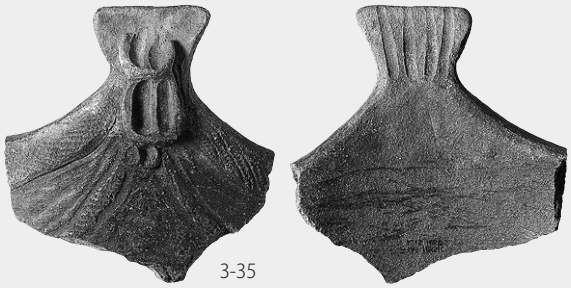
3-31

3-32

3-33

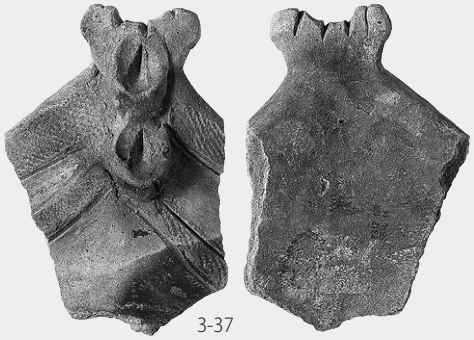
3-34

D 区包含層　3 類

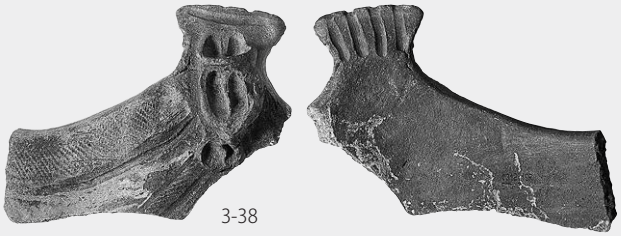


3-35

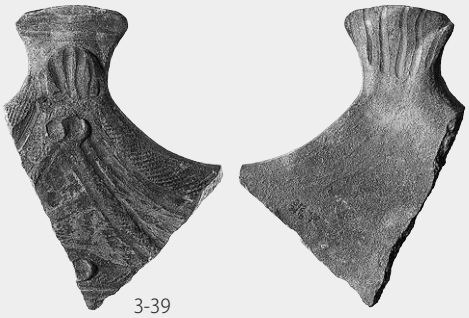
3-36



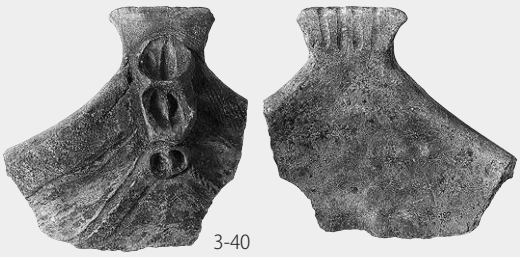
3-37



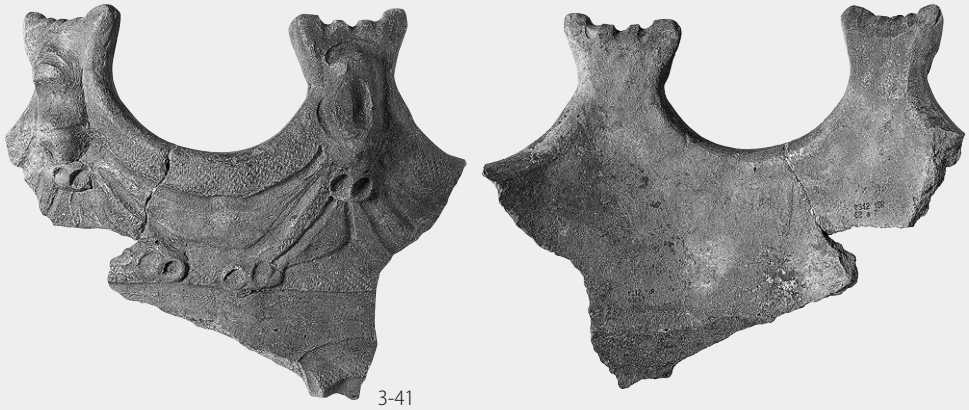
3-38



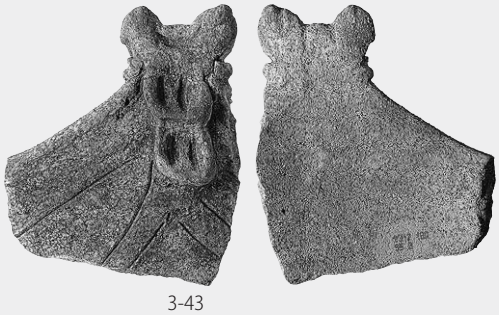
3-39



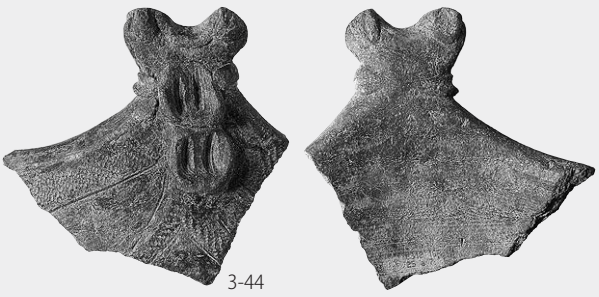
3-40



3-41

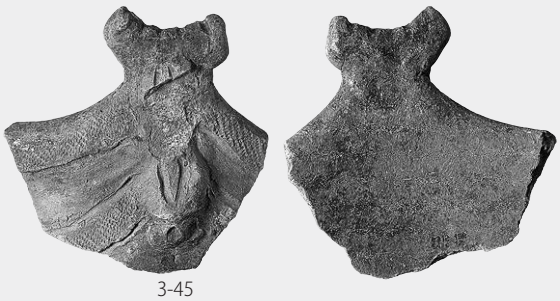


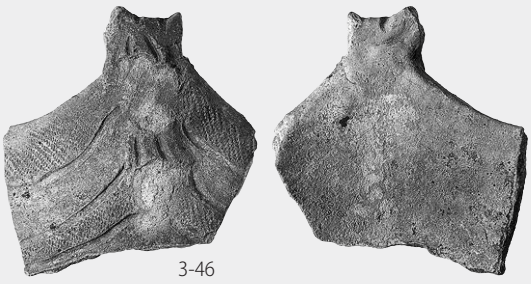
3-43

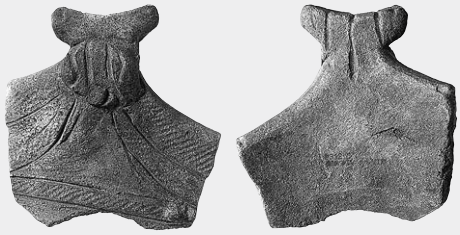


3-44

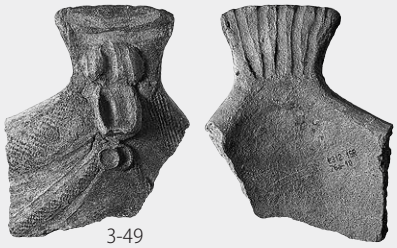
D 区包含層　3 類

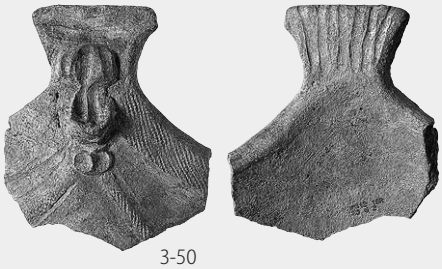

3-45


3-46

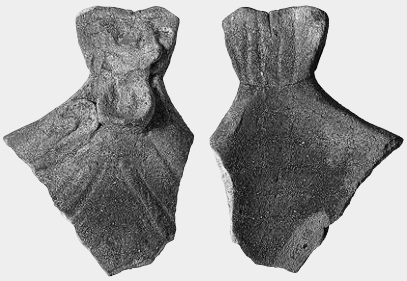

3-47

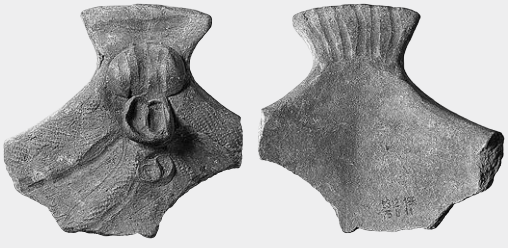
3-48

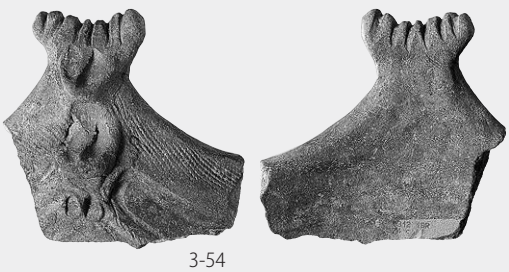

3-49


3-50

3-51


3-52


3-53


3-54

D 区包含層　3 類

3-55

3-56

3-57

3-58

3-59

3-60

3-61

3-62

3-63

3-64

3-65

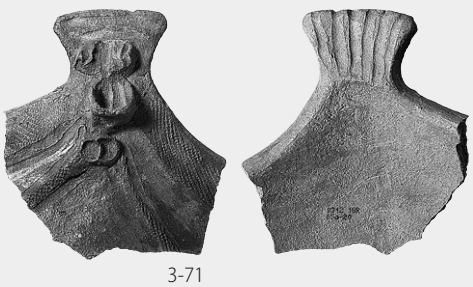
3-66

3-67

3-68

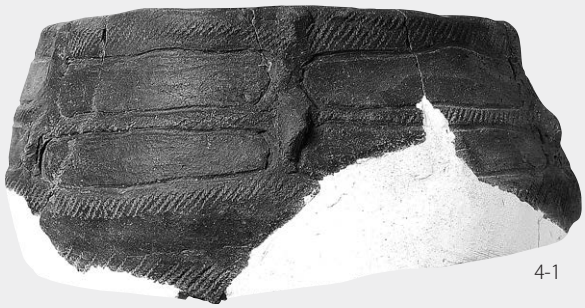
3-69

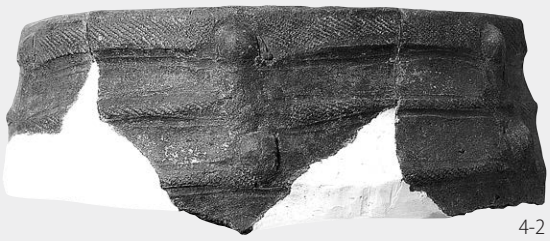
3-70


3-71

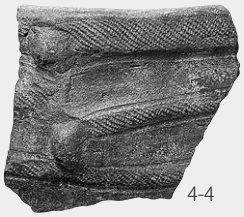
3-72

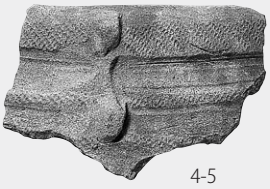
D 区包含層　4 類


4-1


4-2

4-3


4-4


4-5

4-6

4-7

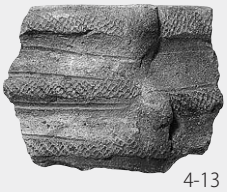
4-8

4-9

4-10

4-11

4-12


4-13

4-14

4-16

4-17

4-18

4-19

D区包含層　4類

4-20

4-21

4-22

4-23

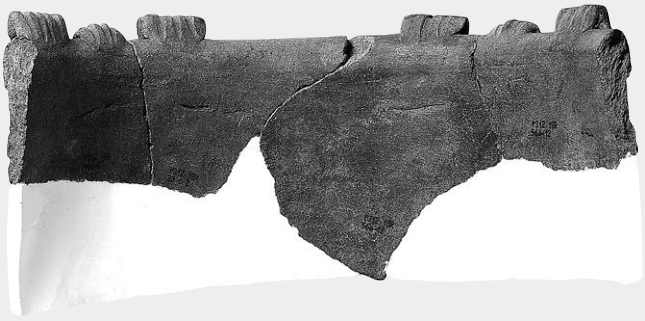
4-24

4-25

4-26

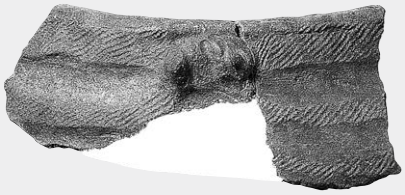
4-27

4-28

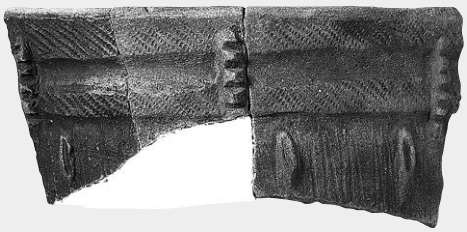


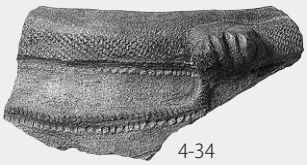
4-29

4-30


4-31

4-32


4-33


4-34

4-35

D 区包含層　4 類

4-36

4-37

4-38

4-39

4-40

4-41

4-42

4-43

4-44

4-45

4-46

4-47

4-48

4-49

4-50

4-51

4-52

4-53

4-54

4-55

4-56

4-57

4-58

4-59

D 区包含層　4 類

4-60

4-61

4-62

4-65

4-66

4-67

4-68

4-69

4-70

4-71

4-72

4-73

4-74

4-75

4-76

4-77

4-78

4-79

4-80

4-81

4-82

4-83

4-84

D 区包含層　4 類

4-85

4-86

4-87

4-88

4-89

4-90

4-91

4-92

4-93

4-94

4-95

4-96

4-97

4-98

4-99

4-100

4-101

4-102

4-103

4-104（1/4）

4-105

D区包含層　4類

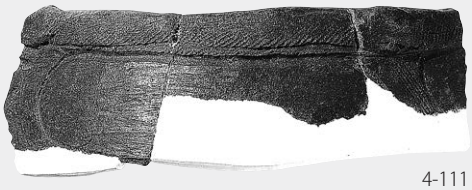
4-106

4-107

4-108

4-109

4-110


4-111

4-112

4-113

4-114

4-115

4-116

4-117

4-118

4-119

4-120

4-121

4-122

4-123

D 区包含層　4 類

4-124

4-125

4-126

4-127

4-128

4-129

4-130

4-131

4-132

4-133

4-134

4-135

D 区包含層　5 類

5-1

5-2

5-3

5-4

5-5

5-6

5-7

5-8

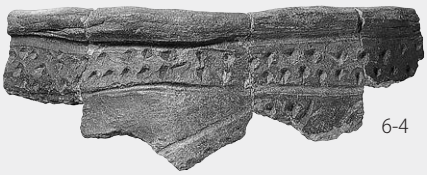
5-9

5-10

5-11

D区包含層　6類

6-1

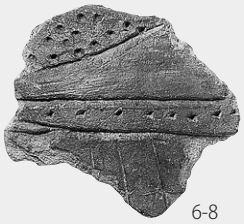

6-4

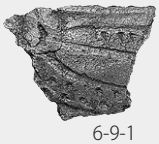
6-5

6-6

6-2

6-7

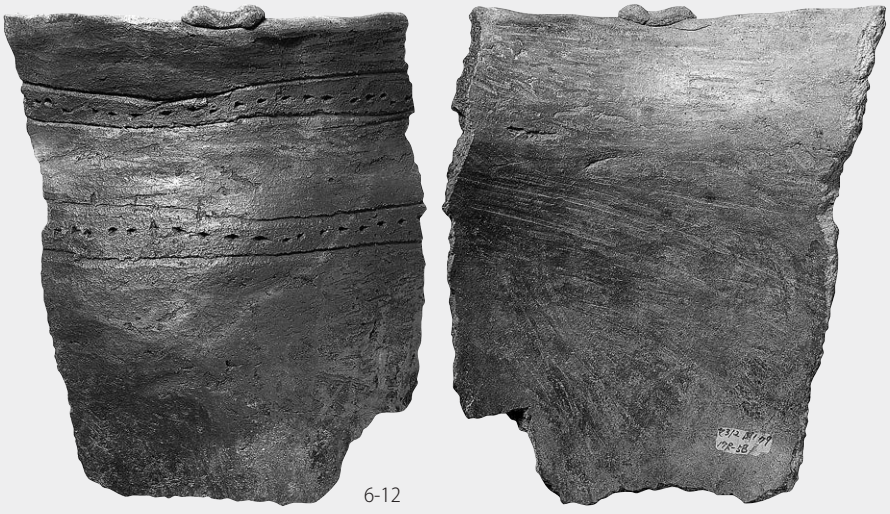

6-8


6-9-1

6-9-2

6-10

6-11


6-12

D 区包含層　6 類

6-13

6-14

6-15

6-16

6-17

6-18

6-19

6-20

6-21

6-22

6-23

6-24

6-25

6-26

6-27

6-28

6-30

6-31

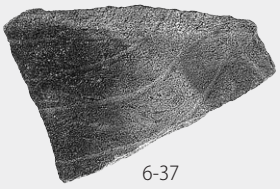
6-33

6-34

D 区包含層　6 類

6-36

6-35


6-37

D 区包含層　7 類

7-1

7-2

7-3

7-4

7-5

7-6

7-7

7-8

7-9

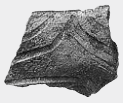
D 区包含層　7 類

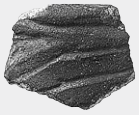
7-10

7-11

7-12

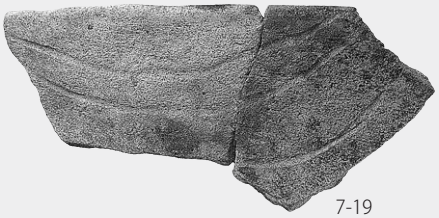
7-13


7-14

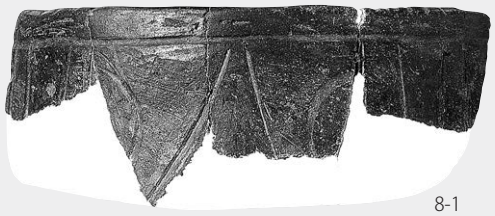

7-15

7-16

7-17


7-19

D 区包含層　8 類


8-1

8-2

8-3

8-4

8-5

8-6

8-7

D 区包含層　9 類

9-1

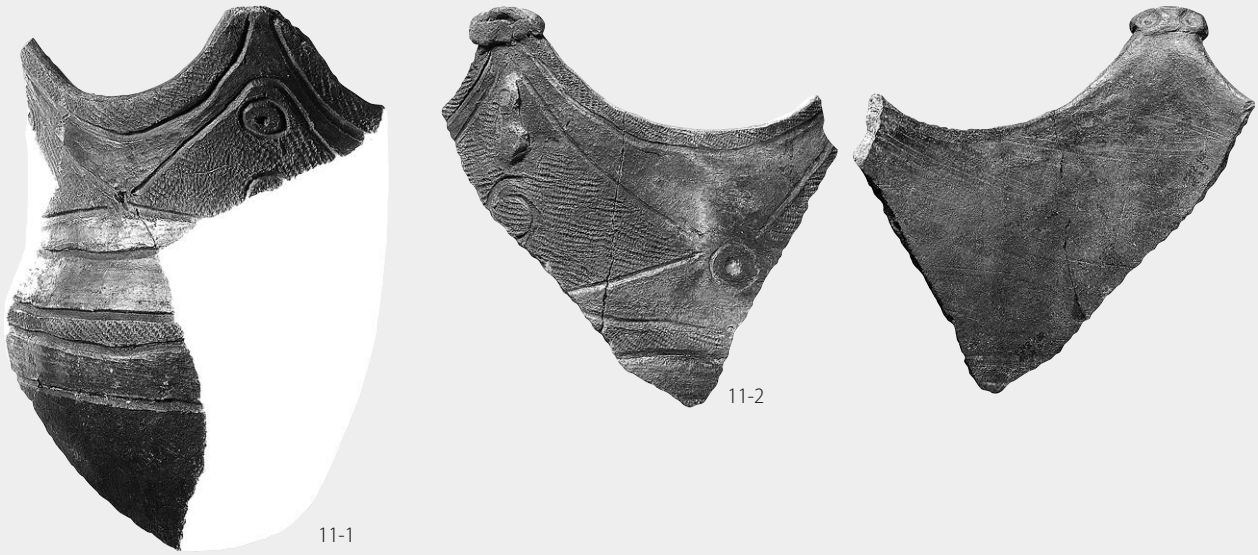
D 区包含層　9 類

9-2

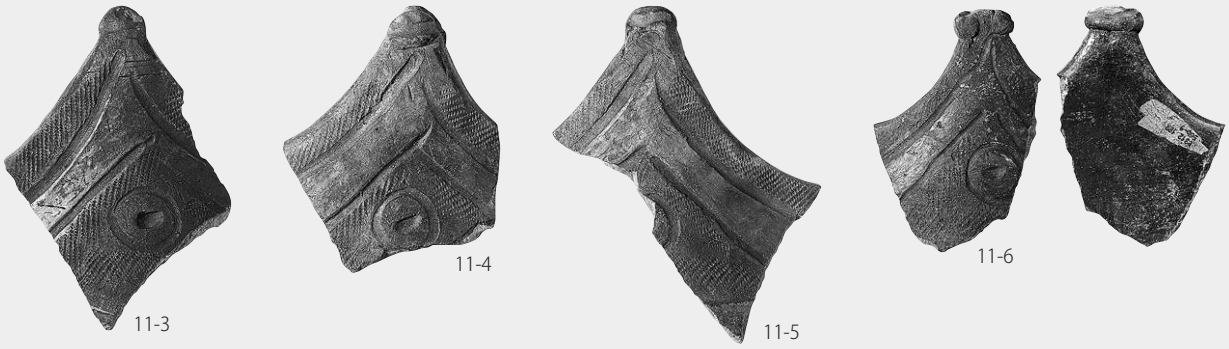
D 区包含層　10 類

10-1　10-2　10-3　10-5　10-6　10-8

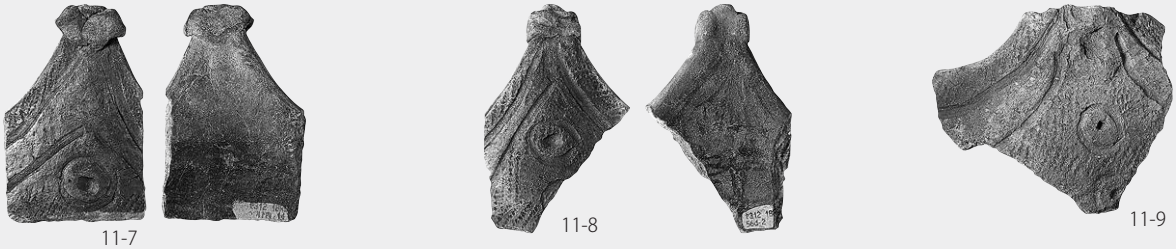
D 区包含層　11 類



11-1　11-2

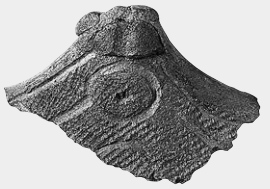


11-3　11-4　11-5　11-6



11-7　11-8　11-9

D区包含層　11類


11-10

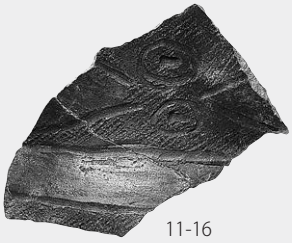
11-11

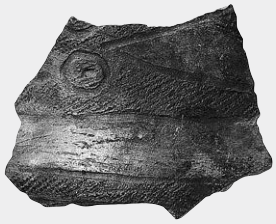
11-12

11-13

11-14

11-15


11-16


11-17

11-18

11-19

11-20

11-21

11-22

11-23

11-24

11-25

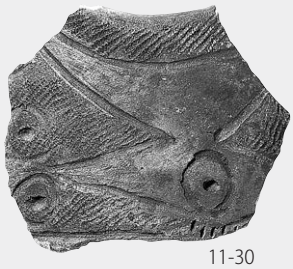
11-26

11-27

D 区包含層　11 類

11-28

11-29



11-30

11-33

11-31

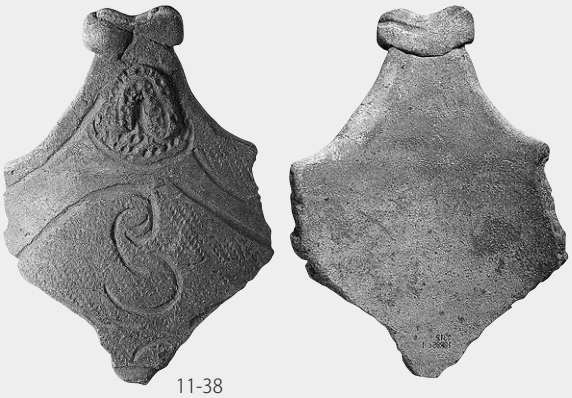
11-32

11-34

D区包含層　11類

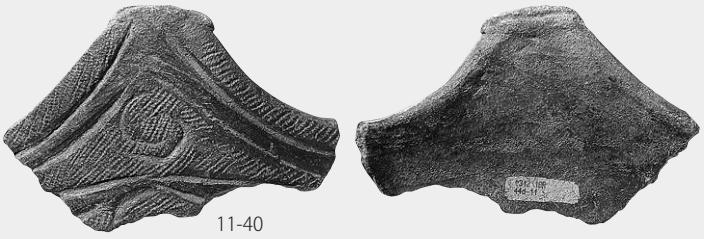
11-35

11-37


11-38

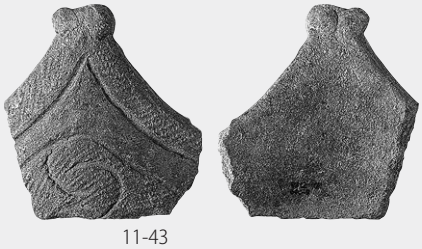
11-36

11-39


11-40

11-41

11-42

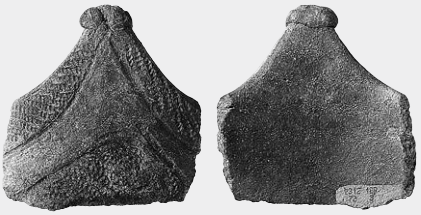

11-43

11-44

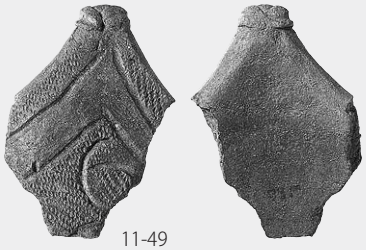
D 区包含層　11 類

11-45

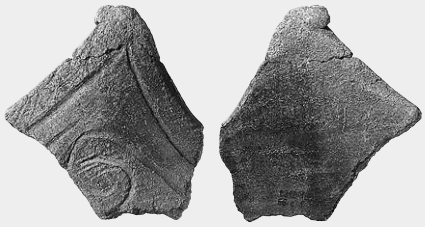
11-46

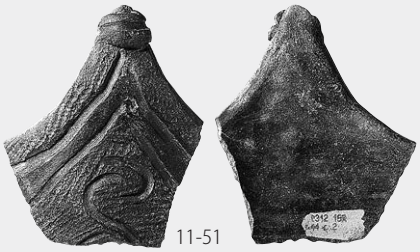

11-47

11-48

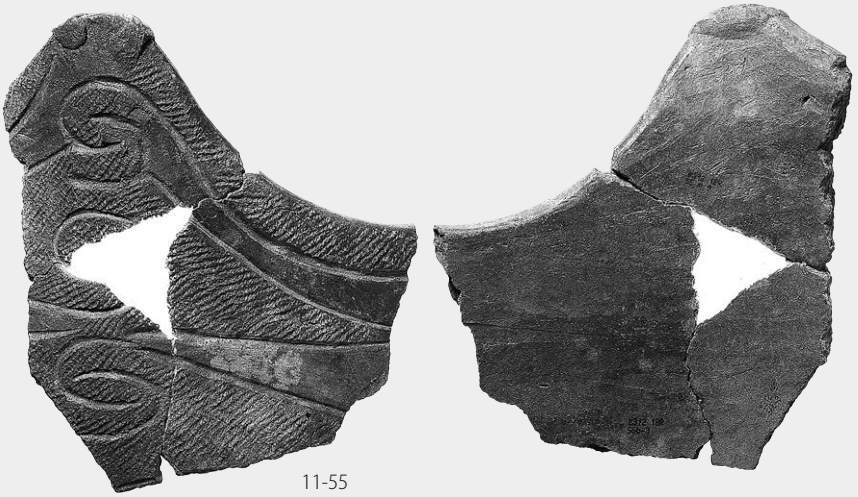

11-49

11-52

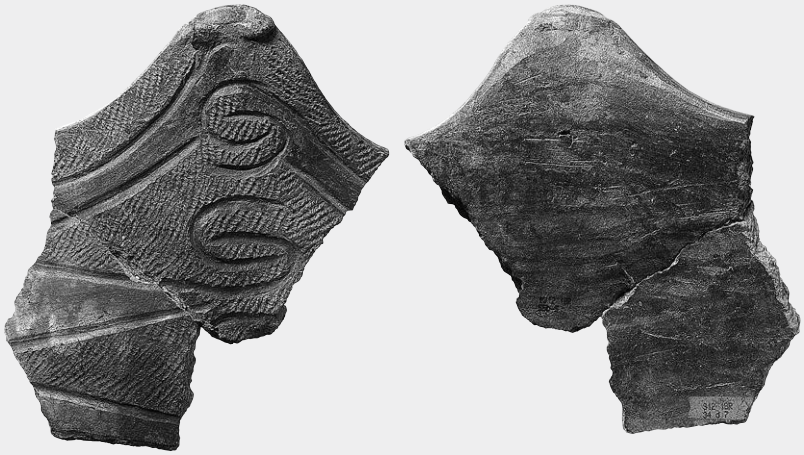

11-50


11-51

11-53


11-55

11-54



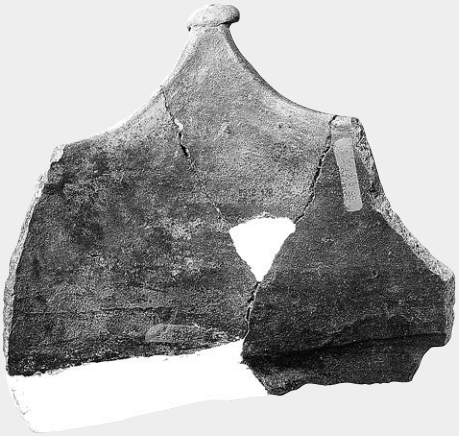
D区包含層　11類

11-56

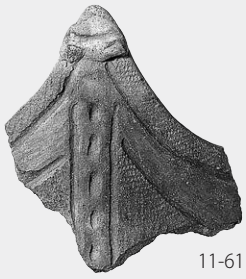
11-58

11-59

11-60



11-57



11-61

11-62

11-63

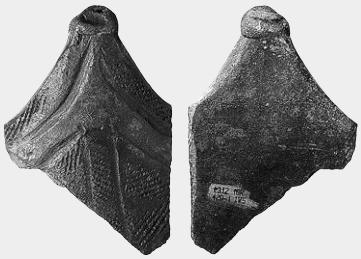
11-64

D区包含層　11類

11-65

11-66

11-67


11-68

11-69

11-70

11-71

11-72

11-73

11-76

11-74

11-75

11-77

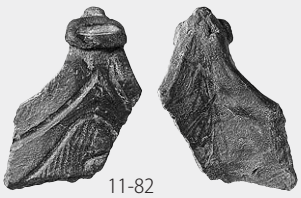
11-78

11-79

D区包含層　11類

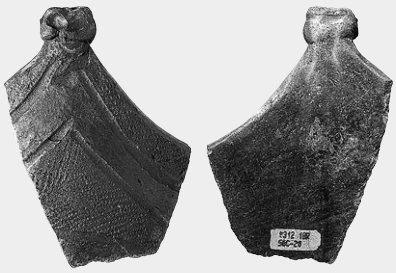
11-80

11-81

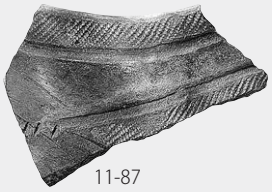

11-82

11-83

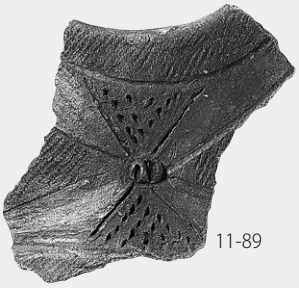
11-84


11-85

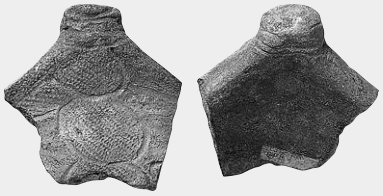
11-86


11-87

11-88


11-89

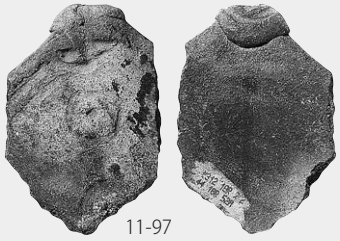
11-90


11-91

11-92

11-93

11-94


11-97

11-95

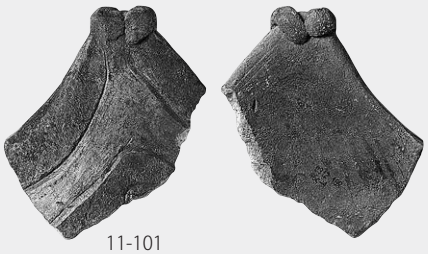
11-96

11-98

D 区包含層　11 類

11-99

11-100


11-101

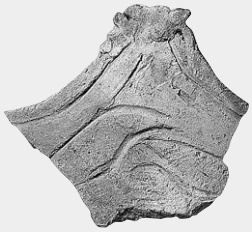
11-102

11-103

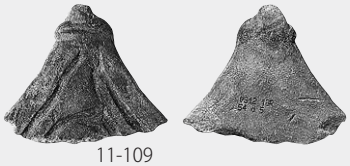
11-104

11-105

11-106


11-107

11-108


11-109

11-110

11-111

11-112

11-113

11-114

11-115

11-116

11-117

11-118

11-119

11-120

11-121

D 区包含層　11 類

11-122

11-123

11-124

11-125

11-126

11-127

11-128

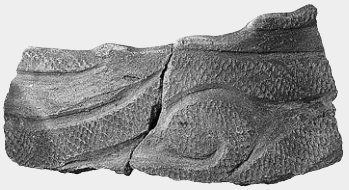
11-129

11-130

11-131

D 区包含層　12 類

12-1


12-6

12-7

12-8

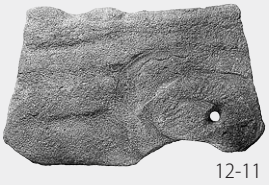
12-2

12-9

12-10

D 区包含層　12 類

12-3


12-11

12-12-1

12-12-2

12-13

12-14

12-15

12-16

12-17

12-18

12-19

12-20

12-21

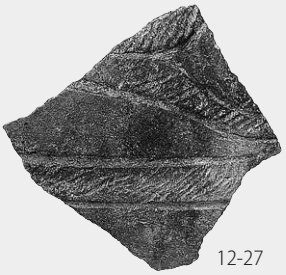
12-22

12-23

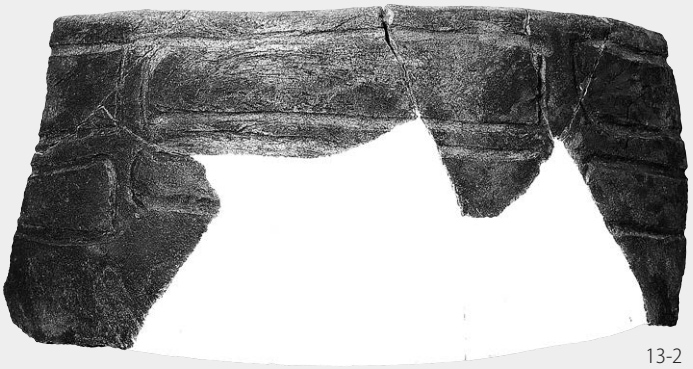
12-24

12-25

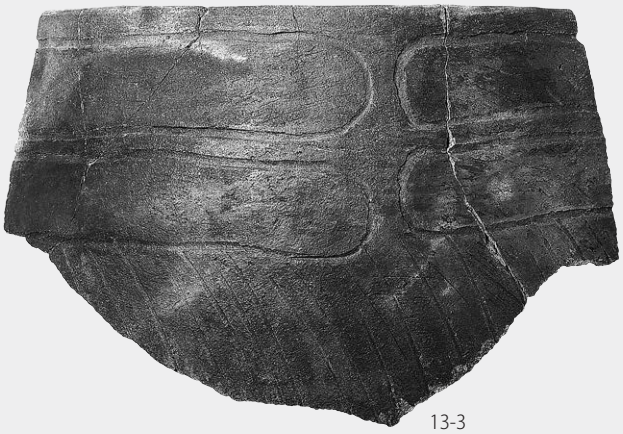
12-26


12-27

D区包含層　13類



13-2



13-3

13-4

13-5

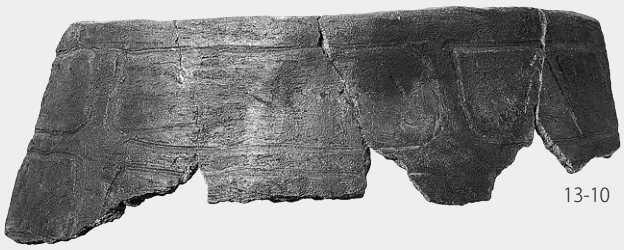
13-6

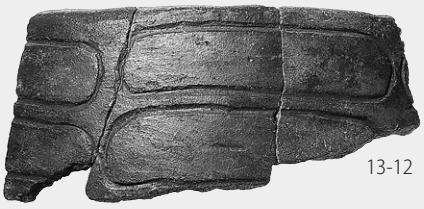
13-7

13-8

D 区包含層　13 類

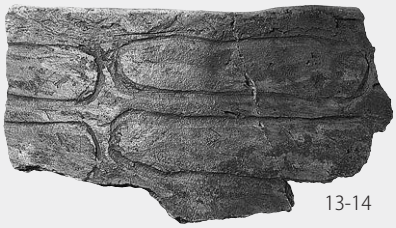
13-9


13-10


13-12

13-11

13-13


13-14

13-15

13-19

13-16

13-17

13-18

D区包含層　13類

13-20

13-21

13-22

13-23

13-24

13-25

13-26

13-27

13-28

13-29

13-30

13-31

13-32

13-33

13-34

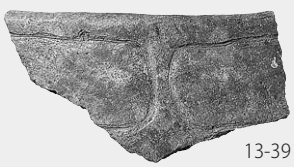
13-35

13-36

13-40

13-37

13-38


13-39

D 区包含層　13 類

13-41

13-42

13-43

13-44

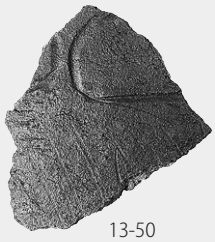
13-45

13-46

13-47

13-48

13-49


13-50

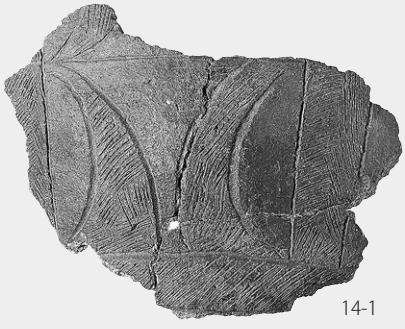
13-51

13-52

13-53

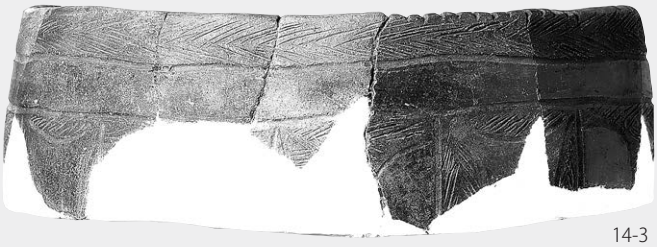
13-54

D 区包含層　14 類

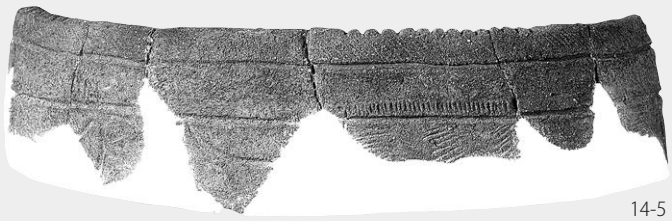

14-1

D区包含層　14類

14-2


14-3

14-4


14-5

14-6

14-7

14-8

14-9

14-10

14-11

14-12

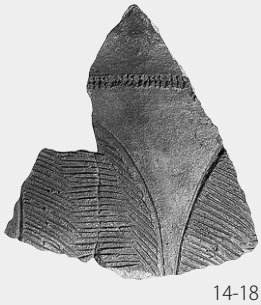
14-13

14-14

14-15

14-16

14-17


14-18

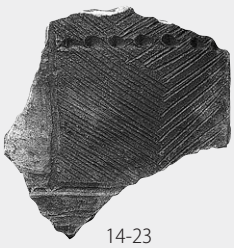
14-19

D 区包含層　14 類

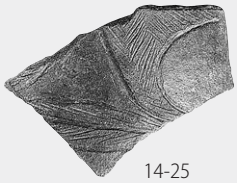
14-20

14-21

14-22


14-23

14-24


14-25

14-26

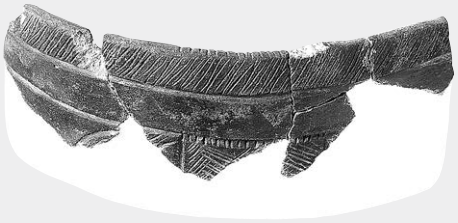
14-27

14-29

14-30

14-31

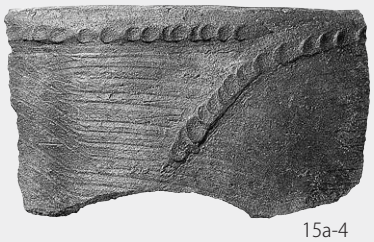
14-32


14-33

D 区包含層　15a 類

15a-1

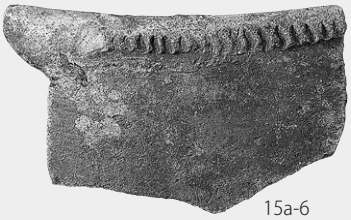
15a-3



15a-4

15a-5

15a-2



15a-6

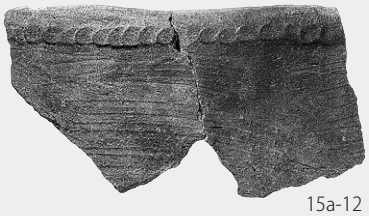
15a-7

15a-8

15a-9

15a-10

15a-11

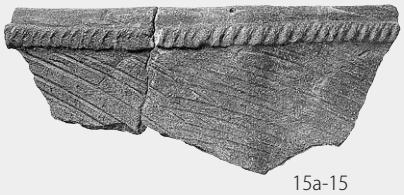


15a-12

15a-13

D 区包含層　15a 類

15a-14


15a-15

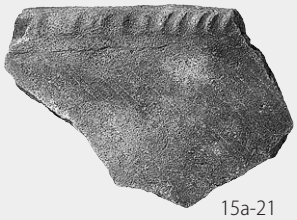
15a-16

15a-17

15a-18

15a-19

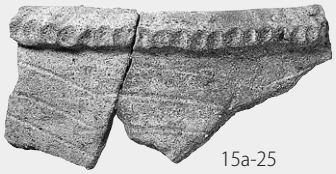
15a-20


15a-21

15a-22

15a-23

15a-24


15a-25

15a-26

15a-27

15a-28

15a-29

15a-30

15a-31

15a-32

15a-33

15a-34

D 区包含層　15a 類

15a-35

15a-36

15a-37

15a-38

15a-39

15a-40

15a-41

15a-42

15a-43

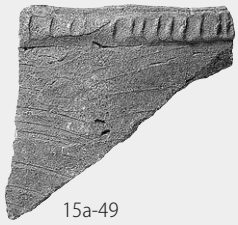
15a-44

15a-45

15a-46

15a-47

15a-48


15a-49

15a-50

15a-51

15a-52

15a-53

15a-54

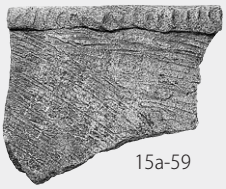
15a-55

15a-56

15a-57

15a-58

D 区包含層　15a 類


15a-59

15a-60

15a-61

15a-62

15a-63

15a-64

15a-65

15a-66

15a-67

15a-68

15a-69

15a-70

15a-71

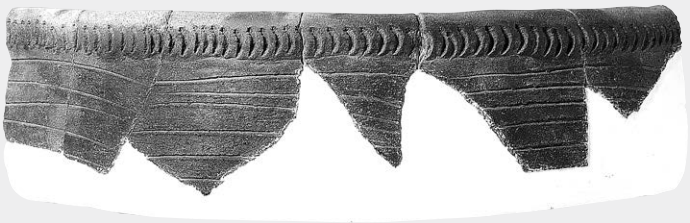
15a-72

15a-73

15a-74

15a-75

15a-76

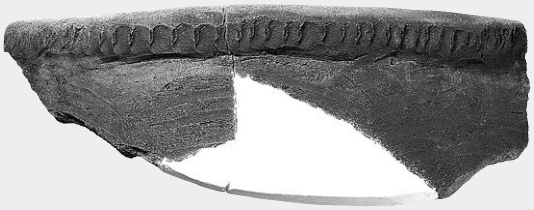

15a-106

15a-107

15a-108

D 区包含層　15a 類

15a-109

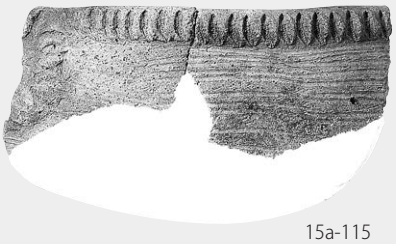

15a-110

15a-112

15a-113

15a-111

15a-114


15a-115

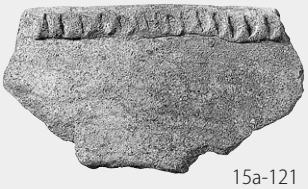
15a-116

15a-117

15a-118

15a-119

15a-120


15a-121

15a-122

15a-123

15a-124

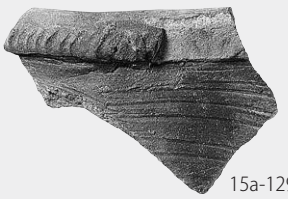
D 区包含層　15a 類

15a-125

15a-126

15a-127

15a-128


15a-129

15a-130

15a-131

15a-132

15a-133

15a-134

15a-135

15a-136

15a-137

15a-138

15a-139

15a-140

15a-141

15a-142

15a-143

15a-144

15a-145

15a-146

15a-147

15a-148

D 区包含層　15a 類

15a-149

15a-150

15a-151

15a-152

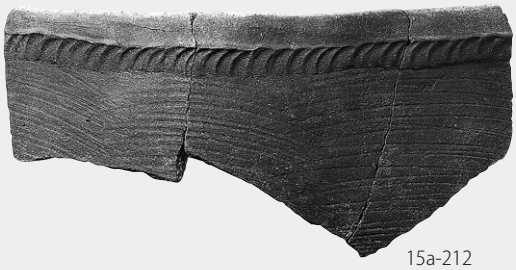
15a-153

15a-208

15a-209

15a-210

15a-211

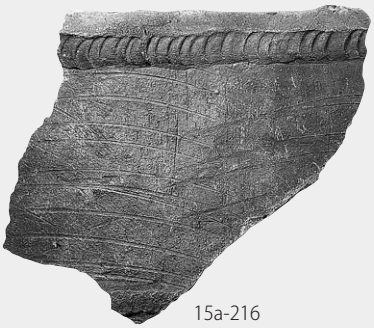

15a-212

15a-213

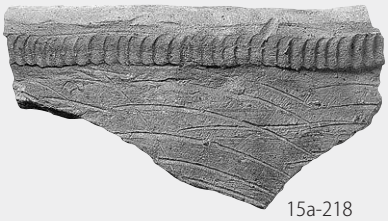
15a-214

D 区包含層　15a 類

15a-215


15a-216

15a-217


15a-218

15a-219

15a-220

15a-221

15a-222

15a-223

15a-224

15a-225

15a-226

15a-227

15a-228

15a-229

D 区包含層　15a 類

15a-230

15a-231

15a-232

15a-233

15a-234

15a-235

15a-236

15a-237

15a-238

15a-239

15a-240

15a-241

15a-242

15a-243

15a-244

D 区包含層　15a 類

15a-245

15a-246

15a-247

15a-248

15a-249

15a-250

15a-251

15a-252

15a-253

15a-254

15a-255

15a-256

15a-257

15a-388

15a-258

D 区包含層　15a 類

15a-389

15a-390

15a-391

15a-392

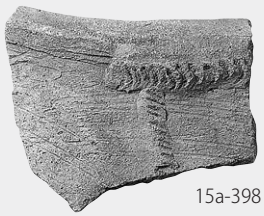
15a-393

15a-394

15a-395

15a-396

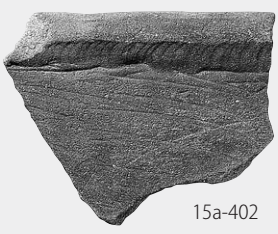
15a-397

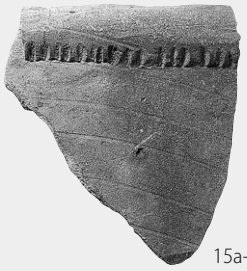

15a-398

15a-399

15a-400

15a-401


15a-402


15a-403

D 区包含層　15a 類

15a-404

15a-405

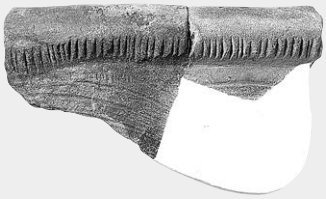
15a-406

15a-407

15a-408

15a-409

15a-410


15a-411

15a-412

15a-413

15a-414

15a-415

15a-444

15a-445

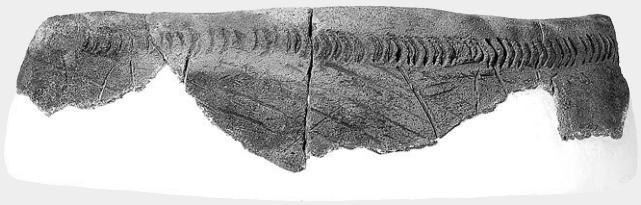
15a-446

15a-447

15a-448

15a-449

D 区包含層　15b 類

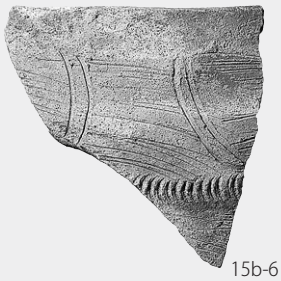

15b-1

15b-2

15b-3

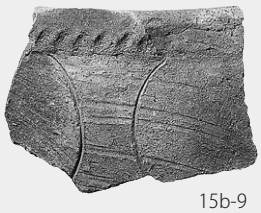
15b-4

15b-5


15b-6

15b-7

15b-8


15b-9

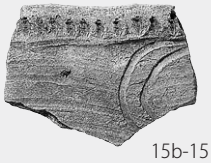
15b-10

15b-11

15b-12

15b-13

15b-14


15b-15

15b-16

15b-17

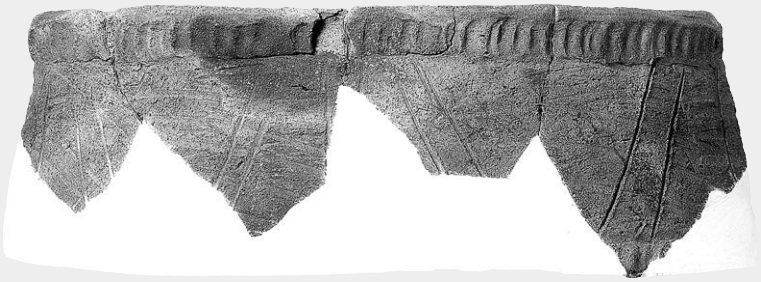
15b-18

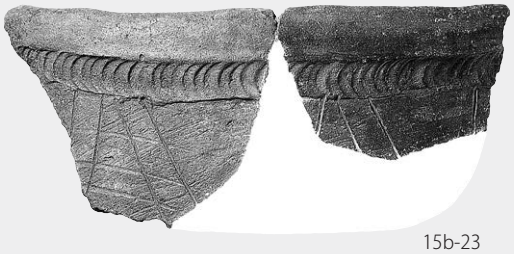
15b-19

D 区包含層　15b 類

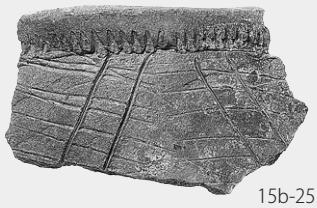
15b-20

15b-21

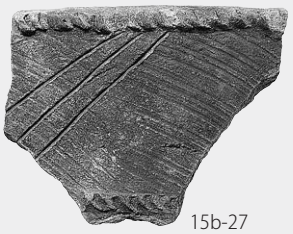

15b-22

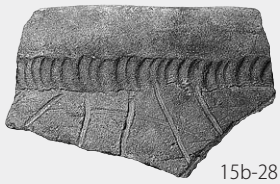

15b-23

15b-24


15b-25

15b-26


15b-27


15b-28

15b-29

15b-30

15b-31

15b-32

15b-33

15b-34

15b-35

D 区包含層　15b 類

15b-36

15b-37

15b-38

15b-39

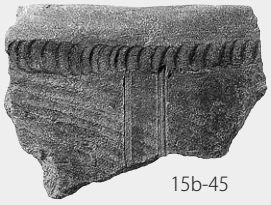
15b-40

15b-41

15b-42

15b-43

15b-44


15b-45

15b-46

15b-47

15b-48

15b-49

15b-50

15b-51

15b-52

15b-53

D 区包含層　15c 類

15c-1

15c-2

15c-3

15c-4

15c-5

15c-6

15c-7

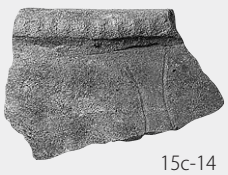
15c-8

15c-10

15c-11

15c-12

15c-13


15c-14

15c-15

15c-16

15c-17

15c-18

D 区包含層　15c 類

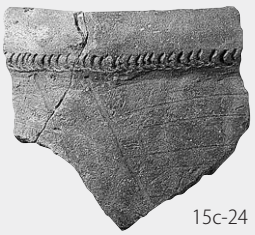
15c-19

15c-20

15c-21

15c-22

15c-23


15c-24

15c-25

15c-26

15c-27

15c-28

15c-29

15c-30

15c-31

15c-32

15c-33

15c-34

15c-35

15c-36

D 区包含層　15c 類

15c-37

15c-38

15c-39

15c-40

15c-41

15c-42

15c-43

15c-44

15c-45

15c-46

15c-47

15c-48

15c-49

15c-50

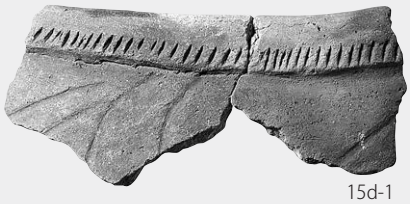
15c-51

15c-52

15c-53

15c-54

D 区包含層　15d 類


15d-1

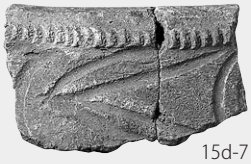
15d-2

15d-3

15d-4

15d-5

15d-6


15d-7

15d-8

15d-9

15d-10

15d-11

15d-12

15d-13

15d-14

15d-15

15d-16

15d-17

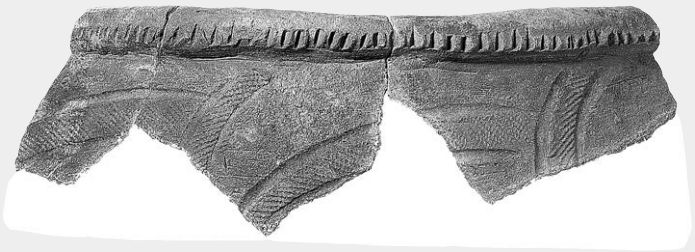
15d-18

15d-19

D 区包含層　15e 類

15e-1

15e-2


15e-3

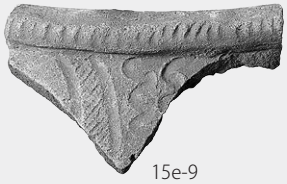
15e-4

15e-5

15e-6

15e-7

15e-8


15e-9

15e-10

15e-12

15e-13

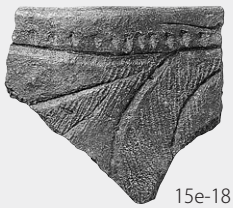
15e-11

15e-14

D 区包含層　15e 類

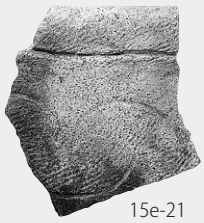
15e-16

15e-17


15e-18

15e-19

15e-20

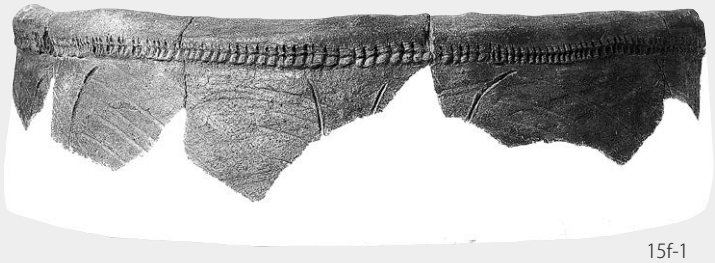

15e-21

15e-22

15e-23

15e-24

D 区包含層　15f 類


15f-1

15f-14

15f-15

15f-16

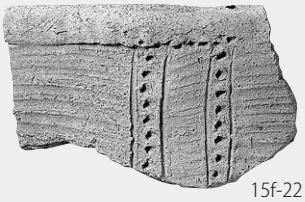
15f-17

15f-18

15f-19

15f-20

15f-21


15f-22

15f-23

D 区包含層　16 類

16-1

16-2

16-3

16-4

16-6

16-7

16-5

16-8

16-9

D 区包含層　17a 類

17a-2

17a-3

17a-4

17a-5

17a-6

17a-7

17a-8

17a-10

17a-11

17a-12

D 区包含層　17b 類

17b-1

17b-2

17b-3

17b-4

17b-5

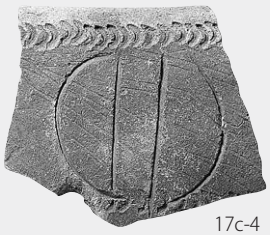
17b-6

17b-7

D 区包含層　17c 類

17c-2

17c-3


17c-4

17c-5

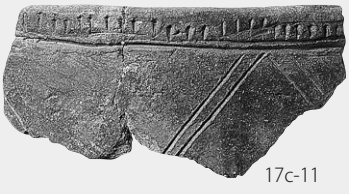
17c-6

17c-7

17c-8

17c-9

17c-10


17c-11

17c-12

17c-15

D 区包含層　17d 類

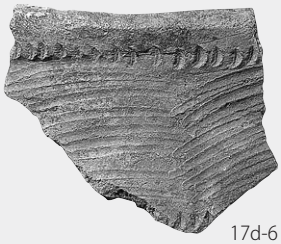
17d-1

17d-2

17d-4

17d-3

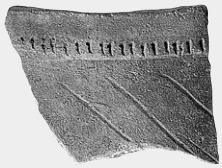
17d-5


17d-6

17d-7

17d-8

17d-9


17d-10

17d-11

17d-12

17d-13

17d-14

17d-15

17d-16

17d-17

17d-18

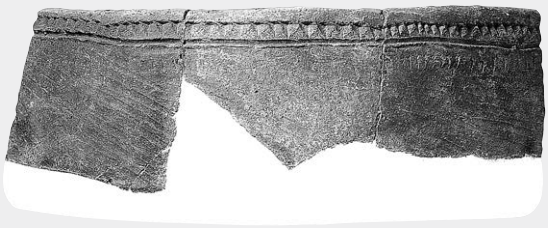
17d-19

17d-20

17d-21

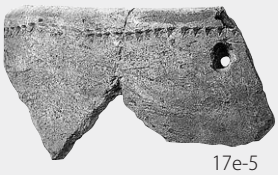
17d-22

D 区包含層　17e 類


17e-2

17e-3

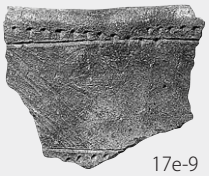
17e-4


17e-5

17e-6

17e-7

17e-8


17e-9

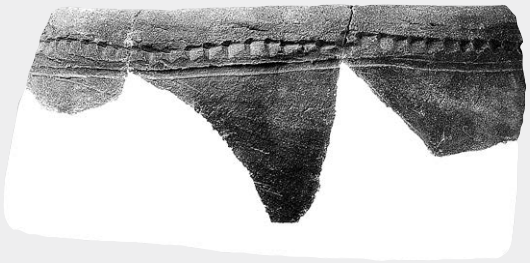
17e-10

17e-11

17e-12

17e-13

17e-15


17e-14

17e-16

17e-17

17e-18

17e-19

D 区包含層　17e 類

17e-20

17e-21

17e-22

17e-23

17e-24

17e-25

17e-26

17e-28

17e-29

17e-27

17e-30

D 区包含層　18 類

18-1（1/4）

18-2（1/4）

18-3（1/4）

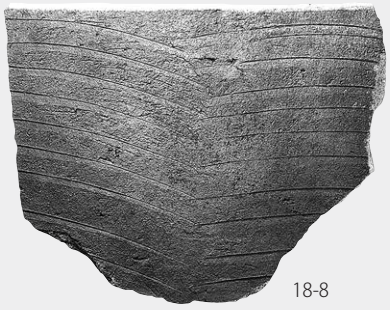
D区包含層　18類

18-4

18-5

18-6

18-7


18-8

18-9

18-10

18-12

18-11

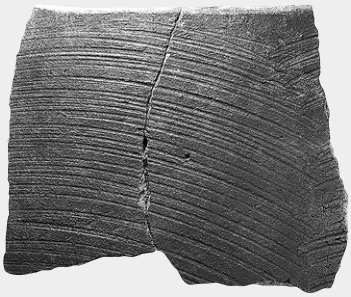
18-13

D 区包含層　18 類

18-14

18-15

18-16


18-17

18-18

18-19

18-20

18-21

18-22

18-23

18-24

18-25

18-26

18-27

D 区包含層　18 類

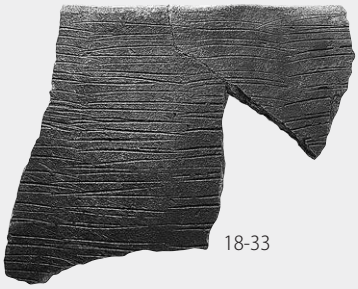
18-28

18-29

18-30

18-32

18-31


18-33

18-34

D 区包含層　19 類

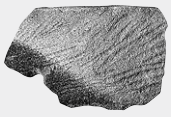
19-1

19-2

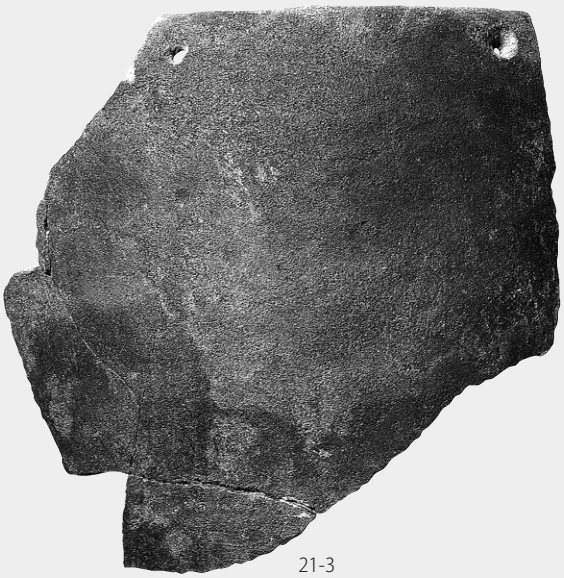
19-3

D 区包含層　20 類

20-2（1/4）

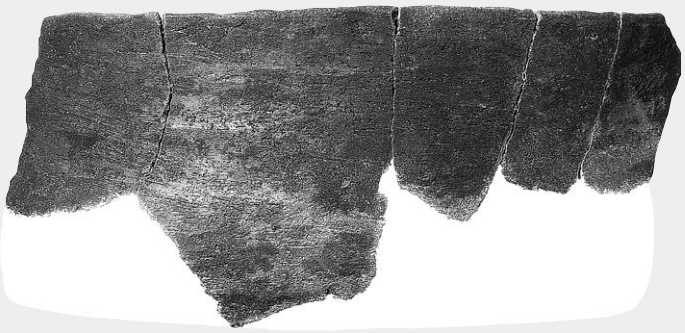

20-1

D 区包含層　21 類



21-3

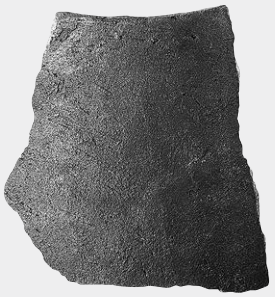
21-5



21-4

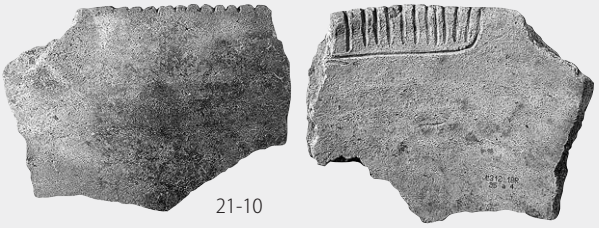
21-6

21-7



21-8

21-9



21-10

21-11

21-12

21-13

D 区包含層　21 類

21-14

21-15

21-16

21-17

21-18

21-19

21-20

21-21

21-22

21-23

21-24

21-25

21-26

21-27

21-28

21-29

21-30

21-31

D 区包含層　21 類

21-32

21-33

21-34

21-35

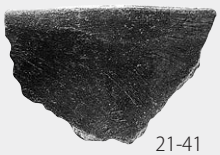
21-36

21-37

21-38

21-39

21-40


21-41

21-42

21-43

21-44

21-45

21-46

21-47

21-48

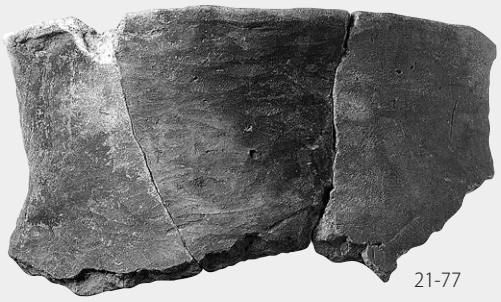
21-49

D 区包含層　21 類

21-74

21-75

21-76


21-77

21-78

21-79

21-80

21-81

21-82

21-83

21-100

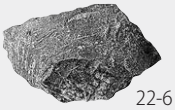
21-101

21-105

D 区包含層　22 類

22-1

22-2


22-6

22-3

22-4

22-5

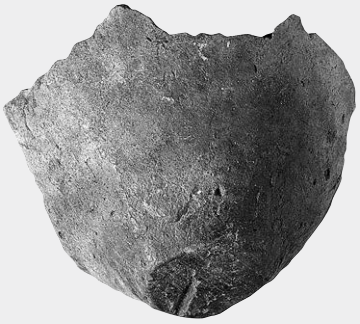
22-9

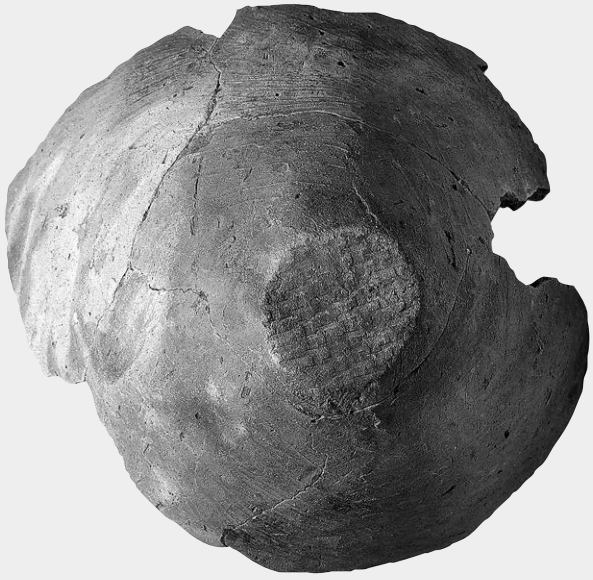
22-12

22-19

22-7

22-47





22-48

D 区包含層　22 類

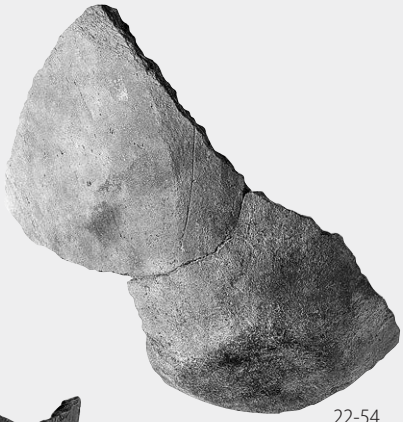
22-49

22-50

22-51

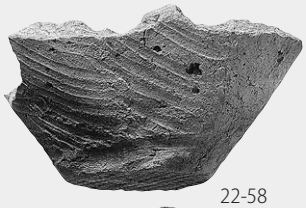
22-52

22-53


22-54

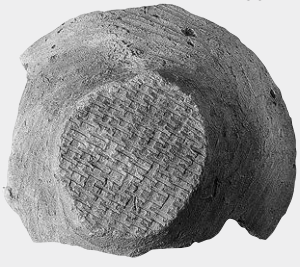
22-55

22-56

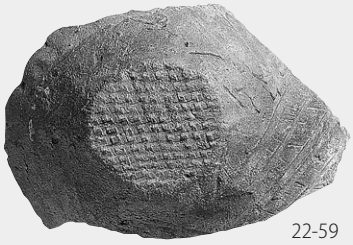

22-58

22-60

22-57



22-61


22-59

22-62

D 区包含層　22 類

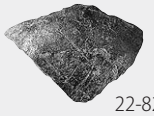
22-63

22-64

22-65

22-80

22-81


22-82

22-83

22-84

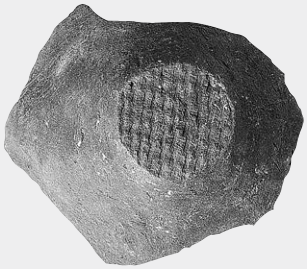
22-85

22-86

22-87

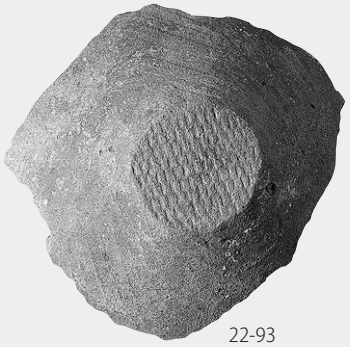
22-88

22-89



22-90

22-91


22-93

22-92

22-94

22-95

22-96

D 区包含層　22 類

22-97

22-98

22-99

22-100

22-101

22-102

22-103

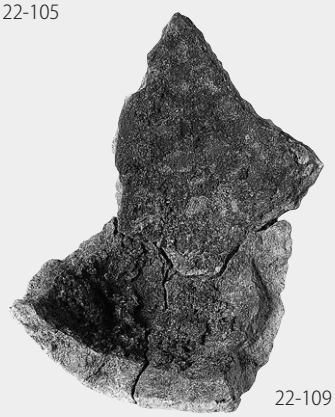
22-104

22-105

22-106

22-107

22-108


22-109

22-110

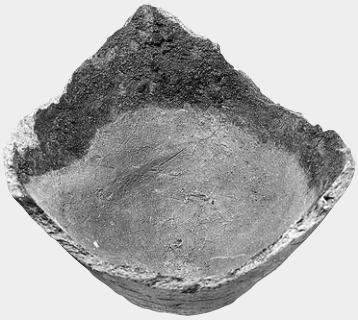
22-116

22-117

D 区包含層　22 類

22-118

22-120

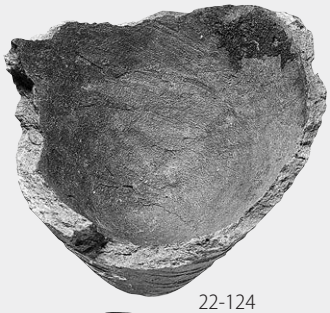


22-119

22-121

22-122

22-123


22-124

22-125

D 区包含層　23 類

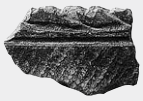
23-1

23-2

D 区包含層　23 類

23-3

23-4


23-5

23-6

23-7

23-8

23-9

23-10

23-11

23-12

23-13

23-14

23-15

23-16

23-17

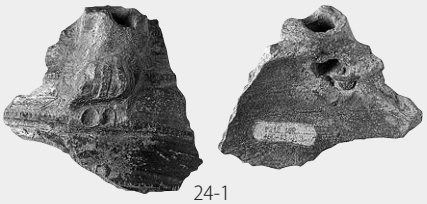
23-18

23-20

23-24

23-26

D 区包含層　24 類


24-1

24-2

24-3

24-4

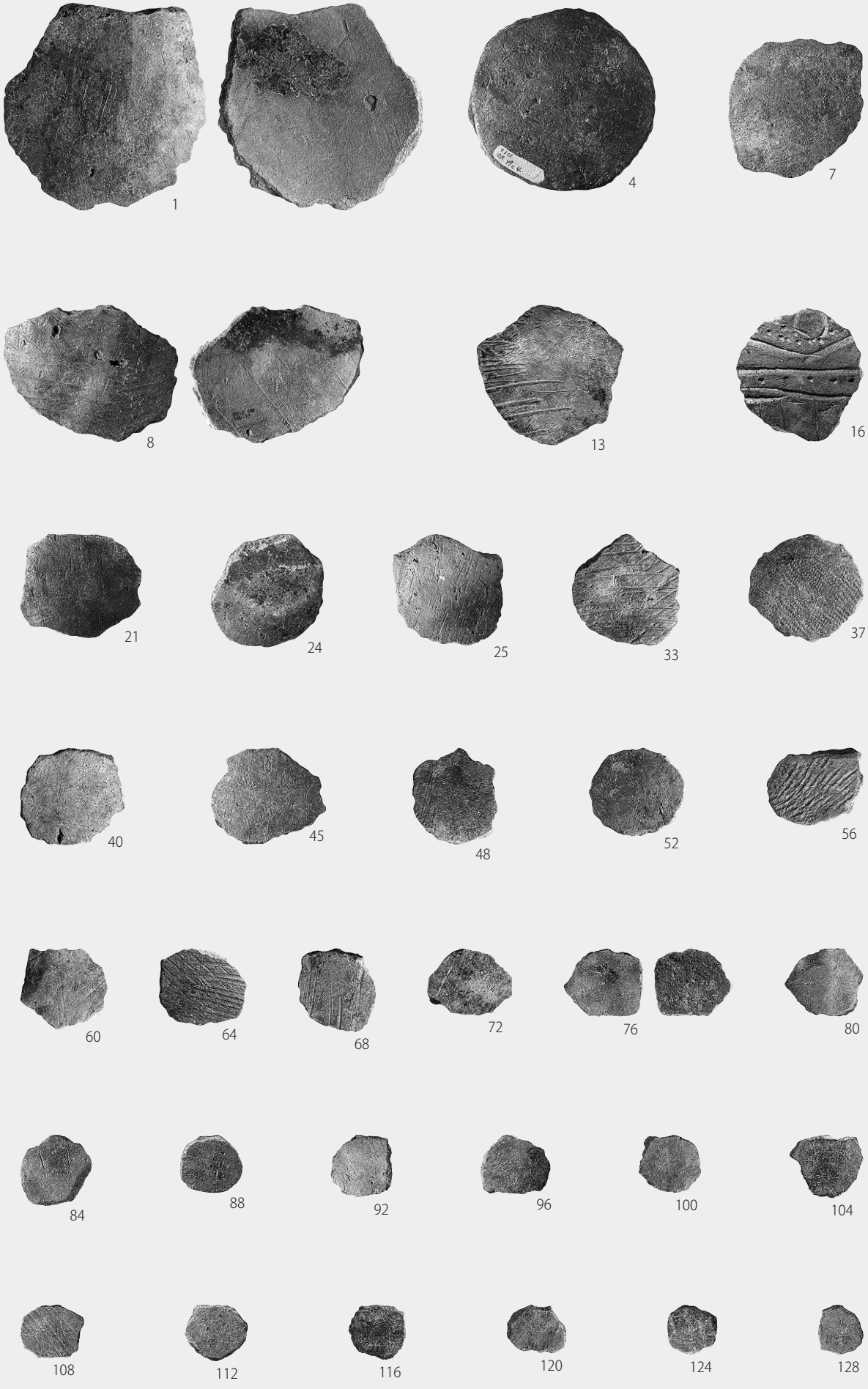
D 区包含層　25 類

25-1

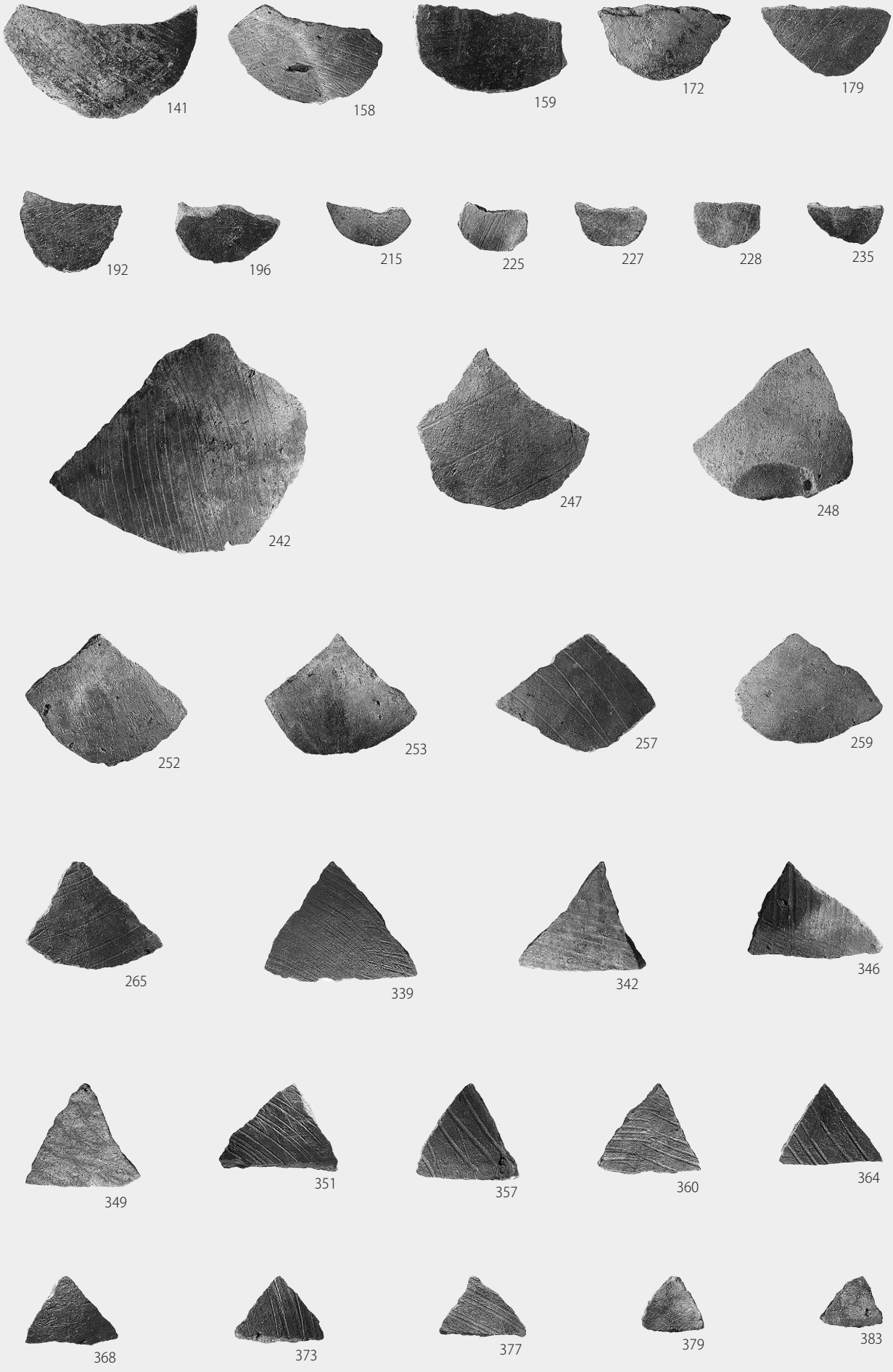
25-3

25-5

D区包含層　土器片円盤

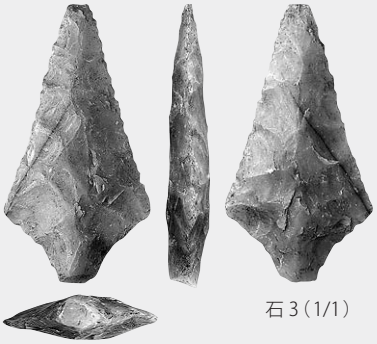

1
4
7
8
13
16
21
24
25
33
37
40
45
48
52
56
60
64
68
72
76
80
84
88
92
96
100
104
108
112
116
120
124
128

D区包含層　土器片円盤

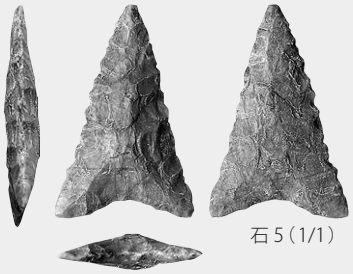

141
158
159
172
179
192
196
215
225
227
228
235
242
247
248
252
253
257
259
265
339
342
346
349
351
357
360
364
368
373
377
379
383

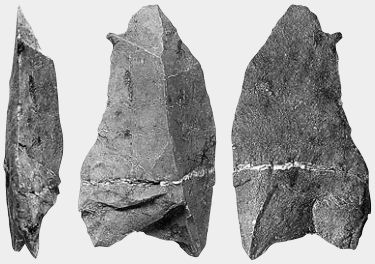
D区包含層　石製品・木製品

石1（1/1）

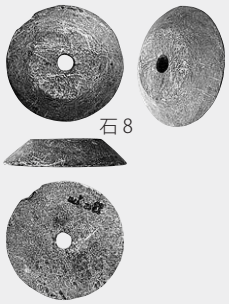

石3（1/1）

石4（1/1）

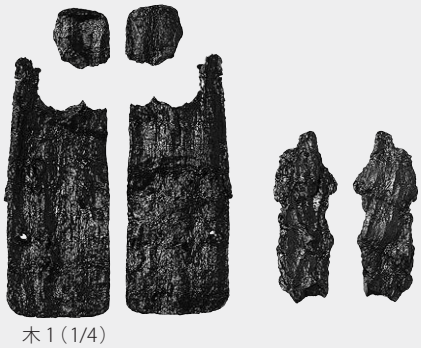

石5（1/1）

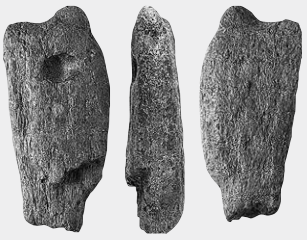

石6（1/1）

石7


石8

石2


木1（1/4）


石9

B区包含層

2

3

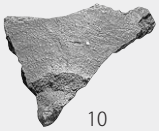
4

5

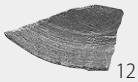
6

7

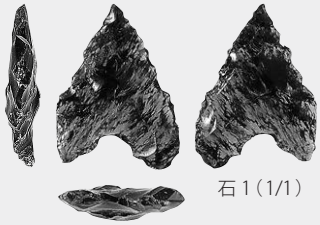
9


10

11


12

13


石1（1/1）

竪穴建物跡

A 区 004 号

1

2

B 区 008 号

3

6

7

9

10

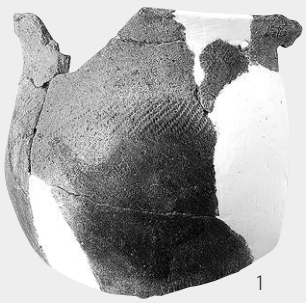
11

12

13

14（1/1）

B 区 022 号


1

2

竪穴建物跡

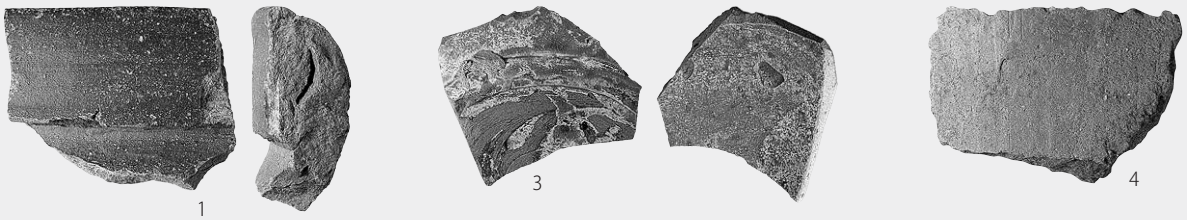
B 区 022 号

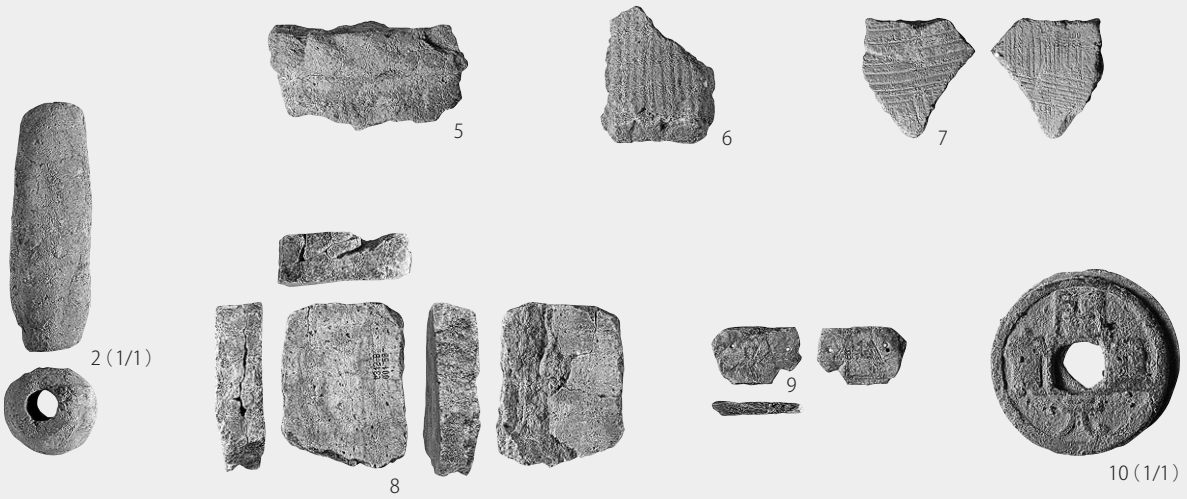
掘立柱建物跡

B 区 014 号

溝

B 区 001 号





溝

B 区 005 号

1

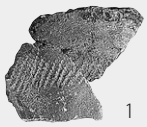
2

B 区 019 号

1（1/1）

2（1/1）

B 区 020 号



1

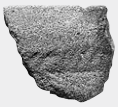
3

4

C 区 010 号

1

D 区 001 号



2

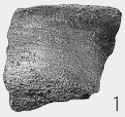
1

C 区 038 号

1

土坑・ピット群

B 区 002 号

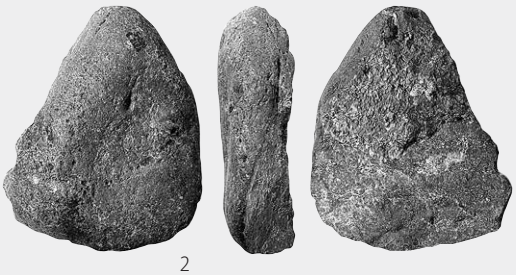


1

2

B 区 003 号

1



2

B 区 004 号

1

D 区 003 号

1

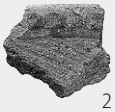
2

3

4

D 区 004 号

1

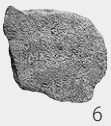


2

3

4

5



6

D 区 005 号

1

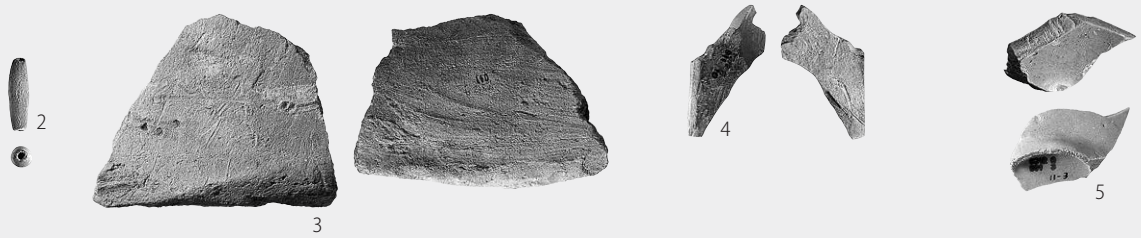
2

D 区 009 号

1

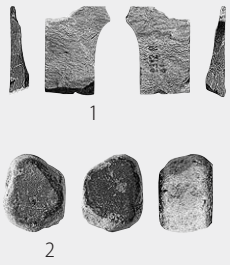
道路状遺構

A区011号

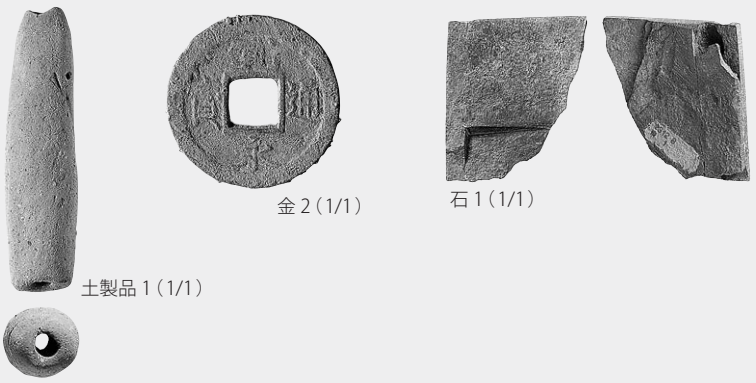


遺構外

A区

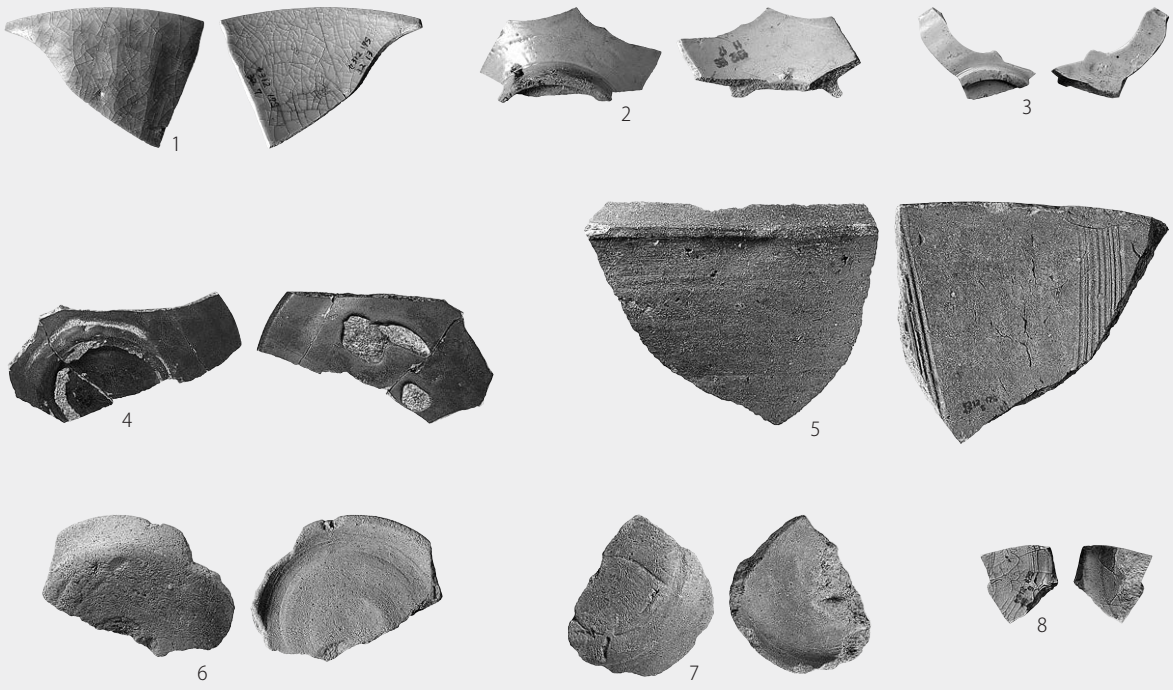


B区



C区

D区中世遺物



遺構外

D 区土製品

1

2

3

8（1/1）

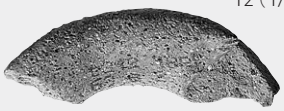
4

5

10（1/1）

11（1/1）

12（1/1）



13

D 区金属製品

1

2

3

4

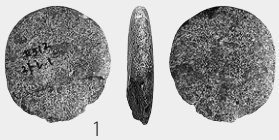
5

6

（1/1）

確認調査

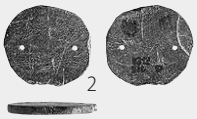
2 トレンチ


1

4 トレンチ

1

5 トレンチ


2

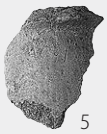
6 トレンチ

1

2

3

4


5

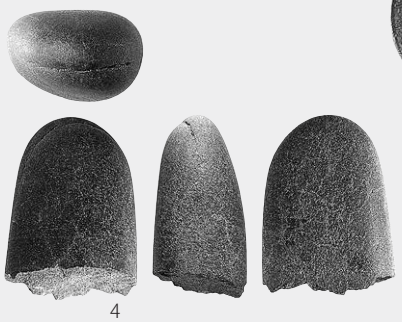
7

8 トレンチ

1

2

3


4

5 (1/1)

9 トレンチ

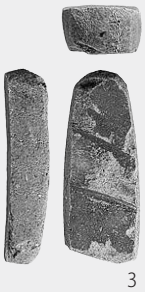
1

2

10 トレンチ

1 (1/1)

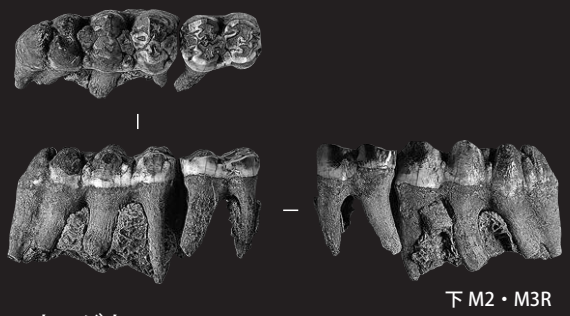
2


3

動物遺体

哺乳類1

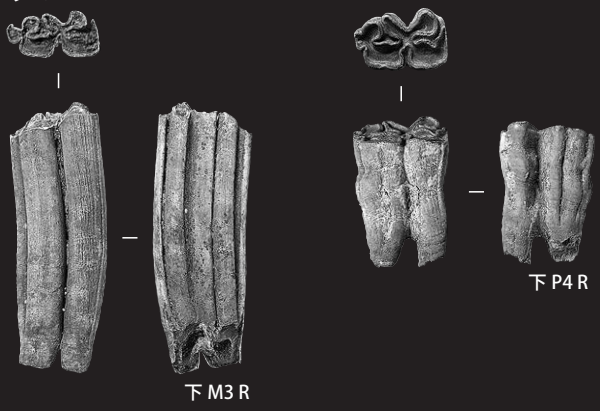
イノシシ



下 M2・M3R

ニホンジカ

ウマ



下 M3 R

下 P4 R

クジラ類？化石

上腕骨 L

脛骨 L

中足骨 R

中手骨 L

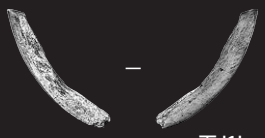
肩甲骨 L

0 50 mm

動物遺体

哺乳類2

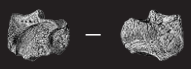
イノシシ



下 I1L

中手骨 III R

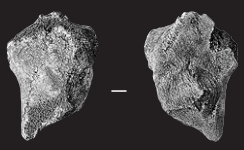
ニホンジカ



腓骨 L

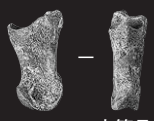
距骨 L

ニホンジカ



膝蓋骨 L

踵骨 R



中節骨

尺骨 L

基節骨

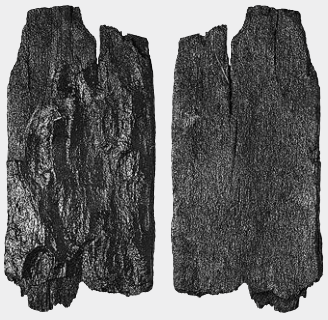
末節骨

木質遺物

土坑・ピット群

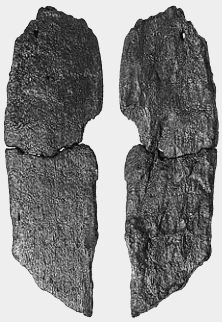
B 区 004 号

2（1/4）



3（1/4）

1（1/4）


2-1（1/4）

2-2（1/4）

3（1/8）

4（1/8）

5-1（1/4）

5-2（1/4）

6（1/8）

7-1（1/8）

7-2（1/4）

8（1/8）

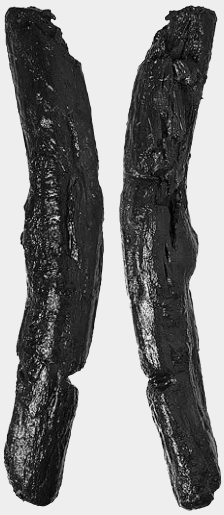
9（1/8）

10-1（1/4）

10-2（1/4）

10-3（1/4）

10-4（1/4）



11-1（1/4）

11-2（1/4）

種子

1
17R-48　カヤ

2
17R-49　カヤ

3
17R-58　カシ

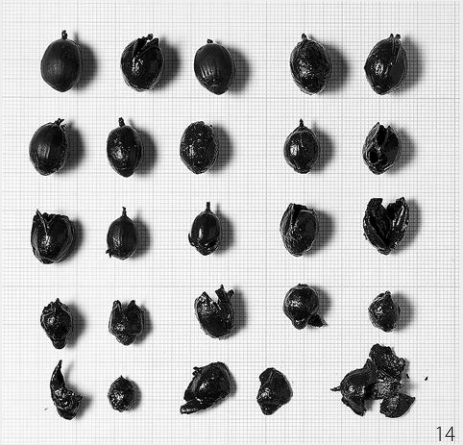
4
17R-58　カヤ

7
17R-68　クリ

6
17R-58　カシ

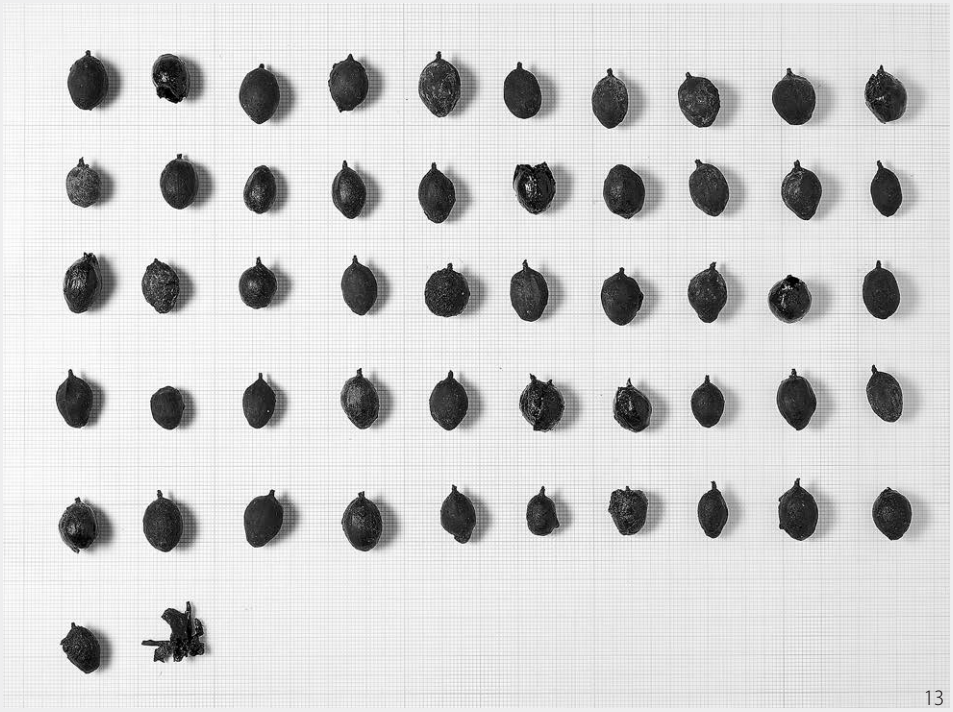
9
17R-28D　カシ

10
17R-28D　カヤ



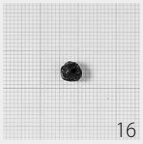
14
17R-29C　カシ

（1/2）



13
17R-28D　カシ

15
17R-29C　カシ

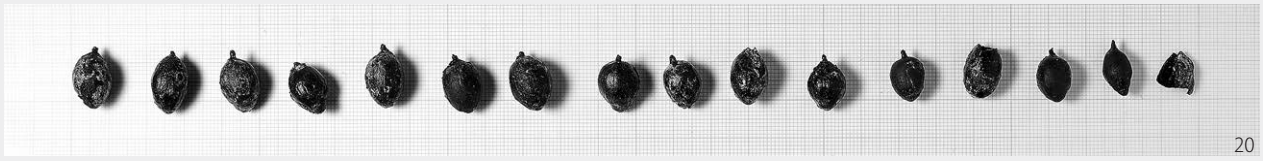


16
17R-29C ホオノキ

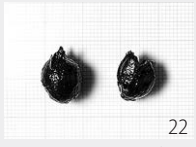
17
17R-29C スダジイ

18
17R-39A　カヤ

19
17R-39A　カシ



20
17R-39A　カシ

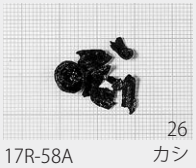


22
17R-49B　カシ

23
17R-49D　カシ

24
17R-49D　カシ

25
17R-57B　カシ

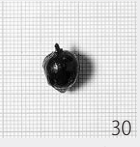


26
17R-58A　カシ

27
17R-58D　カシ

28
17R-59･53　カシ

29
17R-59B　カシ

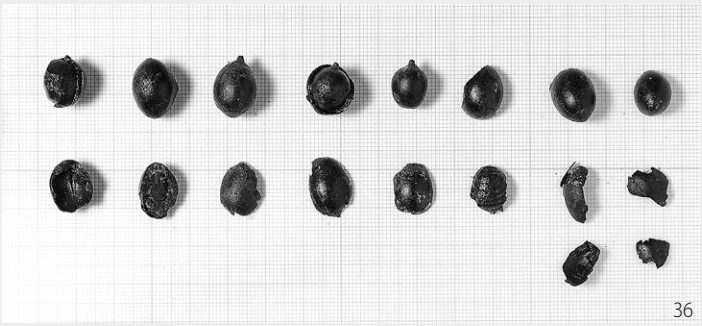


30
17R-60A　カシ

31
17R-67A　カシ

32
17R-67C　カヤ

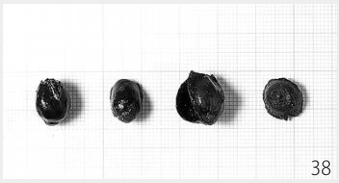
33
17R-67C　カシ


36
17R-69B　カシ

34
17R-68B　カヤ

35
17R-68C　オニグルミ

37
17R-69B　カヤ


38
17R-69B　カシ

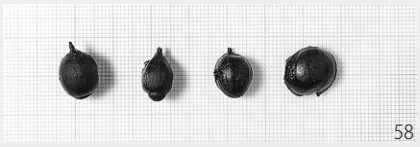
39
17R-69B　モモ

40
17R-69D　モモ

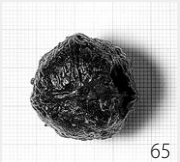
55
18R-43C　カシ

56
18R-43C　ハシバミ？

57
18R-46C　カヤ


58
18R-46C　カシ

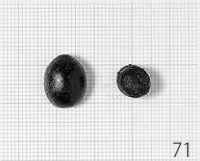
59
18R-48C　オニグルミ


65
18R-53C　オニグルミ

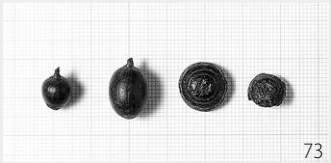
68
18R-55B　モモ

69
18R-56C　カヤ

70
18R-56D　モモ


71
18R-57A　タブノキ

72
18R-57A　カヤ


73
18R-57A　カシ

74
18R-57A　スダジイ殻斗

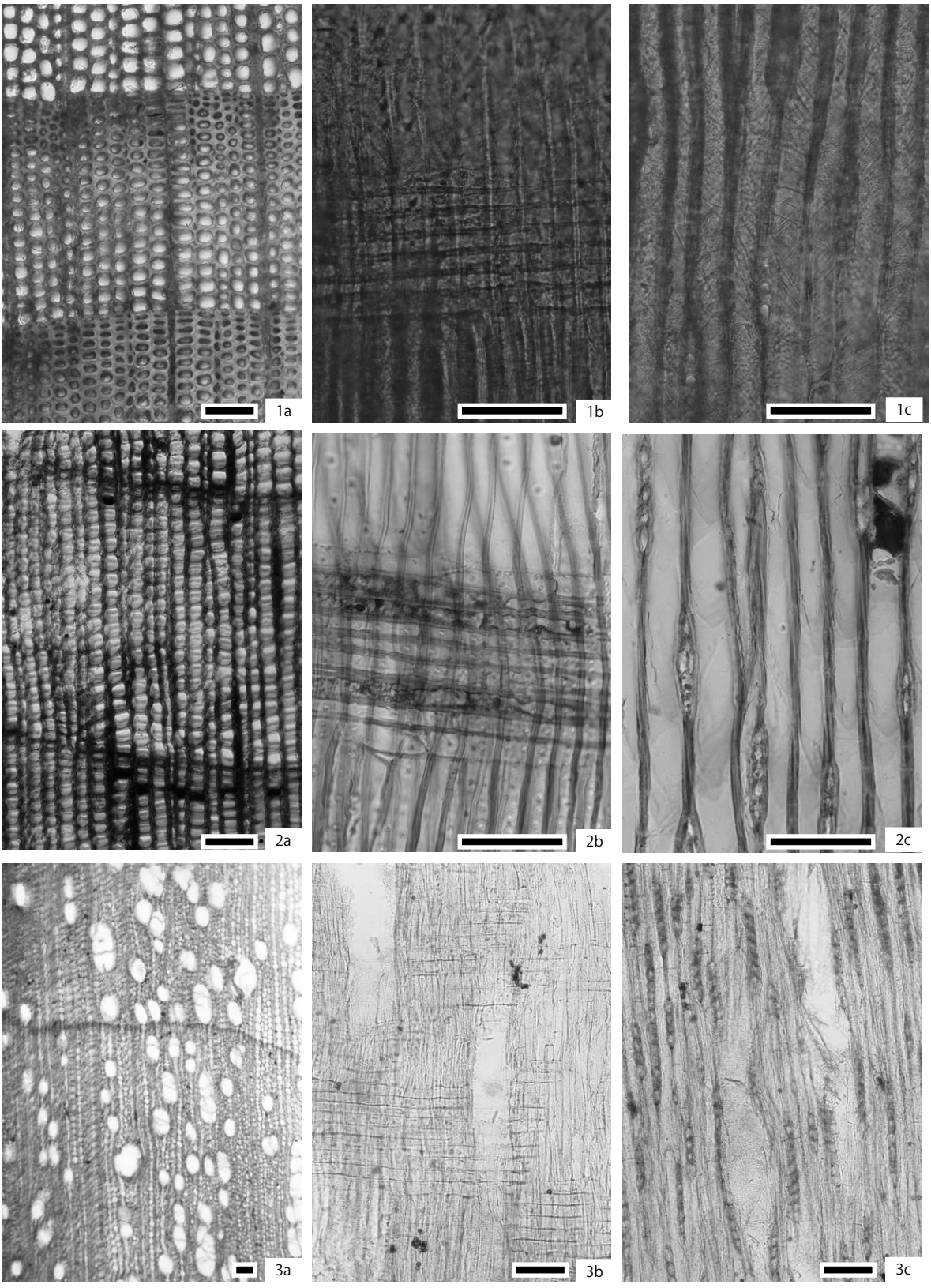
99
17R-70A　カシ

112
5 トレ　松ぼっくり

（1/2）

樹種同定

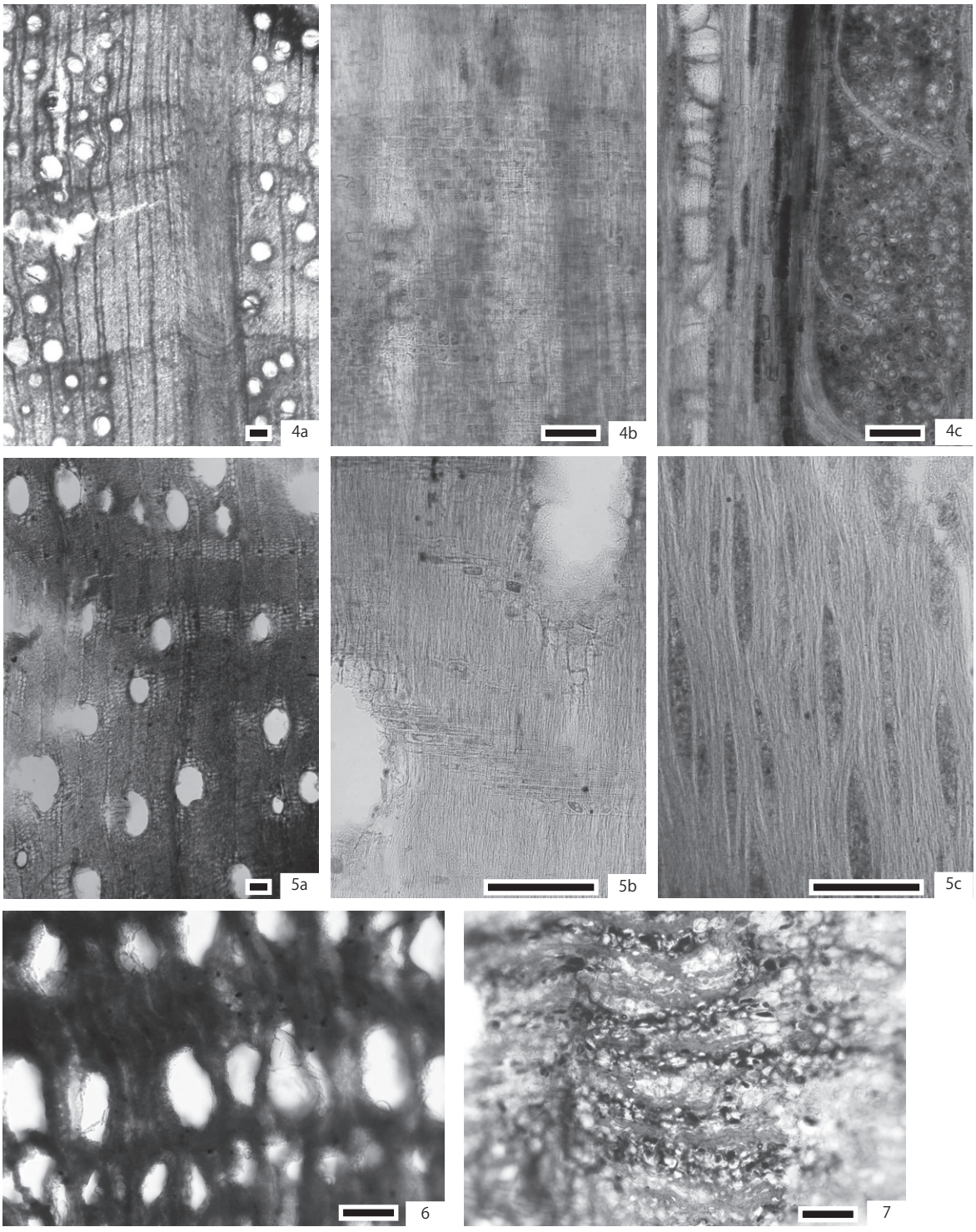
木材(1)



1.カヤ(No.B004-2)
2.ヒノキ(No.7)
3.ハンノキ亜属(No.28)

a:木口　b:柾目 c:板目
スケールは100μm

木材(2)



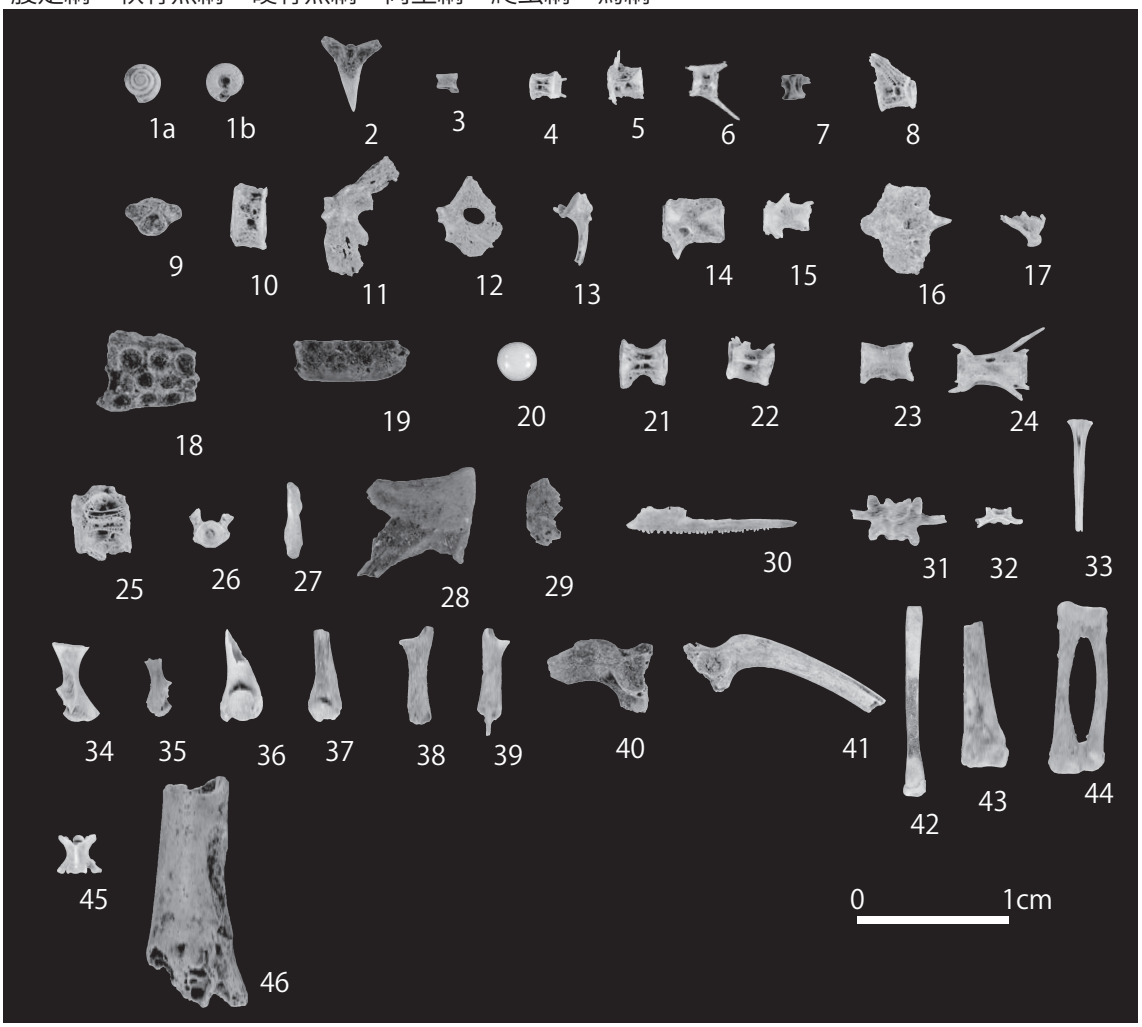
4.アカガシ亜属(No.31)
5.クスノキ(No.26)
6.樹皮(No.8)
7.つる植物?(No.21)

a:木口　b:柾目 c:板目
スケールは100μm

棗塚遺跡

動物遺体

腹足綱・軟骨魚綱・硬骨魚綱・両生綱・爬虫綱・鳥綱

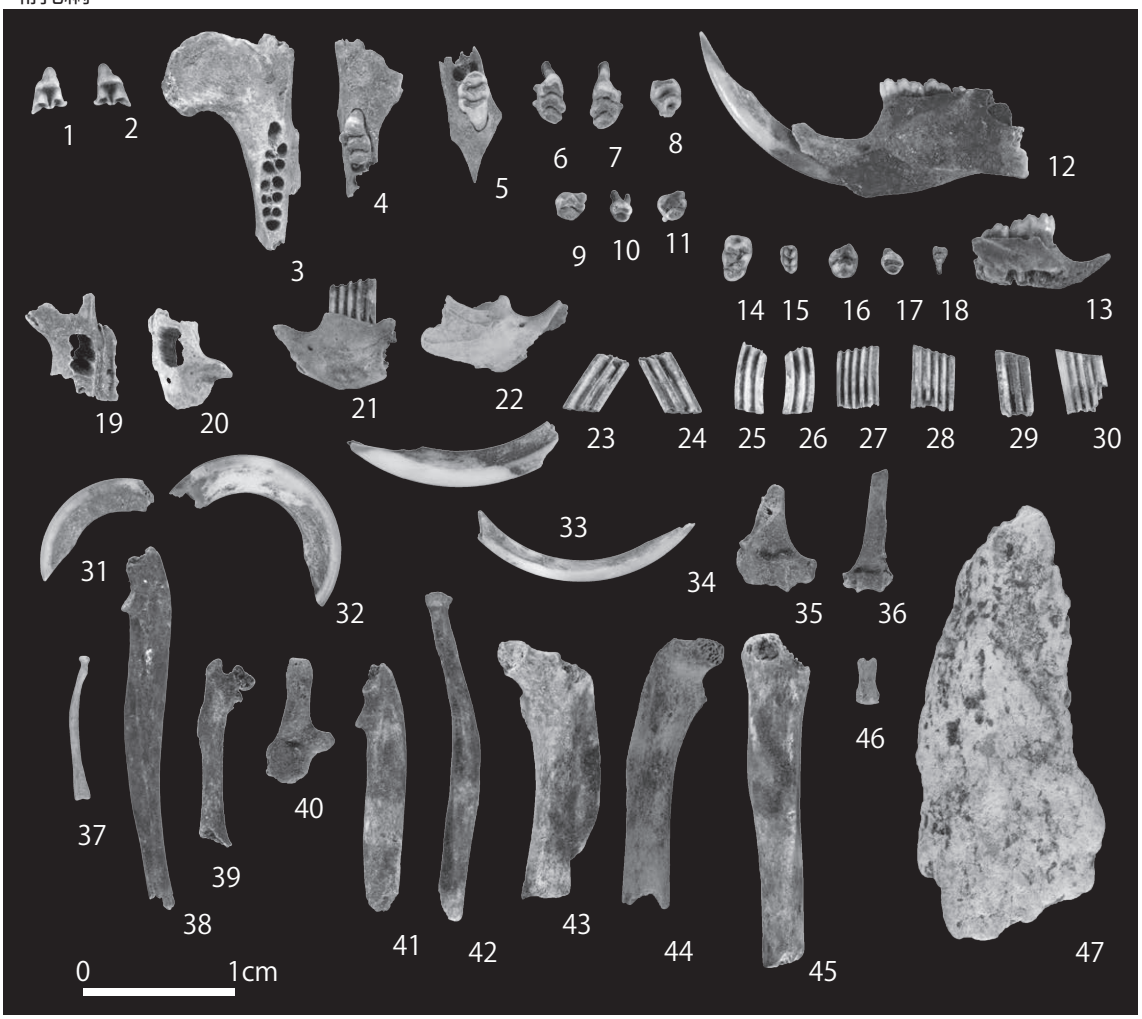


1.コハクガイ科殻(No.64;C6-99a)
2.アオザメ属歯牙(No.78;C6-99a)
3.サメ・エイ類椎骨(No.83;C6-99a)
4.ニシン科腹椎(No.96;D6-59a)
5.ニシン科尾椎(No.78;C6-99a)
6.ニシン科尾椎(No.78;C6-99a)
7.サヨリ属腹椎(No.44;D6-37a-8)
8.フサカサゴ科腹椎(No.74;C6-99a)
9.スズキ属第1椎骨(No.49;D6-37a)
10.スズキ属腹椎(No.73;C6-99a)
11.スズキ属左肩甲骨(No.104;D6-59a-8)
12.スズキ属?右肩甲骨(No.87;D6-59a)
13.アジ科右主上顎骨(No.78;C6-99a)
14.アジ科腹椎(No.73;C6-99a)
15.アジ科尾椎(No.71;C6-99a)
16.アジ科楯鱗(No.73;C6-99a)
17.アジ科?左方骨(No.5;D6-37a-4)
18.クロダイ属左前上顎骨(No.81;C6-99a)
19.タイ科前上顎骨/歯骨(No.81;C6-99a)
20.タイ科歯牙(臼歯)(No.57;C6-99a)
21.タイ科?腹椎(No.104;D6-59a-8)
22.タイ科?尾椎(No.46;D6-37a-6)
23.サバ属腹椎(No.94;D6-59a)
24.サバ属尾椎(No.73;C6-99a)
25.ヒラメ尾椎(No.58;C6-99a)
26.カレイ科第2椎骨(No.74;C6-99a)
27.カレイ科?左上擬鎖骨(No.66;C6-99a)
28.フグ科右歯骨(No.81;C6-99a)
29.硬骨魚綱鱗(No.64;C6-99a)
30.無尾目(カエル類)左前上顎骨(No.17;D6-37a-10)
31.無尾目(カエル類)椎骨(No.6;D6-37a-4)
32.無尾目(カエル類)仙骨(No.31;D6-37a-5)
33.無尾目(カエル類)尾骨(No.5;D6-37a-4)
34.無尾目(カエル類)左肩甲骨(No.96;D6-59a)
35.無尾目(カエル類)右肩甲骨(No.9;D6-37a-3)
36.無尾目(カエル類)左上腕骨(No.102;D6-59a)
37.無尾目(カエル類)右上腕骨(No.39;D6-37a-1)
38.無尾目(カエル類)左橈骨・尺骨(No.65;C6-99a)
39.無尾目(カエル類)右橈骨・尺骨(No.78;C6-99a)
40.無尾目(カエル類)左腸骨(No.10;D6-37a-3)
41.無尾目(カエル類)右腸骨(No.65;C6-99a)
42.無尾目(カエル類)右大腿骨(No.73;C6-99a)
43.無尾目(カエル類)脛骨・腓骨(No.65;C6-99a)
44.無尾目(カエル類)左距骨・踵骨(No.58;C6-99a)
45.ヘビ亜目椎骨(No.71;C6-99a)
46.鳥綱足根中足骨(No.52;D6-37a-2)

棗塚遺跡

動物遺体

哺乳綱



1.モグラ科左上顎第2後臼歯(No.30;D6-37a-14)
2.モグラ科右上顎第2後臼歯(No.51;D6-37a)
3.ネズミ亜科左上顎骨(No.2;D6-37a-12)
4.ネズミ亜科右上顎骨(No.29;D6-37a-14)
5.ネズミ亜科右上顎骨(No.18;D6-37a-10)
6.ネズミ亜科左上顎第1後臼歯(No.26;D6-37a-15)
7.ネズミ亜科右上顎第1後臼歯(No.3;D6-37a-12)
8.ネズミ亜科左上顎第2後臼歯(No.51;D6-37a)
9.ネズミ亜科右上顎第2後臼歯(No.11;D6-37a-3)
10.ネズミ亜科左上顎第3後臼歯(No.30;D6-37a-14)
11.ネズミ亜科右上顎第3後臼歯(No.3;D6-37a-12)
12.ネズミ亜科左下顎骨(No.25;D6-37a-15)
13.ネズミ亜科右下顎骨(No.14;D6-37a-9)
14.ネズミ亜科左下顎第1後臼歯(No.3;D6-37a-12)
15.ネズミ亜科右下顎第1後臼歯(No.9;D6-37a-3)
16.ネズミ亜科左下顎第2後臼歯(No.49;D6-37a)
17.ネズミ亜科左下顎第3後臼歯(No.24;D6-37a-15)
18.ネズミ亜科右下顎第3後臼歯(No.26;D6-37a-15)
19.ハタネズミ亜科左上顎骨(No.50;D6-37a)
20.ハタネズミ亜科右上顎骨(No.44;D6-37a-8)
21.ハタネズミ亜科左下顎骨(No.36;D6-37a-7)
22.ハタネズミ亜科右下顎骨(No.10;D6-37a-3)
23.ハタネズミ亜科左上顎第1後臼歯(No.51;D6-37a)
24.ハタネズミ亜科右上顎第1後臼歯(No.51;D6-37a)
25.ハタネズミ亜科左上顎第2後臼歯(No.44;D6-37a-8)
26.ハタネズミ亜科右上顎第2後臼歯(No.44;D6-37a-8)
27.ハタネズミ亜科左下顎第1後臼歯(No.3;D6-37a-12)
28.ハタネズミ亜科右下顎第1後臼歯(No.44;D6-37a-8)
29.ハタネズミ亜科左下顎第2後臼歯(No.37;D6-37a-7)
30.ハタネズミ亜科左下顎第3後臼歯(No.51;D6-37a)
31.ネズミ科左上顎第1門歯(No.10;D6-37a-3)
32.ネズミ科右上顎第1門歯(No.44;D6-37a-8)
33.ネズミ科左下顎第1門歯(No.26;D6-37a-15)
34.ネズミ科右下顎第1門歯(No.36;D6-37a-7)
35.ネズミ科左上腕骨(No.51;D6-37a)
36.ネズミ科右上腕骨(No.11;D6-37a-3)
37.ネズミ科左橈骨(No.86;D6-59a)
38.ネズミ科右尺骨(No.29;D6-37a-14)
39.ネズミ科右大腿骨(No.14;D6-37a-9)
40.ネズミ科右踵骨(No.18;D6-37a-10)
41.小型哺乳綱右尺骨(No.44;D6-37a-8)
42.小型哺乳綱右橈骨(No.29;D6-37a-14)
43.小型哺乳綱左大腿骨(No.43;D6-37a-8)
44.小型哺乳綱右大腿骨(No.43;D6-37a-8)
45.小型哺乳綱左脛骨(No.18;D6-37a-10)
46.小型哺乳綱尾椎(No.19;D6-37a-10)
47.哺乳綱不明(No.40;D6-37a-8)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちはらしさんしんいせきだいにちてん
書　名	市原市山新遺跡第２地点
副書名	
巻　次	
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第 50 集
編著者名	齊木　誠・櫻井敦史・浅野健太・山形秀樹（株式会社パレオ・ラボ）・森　将志（同）・ 田中義文（パリノ・サーヴェイ株式会社）・金井慎司（同）・上奈穂美
編集機関	市原市教育委員会（市原市埋蔵文化財調査センター）
所在地	〒 290-0011　千葉県市原市能満 1489　TEL 0436（41）9000
発行年月日	2020 年（令和２年）3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
さんしんいせきだいにちてん 山新遺跡第２地点	ちばけんいちはらしあねさき 千葉県市原市姉崎 1722－2 地先ほか	12219	349	35° 28′ 46″	140° 03′ 09″	19991115 ～ 19991227 20000117 ～ 20000324	3,400 ㎡	都市計画道路 八幡椎津線 （姉崎工区） 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山新遺跡第２地点	包蔵地	縄文時代、 弥生時代、 中世、 近世	縄文時代 遺物包含層 1 箇所 弥生時代 竪穴建物跡 4 棟・ 古墳時代 遺物包含層 1 箇所、 中世 掘立柱建物跡 7 棟・ 土坑 2 基・溝 10 条、 道路状遺構 1 条、 近世 溝 2 条、 時期不明 溝 12 条・土坑 50 基	縄文土器（早期・後期・晩期）・ 土製品（土偶など）・ 礫・石製品（石鏃など）、 弥生土器（中期）・ 石製品（石鏃など）、 土師器（古墳時代前期～中期）、 須恵器（奈良時代）、 中世陶磁器・土器・ 土製品（土錘など）・ 石製品（砥石など）・ 鉄滓・古銭、 近世陶磁器・ 金属製品（煙管など）	縄文時代後期から晩期の土器を主体とした遺物包含層を検出した。土器は晩期前葉に属するものが大半であるが、最下層から晩期中葉の土器も出土している。さらに、晩期後葉から末葉の浮線文系土器や撚糸文が施文された深鉢形土器も出土した。また、弥生時代中期後半の宮ノ台式期の竪穴建物跡を検出し、周辺から有孔磨製石鏃が出土した。中世では、区画溝を伴った掘立柱建物跡が検出されるとともに、南伊勢系土器や鉄滓などが出土した。

要　約	山新遺跡第２地点は東京湾沿岸の、養老川と椎津川にはさまれた沖積地内の、砂堆列上に位置する。D 区の砂堆列の切れ目にあたる浅谷部では縄文時代後期から晩期の土器を主体とした、遺物総量約 3t の包含層を検出した。これらの出土遺物は縄文時代晩期中葉頃に洪水等によって遺跡周辺からもたらされたと推測され、海退による砂堆列形成後、縄文時代後期から晩期頃には本遺跡周辺の砂堆列の土地利用が開始されていたものと考えられる。また、A・B 区では弥生時代中期後半の竪穴建物跡を 4 棟確認し、弥生時代には本遺跡周辺の砂堆列上が居住域として利用されていることが明らかになった。さらに、A・B・C 区では中世の掘立柱建物跡や溝・土坑が確認されるとともに貿易陶磁も出土しており、隣接する棗塚遺跡の都市的空間が、本遺跡まで広がっていたことが想定される。

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第50集

市原市山新遺跡第２地点

令和2年 3 月 30 日　発行

編集発行　市原市教育委員会
市原市埋蔵文化財調査センター
千葉県市原市能満1489
TEL 0436（41）9000

印　　刷　株式会社　弘　文　社
千葉県市川市市川南2-7-2
TEL 047（324）5977